AP
95
J2 [illegible]

UNIVERSITY OF CALIFORNIA-LOS ANGELES
L 010 452 688 4

Date Due 95-1665

JUL 10	NOV - 7		
JUL 15	NOV 23		
JUL 18			
JUL 20			
JUL 25			
JUL 31			
AUG 5			
AUG 10			
AUG 15			
AUG 21			
AUG 27			
AUG 31			
SEP 13			
SEP 18			
SEP 25			
OCT - 2			
OCT 10			
OCT 16			
OCT 21			
OCT 28			

9-1665

昭和八年三月一日發行 富士 第六巻 第三號

富士

維新志士銘々傳
日下部伊三次
三上於菟吉

三月號

新刊

疾の研究と自宅療法

痔疾解決への
正しき道しるべ

痔疾は療法を誤れば永久に治らない……
貴下よ！まづ正しき治病の方法を究めよ

集録寸例

☆四六判七十頁痔疾患者の福音

△痔疾とは如何なる病であるか△痔疾の説明△健康と幸福の一致療病顧問△肺病を怖れて何故痔疾を怖れぬ？△痔疾の療法と食物關係△大切な前兆時代『**治病實驗報告**』好きな酒を飲みながら（横濱小○清吉）△流石の難症も快癒せり（朝鮮林田村治）△忘れた樣に治つた嬉しさ（香川野崎龜吉）△裂痔が何んの苦痛なく（藤澤鶴田輝義）△悲みの淵から救はれた（埼玉原田文子）△廣告の詐なき事を知る（大阪清水正壽）△再發もせず快癒せり（鳥取志眞義憲）△三年間苦んだ痔疾を（南滿洲姚德林）△萬策盡きた難症が快癒（大阪竹正次）△六年間惱んだ痔が快癒（東京北川米藏）△根治出來ぬものと斷念（長野木内鼎）その他數篇！

無代贈呈

「**富士**」讀者と明記してハガキにて下記へ御申込あれば無代贈呈される筈です、即刻本書を一讀して全治の鍵を摑め!!

（申込先）東京市日本橋區本町一丁目九番地

玉置合名會社頒布係

冨士三月號目次

（本誌に掲載せるものは一切これを無断にて轉載し、又は單行本に上梓し、或は脚色・上演・映畫・撮影其の他の複製行爲をなす事を禁ず）

△も　も（表　紙）……石崎光瑤筆
△巴の出陣（折込口繪）……尾竹國觀筆
△寫　生（原色版）　△春日遲々（寫眞版）
◇令嬢趣味姿（グラビヤ版）……一
△春のどか（時雨音羽詩）……二　△似顔の名士……一三
△紙上封切映畫……四　△三つ四つの頃……一六　△潮干狩……一八

無垢な若人に忍びよる魔の手
善は滅びず……佐藤紅綠…二七三

家康の策謀に奇々妙々の美女行列
甲州女狩り……藤田保盛…四四四

自分が自分でなかつた謎の怪奇
鏡の中の男……西田鷹止…三四六

手品師に化けた千兩箱の怪人
風流活人劍……野村胡堂…三六八

功利を捨てて純情に生きる快男兒
口笛を吹く男……福田正夫…三三

大江戸を騒がせた怪盗の正體
義賊男裝女裝……前田曙山…三三〇

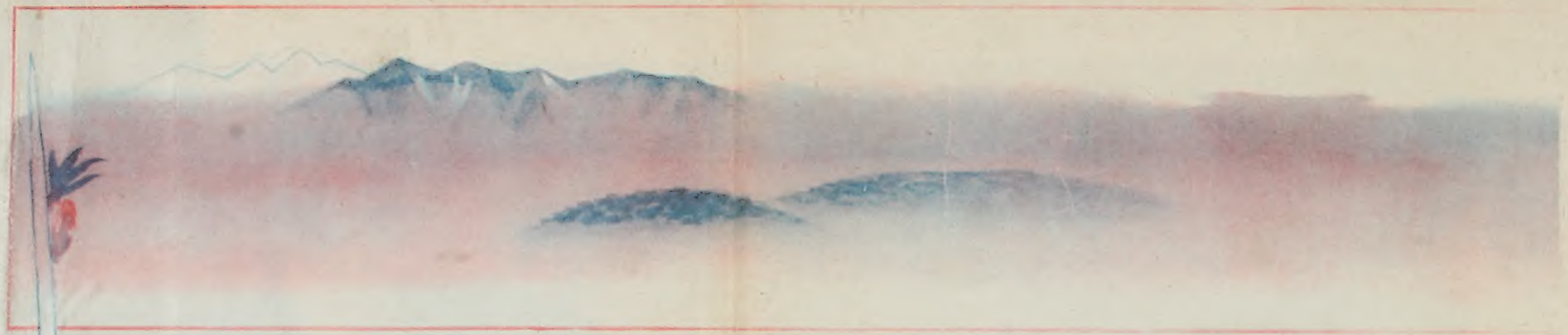
被害者が犯人救ひ出しの血判嘆願書
愛に幸あり……岸井紫浪…三六

彈雨の中に語る敵味方の友情
互に戰へども……山中峯太郎…一一〇

◎ひなまつり（扉）……野口雨情…三五
◎春待つ北滿（民謡）……川路柳虹…一〇八
◎その内心は!!（滑稽詩）……サトウ・ハチロー…四七二

愛誦名詩大繪巻……一九

ガラスの心臓（童話）……宇野浩二…一五六
嘘の電話（ユーモアコント）……吉祥寺猪水…三六四
◎多門將軍強襲奇談（實話）……濱川清…四〇七
◎兒玉大將の茶目振り（逸話）……大澤龍…一九〇
◎生涯の生活費（感話）……竹田敏彦…二二〇
◎佐渡の乃木さん（奇人物語）……江見水蔭…五二
◎忠僕彌右衛門の話（感話）……上司小劍…五〇
◎街頭の圖書館（短話）……水守龜之助…二四〇



すてうり勘兵衛（美男快侠）……村上浪六…一一八

愛の復讐（西洋講談）……天狗太郎…二四四

薔薇色の道（現代小說）……中村武羅夫…一六四

伊達事變（時代小說）……白井喬二…一九二

地に爪跡を殘すもの（長篇小說）……佐々木邦…二九〇

死の密約（探偵小說）……保篠龍緒…四一八

東京哀歌（長篇小說）……加藤武雄…九〇

蒼眸黑眸（現代小說）……菊池寛…三九四

漫畫のページ

△三ブちやんとしろ酒……小寺鳩甫…一八六

△護身用時計…池部鈞…七九　△がま金……水島爾保布…三一一

△學校は出たけれど・川原くにを…一〇七　△敵本主義……淸水對岳坊…四八七

△百年後の銀座街は…廣瀨貫川…二三三　△家庭サービス……細木原靑起…一五五

△幸福なる男？…矢崎茂四…八〇　△老夫婦の對話……淸水對岳坊…四七〇

△百萬圓の命（きんちやく博士）……田河水泡…四四〇

維新志士銘々傳

日下部伊三次……三上於莵吉…五四

〼東京帝大首席卒業名士番附……四三九

〼珍訴訟珍裁判物語……長岡規矩雄…二八八

〼何んと幸運ホク〳〵物語……三九二

〼ぞつと身ぶるひした話…丸山晩霞…一三五

〼藝界噂ばなし……三一八

〼八兵衛の種子蒔……千葉耕堂…四七四

◎笑話……四七六　◎時事漫談名士の洒落……五三　◎珍數字……二八七

◎娛樂室……四七八　◎動物珍話（火山樓）……二三〇　◎豆知識……三一〇

◎珍聞話の種……三一七　◎グロテスクの顏が幸福……四七四　◎讀者倶樂部……四八八

◎處世標語……三九一　◎講談社ニュース……二四二　◎先哲酒訓……三一七

特輯 此の人でなければ聞かれぬ話

◇心易かつた唐人お吉……船田みよ…八三

◇父近藤勇の最期を見る……近藤勇五郎…三一三

◇不如歸から臨終まで……千明きん…二六四

◇次郎長の腹を見る……小笠原長生…四八〇

◇漱石のモデル猫の話……夏目鏡子…四一〇

◎小說「晴曇」休載申譯……四八六

◎巴の出陣（折込口繪解說）……美の國主幹 石川宰三郎

◎特別大懸賞當選者發表……四六九

Digitized by the Internet Archive
in 2014

https://archive.org/details/fuji63unse

巴出陣（名物語 傑作畫譜）（裏面の解說參照）

尾竹國觀筆

巴出陣

『美之國』主幹　石川宰三郎

『關東の勢、來る』

すはとばかり、勢立つた旭將軍木曾義仲は、元暦元年正月二十日、この關東勢を宇治、勢多に迎へました。――

義仲、以仁王の令旨を奉じて兵をあげ、傲に長じたる平家一門を追ひはらひ、洛にのりこんだのはよいが、義仲も同じやうに、日に日に我儘が募つて、後白河法皇に迫り、大クーデターを行ひ、關東の頼朝追討の院宣を請ひ奉ると云ふに至つては、關東方としても、そのまゝにして置くことは出來ません。幸ひなるかな、此時しも、範頼、義經の軍勢が洛に近づいた爲、こゝに源氏の同志討が始まつたのであります。ところが、木曾殿の勢、もろくも關東方に敗られて、今となつては、洛の中にも居るに居られず、義仲は十三騎をひきゐ、三條河原を東へ、北陸路へ落ちて行きました。忽ち起る、人馬のひゞき。

『やアノヽ、それに落ちさせ給ふは、御大將と見奉るは僻目か、吾は武藏の國の住人秩父の流れ、畠山庄司次郎重忠なり、返させたまへ、返させたまへ』

と、呼はる聲に、豪骨の義仲、

『重忠なれば、究竟の敵手なり』

河を隔てゝの對陣、追ひつ追はれつ、半時あまりの合戰最中、木曾方から、つと現れ出た一騎、射殘した鷹の羽の征矢を負ひ、重籐の弓の眞ン中とり、太く逞しき連錢蘆毛の馬に跨り、亂軍の間を驅けめぐる勇ましさ。畠山勢も、さつと一時は潮のやうに引き下りました。

・敵乍らも天晴な武者振ぞ、あれは誰だ。

畠山が不審に思つて、半澤六郎成清に訊ねました。

『女人にございます』

『なんと？女ぢや、こりや珍しい』

『木曾殿が御乳母中三權頭の娘巴と申すもの、木曾殿の愛姫にございます』

『ふうむ、名は聞き居つたが、目前に見るは、今が始めてぢや、餘程の剛の者と見ゆる』

『強弓を引き、荒馬にのり、女乍らも剛の者とござります』

『なれども、成清、畠山の勢が、女づれに攻め立てられたとあつては、末代迄の恥である、いでや、此の重忠が引組んで、擒にしてくれん、つゞけ、もの共』

馬にかく入れて、さつとのり出した。強力無双と云はるゝ重忠は、巴御前を引捕へようと、まつしぐらに迫りよる。かくと見た義仲、巴を組ませまいとして、駈け隔て駈け隔て、二廻り三廻り、馬轡をあげて、挑み合うたが、全軍はあれよ〳〵と片唾をのんで控へて居るばかり、手が出ませぬ。と、馬の足搔を早めたる重忠、とつかは馳せよつて、

『えゝいッ』

巴御前の弓手の鎧の袖に取りつきました。

組んでは、敵はじと思うたか、矢庭に巴は馬を煽つた。巴が乗つたる此の馬は「春風」と名乗り、信濃第一の強馬であつた爲、煽られて二段ばかり、延び立つた瞬間、鎧の袖はふッつと切れました。

「や！ や！」

もう奔馬は、さつと身をかへして居たので、つひに巴と組むことが出來なかつた。だが、重忠は名を惜しむ關東武士。

『たとへ、鬼神であらうとも、相手は女人、矢一筋といへども、射籠められては畠山の恥になる』

と、軍をまとめて、河原の西の方に退き、院の御所をかためました。

義仲は、圍みをついて、大津に落ち、四條河原、祠無の社、關清水、關明神を打ちすぎて、關寺の前を栗津にすゝむ。此の時從ふものは、わづかに七騎となりました。

先頭は、巴御前でありました。生年二十八歳の女盛、紫隔子を織付けた直垂に、萌黄絲威の腹巻に袖つけて、五枚甲の緒をしめ、三尺五寸の太刀に、二十四指いたる眞羽の矢の射殘したるを負ひ、重籐の弓にせき弦かけ、かの逞馬に金覆輪の鞍おいたる、その扮装の綺に見ゆるが如き花やかさ、折しも、巴が冑を脱ぐと、比叡颪に丈長の黒髪がさつと打ちなびき、額に天冠をあて、白打出の笠を被り、雄々しく猛々しき中にも、えも云はれぬ艶やかさがありました。

史の傳ふる處では、こゝから、巴は義仲と別れて信濃路に向つた事になつて居ります。

此の圖は、尾竹國觀氏が、巴御前の此丈なす黒髪の匂ひに、感興を覺えつゝ、大の男も及ばぬ女丈夫巴御前の出陣のさまを描いたものであります。

千萬人の關東武者が寄せ來るとも、びくともせぬ巴御前が、綠の黒髪に限りなき愛着を有つて居る女らしさをねらつたのは、國觀畫伯の着眼の鋭いところ、

御覽なさい。三尺五寸の太刀の傍に、櫛笄の髪飾などの取り合せたのも、殺伐の中に、何とも云ひやうのない優しさが漂うて居ります。よく見て居ると、畫面から蘭麝の香の匂ひもするやうに感じられます。

作者尾竹國觀氏、本名は龜吉、明治十三年新潟市片原町に生れました。高橋太華、故小堀鞆音翁に師事し、十五歳の時、富山博覽會で褒状を得たのを始めとし、爾來年毎に日本美術協會や、東京、大阪、名古屋その他各地の共進會、博覽會、前期の日本美術院等に入選、又は受賞し、文展には第一回「油斷」で二等賞を獲たのを始め、第五回「人眞似」三等賞、第六回「勝鬨」褒状、第九回「血路」三等賞等の高賞を受け、名聲愈々高まりました。帝展にも幾度か出品し、昭和九年第十一回展には、この「巴出陣」で更に名を擧げ、翌年推薦され無鑑査の特典を受け、今日に及んで居ります。わが歴史畫壇の一權威、また斯界の一大功勞者であります。兄君に故越堂氏あり、又竹坡氏あり、尾竹三兄弟として普く世に知られて居ります。

りん病

別府溫泉で名を賣つた家傳秘藥

商標 登録

岩里 別府淋藥

キキメて名を賣った
別府の淋藥
禮狀積んで山を成す

りん病消渇の治療には實際に服用して多くの人から偉効を認められた有名な藥を選ぶのが安全で又確かです。超スピード治淋藥として近頃壓倒的好評を博せる岩里別府淋藥は胃腸内で化學的に作用を起して強烈な殺菌素となり、尿道や膀胱に潜む淋菌を撃滅して體外に排泄し、着々治療効果を奏します。既に本藥で救はれた病者は全國に多數あり、内地海外から澤山全快禮狀が來てゐます。多年の淋病消渇に惱む病者は是非本藥をお服み下さい。本藥は自宅で秘密安全に治療の出來る最上良藥です

知名新聞 東京朝日、東京日日、大阪朝日、大阪毎日

雜誌推奬 富士、講談倶樂部、實業之日本、主婦之友 及全國知名新聞廣告御參照を乞ふ

〜此雜誌名記入申込者に限り淋病治療書無代進呈〜

藥價 急性用 黒箱 一週分 三圓
一 慢性頑固性用 赤箱 一週分 五圓

送料 前金無料代金引換 廿八錢 海外 十五錢

特約店募集（先約各町村一ヶ所限り、藥店に限らず）

家傳秘藥にて支店及び特約店以外には販賣せず

製造販賣元 別府市鶴水園 合名會社 岩里天然堂（振替下關八九四〇）

別府皮膚藥 別府溫泉で出來た一回試用有効的確 藥價 三十錢・五十錢・一圓 注文切手代用にても可

地方配給所

東京市麻布郵便局前	岩里天然堂
大阪市上六大軌東一丁	岩里天然堂
名古屋市外布袋町	岩里天然堂
淸水市辻町江尻驛前	岩里天然堂
岐阜市長住町一丁目	岩里天然堂
神戸市鶴池通一丁目	岩里天然堂
奈良市三條町	岩里天然堂
廣島市段原町的場通	岩里天然堂
下關市竹崎町一丁目	岩里天然堂
福岡市博多上洲崎町一	岩里天然堂
福岡市博多千代町交叉點東	
長崎市船津町六七	岩里天然堂
鹿兒島市西本願寺横	岩里天然堂
宮崎市瀬頭町ガード際	岩里天然堂
高松市磯橋通	岩里天然堂
高知市金子橋	岩里天然堂
京城府西大門二丁目	岩里天然堂

大特約店

東京市本鄕區駒込	大日本雄辯會講談社代理部
同上野驛前福仙旅館横	福助堂
同東京驛前海上ビル	共生堂藥局
同麹町區有樂町三一	日比谷藥局
同神田區花房町一	山崎帝國堂
同澁谷停車場前	鈴井藥局
同本所區錦糸堀終點	梅原藥局
同日本橋區水天宮前	キク、藥局
同神田區表神保町十、	神田藥局
市內王子町郵便局前	小林藥局
同 龜戸町天神通	美天房藥房
同 高圓寺驛南通	アサヒ藥局
同 武藏小山驛前	西川藥局
同大森町京濱電車學校裏	ツル藥局
川崎市東田公設市場前	ポチ堂
横濱市伊勢佐木町	加藤回陽堂
横須賀市中里町五	石渡藥局
同 南旭町二三	內藤藥局
札幌市狸小路	三河屋菓子店
小樽市奥澤町五丁目	菊池商店
旭川市三條通六丁目	太田牛兵衛
十勝國帯廣町本局前	林 商店
函館市松風町	齋藤延壽堂
室蘭市港町	山本平治
石狩國瀧川町五丁目	照本藥舗
青森市長島町	三勝堂藥房
弘前市中土手町	ミヅキ商店
山形市七日町	渡邊藥舗
秋田市牛島町	北島吳服店
秋田縣扇田町	城金之助藥房
盛岡市仁王内丸大通	菊屋藥房
仙臺市南町	豐田商會
宮城縣古川町	ウメツ商店
福島市荒町	キモト藥店
水戸市上市元山町	フジヤ商店
宇都宮市大工町大通り	福田天狗堂
埼玉縣熊谷町	齋藤藥局
群馬縣草津温泉場	茶屋百貨店
桐生市新宿通り一	高島藥局
栃木縣相生町西側	福田天狗堂
静岡市七間町三丁目	市川商店
静岡縣燒津町	齋久藥店
岡崎市欠町	大原藥局
新潟縣三條町三ノ町	稲葉別府堂
新潟市本町通り	中郡藥局
長岡市本町二丁目	吉村藥局
富山市古鍛冶町	小楠日扇堂
同覺中町	野口商店
甲府市櫻町四六	齋藤藥局
長野縣松本市六九町	木下喜久一
上田市連歌町	齋藤天壽堂
金澤市尾川上	菊陽館
福井縣武生町	澤田一二三房
福井市神宮寺	山田、藥店
名古屋上前津電停南	小島屋藥局
同中區榮町四丁目	內藤藥局
同 廣小路縣廳前	水谷大生堂
豐橋市西宿	白井木工場
大垣市馬場町	ホシ藥店
津市北町	瀧本藥局
四日市市西町	金澤商店
京都市東九條東寺道	第一藥局
京都府福知山職人町	福知藥局
大阪市浪速區霞町二	性保堂藥房
同梅田阪神前	トミヤ煙草店
兵庫縣洲本町四	いぬこや支店
同縣城崎温泉	伊藤勧商場
岡山市城下電停	石原書店
廣島市小網町電車道	戸川藥品部
吳市中通五丁目	鎌田幸壽堂
下關驛前山陽道	ヒラタ藥局
米子市茶町	勝見藥店
德島市富田橋筋	横山光榮堂
香川縣善通寺町	桑島藥店
丸龜市風袋町	須藤商店
福岡縣飯塚市東町	丸林大藥房
同行橋町	ミヅヤ藥舗
大牟田市三川局前	ロングサン藥店
若松市辨財天通	井上藥房
八幡市槻田五條橋	若松屋
小倉市魚町四丁目	岩中藥店
門司市櫻町通二丁目	松永藥房
大分縣杵築町	河野商店
熊本市寺町停留場前	熊本藥局
佐賀市東魚町角	田中昭明堂
佐世保市本島町	山崎西生堂
鹿兒島縣大島郡東方村	福藥店
臺灣屏東街市場後	屏東第一藥房
臺北市西門町	[illegible]商行
臺南市錦町一丁目	福島保正堂
釜山驛前	古原藥舗
元山府本町二丁目	岩井商店
大連市監部通三三	天然堂藥房
旅順東三條通	ハレルヤ藥房

流行新型 春向き

婦人倶樂部三月號

大册の附錄を全讀者に贈呈

（四六倍判二百頁のトテモ美しい豪華附錄、美麗大畫報つき）

この附錄一册でも三四圓の値打はある。日本に初めて出來た春向き編物と模樣編の大全集、編物をなさる方は、ゼヒ一册備へたい便利重寶な大附錄！

右の寫眞の樣に、特に今迄とは全然變つた新しくて魅力滿點のスタイルばかりを集めました。赤ちゃんものから、子供もの、大人ものまで、セーター、コート、ドレス、帽子等、何も彼も全部思ひのまゝにでき

毛絲編物

ますから、とても便利です。御婦人方は、何は措いてもこれ丈はお備へなさいませ。

模様編百種の編み方を親切に發表！

元々模様編は六かしいとされてゐますが、この附錄を御覧になれば、全部實物大の寫眞で、誰方にも一目で判る樣に詳しく説明してございますから、思ひのまゝに編む事ができます。萬戸必備の寶典と大評判!!

更に左の二大附錄を贈呈!!

男子用新型通學服型紙
女子用新型通學服型紙

見るからに可愛らしい新型通學服の型紙です。これでお裁ちになれば、ほんの布地代丈けであがりますので、どちらの御家庭でも大變に喜ばれて居ります。毛絲編物と併せてぜヒお備へ下さいませ。（新聞紙四頁大判の大附錄）

額面用泰西名畫傑作集

新年號の色紙附錄以來、ぜヒ第二輯を出して呉れといふ、讀者の熱烈な希望がありますので、婦人倶樂部は特に多大の犠牲を拂つて、全讀者に贈呈する事に致しました。新年號でお求めになれなかつた方は必ずお求め下さい！

婦人倶樂部三月號本誌には――

有益記事、裁縫、趣味、衛生、料理、美容、傑作小説等々特別記事多數あり。

三大附錄がついても五十錢（送料 本誌四錢 附錄六錢）　大日本雄辯會講談社（振替東京三九三〇）

就職難 生活難 成功難

解決の五大名著

現代はどんな人物を求めてゐるか？どうすれば就職出來るか？どうすれば成功出來るか？こゝに燈臺あり、こゝに羅針盤あり、益々深刻を加ふる不況の今、來るべき就職期を前にして五著共にいよく大評判です!!

大日本雄辯會講談社長
報知新聞社長
野間清治著

本當の裸一貫から刻苦、雜誌王としての今日を來す迄の血と汗と涙の眞に又と得難き體驗錄。成功、繁榮の道、處世、修養の法を秘さず僞らず誰にでも納得出來るやうに訓へた本五著こそ、眞に現代に生きるものの總てが一日も手離せぬ活指針である。

大盛況又々大增刷!!

榮えゆく道

定價五十錢（送料八錢）

體驗を語る

修養雜話

出世の礎

處世の道

定價各冊二十錢（送料四錢）

大日本雄辯會講談社發行
（振替東京三九三〇）

全國書店にあります

御申越次第圖書目錄進呈

寫生

『動いちやいけないよ、メリー』

『えゝ、動かないわよ、その代りあたいのお鼻ペチヤンコにかいちやいやよ』

和やかな春の陽光を受けて、睦まじく微笑む親子。午下り、納屋の邊の樂しい情景である。

春日遲々　　懸賞當選（東京）森溪水

内閣總理大臣 齋藤實閣下
陸軍大臣 荒木貞夫閣下
中央教化團體聯合會理事 丸山鶴吉先生
金雞學院學監 安岡正篤先生
序

日本の決意

細井肇先生著

世界四分！九千萬日本民族興隆の道茲にあり!!

著者は日本一の亞細亞通、その經綸と、その時弊を慨する至誠とは夙に齋藤首相、荒木陸相と共鳴するところあり、皇國を思ひ、同胞を思ひ、亞細亞民族を思ふ心情の迸る所、言々句々悉く熱誠痛烈！萬人の胸を撃ち心を衝く憂國の名文、日本人たる者何人も感激せずにはをられぬ大快著。

祖國を護れ！亞細亞を護れ!!大亞細亞聯盟を結成せよ

白人の泥靴に踏み躙られて慘苦に堪へかねた世界三分の二の大衆を有する十二億の亞細亞民族は、今救ひの非常信號を連打してゐる。著者は深く時弊を憂へて、爛熟日本の現狀に筆を起し、國民各自の決意を促して自力更生の緊切を說き、或は滿蒙、支那、朝鮮の實狀を解說してその進路を示し、或は白人東方侵略の暴戾を激憤して、亞細亞民族團結の大精神を高唱し、大亞細亞を建設せよと絕叫する。

眞に熱血熱淚を以て書かれたる救國の大名著！國難打開の大鐵案!!

國を憂ふる者は讀め！血あり淚ある日本人悉く必讀の大文章!!

◇全國書店販賣 ◇定價五十錢 送料八錢 東京本郷 大日本雄辯會講談社 振替東京三九一〇

『現代三月號』特

見よ！大躍進内容愈〻充實!!

凡ゆる方面に新しき知識と正しき理解を求め、明日に備へんと欲する者は見よ！

銀行會社官廳商店 採用方針と其の就職法

男子見よ！婦人見よ！職を望む者一人殘らず見よ!!

俄然、景氣は好轉を示して工場を擴張する會社續出、産業界は一齊に躍り出した。こゝに於て多年閉されてゐた新社員採用の門戸も、漸く各方面に開かれんとしてゐる。この時、編輯局を總動員して、各一流の銀行、會社、商店、官廳等に最新の狀況を調査蒐集した本篇は、正に就職志望者にとつて無二の案内書たるのみならず、現代人に就職問題の實相を傳へんとする近來の大特輯である。就職の秘訣も昇進の早道も、悉くこの一篇の中にあり。

▲第六十四議會の展望…

日支事變の勃發を絶好の機會として、太平洋沿岸に對して列國は如何に爪牙を伸しつゝあるか？露國は如何？米國は英國は、佛國は？その赤裸々なる魂膽を描いて日本國民の奮起を促した痛快無比の大卓見！見よ！米田實博士大熱筆！

▲壽府會議に大論戰を観る…

比喩の巧、引例の妙、英代表をして『熱誠の詩だ！』佛代表をして『禮儀正しい凄文句だ！』と感嘆せしめた松岡代表の大雄辯の前に、世界人は完全に頭を下げた。この劇的大場面を雪の壽府湖畔に熱涙と共に筆執つた竹内記者懇徹の大文字

選大名篇

▲太平洋をめぐる列國の魂膽…

內外時局の重壓の下に開かれる、今次議會の重大問題を徹底的に興味深く讀すと共に、各政黨虛々實々の議會戰術や、朝野一騎打の大場面等々を描き、第六十四議會の眞相を一目の下に歷然たらしめた近來の大讀物、萬人の必讀を薦む。

▲インフレ景氣大儲物語…

二十圓の株が、一躍百何十圓に騰つた……インフレ景氣。この大景氣の波に乘つて、日本中で一番儲けたのは誰か？どんな人々がどれだけ儲けたか？その儲け振りこそ今の世の人への絕好の活指針である。男子は勿論女子もぜと見よ！

▲社會各界探訪記…

世相を反映し、社會を代表するともいふべき株式取引所、職業紹介所、結婚媒介所、ダンスホール、刑務所等々を親しく訪ねて、如實にその實相を見聞活寫した、實益あり、悲話あり、ナンセンスあり、正に興味滿點、近來の大讀物！

▲鶴見祐輔氏歸朝縱横談…

長の旅して非常時日本に歸り、その激變振りに轉た感慨無量の氏が、感激的に語る歐米に於ける巨人との會見、機械文明の實狀、日支事變に對する彼等の批判等々、興趣湧いて盡くるを知らず、而も大和民族の大覺悟を促す近來の大文字。

右の他 政治あり經濟あり、立志美談あり成功傳あり、漫畫あり漫文あり素晴しく面白い小說あり、何れも粒選りの大名篇大傑作揃ひ！ 二月十二日發賣 是非御覽下さい！

定價五十錢（送料三錢）東京本郷 大日本雄辯會講談社（振替東京三九三〇）

又々素晴しい二月新譜

キングレコード

レコード番號	種別	曲名	作詞・作曲	吹込者
K203	童謡	鼠の餅曳き	須永潟一郎詩 山田伶光曲	永岡志津子 キング管絃樂團
		ゲンコツ和尚さん	サトウハチロー詩 田村しげる曲	
K206	新小唄	逆鉾節（霧島小唄）	西山喜久雄詩 大村能章曲	新橋喜代三 キング和洋合奏團
		新調博多	西岡水朗詩 大村能章曲	赤坂小梅 キング和洋合奏團
K209	新民謡	波に日ぐれて	市村鐘一詩	大河内靖彦 キング管絃樂團
		島の潮風	山口俊三郎曲	新橋小多美 キング和洋合奏團
K210	流行歌	故郷の夢	西岡水朗詩 江口夜詩曲	松平不二男 キング・ストリング・クラブ
		胸に咲く花	鹿山映二郎詩 江口夜詩曲	丸山和歌子 キング・ストリング・クラブ
K211	青年歌	日本青年の歌	時雨音羽詩 堀内敬三曲	オリオン・コール キング管絃樂團
		若いおいらは	時雨音羽詩 小松平五郎曲	立石喬子 キング管絃樂團
K212	謡曲	高砂（婚禮小謡集）		寶生新 寶生流謡方宗家

永岡志津子さん　松平不二男氏　喜代三さん　大河内靖彦氏　小多美さん

巨彈又巨彈、斷然レコード界をリードせるキングレコードは眞に一粒選りの名盤揃ひです。先に**別れの花束**で全國に壓倒的人氣を博し、今では流行歌はキングレコードからとまで大評判となつて居ります。

正月新譜で**椿咲く島**の非常な賣行きに乘じて又二月新譜の傑作盤を上に御紹介いたします。最寄りの蓄音器店で是非御試聽下さい、キットお氣に召します。

―一枚 一圓五十錢―

大日本雄辯會講談社編修發行

令孃趣味姿

齋藤連子さん（乘馬）

颯爽として白馬に跨る令孃の趣味姿、見るからに明るく朗かだ。連子さんは、朝鮮土地改良株式會社專務取締役、齋藤力さんの長女で、成城學園の三年に在學中、で同校乘馬部の花形。お父さんが大の乘馬好きなので、連子さんも何時の間にか好きになつてしまつた。お父さんと共に東京乘馬俱樂部の會員で、澤山の人に交つて、乘馬の稽古をなすつてゐても、あ、あれが齋藤のお孃さんかと、鞭を振る可憐な姿が、すぐ人の目を引く。お年は未だ十七。

岡田久子さん（仕舞）

一世の文豪ピリニヤークが先年來朝の砌り、東洋藝術の極致であると迄激賞した能と仕舞。その仕舞が近年うら若い女性の間に隱然たる勢ひを以て流行してゐるのは、ダンス、ゴルフ等の流行に對して面白いコントラストではある。實踐女子專門學校を優等で卒業した岡田久子さんは、在學時代から、この古典的藝道の粹にいそしみ、今では喜多流宗家の若先生實氏の祕藏弟子として、押しも押されもせぬ手並を示してゐられる。寫眞に揭げた『松風』のポーズの如きは、能樂批評の權威者坂本雪鳥氏の嘆賞をかち得た程である。芳紀正に二十三歲。本邦鐵道界の功勞者岡田享氏が眼に入れても痛くない一粒種である。

長谷部志奈子さん（日本舞踊）

志奈子さんは、實業家長谷部彦三郎氏の長女で、東京女學館の三年生。お年は若い十六だが、好きこそ物の上手なれ――。踊りにかけては、非常にいゝ素質を持つてゐる。藤蔭靜枝さんの愛弟子。小さい時學んだ三味線から藝術心を刺戟されて、靜的藝術より動的藝術へと移つた。だがどちらかと言へば、志奈子さんの好みは、今流行の新舞踊よりも、むしろ古典的のものである。寫眞は「藤娘」最初の出であるが、日本女性らしい優美さだ。

井上利喜枝さん（日本畫）

『こんなに貯つてゐますの……。』言ひ乍ら、机の中から取り出したのは、少女雜誌の美しい切拔き挿繪。小さい時から、繪に憧憬を持つて、しこたま集めたらしい。利喜枝さん（二十歲）は小學校時代から繪が大好きだつた。で東洋高女を卒業すると、とう〳〵御兩親のお許を得て、昭和七年春伊東深水氏の門下生となつた。この頃の熱心さは驚く許り、一日として繪筆をとらない日はないさうだ。それ位だから腕はめき〳〵と進んで來る。

『未だ何も書けないんですの、本當にお恥かしいんです……。』ひどい謙遜だが部屋に擴げられた幾つかの作品には、何れにも天分の冴がほの見えてゐた。

飯野宣子さん（手藝）

宣子さんは飯野吉三郎氏の愛孃で明朗な近代的麗人である。常磐松高女卒業後、大妻女學校專門部に學ばれ、今は高級婦人帽の名手、ベルモード店主筒井光康氏の高弟である。もと／＼婦德を積むため、趣味本位に始められた針と絲との嗜みであつたのであるが、その並ならぬ指先の冴は、製作品の上にも一層の輝を示し、師匠の懇望もだしがたく、丹誠こめて仕上げられた作品は高貴なお方の御調度品として愛でられてゐると仄聞する。年齒未だ二十一。

鹿村喜久惠さん（小鼓）

喜久惠さんは富士紡專務鹿村美久氏の愛孃で、一昨年九段の精華女學校を御卒業、滿十九歳にはまだ暫く間があるが、仕舞は七歳の時から觀世織雄氏に就き、今では其の道の許しを全部取つた程で、お能舞臺には二十回もお立ちになつたとか。母君が、池坊の達人でゐられるため、お花は母君に、三味線は杵屋彥十郎氏に師事してゐる。

小鼓にかけては斯界の第一人者幸悟朗先生の秘藏弟子で、押しも押されもせぬ腕利きだ。喜久惠さんの毎日は、斯うした樂しい趣味生活の連鎖です。

平尾貴美子さん（茶の湯）

化粧品王平尾賛平氏の令嬢だけあつて、貴美子さんは均整美、明眸美、容姿美、どの點からいつても非の打ちどころが無い。二十一歳の娘ざかり。九段精華女學校卒業後、東京女子高等學園に學び、この三月に卒業する。長唄、琴曲、ピアノ、ダンス何でも御座れの才媛であるが、日本の娘は日本らしくとの蝶子母堂のお仕込で裏千家正統の老手乘竹ろく師の許に日夜かよはれ、茶の湯の道にいそしんでゐる。寫眞は、湯釜たぎるさびた茶室で、まさにナツメを拭はんとしてゐられるところ、幽に淑かな藝道の極致が想見されるではないか。

須藤菊葉さん（スケート）

寒い風も何のその、心地よいリズムに乘つて銀盤に踊る女性こそ、心は常に春のやうだ。キリリとしまつた肢體からは、朗かな健康のさゝやきが洩れる。寫眞の菊葉さんは、三越編輯部主任須藤莊一氏の第五女で十九歳、府立第六高女の五年生である。運動と來たら何より好き、スケートのお上手な事は言ふ迄もないが、陸上競技（特にジヤンプ）スキー、乘馬は何れもお手のもの。『子供が澤山ゐるので、私は全く放任主義です……。』お父さんは、下俯向いてゐる菊葉さんを見かへり乍ら、吾子いとしさの微笑みを浮べた。理解ある兩親の下に、菊葉さんの天分は、すく／＼伸びて行くだらう。

矢野文子さん（西洋舞踊）

―高田せい子氏門下の逸足で、三度の食事よりも踊りが大好き、兩親の御小言位はいと朗かに受流すが、先生の御注意は身にしみるらしく、塵が出ようが、埃にならうが、そんなことには一向にお構ひ無し、夜が夜中でも、出來ないとなつたら、ぢやん〳〵レコードをかけて踊り出すと言ふ熱心さ。父君矢野爲吉氏は、辯護士界稀に見る穩健な君子人として評判があるだけに、その令孃が、かゝる情熱的藝術愛好者であることは、まことに面白い對照ではないか。『兄一人妹一人ですから、子供には好きな事をさせ度いと思ひまして……。でも未だ十八のねんねですから……。』お母さんは慈愛の微笑みを浮べて語られた。

栗村德子さん（鎖鎌）

いゝ、くさりがま——何かしら夢に見るお伽話のやうに、なつかしいロマンチックな響きを持つてゐる。亡びゆく武士道——飽くまでもそれを守らうとする人に舊合津藩士、現品川登記所、司法代書事務所の栗村熊八氏（六十八歳）がゐる。今年二十一の令孃德子さんはお父さんのお氣持を受けついでか、精神の修養にもと鎖鎌をよく使ふ。趣味の女性として有名な德子さんは、水泳は極て達者、府立第六高女を卒業して、今は母校水泳部のコーチヤアをしてゐる。スキーもやればスケートもやり、ダンスが又お上手。日本舞踊は花柳德太郎氏の祕藏弟子と聞いてゐる。德子さんは新舊、往くとして可ならざるは無い才媛である。

永井柳太郎先生大熱著

大隈重信

大隈老侯に對して小大隈と云はれるのが永井柳太郎閣下である。閣下は老侯世に在りし時その關係、所謂親分子分、或は師弟以上のものがあつた。この巨人傳こそはこの人にして始めて描き得る無二の名著である。

見よ！天下を壓する大評判!!

大盛況！賣切れ又賣切れ！ 晝夜兼行の大増刷！

今や世論はこの『大隈重信』を廻り眞に沸然として湧き返つてゐる。曰く『現今の腐敗せる政治家は本書を讀んで慚死せよ』曰く『對世界的の現今の時局こそ、この識見、この正義、この氣魄がぜひ共必要な時だ』曰く『この時局に當り第二の大隈出でざるか!!』等々…と。眞に本書こそは非常時日本救國の大文字。切に御一讀を奨む。

著者は語る

今日國運將に危からんとして、天下の情勢宛も幕末を想起せしむる時、自分は今更故大隈老侯に對する敬慕の念切なるものあるを禁じ得ない。故老侯の全幅を大衆の眼前に彷彿せしむる事は自分の義務であると信ずる

登場人物

大隈重信　岩倉具視　伊達宗城　伊藤博文　井上馨　山縣有朋　大井雪洲　黑田清隆

西郷從道　後藤象二郎　榎本武揚　小野梓　笠原政介　岩橋徹輔　加藤高明　若槻禮次郎

八代六郎　岡市之助　髙田早苗　一木喜德郎　大隈母堂三井子　同夫人綾子　井上夫人都子　笠原夫人民子　笠原長男郁造　英公使パークス　其の他大勢

西條八十詩

どうせやるなら大い事業やりな
男一代、腕一本で
揚げる日本の夜明の狼火
偉傑大隈八太郎

沖の黑船、火砲を並べ
逼る國難、宗教問答
三十男が老パークスを
舌で拉いだ男前

固く結んだ、への字の唇は
否と言つたら應とは言はぬ
美事頑張る立憲政治
藩長相手の膽ツ玉

時代の潮にや乘らねばならぬ
死ぬる覺悟の條約改正
どんと響いた爆裂彈に
殘る護國の片柱

定價 五十錢 (送料六錢)　大日本雄辯會講談社發行 (振替東京三九三〇)

一九三三年の街頭に送る

小説は近代人の生活になくてはならぬ心の糧である。或は此處に汲めども盡きざる感激の泉を發見し、又或は永久不變の良友と良師と、更に人生行路の一大オアシスを見出すであらう。一九三三年の劈頭先づ左に掲ぐる名作小説を選ばれん事を切にお奬めする。

發行所・東京市本郷區駒込坂下町 大日本雄辯會講談社（振替東京三九三〇）

久米正雄先生著

白夜は明くる

定價 一圓六十錢（内地送料十二錢 外國送料二十六錢）

こゝ湘南の別莊地、鎌倉の海岸に寄しくも亂れ咲く三輪の名花、一は濃艶ダリヤの如く、一は嬋娟アマリヽスに似、一は清楚白百合を偲ばせる。この三令孃が一人の近代的青年を巡つて描き出す息づまるやうな戀の葛藤は、著者の麗筆に操られ、心憎きまでに讀者の心を魅了せずにはおかない。眞に近代戀愛小説中傑作中の傑作として、嘖々たる大好評を受けつゝあり。

菊池寛先生著

心の日月

定價 一圓五十錢（内地送料十二錢 外國送料二十八錢）

強ひられた結婚から遁れ、心の愛人を慕うて遙々上京した純情の處女麗子が、運命の惡戯か？尋ぬる彼と相逢はれず、尚諦め切れぬ愛着と、遣瀬なき憤りとを抱いて、或時は銀座裏のバーに、或時は丸ビルの事務室に、また或時はデパートの賣場に、忍び寄る誘惑や迫害と闘ひながら虚僞と欺瞞に渦卷く大都會の中で、その節操を死守する清く氣高き名小説。

中村武羅夫先生著

嘆きの都

定價 一圓六十錢（內地送料十四錢 外國送料三十二錢）

これは『都會の女性』の問題を取扱つた深刻なる名小說。北國の一寒村から運命の魔手に操られて、突然大東京の眞只中に放り出された純情可憐な一處女志保子が、或時は執拗な誘惑に惱まされ、或時は恐ろしき迫害に悶え、凡ゆる受難の中に、遂に淸き愛に生きるまで、大都會の裏に跳梁する處女地獄を赤裸々に活寫して、世人に警告を與へる問題作。

菊池寛先生著

仇討新八景

定價 一圓二十錢（內地送料十二錢 外國送料二十二錢）

文壇の大御所たる著者が、一世を驚嘆せしめたる『恩讐の彼方に』以後十餘年、想を練り筆を改め、滿身の熱血を注ぎて成せる得意の仇討物語集。吉良上野果して惡人か、下郎元右衞門は何故主人を殺したか？ 進藤甲吾の一徹心、父の仇に仇の父を討つた石井兵右衞門等々……義と俠と、忠と孝と、戀と慾と、愛と憎との交響樂！ 一讀三嘆の大傑作。

長谷川伸先生著

馬頭の錢

定價 一圓五十錢（內地送料十二錢 外國送料二十六錢）

現大衆文壇隨一の人氣作家たる著者の傑作中の大傑作！ 錢太郎が、ふと犯した己れの罪ゆゑに薄倖に泣く美女おさやを救はんとして、冷酷無類な槐大藏や殺人鬼權田保五郎等を向ふに廻しての死にもの狂ひの大奮闘。著者獨特の妙筆に幾多の主要人物は走馬燈の如く入亂れて、正に興味と感動の頂點を行く大衆小說の白眉篇!!

賀川豐彦先生著

一粒の麥

定價 一圓三十錢（內地送料八錢 外國送料二十錢）

救國運動殊に農村救濟運動の第一線に奮闘する著者が熱血を注いで著はした名作小說。悲運薄倖、貧窮困苦のドン底から起ち上つて鄕土の振興と全社會の淨化の爲に奮闘する靑年と、聖愛の十字架上に雄々しくも一粒の麥として犧牲となつた處女との可憐悲痛な戀物語の中に神への愛、隣人への愛、土への愛を說き、農村復興の實行的プランを明示してゐる。

山中峯太郎先生著

新郞新婦

定價 二圓（內地送料十二錢 外國送料二十六錢）

異性と云へば故鄕の實妹しか知らない初心な靑年士官が、次々と繰りなす天下一品の見合と緣談と戀愛の渦卷、失敗、滑稽、珍談續出して思はず腹の皮を撚らせられる。見よ！ 蜜の樣に甘い新郞新婦の心理や新婚時代の限りなき陶醉振りを。靑春の血に燃える男女の心裡は、輕快の筆に描破されて興味滿點、誰でも自分の渦の中を擽られる思ひがある。

山中峯太郎先生著

九條武子夫人

四六判羽二重裝函入美本　定價二圓（送料十二錢）

東京本郷　大日本雄辯會講談社發行（振替東京三九三〇）

全國書店にあります

噫！二月

夫人の逝きませし月

一代の麗人と謳はれ、日本婦人の典型と仰がれた夫人の

受難と信仰、涙と感激、波瀾重疊の生涯物語！

有髮の尼として、堪へ難き女性の惱み、限りなき人間苦と闘つて來た夫人の赤裸々な姿を描いた名著。讀む人悉く涙にくれる。四十二年の生涯に輝く夫人の叡智、淑德、慈愛、情操、之等の婦德を始め深刻なる憂悶に打克たれた信仰の感激に接するとき何人も力强き生の力が湧いてくる。夫人逝いて四年、その悲しき思ひ出の二月を迎へ「自叙傳以上だ」との評ある本書により夫人の在りし日の姿を偲ばれん事をお奬めする。

堀内信水閣下曰く…本書はよく夫人の生れ出られた時より其一生を詳細に寫したる小說以上の實傳にして、讀んで今更らに夫人に面晤する心地がする。

佐藤紅綠先生曰く…泣くに泣かれず笑ふにも笑はれず悲哀を胸に秘めて口に微笑を浮べてゐる人、之こそ武子夫人だ。全人類が前世から承けて來た罪業の刑罰を一身に引受けて涙ながらに大苦難の熱鐵の上に安坐して微笑して居る人である。

惱める人には救ひの光！迷へる人には導きの手！

淋しき人には慰めの泉！本書は必ず御一讀あれ！

◇本書は又一册の歌集でもある

而も、歌人なる夫人の全生涯を通じての數多の歌が一々その詠はれた境遇や心境の中に織り込まれてゐて誰にも夫人の心持がよくわかり、その哀切苦惱の情は切々我々の魂をちぎらずにはおかない。眞に得難き詩藻である。

○

かりそめの別れとき丶て おとなしう うなづきし子は若かりしかな

○

夜くればものの理 みな忘れ ひたふる君を 戀ふとつげまし

○

うたがひはかくて深くも なるものか あまりに人を おもひせまりて

○

書く人もいふ人もはた 咎はあらず ものがたりめく わが宿世ゆゑ

春のどか

春の陽ざしは
ほつかりと
鳩の胸毛は
ふつくらと
豆も芽を出す
あたゝかさ
鳩も坊やも
はだしでほい
春の日ながの
影法師つれて
みんな仲よく
ほい　ほい　ほい

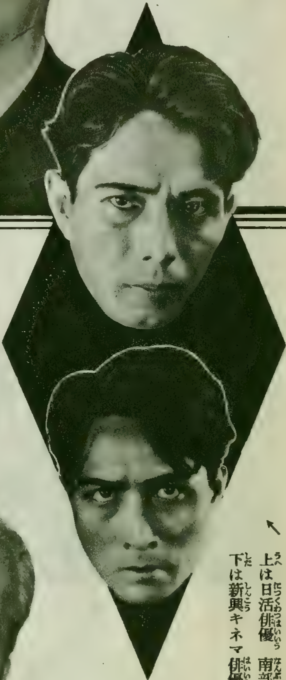
―詩・時雨音羽―

懸賞當選、北村喜多藏寫

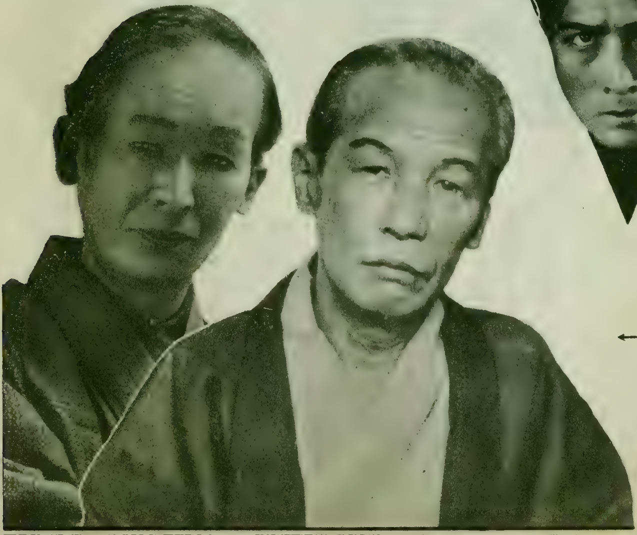
←向つて右は社會教育家　高島平三郎氏
左は大藏大臣　高橋是清閣下

似顔の名士

（他人の空似とは言ひ乍ら何んて似てるんでせう）

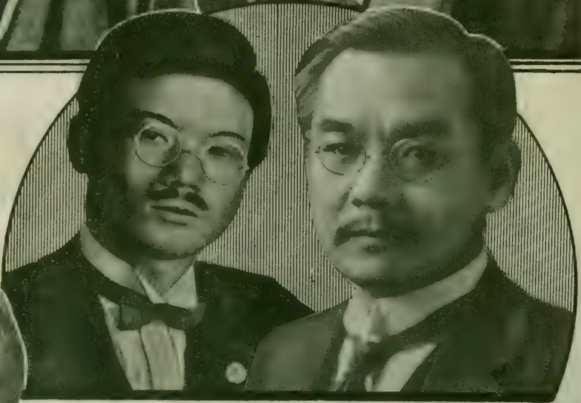


↖上は日活俳優　南部章三氏
下は新興キネマ俳優高田稔氏



←右は小説家　村上浪六氏
左は日本畫家丸山晩霞氏

↑右は文藝批評家　千葉龜雄氏
左は小說家　藤森成吉氏



↑右は代議士　三木武吉氏
左は女子敎育家河口由次氏

←右は文學博士姉崎正治氏
左は實業家　池田成彬氏

紙上封切映畫

← 日活映畫、伊丹萬作監督『刺青奇偶』千惠藏の手取の半太郎と高津慶子のお仲。

↑ 入江プロ映畫、阿部豊監督作品『光・罪と共に』向つて右より村田宏壽、入江たか子、菅井一郎。

→
寶塚キネマ映畫
後藤岱山監督作品『念流無敵篇』
右より羅門光三郎、木下双葉。

↑
松竹映畫『眠れ母の胸に』
寫眞は病癒えて久々に主演の及川道子と
突貫小僧。

新興キネマ作品
『ふらんす人形』
右桂珠子と左山縣直代
↓

三つ四

三、四歳の頃は全く天眞爛漫です。その姿には神が宿つてゐます。何の僞もなく、幼い者は笑ひ泣き怒り訴へます——神の心そのまゝで——それだけに幼い者の世界を寫眞に再現することは至難の業でありませう。

ほ、ほ……おもちろいね →

← これなアに?……うごくの?……

あゝん……いやだい、やアだい →

つの頃

子供寫眞の世界的撮影家、英國の宮廷寫眞協會員**マーカス・アダム氏**(Marcus Adams)は、その撮影に不思議に成功してゐます。――彼等の表情をすこしも傷けることなしに――そして此處に蒐集した寫眞は、その作品が主で、モデルは全部英國上流家庭の子女であります。

→だめだい……そんなことしちア……

←お母さん……お菓子ちやうだい……

→僕、僕うれちい〳〵

潮干狩

野に山に若草萠えて水ぬるむ春、うらゝの陽を浴びて水にたはむるゝ子等。潮はひた〳〵と足を洗ふ。

『姉ちやん、あつた!!』

『あーら、こゝにもよ』

『まあ、隨分採れるわね』

姉弟が嬉しさうにさゝやく頬を、そつとそよ風が撫でて行く。

愛誦名詩大繪巻

西條八十選

十三夜月宴

上杉謙信

霜滿軍營秋氣清　數行過雁月三更
越山併得能州景　遮莫家鄉憶遠征

（註）天正二年、謙信が能登七尾城を陥れた時の吟。美しい月夜に新領土の能登と故郷の越後の山景とを併せて氣持よく眺めながら、待つ家族の憂慮など構ふものかと朗かな男子の意氣を詠つたもの。

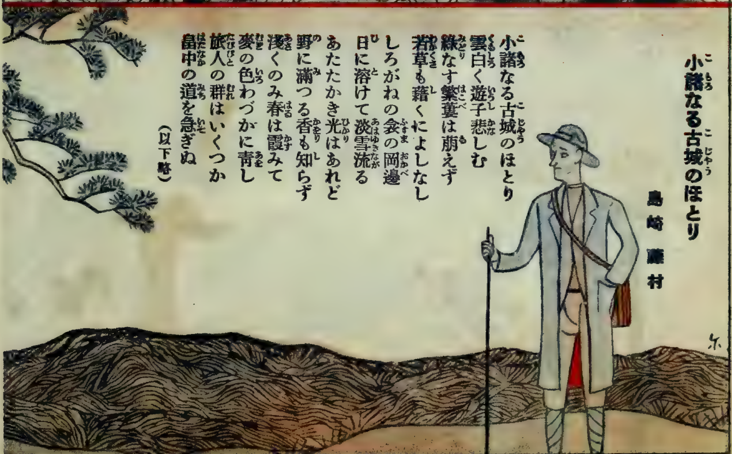
小山榮達畫

鎌倉妙本寺懐古

國木田獨歩

夕日いざよふ妙本寺
法威のあと
を弔へば
芙蓉の
花の影
さびて
我世の
末をなげ
くかな
（中略）
梢の鳩のう
たふらく
ありし昔も今も同ほ
夕日いざよふ妙本寺
芙蓉の花は美なるかな

須藤しげる畫



小諸なる古城のほとり

島崎藤村

小諸なる古城のほとり
雲白く遊子悲しむ
緑なす繁蔞は萠えず
若草も藉くによしなし
しろがねの衾の岡邊
日に溶けて淡雪流る
あたたかき光はあれど
野に滿つる香も知らず
淺くのみ春は霞みて
麥の色わづかに青し
旅人の群はいくつか
畠中の道を急ぎぬ
（以下略）

題兒島高德書櫻樹圖

齋藤監物

蹈破千山萬岳煙　鸞輿今日到何邊
單身直入虎狼窟　一匕深探蛟鰐淵
報國丹心嗟獨力　回天事業奈空拳
數行紅涙兩行字　付與櫻花奏九天

（註）義兵を率る千山萬岳を越えて遙々舟坂山まで來て見れば、帝の乘輿はほかの途を過ぎて折角の苦心も水泡に歸した。そこで單身、危險を冒して行在所の庭に忍び入り、空腕一本で世の中を覆へすとの出來ない不遇な忠誠の臣のあふれる熱情を、せめては二行の文字にたくして櫻樹に刻み天覽に供へた兒島高德の苦衷を詠つたもの。

小山榮達畫

水島爾保布畫

尾竹國觀畫

垓下歌

楚　項羽

力抜レ山兮氣蓋レ世　時不レ利兮騅不レ逝
騅不レ逝兮可二奈何一　虞兮虞兮奈二若何一

（註）項羽が漢の高祖と戰つて破れ、垓下に包圍され、武人の最期の近きを知つて詠つた悲壯な作。我には山を抜くほどの力あり、天下を呑むほどの意氣があるが、時勢が不利で敗れた。愛する駿馬ももう疲れて走れなくなつた。あゝこれを何としよう。愛する虞姫よ、殘るおまへの身を何としたものであらう。

星と花

土井晩翠

同じ『自然』のおん母の御
手にそだちし姉と妹
御空の花を星といひ
わが世の星を
花といふ

かれとこ
れとに隔た
れどにほひ
は同じ星と花
笑みと光を宵々に
替はすもやさし花と星

されば曙雲白く
御空の花のしぼむとき
見よ白露のひとしづく
わが世の星に涙あり

笠松紫浪畫

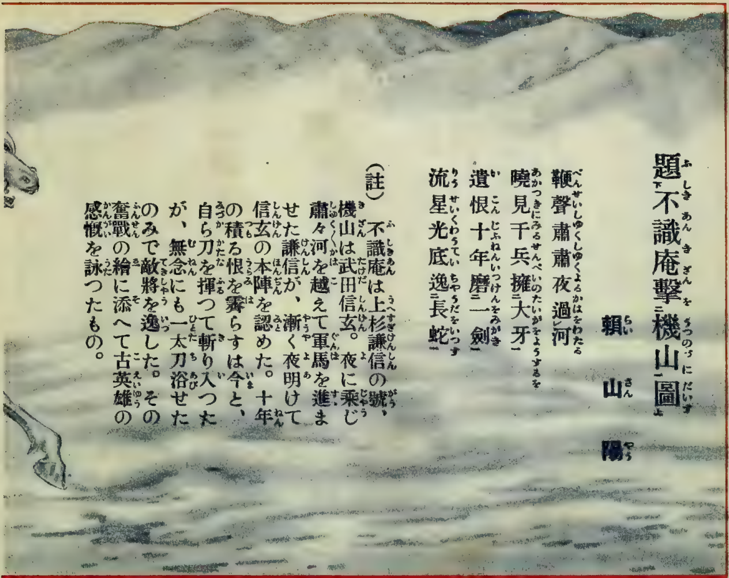
題常盤抱孤圖

梁川星巖

雪灑笠檐風捲袂
呱呱覓乳若爲情
他年鐵枴峯頭嶮
叱咤三軍是此聲

（註）常盤御前が、今若、乙若、牛若の三人の幼兒を作れて吹雪の旅に惱んでゐる圖に題した詩。この時最も幼く、常盤の懷に乳を欲しがつて泣いてゐたのが牛若であつたが、いづくんぞ知らん、この幼兒の聲が後年一の谷の合戰に鐵枴が峰の嶮に立つて三軍を叱咤した勇將義經の聲となつたのであつた。

羽石弘志畫

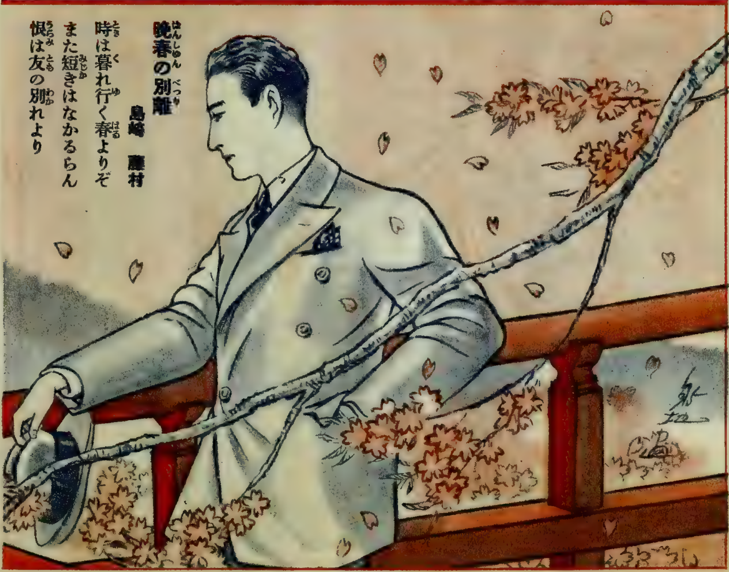


題不識庵撃機山圖

頼山陽

鞭聲肅肅夜過河
曉見千兵擁大牙
遺恨十年磨一劍
流星光底逸長蛇

（註）不識庵は上杉謙信の號、機山は武田信玄。夜に乘じ肅々河を越えて軍馬を進ませた謙信が、漸く夜明けて信玄の本陣を認めた。十年の積る恨を霽らすは今と、自ら刀を揮つて斬り入つたが、無念にも一太刀浴せたのみで敵將を逸した。その奮戰の繪に添へて古英雄の感慨を詠つたもの。



晩春の別離

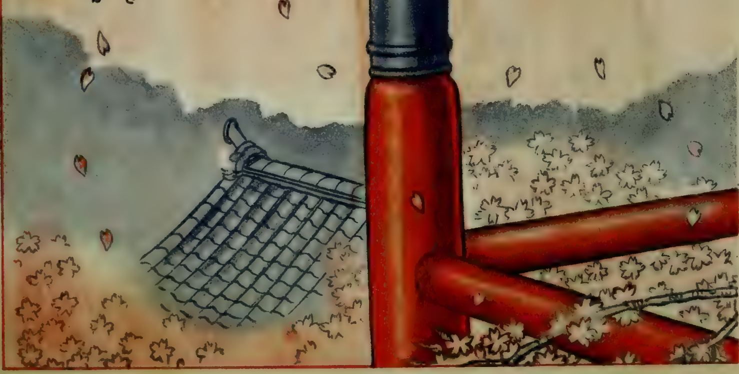
島崎藤村

時は暮れ行く春よりぞ
また短きはなかるらん
恨は友の別れより

尾竹國觀畫

さらに長きはなかるらん
君を送りて花近き
高樓までもきて見れば
緑に迷ふ鶯は
霞空しく鳴きかへり
白き光は佐保姫の
春の車駕を照らすかな
これより
君は
行く雲と
ともに都を立ちいでて
懐へば琵琶の湖の
岸の光にまよふとき
東膽吹の山高く
西には比叡比良の峯
日は行き通ふ山々の
深きながめをふしあふぎ
いかにすぐれし想ひをか
沈める波に灌ふらん

……以下略



馬場射地畫

題太田道灌借簑圖

逸名

孤鞍衝雨叩茅茨　少女爲遺花一枝
少女不言花不語　英雄心緒亂如絲

(註) 太田道灌が武藏野に遠乘して俄雨に出會ひ、一軒の草屋に寄つて蓑を借りたいと所望すると、ひとりの年若い美女が恥かしげに山吹の花一枝を差出した。これは『七重八重花は咲けども山吹の、實の(蓑)ひとつだに無きぞ悲しき』といふ古歌に寄せて雨具の持合せのない貧しさを告げたものであるが、さすがの英雄もその意を解き迷つて心が絲のやうに亂れたといふのである。

小山榮達畫

芳野懷古

藤井竹外

古陵松柏吼天飈　山寺尋春春寂寥
眉雪老僧時輟帚　落花深處說南朝

（註）晩春、吉野山に南朝の遺跡を探つた折の作。後醍醐帝の古陵のほとりに昔ながら風に吼えてゐる松柏、花落ちた如意輪寺あたりの寂しさ。その境内に眉の白い老僧が落花を掃く箒の手をとめて南朝の故事など靜かに語り出づる情景。史實と景趣とを織り交ぜた好個の懷古的詩篇。

水島爾保布畫

蘇武　坪内逍遙

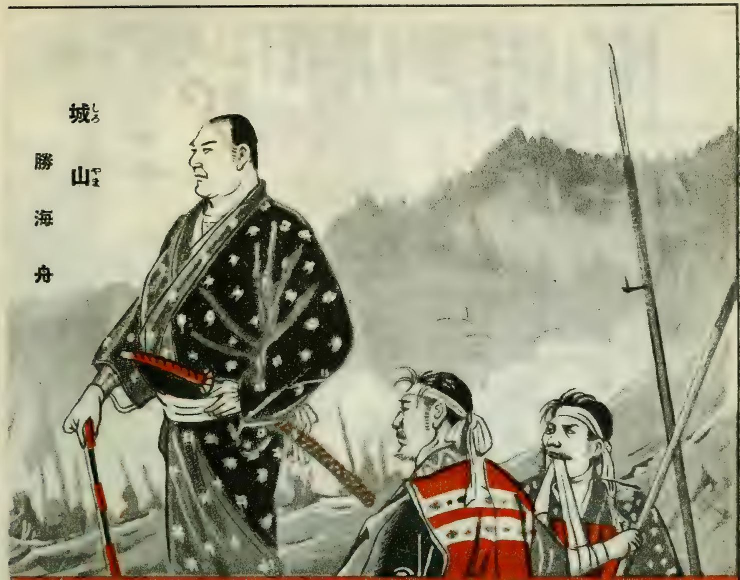
風蕭々の秋ふけて
吹きひるがへす旗ごろも
おもき
君命
いただ
きて遠く匈奴の
國に入る
野邊の草
木や鳥のこゑ
聞く物の音
も見る色も
いづれかえびすのもの
ならぬ
思へば遠く來つるかな
流れ行く水音たてゝ
胸に愁の波高し
故郷母あり雁鳴きて
老の寢覺やいかならん
よしや幾夜の草枕
旅寐の空に果つとも
國家の爲めに盡すべし
君命重く身は輕し
（以下略）

丸山晩霞畫

白虎隊　佐原盛純

少年團結白虎隊　國歩豈辭レ乘二障塞一
黄塵蔽レ天白日昏　警報交〻至二四疆内一
忽捲二風雨一大軍來　砲丸如レ霰積成レ堆
白虎一隊健二於虎一　殺傷過當何壯哉
衆寡不レ敵戰且卻　身裹二創痍一口含レ藥
腹背皆敵將安之　杖レ劍暫息二天女嶽一
（以下略）

石井滴水畫



城山

勝海舟

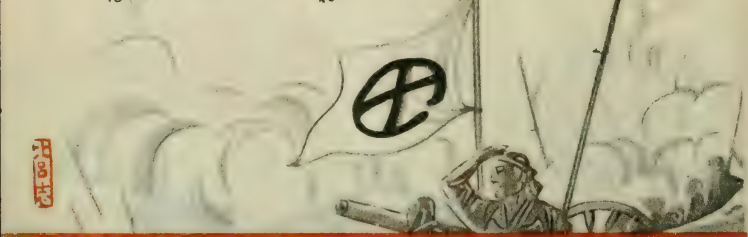
乃木將軍

森鷗外

（一）

つはものの武勇なき
にはあらねども
眞鐵なすベトンに投
ぐる人の肉
往く者は生きて還ら
ぬ强襲の
鋒をしばし轉じ
て右手のかた
圖上なる標の高さ
二零三
嶺の二つ聳ゆる
石山に
たえ〴〵の望の
いとを懸けてこ
そ
きのふけふ、軍
の主力を向けて
しか

それ達人は大觀す拔山蓋世の勇あるも
榮枯は夢か幻か大隅山の狩くらに
眞如の月の影淸く無念無想を觀ずらむ
何を怒るや怒り猪の俄かに激する數千騎
勇みに勇むはやりをの騎虎の勢ひ一徹に
止り難きぞ是非もなき只身一つを打ち捨てゝ
若殿ばらに酬いなむ明治十年の秋の末
諸手の戰うち破れ打ちつ打たれつやがて散る
霜の紅葉の紅の血潮に染めどかへりみぬ
薩摩猛夫の雄叫びに打散る彈は板屋うつ
霰たばしる如くにて面を向けん方ぞなき
木だまに響く鬨の聲もゝのいかづちひと時に
落つるが如き有様を隆盛打ち見てほゝゑみ
あな勇しの人々やいざ諸共に塵の世を
のがれ出でむはこの時と唯一言を名殘りにて
桐野、村田をはじめとし宗徒の輩もろともに
煙と消えしますら雄の心のうちこそ勇ましけれ
官軍これを望み見て昨日は陸軍大將と仰がれ
君の寵遇世のおぼえたぐひなかりし英雄も
今日はあへなく岩崎の山下露と消えはてゝ
移れば變る世の中の無常を深く感じつゝ
無量の思ひ胸に滿ち、只肅然と隊伍をとゝのへ
目と目を見合はすばかりなり
折しもあれや吹下す城山松の夕あらし
岩間にむせぶ谷水の非情の聲も何となく
悲鳴するかときゝなされよろひの袖を濡すらん



羽石弘志畫

（二）

霜月の三十日の
夕まぐれ
將軍は高崎山の
師團より
たゞ一騎、柳樹
房なる本營に
歸らんと、曲家
屯をぞ過ぎたま
ふ
ほの暗き道のほ
とりを見たまへ
ば
身うち皆血に塗れ
たる卒ありて
そびらには、はや
ことされし將校の
亡骸をかきのせて
こそ立てりけれ

（以下略）

齋藤五百枝畫

楓橋夜泊

唐　張繼

月落烏啼霜滿天
江楓漁火對愁眠
姑蘇城外寒山寺
夜半鐘聲到客船

（註）姑蘇城外の楓橋に夜船で泊つた。落つかぬ旅寐の夢からふとさめて見ると、月が落烏が啼いて、晩秋の霜氣が天に滿ちてゐる。さては夜が明けたのかなと四邊を見ると、河岸の楓樹の間に漁火が點々としてゐる。折しも寒山寺からうちだす鐘が靜かに眞夜中を報じてゐるたといふ。旅愁の淋しさ、ものうさを詠つた詩。

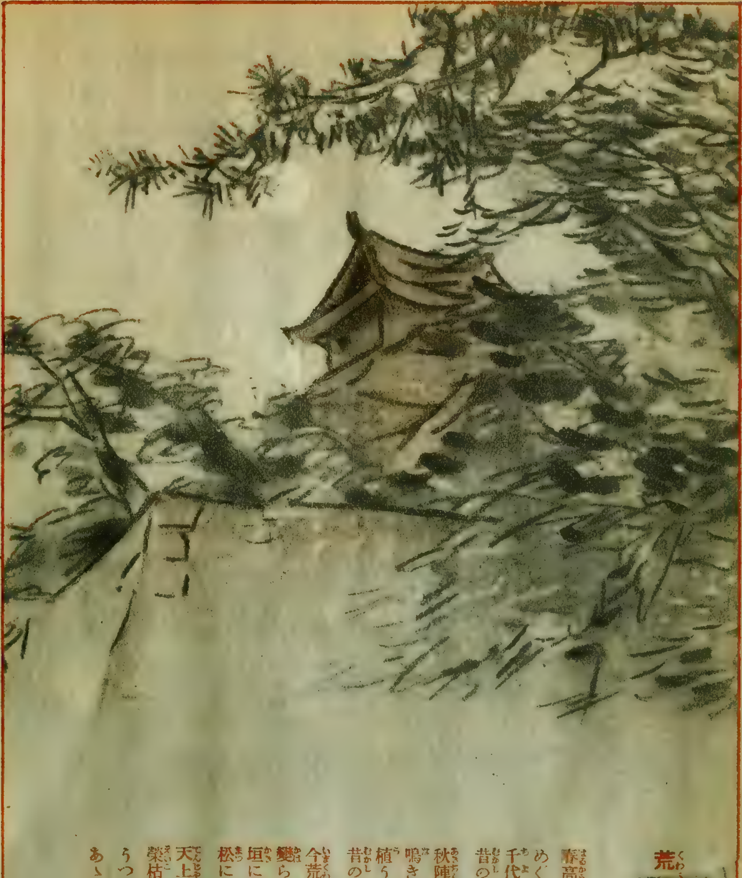
丸山晩霞畫

空の巨人

西條八十

青野の涯の白雲は
巨人の如き姿にて
五月の空に湧き出でぬ
われは幼き童の
草にまろびて銀笛を
悲しく吹きてありけるが
五月の空の紺碧に
立てる巨人の燦として
莊嚴しき相にをののきぬ
雲の巨人のものいはぬ
眸はわれに敎へけり
『見よ、偉なる人となれ』
夕、野を吹く風ありて
空の巨人は音もなく
搖れて崩れて失せしかど
その俤はわが胸に
三十路を越えし今日もなほ
啓示となりて殘るなり
あゝ、懷しき大空の
雲の巨人よ、いつの日か
また見んことのありやなし

齋藤五百枝畫



荒城の月

土井晩翠

春高樓の花の宴
めぐる盃影さして
千代の松が枝わけ出でし
昔の光今いづこ

秋陣營の霜の色
鳴き行く雁の數見せて
植うる劔に照りそひし
昔の光今いづこ

今荒城の夜半の月
變らぬ光誰が爲ぞ
垣に殘るはたゞかつら
松にうたふはたゞ嵐

天上影は變らねど
榮枯は移る世の姿
うつさんとてか今も尚ほ
あゝ荒城の夜半の月

加藤まさを畫

雛まつり

野口雨情

お雛祭りの　來るころは
薄紅つけて　アララノラ
ちよいと　咲きます
桃の花

お雛さまは　おすまして
目元ぱつちり　アララノラ
ちよいと　お顔の
ゆかしこと

感動實話

愛（あい）に幸（さち）あり

岸井紫浪
加東三郎畫

出來心

「昨夜、田村屋へ强盜がはいつたさうだ。」
「恭太郎さんが、賊に斬られて、福島の積善病院へ擔ぎ込まれたが、なか〳〵の重態ださうだ。」

明治三十二年九月十二日の朝まだき、いま起き出たばかりの福島市外××村の村民たちの耳から耳へ、電波のやうに傳はつた恐しいこの噂は、平和に馴れた村人たちの心を戰慄せしめずにはおきませんでした。

田村屋といふのは、村內切つての資產家で、糀製造業田村市平（五四）方のこと。人々の話によると、その前夜深更、一人の覆面した賊が、裏口の戶をこじあけて侵入し、主人市平の枕許へ置いてあつた手提金庫を奪つて逃走しようとするところを、市平の長男恭太郎（二三）が目をさまして、うしろから組みつくや、賊はいきなり、かくし持つた出刃庖丁で恭太郎に斬りつけ、瀕死の重傷を負はせたといふのです。

賊は、急報によつて驅けつけた駐在巡査のために捕へられ、その場から福島警察署へ連行された。ところが、どうです、その犯人は同じ村の百姓佐々木松吉（四八）の長男兼松（二四）と知つて、村中又びつくり。

「まあ、あの兼松が――」

殆んど信じられないものゝやうに呆つ氣にとられました。

兼松の家は、もと村でも相當な農家でしたが、父の松吉が、生れつきの怠け者。かてゝ、大酒は飲む、博奕は打つ、忽ち家產を蕩盡してしまひ、五年前に妻を亡つてからは、兼松の外に松次郎（當時一〇）お淸（八）といふ三人の子供がありながら、惡所通ひをさへはじめるやうになり、とゞのつまりが、詐欺、竊盜などの惡事を働らいて、獄に投ぜられること三度。そのために、他人はもとより、近しい親類までが誰も寄りつかなくなつたので、從つて、一家の生計は、當時まだ二十にも足らぬ兼松の肩にかゝりましたが、兼松は身を粉にして野良仕事や日傭稼ぎをして、僅かに得る勞銀で、幼ない二人の弟妹をいたはり養ふ傍、父なれば

こそ、世間から蛇蝎のやうに忌み嫌はれる松吉にも、やさしく仕へる健氣さ。それ故松吉の放蕩無頼を、口を極めて罵り憎む世間の人たちも、兼松の孝心を心からほめたゝへ、××村の孝行息子といへば、村内はもとより、界隈に誰知らぬものもない位でした。その兼松が强盗をしようとは、何うしても信じられなかつた。だが、段々聞けば、父親は此の頃胃潰瘍で寢て居るが、餘りの貧しさに醫者にもかけられない。(たとへ、やくざな父親でも、どうか藥をのませたい)その一念が、募つて到頭强盗まですることになつたのだと聞いて、村人達もいつそう可哀さうになつた、出來る事なら世にも恐しい大罪を犯した兼松のために、その筋へ減刑を嘆願しようと申合はせたのです。

血判の嘆願書

丁度其の頃、××村長北村紋十郎のもとへ、突然訪ねて來たのは、顏色憔悴して、まだところ〴〵繃帶した、いたましい姿の被害者恭太郎でした。

『やあ、恭太郎さんか、傷はもういゝんですか。』

『まだすつかり快くはなりませんが、でも思つたより早く治りさうです。』

座敷へ通すと、今度のことについていろ〳〵世話になつたこと、度々見舞に來てくれたことなどに對して、一通り挨拶があつた後、急にあらたまつた態度の恭太郎、

『實は村長さん、今日御伺ひしましたのは外でもありません、村長さんにお願があるのです。』

北村村長はぎくりとして、

『いや、わしも實はあなたにお願があるんだが……』

と、先手を打つたつもり。

『いや、それは、どう云ふことか存じませんが、私の御願から先きに云はせて下さい。』

『よろしい、どう云ふことでせうか。』

『聞けば、今度村方で兼松のために、減刑嘆願書を裁判所へ差し出すさうですが、ほんとうでせうか。』

『いや、恭太郎さん、あんたや市平さんが聞かれたら、定めし不愉快でせうが……實はその、松吉も惡人ではあるが、あゝして病氣で寢てゐるものを、見殺しにもできませぬ、また、兼松に罪はあつても弟の松次郎や妹お淸には罪はありませぬ、それに兼松も、今度のことはともあれ、平生あの通りの孝行者だつたのですから、出獄するまで、村方で何とか一家の面倒を見てやらねばなるまい、それにしても、其筋へまづ兼松の減刑

を御願申して、少しでも早く出獄できるやうにしたいものだと、大體話がまとまつたところですがな、いやあんた方が御立腹なさるのは御尤も、御尤も。』

北村村長は、てつきりそのために恭太郎が訪ねて來たものと推察して、半ば辯解するやうに、かう云つたのです。ところが、意外にも彼は、あわてゝ手を振つて、

『と、とんでもない、村長さん、私が兼松君の減刑運動に對して立腹するなどとは、とんだお思ひ違ひです。父はどうか知りませんが、私としては、皆さんの運動に大賛成――といふよりも、是非さうしていたゞきたいと思つて、お願ひにあがつたのです。』

『えゝつ。』

村長は、びつくりした。

『そりや、私もこんな目に遇はされて、はじめはどんなに兼松君を憎んだか知れません。病院で、意識をとり戻した時など、おのれ、兼松、たとへ法律がきさまの罪を許したとて、この俺が許すものか、十年で歸るか、十五年で放免になるか知らないが、出獄て來たら、たゞでは置かないぞと、矢鱈に昂奮して了つたものです。』

『御尤も〳〵、それはさうでせうとも――』

『然し、よく〳〵落ちついて考へて見ると、私は、その間違ひであることを悟りました。』

『え――』

『と云ふのは、これまで、兼松君の行ひを見るにつけ、聞くにつけ、私はどれだけ、人の子としての道を教へられたか知れません、親に對して子たるものは、みなあの兼松君のやうな心をもつて仕へるのが、まことの孝道といふのであらう、それに比べると、自分などは、世間並以上の親を持ちながら、ともすると、親に對して反感を抱くことがあり、どうかして意見が合はない時などは、たとへ一時でも、親を親とも思はぬ不敵な氣持に驅られることもあるが、それは間違つてゐたと、始終兼松君の行ひから教へられて來たのです。』

『成程――』

『それに、今度のことなども、その動機は、矢張りお父さんの病氣を治したい一念からだと聞いて見ると、あの重態の父親と、幼ない弟妹二人――、それを殘して行く兼松君の心のうちは、どんなだらうと思ふと、私はもうぢつとしてはゐられないのです。たとへ、法は曲げられなくとも、せめて、兼松君の罪を輕くしてやりたい心で一杯です。』

『うむ――』

と、村長は、うなつた。

『そんな譯でお願ひにあがつたのですが、ひとつ、私にも嘆願書に署名させて下さい。』

あゝ、神か人か。汝の敵を愛せよと云つた基督の教へをそのまゝ、身をもつて踐み行はうとする恭太郎の崇高なる心根に打たれて、北村村長はひとりでに頭の下がるのを覺えながらも、

『いや、恭太郎さん、あんたのお心持はよく判りました、然しそれでは、お父さんが承知しますまいがな。』

『そりや、私が兼松君の減刑嘆願書に署名したと知つたら、父は立腹するかも知れません、いや、きつと立腹するでせう。然し、立腹しても構ひません、私は田村市平の伜としてでなく、正義を尊ぶ社會の一員、愛に生きる××村民田村恭太郎として署名がしたいのです。』

『――――』

『それに、私としては是非、私の名前を一番最初に記させていたゞきたいのです。』

『うむ。』

と唸りながら、たゞまじ／＼と恭太郎の顏を見つめてゐた北村村長は、やがて、兩眼をうるませながら、感激にふるへる聲で、

『恭太郎さん、あんたは君子だ、神樣だ、村の寶だ。これを聞いたなら、兼松は云ふに及ばず、佐々木一家のものは、どんなに喜ぶことか、わしまで腸の底の底から洗ひ淨められたやうな心地がしますわい、有難う／＼――』

と涙ながらに嘆願書を差出すと、いの一番に、筆太に、田村恭太郎と署名しました。さて捺印することになつたが、此時、恭太郎は、硯箱の中から紙切のナイフを取出して、何うするかと思ふと、ぷつりツ！ 小指を切つた。

『あ！ 恭太郎さん、何をなさる！』

『いえ、血判を捺すのです。』

滴る血潮で、ベタリと署名の下へ判を捺しました。

出獄の日

數回にわたる公判の結果、五年の懲役を云ひ渡された時、兼松は、夢ではないかと喜んだ――と云ふよりも、寧ろ訝かりました。

强盜、傷害――無期徒刑か、どんなに輕くても十年以上の懲役位にはなるだらうと覺悟してゐたのが、たつた五年の懲役で許されようとは――

そして、それが、村民一同の熱心な減刑運動のお蔭だと思ふと、兼松は、今更ながら、村人たちの恩義に感泣せずにはゐられませんでした。

（あゝ、何といふ勿體ない、有難いことだ、あんな恐ろしい罪を犯した自分のために、村人たちが、擧つて減刑を嘆願してくれるとは――この上は神妙に獄則を守り、一日も早く潔白な身體になつて、今日のこの村人たちの恩義に報いねばならぬ。）

かう堅く心に誓つた兼松は獄中での模範囚となり、更に思ひがけなくも、五年の刑期を僅か二年半終へたばかりで假出獄の恩典に浴することになりました。

かくて、いよ〳〵その當日になると、典獄は更めて兼松に向つて、

『――法を犯せば、孝道も非道になる、本職にもお前の心持はよく分つて居るが、尙今後はこの點に充分注意し、再びこんな過を繰り返さぬやうにせねばならぬ、これは村民たちから提出されたお前の減刑嘆願書だ、村民一統の好意を忘れぬやうに一度眼を通して置くがよい。』

斯う云ひ渡した。兼松はその署名を見て、あツと叫んで、灼けつくやうにその一點を見つめたまゝ、しばらくは身じろぎさへすることができませんでした。

冒頭に記された田村恭太郎の文字と、どす黑い血判――

『お、こ、これは――』

兼松は典獄の前も忘れて、がつぱとばかりその場へ泣き伏しました。

一旦、その筋の手に渡つてからは、どんな重い罪でも潔よくうけるつもりで、何もかも司直の裁斷に任せ切つてゐた兼松は、村民たちが辯護士をつけてやらうといふ好意をも辭したため、官選辯護士のお坐なりの辯論の中では、たゞ、村民一同が減刑嘆願書を出してくれたことだけは知つたが、その中に、當の被害者恭太郎の名前があらうとは、ましてや、その恭太郎が、血判までして、自分の減刑を嘆願してくれようなどと、今の今まで、夢にも知らなかつたのです。

やがて、典獄に促されて、やつと監獄の門を出た兼松は、ここでも、北村村長をはじめ、見知り越しの村人たちが十四五人、にこやかに自分を迎へてくれるのを見て、またしても、その有難さ、勿體なさに、息づまる思ひがいたしました。

『兼松、うれしいか、――うむ、嬉しいだらう〳〵、さあ、村でもみんなが待つてゐる、早く歸らうぞ。』

『はい、そ、村長様、――皆様、こ、この度はいろ〳〵有難うございました、こ、この御恩は死んでも忘れません。』

兼松は、泣きじやくりながら、かう云つて、人々のあとから步き出しましたが、ふと、思ひ出したやうに、

『時に、村長様、親父や弟たちは壯健で居りませうか。』

『うむ、弟の松次郎も、妹のお淸も壯健だが、氣の毒に親父さんは、一昨年の暮に死んでしまつた。』

『えゝつ、親父が――』

口ごもつて突つ立つてゐた兼松は、いきなり、北村村長の袂にとりすがつて、

『そ、それで、村長様、親父の死目は、ど、どうでございましたらうか。』

『お前のことだ、それが一番に氣にかゝるのも無理はない、だが、兼松、喜べ、親父さんはお前がゐなくなつて以來、こんなことになつたのも、みんな俺のせゐだ、兼松にすまない〳〵と、口癖のやうに云つてゐたぞ。』

『おゝ、そ、それでは――』

『いや、そればかりではない、死際には、永らく世間へ迷惑をかけて申譯がなかつたと、心の底から改心して、大往生をとげた。』

『あゝ、親父が――、さ、左様でございましたか。』

さういふ兼松の顏は、悲しみの中にも、晴やかになりました。惡人ではあつたが、たつた一人の親、死水もとらずに別れたのは悲しかつたが、改心して死んでくれたのが、兼松にとつては、せめてもの慰さめでありました。

『それから、村長さま、あの恭太郎さまは、何うなされました。』

『む、それよ、今日こゝへ來る筈だつたが、用事が出來たで失禮すると云うて來た、あの田村屋の恭太郎さんの御恩を忘れてはならぬ、お前が、これだけの懲役ですんだのも、みんな恭太郎さんのお蔭だからな。』

『は、はい、それはもう、仰言るまでもございません。』

『恭太郎さんは、實に見あげた御方で、お前はまだ知るまいがお前の入獄以來、お父さまには內密で、お前の一家の世話もして居られた。』

『えゝつ、あの、家のお世話まで――』

『そればかりではない、親父さんの醫藥の心配から、亡くなつた時には、葬式萬端の世話まで――な。』

何から何まで、思ひがけないことばかり。聞けば聞くほど勿體ない恭太郎の好意。

『あゝ、あゝ――』

うめくやうにいふと、往來中も構はず、その場へべつたりと坐り、おい〳〵聲をあげて泣きながら、兩手を合はせ、額を土にすりつけて、田村屋の方を伏し拜むのでした。

故鄉の災厄

村へ歸つた兼松は、無論普通一般の前科者のやうに、世間から爪彈きされることもなく、更生したもとの模範青年として、相變らず、野良仕事や日傭稼ぎに精を出して居りましたが、然し、いくら村人たちから信用されても、一旦あんな大罪を犯した身で、べん〳〵と村にとゞまつてゐることは、何となく心苦

しくてなりませんでした。

（さうだ、俺はこのまゝでは居られない、何とぞして身を立て直し、成功して、村人達の恩義に報いねばならぬ。）

と決心しました。

× × × × × ×

こゝは、北海道は石狩國茶志内の奥。春とは云へ、熊の棲むてふ蝦夷の天地に雪尚ほ深い明治三十六年四月の上旬でありました。家とは名ばかりの掘建小屋を立てゝ、開墾に着手したのは、兼松と其の弟妹の三人でありました。村を出てからもう三年、開墾事業は順調に進捗して、どうやら生活の基礎も定まり、いくらかの蓄へさへ出來ました。その年、はじめて、お美代といふ妻を娶り、翌年には、政子といふ可愛い女の兒さへ生れたところへ、たま／＼發見した炭鑛が、××炭鑛株式會社へ一萬圓で買收されるといふ幸運にめぐり合ひました。

けれども、兼松は決して昔を忘れず、尚も一意專心希望の貫徹に精進してゐるうちに、歳月は流れて、大正九年三月十七日所用あつて美唄の町へ出かけた兼松が、とある飲食店で晝食をしたゝめながら、見るともなしに、側にあつた東京の新聞に目を通すと、驚くべき電報記事が掲載されて居りました。

福島縣下の大火、火元の主人燒死。

十一日午前二時、福島市外××村の資産家糀製造業田村屋事田村市平（七五）方から出火、折柄の烈風に火は見る／＼うちに燃え擴がり、全燒四十三戸、半燒六十戸を出して、午前五時半漸く鎭火せり。

尚ほ、その節、火元の田村屋では、病臥中の主人市平が逃げおくれ、無慘の燒死をとげた。原因、損害等は目下調査中。

電文は簡單でしたが、これを讀んだ兼松は、一時に腦天を打碎かれたやうな氣がした。

（これは、かうしてゐられぬ、俺が御恩報じをするのは、この秋だ、××村は、戸數二百に足らぬ村、百戸あまりも燒けたのでは、全滅も同樣だ、これから、すぐに、見舞ひに行かう。）

宙をとんで、一旦茶志內へ歸り、家族の者に云ひのこして休む間もなく、その夜の夜行列車で、本土へ急行いたしました。

兼松は、十七年ぶりで、なつかしい故鄕の土を踏んで見ると、村の目拔きの場所は大半燒失して、人々は呆然自失、鎭火後七日になるといふのに、まだあと片づけもすまないばかりか、小學校へ收容されてゐる大部分の罹災者に對しても、何の救護の手も伸びてゐなかつた。

（あゝ、お氣の毒になあ。）

ぼんやりと燒跡に佇ずむ兼松の目からは、熱い涙が、ぽたりぽたりと焦土の上へ流れ落ちるのでした。

第一の報恩

類燒を免れた北村村長宅では、今しも、村會議員や村の有志たちが十四五人集つて、頻りに火災善後策の協議に耽つてゐました。

『旦那樣、北海道から御客さまがお見えになりました。』

女中の取次に村長は眉をひそめた。

『北海道のお客？　はてな、何といふ御方だ？』

『佐々木兼松さんと仰言る……』

『何、兼松、……兼松が來た！』と、いきなり立上りました。

手をとつて、兼松を座敷へ迎へ入れた北村村長の喜。一同も亦、彼の姿を見ると、

『いよう、兼さん、よくかへつてくれた。』

と、涙聲です。

『はい、新聞で村の大火を知り、取るものもとりあへず、お見舞ひにあがりました。――村長樣、これは些少ながら、罹災された方々へ差上げて下さい。』

差し出した二千圓の見舞金。それを見ると、村長をはじめ、一座の人は、しばらく無言のまゝ感激の涙にくれて居りましたが、やがて、北村村長は、

『兼松君、有難う――、君が粒々辛苦の大枚二千圓、本來なら辭退するところだが、この際だから、有難くおうけする、このために、どれだけ村民たちが助かるか知れません、北村紋十郎、村民一同に代つて、厚くお禮を申します。』

兼松の前にピタと手をついた。

『勿體ない、村長さま、どうぞお手をあげて下さい。』

かういつても、村長は容易に頭を上げようとはしなかつた。

座の一同も涙ぐんで了つて、しばらくは靜まりかへつたが、ややあつて、兼松は、

『時に、村長樣、田村樣は、どうなりましたか。』

と、口を開きました。

『おゝ、さうだ、實は兼さん、恭太郎さんは自分の家が火元なので、みなにこんな迷惑をかけて申譯がないと、うけとつた火災保險金一萬圓をそつくりそのまゝ罹災者へ寄附なすつて、御自分は福島の味噌會社の職工に雇はれ、尻切絆纏を着て働らいてゐなさる、恭太郎さんの今の境遇を心から氣の毒に思つてゐるところです。』

『えゝつ、恭太郎さんが――そんな譯でしたら、私はこれからすぐにもお見舞申上げたいと思ひます、お宅は福島のどちらですか。』

『うむ、行つてくれるか、有難う、恭太郎さんも定めし喜ばれることだらう……』

第二の報恩

昨日までは××村切つての資産家として、下男、下女の五六人も使つてゐた一家が、今日は親子五人、僅か六疊と四疊半二間きりの見るもいぶせき裏長屋に、家具と云つては、當座の炊事道具の外何一つない不自由な暮しをしてゐるのを見ては、いかに村人たちに對する義理合ひからとは云へ、兼松は胸の痛くなるのを覺えずにはゐられませんでした。

『恭太郎さん、御無沙汰をいたしました、いかいお世話になつた佐々木兼松です。』

兼松が暗涙を浮べながら、かう名乗ると、

『やア兼さんか、よく訪ねてくれました。』

やつれた顏を輝やかす恭太郎の眼にも、先立つものは、矢つ張り涙でした。恭太郎も今は四十四歳、兼松も四十五歳の春を迎へてゐるのです。

兼松は、こゝでも、この度の災厄に對する心からなる見舞ひの言葉を述べ、まだ眞新らしい市平の白木の位牌の前に、懇ろに額づいた後、さて、思ひ入つたやうに、恭太郎の前へ一膝のり出し、

『ところで、恭太郎さん、あなたは何故××村をお捨てになつたのです、何故、いま一度、家業の挽回を計らうとはなさらないのです、いまのあなたにとつては、お父さまの事業を復活させるのが、この世に殘された唯一の仕事ではありませんか、村長様も、村の有志たちも、みなそれを希望して居られます、ね、恭太郎さん、どうか思ひ直して、いま一度旗あげをして下さい。』

『いや、兼さん、君がさう云つてくれるのは全く有難いが、村方に、あんな御迷惑をかけて置きながら、どうして、べん〳〵と村にとゞまつてゐられるかね、罹災者たちの事を考へると、私たち一家五人、たとへ野たれ死をしても悔いません。』

『いや〳〵、それはいけません、そんな氣弱いことで、どうします、いま一度、もとの田村屋になられてこそ、今度の罹災者に對する償ひもできますが、それに、長年賣り込んだ老舗です、ね、恭太郎さん、何でもかんでも、いま一度奮發して下さい、

兼松の一生のお願ひです、これは金に替へて來ようと思ひましたが、何分にも急いだので、このまゝ持つて來ました、どうかこれをもつて、事業再興の資にあてゝ下さい。』

差し出した五千圓額面の公債證書。恭太郎は、驚ろいて、それを押し返しながら、

『いや、兼さん、こ、こんなものをいたゞいては、君に濟まない。』

『すむもすまないもあるものですか、いつぞやの御恩を思へば、こんなもの位物の數でもありません、ほんの萬分の一の御恩報じのつもりです、どうか、私の心をお酌みとり下すつて、默つてお納めを願ひます。』

『いや／＼、君のお志は有難いが、こんなに、君から惠んでいたゞく理由がない。』

『理由があつても無くても、私も一旦出したお金、是非うけとつていただかなければなりません。』

『それは困るよ。』

二人が押問答をしてゐると、がらりと格子戸が開いた。北村村長がいつの間にか、立聞きをして居たのです。

× × × ×

北村村長の斡旋で、恭太郎は、兼松からの申出を容れることになり、再び亡父の事業であつた糀の製造に從事いたしましたが、舊に倍して盛大に赴きました。

それやこれやが元で、恭太郎の長男進一郎は、兼松の長女政

子を娶ることになりました。進一郎が大學を出て、名譽ある文部省留學生に選ばれ、獨、佛二國へ留學を命ぜられた際、政子と結婚式を擧げました。進一郎は、政子に學者の妻として恥かしからぬ教養をうけさせたいといふ兼松が身代に替へての愛の心づくしで、昭和三年五月、愛妻を伴つて歐洲へ渡り、前記二國にあつて、その専門科目を研鑽すること三ケ年。昭和六年九月、無事歸朝すると同時に、○○帝國大學助教授に任ぜられ、爾來、その深奧なる蘊蓄と該博なる知識とをもつて、學生間に絶大なる名聲を博して居ります。聞けば、最近その研究論文を完成して、同大學教授會に提出したさうですから、やがて博士になる日も遠くはありますまい。

あゝ、過去三十年間に於ける人と人との愛の上に咲いた幸福の花——

實にや、愛に幸あり。

〔附記〕本篇に出て來る人物は、殆んど現存してゐますので、すべて假名を用ひ、地名も多少變へました。御諒承を願ひます。

○人の品格は其の讀む所の書によりて知らるること、恰も其の交る所の友によりて知らるるが如し。（西諺）

忠僕 彌右衛門の話

上司小剣

彌右衛門といふのは、私の家の雇人であつた。私が五歳ぐらゐの時、既に六十恰好であつたから、私は老人としての彌右衛門を知つてゐるばかりである。普通に四五歳頃の記憶といふものは、ハツキリしてゐないのが常である。しかし、彌右衛門に限つて、その印象が、私には極めて明瞭だ。私は彼れの顔容から、動作までを、今でも眼前に見るが如くおぼえてゐる。

それほど、幼時の私を感動せしめた彌右衛門である。いまどき、封建時代の『忠僕』などといふ言葉を持ち出しては、人に晒はれたり、叱られたりするであらうが、彌右衛門はほんたうに文字通りの忠僕であつた。

私は三歳ぐらゐまで、ひどい癇性で、夜半から朝まで、泣きつゞけて眠らなかつたことが度々だつたさうな。さういふ時、彌右衛門が抱ツこして庭を歩きまはつたり、縁側で遊ばせてくれたり、母がいくら止めても、彼れは終夜私のために眠らないで、翌日は普通に下男の勤めを果たし、晝寢なんかちツともしなかつたといふ。

『お前は彌右衛門のおかげで育つたのだ。よしや父母の恩を忘るゝとも、彌右衛門の恩をわすれてはなりません。』

と、母が厳格な調子で言つたのをおぼえてゐる。

彌右衛門はひどい痔疾で、びろうな話ではあるが、お尻のところを血で眞ッ赤にしてゐたのを、幼い私は時々見た。生れてすぐ亡くなつた私の姉の墓参に母が出かけた時、ひどく寒い日で、彌右衛門は痔に悩んで部屋に寝てゐた。田舎のこ

とゝて、墓は山の半腹で、道のりが彼れこれ十丁あまりもある。母がもう下向の途に就いたとおぼしい頃、雪がチラ〳〵降り出して來た。

『お傘を持つてまゐりませうか。』

と女中は言つたが、

『なにいゝだらう、どこかで借りて來るよ。』

と父は、雇人をいたはる心でさう言つてゐた。暫らくすると、表にがさ〳〵足音がする。私は母が歸つたのだなと思つて、すぐ飛び出したが、傘を持つて行かなかつた母が、ちやんと家の定紋のついた蛇の目の傘を翳してゐるではないか。さうして、その後には、病室で呻吟してゐる筈の彌右衛門が、跛足を曳き〳〵、蒼ざめた顏をして隨つてゐるではないか。

雪はだん〳〵ひどくなつて、もうハツキリと下駄の齒に二の字を描き出すほど積つた。その白い雪の上をば、彌右衛門のお尻から滴る赤い血が、ぽたり〳〵と、物凄く染めてゐた。その時の印象が生涯私の頭に刻み込まれてゐる。嗚呼忠僕彌右衛門。

もう一つ、これは私が後に父から聞いたのだが、ひととせ、私の家に若い男の雇人がもう一人ゐた。彌右衛門も年をとつたし、病身だから、その後繼者のつもりだつたのであらう。この若い雇人は手癖がよろしからず、時折り物がなくなる。それを私の父母は少しも知らなかつた。彌右衛門が、いつもうまく取り繕うて、蔭から若い朋輩を戒めつゝ、その惡癖を匡正しようとしてゐたのである。雇人の朋輩同志などといふものは、互ひに惡事の摘發をし合つて、さほどでもないことを主人に告口したがるものだが、彌右衛門はそれと正反對に朋輩を庇ふ暖い心をもつてゐた。私の家は神主で、昔の格式で、毎日幾らかづつお賽錢が上る。賽錢箱といふものを置かないので、拜殿へ投げられた賽錢を例の若い雇人が盗んだのを、父が知つて、母とその處分の相談をしてゐると、彌右衛門がぬうツと顏を出して、

『あのお賽錢は、わたくしがちよツとお借りしました。わるいことをいたしました。』

と自分に罪を引き受けた心の美しさに打たれて、父母はおぼえず涙を飲んだことがあつたさうな。（をはり）

佐渡の乃木さん

江見水蔭

　政友會内閣なら錚々たる大臣で大幹部山本悌二郎氏の生國佐渡ヶ島。或時の總選擧に擧島一致で同氏に投票。と思ひの他、突然一人の競爭者が現はれた。いや、それは當人は何も知らなかつたのであるが、開票して見ると、山本氏の次點者として、原田壽山といふのが飛出した。但し二票。誰か惡戲をしたのであつた。

　原田壽山といふと文人墨客の樣に聽えるが、これは相川の料理屋壽志嘉といふ家の主人で佐渡切つての變り者。

『さア斯う成つて見ると、佐渡では山本悌二郎さんか、わしだ。』といふので、二票の得點から大祝賀會を開いた。其爲に大分散財して、下手な選擧運動費位遣ひ捨てたといふから、以て其朗らかさが知れるのである。

　これも文士中の畸人であつた大町桂月が、大正十四年に佐渡めぐりをして、この壽志嘉へ來た。畸人對畸人の一と幕。

　桂月は身に邊幅を粧はぬ男。飾るも飾らぬも無い、汗だらけのシャツ一枚、腹を露出さして平氣で歩く。腰に瓢箪をブラ下げて呑みながら佐渡の三山登りから外海府を廻つて、飄然として壽志嘉に入つたのだから、大概な人間は敬遠するのだが、畸人畸人を知るで、壽山老大歡迎をした。

　桂月もスツカリ好い心持に成つて、

『キ、キ、キミの、カ、カ、カホは、乃、乃、乃木さんに似ちよる。』と、土佐辯で訥りながら云つたものだから、いよ〳〵壽山老喜んで了つて『佐渡の乃木さん。』を振舞はして、當人大納まり、又其佐渡乃木の披露をして、客を多く集めた。實際その顏は將軍に酷似してゐる。

　そこへ又、巖谷小波が漫遊に出かけて、桂月との塾友關係から、俚謠を衝立に揮毫してやつた。その下の句は——佐渡の乃木さん自腹切る——

——とあつた。

この大衝立を、玄關入口の正面に立てゝ得意でゐると、名も無い漫遊客までが、

『佐渡の乃木さん自腹切る。』で、無錢遊興が續出。これには、さすがの佐渡乃木も降參したらしい。それに此頃では齒の衛生とかで、顋髯を長く伸してゐる。壽老人の方に近く成つた。

然るに、當人は大黑狂。大黑の彫刻でも繪畫でも古錢でも、大黑の附いてゐるのは何んでも集めてゐる。それに附け込んで某といふ智慧の變に廻る男が、

『これは名工左甚五郎作の大黑天です。』と、眞か僞か變な木像を持込んだので、いよ〳〵有頂天。お宮をこしらへて毎朝拜む。敬神といふ事は惡い事ではないが、益ゝそれに附け込んで、奸商共が他國から種々の品を持込むが、鑑識眼なんかどうでもいゝので、自分が氣に入れば何んでも買込む。

元來趣味に富んでゐるので、佐渡金山用の昔の石臼を澤山集めて、其石臼を重ねて門柱を造つてゐるのでも、其奇癖は窺はれるが、更に此人は、昔佐渡の金山から、奉行が江戸へ金塊を送る時の御用札の大珍品を持つてゐた。

この御用札は天下に二枚しか無い品で、一枚は同じ佐渡の好古家山本靜古翁の家にあるだけで、壽志嘉の一枚は好古家の間に評判に成つてゐたのであるが、他國から入込んだ奸商が、贋造に近い變な大黑錢を持つて行つて、

『どうです、あんな木の札より、この大黑錢の方が大珍品です。交換は如何。』

佐渡乃木さん、大黑が嬉しさに、

『好し、交換してやらう。』

天下の大珍品を持つて行かれながら、今でも朗らかに大黑錢を愛してゐる。（をはり）

時事漫畫 名士の洒落

どうぞ御勘辨

松田南洋廳長官の盡力に依り、多年懸案であつた電報料の半額切り下げに成功した南洋の邦人達『南洋には銅像が一つもないが松田長官の功績を記念して銅像を建てよう』と運動中、これを聞いた長官『この若さで銅像でもあるまい』とあつて、早速打電『ドウゾ、ゴカンベンクダサレ』

何んにもアリヤシメイ

駐支公使の有吉明君が、對支政策について重大進言をする爲に歸朝した時の事、さてどんなお土産を持つて歸つて來たらうかと、霞ケ關食堂のゴシップ種を賑はしたが、口の惡い某課長『讀んで字の如く何んにもありやしめい』

一メートルの風

昨年十一月大暴風が全國を襲つた時、沖繩地方は風速三十七メートルの烈風で被害甚大との報に、沖繩出身の伊江朝助男のもとに見舞が次から次と來ると、男は『大した事もないやうですよ、恐いのは三十幾メートルの風ぢやなくて、一メートルの風（一命取る風邪）ですよ』

維新志士銘々傳

日下部伊三次

三上於菟吉
山村耕花畫

志士決意

『のう、日下部、そちは何うあつても、水戸は嫌ひじやと申すさうだのう?』

江戸小石川水戸殿邸内の、名だたる庭苑を臨んで建てられた、閑静な茶室で、主侯の齊昭は、稍ゝへり下つて坐つた、四十左右、眼光炯々たる丈夫に、莞爾として言ひかけました。

いかに茶室での内謁とは言へ、黒無地の羽織、茶字の袴とい

ふ略服で對坐を許されてゐる、この日下部伊三次、當家に出入する學者、浪人の中でも、特別に主侯の厚遇に預つてゐるに相違ないのです。

「どうして、左迄當藩を虫が好かぬと言ふのか？　申して見い――」

「御意、恐れ入りまする。」

と、袴の膝に兩手を置いて、頭を下げましたが、

「決して御當家をとやかう思ふやうな日下部では厶りませぬ。いやもう、父親ども以來、御當家さまの御高恩、終生忘れるところでは厶りませぬ――なれど、御當家のおん爲めを思ひますればこそ、拙者、お召しかかへを、飽迄御辭退申し上ぐる覺悟――衷情、御憫察を願ひまする。」

事實、日下部伊三次、薩州を浪人した父親を持つて、父子、東西の流浪――父親の人物が、齊昭の活眼に觸れて、水戸家出入を許されて以來、言ふに言へぬ懇情を辱うしてゐるのでした。

それが、最近、伊三次の人物をいよ〳〵惜しまれて、いつそ、當家家臣に召しかかへたいが――と、いふ内意が君側に下り、定めし、二つ返事でお受けの返事があらうと思はれましたところ、

「御芳恩、恐れ入り奉るが、拙者、只今のまま蔭ながらの御奉公がいたしたい。御前體よろしく――」

と、いふ、きつぱりした答が、口を酸くしてすすめても、何度となく繰り返へされただけなのです。

それで、では、わしが直々たづねて見ようと、いふわけで、今日、安政五年の霜月はじめ、靜閑な茶室に夜の茶の相手に召されたわけなのでした。

ところが、主侯みづからの訊ねにも、齒に衣きせず、飽迄辭退の意を表明してはゞからない伊三次なのです。

「ほう。」

と、主侯は、じつと伊三次をみつめました。

「當家の爲めを思へばこそ、奉公せぬといふ、その意味が、もつと詳しく聽きたいがな？」

伊三次は、靜かに、しかしはつきりした調子で、

『拙者、野人、無調法者、公けの御奉公には、夢更向いた男ではムりませぬ。父親ゆづりの氣性――愚かな奴とおさげすみ下さりませ。』

言ひ出したら、いかなる權勢を以つてしても、その志を曲げられぬ伊三次であることは、齊昭もよく知つてゐます。それで、重ねては言はずに、

『緣が無いといふのかな？　日下部、惜しう思ふぞ。』

さう言はれて、日下部伊三次、思はずしさつて、兩手を疊に、うつむいたまゝ稍ゝ少時――

『勿體なう存じまする。只、勿體なう――』

かほどの硬骨兒、知己の情熱に泣いてゐるのか、なか〳〵顏が上りませんでしたが、やがて、

『殿、拙者、明日にも江府を出發、上洛いたしたい所存でムりますが、御機嫌よろしう――』

『ナニ！』

と、齊昭は叫んで、

『京都へ、明日？　何でまたそのやうに急々？』

『は！』

と、口籠つて、

『久々にて、三條大納言にもお目通りいたし度く存じまして――』

齊昭は、爐前に端坐したまま、强い目で、ひれ伏した伊三次をみつめました。

時代は、今や、政治的にも外交的にも、千古未曾有の大艱難期に直面してゐました。幕府の勢威は漸く衰へようとして、勤王忠君の思想は志士の魂を燒き焦し、しかも異國の戰艦は港外に假泊して、開港をしきりに迫つてゐます。そして、朝廷から、たび〳〵攘夷の勅旨が下るのですが、優柔不斷な幕府が、なか〳〵その思し召しに從はうとせぬので、背勅の大罪を責める聲が、既に聲を大にして叫ばれてゐるのでした。

しかも、その叫びは、南海西海の雄藩から揚げられるばかりではなく、德川の親藩、御三家の隨一、この水戸の齊昭侯の唇からさへ洩れつゝあるのです。水戸の、生一本な氣風が、どこまでも正義に就く外に人間の道がないことを、代々傳へてゐるために、宗家を天朝よりも重し――と、するやうな、私情にからんだ考へ方が出來なかつたのでした。

――たとへ、本家にもせよ、將軍にもせよ、天意に戾れば、この水戸が錦旗を頂戴して、先鋒をうけたまはり、江戸城を一朝に踏みつぶす。それが、臣下の道だ。

これが、齊昭の持論でした。

それなのに、現時の狀態はどうでせう？　幕府は、ます／＼姑息穩便な手段を弄して、外夷にはとかくへり下り、屈辱的な態度ばかり見せてゐるくせに、國內の勤王正義の志士をば、どし／＼片ッ端から捕縛しては、碌々罪も問はずに刑場の鬼と化させてゐるのです。

——この分では、日本は夷國に分け取りされてしまふに相違ない——それもこれも、德川家が、わが家の存亡のみを重んじて、一刻のがれに偷安の日を送つてゐるからだ。しかし、この不忠の一族、聖勅を仰いで一擧殲滅せんには！

義烈の志人たちは、みんなかう熱望してゐましたが、しかし、何と言つても、德川三百年——根は深く、葉はひろがつてゐるので、いざ實行に移らうとなると、なか／＼困難なのです。ことに、勤王藩と言はれる、薩州、長州、それさへ、めい／＼藩の私利を計らうとしてゐるので、一つの思想に混和して事を共にする決心がつきかねてゐる容子——さうなつて來ると、この討幕義軍の總帥は、どうしても、いはゆる天下の副將軍、水戶の齊昭を措いては無いといふことになります。

水戶が立てば、

——御三家の水戶侯さへ、宗家の不忠を責めて天朝にお味方申すのだ。擧つて背勅の家を討つべし。

と、いふことになつて、天下の雄藩も、今更、わが家の利益や體面なぞにこだはつてゐる暇は無くなるにきまつてをります。

こんなわけで、今や、日本國中の目が、今夜このしづかな茶室で、天涯の一浪人、日下部伊三次と對坐してゐる齊昭にそゝがれてゐるわけでした。

そして、伊三次が、その人に目通りしたさに上洛すると言つてゐる、京の三條大納言實萬公こそは、恒に、

——齊昭に命じて天意を天下に行ふべし。

と、いふ、强硬な意見の保持者だつたのです。

つまり、討幕の詔勅を水戶に下して、急速に幕府を討伐せしめねばならぬ——さうした政策の本尊が三條大納言でありました。

かういふ時世が時世、伊三次から、上洛の事を打ちあけられて、齊昭も、ある沈痛な豫感に打たれざるを得ませぬ。

何しろ、この日下部伊三次と言へば、忠烈無比な水戶士人さへ、舌を捲く位の急進論者なのです——その男が、三條公を訪ねようといふ——しかも三條公と伊三次とは、表面歌道の師弟といふ名目で、すでに肝膽相照らしてゐる間なのは、齊昭もよく知つてゐるのでした。

齊昭は、ジーッと、鋭い目で伊三次をみつめつゞけました。

――御當家さまの御恩を思へばこそ、お召しかかへを御辭退――

と、いふ、何となく奥深い意味のありさうな先程の言葉も、今更思ひ出されずにはゐません――

――さては、この日下部、何か大願を起して、三條公に決意をうながさうと企んでゐるのだな！ そのために、當家家臣とあつては萬一の場合面倒な事態を惹起すると考へて、身輕のまま働きたいといふ所存なのであらう――

引き止めた方が――とも、勿論思つた齊昭でしたが、しかし弦を放れようとする矢は、一直線に飛びゆかせる外はないでせう。一個の志士が、心を決めた事は、死を決めた事を意味するのです。

『左樣か？ では、當分逢へぬのう――まづ何よりもからだが素じや。大事にせいよ。』

『辱う存じまする――辱う――』

齊昭は、金鈴を鳴らしました。

『手箱を持て。』

と、はひつて來た侍臣に命じて、葵紋蒔繪の手箱がもたらされると、蓋をあけて取り出した封金――それを懐紙にのせて、手づから、

『進め――餞別じや。』

日下部伊三次、たゞ感激して、やがて水戸侯御前を辭して退出したのでありました。

――そしてその翌日、旅の小笠に旅合羽、草鞋の布緒の結びも堅く、漂然として江戸を後に、京へと急ぐ伊三次だつたのです。

噫！ 壯士、孤劍を抱いて、天下恢復の大事を拓かんとす！ その何ぞ壯んなる――何ぞ嚴かなる！ 日下部伊三次、上京の目的は、水戸侯想像の通りで、彼としては、この一事を貫徹せざらんには、生きてふたゝび舊交にまみえまじとする決心であつたに相違ないのでした。

途上厄難

さても、浪人日下部が必死の決意は、知る人ぞ知る、やはか幕府當路の耳にまでは屆くまいと思はれたのに、當時の密偵制度は、帝政末期のロシヤのそれにも劣るまじく發展してゐました。江戸、京、關の東西、隼のやうに鋭どい眼光をきらめかした輩が、網を張りめぐらして、見る目嗅ぐ鼻、剩さじものと

いふ陣立なのです。

水戸眷顧の日下部が、江戸を立つたといふ密報が、どこから傳はつたか、ここは箱根路を西へ下つて、三島の宿——その宿場に、この一日にいつか大空は鉛いろの雲も低く、みぞれ模様さへ感じられて來た日のたそがれ頃、足を踏み込んだ日下部伊三次、旅の宿りを求めて姿ばかりは打寛ぎ、好む一酌にも心はなぐさまず、早立を約して、床にはひつて一晌ばかり經つた比ひ、その旅宿を目ざして、軒下づたひに集まつて來た五人の人影、いづれも旅行商人かと思はれる輕裝なのですが、手にきらめくのは銀磨きの十手——言はずと知れた捕方の一味に相違ありませぬ。

ソツと、囁やきかはすのを聽くと、

『おい、繁——例のは、たしかにこの宿だな？』

『へイ、たしかにここに泊つてゐます。裏二階の一人部屋、一ぺえ飲つて、心持よく今ごろは、夢路を辿つてをりまさあ。』

『よし。』

と、頭立つたのが、

『じやあ、繁と吉は屋根からへえれ。俺と他の二人の奴は、表から乘り込まう。瘦浪人だと油斷をするな。男なら、腕なら、聽えた日下部だ。表から突ツ込みやあ、きやツは必らず裏へ出る。屋根へ出して、足を拂つて、叩き落したら折り重なれ。滅多に負傷をしねえやうに氣をつけろ。』

『合點だ。親分。』

部署は定まり、吉と繁といふ二人の子分は早くも横手の塀傳ひに姿を消して、ちよいとした足懸りから、早くも裏庭に飛び込んだ容子——

頭分は、通稱して關所の爲助——當時の志士達をして、青鬼と憎ませた手練の捕物師——浪人狩りでは名を得たつはものです。

結城縞に、眞田帶、紺の手甲、脚絆、銀鐺の脇差——十手はふところに、もう大戸を下した旅宿の臆病窓を、トントンと叩くと、不寢番が、ねぼけ聲で、

『へえ、どなたさま？』

と、眼だけ出すのに、押ツかぶせて、低く、強く——

『御用すぢだ。入れろ。騷ぐな。』

『おや——青鬼の——』

と、言ひかけて、ペコリと頭を下げて、

『關所の親分でございましたか——かしこまりました。只今、すぐに。』

くぐり戸ががらりと開く——三人、ずツとはひつて、

『呉々も騒ぐなよ――相手は裏二階の浪人だ――素刄くにきまつてゐるから、騒ぐと怪我をするぞよ――客がゐる部屋へは、俺が飛び込んだら、手入れだからじッと屈まつてゐろ――と、言ひ渡せよ――かう、六、正吉、さあ、行い。』

草鞋穿きのまゝ、グツと、店から奥の廊下――裏階段の下へ來て、立ち止つて、

『いゝか。俺が身を退いたら、貴さま達が飛びかかるんだ。刀は奪れねえだらう――用心のいい奴等だから――捨身で行けよ。』

關所の爲助を先頭に、三人は音もなく、階段を上つてゆきます。

× × ×

こちらは日下部伊三次、一本の寢酒に、寒空の旅に山路を越して來た疲れが一度に出て、ぐツすりと眠りに落ちてゐましたが、フツと、裏手の板屋根を、みしり／＼と踏む足音のやうなものが、耳にひゞいて、そこは、霜の降る音もききのがさぬ日ごろの心掛け、パツチリと目を開いて、それと同時に、床わきに置いた刀の下げ緒をたぐり寄せましたが、物音はそれツきり聽えません。

――ほ！ 空耳かな！ さすがの日下部伊三次も、旅寢をすれば臆病風に取りつかれるか――

苦笑して、また目を閉ぢようとした折柄、今度は、入口の、襖の外で、

『ごめん下さいまし――ごめんを――』

『誰れじや？』

と、日下部、油斷は微塵もなく、しかし、寢たままで――

『宿のものでございますが、ちと、旦那さまに――』

と、言ふと、襖がスラリと開く。

行燈の鈍い光りが、闖入者の扮裝を映し出したときには、もう伊三次は床の上に起き直つて、身近かに置いてあつた衣類、旅裝に手がかかつてゐます。

『宿のもの――か？』

と、冷たく笑つて、

『念の入つた姿だの。』

と、いふ時には、寢卷は脱ぎ捨てられて、黑小袖の袖に手がとほり、帶が〆められ、瞬く間に野袴に足が踏んごまれてゐるのです。が、烱々、爛々たる目に、近づけば一打の、荒獅子のそれにもまがふばかり――

爲助青鬼は、これは、左を立膝に、右の拳を疊に突いて、敬意をうしなはず、上目づかひの凄い視線――輕はずみに摑みか

ズイと、かまはず爲助靑鬼の方へ近づいて來ます——臥床の上には、いつか鳥目をひねつた紙包まで殘して——これは宿屋からぬところに、怖ろしさがあります。

『宿の者と申しやしたは、これは奇略——私は、關所の爲と言つて、街道すぢで御用を承るもの——旦那は、たしか、日下部さんでございますね？』

『いかにも、日下部伊三次だ——それを、何と——』

と、言つた部屋の主じは、合羽さへ身につけて、陣足袋も穿いてしまつてゐました。早行裝は、武家たしなみの一ッです。

『少しばかり伺ひたいことがあつて、役所まで——』

『ハ、ハ、わしを、西へ上らせぬ算段かの？　が、まづ、お斷りだ。わしとしては、一人旅が大好き、その方どもに跟けられはじめては、もうこの宿にゐるのは好ましうない。宿を立つゆゑ、その入口を空けろ！』

への心入れなのでせう。

『旦那、お通し申しませぬ——それでは私の役儀が——』

と、言つて、ぐツと身を退くと、

『御用！』

と、捨身で左右から飛びついたのが、六と正吉——

ぶうんと、十手が風を切つて飛んだが、伊三次は、うるささうに、左に笠を提げたまま、右の鐵扇で、ビユウビユウと彈きのけるやうに——

『ハテ、そこを通さぬなら、裏口からだ。』

窓に立ち寄ると、スルリ、雨戸をあけて、

『外にも待ち人がゐるやうだな。ソレ、逢うて取らせるぞ！』

パッと、飛び出す、板屋根の上——ダアッと、脛にからんで來る棒を跳ね退いて、一氣に裏庭に飛んで下りる——

折重なつて、爲助、吉、繁、六、正吉——息を詰めて追ツかけて來ましたが、退き口の裏木戸は、恐らく、出來るだけ家から繩つきを出すまいとした家人が開けて置いたと見えて、扉は八文字——驅け出した伊三次、宿から二町ほどの淋しい暗がり——三島神社の大鳥居も近いあたりで、立ち止まつて、闇を透すと、

『來い！』

踏み止めて、立ち直つたのは、腕立てを好むわけではないが、追はれぬほどに痛めて置かぬと、後が面倒だと考へたものでせう。

——來い！

と、相手から聲をかけられては、怺へ切れぬ若者たちです——

『何を！』

と、吉と六が、いのち知らずに組むのを、組ませて、一振り、轉びかけるところを、左右の足がパツパツと働らいて、その趾先に當つた肋がねぢれる。

『ムーム。』

と、つんのめる二人。

『御用！』

正吉、繁——一人は正面から頭突きの形で、ドーンと來るのを、透して、鐵扇がうなりを立てたと思ふと、後頭部に一撃がはひつて、今一人は、組みつく前に十手の利腕をビーンと打たれましたが、二の腕の骨は脆くも折れた容子——

息も入れさせずに、部下をことごとく失つてたじろがぬ青鬼の、いのちの投繩——風を切つて、ツツーと伸びて來て、鐵扇を持つた右手にからんで來る——

からませて、そのまゝ、左手で、ぐい／＼と、たぐり寄せる力は人間業とも思はれません。

グ、グ、グ、グ——

と、引き寄せられた爲助——足がかりの捨石に、ぐんと踏ん張つて、これも金剛力に引き戻さうとする。

『關所の爲とやら——』

と、伊三次はしづかな調子で、

『その方を、見つけ次第斬るといふてゐる人達もゐる——大分、恨みも買うてゐるらしいの。が、わしは斬らぬ——斬らぬが——』

と、言つた途端に、怖ろしい力が、ぐうんと繩を引く——青鬼、放して引んのめしに掛けようとしましたが、生憎、自分も手首に二巻きまいてある繩尻——ダ、ダ、ダツと、つんのめる

やうに引ッぱり寄せられながら、右手を脇差にかけようとしたその時――

『斬らぬが、これじや!』

鐵扇の要が、ゾウンと、胸の鳩尾を突く。青鬼も、グッと息を詰めてのけぞりました。

振り返へりもせぬ伊三次――

半晌あまりして、息を吹きかへした青鬼、これも氣力を取りかへした子分たちが、次の宿へ急報して、手配をしようとするのを、制して、脣を噛んで、

『いゝや、いかねえ――この青鬼の手に一ぺんかけかけた浪人――屹度おれの手で捕る。行く先はわかつてゐるんだ。まあ、ほツとくがいい!』

夜は、みぞれとなつて、まだなか〳〵明けようとはしないのです。

殿上熱論

――跟け來る黑い影を、今更、日下部伊三次は、氣に止めてもゐられないのです。が、京の三條實萬朝臣の館――土塀つゞきの外まで辿りついて、振り返つたとき、

――ああ、よくも、このきびしい警戒を、擦り拔けてここまで來られた。

と、つぶやいた彼、あとから、たつた一ッ慕つて來る、町人ていの男を、このままにしては置けない氣がしました。

――ふうん、跟いて來るのは、大方、例の目明し文吉の手下の者か――あはれだが、大納言に御迷惑がかかつては難儀――

當時、京洛で、目明し文吉と言へば、名だたる志士の敵、安政の大獄も、主だつた人々は、大がいこの闇の使者の手に捕られたといふので、後に文久二年閏八月、土州の淸岡治之助、阿部多司馬、岡田以藏の烈刄に斬られた程の人物――この警吏の部下は、到るところに散在して、少しでもいぶかしい形跡を殘した人間を、見のがしツこはないのでした。

伊三次も慣れた身、豪放で、また細心なところもありますから、京へはひると、影のやうに身に添ひはじめた奇怪な追跡者を、この場合仕末をつける必要を感じたのです。

塀角で、待ちうけて、それとは知らず、サラ〳〵と、いつか落ちて來た粉雪の中を、江戸ぶりに、彌藏を作つて、わざと鼻唄――

×

吸ひつけ莨が

雲となり
居つゞけ日和が
雨となるう——

×

と、角を曲つた、闇の鼻先——

『奴、御苦勞だな！』

『へえ！』

たじろぎながら、タ、タと、三歩ばかりさがつて、身がまへをするのを、

『東海道三島以來、もうお供は澤山だとことわつて置いたが——うるさい奴のう——』

『何でございますツて！　旦那——あツちは江戸から流れて來た職人で——へえ。』

『ハ、ハ、その職人が、今日の朝、逢坂山を越えて以來、拙者の足あとを、嗅ぎまはるとは粹狂だ。粹狂ついでに、ちと辛い馳走も食つて見い！』

と、突嗟に、パツと突き出た二本の指——その指先がかたまつて、跟き物の眉と鼻の間へ——

『わあツ！』

と、ひと聲、絶氣するのを見向きもせず、差しかゝつたのは、大納言家の通用門——

『これは、はる〴〵江戸からまかり下つた、御弟子の日下部信政でムる。詠草を御覽に入れたく、何分、御前よろしう。』

大納言三條實萬——その時、御所を退下して、たゞ一人、時勢を慨いて短檠の下に、長夜を明しかねて歌膝して思ひ沈んでゐたとき——

『ナニ、信政——伊三次か？　それはめづらかな客人だの——これへ。』

長い渡どのを、たつた先程、警吏を一擧手に仆した武勇の徒とも見えず、小腰をかゞめ、兩手を袴前に揃へて、鞠躬如として紙燭した家來に導かれて來る旅すがたの、まだ埃も拂ひ敢へぬ伊三次、實萬居間の、入側まで來ると、ピタリと坐つて恐れ入つて畏こまりました。

實萬卿は、公卿、雲上の貴顯ながら、眼一世を曠しうして、王事に一生を擲たうとする氣魄のますらを——キツと見て、鋭どい目にいつくしみの光をたゞよはせましたが、

『おお、信政、久しぶりであつたのう。これへ進むがよい。』

『ハツ、恐れ入り奉る。』

令色と巧言とは、伊三次のよくせざるところ、口、吃して、しばらくはたゞひれ伏すのを——

『寒夜ゆゑ、これへまゐつて風爐に手をかざすがよい。身も、いたう寒がり、障子を閉て切つてほしいな。』

大納言の、笑ましげな言葉で、伊三次は、恐る〳〵進んで、部屋の明障子をぴツたりと閉めます。

『見れば京着、早々さうな――さぞ、寒氣に痛んだであらう――茶を取らさう。』

手づからの立て前で、薄茶一服――熱目なのを、大服に頂戴すると、實萬が、

『水戸殿は、御機嫌よろしいかな?』

膝に手を、屹ツと振り仰いだ日下部、

『ハツ、あまり勝れさせてはおはしませぬ。』

『ナニ、では、水戸には、病氣にても――』

と、大納言の顔面に、不安の表情がたゞよひます。

『殿下。』

と、日下部伊三次の瞳は、大納言の面上から搖ぎませぬ。

『正身のことは兎に角、心のほどは、現在の世のありさまを眺めませば、水戸侯たらずとも、病氣を覺えぬものとてはムりますまい。』

――さては、信政、說客として、はる〴〵の上洛じやな。

と、實萬公は、早くも本心を見拔きましたから、

『水戸殿のみか、天下萬民の、その病氣を治するに、何か法でもあると申すかの?』

『名醫は恒に、至誠なれば必治すと、かく信念を抱いてゐるやに承はる。この天下の患を解くも、亦至誠のみと愚考仕ります。』

と、伊三次は答へて、

『至誠のほとばしるところ、至尊も嘉納ましますでありませう――この上は、たゞ、水戸侯へ、御勅旨を――』

さすがに、この一語に、大納言の顏色も變じました。御勅旨――一布衣の浪士が、輕々しう口にすべきではありませぬ。が、もとより伊三次は決死の身――罪、不敬に當らば、鼎鑊の罪も甘受せんとするところ、いつかな怯まぬ面だましひです。勁烈に、簡明に、今一度繰り返して、

『この上は、たゞ、水戸侯へ御勅旨を――すでに公にも知ろし召さるる如く、今や德川の政は亂れに亂れ、武士は泰平に慣れて艱難の道に處するの法を知らず、纔にしば〳〵勅諚を辱うしながら、外夷の近海に迫るにまかせ、攘夷の實を、いつの日にか擧げて聖勅に添ひまつるべきかを知りませぬ。これ一に碧眼紅毛の脅迫に怖れ、神州男兒の魂魄を失ひし結果でムる。あまつさへ、志士の義を說くものを囚へて、刑場に鮮血の

乾く日とては無く、このまゝにさし置きませば、社稷の累卵に瀕することは、鏡にかけて見るよりもあきらかでムるが、しかも、尚ほ、優柔きはまる幕府に依頼して月日を費やすは、皇家の御不幸、廷臣の不忠――この期こそ、攘夷の聖勅を、全國ことごとく手を額にして仰ぐ誠忠の家柄水戸侯に下し賜り、上下一致、忠君愛國の旗幟を凛烈たる朔風になびかすべきのとき、この機を失しなば、邦家、あるひは大いに悔ゆる日もあらんかと存じ寄り、もとより禮にならはぬ微臣、矢も楯もたまらず、京師に馳せ上り、旅塵を拂ふいとまもなく、押して参殿いたせし次第にムりまする。』

實萬卿は、常服の襟を正して聽き入つたまま、俄かにひと言も答へませぬ。

伊三次は今は禮儀も物かは、一膝押し進めて、

『草莽の浪夫が突然の推參、お尤めはさきより覺悟――言は拙なけれども、志すところは、殿下には夙にお察したまはつたことと存じまする。尊聽に達し上げました上は、もはや此の世に思ひ置くこともムらぬ。さらば、おいとま仕りまする。』

豫ねて期す、一死難に赴くを――難に赴くや、あながち戰場に馬革を望むを要しませぬ。伊三次信政は、水戸齊昭に密勅を請下する大事業の口火を切りさへすれば、皇居を遙拜して腹を裂く覺悟をとうにきはめてゐたのです。決意を眉宇にきらめかして、大納言の御前を退らうとするのを、手をあげて、貴紳は抑へました。

『待たれよ、信政。そなた、死すにはまだ早からうぞ。』

『ハツ。』

炯眼に射られて、思はず手を突いた伊三次――

『のう、信政。』

と、大納言は沈めた聲音で、

『そなたの赤心は、麿もほと〳〵感じ入る――麿とても、何條國を思ふ心に變りがあらうか――とりわけ、そなたほどのつはものが、數ならぬ麿をしたうて、はる〴〵と東からたづねくれた、そのこゝろざし、世を變へても忘れは置くまい。この納言、生きてある限り、たのもしう思うて貰ひたい。』

じツと、見上げる、丈夫の目にうかぶ感謝の涙――大納言が、こゝまでに言はれるからには、微意の聖聽に達することも無いとは言はれぬのです。

無言に仰ぐ伊三次の顏を、しづかに見おろす貴顯の眼にも、かすかに濕めやかさが漂ふのを見ました。

大納言は、聲をつまらせて、

『それに就いて、約束がしてほしい。そなた、死にいそぎいた

してはならぬぞ。』
　伊三次の頭が低く垂れて、肩先のそよぐのは、感泣の咽び泣きを怺へてゐるのでせう。
『のう、信政。』
と、實萬卿は言葉をつゞけて、
『身とすれば、身のはたらきを、そなたに眺めても貰ひたい氣がいたす。もとより、帝の御擧措は、何人の憶斷も怖れ多い。さりながら、おほけなくも、この麿、君側に在る限りは、そなたの心使を、無にはせまいと誓ふ程に、まづ、世の成りゆきを、その目にて見てゐてほしく思ふ。な？　されば、當分は京にとゞまり、またの歡會を樂しみにして待つがよからうぞ。』
　實萬卿は、彼自身の盡忠を誓つた上に、その忠義ぶりを見てゐてほしい——と、それ迄に伊三次に言つてくれるのでした。忠義には、身分の上下も無い——と、いふ眞理は、理窟では何人も知つてゐますが、さて實行は六かしいもの——この大納言の如きは、千人一人の偉人で、しかも、その言葉の中には、忠にはやる伊三次を、どこまでも徒死させまいとする用意がふくまれてゐるのです。
　伊三次は、旅の疲れも、難澁も、サツパリと忘れて、今は天にものぼる心地、三條殿を辭去して、旅宿を取るために、河原町の方角をさしていそぐのでした。

一身報國

水戸侯へ遂に下つた攘夷の別勅——
　それが、一浪士日下部伊三次の力のみが朝廷を動かしまつツての結果だとは言はれないのですが、しかし、天下志士、勤王家の念願は、たうとうかなつて、やがて、密勅は水戸京都屋敷留守居役、鵜飼吉左衛門に下り、天下は今や歸一の大道を明示されたのです。
　攘夷、討幕の機運が、ます〳〵旺然として興起し、柳營の勢威の日に蹙まりゆく形勢は、いよ〳〵瞭らかなものになつたわけです。
　——時は遂に來た。これまでハッキリした目標を持たなかつたわれ〳〵も、只、水戸侯麾下に走しつて、ひたすら盡瘁すればよいのだ。それが王家への忠節だ！
　この氣持は、あながち有爲の志士のみならず、僻土寒邑の萬民にもゆき渡つて來たのでした。
　この情勢に震駭したのは、勿論柳營です——臺閣に座して大瀾を既倒にかへさうと、德川一族のために心を碎いてゐた、井

伊掃部頭直弼、間部詮勝等は、一方、水戸侯を壓迫して勅書を奉還せしめようと努力すると同時に、詮勝自身、禁廷御機嫌伺ひのためと稱して京都に上洛し、自ら勤王志士の捜索幹部として大活躍を開始しました。

この詮勝の下には、精粹をつくした密偵たちが集まつて、根こそぎ反幕府の掃蕩を期してゐるわけ——例の腕ツこきの目明し文吉はじめ、三島の宿で伊三次のために屈辱を受けた關所の爲助なぞも、これは個人の怨念から、かの密勅奏請の蔭武者日下部を、やはか他人の手に任せようかと、牙を嚙んで馳せ集まつて來てゐました。

しかも、この時、間部詮勝の運動は功を奏して、九條公以下穩和派、親幕派の廷臣が、彼のために大いに便宜をあたへたので、志士義人の捕吏のために縛に就くもの、またゝく間に四十餘人——かの大西鄕——西鄕吉之助の如きすら、人目を忍ぶために身を田舍商人に扮して、辛うじて京洛を潜行してゐる仕末となつたのです。

さうした中を、たつた一人、いかなる探査壓迫をも、念にも止めぬやうに、鵜の目、鷹の目、十手をかくした人込の間を、平然と、大小を横たへ、短袴高履して横行するのが、わが日下部伊三次でした。周圍の人々の＊

＊心配危惧は、言ふまでもありません。ある日薩州の茅根伊豫といふのが、西鄕の隱れ家をたづねて、しみじみと言ふことには——

『ここに困つたのは、かの日下部じや——彼のこのごろの擧動は、

われ〳〵にはフツと呑み込めぬが――』

『日下部が？　伊三次が？　一たい、どうしたといふのでごわす？』

『彼はこれまで、細心隱密の策士として、われも人も許してをり、事實、攘夷別勅の降下も、日下部の力に負ふところが多いのは、誰れも知るところじや。それが、最近、まるで人が變つたやうに、この危ふい中を、白晝平然として巷に顏をさらし、高貴、權門の邸を叩いて、堂々と議論を上下し、少しも身の難儀をかへりみぬ容子――あれでは、結

局、遠からず、逮捕の憂目を見ることにもならうと思ふ――そこで、お願ひじやが、貴公は日下部と親しい仲、お出逢ひ次第、一言注意してつかはしてほしいが――』

『おお、いかにも承知でごわす。日下部の身に萬一の事もあつては、主上へも名の聴え上げられてゐる人物、同志一同の力も落ちることでごわすゆゑ、必らずきびしく忠告いたすでムる。』

――茅根からこの依頼をうけた西郷吉之助、兩三日日下部の在所を尋ねましたが、踪跡がたえてわかりませぬ。ところが、四日目の夕方、東山のあたりを歩いてをりますと、偶然、むかふから、木履に大地を踏み鳴らすやうにして近づいて來る一人の壯士があります。近づいて、たそがれの光りに透して見ますと、これが、尋ねにたづねてゐた、當の日下部伊三次――

『おお、日下部どん。』

『おお、西郷うぢ――久しぶりだの。』

西郷は、相手が差し伸べた手を握ると、じつと、瞳をみつめるやうにして、

『よう、まあ、無事な姿を見るもの――往來で、立話も出來まい。少し話もごわすで、そこな茶店に立ち寄りませう。』

――二人が、茶店の奥の、小さな離れに差し向ひになつたとき、吉之助は、聲をしのばせて、同志一同が、伊三次の身の上を、どのやうに案じてゐるかを諄々と說きました。

『何せ、貴公は別勅降下の大功勞者、從つて、幕吏どもの憎しみも、一方ならぬものでござらう――その風體で、天下晴れて、大道を濶歩しながら、今迄無事でおはしたのが、まづ目つけもの――一同の願でムるに依つて、今日今夜から、この都を去つて、いづ方なと、當分は身を隱してほしいもの。どうぞ、一同の頼みを入れて貰ひたうごわす。』

伊三次、鐵心鐵腸のますらをながら、感激性も人一倍强い男、この厚意を聽くと、ハラ／＼と泣きましたが、

『イヤ、西郷うぢ、その心入れは、死すとも忘れませぬ。じやが、この伊三次は、別勅降下を、たゞ、念願として働いて來た身でムる。すでにあの大事も成就しました上は、いつ何どきなりと、潔よく一身を鼎鑊の牲として甘んずる覺悟――由來、革命の大事は、淸らかな、火よりも熱い血潮が流れぬところには成り立ちませぬ。その血は、出來るだけ多いほどよろしい。伊三次の血は、今こそ流すにふさはしいとき――人間は、老少不定――いつ疊の上で死なねばならぬかも知りませぬ――のう、西郷うぢ、この身のことは、このままに見のがして置いて頂きたい。』

西郷は、じツと聽き淸して、この壯士の決意の拔くべからざ

ろを感じました。勇士、一たび死を決しては、その志の奪ふべからざることは、彼も亦充分に知り拔いてゐます。

『いや、それまでの御決心、感じ入る外はムらぬ。』

もとより、多言の西郷ではありませぬ。これだけ言つて、生別死別を兼ねるつもりで、伊三次の杯を所望しました。

伊三次はそのとき、灯の下に、懐紙をのべて、矢立の筆を嚙みましたが、凛烈たる筆力でしるしたのが左の一絕でした。

×

星斗闌干月滿天
書窓深坐不就眠
欲知世運隆興兆
神武東征戊午年

×

その懐紙を、扇にのせて示して、

『これは偶作じや。が、いつも〳〵、拙者の心根はこれでムる。』

『おお、結構なお心意氣じや。日下部どん、これは頂戴いたすぞ。』

西郷吉之助は、讀み了つた詠草を、押し頂いて懐中しました。

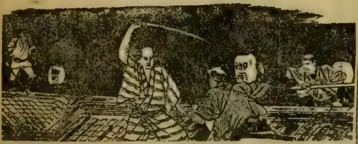
間もなく、二人は、茶店を出ると、連れ立つて、人目にかかるのを恐れて、西、東――

ああ、壯士一度去つて、また相見えるの日のいづれぞや。大西郷と、東海の奇傑との對面は、この世ではこれを限りとなつたのでした。

× × ×

こちらは、例の關所の爲助青鬼――子分の六と吉といふのを引きつれて、東海道をはる〳〵と京へ上つて來たのも、たゞ、

面白い〳〵！
怪盜義賊、江戸一番の人氣者、
出沒自在の大活躍。
評判講談 鼠小僧治郎吉
家には鼠、國に賊、濱の眞砂のその中で盜みはすれど非道はせぬ、天晴江戸ツ兒の和泉屋治郎吉が一代の俠盜史!!
本社版・布裝美本・一圓送料十二錢



日下部伊三次をわが手で召し捕つて、幕府への報公を果すと同時に、わが舊怨を晴らさうといふ決心からです。

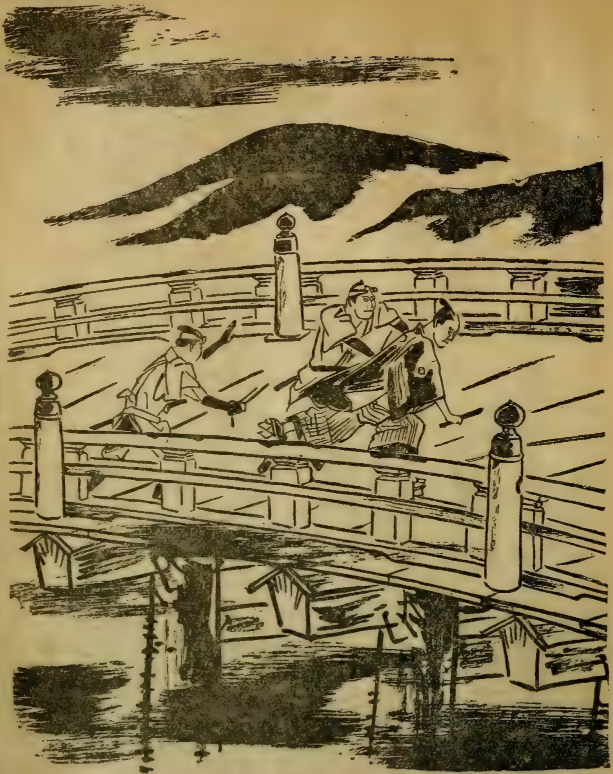
ほかの事には一切目をつぶつて、今日も、明日も、夜も、曉も、京洛をさまよひめぐつて、日下部の、あの堂々たる軀姿を求めてゐるのですが、今日は三條殿に參邸したとか、昨日は中山卿館にまゐつたとか、さういふ諜報のみがひゞいて來るだけで、絶えて彼等の目に、めあての人の後影だに發見出來ないのです。

焦らちに焦らつて來た彼等、萬に一ツ、京に止まつてゐると見せかけて、早くも逆に東下、江戸入りをしたのではあるまいか、と、いふ懸念さへ湧いて來るのを、どうすることも出來ません。

『ねえ、親分、こいつあ一思案しなけりやなりますめえぜ。隱れ家らしい場所は、一軒のこらず毎日張つて、その上八方に手を伸して見ても、見當もつかねえといふのはヲカしいや——この邊で、京は見切りをつけて、海道すぢを當つて見ようじやありませんか？』

『さうよ、どうも、これほど歩いて、匂

ひも嗅ぎもしねえといふのは不思議だ。親分、とんだドヂを踏んでゐるのかも知れませんぜ。』



と、二人の子分が、たうとう口に出して言ひはじめたのを、さすがは、青鬼の爲助――一度ガッチリと噛みついたら、雷が鳴つてもはなさぬ奴です。

『いゝや、物事あ、急くこたあねえ。東へ歸つたら、もう安心。いはゆる釜中の魚とかいふ奴だ。が、あいつは必らず京にゐる。勤王浪人に取つては、今の京は、いはゞ檜舞臺、こゝで一芝居やつて死に花を咲かせたいと、奴等あ、みんな願にかけてゐるんだ。ゐるとも――キツトゐる――まあ、待つてゐろ。屹度長くねえうちに、あいつの面あ、お前等に見せてやるから。』

この豫言は、伊三次に取つて、不幸なことに、ピタリと適中したのでした。

それから二日目の、いつか京の春もたけなはに、東山三十六峯、雲のやうな櫻にかすんで、夕べは月がおぼろに煙るころでしたが、その都の夜ふけを、人足もハタと途絶えた三條大橋に、さしかかつた件

の三人――今日もあぶれて、繩手の宿でつまらなく寢るのかと遣つて來て、ふと、むかふを見ると、どうやら見覺えのある浪人姿――木履に橋板を踏み鳴らして、昂然と近づいて來るのです。

『オツ！　親分！』

六と、吉、思はず叫けぶのを、爲助は、

『しツ！』

と、抑へて、じツと透して見て――

『吉、六、いよ〳〵大事の場だ。だが、いゝ足場だぞ。高札下の番所に、でえぶ土地の仲間が揃つてゐた――逃しツ子はねえ。ソレ、散れ！』

近づく浪人を、たしかに日下部伊三次と睨んだ三人、目立たぬやうに左右に分れ、眞中を行くのは爲助――いづれも、ふところの十手をつかみしめてゐるのです。

伊三次は祇園のさる旗亭で、同志と一酌を汲んで、このごろ身を潜めてゐる木屋町のある家への歸り路――豪放な性とて、八方四方、敵だらけの京のまん中を、深夜とは言へ、小うたひを口ずさみつゝ、悠々と遣つて來ます。

行き違つたと、思ふと、爲助――

『御用だ！　日下部！』

十手で後頭部を狙つて打つてかかつたのを、パツとかはして、利腕をつかまうとしたとき、左右から、飛鳥のやうに飛びついて來た吉と、六――

『御用！』

『日下部、御用！』

と、しがみつく。

伊三次は、左の親指で、鯉口をプツツリ切つたまま、まだ拔かずに、

『蟲ども、退け。さもなくと踏みつぶすぞ！』

と、カツと睨む。

が、爲助たちは必死です。

『何を！　見忘れたか日下部、三島では見のがしたが、今度こそ離さぬぞ！』

爲助が、さう叫けぶと、伊三次も、思ひ出したと見えて、

『フーム。昔なじみか、さうか。』

と、笑つて、

『性懲りのない奴！　來い。』

と、ズーンと、吉が打ツつかつて來る。引ツぱづして、蹴仆すと、その足首に、爲助青鬼が、ビユウと投げた投げ繩、蛇のやうにからみ付いて、ぐーツと引ツ張られてダ、ダ、ダとよろ

めく。途端に六が飛びかかつて引き倒す。

油斷はなかつたのですが、時の表裏――伊三次ほどの豪傑も、身の自由を奪はれて、たゆたふとき、ワーツと押して來たのは、橋上に捕ものがあると見て、助勢に押して來た目明し仲間――が、日下部伊三次、刀を拔きかけて、止めて、カラ〳〵と笑ひました。

『放せ、同道する。もう用ずみのからだだ――無益の殺傷は見あはせるぞ。』

陷穽に落ちた獅子のやうに、觀念の目つきも和らかに、双刀を捕方に渡して、しづかに歩み出す伊三次でした。

× × ×

日下部伊三次、曠世の偉志を抱いて、一身を網乘物に押し込められ、東海道五十三次を、江戸に送られ、傳馬町大牢浪人溜へと禁錮されました。

その當時は、名だたる安政の大獄、天下の志士義人を數限りもなく狩り立てたので、さすがの大牢も、はち切れる程の滿員でした。只さへ世にもいぶせく、いとはしい牢內の、不潔さ、胸惡さ、言ふばかりもないのですが、その中に悠々自適――

君がため、沈むひと屋はもろ共に

大南洲と大奈翁

『美談逸話集』いよ〳〵大好評！

見よ！東西古今の史談實話より選りに選つた珠玉の名篇！
何れもピツタリと身の引緊る感激の逸話、修養處世の活指針

弟を感奮させた西鄕隆盛の大度、李鴻章をギヤフンと參らせた小村壽太郎の機智頓才、或は『我を遮るアルプスあらんや』と豪語した奈翁の膽略、其他西園寺公望の氣概、新門辰五郎の意氣、新井白石の友情等々、實に三百二十餘篇。悉く感動感激の名篇。日常の話材に、講演の資料に、處世修養に、萬人必讀の好著として大好評！　これ程面白くて爲めになるものはないと、讀者眞に感嘆！　是非御一讀を乞ふ。

全國書店にあります。定價一圓三十錢（送料十二錢）大日本雄辯會講談社發行（振替東京三九三〇）

玉のうてなの心地こそすれ

×

と、所懐を三十一文字に托して、朗々と口吟しては、ともすれば憂欝な想ひにとざされ勝ちな同志をはげましたのでした。

そして、何度となく白洲に引き出されて、割竹、抱石の責苦さへあたへられるのですが、秘事の內容、同志の動靜については、もとより口を閉ぢて開きませぬ。

たゞ、いつも、烱々たる目で、奉行職を睨んで、言ひ放つ言葉は次のやうなものなのでした。

『貴殿方は、この伊三次をとらへて、武士に繩目の恥ぢをあたへ、庭上に跪坐させ、あまつさへ拷問の苦痛をすら加へるが、どのやうな了見方か、拙者にはわからぬ。拙者は舊主にも見捨てられた浪々の身、しかもなほ且つ、この日本國の前途を憂へ、皇室の式微をお歎き申し、外夷の侮にいきどほりを發すればこそ、身を粉にして多少の働きもいたした。しかるに、貴殿方は、柳營の重職に坐して、榮耀榮華、君寵を辱うしてをりながら、この國家大事の場合に、安閑として舊規に拘泥し、天下の志士をとらへて言ふべからざる屈辱をあたへて得々たるは、そもそも、人の皮着た、犬か、狼か！一たび天朝御威光を恢復しなば、貴公等こそ砂利をつかんで慚愧後悔し、斬首臺上號泣悲鳴するを見るだらうが、拙者としては、一足お先きに地獄にまゐり、居場所をあけてお待ちしようよ』

平然として、かく言ひ放つのを聽くのみで、何回となく訊問も、結局は當局が却つて面罵の恥辱を浴びるにすぎませんでした。

『日下部か――あれは苦手じや。』

役人どもが、噂が出ると、いつも苦笑したといふ傳說がのこつてをります。

ところが、これほどの日下部伊三次、牢內蟄居があまりに長かつたためと、すでに一生の大願を成し遂げたといふ安心も出たためか、精神に平衡を缺いて病患に仆れたのは、世にも惜しむべきことと言はねばなりません。時に安政六年十二月十七日。

× × ×

ああ、見よ、英雄、骨を埋むる古河の西福寺――亂塔、苔蒸して、一基の石ぶみ、訪ふ人も稀れに、千草に空しくうづもるるを見るのみ！

布衣の身を以つて遂に宮廷を動かした英傑兒、魂魄、この世にあつてこの昭和の大時局を見なば、そも、いかなる感をなす。

（この項をはり）

次號は『桂小五郎流泊篇』、かの明治三傑の木戸孝允が、青春王事につくして、ある時は身を乞食となし、ある時は商買にやつし、東奔西走、論落悲慘をきはめた時代を書きたいと思つてゐます。愛讀を乞ふ。（一月十一日夜）

護身用時計
黄金狂時代
池部鈞
(一)
甲『たいした黄金鎖を持つて居るネ、時節柄、素晴らしい値打のもんだぜ』
乙『ウフ……親爺の形見でネ』
(二)
乙『ジヤー此の時計は、どうだい』
甲『十八金両蓋、ウムーーこれだけありやあ飲めるなー』
乙『さうさ、両方で百両は確だらう』
(三)
甲『オイ、時に今何時だネ』
乙『チヨツト待つて呉れ、實は此の時計、始終止つて居るんでネ』
甲『ソンナ時計役に立たんぢやないか』
乙『何しろ、明治三十八年に買つたんだからなーー其の代り、まさかの時には役に立つ、護身用時計だよ』
乙『ジヤー早速役立てて見てくれ、附合ふから』

漫畫講談

幸福な男？

矢崎茂四

門前市をなさず
門前雀羅
10
オヽ!
一度法廷に立つてシャベツて見たい
11
希望遂に實現
但し家主より滞納家賃請求の訴訟の被告として……
12
結局行商人に落ち
13
坑夫にまで成下り
14
炭坑爆發で再び重傷
15
遂にルンペン
16
意を決して滿洲落ち。だがその途次世の無情をしみ〴〵感じ、果ては投身自殺
17
處が海底でリユウリック號を發見
18
金塊を引上げて大成金
19

心易かつた唐人お吉

船田みよ談
野村愛正記

談話者船田みよ刀自は、下田に阿波屋旅館と船田寫眞館とを經營する萬太夫氏の母堂。三百年來の家柄。本年八十歳。眞に唐人お吉を知る唯一の人で、病床に筆者を引見して快く語らる。美しく飾られた物語の唐人お吉と違り、人間唐人お吉の全貌が窺はれる。在來の文献に新材料を提供すべき貴重な話である。

足袋が十一文

年老るとだん〱ものを忘れツぽくなりましてな。訊いて下され、憶えてゐるだけはお話いたしますだよ。

左樣さ、五十六十の人なら誰でも年取つてからのお吉さんは知つてゐますが、玉泉寺の唐人（ハリス）の許に通つた頃のお吉さんを覺えてゐるものは、下田でももう一人か二人しか殘つてゐますまいよ。わたしはお吉さんとは特別懇意にしてをりましたのでな、度々髪も結つてもらひましたし、この家に嫁入して來た時にもお吉さんに結つてもらひました。

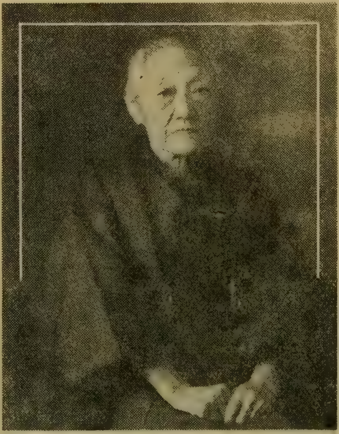
えゝ、とても器用な女でしたよ。髪も結へば、機も織る、縫物も出來るといつたやうにな。ずツと後の話ですが、鶴松さんと夫婦になつてからは、二年ばかりは髪結ひを商賣にしてをりました。

お吉さんの生れた家ですか？　さア、はつきりは覺えてをりませんが、姉さんのおもとさんの亭主が建具屋をしてをりました。——（戸籍簿には齋藤市兵衛長女、齋藤キチ、天保十二丑年十一月十日生とあり）——相當やつてゐたのでせう。

なんでも子供の時から人一倍勝氣な女でしてな、一錢もする大饅頭を抱込むほど買込んで來て、惜氣もなく犬にくれてやつてゐたといひますよ。

藝者に出たのも、深い理由はないでせう。その當時、この下田は上方と江戸との間を通ふ船繫りの港でしてな、とても繁昌してをりました。で、小唄の一つも歌へて、三味線でも習つた娘は、誰でもみんな藝者や客商賣をはじめるといつた有樣でした。お吉さんもやつぱりそんなことから藝者になつたのだと思ひます。

えゝ、それア震ひつきたいほどいゝ聲でした。新內が得意でな。唐人お吉なんて名は後で附けたもので、下田では新內お吉と呼んでをりました。



船田みよ刀自

顏立は美人の方でしたよ。色は淺黑かつたですが、長い富士額で、すこし反齒でした。背丈は五尺二三寸もありましたでせうか。男のやうな大女で、十一文の足袋をはいたさうです。そして酒が好きで〳〵、お俠で、どちらかといふと若い頃はすこし阿婆磨れの方だつたらしいですな。

愛人はなかつた

はじめて黑船が下田にやつて來た時は、とてもえらい騷ぎだつたさうですよ。わたしは五つか六つの時なので、はつきりとは覺えてをりませんが、恰度、わたしの母親は機を織つてゐたさうです。すぐとわたしを背負つて、いつでも逃出せるやうに仕度したといひます。

いゝえ、その時ばかりではありません。後でも、唐人が町を通ると、どの家も晝間でもばた〳〵戶閉めをして、奧に隱れて息を殺してゐたものださうです。

唐人についてはいろ〳〵面白い話があります。いつでも靴ばかり履いてゐるので、素足といふものを見たものがない。靴にはあの通り踵が附いてゐます。それで、唐人の足にはきつと踵

がないのだ、だから代りに靴に附けてあるのだといひあつたものですよ。

さう〳〵、まだこんな話もあります。なんでも、唐人は、とても花が好きだといふことでしてな。ある花作りの好きなお爺さんが、畑に澤山作つてゐたんで、盗まれては大變だといふ譯で、眼に着かないやうにすつかり菰圍ひをせうとしてゐたんですよ。そこへひよツくり唐人がやつて來て、案の定、花をくれいといひ出したんです。お爺さん、おツ魂消て……ほゝゝゝ、腰を抜かして這つて逃げだしたといひますだよ。伊勢町とかのお爺さんとかいひますがね。

その唐人達が柿崎の玉泉寺に落着いてから、さア日本の女を世話しろといつた譯ですな。世話をしないと鐵砲を打發すといつて嚇したといふ話を子供心に覺えてをります。そこでお吉さんに白羽の矢が立つたんです。

時の與力伊佐新十郎といふ方が、日本國家のためだといつてお吉さんを口説落したんですつて？ そんなことはわたし共には詳しくわかりませんけれど、そんなにむづかしい掛合でもなかつたでせうよ。後々でお吉さんから何も聞いてゐませんから。たゞ、お吉さんは體格も立派だし、多少阿婆摩れだしするので、あの女ならといふことになつたのではなかつたでせうかね。

その頃、お吉さんに、浮いた話はなかつたかつて、それア十八にもなつて藝者をしてゐるほどですもの、滿更ないこともなかつたでせうが、泣いて辛いわかれをしなければならんほどの愛人はなかつた筈です。えゝ、これアはつきりいへます。

鶴松さんとの話なんか、まるきり嘘です。鶴松さんといふ人はとても堅氣な辛抱人で、船大工でしたが、傳五郎さんといふ親方のところで、二十五年も何一つ間違ひもなく勤上げたといふくらゐです。後にはお吉さんと夫婦になりましたが……第一、鶴松さんは藝者遊びなぞをする人ぢやない。幼馴染といつても、生れは同町内ではありましたが、遊友達でもなんでもありません。これは、二人が夫婦になる時、わたしの家でもいろ〳〵面倒を見てあげたのでよくわかつてをります。

このお吉さんがハリスの許に通ふことになる約束が出來たについて、支度金が二十五兩下りました。その書附が今でも下田の町役場に殘つてゐるさうですな。では、金でも欲しかつたからかつて……別に親兄弟が病煩つてゐた譯でもなし、わかりませんな。わたしなぞの考へるのでは、結局、お吉さんはあの氣性でせう。ほかに誰も承諾するものはなし、お前さんでなくてはといはれたんで、よしそれぢや行つてやらうと手輕に引受けたのぢやないかと思はれますよ。

玉泉寺通ひ前後

お吉さんが玉泉寺のハリスの許に通つたのは、十八の年から十九にかけてまる〳〵一年でした。夕方出掛けて行つて、朝歸つて來たのです。

その頃は、まだ、下田の川には橋がなくて渡舟でした。山駕に乘つて……えゝ、山駕です。お供なぞはあるものですか。駕のまゝで渡舟を渡つて、玉泉寺へと搖れながら行つたものです。わたしも度々見掛けました。

着物は、たいてい細かい、二筋か三筋の縞物で、帶はきつと黑繻子の腹合です。それをぎゆつと短く結びます。いゝえ、これはお吉さん一人でなく、當時の下田藝者の服裝だつたのですよ。

でも、その頃は、誰も唐人を獸かなんかのやうに思つて、人間並みに考へなかつたことでせう。お吉さんもうつかり承諾してハリス通ひをはじめたものゝ、どうも評判がよくない。何かとみんなが蔭口を利きます。それが自然耳にはひつて、流石氣になるとみえまして、

行かうか柿崎、戻ろか下田
こゝが思案の間戸ケ濱

なぞと、あの美しい聲で琉球節を唄ひながら揺られ〳〵て行つたとかいひます。間戸ケ濱といふのは、下田と柿崎との間にある今の竹ケ濱のことです。

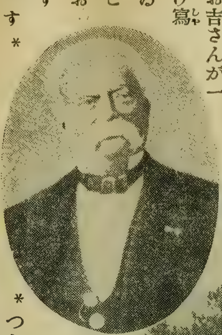
同じ頃、やはり玉泉寺のヒユースケンといふ唐人の許へ、お福さんといふ藝者が通つてをりました。このお福さんは、ぽつてり肥つた色白の、愛嬌のある、やさしい女でしたが、お吉さんと違つてあんまり有名にはなりませんでしたな。

お吉さんの玉泉寺通ひは一年で終りましたが、その後でもや

つぱり藝者をつゞけてをりました。そのうち、坂下（町名）の御影屋といふ船宿に出入りする船頭さんと關係が出來たとやらで、男の子を生みました。勘といつてゐましたが、大きくならずに死にましたよ。

それから三島のかねやといふ家でも暫く藝者に出てゐたことがあります。横濱にも行つてゐたやうですが……この横濱に行つてゐた時ですよ、お吉さんが一生に一度だけ寫眞を撮つてゐるのは。ところが、おひおひお話しますが、その後、す＊

＊つかり貧乏してあちこち轉々して住む家もなくなつたためでせう。話に聞いただけで一枚も殘つてゐないのです。わたしの家は明治五年から寫眞屋をやつてをり、お吉さんとはあんなに心易くしてをりましたので、きつと一度くらゐは寫してあるに違ひないと考へていろ〳〵探してみましたけれど、やつぱり見當りませんでした。ですから、これほど有名になつた唐人お吉のほんとの面影といふものは、殘念にも何一つ殘されてはゐないのです。



（我國最初の領事館となつた玉泉寺とハリス）

玉泉寺通ひをやめてから京都に行つたことがあるかつて？　いゝえ、そんなことは決してありませんよ。今お話した通り、ずツと引きつゞいて下田で藝者をしてをり、三島と横濱だけには行きましたが、またまもなく歸つて來ました。下田にゐなかつたのはこの二度きりです。

眞面目なひと頃

三十をすぎた頃、さきにお話したやうに船大工の鶴松さんと正式に夫婦になりました。坂下といふところの、今は税務署のある高い場所に家を新築して、暫く一緒に暮しました。

ですが、鶴松さんは堅い一方、お吉さんは一口にいへばあまり評判のよくない女。みんなは夫婦になつても旨く行くかなと

噂しましたが……これもやつぱり勝氣のせゐでせう。髪結ひを商賣にしだしたのもその頃で、夫婦共稼ぎで立派にやつて行きました。

ほんとに、お吉さんの一生の間で、この頃ほど堅氣に、眞面目になつたことはなかつたでせう。鶴松さんの苗字は河合お父さんは又五郎といふ人でしたが、もう兩親共亡つてゐました。でも、不幸に、二年か三年かの短い間で肝腎の鶴松さんが死んでしまつたものですから、またお吉さんは水商賣の方へ戻つて行つたものですよ。

一時、お吉さんは、安直樓といふ料理屋をはじめてゐましたが、これが失敗。その後で宇久須屋といふお茶屋（註、下田名物の船頭衆相手の女の置屋か）をやりだしましたが、また〳〵駄目で、たうとうすつてんてんになつてしまひました。

その頃のこと、わたしとしては忘れられない思ひ出があります。ある願事があつて、お吉さんをはじめ、妹のおひささん、ほか二人の女にわたしも加はつて、韮山の代官所に出掛けて行つたことがあります。袷に羽織の暖い春さきでした。韮山までが三晩泊り、山駕に搖られ〳〵て……池ノ町の神鳥屋さんといふのが下田の町役人でしてな、その人に連れられて行つたのです。お吉さんも、神鳥屋さんも酒が好き、泊り〳〵で大騒ぎをしながら行つて、歸りに沼津をまはつてはじめて人力車といふものに乗つて子供のやうに燥いだものです。

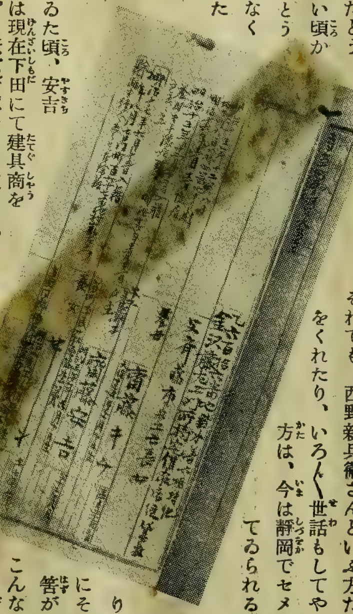
悲慘なその晩年

料理屋やお茶屋に失敗してから後のお吉さんは、ほんとに氣の毒でした。することなすことみんな喰交ふので、自棄も手傳

つたのでせう。金があればあるだけ飲む。あちこちに不義理は重むし……鶴松さんの親方の傳五郎さんなぞも、もうとツくに寄附けなくなつてゐます。誰一人眞面目に相手にするものもなくなりました。

それでも、足腰の立つうちはまだどうにかやつて行つてゐましたが、若い頃からの豪酒が祟つたのでせう。たうとう中風が起つて、半身が殆んど利かなくなりました。さア、幾つの年だつたかはつきり覺えてゐませんがね。

かうなるといよ〳〵慘めです。世話をする肉親のものはみんな死んで一人もなく、その前、たしか宇久須屋といふお茶屋をやつてゐた頃、安吉さんといふ養子――（註、この人は現在下田にて建具商を營みつゝあり。明治十六年十二月十二日養母齋藤キチ隱居に就き戸主となるとあれども、何故か今では齋藤姓を名乘らず）――と、おせんさんといふ養女とを貰つてゐました。でも、おせんさんの方はまもなく實家に歸り、安吉さんはまだ若いのと、よそに弟子入りをしてゐたのとで、面倒を見ることが出來ません。しまひには住むに家もなく、知邊をたよりにその日〳〵を泊り歩くといふほどまでになりました



（寫眞はお吉の戸籍謄本）

いゝえ、まさかね。門に立つといふほどではありませんでしたよ。

それでも、西野新兵衛さんといふ方だけはそのお吉さんに米をくれたり、いろ〳〵世話もしてやられました。その家の方は、今は靜岡でセメント會社とやらをやつてゐられるさうです。

俵で貰つた米を突返したことがあるかつて？　そんなことはありませんよ。第一、一度にそれほどくれる人のある筈がないと思ひます。

こんなことで、お吉さんもだん〳〵後生心が起つたのでせう。死ぬ半年くらゐ前から、岩下の天理敎會へ、毎日々々熱心に通つてをりました。ひどいちやん〳〵こを着てな、片足を引擦り〳〵、杖に縋つて行つてゐました。

そのうち、どうして工面しましたか、入湯でもすればすこし

は病氣の方もよくなるだらうといふので、古奈溫泉に出掛けて行きました。行きには、たしか養子の安吉さんが連れて行つて、殘して歸つて來たのです。そして金がなくなつて、一人で下田に歸つて來ようとして、途中で川に陷つて亡つたのです。

このお吉さんの亡つたについて、今では、世の中をはかなんで飛込自殺をしたのだとかいはれてゐるさうですが、その時は誰もそんな風には思つてゐませんでしたよ。何しろ身體の自由が充分利かないのでせう。道は川添ひだしするので、誤つて轉込んだのだらうといはれてをりました。

死骸はその翌日、通行人に見着けられて、碌すツぽお葬式もされずに土葬のまゝ寶福寺に埋められました。死骸の浮んでゐた淵は、もとは門栗ケ淵といふのですが、今ではお吉ケ淵といはれるさうですな。明治二十三年三月二十七日、恰度お吉さんが五十で、今年が四十四年目です。

そのお吉さんの墓が暫く見着からなかつたですつて？　いゝえ、そんな筈はありませんよ。死骸を運んで埋めた人が、現在まだ生きてゐるのですから……。

（をはり）

さしゑ——鴨下晁湖

武藤全權と鄭總理

建國一周年、絶好の記念寫眞帖！

一九三二年三月一日！突如獨立を宣言した新興滿洲國は今や建國一周年を目前に控へて感慨無量、この光輝ある歷史を飾る新國家の陣容、人情風俗、無盡藏の大資源並びに擧國一致、幾多の尊き生命を賭して東洋平和の爲に力戰奮鬪した皇軍の大活躍までが一目で判る、これこそ眞に子々孫々に傳ふべき記念大寫眞帖、全日本の御家庭にぜひ一本はお備へ下さい。

滿洲事變 上海事變 新滿洲國寫眞大觀

△定價 一圓五十錢 送料二十錢 本社發行 （振替東京三九三〇）

長篇現代小説

東京哀歌

加藤武雄

山川秀峰畫

女性の敵

襟子の思ひ出はつゞく——。

重田が、女ばかりの家にはひつて來て、いかにその暴虐を逞しうしたか？　不思議な魔力で完全に絹子を征服し切つた重田が、どんなに非人間的な冷酷さで絹子を蹂躙したか？

絹子達姉妹には、相當の遺産が讓られてゐたが、それは一二年の間に重田の遊蕩費となつて消えた。株券のやうなものまで、金に代へて全然使ひ果し、家邸などに手をつけてそれも蕩盡して了ふと、着物とか裝身具とか、そんなものをさへ强奪するやうにして持出す始末だつた。大酒飲みで、しかも酒亂の癖があつて、夜遲く醉つて歸つて來るとは、何かと文句をつけて

は絹子を苛めはじめる。虐待狂とでも云ふのであらうか？　殆ど、何の理由も無しにかよわい者に暴力を加へて、暴力そのものを享樂するといふ風だつた。醉へば醉ふ程、青白くなる重田の、きら〳〵と冷たい眼をきらめかして、薄い唇を引歪めたその顏は、さながらに青鬼のそれだつた。その青鬼に責められて、絹子はみじめに瘦せ衰へて行つた。

「姉さん。」

と見るに見兼ねて襟子は云つた。

「逃げませうよ。何處かへ逃げて行きませうよ。斯うして居たら姉さん殺されてしまつてよ。」

「駄目よ。何處へ逃げたつて、あの男は屹度追ッ蒐けて來るわ。私はもう諦めてゐるの。」

前號までの梗概

珈琲店オリオンの女給襟子は、密かに伴廉吉を戀うてゐた。が其廉吉には、奈々子と呼ぶ忘れ難なの人がある。しかも今や此奈々子の背後には、恐しい惡魔の爪が迫り掛つてゐるのだ。柴田と名乘つて彼女に近づいた一人の男。あゝ此男こそは誰あらう、嘗て襟子一家の幸福を滅茶苦茶に蹂躪した獸人であらうとは！或夜のオリオンで此二人の連立つ姿を見た襟子は、愕然と恐れ、悚然と顫へ、思はずも過ぎにし苦い回想を、己が腦裡に呼び醒すのであつた。

姉の絹子はかう云つた。その鬼のやうな男の不斷の虐待を、一つの宿命として、不可抗的な運命として受取つて居るかに見えた。そのうちに、絹子は病氣になつた。苦惱が釀し出したその胸の患ひが、日に日に重つて、床につききりになつてまで、重田は尙ほその虐待の手をゆるめなかつた。そして、重田は、絹子に代る可き第二の犧牲として、その毒牙を襟子に向つて鳴らしはじめた。重田の、鋼鐵のやうに強い冷たい手が、幾度、襟子の肩に伸びかゝつた事であらう。高い叫びをあげながら、半夜の床を蹴つて戸外へ飛び出すやうな事も屢々と云つていいほどだつた。

「私が殺してやる！　この男を殺して私も死ぬ！」

もう起きあがる力さへ無くなつた絹子が、剃刀を手

にして、重田にをどりかゝるやうな事も一度ならずあつた。

『逃げてお呉れ！』

と、今度は絹子が云ふのであつた。

『襟子さんは、るり子を伴れて、何處へでもいゝから身を隱してお呉れ。こゝにゐるとどんな事になるかも知れ無いから。お前に、もしかの事でもあつたら、私、それこそ、死んだお父樣お母樣に對しても申譯が無いから。早く、こんな地獄の中から逃げ出してしまつてお呉れ。』

とは云へ、瀕死の病人である姉を、此の怖ろしい地獄の中に見捨てゝ、自分だけ脱け出す事が何うして出來よう。逃げろと云はれたつて、逃げられるものでは無い――。

『だつて、姉さん、私が出てしまつたら姉さん一人で――。』

『私はもうあきらめてゐるの。どうしたつて、もう助かる身體ぢやあ無し。あんな魔物見たいな人間に見込まれたのが私の不運なの。私の不運は構は無いけど、お前にまでこんな苦勞を掛けて、何と云つてお詫びをしていゝか判らないの。いゝえ、みんな私が悪いのよ。私がもう少ししつかりしてゐたら、こんな事にはならなかつたのに――。』

と絹子は、襟子に取縋つて詫びて、逃げて呉れと繰返した。

『逃げるなら、みんな一緒に逃げませう。ね、姉さん。姉さんも一緒に此の家を出ておしまひなさいな。』

『私は駄目。私はいゝから、私に構はずに、あんただけで――あんたとるり子だけで――。』

何と云はれても、姉一人殘して逃げ出す氣にはなれ無かつたが、併し、このまゝで居たら、身が護り切れ無くなると知つた時、襟子は涙を揮つて出て行かなければならなくなつた。

るり子を伴れて家を出ようとする時、絹子は手箱の底から、一冊の預金帳を取出して襟子に渡した。

『これだけは、あんた達の爲めに隱して置いたのよ。いくらも無いけど、でも、これだけあれば當分何うにかなるでせう。るり子を賴んでよ。これからあんたも大變だらうと思ふけど、何處へでも行つて、あの男に見つからないやうにして――いゝえ、私の事は心配しなくてもいゝのよ。私は構は無いから、あんただけは――あんただけは――。』

襟子はとう〳〵るり子を伴れて家を出た。相談相手になつて呉れる人も無ければ、賴りになる身寄も無かつた。都市漂泊者としての襟子の多難な生活は此の時からはじまつた。

絹子が死んだのは、襟子が家出をしてから二月ばかり經つてからだつた。家出をしてからも、重田の不在を窺つては時々訪ねはしたが、その臨終には會へ無かつた。驅けつけた時は、もう眼を瞑つてゐたが、その枕元には一挺の西洋剃刀が投げ出されてゐた。物を掴んだかたちの儘に硬ばつた手には、少し血が附いてゐた。

『何うしたのです？』

と詰り問うた襟子の前に、相變らず酒氣を帶びた重田が、口角を痙攣らせて物凄く笑つてゐた。

『何うしたのです？ 姉さんは手に怪我をしてるぢやありませんか？』

襟子が重ねて詰ると、

『驚いた女だよ。自分がもう助からないと思つたもんで、俺に一緒に死んで呉れ――心中して呉れと云ふのさ。俺が可厭だと云ふと、いきなりこの剃刀を持つて飛びかゝつて來て、すんでの事に俺は殺されるところだつたよ。いや、俺も實際びつくりした――。』

重田は、さう云つてにや〳〵と笑つた。

『まあ！』

襟子は、まざ〳〵と苦惱の色を刻みつけた姉の死顏を眺めた。姉は、此の男を殺して死ぬつもりだつたのだ、此の男を殺して、自分の爲めに、後の憂ひを除くつもりだつたのだ――襟子には姉の氣持がはつきりと判つたのだつた。

襟子は、投げ捨てゝあつたその剃刀を取上げると、それを帶の間に入れた。もし、重田が自分に對して理不盡の振舞に出たら、これで刺し殺してやるまでだと、堅く覺悟を定めたのだつた。

襟子は、今でもその覺悟でゐる。その剃刀は、今でもちやんととつてある――。

萬一の場合の覺悟は然うと定めて、襟子は此の三年の間、重田の執拗な追跡を逃げ續けてゐた。全く、席の暖まる間も無か

つた。一方、頑是も無いるり子を抱へて生活と鬪ひながら、まるでお尋ね者か何かのやうに、懼えながらをのゝきながら、此の東京の街々を、さまよひ歩いてゐた襟子であつた。

その重田なのだ。るり子の子供心にさへ、鋭い恐怖を刻みつけて、重田と云へばすぐに色を變へるほどの怖ろしい男なのだ。

その重田が、二年振に自分の前に姿を現したのだ。

しかも、重田は、あの奈々子といふ女性と共にその姿を現したのだ。

あの奈々子といふ女性――勿論先方では自分の事など知らないであらう。おもてむき知り合つた事も無ければ、一言口を利き合つた事も無い。他人と云へばあかの他人だ。あの女性が何うならうと、それが自分にとつて何だらう？ と、さう考へれば考へられる。

廉吉――。自分がこんなにも思つてゐる、慕つてゐると知るや知らずや、いつもたゞ、懶げな微笑の外は見せて呉れ無い人、怨めしいと云へば怨めしい人だ。その廉吉の戀人なるあの奈々子といふ女性、謂はば自分の戀敵とも云ふ可き女性が、よしや、どんな不幸に陷ちようと、それは自分にとつて寧ろ歡びでなければならない筈では無いか？ ――襟子の一つの心はさう囁く。

だが、もう一つの心は、

『いゝえ！』

と強くそれを打消す。

あの女性は、廉吉の愛してゐる女性なのだ。あの女性を不幸にする事は廉吉を不幸にする事だ。廉吉を不幸にする事――それは自分にとつて何よりも堪へ難い事なのだ。

さうだ。廉吉を不幸にしない爲めには、あのやさしい人の心を激しい悲みに傷らせぬ爲めには、あの奈々子といふ女性をあの怖しい惡魔の手から救はなければならない。

いゝえ、廉吉の爲めに――といふ事は外にしても、同じ女性として、あの女性が見す〳〵あの殘虐な狼の顎にかゝるのを見て居られようか？ 憎む可き女性の敵なるあの男から、奈々子を救ふ事は、同性としての義務では無いか？

今のうちだ。あの様子では、未だ奈々子はあの男の手に落ち切つては居無い。今のうちならまだ救ふ事が出來る。

だが、一體、何うしたら救へるのだ？

自分自身怖ろしさに逃げ廻つてゐる身では無いか？――その男に見つけ出される事を何よりも惧れてゐる自分が、どうしてその男の手から奈々子を救ひ出す事が出來るだらう？

さう思ふと、胸底からおのづから深い嘆息が衝きあげて來る

のだつた。

が、しばらく經つた時、襟子は寢床の上に起きあがつて、瞳を闇に瞬りながら、斯う心の中で繰返して居る自分に氣がついた。

『いゝえ。どんな事でもして、屹度、あの人を救ひ出して上げるわ！ 屹度、屹度、救ひ出して上げるわ！』

魔手

その夜、奈々子が寓に歸つたのは、襟子が、床の上に起きあがつて、その決心を繰返してゐた丁度その時刻だつた。

『遲かつたのね。今夜は――。』

先に歸つて居た二三子は、少し詰るやうな眼附で云つた。いつも遲くも十二時迄には――だから、大抵の場合自分より先に歸つて來てゐる奈々子なのに、今夜はもう十二時を三十分も過ぎてゐる。

二三子は、穿鑿的な眼で、奈々子の樣子を打戍りながら、

『ずつとお歸りになつたの？』
『えゝ。』
と、奈々子は答へたが、すぐに、
『いゝえ。』
と云ひ直した。
『何處かへお寄りになつたの？』
『えゝ。』
惡戯を見つけられた時の子供のやうな表情が、ちらと奈々子の口元を掠めた。
『何處へお寄りになつたの？』
二三子は、追究した。いつも、姉らしい心遣ひで奈々子を庇つて吳れる――それだけに監督者としての嚴しさをも有つてゐる二三子だつた。
『私、今夜は、ダンスホオルへは行かなかつたのよ。すツぽかしちやつたの？』
『あら、どうして？』
『入口のとこで、會つちやつたのよ。』
『誰に？』
『一番會ひ度く無い人間によ。わかるでしよ。これだけ云つたら――。』
『一番會ひ度く無い人間ツて？』
『あら、わからないの？ 樺山によ。前にお話したでせう？ あの、別れた男――。』

『然う？』

と、二三子は好奇の表情を露はにして、

『それで何うしたの？』

『呆れたもんよ。女と一緒なの。女と一緒に踊りに來たの。でも、先方ぢや、私には氣が附か無かつたらしいの。氣がつか無いうちに、私逃げ出しちやつたの。』

『私なら飛び附いて引搔いてやるのに——あなたは矢張お孃樣ね。』

と二三子は笑つたが、

『それで、今まで何うしてゐたの？』

再び嚴しい眼眸になつた。

『銀座へ行つたのよ。銀座へ行つて遊んで來たの。』

『今まで？　——一人で？』

虛言を吐く事を知ら無い奈々子は、一寸答へ惑ふやうにしてから、

『一人ぢや無いわ。お客さんと一緒に行つたのよ。』

『お客さんと、お客さんて云へば、勿論男性でせう？』

『もち、男性よ。』

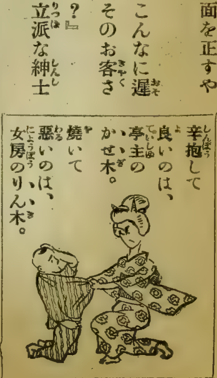
奈々子は無邪氣に微笑して見せた。

『いけないわねえ。奈々ちやん！』

二三子は、屹と面を正すやうにして、

『男の人と一緒にこんなに遲くまで——一體、そのお客さんてどんな人なの？』

『いゝ人なのよ。立派な紳士なの。』



『紳士の皮を着た狼が澤山居るのよ。それでその人と一緒に今まで何をしてゐたの。十二時過ぎまでも、一體、何處をほつき歩いてゐたの？』

『珈琲店へ行つたり何かして——。』

『珈琲店だつて、今時分までありやしないわ。』

『その人のおうちへ行つたのよ。』

『まあ！　家へ行つたの？』

二三子は、呆れたやうに眼を瞬つた。

『大丈夫よ。二三子さん。心配し無くてもいゝのよ。その人、本當に立派な紳士なの。私をね、一人の女性として尊敬して呉れてるの。いやな事なんか些とも云やしないのよ。私の事、いろ／＼と心配して居て呉れるの。』

奈々子は、早口に、一生懸命に辯解した。

『然うぢや無いのよ。あなたは誘惑されかゝつてゐるのよ。――いゝえ、その男がどんな男かつて事位、私想像でわかるわ。駄目よ。あんたは欺されかゝつて居るのよ。あなたツたら、まるで子供なんだから――。本當にしつかりしなきや駄目よ。』

『そんな人ぢやあ無いのよ。そりや、私だつて大體どんな人ぐらゐは見當が附くわ。未だ話さずに居たけどね、その人、私を助けて呉れたのよ。うるさく附き纏ふ男があつて、私が困つてゐた時に、その人が私を助けて呉れたのよ。立派な人だわ。私今夜隨分長い事話してゐたんだけど、いやな事なんか是れツぱかりも云やしないのよ。男性らしい、さつぱりとした人なのよ。そのうち、私、あんたにも紹介するわ。會つて御覽になりや、あんたにだつてどんな人かツて事がわかるわ。』

『そんな事云ふのが、それがもう誘惑されかゝつてる證據なのよ。』

『あら、そんなに疑つたらきりが無いわ。』

『男性ツてものはね、どんなに疑つても、疑ひ過ぎるツて事は無い筈よ。あんただつて、その事ぢや隨分苦い經驗を嘗めてゐる筈ぢやあ無いの？ その樺山さんて人と、そんな事になつたのも、つまり、あんたが男性ツてものを疑は無過ぎたからぢやあ無いの。ね、然うぢやあ無いの？』

『そりや然うだけど――然う云はれると私困つちやふけど――。』

と、奈々子は、餘りぎゆう／＼とやりつけられたので、氣弱く涙含んで了つて、

『でも、樺山なんかとは違ふわ。樺山のやうな輕薄な男性ぢや無いわ。私の境遇に同情して呉れて、心からの親切で――。』

『そんな親切なんかあてになるもんですか？』

二三子は、奈々子の言葉を中途で叩き伏せて、

『私、斷言するわ。あんたは欺されてゐるのよ。誘惑されかゝつてゐるのよ。』

『だつて――。』

奈々子は、すつかり悄げてしまつたが、併し衷心酷く不平だつた。あの柴田といふ人が、どうしてそんな惡い人だらう？

奈々子は今夜、銀座からの歸りの自動車の中で、ふと誘はれた儘に、柴田の家に立寄つたのだつた。小婢一人使つて物靜かに暮らしてゐるらしいその小さな家の、蕭洒とした洋風の客間でのしんみりとした和やかな會話は、近頃に無く愉しいものだつた。彼は始終、眼元や口元に柔かな微笑を漂はしながら、ぽつりぽつりと語つた。その思ひやりに滿ちたやさしい言葉は、春の雨のやうに奈々子の心をうるほした。問はれるまゝに、とう／＼自分の素性や、現在の境遇などに就いてざつと話すと、彼は、

いたましげな眼眸で自分を見直すやうにしながら、

『然うですか？　然ういふわけですか？』

と幾度も嘆息して見せた。あの眼眸にうそがあらうか？　あの言葉の一つ一つに籠つてゐる眞實をどうして疑へよう！——つい、うつかりと話し込んでしまつて、慌てゝ歸らうとすると自動車を呼んで一緒に乘つて送つて來て吳れたが、すべての態度は飽迄も禮讓的で、氣になるやうな言葉や振舞は些とも無かつた。

『はじめから僕は然う思つてゐたのですよ。屹度何かわけのある人に違ひ無いと。お話を聽いて見ると、矢張然うでしたね。これから僕はあなたをダンサアとしてで無く、一個の淑女としておつきしなければなりませんね。』

自動車の中で、そんな風に云つたが、事實、自分の素性を打明けてから餘計に慇懃な調子になつてゐた。

いゝえ、二三子さんが何う云はうと、あの人は立派な紳士に違ひ無いわ。品性の高い教養のある立派な紳士だわ。あの人が、いくらかでも自分に野心があるのだつたら、決してあんな風に申分無くギヤラントであり得るわけが無いわ！　奈々子は、さう心の中で繰返すのであつた。

だが、二三子は、未だこのお說教を止めようとはしなかつた。

『本當に危險だわ。ダンサアなんて一番危險な商賣だけど、殊にあんたのやうな美しい人は、人一倍危險率が多いのよ。それに、何てつてもあなたなんか未だ世間知らずよ、世間知らずのお孃樣よ。』

『あら、私だつて、そんな——。』

『いゝえ、駄目よ。私、何だかけんのんで見て居られ無い氣がするわ。ねえ、奈々子さん。』

と、二三子は一膝乘り出すやうにして、

『あんた、矢張、お宅へ歸つた方が宜か無いのか知ら？』

『それは歸り度い事は歸り度いけど——。』

『お歸んなさいな！　ねえ、こんな事してゐて、取返しのつか無い事になつたら大變よ。お父樣やお母樣も屹度心配していらツしやるわ。私なんかと違つて、あんたは立派なお邸があるんだし——。』

『でも、然うは行かないわ。お父樣は、酷く私のこと怒つていらツしやるし、お母樣は本當のお母樣ぢや無いんだし、今更、歸らうツたつて歸れやしないのよ。』

『お母樣、繼母なのね？』

『然うよ。迚も冷たい人なの。私があやまつて歸つたらお父樣は許してゐて下さるかも知れ無いけど、でも、お母樣の手前も

あるんでせう。私が歸る事は、つまりお父様を苦める事になるだけだわ。』

奈々子の言葉は次第に濕つて行つた。すつかり萎れてしまつて、肩をすぼめてうなだれてゐる奈々子の姿は、十四五の小娘のやうにしか見え無い、才氣潑剌と云つたやうな一面も昔からあるにはあつたが、要するに世間知らずのお孃樣で、心の稚さは本當に十四五ぐらゐの小娘と變りは無いのだ。――さう思ふと、二三子は、何か斯う堪ら無くいぢらしくなつて來るのだつた。

『奈々子さん。あんたの氣持、もう少しよく話して呉れない？』

二三子は、やさしい眼で抱き取るやうにして云つた。

『私の氣持――？』

『えゝ。私、あんたに訊き度い事が一つあるのよ。』

『何でせう？』

『あんた、いつか寫眞を見て考へ込んでゐた事があるわねえ。兄さんのやうな人で、會ひ度いけれど會へ無い人だと、さう云つてゐたでせう？　あの人、一體どういふ人なの？』

それは、廉吉の事だつた。廉吉――と、その名を思ひ浮べただけで、奈々子の心は悲しく濡れる。今、奈々子の胸に、此の世界中で誰よりも戀ひしく懷かしい人の事だつた。

『間違つたら御免なさい。あんた、その人の事で、何か苦しんでゐるのぢや無いの？　――會ひ度いけど會へ無いんだと云つてゐたわねえ。それは何ういふわけなの？　何うして會へ無いの？』

『事情があるのよ。こみ入つた事情があるのよ。』

『だからさ、その事情をよ。その事情を訊き度いのよ。それを話して呉れる事は出來無いの？』

奈々子は、いつまで經つても顏を上げ無かつた。

『矢張、話せ無いの？』

奈々子は、矢張うなだれた儘だつた。

『どうしたの？　あら、泣いてるの？』

二三子は、にじり寄つて、肩に手をかけて覗き込んだ。奈々子の頰には、二筋三筋、淚が靜かに流れてゐた。

救ひの手

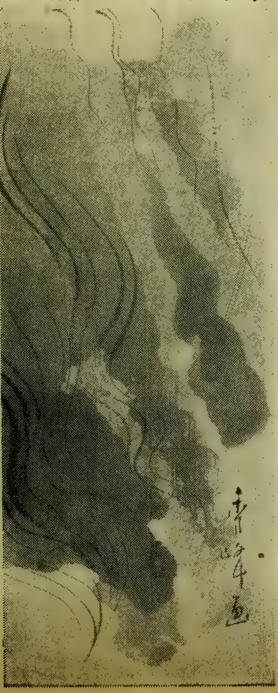
どんな事をしてでも、あの人を救はなければならない。どんな危險に自分の身を暴さうと、いゝえ、どんな犧牲を拂はうと、あの人を救はなければならない――。

襟子は、殆ど一睡も出來無かつたその夜の床から、此の堅い決心を掴んで起きあがつた。

朝になつてから、一つの問題が彼女の心に浮んだ。それは、奈々子の事を廉吉に話して置く可きか？ どうか？ といふことだつた。廉吉に話して力を協せて貰つた方がいゝ、と思つたが、しかし、どうして救ふか？ といふ方法がわからぬ以上、それを話したところで徒らに廉吉を苦める事になるとも思はれた。それに重田の事を云ひ出すのは、いかにも苦痛な氣がした。出來る事なら、自分の手だけで奈々子を救うて、默つて廉吉に渡してやり度い――さう襟子は思つた。

何よりも、もう一度奈々子に會はなければならなかつた。若しかしたら、今夜、又、店へやつて來るかも知れない――と、それを唯一つの心頼みに、襟子は、その夜、はひつて來る客の一人々々に鋭い注意を向けてゐたが、重田も奈々子も姿を見せ無かつた。

未だ外の店からかはつて來ていくらも經たない襟子だつたので、その店の客に就いては十分に通じてゐなかつた。襟子は、朋輩達に、それとなく訊いて見た。



『柴田さんのこと？ あの人なら、前にちよい／＼來た事があるわ。』

朋輩の一人が斯う云つた。襟子は、その所謂柴田が現在何處でどんな風にくらしてゐるか？ さういふ點に就いて、知る事の出來るだけ知り度かつた。だが、何人もはツきりとは知らなかつた。一人は、いつもにや／＼と笑つてゐるだけの、無口な氣味の惡い人――と云つた。一人は、屹度身分のいゝ人に違ひ無い――と云つた。一人は、あんな立派な人は此店に來る客の中にも珍らしい――と云つて、

『あんた、どうしてそんな事訊くの？ 一目見てぼうツとしちやつたんぢや無いの？』

ぽんと襟子の背中を叩いて笑つた。すると、もう一人が、

『本當に、あんた、知らない人だつたの？　だつて、血相變へてあとを追つ蒐けたりして――。』

胡散くささうに、襟子の顔を見た。

『あら、あんた知ら無かつたの？　あの時の、えみ子さんの樣子つたら無かつたわ！』

此の店では、えみ子と呼ばれてゐる襟子は、朋輩達の笑ひの中に面を伏せて、赤くなつたり青くなつたりした。

そのあくる日、襟子が、勤めに出ようとして部屋から出た時だつた。隣の部屋の前で、こつこつと扉をノツクしてゐる一人の若い女の姿が眼についた。見馴れぬ女だつたので、襟子は思はず眼を睜つた。

女は、襟子を見ると、當惑したやうな顔を向けて、

『あの、この部屋の件さんて方、お留守なので御座いませうか？』

『さあ。』

その時、ちよこ〳〵とるり子が走り出して來て、

『お兄さん、まだ寢てゐるのかも知れ無いわ。お兄さんはお寢坊だから。』

さかしげに云ふと、ぴたりと扉に身體をくつつけて、

『お兄さん。お兄さん。お兄さん。』

大きな聲で呼んだ。――が、返事は無かつた。たゞ、猫の鳴聲が二聲三聲したばかりだつた。

るり子は把手に手をかけた。鍵のかけて無い扉は直ぐに開いた。二匹の猫が毬を轉がすやうに飛び出して來た。

『あら、ルビイ！　ダイヤ！』

るり子は、兩腋に一匹づつ抱へ込んで、

『お兄さん。』

と呼びながら、部屋の中に走り込んで行つた。が、廉吉の姿は見え無かつた。

『お留守だわ！　お兄さん居無いわ！』

るり子は、姉と、そしてその訪問者とを圓らな眼で振返つた。

『あの――。』

と、訪問者は、襟子に訊いた。

『この小さい方は、伴さんの妹さんでいらツしやいますの？』

『いゝえ。あれは私の妹なので御座います。』

襟子は答へた。

『まあ、左樣で御座いますか？　ぢやあ――。』

と訪問者は、いくらかの躊躇を乘越えるやうにして、

『つかない事をお伺ひしますが、あなたは、伴さんて方とお親しくしていらツしやいますの？』

『えゝ。それは――。』

襟子が答へ惑うてゐると、るり子が、叫ぶやうに云つた。

『伴さんは、私のお兄さんよ！』

『何です？　るりちやん！』

と、襟子はるり子をたしなめてから、

『お隣同志ですし、隨分お親しくはして頂いて居るので御座いますが――。』

襟子は、注意深くその訪問者を觀察しながら、

『何か、伴さんに御用事で御座いませうか？　もし、私でお言傳出來る事で御座いましたら、お言ひ置き下さいませ。』

『いゝえ。私、是非伴さんにお目にかゝり度くてお訪ねしたのでございますけど――。』

訪問者の方でも、鋭い穿鑿的な眼眸で襟子を眺めた。こんな場合の女同志がよく見せ合ふ一種本能的な敵意が、自然、双方の表情に或る險しさを與へてゐた。

『あの、私、伴さんの事に就いて、少しあなたにお伺ひし度い事があるので御座いますが――。』
訪問者は云つた。
『何で御座いませう？』
襟子はさう問ひ返して、少し考へるやうにしたが、
『では、兎に角、こちらへおはひり下さいまし。きたない處なんで御座いますが――。』
襟子は、その訪問者を自分の部屋に請じ入れた。訪問者は、部屋へはひると、
『私、初瀬二三子と申す者で御座います。』
と告げた。――二三子は、昨夜、奈々子の口から、伴廉吉といふ名前と、その住所とだけを聞く事が出來た。それ以上の事は、奈々子は口を緘して語らなかつた。が、直接、伴といふ人にぶッつかつて見たら、奈々子の惱みの何であるかを知る事が出來るだらうと、それで、今、かうして二三子は訪ねて來たのであつた。
『伴さんのお知合の方でいらつしやいますか？』
『いゝえ。伴さんて方、私、未だお目にかゝつた事は無いんで

專賣特許

疲勞恢復に、體力增進に
溫かくて美味しいどりこのを召上れ!!
「どりこの」は全然消化作用のいらない飲物で、非常な榮養となり更に他の食物の消化を助け體力を增す、無比の滋養料であります。毎日續けて召上れば血色がよくなり、メキ／＼丈夫になります。
高速度滋養料
どりこの
全國有名藥店、食料品店にあり
東京本郷 大日本雄辯會講談社代理部發賣

御座いますが、あの、あなたは、奈々子さんを御存じぢやいらツしやいませんか知ら？』

『奈々子さん？』

襟子は見る／＼色を變へて、

『存じて居ります。いゝえ、直接には存じては居りませんが、お見掛けした事は御座います。』

『伴さんと、奈々子さんとは、どんな關係になつてゐるので御座いませう？　つかない事をお伺ひするやうですけど、あなたは御存じありませんか知ら？』

二三子は思ひ切つて斯う訊いた。二三子は、先刻からの樣子で、今自分と話してゐる此の女性と伴といふ男との間に、單に隣室の人といふ以上の、深い複雜な交渉があるらしい事を敏くも觀てとつてゐた。若しかしたら、此の女性が、伴の愛人か何かなのでは無からうか？　そして、奈々子の惱みも、そこに根ざしてゐるのでは無からうかとも思つた。若し、さうだとすれば、此の女に對つて、こんな問を發する事は、非常な冒險で無ければならなかつた。

『さあ、私、はつきりとは存じませんが――。』

襟子は騷ぎ立つ心を押し鎭めて、

『あなたは、奈々子さんを御存じなのでございますか？』

『えゝ、奈々子さんは私の友達で御座いますの？』

『お友達？』

『えゝ。女學校時代からの――。』

『ぢや、あなたは、奈々子さんが、今、何うしていらツしやるか御存じなので御座いますか？』

襟子の瞳は躍つた。

『奈々子さんは、今、私と一緒に居るんですの。』

『え！　あなたと一緒に？』

襟子は叫ぶやうに云ふと、

『私を、奈々子さんに會はせて下さいませ。私を奈々子さんの許へ伴れて行つて下さいませ。』

さういふと、襟子はもう半ば椅子から立ちあがりかけてゐた。

二三子は、襟子の常ならぬ樣子に呆氣にとられて、

『あなたがどうして奈々子さんに？』

『お目にかゝり度いので御座います。お目にかゝつてお話し度い事があるので御座います。一刻も早く――早くお目にかゝり度いので御座います。』

襟子は言葉慌しく云ひながら椅子から立ちあがつた。

（つゞく）

學校は出たけれど
川原くにを
許婚のA子『學校出るとすぐお勤め出來るの？』
彼『うーん、もう親父の前で頭を下げなくとも、天下のサラマンだ。』
A子『そしたらお芝居おごつてよ。』
彼『OK・OK』
凸凹工業株式會社
A子『今日サラリーデーでしよ、妾、お芝居に伴れてつて貰ふ約束だつたから。』
彼『えーその〳〵、その給料洋服屋にぶんどられちやつた。』
彼『ホーラあの紙芝居面白いよ、あれで一時勘辨してお盆のボーナス迄待つておくれ。』A子『まー貴方、學校に居た方餘つ程景氣がいゝわ。』

民謡

春待つ北滿

川路柳虹

春はまだ來ぬ北滿に
雪の曠野の明け暮れよ、
氷を流す豆滿江、
船も通はぬ松花江。

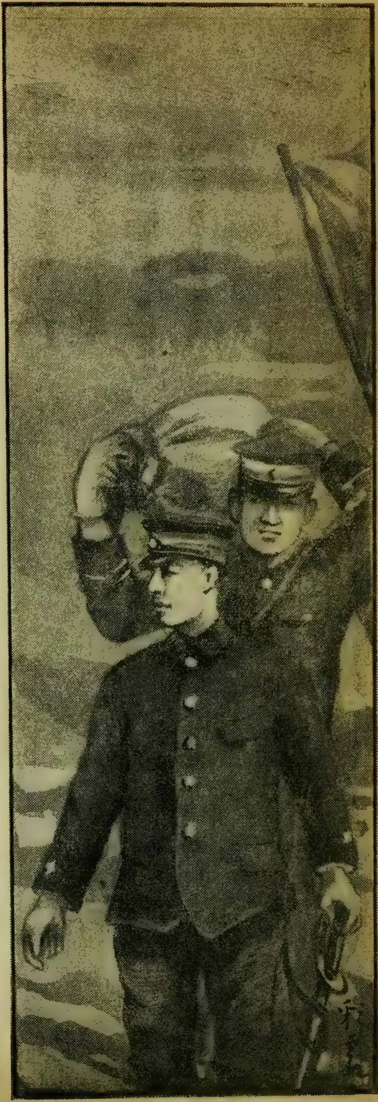
風は荒野の吹きさらし、
雪の闇夜の銃聲に
思はず走る歩哨の身、

毛皮に下るこの凍氷。

橇でかけろか、小馬でゆこか、
遠い、さみしい街あかり、
熱い火酒の盃に
醉うて見たくもあの吹雪。

春はどこから、日本から、
梅の匂ひをおくる風、
青い白樺芽立ちも燃える
女ごころも通ひ來よ。

‖吉邨二郎畫‖



互に戰へども

沙河に花と咲く日露兩軍の戰使對面秘話

山中峯太郎

八木彩霞畫

聖なる戰場

「遼陽城頭、夜はふけて、有明け月の影すごく」軍神橘中佐の歌である。明治三十七年九月四日の午前、皇軍總攻擊の激戰の後、遂に遼陽を占領した。敵露軍の總司令官クロパトキンは、遼陽を奪ひ返さうと我れに向つて攻勢に出で、我れもまた敵を迎へて攻めた。これが言ふところの「沙河の會戰」である。我が死傷一萬六千餘人、敵の損害は、戰死一萬二千餘、負傷五萬六千餘の多數に上つたが、勝敗なほ決せず、雪は塹壕を封じ、兩軍はそのまゝ沙河を挾んで互に陣地を築き始めた。これが「沙河の對陣」である。

　兩軍の戰線およそ百六十キロメートル(約四十里)、この長い戰線の中に、只だ一點、まことに珍しい現象が起つた。――前に凍れる沙河を眺めて、高臺が東より西へ續いてる。この高臺の端に、一つの突角が、敵の方へ延び、そこに小さな塹壕が築かれた。最前線の歩兵陣地だ。晝は我が一個分隊が、この小陣地を占領する。が、夜になると、何しろ敵の方へ突出てる端なので、三方から敵の夜襲を受け易い。この無益の損害を避けるため、夜には後の本陣地へ下つてくる。すると、敵はまた夜に出す斥候の根據地にするためか、この小陣地を暗の中に占領する。そして夜明け前に退却して行く。朝になると、我が分隊がまた占領する。

(澁谷伊之彥少將)

　かくて、同じ一つの陣地を、晝は日本軍が、夜は露軍が、交る〳〵占領する。彼我共有の陣地だ。その東に、小高い岡が聳えてる。名を「馬圈子山」といひ、圓い禿山なのだ。さて、朝になつて、我が分隊が、馬圈

子山の西の小陣地を、占領に行つて見ると、この日も塹壕の底を露兵が無暗に汚してる。

『仕様のねえ奴だな。毎朝、己たちに掃除させやがる。』

『いや、かう不潔だから、戰爭にも負けるんだぜ。』

『だらしのねえ露兵ぢやねえか。』

巻舌で言ふ兵は、江戸つ子だ。こゝの戰鬪正面は、淺野信興中將の率ゐる近衛師團が、左右四キロ(約一里)に亙つて堅く守備してゐる。日本兵は清潔だ。塹壕の中でも、きれいに住み心地よくする。厠のある場所など、なるべく遠くへ掘る。ところが、露兵は塹壕の中も厠も、同様に心得てるらしい。

『奴等あ、己たちに掃除させやがつて、いゝ氣になつてるんぢや、あんまり、いま〳〵しいな、何とかしてやりてえ。』

皆が相談した結果、夜になつて引上げてくると、分隊長は小隊長に委細を報告して言つた。

『ついてはロシヤ語の手紙を書いて、明日の朝、置いてきてやらうと、思ふのであります。塹壕の中を汚すな、と、一つ書いて頂きたいのであります。』

『ウン、それは好からう。』

小隊長も同意だ。そこで中隊長に報告した。中隊長から大隊長、聯隊長、旅團長、たうとう、旅團司令部の通譯が、その手紙を書いた。

尊敬する敵露軍の將兵に告げる。この塹壕は、貴軍と我が軍と、晝夜交代に守備してゐるのだ。共に祖國の爲に死を決して任務を盡す神聖な陣地である。然るに、この聖なる戰場を、貴軍は常に汚し、我が軍は常に掃除してゐる。まことに遺憾に堪へない。こゝに貴軍將兵の注意を望む。敬具。

日本軍將兵

この手紙を塹壕の中に置いて、我が分隊が夜に歸つてきた。翌朝、行つて見ると、皆が驚いた。

『オイ、見ろ。すつかり掃除してあるぜ。』

『さては一本まゐツたな。』

『向うの隅に何か置いてあるぢやねえか。』

『あの紙包みか。』

分隊長と兵が行つて見ると、白い紙に何か包んで、その上に同じく白い封筒が、平たく乘せてある。

『ハヽア、露軍の奴、返事を寄越したな。』

『分隊長殿、下に何かあります。』

『開けて見ろ。』

『ハツ。』

面白がつて開けて見ると、

『アツ、菓子であります。』
黒いパンのやうな菓子だ。幾つも入つてゐる。
『いやア露助の奴、贅澤だなア！』
銃砲彈の飛び交ふ下に、塹壕の中がワイ〳〵と賑かな騷ぎになつた。敵が返事の手紙と菓子の土産を、ちやんと置いて行つたのだ。

名乘を上げた若武者

夜、馬圈子山西方の小陣地から、我が分隊が、敵の手紙と菓子を、大事に持つて歸つてきた。その手紙を、旅團司令部で飜譯してみると、——

　我等の最も尊敬する敵の戰友よ。神聖なる陣地を、貴軍の清掃に一任してゐた我等の怠慢を、こゝに潔よく詫びる。そして今夜から、塹壕の内部を淸らかに保つことも、我等の務めでなければならない。聊か謝意を表するため、こゝに若干の陣中菓子を、我等の尊敬する敵へ送ることは、更に最も光榮とする所である。貴官たちの好き敵手たる露軍將兵より。

　この手紙往復の事實が、近衞師團第一線の將兵たちに傳はつて、皆の陣中氣分を朗かにした。菓子は、送られた分隊の兵が、皆分けて食つてしまつた。『なか〳〵上等だつた』と言ふ。すると、三日すぎて、十二月二十一日、朝、我が分隊が、前の小陣地へ行つてみると、また露軍の置手紙が有る。しかも、今度のは、立派な黄色の封筒だ。

『や、また寄越しやがツたぞ。分隊長殿、この狀袋は好い匂ひがするであります。』

　それを見つけた兵が、拾ひあげて嗅いでゐる。

『どれ〳〵己にも嗅がせろ。フン、フン、フン。』

『俺にもわたせ、フン、フン、フン。』

日本兵は香水なんか知らない。おもしろがつて嗅ぎ廻しながら、夜になつてこれを持つて歸つてきた。

　長期に亙る對陣に於て、最も尊敬する日本軍に對し、我が露軍は親しく直接に敬意を表したく、兩軍より選拔せる將校が、選定せる一地點に於て、日時を定め會見せんことを提議する。

　書體も麗々しく、文意も丁寧に、紙まで匂つてる。かうなると、旅團司令部の獨斷では扱へない。直ぐに飜譯文を添へて、旅團長の木村有恒少將から師團司令部へ送つた。すると、師團長の淺野中將が、興味を感じて、

『味のあることを言ひをるの。好からうよ。が、軍に訊いてみい！』

そこで軍司令部へ、念のために訊ねてみると、第一軍司令官黒木爲楨大將が、これまた微笑して、

『武藤參謀、これは會はせて好からう。』と、武藤信義參謀（今の關東軍司令官、駐滿洲國全權大使）を振りかへつて言つた。

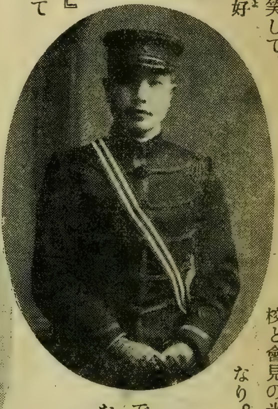
『ハツ、好しうございませう。』

『では、御苦勞でも君が行つてみるかの？』

『是非、會つてみたいと思ひます。』

何しろ戰場に、敵軍の將校と會談してみることは、絕大の興味がある。戰史の上には、露土戰爭の時に、かうした第一個の記錄があるだけだ。こゝに我が軍から快諾の返書を、問題の小陣地へ送らせた。僅かに一個分隊で占領する小さな塹壕が、兩軍の興味ある郵便局になつだ。兩方で手紙を置いてくる。

圖らずも敵味方の書信往復が、會見打合せのために始まつた。すると、露軍からコサック騎兵中隊長、中尉、デー・エクセーの名によつて、――今回、自分が選ばれて、貴軍將校と會見の光榮を有す。英語、佛語、露語、何れを用ふるも可なり。と、いよ〳〵名乘りをあげてきた。



當年の澁谷少尉（右）とエクセー中尉（左）

我が軍司令部では、選拔將校について協議した。

『向うが中隊長を派遣するのに、こちらが武藤參謀では、格が高くて面白くない。誰か中少尉で、適當な者はをらんか。』

『前線に、澁谷少尉がをります。』

『ウム、澁谷少尉は適任だ。遣れ！』

選ばれた澁谷伊之彥少尉は、近衛步兵第一旅團の副官、幼年學校の出身で、特に佛語が巧みだ。しかも、颯爽たる眉目秀麗の青年將校、この會見の使命を果すべく、膽もまた大きい。最も優秀剛膽な適任者と、軍司令部の協議が、忽ち一決した。

敵將校と會見の命令が、澁谷少尉へ下された。少尉は意外だつた。――己が行くのか！　と、だが、命令は犯すべからず、しかも、この任務は極めて痛快明朗だ。とにかく面白い。相手

のデー・エクセーとは、『英佛露語、何れを用ふるも可なり』などと、相當に强か者らしい。どんな男か？『デー』といふのは貴族の尊稱だが、……と、そぞろに血の躍る當時二十五歳の若武者である澁谷少尉、早速に佛文の一書を、小陣地の郵便局へ持たせてやつた。こちらも名乘りをあげたのだ。

不意の急射擊

日時――十二月三十一日正午。會見時間――一時間。地點――馬圈子山の下、沙河の南岸。澁谷少尉は西より、エクセー中尉は東北より、各〻出場。双方ともに騎馬。從者二人、同じく騎馬。會見三十分前より、兩軍司令部の命によつて、銃砲戰を中止すること。軍の狀況に關する談話に觸れることを得ざること。澁谷少尉は青旗を、エクセー中尉は赤旗を、これをもつて會見將校の標識とすること。など、以上の條件が、先づ文書の往復で約束された。澁谷少尉は、從卒を呼んだ。

『有賀！』

『ハツ。』從卒の有賀初吉が前へきた。

『お前は、馬に乘つたことがないか。』

『ないであります。』

有賀は步兵だ。入營前も、馬に乘つたことは一度だつてない。

『さうか、それなら、お前は步いて行け。敵の將校と會見に、連れて行つてやる。』

『ハツ。』有賀は喜んで躍り上つた。

澁谷少尉が、何故、步いて行く從卒を選んだか。副官は司令部にゐて、自分の部下がない。從卒の有賀初吉だけが、附添つてゐる。無口で沈着な兵だ。腕力も强いし、大きな露兵と取組んでも、負けることはない。敵將校との會見、そこに萬一、敵に陰險な計略があつて、我れを捕虜とし、こちらの戰況を告白させようとする等、裏ぎる行動に出ないとも計られない。この警戒は十分に必要だ。その際は敵と刺違へる覺悟の澁谷少尉、軍刀を拭ひ淸め、拳銃を持つて行くことにした。沈着で腕力の强い有賀初吉を、供に連れて行く。なほ一人、これは騎馬の從者が、近衛騎兵の伍長、その聯隊から選ばれてきた。

いよ〳〵會見の十二月三十一日、朝から一碧拭へる如き快晴だ。午前十一時三十分になると、兩軍の銃砲聲が俄かにピタリと止んだ。戰場が不意に靜かになつた。

『行つてまゐります。』

澁谷少尉が仕度を十分に整へて、旅團長の木村少將に挨拶してゐると、軍司令部から武藤參謀が入つてきた。

『澁谷、途中まで一緒に行くぞ。』

後見役だ。何しろ一歩でも引けを取らせたくない。

『は、ありがたう存じます。』

『それから貴公、今日だけは中尉になつて行け。』

『なぜでありますか。』

『敵とはいへ、向うは中尉で此方は少尉だ。互角の應對ができないやうでは、それだけ引けめを感じるぞ。』

これを聞いて澁谷少尉が微笑すると、同じ旅團副官の安田郷輔中尉（今の中將、第二師團司令部附）が、傍で上衣を脱ぎだした。それを澁谷少尉が借りて着た。少し大きくてダブ〳〵する。中尉へ臨時の昇進だ。

『行つてまゐります。』

『殺りやつてこい。』

木村少將も外まで見送つてきた。

近衛師團の右翼には第二師團、左翼には第十師團、今朝は銃砲彈が飛ばず、靜かな

戰線に、將兵が塹壕の上へ首を出して、この會見の出發光景を眺めてる。第十師團長川村景明中將の命を受けて、蓮沼騎兵少尉(今の騎兵學校教育部長)が馬を飛ばしてきた。

『見學にきました。』

『はあ。』と、澁谷臨時中尉は答へた。

『殺りやつてきて下さい!』

前哨線の將校たちも見送つて、皆が『殺りやつてこい!』の激勵を浴びせる。ウイスキイ、果物、肉の罐詰等、敵への土産ものが、第一線の隊長から前夜に寄贈された。それを擔いで、有賀初吉が勇ましく附いて行く。澁谷少尉と並んで武藤參謀、後に騎兵伍長が、眞靑な旗を高く飜へしながら、肅々と最前線へ出てきた。

敵の戰線まで三キロ(約二十七町)足らず、沙河の向うに、肉眼でも塹壕の斜面が見える。双眼鏡で見ると、敵の將兵もまたズラリと毛革帽子の顏を並べて、こちらを眺め

てる。その高臺の彼方に、黒く聳えてる塔一つ、塔のみが無心に光を浴びてゐる。デー・エクセー中尉は、この塔の方向から現れる筈だ。

　刻々に時が移る。澁谷少尉は時計を見た。約束の正午に十五分前だ。が、デー・エクセーは、まだ現れない。

『こちらは約束の通りに出かけませう。』

　と、武藤參謀に言ふと、

『もう少し待つてみろ。』

『はあ。』

『早まつて欺し討にあつては、つまらんからな。』

　さう言つてると、塔の下の高臺に、ポツリと騎馬の將校が全身を現した。と見る、續いて二騎、ハラ〳〵と斜面を降りてくる。後の一騎が高く赤旗を竿にかゝげて、先頭がデー・エクセーらしい。銀灰色の長いマントを肩から靡かせ、黒鹿毛の駿馬に跨がつて、緩やかな駈歩の武者振り、颯爽として華やかだ。

『來ました。行つてまゐります。』

『ウム、十分、會つてこい！』

　今や遲れてはならない。澁谷少尉は手綱を引きしめ、拍車を入れた。颯然と斜面を躍り出た。途端に、ヒユツ〳〵〳〵と敵の小銃射撃が、驟雨のやうに降りそゝぐ。

『待て、澁谷！』

　武藤參謀が眉をあげて叫んだ。ハツと澁谷少尉は手綱を控へた。

肝膽相照して

　敵の小銃彈が飛んでくる。それにも關はらず、敵の三騎は會見地點へ、悠々と駈歩をつゞけてくる。いかにも心にくい態度だ。

　これを見た澁谷少尉、行かずにはゐられない。決然と、武藤參謀に言つた。

『行きます！』

『ウム、氣をつけて！』

　今は武藤參謀も許した。敵彈來れども、遲れるのは恥ぢだ。

　澁谷少尉は、武藤參謀に敬禮すると、忽ち斜面へ馬を飛ばした。騎兵伍長が靑旗を飜へして續く。彈の下を、徒歩の有賀も走りだした。

　沙河の岸へ着くと、同時に敵の三騎も近づいてきた。先頭のデー・エクセー中尉、爽かに微笑してる。兩方から馬を近づけると、互に手を伸ばして堅く握りしめた。澁谷少尉が流麗なフランス語で、まづ第一語、露軍の無禮を咎めた。

『怪しからんではないか。射撃中止の約束を、なぜ守らんか。』

すると、微笑したまゝのエクセー中尉、鐵側の時計を馬上に出して見せて、

『否、我が軍の時間と、日本軍の時間が、このとほり合つてゐない。』

澁谷少尉が見ると、いかにもまだ午前十一時二十八分だ。

『しかし、それ以前に全線の射撃を、一時中止したのは、どう云ふわけか。』

『然り、それは敬意を表して、日本軍の時間に從つたのだ。』

『すると、露軍司令部の命令が、今の射撃部隊へ徹底してゐないのか。』

さう言つてる二人の頭上を、またもバラヽツと一齊射撃の小銃彈が飛んで行つた。すると、エクセーが言ふ、

『見たまへ。あれだ、彈丸は、僕に中るかも知れないのだ。君を射つ爲に射撃してるのではない。』

『好しい。解つた、この興味ある機會に、ゆつくり話しあはうではないか。』

『大いに好しい。馬を下りよう！』

ヒラリと飛下りたエクセー、羽織つてる銀灰色のマントを脱ぐと、足もとの河原へ投げて大きくひろげた。裏が眞紅の華やかさ、パツと燃えるやうに燦く。二人がその上へ腰を下すと、長靴の脚を伸ばした。そこへ有賀初吉が、土産ものを擔いで、とても堂々と前へ歩いてきた。

『副官殿、出しませうか。』

『よし。こゝへ廣げろ。……エクセー君、ウイスキーを御馳走しようか。』

『有難う。僕も持たせてきた。飮んでくれたまへ。オーイ、ペトロウイチ！』

『ダア！』と、うすのろの露兵が、シャンパンの瓶を幾本も、大きな鑵詰といつしよに持つてきた。

こゝに敵味方の小宴が、彼我戰線の前で始まつた。

『我が澁谷君、健康を祝す！』

エクセー中尉がコップをさゝげた。

『有難う、エクセー君、君の健康も！』

シャンパンを乾杯すると、顏を見あはしてにつこりした。

『君、これはオランダのチーズだがね。一寸食へるよ、やらないか。ハムもあるが……』エクセーが言つた。

『そりや有難い、これは日本の牛肉だ。林檎もある。』

『ハヽア、日本に林檎ができるかね。』

『できるとも！ 戰がすんだら、ぜひ日本へやつて來ないか。』

『命があつたらね。君には兩親がありますか。』

『幸ひに健全だ。君は？』

『父は將官だつたが、亡くなつた。母がある。君の母さんも、心配してゐられるだらうね。』

『なに、もうちやんと僕の戰死を覺悟してゐるから……』

『さうか。僕の母は、いつも心配だといふ手紙をくれるが、日本の母さんたちは、そんな手紙を書かないんですかね？』

『そりや日本の母さん達は、そんな事はしない、エクセー君、かうして二人が會つたことを、君の母さんへ、僕から手紙を書いてあげようか。』

『それは有難い、非常に有難い！ ぜひ賴みます、僕の母の住所はね、澁谷君！』

優しき日本將校の心かな！ と、瞳を輝かして悅ぶエクセー中尉、露都にゐる母の住所を、直ぐに告げた。それを澁谷少尉は、手帖に書きつけた。すると、エクセーが感激して言ふ。

『僕も、君の母さんへ、手紙を上げたい、ところを敎へたまへ。』

『有難う。東京だよ。』

住所は別に秘密でもない。双方とも處を敎へ合つた。

二人が最初から肝膽相照して、しきりに話してゐると、傍には四人の部下が、これは手眞似で話しながら、愉快に笑ひあつてゐる。和氣靄々たるものだつた。

『時に澁谷君、日本兵は實に勇敢驚くべき軍隊だ。』

『露兵もなか／＼やるぢやないか。』

『なに、今までは負けたが、これからは勝つよ。』

『オイ、エクセー君、日本軍は負けることを知らないんだ。』

『ハヽン、今に思ひ知らせてやらう。この正面にゐるのは、淺野將軍の師團ぢやないか。』

エクセー中尉、嚴禁條件の戰況談に觸れてきた。

『それこそ知らないよ。』と、澁谷少尉が敏捷に脫すと、

『淺野將軍は、猛將だね。岫巖の戰鬪には、もろにやられて、ひどい眼に會つたよ。』

『ぢや、君はミスチエンコ騎兵團に屬してゐるな。』と、試みに訊いてみると、

『ウン、さうだ。』と、エクセー中尉、所屬の秘密を、あつさり言ふ。

『オイ、それは、君の方の秘密ぢやないか。』

『や、しまつた！ 他の話をしよう。』エクセーが朗かに笑ひだして、『ハツハヽヽ、澁谷君、時間が惜しいね。もう一時間、お互に許可を得ようぢやないか。』

一變する激戰場

會見時間の延長を乞ふ爲、互に司令部へ傳令を飛ばした、わが伍長が、まつしぐらに歸つてきた。

『副官殿！　午後二時まで許可されました。』

『御苦勞。エクセー君、僕の方は許可されたが、君の傳令は遲いぢやないか。』

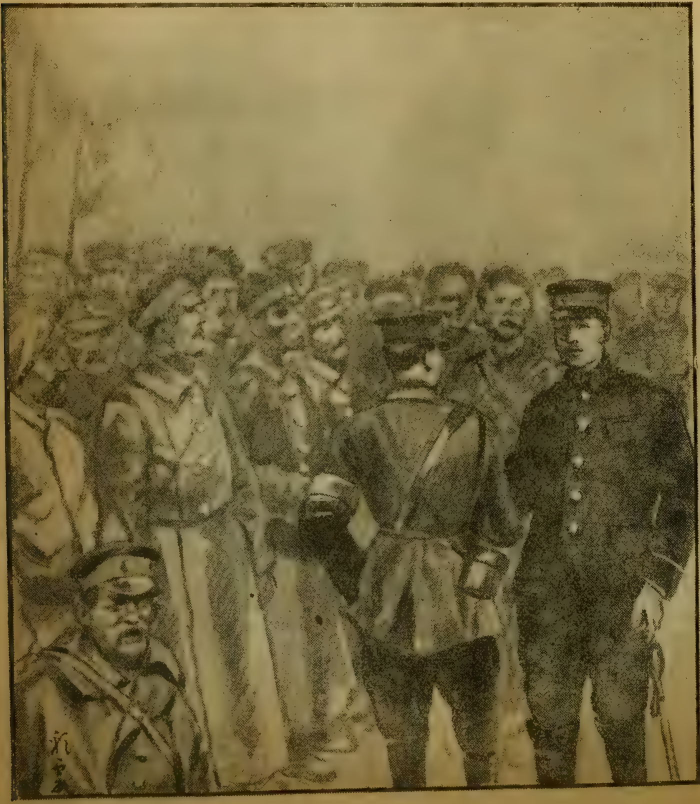
ちよつと冷かされたエクセー中尉、綠の瞳をクルクル動かして、

『日本兵は早いよ、敏捷だ。待て待て、今に僕の傳令も馬を飛ばして歸つてくる。』

『だがエクセー君、コサツクの馬は、持久力があつて羨しい、君の馬は、殊に良いな。』

『どうして日本軍の馬も、なかなか素晴しいぜ。君のは立派ぢやないか。』

『では、どうだ。今日の記念に、愛馬



を交換するか。』

『待つてくれ給へ。換へても好いが、この馬は僕の大事な戰友だ。もう一頭、鹿毛の副馬がゐるから、次ぎの會見の時に乘つてきて、換へよう。』

『驚いたな、もう一度、會ふつもりかい。』

『さうだ。二度でも三度でも！』

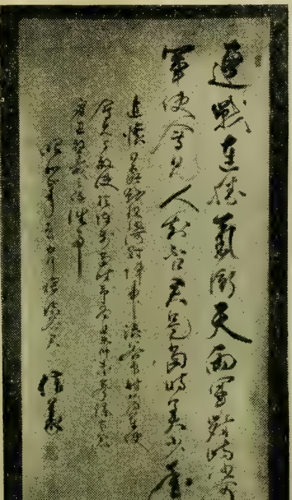
『それまで二人が生きてゐるかしら。』

顏を見あはして二人は微笑した。互に祖國のために戰つてゐる。が、かうして會つてみると、武士は相身たがひ、明日知れぬ命を抱いて、しかも、肝膽相照す親友ではないか。

エクセーの方の傳令が、やつと歸つてきた。會見時間の延長許可を、鈍感な口調で報告した。

エクセーは喜んで、

『大いに好しい。澁谷君、僕は馬の代りに、この鐵側の時計を君に贈りたいと思ふが、どうだらう？』と、先刻の黑い時計を取上げた。



武藤大將が澁谷少將に贈れる當年の追懷詩

『結構、頂かう。』

『それから、君の從卒に記念の贈物をしたいが、好いかね？』

『好しい。僕も何か贈りたいが、記念になる物がない。殘念だが、この次ぎの會見に、何か持つて來よう。しかし、エクセー君、明日は一月一日、日本では大いに祝ふのだよ。』

『それは芽でたい。』

『ところで、明朝はお祝ひに一齊砲撃をするが、お芽でたうの挨拶だと思つてくれ。』

『結構だね、禮儀は互に正しく交換すべきだ。』と、エクセー中尉、莞爾と笑つた。

話は盡きず、なほ語るにつれて、ます／＼離れがたい思ひがする。興に乘つて語るうちに、早くも二時が近づいてきた。名殘りは惜しいが、二時になると完全に敵だ。澁谷少尉は立上つた。

『また會はう！』

『ウム、會はう。大いに戰はうぜ。』

『お手並を拜見しよう。』

握手を交はすと、いよ〳〵別れが惜しまれる。エクセーが有賀の傍へくると、何か隠しへ突込んだ。記念品を贈つたのだ。そこで乗馬し、兩方から肅然と敬禮すると、自分たちの戰線へ、各々、河原から斜面を上つてきた。兩軍の將兵が塹壕の端へ、胸から上まで出して、ズラリと眺めてゐる。折しも二時、皆が隠れた、と思ふと、兩軍の砲火が忽ち開かれ、殷々たる元の戰場に復つた。一變した壯烈な砲戰の下を、澁谷少尉と伍長と有賀が、悠々と前線へ歸つてきた。そこに、武藤參謀が待ちかねてゐた。

『大分に長かつたな。どうした。』

『は、愉快な相手でありました。』

澁谷少尉が會見の狀況を、詳細に報告した。

尚少尉は旅團司令部へ歸つて、木村旅團長と淺野師團長へ、委細を報告した。軍司令部へは萩野末吉中佐(今の中將)が報告した。ところが、有賀初吉は、贈られた記念品を見ると、驚いた。百ルーブル紙幣だ。品ではなく金だ。

『敵の將校から、日本兵が金を貰ふことは、ないであります。』

と、有賀初吉、憤々しだした。

澁谷少尉も、有賀に同感だ。その百ルーブル紙幣を、例の小陣地の郵便局へ、置手紙と共に同封して送り返した。そして、エクセーのお母さんへ、細々と手紙を書き、これは內地から米國經由で、露都へ送つた。この手紙は、後の話によると、無事に屆いて、エクセーのお母さんを、この上もなく悦ばせたといふ。そしてまた、エクセーの手紙も、東京の澁谷少尉の母堂のもとへ、同じく送られてゐた。

軍司令部では、次回の會見の協議を始めた。

『戰史を飾る美しい物語になるのだ。この次ぎは返禮に、日本刀を贈つたが好からう。』

と、黒木將軍が快然と言つた。

『向うはシャンパンなど持つてきて、御馳走だけは敵はんと、澁谷が笑つてをりました。』と、武藤參謀がいふと、

『それぢやから、今度は向うに無い日本刀を持たしてやれ。』

軍司令部で日本刀一振を用意した。この時、一方に旅順要塞が陥落して、乃木第三軍は沙河の戰線へ急行し、敵は動搖して奉天の大會戰切迫の兆が見えてきた。越えて二月、下旬になつて、我が全軍が遂に總攻擊を斷行した。澁谷少尉も前面の敵を攻擊して、三月九日に渾河を越え、翌日は敵の退路へ遠く迫つた。デー・エクセー何處にゐるか？ 捕へて話し、彼の敗戰を撫はつてやりたいものだが、と思つてゐると、更に翌日の十一日にかけて、近衛師團は約四千人の捕虜を得た。

再會を望みつゝ

エクセー中尉はゐないか？

ゾロ／＼と通つて行く慘めな捕虜の列を、澁谷少尉は、一人殘らず見てゐた。すると、列の中に、軍服まがひの身裝をしてゐる非戰鬪員を發見した。

『君は、どうしたのだ。』と、手招きして訊くと、

『私は、ニユーヨーク・ヘラルドの通信員フランシス・マツクカラアです。』

『さうか。コサツク中尉で貴族のデー・エクセーを、君は知らないかね。』

『おゝ、エクセー中尉、知つてます。』

『どうしたか。戰死したか。』

『いや、無事に退却するところを、私が見てゐましたから、安全です、確かに！』

『それは好かつた。』

『あなたは誰方ですか。』

『まあ此方へきたまへ。ミルクでも上げよう。』

マツクカラアを近くの家屋へ連れて行つて、ミルクを飲ませ、澁谷少尉は、訊かれるまゝに名前を告げて、このマツクカラアとも別れた。

奉天大會戰の勝利が、日露戰役の陸に於る終幕だつた。媾和成立して、澁谷少尉は凱旋し、中尉に昇進し、陸軍大學の入學試驗を準備し始めた。すると、戰後の翌年、露都にある我が大使館附武官萩野大佐（前の軍參謀）から、手紙がきた。――沙河の對陣中、君と會つたエクセー騎兵中尉、猶ほ、奉天追擊中に、君がミルクを飲ませたさうだが、新聞通信員のマツクカラア、そして僕、三人が大使館の官邸で、一夕の懷舊談に、君の噂をしあつた。奇遇ではないか。と、萩野大佐の手紙に、澁谷中尉は、そゞろ感慨に耽つた。すると、間もなく、エクセーからも手紙をよこして、近況を報じ、――僕は陸軍大學へ入つてゐるが、君はまだかね？　毅りやれよ、賴むぞ！　と、諧謔とも激勵ともつかぬ文句が書かれてゐる。

『何を、エクセー！』と、負け嫌ひの澁谷中尉、早速に、――今、準備中だ。と、返事を出した。

大學へ入るや否や、澁谷中尉は、また早速に、エクセーへ知らしてやつた。すると、非常に悅んだ返事を書いてきたエクセー、――終りに、僕の寫眞を贈りたいが、ちやうど萩野大佐夫人が日本へ歸られるから、夫人に托する。僕は今、軍團參謀をやつてゐるぞ。君の寫眞も送れ！　と、友情ある氣焰を上げて

きた。

澁谷中尉は、直ぐに寫眞を送つた。文通絶えず續いて、一方にマツクカラアも、手紙を書いてきた。これとも親しく文通してるうちに、澁谷中尉は陸軍大學を卒業し、大尉に昇進、參謀本部附となり、歐洲航路で巴里へ留學した。エクセーが近くなつた。再會すべく樂しんでゐると、歐洲大戰が勃發した。そこに互の音信が斷たれた。

騎兵の彼は第一線に活躍してるだらう、と、その武運を祈りつゝ、澁谷參謀は、自分も巴里で大戰に活躍してゐた。世界の大戰遂に平和となり、澁谷參謀は歸朝の途中、露都に親友エクセーの消息を、あまねく尋ねたが、杳として分らなかつた。で、エクセーの安全を心から祈りつゝ日本に歸つた。

澁谷參謀は、後昇進して少將となり、今は、陸軍戸山學校校長となつて居る。だが、少將は、相手のデー・エクセーが、今も尙此の地球の何處かの隅に生き永らへて居て、やア、久潤! 我友よ! と聲をかけて現はれて來るやうに思はれると云つて居る。謙遜な澁谷少將は、この祕話を三十年も語られなかつた。が、あまりに心床しい話のなで、筆者は强ひて乞うて之を書いた。

（をはり）

ぞつと身ぶるひした話

丸山晩霞

◇

私は怪物とか幽靈といふものは信じないが、これから述べるものが幽靈であつたとすれば信じないでは居られない。

ある時友人の新築したばかりの家に泊つたことがある。夏だつたから蚊帳の中で寢てゐた。その座敷は拵へてから初めて私が寢るのであつた。夜中過ぎ頃と思ふ、寢苦しくものに襲はるゝやうでふと眼を覺ますと、小さな電燈の光の中に、自分の寢てゐる蚊帳の外に何者か立つてゐる。無論人間である。誰かと聲をあげようとしても聲が出ない。その立つてゐる影は見るうちに淡くなつて消えてしまつた。それから耳を聳てゝ聞いてゐたが何の音も聞えなかつた。

翌朝になつてから夜中に私の室に來たものがあるかと尋ねたが誰も來たものがないといふ。次の日此の家を辭したのであるが、造つたばかりの新築の家は、その後二ケ月ばかりして人に賣つたといふ事を聞いた。

始めて出づ！各國驚嘆の冒險訪歐飛行

征空一萬三千粁

一等飛行士　熊川良太郎氏著

移りゆく征空一萬三千粁の風景を空の上から滿喫出來るこの喜び!!

眞に爽快！痛絶の壯擧!!

この體驗何人にも味ひ難し、一刻も早く御一讀あれ

熱血もゆる日本人の意氣を銀翼にのせ、名だたる大陸の幾多の險難を突破して、遂に大飛行の成功を果せる快實記。或は酷寒の湖上を盲目飛行をなし、或は猛火をふく發動機の故障に九死一生の危難に遭遇し、或は炎熱の平原を飛び、大密林の無

東京→大阪→蔚山→京城→奉天→哈爾賓→滿洲里→チタ→イルクーツク→クラスノヤルスク→

繪がグン〱上達する

洋畫家　寺内萬治郎

『自習画帖』は實に立派な畫帖です。一寸難かしいといふ感じはありますが、しかし餘り卑近な簡單な題材ばかり選んだのでは、子供は、すぐ倦きてしまひませう。

この邊、巧に按配して、めくる頁に現はれる繪の一つ一つが、子供の心をしつかり摑んで、これを陶醉の世界へ導いて行く力のあるものばかりを集めたのは、頗る面白いと思ひます。子供は屹度喜びませう。これによつて繪がグン〱上達することでせう。何やかやと子供から繪に惱まされるお父さんお母さん方は全く大助りだと思ひます。

右の如く『自習画帖』は各方面の大家名士學校の先生方から絶大の讃辭を頂いてをります。全國小學校では准教科書として御採用になつてをります。全く理想的の畫帖です。新學期がだん〱近づいて來ました。愛する御子弟へ教科書と一緒にぜひお與へ下さい。

少年少女　自習画帖　全六巻　一册各二十錢　送料四錢

高等科用　自習画帖　全二巻　一册各三十錢　送料四錢

ノボシビリスク←クルガン←クラスノフイムスク←カザン←モスコー←チユーナブルグ←ケーニヒスベルヒ←ベルリン←ブルツセル←ロンドン←パリー←リヨン←マルセーユ←ローマ

人境を翔破する等、その苦心慘憺は全く言語に絶す。かくして滿洲、シベリヤ、北歐、西歐、南歐の各地を空の上から訪問するその快味、かゝる體驗者は果して世界に幾人あらう。わが『青年日本號』の熊川氏、今始めてその體驗を公開す！

（上）熊川良太郎氏
（下）愛機の前に立つ熊川、栗村兩氏

寫眞百數十葉
地圖多數挿入
定價一圓卅錢（送料十四錢）
全國書店にあり

○實に面白く他には見られぬ空の旅行記
○各國各地の風光人情は宛ら目に見る如く
○讀者あたかも機上にあるの心地する!!

御家庭の何人にも絶好の快讀物!!

東京本郷（振替東京三九三〇）
大日本雄辯會講談社發行

一家中で引張凧！

いよ〳〵出揃つた本社の『少年講談』は大人が讀んでも子供が讀んでも面白い。家庭の好讀物として目下大變な評判です。

- 少年講談 塚原卜傳
- 少年講談 近藤勇
- 少年講談 左甚五郎
- 少年講談 笹野權三郎
- 少年講談 孫悟空
- 少年講談 堀部安兵衛
- 少年講談 塙團右衛門
- 少年講談 由井正雪
- 少年講談 山中鹿之助
- 少年講談 彌次喜多道中記
- 少年講談 岩見重太郎
- 少年講談 寛永三馬術
- 少年講談 里見八犬傳

定價各册共八十錢 送料各册共十二錢

一册でも二册でも自由に買へます、書店で賣切れの時は、直接本社へお申込み下さい。

すてうり勘兵衞（かんべゑ）

村上浪六
鰭崎英朋畫

我身の運命も七つ下りの羽織を脱いで通り掛りの屑屋に賣りし一朱の基で、深川萬年町の棟割長屋へ落ちて來た勘兵衛、ふとした事から女俳優の中村鶴吉に戀を仕掛けられるとは夢にも思はない、まして引くに引かれぬ男の意地で、その鶴吉を盗み出さねばならないやうになるとは、どう考へて見ても、かうならぬ前から不思議の縁に結ばれて居たかと思はれる、

「おい長助、そろ〱日が暮れて來たな」

屑長また不思議の縁で、家來のやうにいはれながら、今更この勘兵衛に離れる氣がしない、おまけに自分の戀でも色でもない女を盗み出す役廻りで、頭に瘤の一つや二つぐらゐは覺悟の前、とぼけた面に聊か自慢の男氣を現はして、

「大將、うまく遣りませうぜ、あの紙を丸めた紅筆で、いのちがけです、ぬすみ出して下さいといふからには本人、よほど酷い足止めを喰ッてるンですよ、その生物を覗ッて、どさくさ紛れに連れ出さうとするンだ、もし遣り損ッたら本人、かはいさうに今までよりも却ッて苦しい目に逢ひますぜ」

「厄介な女に取付かれたよ、たッた一度や二度で生命がけですとは、この勘兵衛、どこが好いンだらうな」

「さう暢氣に今こゝで、のろけて居ちやア困りますよ、廣小路の人氣を背負ッてる一枚看板、その中村鶴吉が不意に消えて無くならうといふ大芝居だ、太夫元に取ッちやア大切の金函を盗まれるンだ、どうせ騒ぎが大きくなりますぜ、わッしやア一生懸命に遣りますが大將も油斷なく」

「大丈夫、どんな用心棒が何疋、飛出して來ても乃公が付てる、安心して、しッかり遣れ」

「過日の夜、本人を追ッかけて來た兩刀への度胸と凄味で、安心はして居ますがね、人斬の名人といふ事が氣になッてならねエ、むやみに斬ッちやア後が面倒ですぜ、なるべく拔かねエで蜘蛛の子を散すやうにして下せエ、ようがすかね、間違ッて闇の中から、ぴかりと此方へ來ちやア大變だ」

「はゝゝゝそれを間違ッて名人といへるか、たとひ拔

いても斬るまいと思へば、平打、峰打、自由自在の勘兵衞だ、さア、そろ〳〵出かけよう』

『大將は一歩、先へ、兩國の橋詰で待ツて居て下せエ、廣小路の方でなく東寄の橋手前ですぜ、わツしやア後から、ちよいと謀策を定めて行きますよ、どうせ芝居の果で、ゆツくり智惠を絞る時刻があるンだ』

『下手な智惠を出すな、いくら錢が殘ツてる』

『もう一分は缺けて居ますが、なアに一朱で駕賃は澤山ですよ、大急ぎの酒代も込めてね』

『そも〳〵羽織を賣ツて、きさまと現在、かうなツた基が一朱で、今夜また女を盜み出すのも一朱か、どこまでも乃公は一朱に面白い緣があるンだな、はゝゝゝ裸百貫といふ諺もあるが、こりやア一朱男に出來てるわい』

別に用意もなく、また用意する物もない勘兵衞、裾を短かく常よりは帶を堅く締め直して、わざと小刀なしに大刀の一本差、冗談まじりに笑ひながら、ぶらりと出て行く後姿、いかにも大膽に不敵らしい、

勘兵衞の出るや否、軒並びの三軒目に飛込だ屑長、

『この長屋中で兄弟のやうに氣の合ツてるなア、おめエだけだ、今夜これから喧嘩に出かけるンだから腕を貸してくれ』

『何だ、喧嘩だ、相手の奴、どンな野郎だ』

『まだ分らねエ、どンな野郎で何人になるか、やツて見た上だよ』

『そ、そンな馬鹿げた喧嘩があるかね、第一また相手次第で、凄い大將が居るぢやアねエか』

『その大將のこツて喧嘩になるンだ、實アね、こゝへ來る例の鶴、おツと、掃き溜に降りて來る鶴ね、あれを今夜、どうしても此方へ連れて來ないと乃公の男の立たねエ譯があるンだ、そこで賴むンだが駕を一挺、傭ツて兩國橋の東詰に待ツて居て貰ひてエ、すると乃公が相手の野郎と喧嘩を始めて、うまく摑み合の中から怪我のねエやう、ひツこぬいて來るよ、ね、おめエ、それを駕へ乘せて、その駕と共に飛で歸りやア宜いンだ』

『まるで、かどはかしだな』

『人聞の惡い事いふない、知ツてる通り本人は目も鼻もなくなツて、めちや〳〵に大將へ來てるが、それを邪慳に妨げる奴があるからだ、勿論、大將も出かけるよ、もう出かけたよ、無駄骨は折らさねエ、そして二三日、おめエの內へ預けて置くンだ、あの畫に描たやうな顏を遠慮なしに見てるだけでも役德だらう』

『夜は、どうなるンだい』

『ふざけるなよ、夜は大將と入れ替りで、乃公の家へ泊りに來るのさ、現に乃公も過日、おめエの方へ寢込に往ツたらう、いやなら外を頼むぜ、さしあたり駕に隨て走るのが五百だ、それから預かり料を一日に二百づつ出すが、どうだ』

『よし來た、ぶツ通しに二月でも三月でも預かるよ、この株を途中で外へ遣ツちやア長さン、承知しねエぞ』

『はゝゝゝぢやア兎も角も駕賃を一朱、渡して置くぜ、それで餘る筈だ、然し念のためにいうて置くが、この長屋の入口へ駕を卸しちやア、いけねエよ、どうせ正覺寺橋を渡ツて來るンだから寺裏の蛤町か冬木町邊で卸してくれ』

『わかツてる、幸ひ今夜ア闇だ、そこから手を引いて來るンだな』

『いくら手を握ツても騷動の起らねエ相手だ』

師走

師走の寒中、ぴい〳〵と吹く北風にも兩國の廣小路は寒さ知らずの群集雜踏、こゝばかりは闇のない盛り場に押し合ひ揉合うた人浪、わけて女芝居は中村鶴吉の人氣で、ぎツしりと鮨漬の見物に汗が出るほどの大騷ぎ、

　その騷ぎも今夜の終りで、追ひ出しの幕が降りると、舞臺裏の樂屋に顏を洗ひ衣裳を脫いだ鶴吉、着物を着替た傍には目も放さぬ二人の小屋もの、

『相變らずの人氣で、たいしたもンですねエ、それだけに猶更お氣の毒だ、わツし等も隨分これまで好きな眞似をして來た道樂の果で、かうなツたンだから酸いも甘いも分ツて居ますがね、頤を預けた親方にいはれて情のねエ送り迎ひをするンですよ、わるく思はないで下せエ、なアに大部屋へ突ツ込まれてるもンなら遁げようが走らうが追ツかける雜用を考へますがね、外にねエ全盛が身の禍だ、さア支度して貰ひませうか』

　手足を繩で縛られたと同じ鶴吉、藝の上では廣小路の小屋掛け芝居に惜しいといはれながら、その藝を繋いだ猿のやうに働かされて、ぐツたりと草臥れたところを、また檻に押込められる悲しさ口惜しさ、十九の今までは男嫌ひの評判ばかりでなく、それを其まゝ通して來たが、ふしぎの緣で戀を知り始めた身の遣る瀨がない、わツと泣きたい心を堪へて、わざと笑顏を作りながら、

『わたしが惡いンですよ、つい、うツかり、ちよいとした事から、ほゝゝゝ』

『情夫は勤めの憂さ晴しといふなア廓だけのこツてねエから一人や半分、さういふ好い人のあツた方が面白くツて舞臺の張合にもなるンですが、あンまり剛情に相手を明さねエから親方だ

ツて、心配しますよ、どうですい今夜あたり歸ツてから、あッさりと、ざツくばらンに曝け出しちやア』

『御親切は有難く思ひますが、さうすると、濡れぬ前こそ露をも厭へといふ親方さンの押付業で、また嫌な注文が澤山に出ますからね、すみませンが當分まア此まゝで我身知らずの剛情を張らして戴きませう、何、よくある舞臺の科白を本筋にして、死で仕舞へば、どこへも迷惑かけずに埒が明くンですよ』

『と、とンでもねエ、こンな事ぐらゐで、そンな不量見を起して堪りますかね、いくら怜悧でも、まだ二十歳前だ、おまけに堅くして來た初戀だから樋の口を開けた水のやうに、どツと一時、さうなるンでせうが、それだけの藝と顏を持ツて一人の隱し男に苦しい情を立てぬくなンて、つまりませンぜ、いくら割引いても勘定に合はねエこツた』

『どうせ、勘定づくに出來た事ではないンですよ、ほほヽヽ御苦勞さま、また今夜も身動きのならないやうに送ツて貰ひませうね』

かうなると案外に弱くない女で、口惜しまぎれ腹立まぎれの皮肉まじりに捨鉢のやうな言葉、憎いほどの美はしい横顏を見て、どういふ野郎が陰で糸を引いてるかと癪に觸り出した二人の荒男、もう世辭も愛嬌もない、

『身のためを思ツていうても不承知なら仕方がねエ、自業自得だ、さア支度を急いで、歸るとしませうよ』

更け行く師走の夜、大地も凍る寒さに風を引かせまいといふ慾の皮で着物だけは、どッさりと厚着させて、大事の看板を荒

れさせないため、お高祖頭巾で面深に顏を包ませ、兩方から大の男が中間に夾みて、樂屋の裏口より藥研堀の太夫元へと急ぐ途中、もう廣小路の群集は寒風に吹き散されて、あれほど押寄せた人浪も引汐の後で淋しい、

兩國橋の西寄を米澤町二丁目の前まで來ると、三丁目の方から一散に走り出して來た奴、どンと一人に突當りて、

『氣を付けろッ』

二人は世俗に小屋ものといはれる氣の荒い男で、
『な、何を吐しやアがる唐變木め、うぬの方で氣を付けろツ』
『唐變木だア、この紙屑野郎め、鐵砲笊へ叩ツ込むぞ』
これを聞た鶴吉、はツとして、おもはず星明りに見透すと、嬉しや長さン、わざと悲鳴をあげて、
『あれエ』
此奴が盗みに來たと知る筈のない二人は兩方から一時に喧嘩馴れた握り拳で、ぽか〳〵と毆られて口ほどにない長さン、毆られながら、
『こン畜生、畜生ツ、いてエぞ』
どこからともなく、ぬツと闇の中より飛出して來た勘兵衞、無言のまゝ二人の首筋を摑むや否、ぐる〳〵と風車の如くに振廻して置て、ふら〳〵と目の舞うた奴を、ばたりと左右へ抛げ付けた早業、起き直らうとする一人の胸板を片脚に蹴轉ばし、驚いて遁げ出さうとする一人を遁がしもせずに引寄せ、引寄せたかと思へば片手を咽喉輪に掛けて、きゆうと締めた工合は、まるで鳥屋の職人が鷄を捻るやうな手輕い藝當、
その間に屑長の身躰へ獅嚙み付た鶴吉、
『走れツ』
勘兵衞の聲もろとも兩國橋の方へ、これ幸ひの闇に紛れて鶴吉の手を引ずりながら駈け出した長さン、橋の袂に待受け、駕の中へ押込み、
『たゝ賴むぞ』
約束の五百文になる奴、寒中の素袷一枚で頰かぶりに尻からげの用意、
『おいでなすツた』
あれから大將、どうするか、どうなるかと橋の中央まで取て返したが、相手の加勢が出て來ないとも限らないと思へば、もう二度と行く氣になれない長さン、やはり無事に駕の後を追ツかけて一目散、

案じるより産むが易くて、まンまと首尾よく盗み出した屑長、寺裏の蛤町から連れ込まれた鶴吉を三軒目に入れて置て、ぴしやりと入口の戸を閉め切り、
『おい、大將の歸るまで乃公の家に居ろ、早速、三百文、渡すぜ』
『長さン約束は五百だよ』
『まけろ、乃公も後から二百文ぐらゐ、たしかに走ツてるぜ、何といふ面をするンだい、はゝゝゝ冗談だよ、さア五百文、時に大將、遲いね』

『何か後で、面倒な事でも起りやアしねエかな』

『何が起ツたツて、あれぢやア相手の奴に歯が立たねエよ、うンとも、すンともいはずに二人を振り廻して叩き付けた早さと來ちやア、目にも止まらねエ業だ、まさか、あゝまでとは思ツて居なかツたよ、ふざけてるやうなもンだ、その代り乃公は痛かツたね、だしぬけに畜生め二人で手加減なしに、ぽか／＼と遣りやアがツて、ぐら／＼としたが、そこは乃公だ、平生の度胸が据ツてるからね、ぶッ倒れもせずに本望を達して來たよ、實ア屑屋に少々、大役だツた、今だに頭が痺れて、ぼうツとしてるぜ』

『はゝゝ然し長さン、女を盗み出すといふなア嫌はれた奴の藝で、がンじ搦みに駕を縛ツて來る筈だが今夜ア本人の方から遁げたい一心で盗まれたいと思ツてるところへ、お迎ひに往ツたンだからね、寺裏で卸した時、この乃公の手を握ツて生涯この御恩は忘れませンといはれたンだ、もう、あれで乃公は生涯、嗅アが持てなくツても得心だよ』

急きも慌てもせずに悠々と長屋へ這入ツて來る足音、のそりと身を入れた勘兵衛、

『長助、うまく遣ツたな、三軒目も來てるね』

『此奴のところへ兎も角、そツと入れて置きましたよ、萬一の事があるかも知れませンから當分の間、こゝへは置けますめエ』

首肯いた勘兵衛、

『同じ長屋でも家が違ツてるから、もし來る奴があツても何かの便利だ、來れば彼奴、あの馬鹿侍め振られた自己の恥曝しに口を割ツた上のこツた』

『二人の奴、どうなりましたね。』

『二人とも僥倖な奴だ、氣絶しただけで生命に別條ない』

『あツちやア堪らねエ、ところで早く大將、首が長くなツて居ますよ、今か／＼と獨りぼツちで淋しく待兼ねて居ますよ』

『さうだらうか』

『さうだらうかもねエもンだ、意地わるく落着て居て、本人、氣が氣ぢやありませンよ』

『また今夜、うるさいな』

『お靜かに願ひます、こゝに哀れな膝小僧を抱き寐の野郎が二疋、おとなしくして居るンですぜ』

そろりと三軒目の戸を開けて、すぐに閉め切り靜かに這入りし勘兵衛、鶴吉は我を忘れて飛付くやうに男の胸へ顏を埋めたまゝで、泣き出すより外にない、

『よく來たともいへないが、まア、かうなれば、かうなる成行

で、かうなる縁と思はねばなるまい、もう少し金があツて身分の確かな男振の好い優しい人も澤山ある世の中で、どうした事か、因果な女に出來てるねエ』

『かうなツて仕舞ツたンですから、あなたも諦めて下さいな、因果な女に纏ひ付かれたと思ツて』

『だがね、産みの親の手許に育ツた素人の娘と違ツて、骨になるまで金にせうとする奴から商賣の種を奪ツて來たンだ、百兩や二百兩の盗人詮議よりも血眼になツて來るよ、ちと面倒だぜ、腕づくで取返しに來る相手は何でもないが、理窟の上では此方の負けるのが本當だ、第一お前、その間の辛抱が出來るかい』

『わたしは、どうなツても、どンな事でも辛抱しますよ、あの長さンに書て渡した通り、生命がけですもの、うか〳〵すれば吉原へ叩き賣られるか、舞臺で働きながら身を切られるやうな、いやな客取を無理やりにしろといはれて』

『ふウ、たゞ當分の懲しめに足止めだと思ツて居たが、そこまで無慈悲に毒々しく來たか』

『もし、あなたに突放されたら、わたし、生きて居ませンよ』

『よウし、これが互ひの身を喰ふ悪縁かも知れないが、さういふ事になツたとすれば、しツかりと放さず、この勘兵衛に抱き付て居ろ、まて、まてよ、今ぢやアない、はゝゝゝまだ早い』

あけの朝は常よりも早く起き出した屑長、ばた〳〵澁團扇の音に消炭の火を煽ぎながら、

『おい幸さン、ちと早いが起きねエか、前夜の今朝だ、どンなことが湧て來ないとも限らないぜ、不意に五百文を儲けた上これから毎日、二百文づつになるンだ、他人事ぢやアあるめエ』

一方が長助で一方が幸助、互ひの名は長く幸ひに目出たいが、浮ぶ瀬もない貧乏面を持上げて、

『前夜は、うツかりして居たよ、蒲團が一枚だから槲餅に寐て居たが大將、困ツたらう、二人だからな』

『よけいな心配するない、あの後だ、話しは盡きねエ、どうせ夜明しだよ』

『この長屋へ落込で來た大將は馴れてるが、氣の毒に綺麗な方は嘸、寒かツたらう』

『あツたかいよ、かじり付て居りやア寒くねエよ』

『なるほど、兩方の暖か味でね』

『そンな事を考へずに起きろ、すまねエが起きてね、味噌を買ツて來てくれ、後は續かなくツても御夫婦お揃ひといふ心祝ひで今朝だけは味噌汁を拵へるンだ、ついでに葱を三筋ばかりね、鰹節、贅澤な事いふな』

幸助は顔も洗はずに飛出して、長助は三軒目の戸を叩きながら、
『お早う、まだ、おやすみですかね、火を起して持ツて來ましたよ』
中から半笑ひに勘兵衞の聲、
『これから寐るンだ、ゆふべは寐かされなかツたよ』
長さン折角こゝまで抱へて來た火鉢の逆戻りで、それを馬鹿馬鹿しいとも思はない、
『あゝなりやア無理もねエよ、若いからなア』

廣小路

の盛り場に人氣を集めた女芝居、その一枚看板の中村鶴吉が居なくなツたといふ事は、だしぬけの大暴風に小屋を吹飛されたよりも猶更の大事で、おまけに本人は病氣でもなく、不意に暗闇の中から出た奴に盜まれたといふ噂、加之も用心棒の二人が大地へ叩き付けられて氣絶したといふ噂、何よりの證據は噂の翌日から芝居が開けられない、その木戸口へ押寄せて自己の色女でも取られたやうな大騷の奴等、
『こりやア兩國橋が落ちたと同じこツたよ、この廣小路に鶴吉の姿が消て仕舞ツて、どうなるンだい』
『全くだね、然し天狗の業でもないとすりやア、やはり人間業で、そいつア男だらう』
『どンな野郎か、面を見てエもンだ』
『もし惡黨の生盜人だと、かはいさうに、あの男嫌ひで通して來た鶴吉、むざ／＼と捻ち伏せられるンだぜ』
『二人も小屋ものが隨て居たといふに、よほど用意して來た奴だね』
『ところが案外、本人の謀し合した藝ぢやアないかね、懷中へも袂へも這入らねエ品物で、ちよいと手輕く引ツ提げて行ける筈アなし、あゝ見えても舞臺で達者に働いた身體だ、うぶな函入娘と違ツて、藻掻けば何とかなるところを泣き叫ぶ聲も出さず、あンまり手際よく盜まれ過ぎてるよ』
『さうすると、內々そツと出來て居た色男かも知れねエな』
『その方が七八分だ、あの顏で年頃から考へても、人形ぢやアねエぜ、生きてるンだ、いつまで堅い／＼で通して居れるかね、どツかに身も世もあられずに可愛い男を隱して居たンだよ』
『いやに御丁寧な念入で、その男の肩を持つね』
『だツて、さうとすりやア、さうだらう』
『全體、どこに居るンだい』
『知らないよ、おめエなンかより太夫元は一生懸命だ、金函を

引ツ掠へて行かれたンだからな、ごみ〳〵した後の殘りもンで芝居が打てるかね、めちや〳〵だ』

『太夫元は、さンざ今までの間に儲けてるよ、この乃公は半日づつの仕事を休ンで木戸錢を拂ツてるばかりだぜ』

『その代り目に見てるだらう、木戸錢で手や足へ觸れるかい』

金も智惠もなくて血の氣の多い江戸ツ子の面白半分に、わい〳〵騷ぎ立てゝ居る一方では藥研堀に家臺骨を据た太夫元の熊藏、その道では鬼熊といはれる五十男、これは芝居の潰れる身代破滅の大事に滿身の吐息を吹出して、ゆふべの氣絶した二人の奴を前に睨み付けながら、

『やい、うぬ等ア何のために隨て居たンだ、もし叶はぬ相手と見りやア何故、死物狂ひに取ツ組まねエ、玉を擔がれて行く間、氣絶して居やアがツて、後から目を剝いて追ッ付くかい』

『そりやア親方、無理ですよ、玉を盜まれる間、わざ〳〵氣絶して居たンでなく、氣絶の方が先で、知らぬ間に持ツて行かれ

たンだ』

『それにしても平生、腕ツ節を自慢の奴が二人も揃ツて居て、間ぬけた事をしやアがる』

『ところが親方、腕ツ節も度胸も役に立たねエ恐ろしい奴で、まツ暗な闇の中から旋風の吹いて來るやうに飛出しやアがツて、早いの早くねエの、あンな素早い奴ア始めて出喰しましたよ、ふらふらと宙に振られた事ア幽かに覺えて居ますがね、もう後は分らねエ、よほど凄い野郎ですぜ、もしあゝいふ凄いのが影に居たとすりやア、今まで鶴吉を甘く見過ぎましたね』

『どんな面だツたい、どんな風だツたい』

『最初の奴を二人で、ぽか〳〵と遣つてる襟首を不意に摑まれたンだから、面も風も見る間がありませンよ』

『どうしても町人の業ぢやアねエな』

『あンな町人があッちやア武士の扶持放れだ、實ア親方、思ひ當る事がありますよ、例の川瀬といふ旦那ね、川瀬彌五郎といふ侍で馬鹿に上氣せて來る贔負客があるでせう、あれに嫌な事をいはれて樂屋から裏口へ遁げ出した時、それを背後へ圍ツて川瀬の旦那を手鞠に取ツた二十七八の苦み走ツた浪人風の奴、あれかも知れませンぜ、あの時は通り掛りに助けたといふこツてしたが、今から考へると、怪しい、もう、あの時分から出來て居たンですね』

『や、圖星かも知れねエ、いはゞ大切な稼ぎ人だから、も少し呼吸を付けて置けば宜いに嗅アめ、ぎゆう〳〵息を詰めたらしいから本人が堪らなくなつた苦しまぎれで、さういふ手筈にしたンだらうよ』

『藥が利き過ぎたンですね』

『ちよいと盛り過ぎたンだよ、然し乃公も藥研堀の熊藏だ、江戸に數ある興行師の中で、たゞの太夫元ぢやアねエ、一時、お上の十手も頂ツた事のある身で五十を越た今更、そンな正體の知れねエ奴に商賣道具を盗まれたとなツちやア、この面も芝居も丸潰れだ、乃公の鼻毛を拔きやアがツた其奴、土を掘ツても探し出して見せるが、さしあたり幸ひ川瀨の彌五郎といふ執念深い戀の敵があるンだから、あれを焚き付けて、役に立たなけりやア詮議の雜用だけでも取ツてやらう、どうせ噂を聞けば目の色を變て來る人間に出來てるンだ、今度は二人とも氣絶せずに褌を締めて、うまく遣れよ、おめエ達の面も逆撫にされたンだぞ』

『なアに親方、あの川瀨なら此方から自由にコキ使ツて、向ふを氣絶さしますアね、はゝゝゝ』

轉ンでも空手で起きぬとは、かういふ奴等の事で、戀の敵役と詮議の雜用に使はれる川瀨彌五郎は堪らないが、これからの勘兵衛も鶴吉も油斷が出來ない、

鶴吉

を盗み出した翌る日の夕暮れ前、ぶらりと三軒目から軒傳ひに來た勘兵衛、袂より緋縮緬の小さい巾着を抛げ出して、

『これだけ小遣ひを持ツて居たよ、小粒を取交ぜて三兩と二分二朱、四兩足らずだ、その內で何か今夜の夕飯に遲くなツても宜いから、うまいものを拵へてくれないか、けふは朝寐をし過ぎて晝飯の味噌汁、折角の御馳走だが少々、水ツぽくて鹽辛かツたからね、はゝゝその二人も一杯、ゆツくり飲んでくれよ』

手に取らないが巾着の方へ首を伸した幸助、

『違ツたもンだね、あの場合で、ちよいと胸帶の間に入れてあツたのが四兩近い金だ、ねエ長さン、どう奢ツても一朱は一度に費ひ切れめエ』

緋縮緬の巾着と勘兵衛の顏を見比べた長助、

『ぢやア一朱の內として、おい幸さン、刺身と燒肴と酸の物に酒が一升、いや、大將は飲まねエから五合で宜い、餘ツた錢は二百文づつ先拂ひの日割勘定だぜ』

勘兵衛は笑ひながら、

『一朱に幾何か足してやれ、どうも乃公は不思議と一朱が何事にも付纏ツてるやうな氣がするよ、はゝゝゝ』

幸助の出て行く後姿を見送りて、

『時に大將、ゆふべ一夜、寐ながら考へましたがね、この長屋で、あの容色、どう地味に作ツても拵へても際立ツて目に立ちますよ、おまけに惡氣はねエが口の喧ましい奴等だ、あぶねエ、急に外へ巣を變へなくちやアなりませンぜ、第一また本人も嫌でせうよ、こンなところでは』

『實は、その邊に氣が付て、いろ／＼鶴にも話したがね』

『もう、吉の字は無くなツたンですね、はゝゝゝお鶴さンといふのが本名ですか』

『さうだよ、鶴のいふには、どンな苦勞しても宜いからと』

『わかツてますよ、そりやア分ツて居ますがね、うか／＼して居れねエ、一度こゝへ押掛けて來て吹ツ飛された例の兩刀もあるンだから猶更、軒並びに三軒ぐらゐの隔たりぢやア油斷大敵、危險ですよ、相手は芝居の潰れる大騷ぎで、夜の目も寐ずに四方八方へ人を出して居ますぜ』

『小屋ものを相手に力む事も馬鹿げてるから、どうだ長助、きさまも隨て來ないか、だまツて三人この長屋を夜遁げするのも面白いぜ、なアに出れば出たで思案がある、こゝでは小柄の次に笄だけとも思ツたが、それぢやア足らない、脇差の方を賣れば作り道具と中味で安く見倒しても四五十兩だ、乃公は宮本武藏でないから一本で宜い、大刀一本を殘せば侍としての働きに澤山だ、誰にも劣らない覺悟だ』

おもはず調子づいて乘出した長さン、鐵砲笊を蹴り飛しながら、

『かうなるのも一方ならねエ深い緣だ、どこまでも長助お伴して行きますぜ、あとに未練も借金もねエ身躰だ、同じ夜遁げでも落着く先の首縊りと違ツて、かういふ夜遁げは洒落てる、わツしやア脇師ですが、やはり戀の落人ですからね、はゝゝゝこいつア有難い、おかげで萬年町を後にしますよ、この萬年町め、出よう／＼とする長さンを意地惡く丸六年も引止めて居やアがツた、いよ／＼おさらばだ』

『文句は後にして、さうと極めた以上、なるべく急に探してくれ、靜かなところで、三室もあれば宜いね、無論また長助、きさまが名前人だぞ』

金氣は長屋の井戸にあるばかりで、貧乏の底知れぬ深川、いつまで浮ばれぬ萬年町へ落ちて來た勘兵衛、その仔細と身の素性は兎も角、ふとした事から女俳優に縋り付

かれて、こゝを出るとは夢にも思はない、屑屋の長さンは猶更また思ひも寄らぬ事で、丸六年も根の生えた貧乏長屋の塒から這ひ出すのは、不意に湧て來た嬉しさの餘り薄暗がりの夜あけ前に飛起きて、舞ひ鼠の如くに走り歩いた晝過、寒中の額に汗を拭きながら、

『大將、うめエところを見付けましたよ、靈巖寺前から高橋を渡ツて本所の二つ目へ行く林町の此方、彌勒寺の裏で入片町といふ淋しい事は淋しいが、騷々しい世間離れのした六軒並びの東寄り二軒目だ、南は小名木川、北は竪川、西へ出ると大川端の新大橋に近い御舟藏で、浮世を忍ぶ意氣な世帯には申分のねエ場處だ、こゝも前が寺町で直ぐ其處は正覺寺橋、今度も寺の背後で直ぐ目の前が彌勒寺橋、どうも寺に縁があり過ぎて、ちと無常を感じますがね、店を開いて商賣するぢやアなし、家賃の安いので堪忍しませうよ、六疊と四疊半と入口の三疊だ、小ざツぱりとして月に二朱ですよ』

『よく饒舌るね、その勢ひでは無常を感じさうもないぜ、はゝはゝ』

『かうなりやア膏が乘ツて來ますよ』

『なアに、寺の前でも背後でも宜い、どうせ人間の納まりは墓場へ行くンだよ、極めて來たのか』

『そツくり雜作が付て居て、こゝから運び出す荷物も何もねエから早速、引ツ越しませう』

『荷物はないが、厄介な生荷物があるから日中を避けて、そろそろ暮れかける頃に出かけよう、六年も住で居た一蓮托生だ、それとなく餘所ながらの暇乞ひでもして行けよ』

『おい幸さン、おめエ幾歳になるンだツけな、何、五十二だ、乃公よりも十歳も上の兄で、おまけに十三年この長屋に頑張ツてると威張りぬいてるンだから七年も多いが、いよ〳〵こゝで往生する覺悟かね』

『いやな事をいふぜ、無理に頑張ツて威張りぬいてる譯ぢやアねエが、どうにも、かうにも仕方なしの古顏になツて仕舞ツたンだよ、これでも今に貧乏神の氏子を免れようと思ツてね、長屋中へは內々だが實ア長さン、毎日そツと金を溜め込でるンだ』

『や、そいつア知らなかツた、人は見掛けに依らねエもンだな、をり〳〵斷食してるのは福の神を祈ツて居たンだね、毎日、幾何づつだ』

『十三年前に氣が付けば遠の昔、こゝを出るが少々、遲かツたよ、先月からだ、毎日、三文づつ襤褸財布に入れて長屋の奴が

目の届かねエところへ隱してあるンだ』

『ちよいと待て、日に三文づつとして月に九十文、二月で二九の百八十文、二百に足らないぢやアねエか』

『そこだよ平生の用意といふのは長さン、二百文の上へ大將の小指を預ツて二日目だから四百文といふ不意の飛入があるだらう、合して六百だ、この分で四五十年も立ツて見ろ、塵が積ツて山だよ』

『おい／＼幸さン、まだ四五十年も生きる勘定してるね、いくら貧乏恍けに恍けても哀れツぽい事をいふよ、こゝに三貫あるからね、まアこれで元氣を付けて、もう少し理窟に合ツた貧乏勘定するが宜い』

『えツ、三貫、こりやア全體、どういふ譯だ、どツから出るンだ』

『乃公が出すンだよ、大將、あの女を連れて急に上方筋へ行く事になツたからね、これ幸ひに道中、乃公も東海道の見物かたがた、送らして貰はうといふ考へだが、旅へ出りやア氣が變ツて、其まゝ一緒に上方へ落付くかも知れねエ、うよ／＼と多勢この長屋の中で六年の間、いやな面もせずに話し合ツて來たのは幸さン、おめエだけだ』

『三貫の錢は有難いが、此まゝ長さンに別れちやア心細いよ、どうせ道中の入費も掛るこツたから、それを貰ツて置て、見送りは品川か神奈川あたりで』

『さう吝臭く貧乏根性を剝き出して、ずるい事は出來ねエよ、一文なくツても大將には氣で買はれてる乃公だ、なアに上方の水に合はないとすれば、すぐ引ツ返して來るさ、然し幸さン長屋中へ觸れちやア困るよ、おめエだから三貫の錢を添て打明けるンだ』

『いつ行くンだね』

『さア、二三日の內だが、うるせエから外の奴には默ツて、もし口を辷らすと三貫、取返すぜ』

『三貫の口だ、裂けても生涯、いはねエ』

『はゝゝ旅へ出た後は宜いよ、煙のやうに消て無くなるよりも實ア上方へ往ツたと、觸れてくれた方が宜いンだ、わかツたかね』

なか／＼長さン脫落はない、敵を謀るは味方にありといふ事を聞き嚙ツて居て、幸助には二三日の內といひながら、その日の夕暮れ前には萬事の用意、用意も何もない九尺二間の空屋同然で身躰だけ拔けて出る用意、紙屑を入れる鐵砲笊へ鍋釜と小皿と飯櫃と茶碗の箸まで押込み、古布子一枚に頰被

りの鎧兜、色の褪めた千草の股引を脛當として、尻からげの尻きれ草履に糾れた小倉の帶、

『さア大將、これで落武者の出立は出來ましたよ』

勘兵衞も相變らず着のみ着のまゝの着流しで、手荷物は被り馴れた編笠一介、まだ脇差は賣らぬ前の兩刀を落し差、どこから見ても知行放れの浪人風に凄味のある男、

『かういふ時は手輕で宜いね、面倒な家庫を持ッてる奴の氣が知れない』

人目を忍ぶ身の鶴吉は遁げて來た時と同じ姿で、お高祖頭巾に鼻まで包み目ばかり出して居るが、樂屋からの歸りに商賣物へ風を引かすまいと無理な厚着にされたのが結句の幸ひ、お召縮緬の綿入二枚、荒い八反織の女羽織、友禪の長襦袢を肌に纒うた風情芝居を其まゝの色氣があり過ぎて、

『ねエ大將、こゝで意氣な出語りがあツても宜いところですぜ、こそ〳〵此まゝの闇に紛れて行くなア惜い氣がしますよ、どツからか遠音に新内の流しでも聞えて來ませンかね』

『乃公も隨分、暢氣な方だが、きさまも負けないね、おい、お前、口三味線で何か遣らないか』

『わたし、そンな氣になれますかね、長さン、早く連れて往ツて下さいよ』

『寒いのか』

『寒いぐらゐ、何とも思ひませンが、一時も早く落着て、ほツとしたいンですから』

『かうなれば地獄の釜の上でも落着て居ろ、さンざ見物を馬鹿にして來た舞臺度胸を出せ』

『わたしのため、こンな事になるンですねエ』

屑長まづ長屋の前の海福寺、その門前に待受けて居ると、怖いものに追はれたやうな鶴吉、ちよこ〳〵と小走りに出て來て、殿は勘兵衞、

『まア、ほゝゝゝ』

仙臺堀の正覺寺橋を渡りて、高橋への道を伊勢崎町と西平野町との間まで來ると、靈巖寺前の方から四五人の話し聲で、どや〱と急ぎの荒い足音、

『をかしいぞ長助、横へ、横へ』

鶴吉の手を取りし長助、宵闇の河岸傳ひに横道へ五六間、勘兵衞は其まゝ其奴等を遣り過さうとしたが、すれ違ひに振返りて星明りに透しながら、

『ちよいと待ツて下せエ』

『何か、用か』

『用があるから呼止めるンだ』

『人間違ひするな』

その中から一人、ぬツと身を寄せたのは例の武士で、戀の敵役に煽られて來た川瀨彌五郞、

『や、これだ、これだ』

ぐるりと前後左右を取卷かれた勘兵衞、少しも慌てない、

『世間には肖たものがあるぞ』

『盜人、たけ〲しいとは此奴』

『何、盜人』

『誘拐の生き盜人め、おのれの巢へ今、捜し物に行く途中だ』

『萬年町の裏長屋で塵は積ツてるが、猫一疋も居ないところへ何を捜しに行く』

『證據は擧ツてるンだ、默ツて戾れ、喰ふ事も出來ねエ痩せ浪人のくせに太い事をしやアがる、こゝで出喰したのは運の盡きだ』

『いや、乃公は乃公の用で出かけるところだ、行くなら勝手に行け、九尺二間の戶口に鍵も掛けてない』

急に首を縮めた小さい聲で、

『白狀するが實は今夜、これから兩國の廣小路へ女芝居を見に行くンだよ』

俄かに大きい聲で笑ひ出した勘兵衞、

『はツはツはツ』

勢ひ込で來た事は來たが、この五人の中に二人は大地へ叩き付けられて氣絕した奴、例の川瀨彌五郞は夜半の風に吹ツ飛された奴、あとの二人は初めての相手ながら、廣小路の女芝居を見に行くといはれた皮肉の大膽に笑はれて、うツかり手は出せない、

『外の奴は兎も角、そこに侍の風をして居る奴、兩刀の手前、どうした、人斬庖丁が拔けないか、竹光でもあるまい』

すぐに飛掛ツて來る敵よりも恐ろしい、

『つい其處に仙臺堀がある、五疋とも濡れ鼠になるか、それとも身躰から赤いものを出したいか望み次第、どツちでも好きな返答しろ』

ます〱掛れない、向ふ見ずの無茶も無鐵砲も、かう度胸よ

く平氣な相手には近寄れない、互ひに顔を見合して相談したでもないが、じり〱と言合したやうに思はず後へ退り出した時、だしぬけの不意に大喝一聲、

『えいツ』

横町に隱れて居た屑長も鶴吉も腸に徹へて、びツくりした途端に飛び上ツたほどの大聲で、そろ〱後へ引きかけた目の前の五人、わツと一時に狼狽へて、ばた〱と遁げ出した足音の方角を考へると、正覺寺橋を渡りし奴と元の道へ引ツ返した奴がある、

暫く中腰に兩方を透して居た勘兵衞、のそ〱横町へ歩いて來て、

『さア行かう、まづ一人も怪我をさせずに濟ンだ』

『驚きましたね大將、あンな恐ろしい聲が何處から出るンですよ、こゝに蹲踞ンで居たンですが、おもはず尻餅を搗きましたぜ』

『わたし、まだ胴震ひが止まりませンよ』

『はゝゝゝあれが武道一喝の氣合で、無劍の盾拔きといふもンだ、修行の足らない奴が出すと、あの拍子に此方が遣られる、臆病の無我夢中に來るのは却ツて、防げないからね、はゝゝゝもう宜いが念のため、まはり道をして行かうか』

『ぢやア此まゝ大川端へ出て右へ新大橋の手前から、六間堀を越て這入りませう、あの氣合で怒鳴付けると大將、どンな借金取でも目を舞しますね』

『はゝゝ馬鹿な事いふな』

年の瀬に近い師走の二十一日で、闇の中から水の上を吹て來る大川端の北風、ぞツと一時に總身の毛穴が立つ、

『冷えるなア』

『お寒ければ、わたし、羽織を脱ぎませうか』

『それぢやア色男になり過ぎるよ』

あくる日の朝、目の色を變へた太夫元の鬼熊が七人の荒男を連れて、萬年町の裏長屋へ乘込で來た勢ひ、たとひ前夜の内に玉は外へ隱しても野郎を免さぬ覺悟で、

『どこだ、どこだ』

戀敵の川瀬に聞いて來た奴、

『親方、突當りの右ツ側の端ツこですよ』

『何が好くツて、こンな乞食小屋のやうな穴へ遁げて來やアがツたンだらう』

がらりと入口の戸を引開け、中を見ると人影もない、三軒目の幸助、何事かと出て來たのを幸ひ、

『おい、ちよいと聞くが、こゝに巢くツて居た浪人風の奴、どうしたンだ』

『知りませンね』

『知らねエ事があるもンか、九尺間口の軒並びで加之も二三日

以來、野郎一人でねエ筈だ、この長屋に不似合の若い女が甘ツたれて居たンだらう』

『甘ツたれて居ましたかね』

『妙な返事するない、近處合壁の義理で、賴まれたかも知らねエが、たしかに見屆けた上で來たンだ、話し合の工合ぢやア一ぱい飲ませるぜ』

『飲まして貰はなくツても宜いが、實ア、わツしも驚いてるンですよ、きのふの晝過まで居たのが夕方前に見えねエンだ、何でも上方邊へ旅に出るといふ事を聞いたやうだツたが、よもや前夜の內とは思ひませンよ』

『何、上方だ』

『ゆふべ用があツて來て見ると、もう出た後だ、こりやア長屋中へ暇乞ひが面倒で、こツそり拔け出したンですね』

『ところが前夜、この近くで現在、出喰したものがあるンだぜ』

『はゝア、その時が旅立だ』

『女を連れて出たか』

『わかりませンね、なるほど、目の覺めるやうな若い女が二日ほどの間に一度、ちらと來た事は來たが、すぐ歸りましたからね』

『用心深く、始めツから外へ置いたな』

『全體、あの女ア何ですい』

『ありやア廣小路の人氣を背負ツてる女芝居の中村鶴吉で、それを野郎、いつの間にか咬へ出しやアがツて、乃公は太夫元だ、考へて見ろ、どのくらゐ稼ぐか、まだ先の長い金函だぜ、とンでもねヱ毒虫に喰はれて仕舞ツた、嘘にも上方への高飛とは、ふてヱ野郎だ、仕方がねエ、一まづ今日は此まゝに引揚げて、全く品川を出たか出ねヱか、詮議の工夫があるンだ』

たツた一夜の手後れで、まンまと取逃した鬼熊の無念殘念、どこへ遣り場もない地團駄を踏みながら、ぐわら〳〵と出て行く後は長屋中また幸助を取巻て、

『幸さン、ありやア何だい、どうしたンだい』

幸助も聊か殘念な面で、

『大變だよ、道理で綺麗さが素人放れをして、圖ぬけてると思ツた、舞臺を見た事アねヱが、あれが噂に聞いた中村鶴吉だツたとよ、長さン知らない筈もねヱに、どろンを極めるまで默ツて居たンだ、また大將も大將だ、あンな金函を引ツこ抜いて來て、をり〳〵迷惑らしい顏をして居たぜ、揃ひも揃ツて三人とも、たゞの鼠ぢやアねヱな、然し乃公だけには善くしてくれたよ、前夜、もぬけの殼を見て驚いた時、隅の方に寢蒲團を疊ンであツてね、その上に半紙で幸さンへと書てあツたからな、早

速、貰ツて置たが、まさか前夜、不意に出るとは思はなかツたよ、これぢア戀の道行で上方へ飛だのは、ほンとうだ』

二朱の前家賃を拂うて、家主に貸蒲團の世話を頼み、手早く拭き掃除までした長さン、あけの朝また鐵砲笊を背負うて飛出し、ごちや〳〵と何か押込で來たが、門口で、

『くづい、くづい、お拂ひ物は御座いませンか』

ぶツと吹き出した勘兵衞、

『ふざけずと早く這入れ』

鐵砲笊を卸しながら、

『ふざけてるンぢやアありませンよ、六年間も沈ンで居た長屋を這ひ出して、いよ〳〵屑屋の緣も切れるンですからね、お名殘りに一度、やツて見るのは人情でせう、この鐵砲笊も隨分、長い間の共難儀をしてくれましたぜ』

『なるほど、お別れだな、時に今朝その鐵砲笊へ何を入れて來たンだ』

『あの急場で前夜は飯も炊けなかツたから、さしあたり米を二升、焜爐に土火鉢、秤り炭、金盥、檜杓に俎、庖丁はあツた筈だ、水瓶は幸ひ前の借手の置土產、お互ひの手枕で濟ンだでせうが毎晩ぢやア腕が草臥れますよ、はゝゝところで男枕が二個に色氣のある朱塗の女枕が一個、まア持ツて來られなかツたものを大略、ざツと買ひ込で來ましたよ、足らねエものは、ぼつ〳〵これからだ』

舞臺の落人にも通行にも馴れて居るが、眞面目の本氣で浮世の苦勞には始めての鶴吉、

『もし、長さンが居ないと、わたし、どうして宜いか、まごまごしますね、ほゝゝこれからは、役に立ちませンが萬事、教へて下さい』

『かうして、かうなれば、それも嬉しい樂みの一事でせうが、なアに此方も手を空けて、ぼンやりしちやア居れませンよ、半日ぐらゐ何か內職でもせうかと思ツてるくらゐだ』

『わたしも遊ンで居るよりは、何か、する事ないでせうか』

『さアね、うか〳〵當分まだ外へも出られないから、大びらに看板を掛けて踊りの師匠も出來ますめエし、やはり大將を好い加減に介抱してるンですね』

『乃公は病人でないぞ』

『あンまり大事に掛け過ぎると、いくら丈夫な身体でも次第に弱ツて來て、煩ひますよ、はゝゝ』

『どうして、さう、とぼけた面白い男に出來たかなア、あの長

屋で陽氣に暮せた筈だ、きさまを產だ親を見たいね、はゝゝゝ』

『大將、これでも腹からの屑屋ぢやアありませンぜ、阿父は律義一方に織物問屋の大店を勤め上げた堅氣で、阿母は田舍もンですが同じ家に十年も奉公したといふ辛抱人ですよ、それが夫婦になツて、細々ながら食ふ心配のねェ世帶を持つて、どンな几帳面の伜が生れるかと思ひの外、こンなものが出來て仕舞ツたンだ、困りましたね』

『困ツたなア、はゝゝゝ然し人間まだ四十二だ、五十年の通り相場に八年もあるから、乃公と一緒に出直せよ、實は乃公もね、いろ〳〵の譯があツた今までの事を手習ひ草紙として、これから硯も筆も改めて淸書する心算だ、この鶴も亦、かういふ成行で、かうなツた以上、さらりと今までの芝居氣を離れさして、うぶの素人から仕立て直して見る考へだ、水の流れと人の行末といふが、緣あツて寄合ツた三人、その流れの末を泥にしたくない』

『全くですね、この新世帶から出直しませうよ』

『新世帶といへば、鶴の巾着錢で三兩と幾何だツたから、もう後になからう』

『おれで助かりましたね、何まだ一兩二分ばかり殘ツて居ますから二月は平氣だ』

『いや、夜具も日錢の借物だし、かうなると乃公も此まゝぢやアね、きさまも布子一點の寒曝しは可哀さうだ、第一また鶴も素人らしい着替が入るよ、ぞろ〳〵この風も隣り近處へ目に立ツて、いけない、その外にも入用だから脇差、いよ〳〵放さう、小柄を賣ツたのは二つ目の津國屋といふ刀屋だツたな、今度は長助、乃公が賣りに行く、きさまでは少々、荷が勝ち過ぎる』

『ですがね大將、鐵砲笊の別れと違ツて、侍の道具だ、武士の魂ひともいふぢやありませンか、こゝに二月の用意があるンですから、さう急がなくツても宜いでせう』

鶴吉も眉を顰めながら、

『わたし、この着物を脫いで、木綿物になりますよ』

勘兵衛は首を横に振りて、

『お前の着物を木綿物にして、幾何になるンだい、賣らねばならぬ時は、生命でも惜氣なく賣り飛す乃公だ、丸腰になるンでない、一本を殘せば外の奴の十本や二十本よりも用が足りる、たとひ空手でも魂ひは確かだ、はゝゝゝ贅澤は出來ないが、ゆツくりと分相應に不自由のない一年分を拵へて置て、萬事それからだ、よけいな口を出さずに二人とも、默ツてろ』

平生の冗談は冗談でも、かういふ時の勘兵衛、かうなれば、ぴりゝとして、ぐうの音も出させないが、すぐにまた柔かく碎

けて鶴吉に向ひ、
『これは念のため、聞いて置かねばならない、そも／＼の始め、あの芝居裏で不意に乃公の身体へ獅嚙み付た翌日、のこ／＼高島田で萬年町へ出て來たのは、その時、小屋ものに後を隨けさしたといふこツたが、その小屋もの、どうした』
今更、ぽツと顏を赤くしながら、
『それは、樂屋で追ひ使ひの男、あの時に鼻藥を遣ツて置きましたから、親方へも誰へも漏す筈はありませンよ、自分の落度になるンですもの』

『前夜あの途中で、あゝいふ事のあツた今日は、きツと新手の奴を向けたに相違ないが、さうすると、やはり案内した奴は例の二本棒だな』
『外に、知ツたものはありませンからねエ、もし知ツて居れば、かうならない前に押へられますよ』
長さン横合から小氣味よげに笑ひ出して、
『はゝゝ一歩お先へ御免を蒙ツた後へ、馬鹿な面を揃へて何を探しに行きやアがツたか、月夜に釜を拔かれたより

も殘念な上塗で、あツと呆れて驚いて、ぱちくり目ばかり剝いたでせうね、好い氣味だ、然し大將は前夜、星明りにしろ顔を見られて居ますからね、油斷が出來ませンぜ、外出に編笠は放せませンぜ』

『なアに、鶴の手でも引いて歩かない以上、乃公一人で何奴に出喰しても構はない、向ふから手を出せば向ふが怪我をするだけの藝だ』

『おツかねエ色男ですね』

『はゝゝ金はないが、力はあるよ』

『昔からの約束に外れてる』

『萬事が桁外れだ』

本所　二つ目の橋を渡りて、緑町の角にある津國屋、この邊での名高い刀屋で、その店頭に腰を掛けた勘兵衛、大刀一本は差して居るが、賣物の脇差は新らしい晒木綿に巻付けて、編笠を脱がない、

『見られる通りの風體、尾羽うち枯した浪人、何とも致し方のない譯あツて、これを買うて貰ひたい、流石に武士として面目

ない、笠は此まゝで』
實は肝の差替といふ言葉で、痩せ浪人の侍道具を見倒しに買ひ馴れた主人、小僧に茶を出さして、損のない頭を幾度も丁寧に下げながら、
『いや、もう、どちら様も世間からは分りませン御都合のあらツしやいます事で、へゝゝゝ兎も角も一應、お道具を拜見いたしませう』
『粗末な品で』
『恐れ入ります』
　くる〳〵と晒木綿を解き、じツと見て居た主人、會釋と共に拔いた二尺三寸餘、暫く目鏡越に打守りて、
『これは、けツこうな名作で』
『誰と見る』
『城州物、來家の弘安年間、吉正では御座いますまいか』
『いかにも鑑定、その通り』
『御重代で御座いませうな』
『重代の家も名も亡びた身、刀の亡び行くは是非もない、實は粧飾も一度、賣り拂うて二度目の間に合せぢや』
『いや、お道具は中味で御座いますよ』
いよ〳〵賣買の値段となりて、頻りに考へ込で居た主人、おもはず小膝を進めながら、
『いかゞで御座いませう、三十』
『三十兩か』
『五兩』
『三十五兩、賣り手が惡いな、はゝゝゝ』
『折角の、お拂ひ物、もう二兩も御酒肴と致しまして』
『三十七兩、四十兩、どうだな、納めるところへ納めたとすれば、たしかに五十兩以上、同じ弘安の吉正も作が勝れて居る筈』
『や、よろしう御座います、思召し通りに戴きます、わざ〳〵津國屋を指して、お越し下さいました事で』
　久しく目に見ぬ四十兩の小判を受取り、それを懷中へ入れて足早に立去りし勘兵衛、編笠に顔は見えないが、通り掛りに足を停めて店頭から見て居た一人の武士、これも編笠で、二つ目の橋を渡り林町を彌勒寺の裏門まで後を付けて來たが、入片町へ曲らうとした時、背後より不意の大聲で、
『田島勘兵衛、待てツ』
　田島といふ苗字は屑長にも鶴吉にも明した事のない勘兵衛、はツと思はず振返ると、同じ編笠で、
『來吉正の賣り手、聲、恰好、よもや間違ふまい、おのれには生命の用あるもの、運が盡きたぞ』

（次號へつゞく）

家庭サービス

細木原青起

（妻君のサービス）
主人が歸宅するとダンサーに扮した妻君、
『あら、よくいらしたのね、御馳走してお待ちして居りましたわ。』一二杯お酌をして『わたしステージ・ダンスを踊るわよ。』と日頃雑誌などで研究した處を踊つて見せる。
主人『いや此奴は素敵だ、モウ宅へ歸れないわい。』

（主人のサービス）妻君が買物をする場合、主人が三太夫の役を務める。
妻『チョ、チョイト。お前此の柄何う思ふ？』
夫『ハ、ハ、チョイト斯う袖に當て〻御覽遊ばせ、いやよくお映り遊ばします、夫れにお極めなさいませ。』
妻『では此れに極めますから、お前勘定を拂つてお呉れ。』
夫『承知致しました。夫れではモウお歸り遊ばしたら――。』

童話

ガラスの心臓

――この物語はお子様たちに是非讀んで上げて下さい。――

宇野浩二
耳野卯三郎畫

一

むかし、ある國の王樣に、三人の姉妹のお姫樣がありました。王樣のお姫樣ですから、何の不足もないわけですが、どういふわけか、三人が三人とも、生れつき、心臓がガラスでした。

母のお后樣は始終そのことを心配して、お姫樣たちの小さい時から、口ぐせのやうに、

『お前たちは、何をしてもいいけど、心臓を氣をつけなければいけませんよ。お前たちのはみなガラスなんだから、無理をすると、直ぐこはれますよ。』と、いひ聞かせました。

姉妹のお姫樣たちは、みなそのいひつけを守つて、心臓に氣をつけてゐましたので、何年かの間はことなく過ぎました。

ところが、ある日、一ばん姉のお姫樣が、窓にもたれて、お庭の景色を見てゐますと、ふと目の前に、一羽の蝶が飛んで來ましたので、お姫樣はそれを捕へようとして、窓のふちに、思はず胸を強くつけた拍子に、ガチヤリ！と、變な音がしました。

それはガラスの心臓がこはれた音でした。ですから、その音と一しよに、姉のお姫樣は、後に倒れたまま、息が絶えてしまひました。

この事があつてからは、後に殘つた二人のお姫樣は、一そう自分たちの心臓に氣をつけるやうになりました。

ところが、それから何年か後のある日、二番目のお姫樣が、

お庭をあるいてゐる時、ふとよそ見したために、石につまづいて、ころんだことがありました。その時、胸の中で、ギツ！といふ音がして、二番目のお姫様は、その場に倒れてしまひました。

それを見ると、お傍についてゐた人たちが、驚いて、介抱しますと、間もなく、倒れたお姫様は、息をふき返したらしく、目を開きました。やがて、お醫者が來て、しらべますと、さいはひ、ころんだ時に胸を打たなかつたとみえて、少しひびが入つただけで、心臓はこはれずにすんだといふことでした。

しかし、後で、そのことを聞いたお后様は、心配のあまり、王様に、

『心臓は助かつたといふものの、ひびが入つたといふのですから、いつかはこはれて、又、姉娘のやうなことになりはしませんでせうか？』と、いひました。

それを聞いた二番目のお姫様は、父の王様と母のお后様の前に出て、

『その事なら、どうぞ御心配下さいませんやうに。大事にさへしたら、あのひびの入つた壺の譬へ話のやうに、井戸の水を汲むのに、ひとより數を多く、ゆつくり汲みさへしたら、ひびのない壺と同じはたらきが出來る、といふやうなものですから、どうぞ、御心配下さいませんやうに。』と、いひました。

父の王様も母のお后様も、この二番目の娘の利口な言葉に、心の中で、感心しました。……

話かはつて、三番目の、一番下のお姫様は、一人ならず二人まで、姉たちが失敗をしたことを見てゐましたから、母のお后様のいひつけを、十分氣をつけて、守りましたので、無事に大きくなつてゆきました。

殊に、この三番目のお姫様は、姉妹の中で一ばん美しい生れつきでしたから、年頃になると、方々の國々の王子たちや、大金持ちの息子たちが、お嫁にもらひたいと望んで來ました。

しかし、父の王様は、

『もう私にはちやんとした娘はあれ一人きりだから、めつたなところへ嫁にやつて、心臓をこはされては、取り返しがつかない。もし嫁にやるなら、身分はやはりどこかの王子でなければならぬが、ぜひともガラスの心得のあるものか、ガラスの職人でないと困る。何しろ心臓があゝいふこはれ易いものだから、その扱ひ方や直し方を心得てゐるものでないと……』と、考へました。

この王様の考へはもつともでしたが、王子や金持ちの子には、ガラスの職人どころか、ガラスの扱ひ方を心得てゐるものなど

ある筈がありませんから、それを聞くと、お嫁にもらひに來た人たちは、みながつかりして歸つてしまひました。

二

さて、この王樣の御殿には、王樣には王樣の、お后樣にはお后樣の、お姫樣にはお姫樣の御用をつとめる、小姓といふ役の少年が、それぞれ何人かゐました。

その中で、この三番目のお姫樣づきの小姓の一人で、もう一人前の年頃になつて、近いうちに、別の役にかはることになつてゐる小姓がありました。

三番目のお姫樣づきの小姓といつても、ほかに大ぜいの小姓がゐましたので、この小姓のする役目は二つしかありませんでした。その一つは、お姫樣が外をおあるきになる時、その長い着物の裾を持つ役で、その二つは、晴れた日は日傘をさしかけ、雨の日は雨傘をさしかける役です。

さて、その小姓が、後三日つとめたら外の役にかはるといふ、その第一の日のことでした。その日は大へん暑い晴れた日でした。この日、その小姓は、長い柄のついた日傘を、お姫樣の頭の上にさしかけながら、お姫樣のお庭の散歩のお供をしました。

お庭の散歩が終つて、お姫樣は、お庭から御殿の階段をお上りになる時、その小姓の方を向いて、『御苦勞さま。』といつて、につこりお笑ひになりました。

お姫樣がこんなに言葉をかけたり、

笑ひ顔をされたのは、この小姓にとつて、生れて初めてでしたから、小姓はその晩うれしくて眠れないくらゐでした。しかし、それは利口でやさしいこのお姫様が、あと三日したらこの小姓と別れることを惜しんで、言葉をかけたり、笑ひ顔をされたのかもしれません。

ところが、この小姓の喜びはその翌日もつづきました。といふのは、その翌日はかなりひどい雨降りでしたのに、三番目のお姫様が『今日もお庭を散歩したい。』といつて、この小姓にお供をいひつけられたからです。

そこで、この日は、小姓は、柄の短い雨傘を、お姫様の頭の上にさしかけながら、雨のお庭の散歩のお供をしました。そればかりでなく、雨のおかげで、小姓は、お姫様の近くに寄り添ひながら、お供することが出來ました。そして、この日も、お姫様は、散歩を終つて、御殿の中に入る時、小姓の方をふり向いて、

『今日は雨の中を、ありがたう。』と、あいさつをされました。

小姓は、その晩はうれしくて、明日が樂しみで、一晩ほとんど眠れませんでした。

ところが、その翌日の朝は、思ひがけないことが起りました。それは其日から小姓の役を止させられる事になつたからです。

『お前も長い間よく勤めてくれたから、一日も早く上の役に上げてやるやうにと、昨夜お姫様からお達しがあつたのだ。喜ぶがよい。』かう小姓頭からいはれたのです。

小姓は、役を上げてもらふ嬉しさよりも、これきりあの情深いお姫様と別れねばならぬかと思ふと、悲しくなつて、しばらくその場にぼんやり立つてゐました。そこへ、お姫様が見えて、

『お前は本當にいつもよくしてくれました。お前がほかの役になつても、私はお前のことを忘れません。お前が、もしどこかの王子で、そして、ガラスの職人だつたら、どんなによかつたらうにね？』と、いひました。

小姓はお姫様からこんなやさしい言葉をかけられたのが嬉しいと共に、王子でガラスの職人でないことがくやしくてたまりませんでした。そこで、お姫様と小姓頭にお別れのあいさつをして、御殿を出ると、駈け足で町へ出ました。そして、とあるガラス屋の前で止まりました。

『私は一人前のガラスの職人になりたいんですが……？』と、尋ねますと、

『さあ、一人前のガラスの職人になるには……』と、主人のお爺さんは、眼鏡ごしに小姓の顔をぢろぢろ見ながら、『まあ、四年わしの家で辛抱して働くつもりなら、お前さんの心がけ次第

でなれるだらう。その代り、初めの一年は、小僧のやうに使にやられたり、下女のやうに食べ物のこしらへをさせられたり、また、子供の守をしたり、洗濯ぐらゐさせられる覺悟がなければ駄目だよ。その代り、二年目からは、こはれたガラスを切ることを教へてやる。三年目には、ガラスをついだり細工することを教へてやる。それで、四年目には、ざつと一人前の職人になれるわけだ。どうぢや、それだけの辛抱が出來るかね？』と、いひました。

　小姓は、とてもそんな長い間の辛抱は出來ない、と思ひましたので、初めから、ガラスを切つたり、ついだり、細工したりすることを教へてほしい、と頼みましたが、ガラス屋の主人は頭をふつて、

『そんな心がけでは、とても一人前の職人にはなれない。そんな者はわしのところで世話するのはごめんだ。』と、いひました。

　そこで、小姓は、思ひきつて、四年間その家で、ガラス職人の修業をすることにしました。

三

　主人がいつた通り、初めの丸一年間は、ガラス屋の弟子になつた小姓は、使に走らされたり、食べ物の支度をさせられたり、子供の守をさせられたり、きたない着物の洗濯をさせられたりして、暮らしました。

　が、二年目になると、約束どほり、ガラスを切ることを教はりました。が、一年間、ガラス切りばかりさせられました。しかし、三年目には、ガラスをつぐことから、いろいろな細工をすることを教へてくれました。そして、四年目には、主人のいつた通り、ざつと一人前の職人になりました。一人前の職人になつてから、一年間はたらいて、小姓はやつと主人の家からひまをもらひました。

　そこで、小姓は、四年ぶりで職人の着物をぬいで、王樣の御殿に歸らうと思ひましたが、

『さア、もう一つのことを、どうしたらいいだらう？』と、思案に暮れました。『もう一つのこと』といふのは、『ガラスの職人であつて、王子か大金持ちの息子でなければいけない』といふことです。

　思案にあまつて、ぶらぶら道を歩いてゐますと、すれちがつた一人の男が、小姓を呼びとめて、

『もしもし、お前さんは何か大へん考へ事をしてゐるやうだが、何か落し物でもしなすつたか？』と、尋ねました。

『いえ、落し物ではありませんが、まア、探し物をしてゐるや

うなものです。』

『何を探してゐるのです？』

『どこかに、王子のない國がないか、と思つて、思案にあまつてゐるのです。ぜひ、王子か大金持ちの息子かにならないと、都合のわるいことがありますので……』

『それはわけのないことだよ。大金持ちの息子の口は知らないが、王子の口ならもしお前さんがガラスの職人なら、すぐうまい口があるよ。』

『ほオ！　私はそのガラスの職人なんですが……？』小姓は不思議さうに、相手の顏を見ながら、尋ねました。

『それぢやア、申し分なしだ！　今から四年ほど前に、この國の王様が、どこかの王子で、ガラスの職人の心得のあるものがあつたら、後とりのお姫様の婿――つまり王子にしたい、とおふれになつたことがある。それがなかなか見つからないので、今度新らしい條件が二つ添へられたのだ。』

『どういふんです、その新らしい條件といふのは？』小姓はせきこんで尋ねました。

『第一の條件は、そのお姫様が見て、氣に入つた人であればいい、といふこと、第二の條件は、王子でなくても、お姫様とつり合ふ身分のものならいい、と、かういふんだ。そのおふれが出てからといふものは、一日に何人となく、ガラスの職人が御殿へお目見えに行くさうだが、何しろ根が職人なものだから、一人としてお姫様のお氣に入るものがない。つまり、どんな立派な風をしてゐても、顏や形がどうしても職人に見え

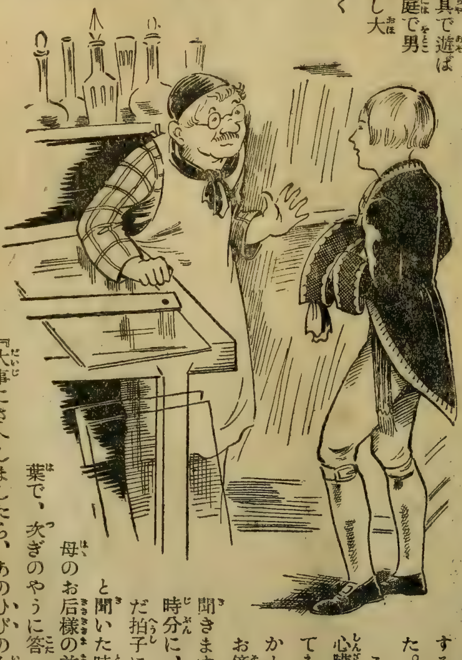
るといふのだ。それにしては、お前さんは、見たところ、職人らしいところがちつともないが、もしお前さんが本當にガラスの職人だつたら、これから直ぐ御殿へ行つてみるといい！』
　この言葉を聞くと、小姓は、嬉しさのあまり、道のまん中で蛙のやうに三度ばかり跳ね上がつて、それから教へられた人に『ありがたう。』と禮をいふなり、王様の御殿目ざして、飛ぶやうに駈け出しました。

四

　小姓は、御殿につくと、さつそく家來の人にその用向きを話しますと、控への間に通されました。しばらく待つてゐると、王様と、その後から、四年ぶりに見る、三番目のお姫様が、入つて來られました。
　王様は、この小姓を御存じありませんから、
『どうぢや、この男はこの間ぢうから來た中で、一ばん男らしい、立派な樣子ぢやと思ふが、お前はどう思ふ？』と、お姫様をふり返つて、たづねました。
　その言葉と一しよに、お姫様は、何氣なく、そこに待つてゐた、若い男の顏を見ますと、はツとしました。四年前まで自分についてゐて、それからどこかへ行つてしまつた、あの小姓だつたからです。
『結構です。』と、お姫様は半分口の中で答へました。
　しかし、王様には、お姫様の聲が聞きとれなくても、その樣子で、その男がお姫様の氣に入つたことはすぐ分りました。
　そこで、この昔の小姓は、たうとう望みどほり、お姫様の婿に選ばれて、王子になりました。それに、この王子は、ガラスのことでは四年間の修業を積んでゐたのですから、昔のお姫様、つまり今のお后様が、どんなことをしたら、ガラスの心臓に害があるか、どういふ風にしたら、ガラスの心臓のためにいいか、といふやうなことを、よく心得てゐましたので、お后様はガラスの心臓の養生法をすつかり覺えてしまひました。
　さういふわけでしたから、この王子の御夫婦は、お傍の人たちからうらやまれるほど、幸福でした。そればかりでなく、このお后様はずゐぶん長生きされた上に、ガラスの心臓を、亡くなる時まで、一度も痛めたことはありませんでした。それに、立派な王子も生れました。
　さて、娘の時分に、ガラスの心臓にひびの入つた、二番目のお姫様は？　といふと、この人も長生きをして、王子のよい伯母さんとして、一生を送りました。

この王子の伯母さんになつた、二番目のお姫様は、自分の不注意のために、心臓にひびが入つたのを、不仕合せとあきらめて、甥の王子を育てることを、自分の一生の仕事にしました。王子が赤ン坊の時には、玩具で遊ばせ、少し大きくなると、お庭で男らしい遊びをさせ、もう少し大きくなると、讀むことや書くことを教へるといふ風に。

そして、小さい王子が、學科がよく出來たり、よい行ひをしたりすると、このよい伯母さんの顏は、まつ赤な薔薇色になりました。これは心臓が弱いので、嬉しいと思ふだけでも、顏色に出るのでせう。ですから小さい王子が、學科をなまけたり、良くない行ひをしたりしても、やはりこの優しい伯母さんの顏は、まつ赤な薔薇色になりました。つまり、悲しいと思ふだけでも、直ぐ顏色に出るのです。



しかし、利口な王子は、この伯母さんの同じまつ赤な、薔薇色の顏色の中に、喜ぶ時と悲しむ時とにはちがひのあるのを知るやうになつて、なるべく伯母さんの顏色を喜びの薔薇色にするやうに、と心がけました。

この弱い、ひびの入つた心臓を持ちながら、どうしてそんなに長生きをされたかといふことを、ある時、お傍のものが、それとなく聞きますと、伯母さんは、娘の時分に、石につまづいてころんだ拍子に、心臓にひびが入つたと聞いた時、心配する父の王様と母のお后様の前で、いつたのと同じ言葉で、次ぎのやうに答へました。

『大事にさへしましたら、あのひびの入つた壺の譬へ話のやうに、井戸の水を汲むのに、ひとより數を多く、ゆつくり汲みさへしたら、ひびのない壺と同じはたらきが出來る、といふやうなものでせう。』

(をはり)

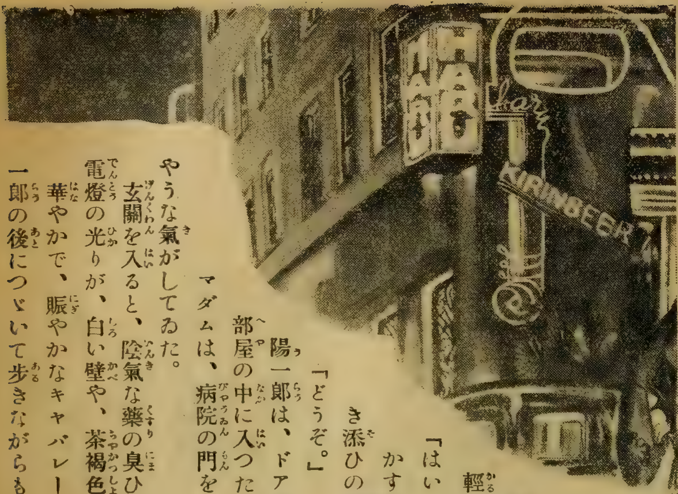
長篇小説

薔薇色の道

中村武羅夫
寺本忠雄畫

放埒乍ら純情な高濱陽一郎は、瀕死の床の踊子マユミを、止み難い眞心から看護つてゐた。然るにマユミの雇主マダム・テル子は、此事實を恣に曲解し、陽一郎の許婚早苗に、あらぬ我邪推を打明けたのみか、自分も爛れた妬心に身悶えしてゐた。だが其夜己が營むキヤバレーに現れた陽一郎の口から、『人一人幸福にする爲なら、水火を潜るも厭はぬ』と聞かされた彼女は、初めて二人の間の清いのを知り、急ぎマユミの病床を訪うた。マユミの手は既に、麻幹の様に細く冷たかつた。

（前號までの梗概）



闘ふこゝろ

「こゝです。」

長い廊下を歩いて、或る部屋の前に立ち留まると、陽一郎は輕く、コツ、コツと、ノックした。

「はい。」

かすかに返事が聞えたけれども、それはマユミの聲ではなく、附き添ひの看護婦に違ひなかつた。

「どうぞ。」

陽一郎は、ドアを開けると、後に附いて來てゐたマダムを振り返つてから、部屋の中に入つた。

マダムは、病院の門をくゞつた頃から、折角飲んだ洋酒の醉ひも、いくらか醒めたやうな氣がしてゐた。

玄關を入ると、陰氣な藥の臭ひが、ぷんと鼻を衝いた。廊下には、人の姿も見えず、薄暗い電燈の光りが、白い壁や、茶褐色をしたニス塗りの床板の上に、仄かに流れてゐる。

華やかで、賑やかなキャバレーの空氣と違つて、すべてが侘びしく、陰氣で、マダムは、陽一郎の後につゞいて歩きながらも、何度途中で引つ返して、逃げ出してしまひたいと思つたか

知れなかつた。

でも、部屋の入口で躊躇してゐたマダムは、陽一郎に促がされて、やうやく後につゞいたが、白いベッド、白衣を着た附き添ひの看護婦、ベッドの上に横はつたマユミの姿を見ると、胸が一ぱいになつて、足が立ち竦んでしまつた。

『君が會ひたがつてゐたマダムを、連れて來て上げたよ。』

陽一郎は、つか〳〵とベッドの傍に近づいて言つた。

『有難う。』

マユミは、閉ぢてゐた瞼を、かすかに開いた。

『こゝに來て、會つてやつてくれたまへ。』と陽一郎は、ためらつてゐるマダムを振り返つて言つた。

『えゝ。』

マダムは頷くと、そつとベッドの傍に、近づいて來た。

どうかすると、ひどく氣が強くなるマダムだつたが、根は善良で、やさしいところがあつた。陽一郎の父を、强請りに行つたり、早苗に會つたりした時の勇氣は、どこにもなかつた。

『よく來て下すつたのね。わたし、一度、會ひたかつたものですから。』と言ひながら、マユミはベッドの上に起き直らうとして、しきりに身を藻搔いた。

『いいのよ。そのまゝにしてゐらつしやい。』

マダムは、痛ましさうに眉をひそめて、溜息を吐いた。

『でも、惡いから。』

『構はないのよ。』

『折角、入らして下すつたのに。』

『もつと早く、來なければならなかつたのだけれども。』

『無斷で、お店を休んだりして、ご免なさいね。』

『病氣だもの、仕方がないわ。』

素直に謝まられて見ると、怒れないマダムだつた。

それに、たつた十日か、二週間くらゐしか見ない間に、すつかり見違へるやうに、マユミは憔悴れ果てゝゐた。眼がくぼみ、小鼻が落ち、顳顬のあたりの骨が鋭くなつて、相變らず美しいのは、房々したボッブと、白い額と、うるみを帶びた瞳と、それだけだつた。頰や、腮の肉が落ちて、唇の血の氣が褪せて、呼吸する度びに、痩せた胸のあたりが、喘ぐやうになつて、見てゐるだけでも、苦しさうだつた。

マダムは、マユミのその姿を一眼見た時、一切を許す氣になつてゐた。こんな事實とは知らずに、逃げたの何んのと、腹を立てたり、騷いだりしてゐた自分が、むしろ恥かしいやうな氣がした。

『わたしね、マダムに會ふまでは、氣が氣ぢやなかつたの。』

『どうして？』

『借金があるんですもの。それに、許しを受けないで、こんなに長く休んだりして……氣が氣ぢやなかつたわ。』

『まあ、そんなに氣にしてゐたの。』

『でも、マダムの顔を見て、これで安心したわ。』

マユミは、熱に潤んだ窪んだ瞳を輝かして、ぢつとマダムの顔を見上げて、ほのかに微笑した。これで、やつと一つの重荷を、降ろしたやうな氣がして――

『そんなことは氣にかけないでね、早く元氣を出して、癒つてくれなくちや、いけないわ。』

マダムは、力づけようとして言つた。

『えゝ。でも、とてもダメなの。』と、マユミは微かに言つて、力なく溜息を吐いた。

『何が、駄目なのさ。』

マダムは、ぎよつとしたやうな眼色をして、息を呑んだ。

『いくら、元氣を出さうとしたつて、どこからも、もう元氣なんか、出て來やしないんですもの。』

『そんな、氣の弱いことを言つて……』

マダムは、叱るやうに言つたが、皆な言ふことが出來ないで、つい口籠つてしまつた。いつの間にか、自分も涙ぐんで、今にも泣き出しさうなのを、ぢつと怺へるだけが、やつとだつた。

『借金はね、高濱さんが、片附けて下さるさうですから。』

『そんなことは、もう、どうだつていいぢやないの。』

マダムは、慌てゝ言つた。

『どうだつて、よくはないわ。それが、ちやんと片附かないと、わたし、死んだつて死にきれないの。』

『まあ。』

『借金を返して、わたし、自由の身體になつて死にたいの。』

『そんな水くさいことを言つちや、イヤだわ。』

『でも、わたしには、マダムの氣性や、手許が樂でないことだつて、ちやんと分つてゐるんですもの。』

『いくら、わたしの手許が苦しくたつて……今まで、ずゐぶん働いてくれたんだから、今更、そんな心配してくれなくたつて、いいの。それに、他人の高濱さんに、こんなに厄介になつた上に、借金まで返して貰ふなんて、あんまり、お氣の毒ぢやないか。』

『あら、わたし、高濱さんとは、他人ぢやないからいいの。』

『えつ、他人ぢやないつて？』

マダムは、さつと顔色を變へて、二人の顔を見比べてゐた。

陽一郎は、睫毛一筋、動かさなかつたが、マユミは仄かに微

笑を浮べて、ちらと陽一郎の凛々しい顔を一瞥してから、

『えゝ、他人ぢやないの。だから、構はないの。』

と言つて、一人で頷いた。

『それは、どういふ意味？』

マダムの美しい顔には、ひどく混亂した表情が現はれてゐた。

『何が？』

『他人でないといふことの意味なの。』

『あゝ、そのことなの。』

と言つて、マユミは笑つた。

『どういふ意味で、他人でないの。』

マダムは、何よりも、マユミと陽一郎とが、どんな關係だかといふことが、氣がかりだつた。

二人は、既に、身體の關係まで、すゝんでゐるのだらうか？お互ひに好きだといふことは、分つてゐるけれども、そんな關係にまですゝむ暇は、なかつたやうに思はれるのだが、でも、どうだか分らなかつた。マダムは、その眞相を、どうかして確めたいと思つた。

『そんなことは、どうだつて、いいぢやありませんか。』

マユミは、蒼白な顔を、ほのかに輝かして、微笑してゐた。

『いゝえ。どうでも好くはないのよ。』と、マダムは強く言つた。

『まあ。』

『高濱さんと、他人でないといふのは、どういふわけなの？』

『どうして、マダムは、そんなことを氣にするの？』

『だつて、それに依つて、お金を返して貰つてもいいか、悪いか、決まるぢやないの。』

『あら、さう。』

『だから、ほんたうのことを、知らせてくれなくちや。』

『わたしが、高濱さんと他人でないといふ意味はね……』

言ひかけてマユミは、口籠つてしまつたが、二つの瞳には、見る〳〵中に、うすく涙がにじんで來た。

『高濱さんと、結婚するの？』

と、マダムは、呼吸をはずませて、一生懸命に聞いた。

『わたしが？』

マユミは、ぱつと眼を見張つたが、瞼の中には、涙が一ぱい溜つてゐた。

『だつて、さうでもなければ、他人でないなんて、言へないぢやないか。』

『マダム、わたしは、もう直き、死なゝければならない身體なの。』

と、マユミは、絶望的に言つた。

『だつて、そんなことは、誰にも分らないぢやないか。』

『誰にも分らなくたつて、わたしには、ちやんと分つてゐるわ。』

『まあ。』

『こんな身體をしてゐて、どうして結婚など、出來るの！』

マユミは、自から憐れみ、自から嘲けり、自から悲しむやうに言つて、靜かに瞼を閉ぢた。

『だつて、好き合つてゐれば、どんなことをしたつて……』

『もう、何んにも言はないで！』と、マユミは相手に皆まで言はせず、はげしい調子で言つた。

『わたし、高濱さんと、結婚など、出來るものですか！　わたしが、高濱さんと他人でないといふ意味は、高濱さんと、わたしの妹とが、結婚するからなの。妹と結婚すれば、わたしだつて、決して他人とは言へないぢやないの。』

『妹と？』

　マダムは、信じ兼ねるもののやうに、そつと陽一郎の顏を見たが、陽一郎は默々として、顏色一つ動かさなかつた。

『えゝ！　高濱さんは、わたしの義理の弟なの。』

『わたしには、何んだか信じられないけれども。』

『マダムが信じて下すつても、信じて下さらなくても、事實は事實なのよ。だから、高濱さんが、わたしの借金を、きれいにして下さるの。』

『……………』

　マダムは、默つてゐた。

『さうでなければ、高濱さんが、あかの他人の面倒を、どうして、こんなに見て下さるものですか。』

『…………』

『わたしだつて、縁もゆかりもない人に、こんなにのめ〳〵と、厄介になぞならないわ。その上、借金まで返して貰ふなんて、そんな虫のいいことを、默つてして貰つたりするものですか。』

『…………』

『マダムは、わたしを、そんな意氣地なしだと思つてゐるの？』

『…………』

『わたしだつて、時と場合とでは、こんな境遇になつても、恥といふことだけは、ちやんと知つてゐるの。理由もなく人に厄介になつて、こんな病院に入つたり、藥を服んだり、養生したり、こんな柔かなベツドの上に寢かされたりするくらゐなら、わたしは、窓からだつて、どこからだつて飛び出して、犬のやうに地べたに寢るわ。報いることの出來ない恩を受けるなんて、わたし、そんな恥かしい眞似は、辛抱出來ないのだから！』

　マユミは、せい〳〵息を彈まして、キラ〳〵と瞳を輝かして、顏を眞赤にして、喘ぎ〳〵言つた。興奮して、胸元が苦しくなつて來るのだらう。時々、兩手で咽喉から乳のあたりを、掻きむしるやうにした。

『分つてゐるから、あまり興奮しない方がいいよ。』

　陽一郎は、靜かに宥めるやうに言つて、やさしく微笑した。

『あなたは、分つて下さるわね。ほんたうに、分つて下さるわね。』

と、マユミは、子供のやうに泣きながら、繰返した。
『分つてゐるとも！』
『有難う。』
マユミは、毛布を頭から被つて、しやくり泣いた。
マダムは、呆然として、その光景を眺めたまゝ、どう言つていいか、分らなかつたので、默つてゐた。

最後の望み

『少し氣を落着けないと、いけないよ。あまり興奮すると、また、熱が高くなつて、苦しくなるからな。』
陽一郎は、マダムを廊下の角のところまで送り出して、急いで病室に歸つて見ると、マユミは、毛布を被つたまゝ、まだ泣いてゐた。
『もう、何んにも、泣くことなんかないぢやないか。』
『えゝ。』
マユミは、毛布の下から、二つの眼だけ見せて、それでもまだ泣きながら、だが、素直に頷いた。
『一度會はなければ、氣が濟まないと言つてゐたマダムには、會つたのだし、氣にしてゐた借金は、拂つたのだし、これでいいぢやないか。』
『えゝ。』
『それとも、何かまだ他に、悲しいことでもあるの。』
陽一郎は、やさしく聞いて、微笑した眼で、マユミの顏を覗いた。
『何んにも、悲しいことなんか、あるものですか。』
『ぢや、機嫌を直したら、どうだ？』
『濟みません。あなた、怒つてゐらつしやるの？』
『どうして？』
『だつて。』
『何んにも、僕が怒るやうなことなど、ないぢやないか。』
陽一郎は、呆れたやうに眼を見張つて、首を傾げてゐた。
『わたしが、あんまり我儘だから、それで、あなたは、怒つてゐらつしやるのぢやないかと思つて。』
マユミの涙に濡れた美しい瞳が、おづ／＼と、陽一郎の顏を覗いてゐた。
『どうして、君は、そんなに神經質なんだらう。』
『ご免なさいね。わたし、これから氣を附けるから。』
『そんな、何も謝るほどのことぢやないけれども。』
『わたしに、我儘をさせて下さる？』

マユミは突然言つて、情に燃えるやうな眼を、キラ〳〵と輝かして、陽一郎の顏に見入つた。

『どうしたの？ 急に、そんなことを言つて。』

陽一郎には、マユミの感情の動きが、ちつとも見當が附かなかつた。

『わたし、もう長くはないの。二三日が、せい〳〵だわ。』

『えつ。』

陽一郎は、さつと顏色を變へた。マユミの言葉と、醫者の見立てとが、あまりに能く一致してゐるので、はげしい衝擊に打たれた。

どうして、そんなことが、分つたのだらうと思つた。醫者の話でも聞いたのか。それとも、いい加減な出たら目を言つたのが、まぐれ當りに、當つたのか。醫者や、看護婦が、患者に、その死期を、はつきり知らせる筈はないし、出たら目にしては、あまりに的中してゐるので、陽一郎は何んだか、氣味が惡かつた。

『わたしには、ちやんと分つてゐるの。もう二三日より、生きられないといふことが。だから一生の思ひ出に、我儘をさせてね。わたしは、あなたに、思ひきり甘えたいんですから、怒らないでね。』

『それは、いくら甘えたつていいし、そんなことでは、怒らないけれども……でも、二三日の壽命だなんて、そんなことは考へない方がいいよ。』

『えゝ。でも、考へたつて、考へなくたつて、同じことなの。』

『やつぱり、考へない方がいいさ。少し暢氣になつて、養生しなくちやイケないよ。』と、陽一郎は沁み〳〵言つた。

『有難う。』

マユミは、いつの間にか、また涙ぐんでゐた。

『少し、やすんだら、どう？』

陽一郎は、あまり長く話がつゞいたので、しばらくの間、病室を避けて、やすませた方が、いいと思つた。

『あら、もうお歸りになるの！』と、マユミの大きく見開かれた瞳が、不安さうに輝いた。

『いや、歸るわけぢやないけれども……』

『でも、どこかへ、行らつしやるのでせう？』

『君は、少し休んだ方が、好くはないかと思つて。』

『いいの！ わたし、やすまなくたつて。ですからどうぞ、こゝにゐて頂戴。』

『それは、君が、その方がいいといふなら、僕は、いつまでだつて、こゝにゐて上げても、いいけども。』

『それとも、あなたは、マダムと、何か約束をなすつたの?』

『えつ。』

『これから、どこかで待ち合せて、一緒に行らつしやるのぢやない?』

『どうして、そんな、へんなことを言ふの?』

と、陽一郎は、少し呆れると同時に、病的に動くマユミの神經が、痛ましい氣がした。

『だつて、マダムは、あなたに惚れてるんですもの。』

『そんなバカな!』

『いゝえ! わたし、一目見たゞけで、マダムがあなたを、どんなに好いてるかといふことが、はつきり分つたの。』

『そんな神經を廻して、つまらないことを言ふものぢやないよ。』

『あなたには、分らないのね。でも、女には、女の氣持ちが、手に取るやうに、はつきり分るわ。』

『僕は、マダムと會つたのは、今度が初めてぢやないか。』

『いくら初めて會つたつて、好きな者は好きなのよ。』

『だが、僕の方では、何んとも思つてゐないのだから、いいぢやないか。』と陽一郎は、どこまでたかぶるか知れないマユミの神經を、宥めようとした。

『わたしが死んでも、あなたを、マダムになぞ渡すものか! ね、どんなに誘惑されても、あんな女に引つかゝつちや駄目よ。マダムなんか、どんなことをしても、好きにならないでね。』

『大丈夫だよ。』

陽一郎は、きつぱり言つた。今まで、別に氣にもかけなかつたけれども、マユミにさう言はれて見ると、なるほど、マダムの態度には、ちよつとへんに思はれるやうなところが、ないでもなかつた。

だが、たとへマダムの方で、どんな氣持ちを抱いてるようとも、そんなことは、どうでも好かつた。マユミに言はれるまでもなく、そんなに輕々しく、女から女へ、渡り歩けるやうな、浮氣な性質の陽一郎ではなかつた。

『ちよつと、あなたの手を貸して。』

マユミは不意に言つて、骨と皮ばかりになつた細い手を、空に差しのべると、泳がせた。

『どうするの?』

『わたしの手を、握つて欲しいの。』

『えつ。』

『固く〳〵握つて。もつと〳〵固く、握つて。』

マユミの細い手は、少し濕つぽく、冷たくて、ぶる〳〵と顫

へてゐた。陽一郎の力強い掌に、ぎゆつと握りしめられても、その顫へは、ちつとも鎭まらなかつた。

『わたし、幸福だわ。斯うしてあなたに、力一ぱい手を握りしめて貰つて、このまゝ死んで行かれたら、わたし、どんなに幸福だか知れない！』

マユミは、うつとりと、夢みるやうに、瞼を閉ぢた。

『どうして、そんなことばつかり、考へるのだらう。』

『ご免なさいね。もう陰氣なことは、考へないやうにするから。』

陽一郎の掌に、しつかと握りしめられてゐるマユミの手には、この時、かすかに〳〵力が籠められたやうに感じられたが、それは赤ん坊の力のやうに、弱々しかつたので、陽一郎は、一層憐れを催ほした。こんなにも、衰へ果てゝしまつて、ほんたうに、これから先き、いくら生きてゐられるだらうといふ氣がした。

『わたし、ね、あなたに、もう一つお願ひがあるの。』

マユミは、閉ぢてゐた瞼を、静かに開けると、片つ方の手

は、やつぱり陽一郎に握られたまゝ言つた。

『どんなこと？』

陽一郎は、やさしく聞いた。

『いろ／＼、我儘なことばかりお願ひして、済みませんけれども。』

『いくら我儘なことを言つたつて、いいといふ約束ぢやないか。』

『ほんたうにね。』

『何んでもいいから、言つてごらん。僕に出來ることなら、どんなことだつて、して上げるから。』と、陽一郎は微笑した。

『わたし妹に會ひたいの。』

『妹に？』

『えゝ。』

『ぢや、呼んで來て上げようか。』

『誰にも會はないで、このまゝ、誰にも知らせずに置かうと思つたのですけれども、でも、やつぱり、妹だけには、會つて置きたいと思ふの。』

『それで、妹は、どこにゐるの？』と、陽一郎は聞いた。

『東京にゐるの。』

『ぢや、直ぐぢやないか。今から呼んで來て上げよう。』

『わたし、妹だけに會へばいいの。そのほかの者には、誰にも會ひたくないし、知られたくないの。』
『そのほかの者といふと？』
『父と兄。』
『どうして？』
『ならず者なんですもの。』
『ぢや、妹だけ、これから直ぐに、連れて來て上げよう。』
『引受けて下さる？』
『何んでもないことぢやないか。』
『でも、妹だけに、會ひたいんですもの。父や兄には、絶對に秘密にして。』
『分つてゐる。』
『大丈夫かしら？』
『大丈夫だとも。』
『芝の愛宕下町なの。』
『何んといふ家？』
『齋藤つていふの。』
『齋藤？』
『靴屋なの。』
『妹さんの名は？』
『絹子。』
『それだけ分つてゐれば、大丈夫だ。では、直ぐ行つて來よう。』
陽一郎は、それまで、しつかり握つてゐたマユミの手を離すと、急いで病室から出て行つた。
『どうぞ、お願ひしますわ。』
マユミの低い聲が、ドアの後ろに聞えるのを、陽一郎は聞き流して、足早やに廊下を歩いた。

女給として

愛宕下町四丁目二十七番地は、直きに分つたけれども、齋藤といふ靴屋は、なか〳〵分らなかつた。
『もし〳〵。ちよつと伺ひたいのですが……』
陽一郎は、湯歸りらしく、濡れ手拭を下げて、頭を角刈りにした若者の姿を認めると、しづかに操つてゐたロードスターを留めて、車上から聲をかけた。
『おいらかね？』
若者は立ち留まると、不思議さうに陽一郎を見上げた。
『この邊に、齋藤といふ靴屋があるのを、ご存知ないでせうか。』

と、陽一郎は、丁寧に聞いた。
『さあ……』と、若者は首を傾げて考へてゐたが、
『愛宕下町かね？』
『さうです。』
『愛宕下町は、なか／＼廣いからな。』と、呟いた。
『四丁目二十七番地だといふことですが……』
『四丁目二十七番地と言へば、この邊だが……ハテな、そんな靴屋があつたかしら。』
『たしかに、ある筈ですが。』
『齋藤だね？』
『さうです。』
『何んだ。ぢや、源公の家ぢやないか。靴屋だなんて、大きなことを言ふものだから、分らなくなつてしまふぢやないか。』
若者は、大きな口を開いて、肩を搖つて笑つた。
『ぢや、今では、靴屋ぢやないんですか？』
『靴屋は靴屋だが、靴直し屋でね。そんなことを言つて尋ねるより、飲んだくれの靴直しとか、ならず者の源公の家つて聞けば、この邊では、誰一人知らない者はないのに。』
『それは、齋藤といふんですか。』
『さうだ。たしか齋藤とか言つたよ。だが、この邊では誰も、そんな苗字なんか呼ぶ者は、ありやしないよ。』
『どこでせう。』
『半町ばかり行つて、右側だよ。』
『どうも、有難う。』
と、陽一郎は會釋をして、自動車を動かし始めた。
『だが、今頃行つても、誰も、ゐないかも知れないぜ。』
若者は、後ろから大聲に叫んだ。
留守でも何んでも、折角、こゝまで來た以上、とも角、訪ねて見なければならなかつた。一刻を爭ふといふほど、切迫してはゐないとしても、しかし、二三日が難かしいと、危ぶまれてゐる病人の切なる賴みである。若し、ぐづ／＼してゐる中に、病人の身に萬一のことでもあれば、折角、あれほどに賴まれたことを、水の泡にしてしまはなければならぬ。
陽一郎は、若し、そんなことがあれば、マユミの最後のたつた一つの願ひを、永遠に果してやることが出來ないのだと思つて、心が焦つた。
早く、妹の絹子に會つて、早く病院に連れて行つて、早く、マユミに會はせてやらなければならない。
軒の傾いた、古ぼけた二階建ての長屋だつた。
陽一郎は、ロードスターを留めたけれども、靴屋だか、何ん

だか分らないし、街燈の光りが薄暗いので、標札も何も、讀むことが出來なかつた。

古ほけた雨戸が、閉つてゐる。ロードスターのヘッド・ライトを、強く輝かして見ると、墨の薄い、煤けた標札の文字が、どうやら齋藤と讀めるやうだ。

だが、若者が言つたやうに、やつぱり留守にちがひなかつた。家の中は眞暗だし、雨戸は閉つてゐるし、もちろん、聲をかけて見ても、仕方がないと思つた。

（はてな？）

どうしたらいいかと思つて、自動車の上で躊躇してゐる陽一郎の頭に、偶と、不思議な想念が閃めいた。

（僕は、この前にも、いつだつたか一度、こゝに來たことがあるやうな氣がするが……）

いつ、どんな時に、こんなところに來たことがあるのか、そんなことは、ハッキリ思ひ出せなかつた。

でも、たしかに、見覺えがあるやうな、氣がするのであつた。

それが、夢ででも見たことがあるのか、現實に來たことがあるのか、それとも、たゞ、そんな氣がするだけなのか、いくら考へても、陽一郎には、判斷が附かなかつた。たしかに、この町、この家、すべての印象が、記憶のどこかに潛んでゐるやうな氣がしながら、いくら思ひ出さうとして努力しても、はつきり思ひ出せないのである。

陽一郎は、焦れつたくなつてしまつたが、今こゝで、そんな取留めのないことに、いつまでも拘泥つてゐられる場合ではなかつた。いつかは、ハツキリ思ひ出せることがあるだらう。今の場合は、早く絹子を探し出して、病院に連れて行つて、マユミに會はせてやらねばならぬ。

陽一郎は、ひらりと身輕く、車上から下りると、隣りの雜貨屋が、まだ表を開けてゐるので、つか〳〵とすゝんで、その前に立つた。

店は開いてゐるし、電燈も點いてゐるのに、人の姿は見えなかつた。

『ご免下さい。』

陽一郎は、大きな聲を擧げて呼んだ。

すると、薄暗い奥の方から、

『入らつしやい。』と、女の聲で返事をして、店に出て來たのは、丸髷を結つた、二十七八のおかみさんだつた。

『ちよつと伺ひたいのですが……お隣りの齋藤さんでは、皆なお留守でせうか？』

『齋藤さん？』

『靴屋です。』

『戸が閉つてゐるでせう。』

『閉つてゐます。』

『ぢや、留守ですよ。お隣りでは、日が暮れると、皆な、家に

ゐることなどのない人たちですから。』
『どうしてゞすか？』
『さあ。それは分りませんが。』と、おかみさんは意味あり氣に、にや／＼笑つた。
『どこへ行つたか、分らないでせうか。』
陽一郎は、かすかな絶望を感じた。
『分りませんですよ。取留めのない人たちですから。』
『絹子さんといふ娘さんがあるのを、ご存じですか。』
『女給さんでせう。』
『それは知りませんが。』
『あなたは、その娘さんを、訪ねていらしたのですか。』
とおかみさんは、薄暗い光りで、陽一郎の服裝や、容貌や、前に留つてゐるロードスターを、じろ／＼見た。
『さうです。僕は、その娘さんに用事があるのです。』
『ぢや、こんなところに訪ねて來るよりも、カッフエーに行つた方が、直ぐ會へるぢやありませんか。』
おかみさんは、冷嘲すやうな微笑を浮べた。
『カッフエーは、どこでせうか。』
陽一郎は、希望を感じて、呼吸を彈まして言つた。
『さあ、よく知りませんね。』
『もう長く、カッフエーで、働いてゐるんですか。』
『二三年こつち、ずつとです。』
『ぢや、どこのカッフエーに通つてゐるのか、分らないでせうか。銀座だとか、新宿だとか、上野だとか。』
『銀座だといふことですよ。』
『銀座にもカッフエーは多いのですが、銀座のどの邊か、何んといふ家か、ご存じないでせうか。』
陽一郎は、待つてゐるマユミのことを思つて、縋りつくやうな氣持ちで聞いた。
『銀座の裏通りの大きなカッフエーだといふことは、聞いたのですが。』
『裏通りの大きなカッフエーといふと、どこでせう。』
『何んとか春と言つたけれども……』と、おかみは首を傾げて考へて見たけれども、思ひ出せなかつた。
『春といふ字が、附くのですか。』
『それだけは覺えてゐるけれども、アトは、どうも思ひ出せない。』
『ぢや、サロン春といふカッフエーぢやないのですか。』
陽一郎は、カッフエー通といふほどではないけれども、友達と一緒に、よく飲み歩くことがあるので、銀座の大きなカッフ

エーなら、一通りは知つてゐた。
『さう〳〵。そのサロン春ですよ。たしか、そこに通つてゐるんだといふことです。よくは知りませんが。』
『さうですか。では、とも角、そちらを探して見ますから。どうも有難う。』
陽一郎は、丁寧に禮を言つて、ロードスターに乘つた。

尋ねる人

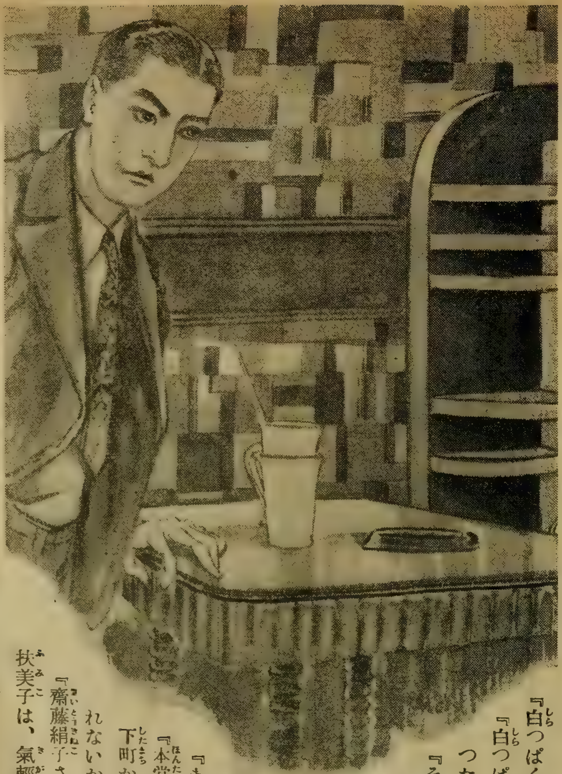
サロン春の上で働いてゐるのか、それとも地下室の方か、分らなかつたけれども、ちやうど入口のところに、陽一郎の知つた女給が立つてゐて、
『どうぞ、下に入らしてね。――ね、いいでせう。』
と、無理にすゝめられるので、つい陽一郎は、地下室の階段を下りた。
『まあ、うれしい。ちやうど、わたしの番なのよ。』
女給は、先きに立つて案内した。扶美子と言つて腮の可愛らしい、眼の冴えた、美しい娘だつた。
『だが、今夜は、ゆつくりするわけには行かないんだよ。』
『まあ、どうして？ こんなに暫らく入らつしやらなかつたのに。』
『今夜は、用事があるんだ。』
『まあ！ そんなことをおつしやつたつて、信用出來ないわ。あなたに、何んの用事があるでせう。』
扶美子は、頭から笑つてしまつて、信用しなかつた。
『斯う見えたつて、なか〳〵、忙しいんだからな。』
陽一郎は、冗談のやうに言つて笑ひながら、ボックスに入つた。
『溫和しく聞いて上げてると思つて、人並のことをおつしやるわね。』
『バカにするなよ。』
『何を召し上つて？』
『オレンヂエード。』
『まあ、呆れた。』
『何を？』
『あなたが初めつから、オレンヂエードを召し上るなんて、そんな手はないわ。』
『どうして？』
『ウヰスキイか、コニヤックを持つて來てもいいでせう。』
『今夜は違ふんだ。』

『なぜ？』
『だから、用事があると言つてるぢやないか。』
『また、そんないゝ加減なことばかりおつしやつて。』
『ほんたうだよ。』
『どうかしてゐらつしやるのね。』
扶美子は、スタンドの方に行つたが、直きに、オレンヂエードを持つて來た。
『ちよつと、聞きたいことが、あるんだけれども。』
陽一郎は、オレンヂエードなんか、飲まうともしなかつた。
『何アに？』
扶美子は、向ひ合つて腰掛けてゐたが、美しい眼を見張つた。
『僕は、今、急いで尋ねなければならない人があるのだが。』
『男？　女？』
『女さ。』
『怪しからん。』
扶美子は笑ひながら、わざと睨む眞似をした。
『そんな意味ぢやないんだ。』と陽一郎は苦笑した。
『いいわ、どんな意味だつて。それでどうするの？』

『その女がね、こゝで、女給をしてゐるといふんだけれども。』

『まあ、その人、きれいなの？』

『どうだか。』



『白つぱくれて。』

『白つぱくれるにも何んにも、まだ、一度も會つたことがないんだ。』

『その人に、何かご用があるの？』

『どうしても、會はなければならないことがあるのだ。』

『何んていふ人？ 名前が分れば、呼んで來て上げるわ。』

『ところが、こゝで何んと言つてゐるのか、それが分らないのだ。』

『まあ。』

『本當の名前は、齋藤絹子と言ふんだ。愛宕下町から、通つてゐるんだよ。聞いて來てくれないか？』

『齋藤絹子さんね。ぢや、分つたら連れて來るわ。』

扶美子は、氣輕に立つて行つたが、容易に歸つて來なかつた。

果して絹子が、こゝにゐるのか、ゐないのかも、分らなかつた。若し、ゐなかつたら、どうしたらいいだらうと思つた。病院で、待つてゐるマユミのことを思ふと、陽一郎は、斯うしてゐ

る間も、氣が氣ではなかつた。

　やがて、十分間あまりも過ぎた時分になつて、椅子の間を縫ふやうにして、こちらに近づいて來る扶美子の、勝ち誇つたやうな顏が、植木の間から、ちらと見えたと思ふと、直ぐに、陽一郎の入つてゐるボックスの前に立つた。

　扶美子の後ろには、背の高い、白芙蓉のやうに、淸楚な感じのする美しい女給が一人、立つてゐた。

『分つたのよ。こゝでは、都と言つてゐらつしやるんですつて。――さあ、都さん。おかけになつたら、どう？　あなたをお呼びになつたのは、こちらなの。』と、扶美子は、振り返つて都に言つて、自分は陽一郎と並んで、腰を下ろした。

『え。』

　都は、溫和しい女給だつた。かすかに頷いたゞけで、直ぐには腰かけようともせず、立つてゐた。

　陽一郎は、都の姿を一瞥した瞬間、どこかで一度、見たことがあるやうに思つたけれども、どこで見たことがあるのか、思ひ出せなかつた。

『掛けたまへ。』

　と言つて、陽一郎は今度は扶美子に向つて、

『僕は、都さんに、ちよつと話があるんだから、君は、あつちに行つてくれないか。』と、賴んだ。

『あら、邪魔になるの。』

『少しね。』

『折角、人が探して連れて來て上げたのに、わたしを邪魔にするのね。』

『惡く思ふな。』

『では、お邪魔をしないやうに、あつちに行つて上げるから、お話が濟んだら、直ぐに呼んでね。』

　と言つて、扶美子は立ち上ると、向ふに行つた。

　絹子は、自分の本名を言つて、尋ねてゐる客があるといふので、扶美子に連れられて來て見ると、びつくりした。そこのボックスに腰かけてゐるのは、いつかの夜、父を自動車で轢いたといふので、わざ〳〵連れて來てくれた青年紳士ではないか！

　その時、名刺を置いて行つたのを見たら、高濱陽一郎とあつたが、翌朝、兄の源吉はそれを見て、大きな金儲けに有りついたと言つて、大へん喜んだのを覺えてゐる。その後、その青年紳士と、父や兄との間に、どんないきさつがあつたのか、絹子は、何んにも知らないけれども、その青年紳士が、何んだつて今時分、こんなところに、わざ〳〵自分を訪ねて來たのだらうと思ふと、絹子は不安だつた。

『どうして、掛けないの。』

陽一郎は、先刻聞いた隣りのおかみさんの話では、もう二三年も女給をしてゐるといふのに、ちつとも女給摺れがしてゐなくて、溫和しい絹子が、何んだか可憐らしい氣がした。

絹子は、女給をしてゐるのに、お客と一緒に、腰かけるのは、悪いことだとでも思つてゐるのだらうか。いくらすゝめられても、たゞ、返事をするだけで、立つたまゝだつた。

『僕は、君に、ちよつと話があるんだ。立つてゐては、話も出來ないから、掛けてくれないか。』

『えゝ。』

絹子は、幾度もすゝめられて、やうやく向ひ合つて腰を下ろした。

『君には、どこかで、會つたやうな氣がするのだけれども。』

肺病の方へ

＝無代進呈＝

肺病、ロクマク、肺尖カタルでお悩みの方は御安心下さい、病床三年死に直面した私がムツクリ起あがり安々と全快し、幾多の同病者が全治して居ります、必らず治る病氣を治さぬ人は誤れる療法、無効薬の禮拝者です。同病お悩みの方はあれこれ迷はず唯一の味方の私にお手紙下さい。私の治つた體驗談、養生法、不思議な特殊薬等を無料で親切にお教へ申します

東京市瀧野川區西ヶ原五五〇ノ二 牧田榮三郎

陽一郎は、ぢつと絹子の顔を見ながら、疑問をたしかめて見た。

『覺えてゐる？』

と、絹子は微かに言つた。

『えゝ、一度。』

『えゝ。』

『どこで會つたかしら。』

『父が、自動車に轢かれた時、送つて來て下さいましたわ。』

『あゝ、さうだつた。』

陽一郎は、それで、胸に痞へてゐたやうな先刻からの疑問がすつかり氷解した。

『忘れてゐらつしやいましたの。』と言つて、絹子は仄かに微笑んだ。

『僕は、今、君の家を訪ねて、それから、こゝに來たんだ。』

『わたしが、こゝにゐることを、誰からお聞きになりましたの。』

『隣りのおかみさんから。』

『まあ。』

『どうしても、君に會はなければならない、用事があつてね。』

『どんな用事でせう？』

絹子の瞳が、不安さうに顫へた。

（つゞく）

三ブちやん
しろ酒
小寺鳩甫作
どつちが妹なんだい
あらッ
今日はお節句よ
あたしとこへいらつしやい
いまにご馳走をしてよ
いくら喰べてもだめだなア

今日のご馳走はかうするものなのよ
あッはッはミミ
何を笑つてるの
君は一ぺんに大きいパンを三ツ喰べても足りないのに
あらッいやだ
ええッ
さあおあがりなさい
ぼくのりはいやだいッ
喰べたらきつと舌をチヨン切るだらう

⑫
これは白酒よ
⑬
うまいものだなアー
⑭
おやへんだナ
⑮
お膳が澤山だぞッ
⑯
三ブちやんどうしたの
⑰
魔法の薬を呑まされちやつた

⑱
はやく帰へらうよ
⑲
春衣はこれ一枚きりですのよ
⑳
とても淋しいワ……
㉑
毎度ありがとうござい……
母ちやんは可哀相だなア
㉒
いいことを考へたぞ
白酒
㉓
これを嘗めたら着物はいくつにもなるよ
?
??
白酒

兒玉大將の「茶目振り」

大澤龍

兒玉源太郎大將は、近代の秀吉ともいはれるやうな大膽な奇才で、いつも朗らかな氣分で、目玉が活き〳〵して才氣が一擧一動に迸しつてゐる。茶目で、惡戯好きで、その惡戯がまた頗る奇拔だ。分つて仕舞ふと、ワツといつてみんなが心の底から笑ふ氣持の好い惡戯だ。しよつちう人に一杯喰はせるが、喰はせられた方で嬉しがつてゐるといふ始末、實に、愉快な大人物であつた。

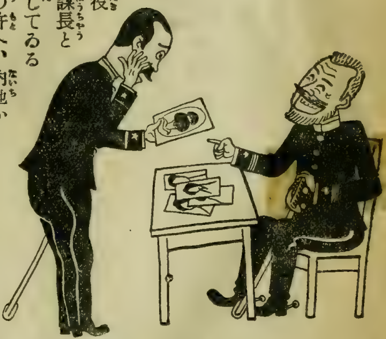
兒玉大將が一杯喰はせた惡戯のお話は山ほどあるが、その中でもおもしろい一つの話。

日露戰役に、總參謀長として出陣してゐる兒玉大將の許へ、内地から、さま〳〵の慰問の郵便が山と來るうちに、東京の藝者連から寫眞を、續々、送つて來るので、若い參謀たちを、少からず羨望させたものだ。

陣中に、花のやうな寫眞が來るのは、無上の慰安になるさうだ。

『君たち、これを見せよう。』

大將は一々、その寫眞を參謀たちに見せるのだ、そして無遠慮に批評し合つて、その寫眞を、代る〳〵氣に入つた人たちに分けてやつた。



その中に、不思議な寫眞が一枚あつた。美形は美形だが、滴るばかり綠の雲鬢、全く後向の丸髷美人だ。お自慢の髪を見てくれといはぬばかりの後姿だ。花の顏を見せてこそ征戰の苦勞を慰めることになりもしよう、この丸髷の後姿は、どういふ意味だらう、疑問を挿んだのは、參謀國司大尉だ。

すると大將は、

『國司、君にはこれがよからう。』

と後向の寫眞を直ぐにくれた。

『これは、どうした女です。』

大尉が問ふと、大將は、無造作に、

『ナアニ東京に歸れば分るサ。』

とそれ以上、何にも言はない、唯ニコニコ笑つてゐるばかりだ。とにかく見事

な髪形だ、後向ながら十二分の魅力のある寫眞だ。

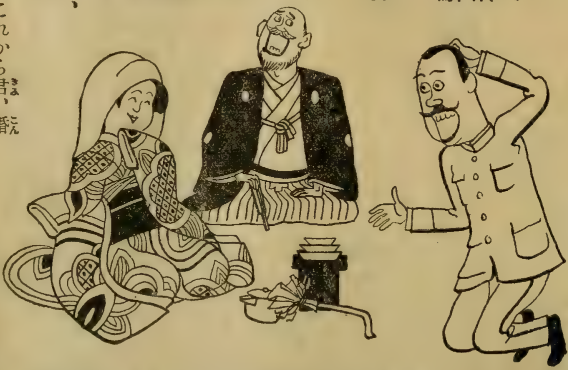
扨、東京に凱旋してから大尉は友人の祝杯攻めにあつてゐて、寫眞のことなど思出して見もしなかつたが、或日の事、大將が、フト、

『オイ國司、これから御馳走するから、ついて來い。』と伴れていつたのは、有名な築地の瓢屋だ。主客ともに酒豪、酒は好し、女は好し、感興大に湧いた。

大將は思出したやうに、

『イヤ君、滿洲で見合に贈つたあの美人と、これから君、婚禮ごつこをやれ、俺が月下氷人になる。』

此時、大尉の頭に、あの後向の丸髷姿の美くしい追憶が、電光のやうに閃めいた。大將が『ソレッ。』と號令一下、待つてゐましたとばかりに、女中が、しとやかに襖を開けると、隣座敷は、眩ゆき花電燈の下に、雌蝶雄蝶の銚子を前に、綿帽子ま深に初々しい花嫁姿。



大尉を、矢庭に花嫁の向ふに据ゑて、大將は上座に直り、『高砂や、此の浦船に……』と謡ひ出した堂々たる大將軍の英姿、瞬間ながら如何にも崇高な氣分を味はせた。小謡をうたつた大將は、がらりと變つて大あぐら、

『モウ御婚禮はめでたく濟んだ。嫁御寮も綿帽子をとり玉へ。』

去年、奉天激戰の陣中から頭の中に刻まれた天女の姿、いかにと眸を凝す大尉の喫驚、こはそもいかに、後向とは似ても似つかぬ鈿女命だ。お多福の髪美人なればこそだ、後向の寫眞を滿洲までも送つたのだ。此時、互にまご〜してゐる男女を眺めながら、ひとり上々機嫌の大將、

『どうぢや、國司、申分は無いぢやらう、アハヽヽヽ……。』

大將に續くみんなが、アハヽヽヽヽアハヽヽヽと笑の爆發であつた。

日本中の喜劇作家を總動員して、その數多い作品の中から傑作中の傑作を選んだ喜劇全集は新春の讀物に最もふさはしいもの。到る處に大評判、大人氣、飛ぶ樣な賣行です。是非御一讀下さい。

喜劇全集、上、中、下三卷定價各一圓五十錢　送料各十六錢　振替東京三九三〇

時代小說

伊達事變

白井喬二

齋藤五百枝畫

仙臺侯伊達綱宗の亂行は、藩內に二組の策動團體を生んだ。死を以て君を諫めるといふ諫死組と、君側の奸を除くと叫ぶ刺客組との暗中飛躍だ。此間に在つて三澤賴母は、畢生の我戀人を殿の側女に召され、兩派の何方にも與せず戀情の奴となつてゐたが、遂に戀人と相見る機會の惠まれぬのを悟るや、自暴自棄の心になる。と此矢先き、突然彼は諫死組の一人から『一藩浮沈の瀨戸際だ。殿附の美女殘らずが參集する晴の席で、君どうぞ請諫の切腹をしてくれ』と懇願された。殿附の美女が殘らず集る席――礑と賴母の心を打つた此一語。彼は恰も狂つた樣に、『むゝ、引受けよう。』と相應じた。

（前號迄の梗概）

反故歌

一

歌の會は、義山侯（忠宗）の時代からありました。それは――義山侯の側女であつた綱宗の母が、それを好んだからだと云はれます。その母は、櫛笥中將隆致卿の女貝姬といふ人でしたが、これは死後になつて分つた事で、忠宗に仕へてゐる間は、自ら、種姓をかくして居たので、たゞ、京都の商家の娘とばかりで、誰も、本當のことを知る者はありませんでした。綱宗は、忠宗の六男として、この母の胎に宿つたのですが、嫡出の二兒は早世し、他は、みな、庶子だつたので、結局、素性の正しい綱宗が、伊達家の後を相續する事になつたのです。

綱宗は、幼名巳之助丸、長じて藤次郎、後、四代將軍家綱に謁し、一字を賜つて、綱宗と改めたのです。さういふわけ故、母の氣風も預つて、物の考へ方が、知識的で、純眞でした。そして、名にし負ふ黄門正宗の孫に當るゆゑか、器宇が大で、物に屈托しません。その癖、家督を繼いでから發した敎令や、重臣への手翰などは、若年にして、よく、これほどの細密な注意が出來たものだと思はれるほど、それは、懇ろに行屆いたものです。

されば、襲爵の直後は、天下靜謐、藩内は、喜びに滿ちて居りました。然るに、突如、酒色の暗礁に乘上げ、荒淫疎暴の風評が、あはれ、一瞬にして、光明を吹ッ消してしまつたのです。これ誰の罪か――大器は、古來から、取扱ひにくいものとされて居ります。何事にも、獨自の見解を持ち、おのれ一個の處世訓、人生觀を有する綱宗を、たゞの若殿として取扱はうとしたところに、家老達の錯誤があるのではありますまいか。所謂、認識不足です。遊興の内容を吟味する事をせずと、直ちに、世間一色の放蕩として、手もなく抑制へつけようとしたから、正宗の血が、綱宗の體の中で、グ

ッと、旋毛を曲げてしまつたのです。

大體——家老達が、忠義の看板を、あんまり振りまわし過ぎました。我れこそは、忠義の一番乘りといふ氣持が、たうとう、こんな、泥濘に陷ませてしまつた氣味があります。何事も、形式で、樂々、かたづくと思つたのが物の間違ひ。今までは、それで好かつたかも知れないが、今度の殿樣綱宗は、少くとも、おのれの意氣に生きようとしだらしい。それゆゑ、忠義の看板などには、安々と、辟易しませんでした。意志の疏通を缺いだといふより、新舊思想の衝突と云つた方が早いでせう。

どうにもならぬ事でした。

でも、その、云はゞ、四面楚歌の中で、綱宗は、たゞ一つ、荒ばぬ感情を持つて居りました。

それは、生母への憧憬でせう。

今夜、邸內で行はれる、その、母の思出にもひとしい、歌會の豫習の座へ、珍らしくも、氣を變へて、早く歸つて來た綱宗——その心を察すれば、そこに、何よりも、母を思ふ眞情を汲みとることが出來るでせう。

戌の刻五ツ（午後八時）前には、もう、北庭に面した敬神堂の外は、いくつも置きならべた緣臺の上に、今夜參列を許された人々が、まるで、花火見物でもする時のやうに、ぎつしり詰つて居りました。

雪洞の灯が、夜の幕が下りるに隨つて、瞬き、瞬き、色づいて來ました。

氣のきいた器物の中から、蚊遣の烟も、ほそぼそ、立ち昇つて居ります。

すつかり夏の趣向です。

その緣臺組の中に——三澤賴母も、まざつて居りました。

但、これは、歌を詠進するためではなく、密かに、諫死の一役を引き受けるためです。傍には、例の諫死責の大西萩之進が、寸時も、目をはなたず、頑張ツて居ります。賴母は、萩之進の取計ひか、ちやんと羽織を着て居りましたが、浮かぬ顏……と云ふより、顏色蒼白め、目のみ險しく光つてゐる樣子は、どう見ても、これから、雅びた和歌をひねくらうとする人ではありませんでした。

然らば、賴母は、本當に、諫死するつもりか？

否、さうでは無い。成程、さう云ふ口實で、萩之進に手引をさせ、こゝへ這入つては來たが、眞意は、たゞ、これから御堂の上に出座する、綱宗侯に扈從て出て來るであらう所の、響乃を、一目、見たいと願ふばかりです。

まつたく——無我夢中の行動でした。

二

『君、君。』
と大西萩之進は、こつそり、頼母の袖を引きました。
『こゝは、少し場所が横過ぎはしないか。もう少し、正面へ廻る方が好からう……どうだ！』
と云ひます。
『いや、こゝの方が——』
と頼母は、そこを動かうともしませんでした。
それは、目的が違ふからです。萩之進は、殿樣の面前に出る位地を考へ、頼母は、殿樣に隨いて出て來る雪乃の見える位地を考へてゐるのです。
『さうかな。』
と萩之進も、强ひて、それを、聲高に主張する事もできず、こゝから立上つて、かう歩いて、あそこへピタリと下座して——と、自分一人で目標を立てゝ、他人に腹を切らせる順序を考へて居ります。萩之進一派、即ち、諫死責の人々が、頼母に行はせようとする目論見は、さすがに、殿の面前で、双肌脱ぎ、腹割ツさばいて、まざまざ、血を見せようといふのではありません。人目につかぬ所で切り、腹帶で押へ、苦痛を隱して、面前に、一首詠進するのです。そして、殿は、その歌に依つて、始めて、死中の詠歌を知り、ひそかに、諫死者の熱血に打たれ、死に行く者の耳へ、身を愼むべき誓の言葉を賜はる……と云ふ順序です。これは、萬事、大成功の時の順序ですが、兎に角く、頼母は、それを、彼等に、引き受けてしまつたのですから、大變な事になりました。
『君、君。』と、萩之進が、また、さゝやきます。『さつきの詠進歌……君、おぼえて居るだらうね？』
『大丈夫……』
と頼母は肯いて見せました。
詠進歌は、諫死組の方で、豫め、適當なものを選んであるのでせう。それは、もう、頼母に通じてあるので、愈ゝの場合、その歌を書き間違へられては大變だといふので、直接の監視人たる萩之進が、念のため駄目を捺して見たのでせう。けれども、大丈夫……と肯いた頼母の態度も、怪しいものでした。こゝまで事が運んでゐても、頼母は、その心になつて居ません。兎に角く、雪乃の顔を見たいが胸一杯です。その餘のことは、亦、その時で、何とかならう位な考へしか、否、寧ろ、精神朦朧……といふより、殆んど、喪失の狀態で、一切を無視し、一切を手段に使つて、無衣無縫で、こゝに臨んで居るのです。

文字通りに、死を懸けた戀でした。
『愈ゝ、御出座だ。』
といふ聲が聞えました。
『おゝ、成程、御簾が捲揚げられた。』
と和する聲がします。
『確かりやれよ、精々巧い所をな。』
と隣りの者を、揶揄半分に勵ませば、
『お前のこしをれとは違ふよ。』
と應ずる聲がします。
中には、
『御豫習でも、今夜の成績で、御本儀の御詠進人が決るのだから、輕く考へると、落選ものだ。』
と本氣に囁いてゐる者もあります。
『君、君。』亦、萩之進が突きました。『いゝか。』
『大丈夫だ。』
賴母は、併し、何と答へたか、自分では、もう、言葉の綾が分らぬくらゐでした。
目は、たゞ、敬神堂の方へ、火の如く注がれて居ります。
御簾を捲揚げられた敬神堂は、萬華燦然たる明るさ。それに、背景は、立廻しの金屛風です。金がいゝから、宛ら、金色の海

と化し、既に、高壇の左右には、今日の進講係、書記、讀上役等が、襟を正して、ズラリと、着座して居ります。

やがて、

『御出座ッ。』といふ聲が懸りました。

頼母は、目ばかりの人でした。

三

その目に映つたのは、眞ッ先きに、まづ、陸奥守綱宗侯であります。

それから、太刀持の小童。

こゝまでは、當然の順序ですが、後です。その後から出て來たのは、腰元の一團でした。先頭に、年嵩の老腰元が二人、それから薄化粧の中婆さんが三人。その後は、はつと目を衝つやうな、厚化粧の妙齢組です。紅と銀繍の叢雲群鳥散の白裲襠、目もあざやかなる行列です。それが、靜々、花の咲くやうに現はれて、左右、二つに、棚曳く如く居流れましたが、その、妙齢組の四五番目に挾まつて出て來たのは、正しく、當の雪乃でありました。

『あ……』

と、目ばかりの人頼母。その目では、まだ、這入り切れない

と云ふやうに、大きく見張りました。

浮上るやうに、雪乃の美しさが、一杯に映りました。

こんなに、厚化粧をした雪乃を見たのは、頼母は、始めてゞした。欲目か、まだ、腰元姿に馴れぬところがあります。然し、それと同時に、いつの間に、こんなに發育したかと思はれる、熟れた、果實のやうな、充分、女になりきつた事を思はせる色ツぽさが、目元に、口元に、襟足に、胸の線に、みなぎり溢れて居りました。

『開座な、仕ります――』

進講役の嗄れた聲がひゞきましたが、頼母は、たゞ、それを、空洞に聞いたばかりです。

それから、前年度入選者の感詠披露、新題の發表、その心得――と云つたやうに、次ぎ次ぎと、行事は取進んで行つた樣子です。然し、頼母は、雪洞の火影の中で、貪るやうに堂上を見上げたまゝ、今は疾風の如き熱氣に、全身をもみくたにして居りました。

何とかして、一言――といふ欲望だけが、たゞ一本、金の針金のやうに、冴えわたつて居るだけです。

『君。』

といふ聲が、耳傍でしました。

『君、これから、愈々、御詠進だぞ。』

再び、さう囁かれた時、頼母は、愕然として我れに甦りました。

『あ？』

『君……』と大西萩之進が、近々と目を光らせ、肩を聳てゝ、緊張して居ます。『いよいよ――分つたか？』

『え？』

『君は、御詠進の七番目だ。二三番目まで來た時、直ぐ、用意をしなくては。』

『用意？』

『さうだ。先づ……』と萩之進は、命ずるやうに云ふのです。

『其處に、あの歌を書附けたまへ。』

『あの歌……』

『早く！　それ、もう最初の御詠進が始まつた。』

さう、塵拂を掛けるやうに促されて、頼母は、我れともなく筆を取上げました。成程、最初の詠進者が呼び上げられ、短冊を持つて、堂前に立ち進んだ樣子です。その歌が、讀上役によつて朗吟され、進講係が、それを引取つて、大意を註釋するのです。それに要する時間は約五分、頼母が七番目とすれば、約三十幾分かの後には、諫死の歌を詠進する順番が來るわけです。

『成べく、分り易く……』と萩之進は、傍から、注意を與へました。『字の上手下手よりも分り易い方が。』

『では楷書で。』

『看板のやうになつても不可んが。』

『どうも六ケ敷い……』賴母は、一二字書いて、萩之進に見せました。陸奥……といふ字が書いてありました。『こんなふうでは？』

『あ、少し小さいな……でも、まあ好からう。』

『こんなふうでは？』

また、次の字を見せました。

『さう、一々、見せんでも……』萩之進は、詠進呼上げの聲に、はらはら、氣を焦心らせながら、『早く、終ひまで、書きつけたまへ。』

『何だつたか、こゝは？』

と首を捻る賴母の手元を、蔽るやうに覗きこんで、萩之進は、

『そこは、露の……だ、露の命を……だ。』

『あゝ、そ、さうか。』

漸ツと終ひまで、書きつけた所を見ると、

『さア、君！』

と云つて、萩之進は、賴母の手を引つ張るやうにして立上りました。

四

さア君にも、いろいろ有りますが、このさア君は、立腹を切らせる場所へ連れて行くさア君でした。歌は、すつかり書附けたので、詠進者の順番の來るまでに、こゝから四五間離れた、櫻の木の四五本植つた暗い場所へ連れて行つて、そこで、腹を切らせようと云ふのです。何しろ、もう、詠進者の順番は、四番目になつて居ましたから、七番目の來るまでは、もう、十五分とありませんでした。この十五分の間に、櫻の木の蔭ですつかり死の門出仕度をし、再び、緣臺の所へ引つ返し、呼び上げと同時に、踉めく足を踏締めながら、殿の面前に立出でようと云ふのです。

ですから、このさア君は、忙しくもあり、切羽詰つたさア君でもありました。

『君、こつちだ。』

ぐいぐい、引つ張つて、櫻の木の蔭へ連れ込みました。

そこには、既に、諫死組の同志が二人立つて居て、

『早く〳〵。』

と、枯葉の摩合ふやうな聲で、激しく囁いて居ります。

『さ、連れて來た。』
『少し遲くなつたぞ。』
『急がなければ――』
口々にさう云ひながら、三人の手が、賴母の肩先を、手首を、前襟を、シツカと掴みました。
『君、君の名譽は、決して無駄にはせんぞ。菩提は立派に弔ぶぞ。いゝか。約束の通り賴む。これだ、伊豫の國永だ――これで美事に。さア！』
と云つて、突き出した手には、既に、鞘を離れ、布卷となつた匕首の先が、二寸ばかりギラリと光つて居ります。
『さア、早く！』
一人が、
『名譽の事だ。』
と呟きながら、賴母の前襟を、がつき〳〵、引開けました。
一人が、
『こゝだ、さまで、深手で無くとも――』
と、云ひながら、まだよく露れぬ、腹の切場所を、突くやうに、指して見せました。

『さア！』
『急いでくれ！』
『今、五番目だ。』
賴母は、自ら、重大危機に立つてゐる事を承知しながら、何處やら、他人の話でも聞くやうな、朦朧と、冗談めいた、輕い意識に擽られて居りました。何だか、馬鹿々々しい、ひどく滑稽な話でも聞かされて居るやうな、ともすれば、噴出し兼ねない位な暢氣な氣持でした。

然し、事實は、決して暢氣どころか、瞬間にして死と面接して居るのです。
彼等、諫死組の面容には、最早や、梃でも許すまじき、必死の決心が溢れて居りました。
『さア、早く受取れ。』
『うむ……待て。』
頼母は、腹に片手を當てゝ、
『さア。』
と今度は、自分の方から、催促しました。
『それ。』
國永の短刀は、時を待たず、頼母の手に渡りました。
『六番目だ、直ぐ。』
『好し……』
と呟くやうに、取敢ず、口の内で相槌を打ちましたが、頼母、切るべき意識を毛頭持た無いのです。何で、今、死なれよう。あの美しい雪乃を見た目には、死の影などは、いくら目を瞠つても、見えよう道理がありません。
いや、一念を凝らさうとすれば、時をも辨へ

ず、目先に浮び上るのは雪乃の姿でした。これまでは、多少、死んで了つてもいゝやうな……自棄半分の意識がないことも無かつた。だから、諫死組の口車に乘せられたのは、九分通りまで欺瞞としても、後の一分は、いくらか死の誘惑をも感じて居たと云へるでせう。然るに、愈々、その場に臨み、當の雪乃を一目見た瞬間、完全に、その一分も消し飛んでしまひました。現在、諫死組の三人に取卷かれ、切るべき短刀を握つてゐるけれど、頭の底のどこにも、それを實行しようと云ふ氣持は、微塵も持合せてゐないのです。

だが、それで濟むだらうか。

諫死組とて、木偶の坊ではありません。

『君！』

『よし！』

と云ふと、賴母は、突然、ぺつたりと地面に坐りました。

實に、突如たる態度です。

『おや？』

と諫死組が調子を外されて呆れた途端、又、すぐ、賴母は立ち上つて居りました。

自分でも、何うしていゝか分ら無いのです。

そして、慇懃に云ひました。

『私は、死ぬことを止めに致しました。』

五

『何ツ？』

と諫死組は、一齊に慌てました。

『死ぬことは止めに――』

『こら。』

と一人の手が、胸に飛んで來ました。

『卑怯なツ、何を云ふか！』

『能く考へて見たが――』

『能くもくそも……貴樣、今に至つて、こら。』

三四本の手が、ごちや〳〵、杵のやうに、小突き廻して、賴母の身體を、ぐらぐら、前後左右に浮木のやうに動かしました。

『早くせい、今更ら、駄目だ、そ、そんな事は。』

『あやまる。』

『馬鹿、あやまつて濟む事か。』

『でも、仕方がない。』

『何が仕方がないか。こら、貴樣、それでも武士か。武士の風上にも――、とにかく、そんな、勝手は承知は出來ん。早くせい、こら、賴母、貴樣、そんな――』

極度の狼狽でした。

それは憤激してゐる隙も無いのです。況して、理窟を述べる餘裕の有らう筈はありません。彼等とても、咄嗟に、適當な言葉がみつからないのです。三人とも、同じ事をさゝやき、口よりも激しく、手先きが、賴母の身體を呵責みました。

『然し、何といつても……』

『まだ、貴樣、そんな事を。』

『急に、死よりも好い方法を……』

『方法？　馬鹿、今更らどんな方法を考へついたとて駄目だ。や、約束だ、武士と武士との……』

『それは分つてる。』

『分つて居れば、早くせい。こら、賴母、は、早くせい！』

『第一、妹に一目……』

『何？』

『殿の御出座に、妹が、妹が、扈從て出なんだ……』と賴母は、ふと、そんな事を口にして居ました。『氣懸りだ。是非、それを確かめてから、それから……』

『何がそれからだ。そんな事、申してゐる餘裕はない。今夜が最後だ、貴樣、その點、承、承知のくせに……』

『兎に角く……』

『こら貴樣。』

その時、一人が、

『あ、七番目、三澤賴母の呼上げが――』

と、嗄れるやうに叫びました。

『あ、もう駄目だ。どうにもならん。何とか、何とか……』一人の諫死組が、地團太踏むやうに、『榛原、君、何とか――』

『よし、おれが行つて、兎に角く、詠進者急病といふ事に。』

さう云つて、敬神堂の方へ、駈出して行きました。

『貴樣、表に出ろ、叩き斬る。』

と殘つた一人は、賴母の肩先を摑んで、嗄れたやうに、悲憤の聲を絞りました。

『自分で死ぬのが厭なら……』一人も、それに同じました。『我我の手で、引導渡してやる。さうしないで措くものか。出ろ。邸外に出ろ！』

邸內で刀を拔けば、刄傷法度で、成敗を受けるのです。それゆゑ、如何に憤激しても、この場で、賴母を斬捨てる事が出來ませんでした。彼等とて、他人の腹を切らせる事には勇敢ですが、自分の命を斷つことには打算的でした。

『出ろ！』

『卑怯な。』と賴母も、思はず口走りました。『大體、始めから、

勝手な事ばかり……』

『何？』

『勝手な事ばかり云ふ君等ぢやないか。』

『こいつ。』

『相手になるなら、いつでもなつてやる。今日は、妹に會ふのだ。君等の思ふまゝにはならん。力むのは止したまへ。』

斯うなれば強い頼母でした。

櫻の木蔭を、諫死組をそこへ殘したまゝ、さつさと歩き出して居りました。

手引き

一

人間の行動は、いつも一轍には行きません。當然な事がどうしても敢行できない時もあれば、無暴な擧が、さも自然らしく行はれる時もあります。不自然が自然になり、純理が躓づく事もあるのです。そこが人生でせう。それゆゑに、一旦、調子がついたとならば、人間は、實力以上の仕事もでき、法外の働きをする事もあるのです。そこが人間なのでせう。さういふ意味に於て、頼母は、今夜は、實に調子がついて居りました。

無人の境を行くが如く……と云ふほど、でも有りませんが、兎に角く、死を蹴飛ばして了つたのだから、氣も強い筈です。否、強いといふよりか、荒いと云つた方がいゝかも知れない。何でもできる氣持です。いや、何でもとは望まない。唯一つを目指して盲進すればいゝのです。それは、雪乃に會ふ事でした。死と面接した事を考へれば、そのくらゐな事は何でも無いやうに思へました。死よりも強しです。さういふ熱情が、滿身に奔騰してをりました。

妹に會ふのだ——

と云つて、諫死組を蹴飛ばした頼母は、どういふ手蔓を掴んだものか、それから間もなく、本當に、妹初子の方と、奥の一間で會つて居りました。

正しく調子がついて終つたのです。

聲まで、抑揚がついたやうに、彈んで居りました。

『貴女が出て居なかつたから、この間に幸ひと云ふわけで……』

と云つて居ります。

『御遠慮いたしました。』

『どうしてだらう、矢張り、今夜のやうな席には、求めて出られた方が好くはないか。』

『そんな事はありません。同なじこつてす。』

『然し、あまり、見限るのは好くない。第一、殿の御寵がある無いに拘らず、今夜のやうな催ほしは御家風で在せられるから。』

『病氣ですから。』

『病氣なら仕方がないが。』頼母も、實は、そんな事は、大した問題でも無いのです。『兎に角く、悪い個所があれば、早く治療をして治して了はれなければ……』

『はい、有難う。』

それから、初子の方は、目を上げて、

『何の御用ですか？』

と訊きました。

『何の御用かでは無い。』と頼母は、やゝ、氣色ばみました。『もう三日も經つではないか。もう、貴女の御知らせがある頃と、どんなに待つて居たか知れない。貴女が、その氣になれば、そんなに手數の懸る筈はないでせう。ですから、腑に落兼ねて、今夜は、あの中間部屋から飛び出して了つたのです。』

『中間部屋？　そんな所に、あなたを入れましたか？』

『いや、中間部屋では無かつたけれど……』頼母は、急いでいひ直しました。『中間部屋の隣室だつた。』

『さうでせう。』

初子の方は、安心したやうに云ひました。

『其麼ことは、何うだつていゝ。』頼母は、本題から逸れるのを、焦心かしがりながら、直ぐ、云ふのです。『中間部屋を、いや、中間部屋の隣を飛び出して、どうなつたと思ひます。築地横で、ぱつたり、諫死組と邂逅つてしまつたのです。』

『え？　諫死組？』

『此間、貴女が心配してくれた、それ、あの鄕黨の一派です。』

『まあ。』

『それで、少しもめましたが、擧句に……』

『もめたと云ふと？』

『つまり……諫死をせよと云ふのです、今夜。』

『今夜？　どこで？』

『御歌會の面前で。』

『どうしました、貴郎？』

『勿論、諫死はしませんでした。ほれ、御覽の通り……』と頼母は、少し微笑ましたが、直ぐ込み上げて來る感情を叩きつけるやうに、『ですから、死の影を、今、潜つて來たばかりです。これほどの思ひで、こゝまで訪ねて來た私です。今夜こそは是非！』

『待つて下さい。』

と初子の方は、相手の競上る感情を遮つて、

『自分の事ばかり云ふものではありません。』

『自分の事ばかり？』

『妾だつて、これで隨分方策をめぐらせて居るのです。』

『方策なんかは、もう役に立たない。』

『ぢや、どうすれば好いのです。』

『貴女が行つて、雪乃をこゝへ呼んで來て呉れさへすればいゝのです。たゞ、それだけの事です。』

『お默んなさい。』と初子の方は云ひました。『いくら何でも、見境の無い事を仰しやる物ではありません。御邸内で、男女を取持つやうな眞似は出來ません。』

『無禮な。』と賴母も、つい同じ調子になりました。『誰が取持てと云ひました？』

『だから、やつぱり方策をめぐらさなければなりますまい。』

『方策も方策に依りけりです。』

『では、何ういふ方策なら好いのです。』

『貴女の權力で、こゝへ……』

『止めませう。』と初子の方は云ひました。『同じ事を、ぐるぐる、繰返して云ふばかりですから。』

『ぢや、貴女は、いつまで待てと云ふのです？』

『あなたは、何時まで辛抱出來ます？』

『もう辛抱出來ません。』賴母は、そこへ手を突いて、はらはらと、涙を落しました。『ね、初子、どうか賴む、今夜、今夜の内に。』

初子の方は、暫く、默つて居りましたが、

『好ござんす。妾の權力で連れて來ませう。』と、力を籠めて云ひました。『その代り、事に依ると、御兄樣も、雪乃も、妾も、拙劣く行つた曉には、死を賜はる事になります。それは覺悟でせうね？』

『はい！』

と賴母はきつぱり返事をして居りました。

『好ござんす、お待ちなさい。』

然う云つて、初子の方は、スックと立ち上りました。

二

無暴が、亦、一つ通りました。

たゞ、今度の無暴は、その裏に未だ影が殘つて居ります。初子の方の云つた通り、兄妹が、斯うやつて會ふのさへ、非公式です。勿論、そこには默認といふ形があつて、外部から考へるほど、不自由な物ではありません。亦、少しの落度で、さうむやみと首の飛ぶものでもありません。然し……殿附の腰元を屋

敷内で、他の男性に引會はせるといふ事は、どうしても、默認の内に這入る事柄ではありませんでした。

　そこを承知かと念を押す初子の方、承知だと返事をする賴母、どちらも、多少、常軌を逸した所があるわけでせう。

　然し……賴母は、さうした懸念よりも、今は、たうとう、此處まで漕ぎつけたと云ふ喜びで一杯でした。幾年振りかで戀が叶つたやうな……いや、叶ふか、叶はないかは、これから話し込んで見なければ分らないが、兎に角、會へるといふ事だけでも、賴母を、有頂天にするに充分でした。

　相見ての後の心……長い苦戀に今光りが射さうとしてゐるのです。

　さて、賴母は、躍る胸を抑へて待つて居りました。物の四半刻（三十分）も經ちましたらうか。

　初子の方が、險しい顏をして這入つて來ました。

『やア。』

と賴母の方から、先きに、待切れないやうに聲を懸けて終ひました。

　初子の方は、默つて、そこへ坐つて、

『お待たせいたしました。』

と、嚴そかな……と云ふより、冷やかな、むしろ、慳貪な調子で云ひました。

『初子、どうでした？』

と、亦、待ちきれずに、此つ方から訊いて終ひました。

『はい……』

と云つて、伏目になつて居ります。

『何か、方策は……』

『お兄上。』と初子の方は、顏を上げて、益〻嚴そかな様子です。『今夜、殿様のお身の上が、決定る事になりました。』

『え？』

『殿様がお折れにならなければ……御隱居の御連判が差出されるのです。』

『ぢや、やツ張り……』賴母は、さつき、諫死責の大西から、その事を、ちらと、聞いて居りました。『御家老達から？』

『江戸詰と御國詰と一緒に。』

『今、その、會議が開かれて居るのですか？』

『いえ、これから、始まらうとして居るのです。今、やつと、御歌會が終つたばかりですから。』

『ふうむ……』

　賴母は、さすがに、胸を打たれた氣持でした。成程、諫死組が躍起となつた筈です。さういふ今夜であるならば、或ひは、

ひよつと、諫死といふやうな奥の手が、思はぬ効を奏し、綱宗侯も、つひに、我を折つて、幕邊と家老達へ、和議謝罪の誓言をする事になつたかも知れない――そんな風に考へると、そこに、人知れぬ責任が、かぶさつて來るやうに思はれるのです。

『仕方がありません。』

と初子の方は、口の内で、呟きました。

『何とか、何とか殿の御意を、お前の手で……』

『いゝえ。』と初子の方は頭を振りました。『もう駄目です、そのやうな手緩い事では。』

『でも……』

『駄目です。』と強く云つて、それから、賴母の顏を見ました。『あなたの方の事は、取決めて來ました。』

『え？』

『雪乃に會ふ方策は、ちやんと、取決めて來ました。』

『あ？』賴母は、さすがに、顏を赧め、慚愧の汗を滲ませました。『そ、さうですか。』

『その代り、此處ではありません。』

『はい。』

『邸外へ出て下さい。』

『邸外？』

『雪乃を、北門外の御植木畑へ、木蓮の

枝を剪りにやりますから、貴郎は、そこへ、先に廻つて、待つて居て下さい。早くしないと、もう、出懸けますから。』

『はい。』頼母は、思はず身を起しました。『向ふは一人ですか？』

『いえ、二人の侍女が跟いて居ります。』

『二人の？』

『でも、その人達には、ちやんと申付けてあります。塀寄の三つ目の木戸が開いて居ますから、その代り……』と初子の方は、云ふのです。『本人は何も知りませんよ、その積りで。』

『そ、さうですか、有難う。』

『貴郎は、西門を出て、ずつと裏を廻つて下さい。』

『はい。』

『分りましたね。ぢや、早く——早くしないと。』

『では！』

と頼母は、勢ひよく、立上りました。

三

萬事思ふ壺でした。

それは、邸外で會へるといふ事です。初子の方も考へたのでせう。これなら、多少、默認の形が取れない事もない。御植木

畑は、觀月の宴などのある所で、半分が畑、半分が庭。その庭には池もあり、蘆堤もあり、態と、邸外にしつらへた風流な別園でした。

實は、どこだつて好いのですが、然し、そんな場所なら、猶更ら結構。

西門は傭人口でした。

そこを出て裏塀添ひに――凡そ、十間ばかりも歩いたでせうか。

突然、闇の中から、

『待て。』

と云ふ聲が懸りました。

『え？』

闇を透して見ると、正しく侍らしい人影が一つ、づかづかと、近寄つて來ます。

そして、

『頼母、邸内の刄傷は法度だが、……こゝなら好からう。』

と云ひました。

『呀？』

と頼母は、始めて、棒で打たれた様な氣持がしました。

諫死組の一人です。成程、さつき、邸内では刀は拔けまいと、高を括つて相手を見侮つたが、こゝは邸外であつた。戀の邂逅も、邸外が都合の好い代りに、諫死組が刄を磨いでゐる所も、やはり、同じ邸外だつたのです。

さう氣がついた時は、おそかつた。

相手は、刀の欛に手をかけ、

『さつきは、我々一黨に、よくも熱湯を呑ませたな。』

と、顏を突出して、囁きました。

『…………』

頼母は、最早や辯解の餘地のない事を知りました。

『拔け。武士の情だ、太刀合せして仕はす。』

と躙り寄つて來ます。

『…………』

『何處の門より出づるとも、一人づつ、我々一味が張番してゐたのだ。』と相手は、益々、心地よげでした。『所詮は、貰ひ受ける命だが、今夜の内なら、猶更ら結構。身から出た錆と思つて、觀念いたすがよい！』

『よろしい。』

と頼母は云ひました。

氣前のいゝ聲でした。

それは、急ぐからです。言葉で說き伏せてゐる隙もなければ、

愚圖々々作戰を練つてゐる餘裕もない。可及的、はやく、こゝを切り上げて、雪乃の所へ駈付けるには、どうしても、早く太刀合せをするより他には、始末のつけ樣が無いのです。

始末をつけると云つて、自分の方がつけられるかも知れない。然し、それでも仕方が無いでせう。所謂、死よりも强き決心でした。いや、決心などといふ自覺的な物ではなく、切羽詰つて渾身の勇と化したのです。

『うむ、來るか？』

と云つて、相手が、握つた欛へ、力を籠めた時、

『すぐ――』

と應へて、賴母は、もう、刀を拔いて居りました。

『貴樣ツ。』

と驚いて拔く相手に、

『來い。』

と中段を、突きつけて居ります。

性急なものでした。

『おゝ。』

『やつ。』

と、殺氣が乘りました。

途端に、賴母はもう、斬込んで居ります。

太刀呼吸が、寸短かでした。尖刀が、ぱつぱつと、跳返つて、意表に、疊み込むで行きます。而も、それが、變則なくせに、相手の先手へ、叩きつけるやうに這入るから不思議だ。全く、死を無視した、法外な鋭さと云ふものでせう。

『貴樣……』

と相手は、勝手の違つたやうに、太刀を縮めて、

『犬侍ツ。――』

そんな事を叫びました。言葉を加勢に出すやうでは、多少の、弱味でせう。

『おのれ、切腹の作法を知らぬ奴が――』

などとも、罵りました。

賴母は、

『早く……』

と誰に云ふともなく、口の裡で呟いて、

『やつ。』

と斬りかぶさるのを、

『何をツ。』

と相手は受けて、直ぐ、斬返しました。その手が、もう少し伸びてゐたら、危なかつたでせう。賴母の小鬢に、風が當つただけで、尖刀は、上向へ、飛びました。こゝで、賴母が、身を

引くのが順當でせう。然るに頼母は、向ふの開いた小手へ、無茶苦茶に飛び込んで、何處とも知らず突刺して居りました。

『呀……』

と云ふ聲と、つ、つ、つ、と、重傷を怺へる聲と、それに合せて、相手の身體は、小田原提灯を疊むやうに、ジリジリと縮まつて、バタリと、膝を突いて、前に、倒れました。

『お〻。』

と自分で惘れた頼母です。

が、次の瞬間、宙を飛ぶやうにして、闇を走つて居りました。

四

勿論、植木畑へ來ました。

『この邊――』

と頼母は、目と、手さぐりで、云はれた、三つ目の木戸を、轉ばるやうに捜し當てゝ居りました。

すぐ押して見ましたが、開きません。

『はてな？』

すると、中から、

『誰人ぞえ？』

といふ、年取つた女の聲が聞えました。

『私……』

と頼母は、すぐ、答へて見ました。

『三澤樣？』と、口だけ、何處からか、差出したやうな、近々とした、囁聲が聞えます。『もう遲くなりました。』

『え？』

『もう遲くなりました。どうしたのです？』
『開けて下さい。』と賴母は、いきなり、强請みました。『いろいろ、事情があつて……早く、こゝを。』
『開けたところが、最う、御本邸口の方へ。』
『開けて、開けて。』
『困りましたねえ。』
然し、その聲と同時に、中から、巖丈な木戸が、ギイ……と開きました。
賴母は、吸込まれるやうに、中へ、飛び込みました。
『御老女……』と、よく見もせぬ相手を、賴母は、突然、さう呼んで居りました。『御殿附雪乃殿は？ど、どこへ？ どこに居られます？』
『叱ツ……』
と老女の顏が、地面近く、打伏ると、
『何ですねえ、こんなに遲く來て――』すぐ然う嗜めるやうに、『靜かにして下さい。御臺樣、御指圖の賴母樣ですね？』
『さうです、私です。』
『彼方へもう……』と指さしたのは、闇の中でした。

『間に合ふか何うか、今、御本邸口の方へ、もう、御歸途ですから。』

『え？ 御歸途？』

『雪洞が消えて了つて……ほれ、あの邊。』

『ど、どの邊？』

頼母の身體が、スツと伸びて、もう、そつちへ歩き出して居ります。

『駄目ですよ、御自分勝手に……』

と云ふ、老女の狼狽た囁聲を後ろに聞いて、頼母は、草か、道か、見分のつかぬ中を、水を掻くやうに、兩手で、目の前を拂ひ退け、拂ひ退け、一散に走りました。

向ふに、白い、木の枝だか、花だかが、兎の耳のやうに動いて居ります。よく見ると、それは人の手に持つて居る花のやうでした。

『もし……』頼母は、追縋つて、それに呼びかけました。『お待ち下さい。御奥の、雪乃様ではございませぬか。頼母です、三澤頼母です。』

『あれ……』

と云ふ聲が、今、頼母が、目指した方角よりか、少しはなれた、左手の闇の中からしました。そこに、白い女の顔が、佇んで居るやうです。この方が、雪乃なのでせう。

『あ？』と頼母は、狼狽てゝ、焦點を、そつちに向けました。

『おゝ、雪乃様ですか？』

『まあ……』

と低い、脅えた聲がしました。

『實はね。』と、附添の女が、早口に、急いで、雪乃の耳のところで頼母にも聞えるやうに、囁きました。『御臺様が御承知でございますから……二言三言、お話を遊ばされまして。』

『雪乃様。』

頼母は、この闇のもどかしさと、闇だから救はれる思ひと、兩々半ばする氣持で、そこへ、全魂を抛出すやうに跪きました。

『こ、このやうな手段を執りましても、決して御氣色を惡くなされぬやう。』頼母は、何から云つていゝか、分らないのです。たゞ、詫つてゐる場合でないと氣がついたか、急いで云ひました。『貴女の御本心が訊きたいと思つて。雪乃様……青根以來、苦心に苦心を重ね、やつと、今夜。だから、もう、左右の人を憚つては居られませぬ。さ、こゝで、一言、貴女の御本心を。』

『まあ……』と云つて、雪乃は、羞恥の息を彈ませた樣子ですが、何か、決心したか、闇の中で、白い顔が左右に搖れました。

『いけませぬ。貴郎に、よくお逢ひした上でなければ。』
『私に？　私は、こゝに居るではありませんか。これが私です。こゝに逢つてゐるのが私です、三澤賴母です。』
『分りませぬ、聲ばかりでは。』
『な、何を仰つしやるのですか。』
『御臺樣の落度となつては成りませぬ。よく考へて下さい。』と雪乃は、何か、意を含めて云ふのです。『亦、妾としても、お顏も見ないで御返事など。』
『あ、灯を點けて下さい。』賴母は、たゞ一筋の熱情でした。『灯を點ければ分る。確かに本人だ。聲、聲だつて……いや、灯を早く。』
『聲だけなら、妾には分つて居りますから。よく、分つて居りますから。』
『灯を、灯を。御老女、そ、そこの雪洞を。』
賴母は、相手の意を含めた言葉が、耳に入らないのです。聲ばかりでは……と云つた言葉を、そのまゝの意味に取つて、灯があつて、顏さへ合せれば、直ぐ解決がつくつもりで居るのです。
『さ、雪洞を、雪洞を。』
『あ！』と老女が、何か見て驚きました。『向ふから、御火の番の提灯が。』
『あら。』
灯は灯でも、これはいけません。
『さ、では。』
と老女達の促す聲。
『何處へ行くッ？』と賴母は、つひに、叫んで居りました。『雪乃、ひ、一言ッ。――』
雪乃が、何か云つたやうでしたが、その聲が聞分けられぬ內に、もう、御本邸口の木戸の中に隱れてしまひました。

隱居

一

綱宗侯が、一人、居間に、坐つて居りました。
目の前に、何か、一通の書類が、置いてあります。今讀み上げて、下に置いたばかりでせう。
それには、斯う書いてあつたのです。
陸奧守事、御存知なされ候通り、病氣故、萬事勤罷成るべき樣子に御座無く候、政宗以來、御當家の御重恩淺からざる儀、

下々以て忘却不仕候、何とぞ成長、御奉公申上げられ候様にと、朝暮念じ奉り候、然る所に、陸奥守只今病氣に御座候ては、國之仕置等恙無く申付けらるべき儀覺束なく存じ奉り候、幼少に御座候得共、二歳に罷成候伜御座候間、彼者に名字相續仕り、陸奥守儀隱居分に仰付られ下し置かれ候様に、御公儀罷成るべきに於ては、連判之者共願奉り候條如此御座候、

以上

萬治三年七月九日

伊達彈正
伊達式部
田村右京
伊達安藝
伊達和泉
伊達安房
石川大和
奥山大學
遠藤文七郎
富塚内藏丞
茂庭周防
片倉小十郎
大條兵庫

宛名は老中府。これは、勿論、綱宗侯の隱居願でありました。

その傍に、もう一通、小さい書付が置いてあります。これは、綱宗から、家老達へ承知の旨を下げ渡す、いはゆる隱居承諾書なのでせう。

まだ、書判は捺してありません。

綱宗は、ヂツと瞑目して居りましたが、目を開けると、横の木鐸を引寄せて、からん、と鳴しました。

腰元が、御控廊下を通つて、襖口に、

『はい。』

と云つて平伏すると、

『初子を呼べ――』

と綱宗は、亦、瞑目しながら命じました。

『はい。』

腰元が、行つて了ふと、暫くは、静かなものでした。

衣摩の音がして、襖口に畏り、

『御免遊ばされまして――』

さう云つて、静かに開けて、初子の方が這入つて來ました。

未だ一言も交さぬが、途端に、暗默の融合……とでも云ふべき、珍らしく、平和な空氣がたゞよひました。大きな同情が、どちらの胸の中からも湧き起つてゐるからでせう。これは、最後に到達した、夫婦のみが知る、大きな愛――あるひは、憐れみ、そして清純無欲な心でした。

『御呼びでございましたか?』

『こちらへ。』

と綱宗は、優しく云ひました。

それから、傍へ、實に靜かな様子で、膝行して來た妻……側女ではあるが、妻にひとしい初子の顔を、ヂツと、見て、

『これに書判をおすよ。』

と、それはそれは、一層、物優しい聲で云ひました。

二

『はい。』

と微笑ながら、初子の方も、静かにうなづきました。

目には幽かに、悲しみはあつたけれど、――夫婦は、さも樂

しい仕事でもはこぶ時のやうに、おだやかに、その事を行つてゐるのです。

『その前に……』

と綱宗は、何かいひかけて、一寸、片頬へ笑を漂はせました。

『何でございます？』

初子の方も、それを、目で受けました。

『その前に、一度、お前も、化粧をして見せてはくれぬか？』

突如として、そんな事を云ふのです。

『はい……』初子の方は、これには、始めて、卒然と悲しみの表情をしました。然し、すぐ、笑つて見せてゐるのです。『ええ、さう致しませう。』

『それから……』

と綱宗は、また、何か云ひかけました。

『はい？』

『龜千代をこゝへ――』綱宗の聲は、凛えて居りました。『大守として、一度、龜千代とも會うておきたいから。』

『ま。』

初子の方は、たうとう、怺へられなくなつて、目を伏せました。

『お前が抱いて連れて來てくれ、他の者は誰も參らぬ方がよい。』

『はい。』

『三人で……』と綱宗は、そのことを最後の思ひ出にしたいと願つて居る樣子です。『こゝで集ることは、もう、この以後、無いであらうから……いゝだらう？』

『えゝえゝ。』初子の方は、咽喉で涙を呑みました。『さう致しませう。今、妾がお連れ申して參りますから。少々、お待ち遊ばして……』

後は口の内に殘したまゝ、初子の方は、すぐ立上つて、やゝ取亂した樣子で、居間を出て行きました。

おだやかに構へてゐるけれど、感情の疾風は、どこかに渦を卷いて、出口を求めてゐるやうです。

でも、綱宗は、冷靜さを失はずに居りました。

やがて、まるで忍ぶやうに、そつと、襖が開きました。

初子の方が、幾日ぶりかで綺麗に化粧をし、今年二歳の龜千代君を抱いて、靜々と、摩足で、這入つて來ました。

『あ？……あ？……』

と首を廻して、物珍らしさうに、龜千代は、部屋の中を見廻しました。丸々と、よく肥つた可愛い子供です。

『おゝ。』

と綱宗は、始めて心を動搖させたやうに、兩手を擧げて、
『こゝへ〳〵。』
と云ひました。
『父様へ行くかえ？』
と初子の方は、反語を用ひて、頰摩をしました。
『いやぢや、いやぢや、いやぢや。』
龜千代は、兩足をピン〳〵させましたが、それでも、きやらきやら笑ひながら、飛下るやうな恰好で、兩手をもがもが差延べて、彈丸のやうに父親の胸元へ抱かれました。
『おゝ來たか〳〵、こりや、重いぞ〳〵。』
『ほゝゝゝ。』
と初子の方も、口に手を當てゝ笑ひました。
どこに不幸があるのでせう。
若い父であり、また、それよりも、一層若い隱居が、そこに出來懸つて居るとは、どうしても思はれぬ光景でした。
『六十二萬石の殿様かえ、六十二萬石の殿様かえ。』
さう云ひながら、綱宗は、龜千代を高く差上げて、ぐりぐり、纏の様に動かして笑ひました。

× × × ×

その晩。
綱宗は、いよいよ、家老共への下げ渡し書へ、書判を入れようとして、燈の下に坐つて、筆を握つて居りました。明朝早く、下げ渡すこの書類でありますが、今夜の內に、書入れておいたところが、勿論、差支へのある筈はありません。
『もう思ひ遺す事は——』
さう思つた時、綱宗は、ふと、何か思ひ浮べたか、
『あ？』
と自分でも、ギクリとしたやうに、云つて考へ込みました。
それから書判を入れる事を中止して、筆を下におくと、目の色が突然輝きを帶びました。そして、
『さうだ、雪乃に會つて置かう。』
然うつぶやくと、昂奮したやうに急いで手を拍きました。
（つゞく）

胃腸病にイノール
急性慢性の胃腸病に比類なき卓効！
—全國有名藥店にあり—
0.50
1.00

生涯の生活費

竹田敏彦

總理大臣にまでなられた男爵田中義一大將が、まだ陸軍大佐の頃――恰度兒玉參謀長の幕下として日露戰爭で男を上げて間もない時分である。例の磊落豪放な性格で、生活はいつも不如意がちだつた。或る日井上馨侯の邸で、偶然會つたのは、昔腕白時代の舊友藤田系の大實業家西村秀造翁である。

『珍しいのう。』『久しいのう。』と、お國言葉で二十年振りの對面を喜び合つたが、その時、西村翁が、

『時におぬしも今度の戰爭では大手柄で何よりぢや、ついては一つ相談がある。』

『何ぢや。』

『聞けばおぬしは磊落な男で始終貧乏に苦しんでゐるといふが、何うぢや、友達甲斐に、これからおぬしの家の臺所を一切俺に一任させてくれんか。』

さすがの男も、突然の奇言に、暫時躊躇してゐると、

『何をもぢ／＼しとる。そのかはりおぬし、臺所の心配など忘れて、一生懸命お國に忠勤を勵んでくれ。おぬしほどの武人が金で頭を使うては困る。』

知己の言に男は始めてにつこりしたが

『それは忝いが、しかし、一年や二年なら御免を蒙るぞ。』

『言ふまでもない。おぬし一代の面倒を見る。』

動物珍話

火山樓

犬、馬、象と猿とは人間の外では頭腦が發達してゐて、その叡智な奇談は人を驚かすばかりであるが、先年物故した氣象學の開祖和田博士は歐洲遊歷中、五ケタの算術をする馬を見たといはれ、近來では米國に犬が撮影技師となり監督となつて人間の寫眞をとる、ワン君主演のトーキーまで出來てゐるといふ始末。

その代り、人間がこれ等の動物を待遇するにも人間並にすることもある。アメリカ、アトランチック市の或夫人が知人の宅の前を通行中、同家の愛犬が飛び出してさん／＼咬みついた。夫人は大いに憤慨して警察に訴へ出た。見ると、かなりの重傷を負はせてゐるので、警察では、その犬を死刑に處することに決定した。それと聞いた犬の主人は驚いて、愛

その後、西村翁は、毎月缺かさず、奔放な男の金遣ひを、悉く奇麗に支拂つて、いやな顔一つしないばかりか、男の電話一つで、何んな臨時の費用も、すぐに屆けてゐた。それも勿體らしく向ひ合つて手渡しなどはせず、いつも古新聞に無造作にくるんで、投り込んでゆくといふ奥床しいやりかただつた。

ところが大正十四年の秋、西村翁は二十日ばかりの急病で死んだ。臨終の席に、一番に驅けつけたのは田中男だつたが、翁は、厚く男の志を感謝し、さて人拂ひをして、

『田中君、許してくれ。おぬし一生のお約束をしたのに、一足さきに逝かねばならん。違約して殘念ぢやがゆるしてくれ。』

涙を流して男の手を握つた。男も泣きながら、

『忘れんぞ西村、長いことお世話になつたのう。』

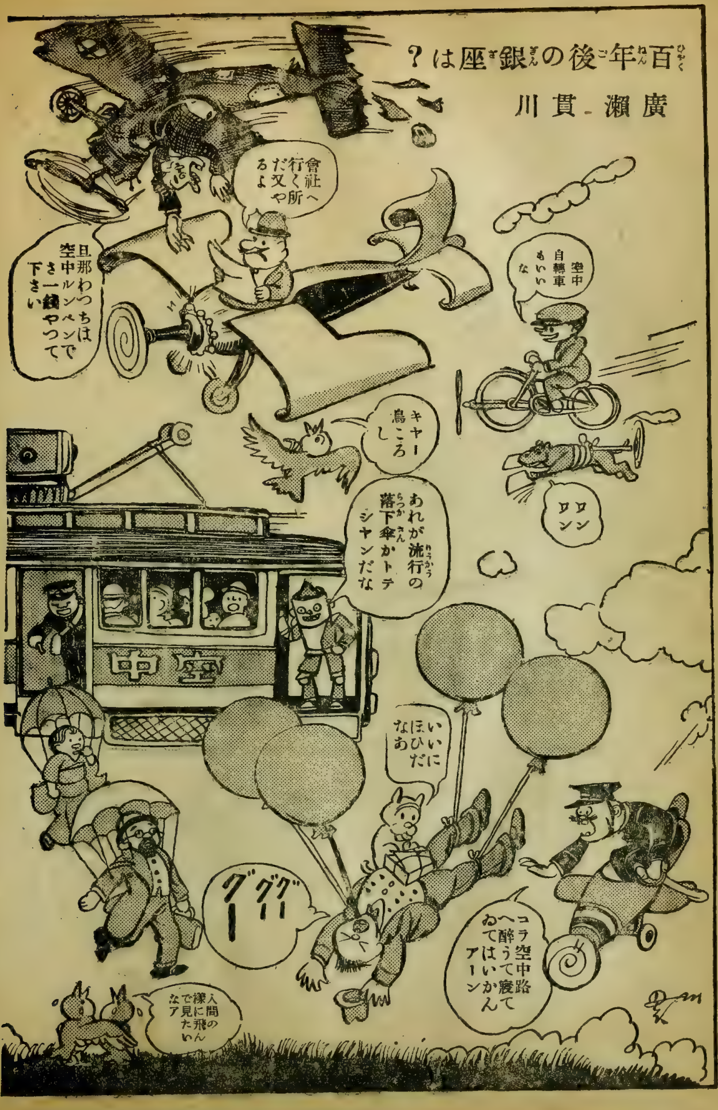
すると翁は、蒲團の下から大きな新聞包を出して、

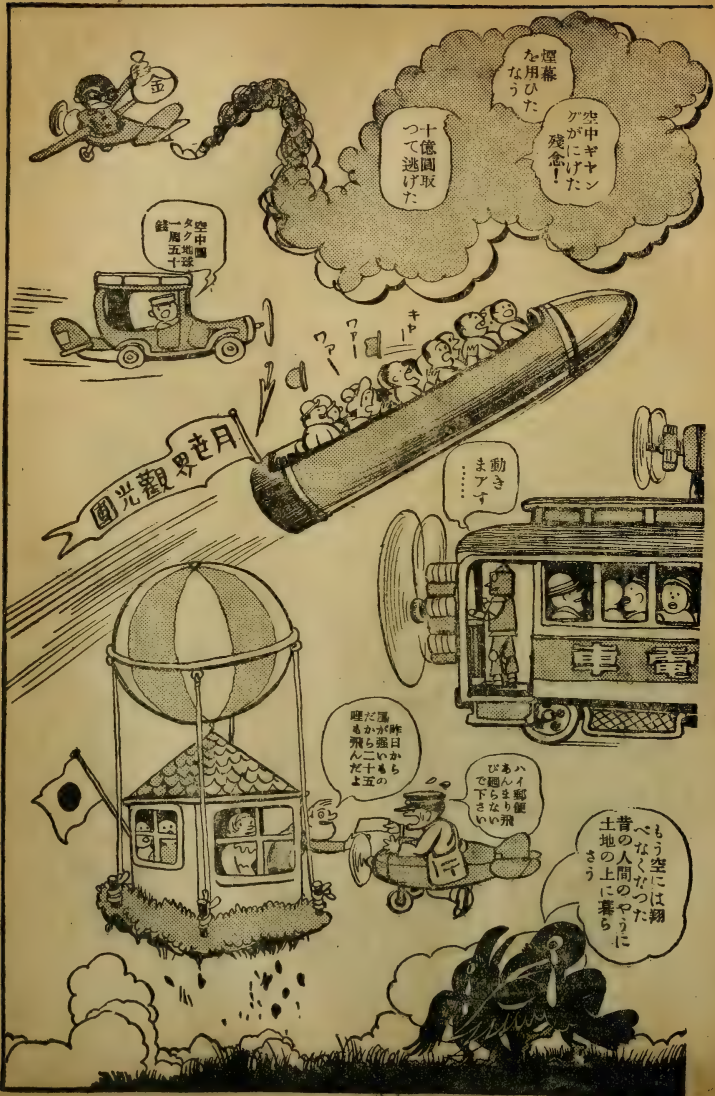
『俺が最後の志ぢや。どうぞ收めてくれ。』

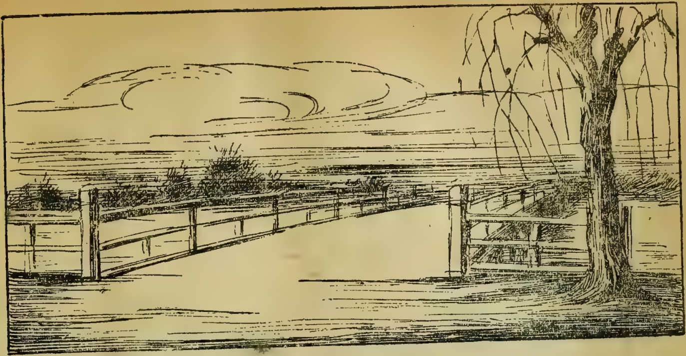
と手渡した莫大な金。これが、翁の直接手渡した最初で、且つ最後の贈物だつた。

犬とともにニューヨークに高飛びして仕舞つた。警察から犬の身柄を引取りに行つて見ると此の次第だから、犬の出奔に對しては法律上、如何に取扱ふべきかと研究中であるといふ。

それから、これは維新前のことで、少し古い話だが、吾邦でも人に咬みついた馬を、人間同樣に、河原に引出して磔刑に處したことがある。檢視の役人が出張して、磔刑の宣告書を讀み聞かせ、それから磔刑にした。此の時こそ馬の耳に念佛であつたらう。これは眞實の話だ。


百年後の銀座は?
廣瀬 貫川
會社へ行く所だ又やるよ
旦那わつちは空中ルンペンでさ一銭やつて下さい
空中自轉車もいいな
キャー鳥ころし
ワンワン
あれが流行の落下傘かトテシヤンだな
空中
いいにほひだなあ
ググーググー
コラ空中路へ酔うて寝てゐてはいかんアーン
人間の様に飛んで見たいなア


金
煙幕を用ひたなう
空中ギャングがにげた残念！
十億圓取つて逃げた
空中圓タク地球一周五十錢
キャー
ワァー
ワァー
月世界觀光團
動きまアす……
電車
昨日から風が強いもんだから二十五哩も飛んだよ
ハイ郵便あんまり飛び廻らないで下さい
もう空には翔べなくなつた昔の人間のやうに土地の上に暮らさう



小説

口笛を吹く男

福田正夫

田中良畫

一

凍るやうな冷い霧が、街道の上を渦巻いて走つてゐる。川から吹き上げてくる風に乗つて、それは白い獣のやうに、康二に襲ひかゝつてくるのである。乗りすてた乗合自動車が行つてしまふと、堤の上にひゞくのは、瀨に鳴つてゐる水音ばかりだ。——昏れかゝつてゐる街道には、彼の影だけが一つとり殘されてゐた。

が、彼は外套の襟も立てずに、がつしりした肩を搖つたのである。

「はゝ、はゝ、四年ぶりでの歸りを、霧のお迎へかよ。海ぢやねえからいゝ、ふゝゝゝ！」

のんびりした笑ひ聲である。無邪氣な黒い顏が、肩の中にすいいとすくむ、――丈が高いから、先刻ひよいと肩に受取つたまゝの大きなトランクも、提げてゐるズックの大袋も、たあいなく輕さうに見える。彼はすぐに大きな靴を鳴らしながら、風に向つてのつそりと大股に歩き出したのである。外國水夫風な海の匂ひが、彼のどこかにつきまとつて、いつか口笛がチッペラリーを、霧の中にひゞかせてゐた。

家を出る前の康二といつたら、呑氣ものゝ見本で、氣性の烈しい父親の康造も匙をなげると、

「少し世間を見てくるがいゝ！」

と、――彼は追ひ出されるやうに、港の親類にやられたのである。

が、彼はそこに三月と辛抱しなかつた。好きな船乘りになるからといつてよこして、外國船の水夫になつてしまつたきり、手紙一本よこしてゐなかつた。

で、彼はにこにこするのである。

「父つあんや兄貴も驚くだらうな、ふゝ、ふゝゝゝ！」

そのくせやがて橋をわたりきつて、灯のついた村に這入つてからも、一軒づつなつかしさうに覗き込みながら、まだ口笛を止めようとしないのである。彼の呑氣さは、三年餘り世間をわたつて來ても、少しも變つてゐないのだ。

彼は村で庄屋さんといふ、泉家の門の前に出た。

「おや！」

彼は二十ばかりの娘をみつけて立止まつたのである。娘は白い顏を霧にさらして、邸の中をのぞき込んでゐたが、足音にふりかへつて彼を見た。

「民ちやんぢやあねえかね？」

「え！」

「大きくなつたなあ、奇麗に……。おれは康二だよ、忘れたかい？」

「まあ！」

民子は頬を赧らめた。

「清一つあん丈夫かね、元氣にはたらいてるかね？」

康二は彼女の兄と小さい時から仲よしだつたので

ある。

『…………。』

急に民子が泣き出した。

呑氣な康二もこれにはあわてた。——若い娘に泣かれるなんてはじめてだし、なにがなんだかわからないけれど、とにかくズックの大袋をそこに置いた。

『な、なんだい、わからねえ、……どうしたんだ？』

『に、兄さんが……。』

『清一つあんがどうかしたのかい？』

『え〻、こ、この頃炭燒をしてゐるの。それで、前には、かまはなかつたのに、い、泉さんで、急にやかましくなつて。……と、盗伐をしたつて呼ばれてゐるの。』

『ふうん！』

『辨償しなければ、警察にわたすらしいのよ。』

『ひでえなあ、そりやあ……。』

『姉さんは病氣だし……お金なんか、この不景氣で。』

『は〻！』

康二は笑つたのである。

『金なら少しあらあ。待つてな、おれが行つてくるからな。』

『あ！』

民子が引き止めようとしたけれど、彼は蚊がとまつたほどにも感じないらしく、それをふりはらつて大袋を持ち上げると、のつそりと門を這入つて、かまはずに家の戸口をあけはなした。清一はそこの上り段にすゑられて、下男に見守られながら、青くなつてうなだれてゐた。

『清一つあん、這入るぜ。』

彼はためらはなかつたのである。

『久しぶりだなあ……。』

『誰だ？』

泉の主人がびつくりした。

『わつしでさあ、康二で……。いま歸つて來ましたがね、は〻、清一つあんが困つてるといふんでね、は〻〻〻！　その後は御機嫌よう、御無沙汰しましてよ。』

『他人の家い、荷物をかつぎ込むつてあるだか。』

『あ、すみませんや。』

彼が大袋をどしりとおいて、トランクを投げ下ろすと、踏み板がみしつと鳴つた。——下男はおどろいて一足すさると、默つて彼をみつめてゐた。が、彼はたゞのつそりと立つたま〻、内側のポケットから、古びてはゐるがもつくりふくれてゐる財布をとり出したのである。

彼はそれを清一の膝の上に置いた。

『清一つあん、これで辨償しなよ。遠慮しねいでいゝ。……が、殘つたら、あとで返してくんな。親父にも土產のつもりで少しやりたいからよ。ぢや、さいなら、おやかましうございました。』

彼はまた輕々とトランクをかつぐと、大袋を提げて出て行つた。

『民ちやん、清一つあんすぐ歸るぜ。』

『……………。』

『また逢はうや!』

霧の中にすぐチツペラリーの口笛だつたのである。

二

翌朝、きつちり六時に、彼はのつそりと起き上つた。船のくせがついてゐるので、前の晚に清一が泣いてお禮に來たりして、遲くなつたけれど、時間以上はねてゐられなかつたのである。

彼は起きるとすぐ呟いた。

『驚いたな、ふゝ!』

それは彼の妹のお靜が、淸一にかたづいてゐたことで、彼は思ひがけなく、病氣でゐる妹の夫を助けたことになつたのである。父親の康造や兄の康一は、彼のやり方にあきれもしたが、よろこんでもくれた。

財布の金は四拾圓だけ使はれても、四百圓ほど殘つてゐた。

『ぢやあ、六拾圓足して、きつちり百圓だけ、お靜にやることにしまさあ。』

彼はさうしたのである。

そしてその殘りをみんな、家の暮らしの足しにしてくれと出してしまふと、とてもうれしさうに笑つたのである。

『あはゝゝ、さつぱりしたあ。』

母親のおよしが心配した。

『おめえ、自分の小づかひをとつとかなくていゝのかよ。』

『ふゝ、まだ二拾圓ばかりあるよ。』

彼はまたいふのである。

『その代りわしや酒は好かねえで、明日あぼた餅を御馳走して下せえ。』

これには淚ぐんでゐた淸一までが、笑はなくてはならなかつたのである。――康二が思ひ出し笑ひをしながら、みんなと朝飯の膳についてゐるうちに氣がついたのは、金のさわぎで折角の土產物を出すことを、うつかりしてゐたことである。

『いけねえ、いけねえ、ふゝゝゝ!』

あとで彼はそれを開いた。

『わあ、よく買ひ込んだなあ！』

父親のおどろいた程、それからいろいろな物が出た。——彼は親類などにもそれからわけて貰ふことを、母親に委せたが、お靜のはきめてあつたので、民子のためにそれと對になる印度絹の襟卷を自分できめて、恥づかしさうな顏をしたのである。

『えへ、少しはずむけど、……お靜が厄介になつてるからよ。』

『いゝともな。』

母親も機嫌がよかつたのである。

『よろこばしてやつてくんな。わりいこたあねえによ。』

『お靜の見舞ひがてら行つてくるに。』

彼はそのくせ家を出ると一しよに、昨日と變つた明るい太陽の下を歩きながら、いゝ氣持になつてしまつて、民子があわてて家にかけ込むのを見ても、別に氣にかけない程のんびりしてゐたのである。

お靜は大病といふでもなかつた。

『またくらあ！』

彼はなにを考へたのか、あわてゝ家に歸つて來た。

裏に出て物置でごそごそしてゐたかと思ふと、すぐににこにこしながら、見つからないやうに、蝦すくひの手網とびくをかくして家を出た。

『どこへ行くだ？』

と、母親が呼んだ。

『うむ、ふゝゝ！』

彼は答へずに、口笛を吹きながら行つてしまつた。

昔の呑氣が出て來たのである。——彼は村の裏川から水車のたまりへ、枝川をしまふと河原へと、川蝦をせゝりはじめると、それがうれしくなつて、大きな身體を水面にこゞませて時を過ごしたのである。家に客がくるかも知れないことなんか、すつかり忘れてしまつてゐた。

午後になつてから、彼のびくには大分獲物が殖えてゐた。

『あれツ、晝飯を喰はなかつたかな。』

彼はやつと氣がついた。

『ふゝゝ、いけねえ、急に腹がへつて來たぞ。』

彼は子供みたいにがつがつした氣持で、堤の上にのぼると、急ぎ足で枝川の岸を歸つて來た。そして泉の家の裏手までくると、そこの堰の深いところで、小さな子供が溺れかけてるのをみつけたのである。

『あつぷ！』

彼はあわてゝそのまゝ飛び込むと、泳がうとしてひよいと立ち上つた。

『なあンだい、ふゝ！』
水は彼の膝の上位しかないのである。彼は歩いて子供を抱き上げると、ゆさぶつても息をふき返さないので、青くなつて路にとび上がつた。

『おうい、川流れだあ。ど、どこの子だよウ！』
『わあ、家の孫だア。』
泉の主人がとび出して來た。
彼は五つにもならない小さい男の子を、すぐ泉の家に抱き込んで、水をはかせるやら、水夫としていつかおぼえてゐた呼吸法をやるやらして、やつと息を吹きかへさせたのである。——氣がつくと寒くもあるし飢ゑてもゐる。
彼が歸らうとするのを、泉の主人が引き止めた。
『ゆつくりして下せえ、康二さ！』
『ふゝ、少し用が、急ぎますで……。』
『さうかね。』
『また來まさあ。』
彼は家に歸ると、來てゐる客に挨拶もそこそこに、ぼた餅を幾つでも平げつゞけたのである。母親もさすがにあきれて、彼が川へ落ちたことときめてゐた。が、彼もそれをいゝことにして叱られてもたゞ笑つてゐたのである。彼はそんなことよりか、夕飯の天ぷらにするつもりの蝦

を、びくから川へ流してしまつたので、少し悄氣てゐたのである。

三

翌日も彼は隙をみつけて、そつと蝦すくひに出て行つてしまつた。そしてかなりの大どれに意氣込んで歸つてくると、泉で彼を父親と一しよに、夕飯に招待して來てゐるといふのである。

『つまんねえ。』

彼はふくれた。

『父つあんだけ行つて下せえよ。』

『あゝれこの我儘が。……われ孫さんを助けたいふでねえか。內輪の話もあるから、お禮もしたいし來てくれつていつて來てゐるだ。』

『はゝ、わかつてんのかい。』

『村中で知つてらあ。』

『禮ならくるのがあたりまへだがなあ。』

『ぐづぐづいふなよ。しまひにや俺も腹を立てるぜ。』

『ふゝ、しやうがねえ。また天ぷらのとり損だあ。』

『上げといて貰つて歸つてから食べろよ。はゝゝ、いつまでも、おめえはねつから子供だなあ。』

父親の康造もしかたなくて、笑つてゐたのである。

が、出掛けるとなると、近在でも評判の物持の家によばれる

ので、父親はひどく機嫌がよかつたのである。泉の主人もにこにこして迎へ入れると、離れの客間に彼等をとほしてもてなしてくれた。――たゞ酒の好きでない康二は、主人と父親とがはずむのを見ながら、二三杯にすつかり赤くなつて、もぢもぢと歸りたがつてゐた。

蝦の天ぷらが氣になつてゐるのである。

『ふゝ、つまんねえ話をしてゐらあ。』

彼は先に引き上げるつもりで、機會をねらつてゐた。

『時に、話があるだが、聞いてくれろ。康二もな。』

泉の主人がいひ出した。

『へえ！』

父親は上機嫌である。

『外でもねえが、おれはこの康二の氣性に感心した。それで……おぢいはよく知つてるが、一番上の娘のおみよが、あの助けてくれた孫をかゝへて、あゝして亭主に別れてゐるだ。わしも氣にかゝるしなあ？』

『へえ、へえ、違ひねえで……。』

『それで話といふなあ、おみよの河野の家へ……、康二に入夫して貰ひてえ。それだあよ。』

『ほ、ほんとにかね。』

父親は驚いてゐたのである。

『ほんとよ。冗談なんかいへるもんぢやあねえ。……もつともさうなりやあ、家で預つてゐる河野の株あ、孫の時太郎の名になつてるが、康二のもんも同じだしな。家やあかしてあるけど返して貰つて、すつかり手入れをしてやらあな。』

『うゝん、そ、さうですだか……。』

父親はうめき出した。

『そりよう、おみよさんも承知で、承知でゐられるですかい。』

『まあ、はつきり話はしねえが、彼女も感心してゐらあ。』

『康二をねえ。』

『さうよ。』

『康二！』

父親が、默つてにこにこしてゐる彼をふりかへつたのである。

『わりやあ、幸福もんだぞ。河野さんを嗣がしてくれるなんてよ。』

『ふゝゝ、つまんねえ。』

康二が笑ひ出したのである。

『なにがをかしいだ、馬鹿！』

『はゝ、わしやあ、そんないゝ家なんか嗣げる身分ぢやねえ。

百姓も嫌ひぢやあねえが、人間がうるさくつてよ。』
『康二、わりやあ、なにようい ひさらしくさるだ！』
『ふゝ、いけなけりやあいはねえけれど……。』
『ぢいさん、いはしてやんな。』
泉の主人が笑つた。
『はゝゝ、若い者あ元氣だ。康二、まだ文句があるかよ。』
『文句はねえです。……ふゝゝ、わしやあ、それだでありがてえけどお斷りして、先に歸りまさあ。蝦の天ぷらが待つてゐますでよ。』
彼はかまはず立ち上つた。
『康二！』
父親が叱るやうに呼んだけれど、彼は止まらなかつた。
彼は一足先へ歸つて母親にねだると、天ぷらを自分で火にあぶつて、足りない夕飯をむしやむしやとやりながら、
『うまい、はゝ、うまいや！』
とよろこんでゐたのである。
すぐあとから歸つて來た父親は、これを眺めると、苦笑ひしたきりで、なんにもいはれなくなつてしまつた。父親にはその二番息子が、馬鹿だか利口だか、少しわからなくなつてゐたのである。』

四

それから十日ばかり經つた。——が、康二といつたら、元よりずつとわるくて、家の仕事を手傳ふどころか、子供のやうに口笛を吹いてるばかりで、川漁に行つたり、山をのこのこ歩いてみたり、毎日遊んでゐるばかりか、たまに家にゐるかと思へば、
『……………。』
默つてなにか洋つゞりの本を見てゐるのである。
泉からの縁談は、また父親が呼ばれたりして、母親までも彼を口說いたが、笑つてゐるばかりで對手にならないから、いつかそのまゝになつてしまつた。
父親の康造がその晩怒り出した。
『わりやあ、どうする氣だ？』
『ふゝ、なにがです？』
『なにがつて、……泉さんは斷るし、遊んでばかりゐてよ。少しやあ畑にでも出て、後のことさ考へねえで、いつてえどうするだよ。』
『あれツ、……はゝゝゝ！』
康二が笑ひ出した。

『なにがをかしいだ、いつも笑つてさへゐりやあ濟むつもりだ。』
『父つあん、わつしやあなにしに來たんだつけな。』
『一生遊ぶつもりづら、怠けて……。』
『違はあ！』
彼は腹をかゝへてゐるのだ。
『はつ、はつはつは、……を、をかしいや。父つあん、か、勘違ひしてゐらあ。』
『なんだ。げらげら笑やあがつて……なぐるぞ。』
『はゝ、いけねえ。』
彼はそれでも笑ひつゞけるのである。
『わつしやあ、遊ぶつもりで來たのによ。』
『それだあ、いめいめしい、……またいやがる！』
『だつて、だつてよ。』
彼は無邪氣である。
『わつしやあ、二週間の休暇きりしか、船から貰へなかつたでね。……それだけたんのうするほど遊ぶつもりでよ。』
『なに？』

父親ははつとして腕を組んでしまつた。
『わ、わりやあ、休暇で來たのかよ。』
『ふゝ、さうでさ、それにきまつてまさあ。たゞわし見てえな奴でも、小さな客船ぢやあるが、南洋通ひの水夫長になれたでね。ふゝ、ふゝ、人並になれた身體あ、見せに來たでさ。』
『うゝん、そ、さうだつたかよ。』
『船がドックにはいつたんでね。それでも無けりやあ、こんな長え休暇はね・

えでさ。』

『か、かにしてくれろ！』

父親の康造は頭を下げてしまつた。

『わ、わしが早くいはなかつたで、ふふ、ふゝ、わしの方がすみましねえ。』

『…………。』

父親が涙ぐんだのである。

『す、すると、……その休暇を、温泉にも、酒場にも行かねえで、こゝへ来てくれたゞなあ。血の出るよな稼ぎをして、その金はみんな、みんな、くれたり、み、土産物にしちやつてよ。』

『それが、それがうれしいですだよ、父つあん！』

彼は泣き笑ひをしたのである。

『ふゝ、ふゝ、笑つて下せえまし。わしは、う、うれしがつてるですから……。』

『あ、ありがたう、康二！』

母親がたまらなくなつて泣き出

した。

『で、でも、止めてくりよ。そ、その氣持なら、こゝにゐたつて、……きつと、きつと、幸福がくるだ！』

『ふゝゝ、止めねでよ。』

康二の聲は小さかつた。

『わしやあ海が好きですだ。……どうせ、呑氣坊で、こゝにゐたつて、家のためにやあならねえ。』

『そ、そんなこたあねえ。』

兄の康一がいつた。

『でも、わりやあ行くがいゝ。おれが父つあんも母さまも見らあ。……おめえに貰つた金は、おめえの血だ！ 粗末にやあしねえ。きつと粗末にやしねえでよ。』

『兄さ、わしやうれしいだ。氣がさつぱりしてよウ、ふゝ、ふふ、ふゝ！』

『はつはつは！』

父親が笑つた。

『みんな笑ふべえ。お、おらあ、生れてから、こんな、こんなうれしいこたあねえ。泉のなんか、かうなりやあいるもんかあ。われにやあ、もつといゝ嫁が、手近に、手近に、ゐらあ！』

『…………。』

みんな默つてゐたけれど、うなづいたのである。

五

康二が船に歸る朝のことである。――出ようとしてゐると、そこに目を眞赤にした民子が、平常衣のまゝでかけつけて來たのである。

彼女はおづおづと心づくしのジャケツを康二に出した。

『やつと間に合つて……。』

『くれんのかい？』

『え、えゝ！』

『うれしいなあ、ふゝゝ！』

彼はすぐに外套をぬぎ、上着をとつた。

『はゝ、直ぐ着てくぜ。』

『…………。』

民子も頬を赧くしてうれしさうである。

家を出てから、彼等が二人遲くなつたのを見ながら、送つて行く父親も兄も、わざと先に立つて行つた。

『姉さんがよつて下さいつて……。』

『うん、門口ですよ。』

『今度、いつ歸んなさるの。』

『わからねいな、はゝ！……でも、この次の休暇にも、こられ

たらくるよ。』

『きつとね。』

『はゝ、はゝゝゝ！』

彼は耳まで熱くして笑つたのである。——この大男にとつても、照れかくしの恥づかしさがあつたのである。

妹のお靜は大分よくなつて、上り段に坐つたまゝ彼を待つてゐた。

『兄さ！』

彼女は白紙の包みを彼にくれた。

『お守りだよ。その代りにこつちにもすぐ、お守りを送つておくれよ。』

『あけてもいゝのかい。』

『あ！』

民子が瞼を染めると——お靜が兄の手をおさへるやうにした。

『汽車に乘つてからにおしよ。』

『ふゝ、わかんねえな。』

彼は笑つた。

『ぢや、大切にしろ。民ちやん、たのんだぜ。』

『え、えゝ、さいなら。』

『はゝ！』

彼は頭をかいて、門口に待つてゐる清一と肩を並べた。のんびりと、靴を鳴らして大股に、彼は行くのである。ふりかへると門口に民子が立つてゐて、白い美しい顔を彼にほゝゑませた。彼は手を上げて角を曲がつたのである。

『はゝ、はゝゝゝ！』

笑ひが込み上げてくるのだ。

彼はいつか並んでゐる清一のことも忘れて、チッペラリーの口笛を、愉快さうに空にひゞかせてゐた。冬空！　が、陽が輝いてゐれば、心もあたゝかいのである。泉の門の前をとほると、主人がのぞいてすぐかけ出して來た。

江戸情調滿溢の粹講談

天保六花撰

お馴染の河内山宗俊、雲州侯玄關先の强請場から、雪の吉原、三千歳直侍の口說等々、哀婉凄愴、大歌舞伎さながらの活場面。興味津々、極附の大讀物!!

（本社版　一圓　送料十二錢）

『船にお歸りかね。』

『えゝ。』

『お大切によ！』

『はゝ、ありがたうごぜえます。』

『清一どん。』

『へえ。』

主人は清一を呼びかけた。

『先達ては、頑固をいつてすまなかつたけどな。雜木なら切つてもいゝだ。炭燒やあ村の産物だで、……しつかりやつていゝものを出してくれろよ。』

『へえ、すみませんだ。』

『はゝ、はゝゝゝ！』

康二は歩き出してから笑ふと、肩を搖つてまた口笛である。なにもかもいゝ、なにもかも……うれしいな、と彼は朗らかなのである。

×

それから半年ばかり經つてのことである。烈しい霧の日の朝、その村への橋の袂で、大きなトランクと、ズックの大袋を、輕輕と乘合自動車へかつぎ込んだ大きな男があるのである。彼にはどこかに海の匂ひがつきまとつてゐるので、水夫らしいことがすぐわかるのである。

彼は白い顏を花のやうにほゝゑませた新妻と一しよであつた。

『ふゝ、ふゝゝゝ！』

それが恥づかしいのか彼は笑ふのである。

『……………。』

新妻も美しく笑つて、たのもしさうに彼をみつめてゐる。

——彼はしばらくしてさゝやいた。

『こんな日だつたな。』

『え？』

『霧がよ。』

『……………。』

『あの夕方も霧がひどかつた。……おれはあの日からひどく好きになつて、ふゝ、ふゝゝゝ！』

『まあ！』

『うれしいや、とても……。』

『ほんとに、姉さんもすつかり丈夫になつたし、おかげで兄さんも竈をふやして、炭も評判がいゝんですもの……。』

『神戸に落ち着いたら、親父とお母を呼んでやれよ。』

『えゝ！』

『京都でも、奈良でも近いや、一しよにその時見るさ。』

『うれしいわ、私！』

『はゝ、おれはその十倍位だ！』

『まあ！』

車輪のとゞろきで、その會話も外の乘客にはひゞかないのである。――それが新しく結婚した康二と民子だつたので、彼は民子から、着いたらすぐ乘船の太洋丸を見せてくれといふのにうなづくと、笑ひながらチツペラリーの口笛を吹き出したのである。

霧が街道の上を、渦巻き煙らせてゐる。

『ヒユ、ヒユ、ヒユーヒユ！』

口笛のひゞきは朗らかである。

車は驛へ向つて三里、――風をつき、霧を破つて、速力を早めてゐる。彼はがつしりした肩を、口笛と一しよに搖つて、あかずに吹きつゞける。民子はうつとりとそれを聞きながら、

『…………。』

默つて次から次へと湧く霧の幻をみつめてゐた。

康二はいつまでも、この口笛を吹きつゞけるであらう。彼にとつて、また民子にとつて、それははじめの幸福の日の思出で、美しい繪巻のはじまりなのである。

（をはり）

鶴見祐輔先生講演旅行を了へて歸朝す!!

重大なる使命を佩びて歐米各地に講演旅行を續け、更に國際聯盟協會に出席して大いに邦家の爲に活躍した鶴見祐輔先生は、去る一月三日大洋丸にて歸朝せられました。先生がさきに新時代の國民讀本として發表された理想小説『母』及び『子』の二名著は實に四百六十九版といふ驚異的大賣行を示して日本の讀書界を風靡しつゝありますが、著者の滯米中にニユーヨークより更に英譯出版されて、全米の子女を熱狂せしむるに到つた。『母』及び『子』の二名著は新時代に生くる人々に最も良き生活の指導原理を與へたもので、親は子の爲に、子は親の爲に、若き青年男女は來るべき日の爲に、是非一讀すべき大名作として、愈ゝ大好評を博して居ります。

『母』定價 二圓（送料十二錢）

『子』定價 一圓八十錢（送料十四錢）

大日本雄辯會講談社

（振替東京・三九三〇）

街頭の圖書館

水守龜之助

　二年ばかり郷里へひつ込んでゐたTといふ若い友達が、英語の教員を都合あつて辭め、突然上京して來た。當はあつたらしいが、運惡く外れたので、仕事を探すために眞劍になつて奔走することになつた。及ばずながら私も骨を折つて見たが、何しろ、昨今のことなので、どうもうまく行かないのである。英語は本職であるが、その上、繪も文も玄人以上といつてい〻器用な男だから、如何にも惜しいものだ。折角、遙る〴〵と出て來たのだから、時節柄ではあるが、もう少し、頑張つて見たい。何でもやる考へだからと當人はいふのだが、學問の家に人となり、瀟洒たる風丰で、見るからに蒲柳の質らしいT君なので、とても、無理なことを勸める氣にはなれないのである。するうち、暫らく姿を見せなくなつたので、幸ひ、仕事を見つけたのか、それとも、斷念して郷里へでも歸つてしまつたのかと思つてゐると、ある日、角帶をしめて、風呂敷包みを背負つたT君が、にこ〳〵顏で、ひよつこりとやつて來たのである。一見、小さな呉服屋の行商人といつた恰好であつた。

『ほほう！　これは、これは……。』

『テキヤ（露店商人）になりましたよ。小さなボス（親分）と知り合つて……。』

『へえ〻、一體何の露店……？』

『古本や、古雜誌ですよ。今日も品物の仕入れに廻つてゐるとこなんです。』

『そいつは思ひきつたことを始めたもんだね。』

　私は、T君がそれをはじめたについての徹底ぶりを聽けば聽く程、敬服せざるを得ないのであつた。彼は、始めるに先だつて、露店の經驗を書いた書籍を圖書館で殆んど讀みつくし、古物商の鑑札もうけ、親分について内情や、專門的な知識をも敎はつたので、既に、仲間の符牒や、慣用語まで、すつかり呑み込んでゐるのであつた。

　それのみか、名ばかりのアパートで自炊を始め、夜は七八時間も街頭に立ちつくし、倉庫へ荷物を預けたり、運んだりするには荷車を挽くなど、なか〳〵ひどい勞働をしなければならぬわけだつたが、格別、愚痴や、泣きごともいはず、朗らかな氣持でゐるので、益々驚かされた。

『いつまで、やらなくちやならぬか知れませんからね。うんと腰を据ゑてかゝつたわけなんです。』

私は、意外にも、T君が見かけによらぬ決斷力と、實行力と、ねばりづよさをもつてゐるのに感じ入り、今時のインテリ（知識階級）にしては、賴もしい人だなとつくぐ\思つたのであつた。

次ぎの夜、私は、T君の街頭の陣營を見舞ふつもりで行つて見た。すると、驚いたことには、後の塀際の礎石にずらりと一列に男女の子供が腰かけて鼻をすゝる音一つさせず、靜肅に雜誌や、繪本を見てゐる奇觀であつた。これは、一體どうしたんだと訊くと、T君は、

『何に、この近くに貧民窟があつて、雜誌の買へない子供がうんとあるんです。可哀想だから、餘り目立たないやうにと注

意して見せ始めると、こんなにロハのお客がどつさりついちやつたわけなんです。』

と、いつて、からぐ\とうち笑ふのであつた。

街頭の貧民學校！　小さなライブラリー（圖書館）！　私は、ふと、そんなことを考へると、色の白い若旦那のやうなT君の姿が、何だか、まるで、現代の聖者のやうに尊まれるやうな氣がした。

私は、ふと、學問ばかり重んじて、實際を輕んじてゐると、今に、學者の乞食が出來るぞと、既に四十年前に勝海舟先生が、喝破してゐることを思ひ出し、T君の實行力に更に敬意を深めたのであるのだ。それにしても、あの小さなライブラリーと、貧民の子供達の光景からうけた印象は、いつまでも忘れ難いであらう。

繪——田中華邦

大日本雄辯會講談社ニュース

和氣靄々――盛況を極めた！
本社新年宴會

皇國の隆昌を祝福し、大發展の門出を企圖する本社の新年宴會は、恒例により、一月五日午後一時丸ノ内帝國ホテルに於て開催された。

本社特有の社員大演説會並に餘興數番、萬雷の如き喝采さしもの大ホールを搖がすの感があつた。開宴に先ち一同君が代合唱、滿腔の忠誠を披瀝し天皇、皇后兩陛下の萬歳を唱和し奉り、終りに際して本社の萬歳を三唱、午後八時半盛會裡に散會した。

開會に先ち君が代合唱

奉仕の第一線に立つ
全國巡回 婦人講演會

一昨秋山口縣を振出しに、大活躍開始以來、正に一年有半、全國數十萬の一般婦人、並びに小學校女學校合はせて六百有餘校の生徒諸子に見え、異常の感激を與へた本社全國巡回婦人講演會は、昭和八年の新春を迎ふると共に、更らに一段の緊張に燃え既に本年度第一期計畫は、安倍季雄講師を中心として、左記の如き豫定を以て實行、到る處大歡迎を受け大盛會を極めつゝあります。

○神奈川縣
自一月十四日
至同　二十八日

○埼玉縣
自二月三日
至同　十八日

本社の新計畫
教育映畫會

雜誌に單行本に講演に、一意專心、邦家のため同胞のため、懸命の努力を續けてゐる本社に於ては、今回、全國男女學生諸君の德性を涵養し、美德を養成し、大いに國民性の發揚に資せんがため、本社映畫班の陣容を整へ、各府縣廳後援の下に、全國巡回教育映畫會を開催することに決定、左記の豫定を以て大奮鬪を開始することになりました。

何卒、本社報國の精神に御賛同の上、陰に陽に絶大の御後援賜りたく切に御願申上げます。

千葉縣下各學校　二月中
神奈川縣下各學校　三月中
埼玉縣下各學校　四月中
群馬縣下各學校　五月中

驚異的大賣行!!

キングレコードの優秀盤

最近『榮えゆく道小唄』『のらくろ上等兵』を始め『別れの花束』『椿咲く島』等の優秀盤を出して

寶生新氏

怒濤の如き人氣を贏ち得たキングレコードでは、引續いての大活躍に今や斯界に一大センセイションを捲き起してゐる。その一は謠曲界の巨星寶生新氏が小社の熱望を容れて婚禮小謠『高砂』を吹込んで下すつたことである、

松平不二男氏

師は人も知る寶生流脇方宗家、これこそ眞に天下一品ともいふべく、謠曲家は勿論、一般家庭の大評判となつてゐる。

其他、一作毎に斯界を驚倒せしめてゐる江口夜詩氏作曲、松平不二男、丸山和歌子兩氏吹込の新盤『故郷の夢』

丸山和歌子氏

『胸に咲く花』の如きは、流行歌の偉大なる力を示して、今やキングレコードの聲價は斯界の王座を獲得せんとしてゐます。

（本社發行キングレコードは全國蓄音器店にあります。定價一枚一・五〇）

日本飛行界の誇り

『征空一萬三千粁』

熊川一等飛行士の新著

燃えたつ日本青年の意氣を銀翼に乗せて祖國日本を出發した『青年日本號』が、幾多の險難を突破しつゝ、露、白、獨、英、伊の五ケ國歴訪の旅を續け、遂に歐亞大陸一萬三千粁の空を征服して、ローマの都に凱歌をあげ、遂に國際親善の大使命を果した壯快極りなき征空記錄、眞に血湧き肉躍る好讀物、然も文化を誇る歐洲各地の景色風俗等が、宛然パノラマを見る如く眼前に彷彿と繰り展げられる。挿入寫眞百數十葉、地圖十數枚、切に江湖の熱讀を希ひます。（定價一・三〇）

『日本國民に遺言す』

茅原華山先生力著

學東西に遍く、識見一世を導く著者が、非常時に直面し、奮然蹶起して日本國民に貽す言葉、言々句々悉くこれ熱誠の迸り、眞に萬人の胸を搏つ大文章、全國民の必讀すべき絶好の名著、發賣匆々各地より白熱的歡迎を受けてゐます。（本社發行　定價一圓二十錢）

愈々大好評!!

本社代理部の活躍

高速度滋養料『どりこの』を始め『イノール』『トラシン』『喘息エキス』『にんにく丸』『プレーヴロール』等いづれもその效果の著しい點で大好評を博して來ましたが、特に寒氣に際して冷え症は『どりこの』に限るとか、感冒藥に『トラシン』とか胃腸病の根本治療藥は『イノール』とどれもこれも非常な大歡迎を得てをります。いづれも御家庭の常備藥として是非お薦め致します。

『代理部カタログ』を

御申込下さい！

本社代理部では、季節向の家庭用品、雜貨、婦人用品、子供用品其他取扱商品一切の『カタログ』をつくつて皆樣の御便宜を圖つて居ります。『代理部内カタログ係』宛御申込になれば直ぐ御送りいたします。

西洋講談

愛の復讐

天狗太郎

嶺田弘畫

春旅の一行

若芽の梢にわたる暖い風、草の匂も芳しい春の朝。今し、波蘭國境から、獨逸領の鋤野城をさして急ぐ一行がございます。

先頭に立ちたるは、既に鬢髪に霜をおくと雖も、見るから矍鑠たる立派な老武士。轡を並べましたる花かと見まがふ十五六の美少年を顧みまして、

「のう、八木枝、これからいよ〳〵敵の領地ぢや。そなたは怖いと思は

んかの?」
「いゝえ、伯父さま、ちッとも。神さまが護つて下さいますゆゑ。」
答へる聲はまるで鶯のやう。これでも男かと思はれるやうでございます。
つゞいて鋼鐵のやうにがつちりした體格の若者。その顔を見ますると、不思議や雉子彥の家來の倉平。この倉平と並んだのも前のと同じやうな年配の美少年。後には數臺の荷物車。數人の從者が甲冑に身を堅めて守護して行つてをります。
「それにしても、伯父さま、雉子彥さまは、今頃、如何遊ばしてゐられるでござんせう。首尾よく菊耶姫さまをお見付けなされて……?」
「さア、それが……。」
「何か、また、それともお身の上にでも……?」
この先頭に立つた二人の會話には、いつもきまつて雉子彥、虞蘭士伯、菊耶姫なぞの名が繰返される。一喜一憂、その都度美少年の顔はぽッと羞しげに赧くなつたり、心配さうに蒼くなつたりいたします。
それもその筈、この老武士こそ雉子彥がたつた一人の伯父の蒲都彥。暫く隱退してをりました故郷を出て、わざ〳〵獨逸へ赴く途中でございます。
これには深い理由がある。改めて主君大公殿下のお許しを得た雉子彥、舅虞蘭士伯と約婚菊耶姫との生死のほどを知り、無事なれば取戻すために、雄々しくも單身敵地へ乘込んでまゐりました。大公殿下から獨逸統領へ宛てた懇篤な添書を持參してはをりまするが、既に魯木平といふ武士を一人殺してゐます。その復讐の意味でいつまた他の獨逸武士から決闘を挑まれるかわかつたものではない。これには應じないといふ譯に行かない。充分危險を存じてをりますので、出發の際に倉平を手許に招いて、
「さて、倉平、わしは今度は生還は期しがたい。親に代つて今日までお世話になつた伯父上、汝からよッくお詫びをしてくれい。」と、覺悟のほどを齎して故郷へ返してやりました。

すると、それと知つた伯父滿都彦、自分には子供がないので、かねて雉子彦を後繼息子だと思つてゐます。大そう心配いたしまして、それなれば甥に一臂の力を貸してやらうと老軀を起して立上りました。

ところがこゝにまた厄介なことがある。隣地の領主で滿都彦の親友が、さき頃、三人の子供を殘して亡りましたが、姉の八木枝孃は年齡が十七、鄙に稀れな頗る美人。あちこちの若い領主達が爭奪をはじめて、たうとう武力にまで訴へるといふ騷ぎを演じたことまでございます。

それを滿都彦が仲に立つて治めてやりましたが、何せ上の男の子が十五。棄てゝもおけないので姉弟をみんな自分の手許に引取り、親に代つて面倒を見てやつてゐたところへ降つて湧いた今度の事件。八木枝孃を殘しておいて出掛けて行つたのでは、後でまた血腥いことが起るは必定。途中で知合の僧正の許に預けておくつもりで一緒に故鄕を出發いたしました。

しかし惡い時には惡いことがつゞく。折角はる〳〵とその僧正を訪ねて行つてみまするると、これがまたつい二三日前に亡つてゐる。まさか手足纒ひの若い娘を連れて獨逸へはひつて行けたものでない。滿都彦もほと〳〵その所置に困じはてましたが――この八木枝孃は、雉子彦とは、子供の頃には兄妹のやうに睦じく遊んだ仲。だん〳〵大きくなるにつれて、いつとなく深く〳〵その幼馴染を愛するやうになつてゐます。菊耶姫と結婚がきまつたと知つても、心の中では猶忘れかねてゐる。それを幸ひに自分も一緒に獨逸へ行くといひだしました。

いろ〳〵經緯もありましたが、結局、預けておくところもなく、八木枝孃の決して迷惑はかけない、强つてといふ願ひも斥けかねたのでございます。滿都彦もやうやく同行を承諾したものの、女の姿では困る。思ひきつて男裝いたしましたので――さきにすゝむ美少年がその八木枝孃、後のは侍女のお關。幾月かゝつて、やつと獨逸領へ一歩はひつて來たのであります。

百鳥囀る春の旅ではございまするが、目的が目的。一行は頗る緊張してだん〳〵とやつてまゐりますと、さきを歩いてゐた案內者が俄かに顏色を變へて驅戾つて來て、

『殿、あれをご覽なさりませ！』

不具の老人

『あれ、あの坂道を、不思議な大男が下りてまゐります。樣子といひ、風體といひ、どうやら妖怪變化のやうにも見受けまするが？』

指ざされて、きつと眼を見据ゑて眺めた滿都彦に八木枝孃。

まだ遠いのでよくはわからないが、なる程、雲突くばかりの大男がよろめくやうな恰好にこちらへやつて來ます。

『馬にも乗らず、劍も佩かず、武士ではないのウ。探り〳〵歩むところ、どうやら盲人でもあるかの。』

そのうち、次第に兩方から近付いて來ました。よく見ると、とても立派な體格の老人。人品骨柄、どう見ても賤しくはないが、傷しいかな、兩眼がない。その跡には、抉られたやうな二つの黒い孔。おまけに右腕もなく、髪も髯も延び放題、肩のあたりや胸一面に纏れ被さつてゐるといふ有樣。見るから凄い樣子をしてをります。

行きすぎようとして足を止めた一行。どこをさして行くのやら？ 分けても慈悲深い八木枝孃、この哀れな老人を見かねまして馬から飛下りて、

『お氣の毒に、歩くも難儀さうな！』

急いで財布を取出して紐を解かうとする。と、人聲を聞いたその老人、杖を立てゝ頭をあげました。

『もし〳〵、ご老人、あなたはどこの人で、これからどちらへ行くのぢやえ？』

やさしく話しかけた途端です。若い女の聲を聞いた老人は、愕然と顏色を變へ、杖を投棄てゝその場に跪く。八木枝孃の方も吃驚いたしまして、

『あゝ、これ、何をするのぢやえ。坐らずとも譯をいうたがよい！』

『あ、あ、あ！』

兩眼の跡からはら〳〵と大粒の涙を流したかの老人、殘りの片手で口を指ざし、しきりに何か訴へる樣子。八木枝孃は途方に暮れ、馬上の滿都彦を見上げました。

『啞なさうぢやが……？』

『いや〳〵、舌を切られたといふのらしい。』

『まツ！』

すると老人は、今度は兩眼の跡をさし、腕のない右の肩をさし、最後に斷切る眞似をいたします。二人にもその意味がよくわかりまして、

『誰がそのやうな酷しいことをしたのかえ？』

いよ〳〵驚いた八木枝孃、重ねてやさしく訊く。老人は空中に何やら描きました。

『や、や、十字軍が……？』

叫んだは滿都彦。老人は大きく頷きます。

『さても虐い處刑ぢやわ。して、そちはいづれのものぢや、波蘭人かの？』

然りの意です。老人は再び頷きました。

『いかさま。それならばこの方達の一行に加へて本國にも連歸つてやらうが…さて、困つたわい。我々は、これから鋤野城さして赴くのぢやが……。』

この言葉に不意に驚愕して飛上つた老人。顏にはげしい憤怒の色を現はし、異樣な呻聲を發してわな〳〵と震へだしました。

始終の樣子を、默つて背後に立つて眺めてゐた倉平。この時急に眞青になつて馬から飛下り、つか〳〵と傍に驅寄りまして、

『あなたはもしや鋤野城から來られたのではありませぬか？』

と訊くも震へ聲。老人は輕く首を縱に動かします。

『では、鋤野城へ娘御をお探しに…？』

答ではない。老人はたゞ〳〵呻きつゞけます。

ます／＼青くなつたのは倉平でございました。暫くじいッと、穴の開くほど老人の顔を瞶めてをりましたが、

『それでは、それではあなたさまには、須秘豹城主虞蘭土伯爵……。』

みなまで聞かなかつた。老人はよろ／＼とよろめき、ばつたり仰向けに倒れて氣を失つてしまひました。

あゝ、この哀れな老人こそ正しく須秘豹城主の虞蘭土伯だつたのでございます。鋤野城に於て、憎むべき龍九郎のために慘忍極る處刑にあひ、ひそかに野外に棄てられましたが、強い體格のお庇げで不思議に生命拾ひいたしました。しかし路を訊くにも聲も出ず、食ふにも食がない。餓ゑ勞れ、野に伏して數ケ月、千辛萬苦の末やつとこゝまで辿り着いたところへ一行と出會つたのですが――滿都彥や八木枝孃はまだ面識がない。ただ、倉平だけは、主人雉子彥に從つて須秘豹城には度々赴き、かねて城主の顏も見知つてはをりましたが、何しろすつかり形相が變つてゐる。容易にそれとわからなかつたが、やうやく氣が着いてその名を呼ぶと、はじめて自分を知つてくれてゐるものに出會つた驚きと悅び。虞蘭土伯の張詰めてゐた氣も一時に弛んで、思はずその場に氣絕したのでございます。

それから二日の後、一行は昏々と眠つてゐる虞蘭土伯を荷物車の上に乘せ、鄭重に看護しながら旅をつゞけてゐましたが、鋤野城をさしてではない。路は須秘豹城へと向つてをりました。

路を變へて

たうとう一行は須秘豹城へ到着する。倉平がさきに急いで行つて虞蘭土伯歸城の旨を知らせましたので、家臣は素より、住民達も殘らず城外まで出迎へ、變つた城主の姿を見るに及んで、今更ながらみな／＼烈火のやうに憤つた。氣早な若者どもは馬を驅つて國境さして押出さうといたしましたが、滿都彥が聲を嗄らしてわづかにそれを思ひ止まらせました。

ともかくも虞蘭土伯を城中の一室に休息させる。留守を預る老臣の一人が恭しく滿都彥の前にすゝみ出まして、

『さて／＼あなたさまには、かねてお噂に聞いた老殿樣でいらせられまするか。我々のご主人雉子彥さまには、ついこの間ご歸城遊ばしましたが……。』

『な、なんと。雉子彥が歸城した？』

『はい、左樣で。二日前まではゐられましたが、わづかな違ひで殘念なことにござりまする。』

『して／＼、いづれから歸り、いづれへまゐつたか？』

『獨逸からお歸りでござりまするが、行くさきはご自分でもわ

からぬと仰せられました。私めの考へでは、多分、積土の方ではないかと存じまする。』

　そこで、この老臣は、いろ〳〵その消息について語りました。雉子彦は、彌須大公殿下の添書を持つて獨逸の首都に上り、統領に面會して鋤野城の暴狀を詰り、虞蘭土伯や菊耶姫の生死を知らうとしましたが――案の定です。挑まれて決鬪をいたしました。

　而も、相手は、勇猛無比の聞えの高い統領の舍弟。互に槍をとつて鬪ふうち、雉子彦の技や勝りしか、敵の馬の腹帶ぶすと突切り、危く落馬せうとしたところを――つと驅寄つて抱止めました。この雉子彦の義氣に感じて試合は中止、二人は改めて朋友の契を結んだとかで、

『そのご舍弟のお執成しにより、統領も、開放つて城中を隈なく見せよの嚴命で、ご主人雉子彦さまを鋤野城へ送られましたなれど既に遲く、龍九郎は菊耶姫さまを伴つていづれへか立去つた後。虞蘭土伯爵さまにもとツくにお亡りとの專らの噂。ひどく落膽されて一旦はご歸城遊ばされましたでござりまする。』

『ふム。されば雉子彦も虞蘭土伯と知らず、虞蘭土伯には雉子彦は見えず、二人は中途の擦違ひにも氣付かずにゐたであらうの。したが、菊耶姫にはまだ無事で？』

『はい。虞蘭土伯爵さまに害を加へたといふ啞の牢番、菊耶姫さまを憫んで、惡魔の眞似をして龍九郎を嚇しました。それ以來、手を下すことは斷念したと申しまする。』

『して、積土とやらへ出掛けたとは、菊耶姫の行方がわかつてかの？』

『まだ確とはわかりませぬが、後難を怖れた龍九郎。どうやらそのあたりの城主を手賴つて落ちた樣子で……！』

　これで事情がすつかりわかつた。雉子彦が歸つて來てゐる以上は、最早獨逸へ乘込む必要はないことです。想像どほり、菊耶姫が積土あたりの城に隱されてゐるとすれば――何しろ相手は奸智にたけた龍九郎。雉子彦が血氣に任せて無理に奪ひ返さうとして、いつまた虞蘭土伯同樣の目にあはされないにも限らない。老の身の取越し苦勞、滿都彦は心配で〳〵耐らなくなりました。

　いろ〳〵考へてみるが、安閑と歸つて來るのを腕を拱いて待つてゐられない。はる〳〵故郷を出て來たのもその甥のため。たうとう意を決した滿都彦、自分も積土に赴くことにして――今度も一緒に行きたがる八木枝孃にはきびしくいひ付けて思ひ止らせた。三四日滯在の後、倉平を伴ひ、後を追つて須秘豹城

を出發いたしました。

取殘された八木枝孃、菊耶姫はいはゞ戀の敵手でございます。どういふものか、虞蘭土伯には最初から氣に入られ、今では傍に附切りで看護をつゞけてをりまするが――菊耶姫が無事に連戻されゝば、この城にもゐられなくなる。虞蘭土伯の世話も出來なくなることなので、悲しくて〳〵涙が胸一杯に込上げて來ます。

とはいへ、虞蘭土伯の氣持を考へると、そんなことを思つてはならない。八木枝孃はすぐにその居間に行つて滿都彥達二人が雉子彥應援に出發した事を告げ、やがて無事に歸つて來るに違ひないといつて慰めたが――悲しみはいよ〳〵強くなつた。それまでは男のつもりでゐた八木枝孃は、虞蘭土伯の手をとつて唇を押當てながら涙を滴して、

『何を隱しませう。私は八木枝といふ娘。菊耶姫さまもお母さまのないお方。私も親のない身。せめてお歸り遊ばすまでご介抱をさせて頂きたうございます！』

いふに驚かぬ虞蘭土伯。既に何もかも知つてゐるといふやうに、突然左の腕を延して八木枝孃を引寄せまして――緣こそ不思議。戀敵の父と娘とは、ほんとの父子のやうに犇と抱合ひました。

陣中に於て

さて、滿都彥、倉平の二人が向つた積土といふのは、小さいながらに一國。當時、獨逸十字軍の橫暴壓迫に憤起して戰端を開いてゐまして、度々の敗戰に遂に雉子彥達の仕へる彌須大公殿下に援助を願出ましたが――表面は出來ない。蔭でひそかに味方するといふことになつて、波蘭の武士も澤山やつて來て一緖に戰つてをります。

戰場の陣地に來てみますると、果して雉子彥もゐる。思ひがけない二人に驚き、且悅んで、伯父の滿都彥とは固く抱擁いたしましたが、倉平に對してはひどく不機嫌で、

『これ、倉平、その方は、なぜ伯父上などのお供をして引返してまゐつた。あれほど故鄕の留守を護れと申附けたではなかつたか！』

と、眼を怒らせて叱付ける。倉平は頭を搔いて、

『はい、なんとも申譯けございませぬ。したが、老殿樣には、殿樣のお身の上をひどくご心配なされて……いづれ菊耶姫さまは最早この世に在さぬに違ひない。是非共、八木枝孃さまを殿樣とご夫婦に……。』

『な、な、何をいふか。菊耶姫が既にこの世の人でないと申し

たのはその方でないか！』

『左樣なれば申上げまする。老殿樣には、萬一、菊耶姬さまご他界ときまつた時、殿樣がご落膽のあまり輕率なことをなされてはならぬ。傍に附添つてゐて思ひとまらせねばとのお心から、無理に故鄕を……。』

『またしても差出たことを申すか。下郞の分際として、無、無禮ぢや！』

たうとう滿都彥と倉平との間に、雉子彥の意に叛いて故鄕を出て來たことについて內輪喧嘩がはじまりました。それといふのも——もと〳〵滿都彥にとりましては、八木枝孃は可愛い自分の養娘。眼に入れても痛くないほどに思つてゐる雉子彥と末は夫婦にとはじめから深く思込んでゐたのでございます。

それなのに雉子彥は、中途で彌須大公妃殿下のお媒介で菊耶姬と婚約を結んでしまひました。これもやむを得ないとしても、人情として心中では甚だ殘念に思つてゐたところへ今度の事件で——何もかも倉平のいふことがほんとなのですが、まだ菊耶姬の生死のほどもわからず、雉子彥も一生懸命になつてゐるのに、今から八木枝孃のことをいひ出すといふ譯に行かない。それで、正直に胸の中を素破拔かれると、多少泡をくはずにはゐられなかつたのであります。

ところがこの倉平の方は、もとは八木枝孃の下僕なのでございます。ずツと以前、雉子彥が武士として出世のため故鄕出發の際、從者として幼馴染に贈つたもので——その折、こん〳〵と自分に代つて雉子彥を衞つてくれといひ含められてある。從つてもとの主人の八木枝孃の氣持はよく知つてをります。

素より忠誠無二の倉平、いつも雉子彥の楯の代りとなつて盡してはをりまするが、同時に一も二も八木枝孃。菊耶姬のことなぞはどうでもいゝといつた方で——一本氣だけに胸にしまつておけない。久振りに主人雉子彥に出會ふと、何は措いても第一に八木枝孃のことを思ひ出してもらひたいといふ考へからつけ〳〵いふのでございました。

こんな譯でございますから、喧嘩は喧嘩でも憎めない喧嘩。雉子彥にもその二人の氣持はよくわかつてゐますので、自然機嫌もだん〳〵直つて來る。そこで倉平は一層申開き顏で、

『まア〳〵殿樣、出て來た上は今更お叱りを蒙つても致し方ござりませぬ。聞けば龍九郞は菊耶姬さまをお連れしてこのあたりにまゐつてゐるとか。早く手近な城を二つ三つ占領いたし、お消息のほどを知らうではありませぬか？』

いふに顏を曇らせた雉子彥。そと溜息を洩しまして、

『それが出來ぬのぢや。こちらはこのやうな烏合の勢。第一我

等が助ける積土軍の幼稚な武器を見るがよい。城の占領なぞは思ひもよらぬ！』

話合つてゐるところへ、ずいとさして來た人影。積土軍の指揮官鋤郎將軍が、雉子彦と軍略の相談のためにやつて來ましたので、

『これは〳〵鋤郎將軍、我等が伯父滿都彦でござる。』

『かねてご高名拜承。何卒一臂の力を貸しおかれい。』

二人の間に初對面の挨拶がある。やがて三人は、鼎のやうに額を集めてさま〳〵智慧を絞つてみましたが、今のところでは十字軍の方が兵も強く、武器も精鋭で――どう考へてみても、味方に勝味が尠い。とにかく斥候を放つて敵の動勢を窺ひ、機に臨み變に應ずる方法に出ることにして、鋤郎將軍は自分の陣地に一先づ引上げて行きました。

夜半の進軍

夜がだん〳〵と更けて來ました。陣地々々の篝火も一つ〳〵消え、あたりは深沈としてまゐりましたが――久振りで出會つた伯父と甥とは眠ればこそ。殘りの焚火を圍んで、雉子彦は獨逸の首都での手柄話を、滿都彦は圖らずも虞蘭土伯を救つたことなぞを、互にしみ〳〵と語合つてをりました。

そこへ再び姿を見せたのは鋤郎將軍。たゞ今斥候が歸つて來たことを告げて、

『敵は、更に援兵を正面の新鴻野城へ增派中とのこと。到着の上はいよ〳〵勝利は覺束ない。如何いたしたらよからう？』

と、深い思案顏。聞くと雉子彦は躍上りまして、

『戰鬪！ この上は、たゞ攻勢をとるの一手だけでござるわ！』

『したが、攻めても城を占領する成算がござるかな？』

『たとひ城は落ちずとも、多くの捕虜を得れば味方の勝利。後の奮起の緒口にもなるといふもの。すぐ樣襲擊しようではござらぬか？』

その雉子彦の目的は、何より捕虜を得るといふことが第一。それによつて龍丸郎や菊耶姬の消息を聞出したいと思ふからでございます。かね〳〵鋤郎將軍の自重的態度をもどかしく感じてゐた際なので、この時とばかりしきりに挑戰をすゝめます。

勿論、鋤郎將軍も獨逸十字軍はひどく憎んでゐる。機會があれば攻勢に轉じたいと考へてゐた折柄。この雉子彦の進言に大いに勇氣を奮起しまして、

『よろしい、きまつた。出軍！』

直に出動命令が下される。時は眞夜中。全軍蹶起してひそかに準備を整へ、步武肅々、烏羽玉の闇を衝いていよ〳〵進軍が

開始されました。

軍略についてもいろ〳〵打合せがされた。その結果、全軍を甲乙二隊に分ち、一隊は鋤郎將軍が率ゐて增派の軍隊を潰滅せしめ、他の一隊は雉子彦が指揮して——戰鬪と知れば、必ず新鴻野城からも援兵が繰出して來るに違ひない。それを中途で雉子彦の軍隊が阻み討つといふ役目なのでございます。

黎明に先立ちて全軍は二隊に分れ、それ〳〵戰場に適當と思はれる場所に到着。

雉子彦は、更に地理を按じて手兵を二隊に分ち、本隊を城から半里ばかり離れた森の中に深く伏せ、支隊の方を森と城との中間に隱しました。

戰場を森の中に選んだのは、すこしでも長く城中へ樣子を知らせまいとする用心。いよ〳〵戰鬪開始と同時に支隊に背後から襲ひかゝらせ、敵を眞中に追取包んで討取る計畫なのです。

『ふム、雉子彦がなか〳〵やりをるわい!』

この戰略がひどく氣に入つたとみえて、滿都彦はにこ〳〵してをります。倉平は武者振ひしながら、

『殿樣、みんなかう落着き拂つてゐるところを見まするると、必ず勝利でござりまするぞ。序でのことに新鴻野城も一氣に乘取つて、菊耶姫さまをお探しなされては?』

『さうは行くまいて。敵にもそれ〳〵用意が……叱ッ、叱ッ、合圖ぢや!』

突如として響渡つた鴉の啼聲。これが味方の合圖でございます。羊の皮で馬の蹄を包んだ一人の斥候兵、まつしぐらに雉子彦の傍へ飛んでまゐりまして、

『敵兵は約百五十。うち五十が騎馬。八騎が前衞として偵察しながらやつて來ます!』

『よしツ。突撃用意!』

既にこの時、早くも眼の前に姿を現はした前衞八騎。あたりの様子を窺ひ〱森にかゝつて來ましたが、何事も氣着ずに行つてしまふ。つゞいて歩兵の一隊、呑氣さうに歌を唄ひ〱やつて來たので——頃合やよし矣! 半ばやりすごしておいて、

『かゝれツ。突込めツ!』

鯨を追ふ鯱。雉子彦を眞先きに、軍縦陣を作つて疾風のやうに敵の胴腹目がけて突進して行きます。

驚いたのは敵の歩兵。不意に森の中から合圖の鴉の啼聲が起り、忽然と一隊の騎馬が現れ出ましたので、一時はぎよツと化石したやうに立止りましたが——流石は十字軍の名に背かぬ。素早く立直つて、いざ來い來れとばかりに瞬くまに穗先きを並べた一齊の槍衾。その動作は眼覺しいくらゐ敏捷でございます。

『なんの!』

とはいへこちらは決死の猪武者。微塵も躊躇しない。馬にますく〱拍車を加へ、口々に喚き叫んでどツとばかり殺到いたし

ましたが――何しろ相手は長槍、自分の方から突掛りに行くやうなもの。第一、馬が耐らない。忽ちばた〳〵と落馬するものが出來て來ました。

慘たる血戰

おそろしい殺陣がはじまりました。しかし最初の攻撃は非常な不成功。眞先きに、滿都彦の馬が刺されて、主人諸共だツと地上に横倒しになる。得たりとばかりに繰出す敵の槍先きに、あはや危しと見たが――そこは老巧。千軍萬馬の間を幾度か往來してゐるだけあつて卽座に逆用、その敵の槍を摑んで體を起すと同時、拔いたか斬つたか眼にもとまらない。さツと拂つた一刀の下に、相手は脆くも血飛沫立てゝ倒れます。

つゞいて雉子彦の馬も負傷して棒立ちとなる。身を支へんと地上に突いた槍の柄が中途からぽツきり。詮方なく太刀を拔放つたものの、これでは長槍に對してます〳〵不利。方法を變へて射手を樹上にあげて矢を射掛けさせれば、敵もさるもの。却つてはげしく射返して――味方の射手が熟した林檎のやうにぽたり〳〵と梢から落ちて來るといふ有樣。負傷者や戰死者が相次いで、見る〳〵ばた〳〵と倒れて行きます。

この時、遙かかなたでわあツとあがつた喊聲。味方の伏勢が背後から襲ひかゝつたのでございます。遲れてゐた敵の騎馬隊が應戰しだして――それがいくらか氣を吐いた。腹背から挾まれたと知つた敵は多少動搖の色を見せ、騎馬隊と一隊にならうとして、一歩々々ぢり〳〵と後へ下つて行きます。

ところがこれがまた一大事。味方は數が尠いだけに、一緖になられたのではいよ〳〵厄介。その間に歩兵隊を全滅させねばならないのですが――斬れども突けども鐵桶の槍襖は崩ればこそ。焦るばかりでだん〳〵苦戰の色は濃くなつてまゐります。

すると、意外なことが起つた。兄弟馬を並べて奮戰してゐた積土の若い武士。兄は敢へなくもその場で戰死。弟が死骸を收容して退かうといたしましたが――悲痛のあまり逆上したのでございます。眼の色を變へて狂亂しだし、いきなりその兄の死骸を兩手で高く差げ、どツと槍襖を目掛けて投附けました。

ぐさりと刺さる數本の槍。敵兵があわてゝ死骸から引拔かうとする間髪の――長堤に生じた蟻の穴。何條見遁さう。敢然と身を躍らせた雉子彦、このわづかな隙間からぱツと敵中に飛込むが早いか、當るを幸ひ血刀を振り〳〵、四方八面に斬立てます。

遂に墻の一端は破れました。水門を浸入する津浪の勢ひ。味方は我れ劣らずと先きを爭つて突擊して出で――肉搏戰となる

と、長槍はあまり役に立たなくなる。あちこちで組打ちさへはじまりだしました。

殊に味方は殆んどが騎馬武者。蹴倒し、踏倒し、斬倒し、突倒して――取分け斧を揮ふ倉平の奮鬪は眼覺しい。忽ち積まれる死骸の山。血潮は流れて川となつて、さしも頑強に抵抗したこの歩兵の一隊も、哀れや一人殘らず鏖殺しにされてしまひました。

その勢ひに乘じた雉子彥。再び馬の頭を立直して、今や味方の伏勢と奮戰の眞最中の、敵の騎兵隊目がけて突進する。かうなつては既に勝敗は決定したも同然。胡風落葉を捲いて――討つわ。薙ぐわ。たうとうこの騎馬隊までが隊伍を亂し、見苦しくも背後を見せてばら／＼と敗走して行きます。

中にたゞ一騎。いづれ名を惜む武士と見えます。敢然と踏止まり、右に左に獅子奮迅、はげしく味方を驅惱ます天晴れな武者振り。心憎しと思つた雉子彥、つとそちらへ馬をすゝめまする と――相手にとつて不足のない一方の旗頭。敵も心得たとばかり、長劍を眞向に振翳し、鋭く斬つてかゝりました。

二合、三合、勝負はいづれともわかりませぬが、此奴生捕りにしてくれようと早くも考へた雉子彥。いざや組まんと馬を寄せまする と、應と答へてかつきり四つ。兩馬の間に撞と落ちて――暫く上になり下になつて揉合つてをりましたが、雉子彥の力が優れてゐたと見えます。がッちり下に抑込んで、

『縛れツ、倉平！』

聲に應じて馬から飛下りた倉平。悶絕してゐる武士に繩をかけようとして、ふとその顏を見まして、

『やゝ、殿樣、こ、このお方は……。』

『おゝ、羅留四郎殿ぢや！』

驚いたも道理。この羅留四郎もやはり獨逸の武士ではございまするが、稀しく淸廉潔白な、正義のためには必ずしも十字軍の味方ばかりはしないといふ人物。かつて度々使して彌須大公殿下のお氣にも入り、波蘭の武士の資格も與へられてゐます。雉子彥とはかねて親友の誓を立てた仲でありまして――互に氣着かずに戰つて捕虜にしたといふ譯。しかし折りが折りなので親しく語合つてゐる暇はない。雉子彥は取敢へず部下に預けて鄭重に扱ふやうに命じておき、自分は滿都彥、倉平なぞと一緒に、すぐに逃走中の敵兵の追跡に移りました。

捕虜の處分

殘りの敵をかなたに追詰め、こなたに斬殺し、たうとう全滅させて未曾有の大勝利。どッと凱歌をあげてもとの陣地に引上

げて來ますると——鋤郎將軍の方の戰ひはそれほど眼覺しい勝利でもなかつたが、ともかくも敵の援軍の新鴻野城へ入るのを阻んで最初の目的を達し、さきに引上げて來てゐます。莞爾として雉子彦を迎へて、

『これは〳〵、雉子彦どの、お骨折りでござつた!』

と、甚だ機嫌がいゝ。雉子彦も犒ひを返して、

『將軍の方もなか〳〵手硬かつた樣子。捕虜は大勢ござりましたか?』

『いや、ほんのすこしばかり。』

そこで二人は、その處分方法について相談をはじめる。引續いた敗戰に、敵の手に捕へられた積土軍は、十字軍のために悉く殺されてをります。復讐の意味で、鋤郎將軍は、一人殘らず絞殺してしまふといふのを——それでは武士道に背く。親友と誓つた羅留四郎の生命も助けてやりたい。雉子彦は强く反對して、危く摑合にまでならうとしました。

しかし華々しい勝利を收めてゐますので、雉子彦の意見も無視は出來ない。最後に鋤郎將軍の方が讓つて、

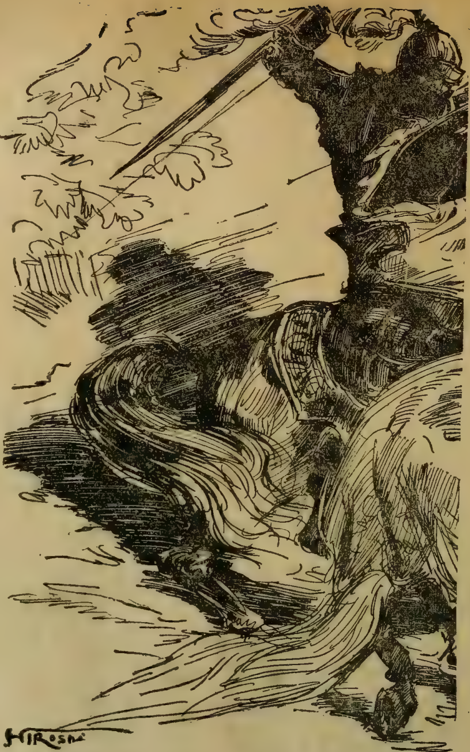
『さまで仰せらるゝなら、一人や二人はお心に任す。貴殿のお好きなものを選んで行かれよ。』

と、いつてくれましたので、やうやく釋然。雉子彦は、改めて鋤郎將軍と握手を交して自分の陣地に歸つてまゐります

ると――捕はれの身となつても意氣は衰へない羅留四郎、悪怯れた様子もなく立現はれる。滿面に笑を浮べた雉子彦、その傍に寄りまして、

『羅留四郎殿には暫くでござつた。かく拙者の手に落ちられたる上はご心配なく！』

親しげに手を差出しまするが、そこが武士。羅留四郎は首を



振つて、

『いや〳〵、拙者の武士道は廢り申した。貴殿の手に捕はれたのがせめてもの光榮。早や〳〵捕虜らしく處分されよ！』

『何を仰せあるか。貴殿は拙者の兄弟。捕虜ではござらぬ！』

はじめはなんといつても自由に解放さることを承諾しなかつた羅留四郎。かねて雉子彦の身の上についてはよく知つてゐます。今だに菊耶姫の所在を突止め得ずにゐると聞いて、やがて心の中で深く頷きまして、

『然らば、親友としての誓は誓。捕虜は捕虜。拙者は飽迄貴殿の捕虜でござるぞ！』

わざ〳〵念を押しておいて、はじめて手を出す。二人は欣然と握手いたしました。

何故、羅留四郎がさういつたかと申しますると、當時の風習として、捕虜は捕虜同志で交換するか、相當の賠償金を出すかして引取つたもの。萬一菊耶姫の所在がわかつた時には、す

んで自分が交換されて雉子彦の義氣に報いたいと考へたのでございます。

その後で、雉子彦は、急いで捕虜收容所へ赴きました。主戰論者であつたことも、要するに捕虜を訊問することによつて菊耶姬の消息を知らうとするため。誰か適當なものはゐないかとあたりを見まはしてゐると、

『旦那さま、殿さま、將軍さま……！』

突然、捕虜の中から聲をかけたものがあります。見ると、思ひがけなく三鐵といふ賣僧坊主で、

『おゝ、貴樣は三鐵坊主。氣の毒ぢやが、明日はみんなと一緒に絞殺ぢやぞ。』

『ひえツ、殺、殺……旦那さま、將軍さま、さりとはお情ない。おた、おたすけを……！』

この三鐵といふ坊主とは、ずツと以前、雉子彦が國內を遊歷してゐる際に、ふと道連れとなつて口を利いたのが緣。暫く一緒に步いてゐるうち、づう〳〵しくもいつのまにかお供顏して、泊り〳〵でたゞで飮んだり食つたり。他人の懷中をあてに長い間食附きまはつてをりました。

ところがその三鐵坊主は妙な寶物を持つてゐる。マリヤの淚だとか、キリストの子供の時の骨だとかいふもので、それを賣つて一儲けするのだといつてわかれて獨逸に出掛けて行きましたが――多分、まだ買手が見着からなくて、例の奧の手を出したに違ひない。誰かに食附いて十字軍の中に加はつてゐて捕虜になつたといふ譯でせう。雉子彦は面白半分に、

『いや〳〵、到底拙者の手では助けられぬ。貴樣の所持いたす靈驗あらたかな寶物に賴むがよいではないか！』

調戲ふに、こちらは生命の瀨戶際。三鐵坊主はおい〳〵聲を立てゝ泣きだして、

『後生でございまする、旦那さま、殿さま。菊耶姬さまの在所を存じてをりまするほどに、お助け下されば申上げまする！』

『な、な、なんと。菊耶姬の在所を存じてゐる？』

跡を追つて

『さア、申せ。吐かせ。菊耶姬は、今いづれへ？』

その一言にさツと血相を變へた雉子彦。いきなり三鐵坊主の咽喉首を絞上げました。

『苦、苦しい。旦那さま、息の根がとまりまする。まづこの手をお放しなされて……！』

『よろしい。正直に申せば生命は助けつかはす。萬一僞りの節は容赦はせぬぞ！』

やうやく縛めの縄を解かれた三鐵坊主。ほツとして手足を撫でさすつて、

『なんの僞りを申しませう。菊耶姫さまには、龍九郎がお連れして、ついさきほどの戰場にをられましたが、敗戰と同時にいづれへか落延びられてござりまする！』

『や、や！　して、その方は、たしかに菊耶姫の顔を見たと申すか？』

『いえ、愚僧はお顔は見申しませぬが、二匹の馬に牽かれた擔床がござりまして、怪しげな一人の女巡禮がお傍を離れずに着いてをりまする。時折り、菊耶姫さまかと思はれる悲しげな歌聲を耳にいたしました！』

『ふム、その巡禮こそ須秘豹城へ使に來た女に違ひない。然らばその方は、菊耶姫はまだこの世に生きてゐると申すのぢやな？』

『生命にかけて誓ひまする！』

淋病

ブラオンギン
ケンゴール

治療界の權威
銀製劑の完成

本劑は前東京吉原遊廓吉原病院長として十數年在任せられたる佐藤榮先生が多年の實驗と學理に基き、最も合理的なる局所銀劑として、完成發表せられたるものにて、多數專門家の臨床實驗によれば、淋疾治療劑としての最重要點たる深達殺菌、消炎三作用の敏速的確にして、治療期間を極端に短縮し得たる點は、最も本劑の特長とする處にして而も殺菌力頗る強く〇、五乃至〇、八瓦（即ち尿道粘膜に塗布する程度）の極少量にて、使用一回毎にその効果適確に奏効し最も安全且つ最も有効に目的を達し得るものなれば一般洗滌藥の如く施療に際しては、淋菌を後部尿道に送入し副睾丸炎、攝護腺炎等の如き併發症の危險を防止し、反つて之等を豫防し得る作用は、最も本劑の賞讃を博せる處なり。

先づ文獻に依て本劑の知識と實驗報告並に成績等を知られよ御希望の方は發賣元へハガキで申込次第途呈

本劑は日本藥化學研究所の責任製劑である

藥價
二〇瓦入……三円八十錢
五〇瓦入……七　円
八〇瓦入……十　円

東京市本郷區駒込坂下町
大日本推奨會議社代理部
振替東京六六二九番

全國有名藥店にて販賣す

天から降つて湧いた福音。開いた優曇華。雉子彦は、三鐵坊主を伴ひ、宙を飛んで自分の陣地へ引返してまゐりまして、

『伯父上、菊耶姫の在所がわかり申したぞ。倉平、出發の用意！』

いへど、滿都彦は愼重。更に三鐵坊主を呼寄せ、戰場の模樣なぞを根掘り葉掘り詳しく訊いて、

『如何にしてその方はわが軍の捕虜になつたか。その樣子を話して見よ。』

『はい。はじめ愚僧は馬の尻尾に縋り、みなと共に二三町も逃延びましたが、途中で拂落されて捕まつたのでござりまする！』

『然らばその方は、龍九郎の落ち行くさきも存じてゐるであらう。こゝらあたりで身を寄せる城はいづこぢや？』

『この邊はいづれへまゐりましても沼や林ばかり。きつと森の中にひそんで、機を見て新鴻野城へ忍込まんといたすでござりませう！』

聞くに雉子彦、最早我慢が出來なくなつたのでございます。身震ひして立上つて、

『伯父上、ご免。こゝまで判明したる上は、やはか取返さずには……！』

一人だけでも追跡の覺悟です。狂亂したやうに出掛けようと

いたしまするので——滿都彥とすると、その菊耶姫を取返すことは可愛い八木枝孃を悲しみの中に突落すやうなものではありまするが、といつて今更加勢してやらないといふ譯には行かない。深く嘆息しながらも急いで同じやうに身を起しました。

やがて轡を並べた十數騎。積土のものは一人も加へず、水入らずの主從ばかりでございます。雉子彥を先頭に、揉みに揉んで嵐のやうに血腥い戰場へ引返してまゐりまして——三鐵坊主をさきに立てゝ逃走した方向の森の中をだん〳〵奥深くすゝんで行きまするると、まもなくあがつた一つの叫聲。柔かな土にはつきりと印された馬の蹄の跡を發見したのであります。

これに力を得て猶もと急ぎましたが、何しろ時間が經つてゐます。その日のうちには追着くことが出來なくて、中途の森の中で一泊。滿都彥はいろ〳〵考へまして雉子彥に向ひ、

『時に、雉子彥、案內役たる乞食坊主、三鐵なるものは信用出來るかどうぢやの？』

『思慮の淺い怠惰者ではありまするが、我々を裏切るやうなことはいたしませぬ！』

『では、念のためぢや。あの乞食坊主をさきにやつて龍九郎の一行に追着かせ、逃れて來たと僞つて今一度樣子をたしかめさせてはどうかの？』

これは無益な戰ひを避けるためでございます。雉子彥も頷いて、

『いかさま、それは妙計。なれど、あの坊主は至つて臆病。夜路は獨り步きは出來ませぬので、朝になつてさきにやりませう。』

そこで早速三鐵坊主を呼んでこん〳〵と計略を定め、翌朝早く一人だけさきに出發させました。ところが、夕方になるとのこ〳〵引返して來て——龍九郎の一行の所在が知れぬといふ。

次の日も、また空しく引返してまゐりました。

たうとう三日目。またもや歸つて來るかとみな〳〵心配して待つてゐましたが、夜になつても姿を見せない。これは一行に追着き、いよ〳〵菊耶姫も加はつてゐることを突止めた證據なので、

『長い苦心の報いられる時だ。それツ！』

勇立つた一同。夜の明けるを待つて武者震ひをしながら前進をはじめましたが——果して首尾よく菊耶姫を取返すことが出來るでありませうか。却つておそろしい危難が待受けてゐるのではないでせうか。悲痛と悲壯を極めた、手に汗を握る華々しい場面はこれからでございます。

（つゞく）

『不如歸』から臨終まで

德富蘆花先生の思出

伊香保 仁泉亭女將 千明きん

明治三十一年の晩春、私の伯父に當る須田といふクリスチヤンからの紹介で、突然この仁泉亭へおいで下すつた若い御夫婦のお客様がございました。

旦那様はイガ栗頭に紺絣といふ書生風で、いつも横を向いてお話なさる方でしたが、眼鏡の奥のお眼が、時々ギラリと鋭く光りました。それが德富蘆花先生だつたのです。そして、その時私どもでお書き出しになつたのが、實にあの不朽の名作『不如歸』だつたのでございます。

蘆花先生御夫婦は、その後も毎年のやうにおいで下すつて、とう／＼當家の別館が、先生御臨終の家となつたのでありました。

◇モデルと名前の由來

『不如歸』は大山巖大將の令孃信子さんと三島彌太郎子爵がそのモデルであることは有名な話でありますが、蘆花先生は私どもへおいでになる前年の夏、逗子に避暑中、偶然隣室に滯在中であつた、福家さんといふ婦人から、信子孃が肺患のため新婚二ケ月で夫と別居し、遂に離縁となつた哀話をお聞きになり、それを題材になさつたのだと承つて居ります。福家さんといふ方は、何でも大山大將の副官の未亡人だといふことでした。

私どもへ御滯在中は、天氣さへよければ必ず奥樣の愛子樣御同伴で、毎日散歩に出られました。恰度蕨の盛りのことで、小

說に出てくる蕨狩の情景は、御夫婦で實際に遊ばされたことを、そのまゝ武男と浪子にあてはめてお書きになつたのです。御執筆の時刻は、朝となく夜となく、感興にまかせて隨時筆をお進めになるといふ風でした。けれども、その當時私どもは、先生があれ程名高くなられる方とは夢にも思はず、何をお書きになつてゐるのかも知りませんでした。ですから、後になつてだん〳〵わかつたことですが、『不如歸』に出てくる人物の名は、私どもに關係のあるものばかりでございます。

『浪子』は、先生御自身のお話では、逗子の海岸を散歩してゐると、とても綺麗な貝があつた、その貝が俗に浪子貝と云はれてゐるときいて、御夫婦で『女の子が生れたら浪子とつけよう。』とお話なさつたことがあり、それをこの悲劇の女主人公の名におつけになつたとのことでしたが、當時偶然にも私どもの女中に浪子といふのがゐて、これが大變先生のお氣に入りでしたので、先生のお部屋へ殆どつききりにさしあげておきました。

それから川島武男の『川島』といふのは、私の伯父の須田が先生と一緒に榛名の野を散歩してゐたとき、あの山の彼方にも村があるのか、と訊かれて、『川島といふ村がある。』と答へると、『ふん、いゝ名だなア。』と何故か大變感心して居られたといふことですから、それをとつて武男の姓になすつたのだと思ひます。

『千鶴子』は、宅の主人三右衛門が、當時幼名のまゝ鶴吉と云つて居りましたので、それからおとりになつたやうです。

また、婆やの『いく』は宅の長女の名をそのまゝなのです。長女のいくは、その頃まだ二歲の赤ンぼでしたが、お子さんのない先生御夫婦に、それは〳〵

可愛がつて頂き、伊香保へおいでになる度に幼い頃なら玩具、生長するに從つて、半襟やら帶止やらを、お土産に持つて來て下さるのでした。

◇宿料は正確に

いくは後に澁川の先の箱田村の農家へ嫁ぎましたが、先生は亡くなられる二年ほど前の夏、急に『おいくさんのところへゆく。』と云ひ出されました。一度云ひ出したが最後、誰が何と申上げても頑として肯かないのが先生の御氣象ですから、お止めすることも出來ずにゐると、先生はその日すぐ自動車でおいでになつて、夕方まで遊んでお歸りになり、

『あゝ、今日はほんとに樂しかつた。おいくさんの結婚生活が幸福かどうかと心配でならなかつたが、實際を見て來て、やつと安心した。』

と、大喜びでいらつしやいました。後にいくから聞くと、その日先生はお着きになるなり、

『決して御馳走をしてくれるな。おいくさんの手で作つてくれたもの以外は、一口だつて喰べやしないよ。』

と云つて上り込み、私どもにゐる時と同じやうに散歩をし、晝寝をして、如何にも自分の娘の嫁入り先へでも行つたやうに、娯しさうだつたといふ事でありました。

また、次女のしげりは先生がお世話下さいまして縁づいたほどで、あの氣むづかしい先生が、

『自分の心持を一番よく知つてくれるのは千明の一家だけだ。』

と、よく仰言られ、親戚以上に親しくして頂いて居りましたが、これは私どもが先生のお氣心をよく呑み込んで、決して立入つたことをせず、お世辭一つ申上げず、遠くから恐る〳〵見てゐるやうな態度で接したのが、却つてお氣に召されたのだと思つてをります。お勘定なんかも、もし特別にお引きしたりすると大變御立腹なさるので、いつもキチン〳〵と頂いて居りました。

◇橋の上で

トルストイを御訪問なさるためロシヤへ旅行された年の一月は、本をしこたま持つておいでになり、『今年は夏までずつと世話になるよ。』

と仰言つておいででしたが、二週間ほど過ぎて、奧樣と御一緒に向山の岩崎さんの別莊へ遊びにおいでになり、夕方お歸りになると、急に荷物をまとめ始めましたので、私どもは、

『サア大變、何で御氣嫌を損ねたのかしら……』

と、とても氣を揉んで居りました。すると奧樣が帳場へおいでになつて、

『實は先ほど歸る途中で湯澤の橋（現在はケーブルカーがあるところ）の上に立止つて、しばらく夕雲に見入つて居られたが、突然、愛子！ わたしはこれからトルストイに逢ひにゆく、お前も一緒にゆきなさい、と、かうなんです。で、大急ぎで、これからロシヤへ旅立つことになりましたから…………』

とのこと。それで私どももホッとしましたが、たしかに先生は普通の人とは變つたところがございました。

先生は衣食住のどんな些細なことにも非常にお氣むづかしい方で、時には赤ン坊のやうな駄駄をこねられて、手のつけやうがないこともありました。しかし、奥様の愛子様は、この日本一むづかしい御主人様に仕へて、貞節をおつくしになつたことは只々感心申上げるばかりでございます。愛子様以外の、どんな方が來たつて、とても一週間と勤まるものではないと、私どもは蔭ながらお噂申上げて居りました。

兄蘇峰と劇的會見を遂げた蘆花臨終直前の記念撮影　前列
向つて右より德富愛子夫人、蘆花先生、蘇峰先生、同夫人

たとへば急に涼しくなつたからと、奥様が袷を出しておすゝめになる、その時は、先づ奥様が大急ぎで袷にお召替になつてから先生の袷を持つてゆかなければなりません。若し奥様が御自分では單衣で、先生に袷をおすゝめしようものなら、

『何だ、自分は涼しさうに單衣を着て、人に袷を着せるのか。』

と、大變な權幕で御立腹なさいます。これはしかし、一面から申しますれば、御夫婦の愛情の餘りにも濃やかなためであつて、夫婦は眞に一體でなければならぬとのお考へから發したもののやうにお見受けいたしました。

かうした御夫婦ではありましたが、先生が、『黒い眼と茶色の眼』で、御自分の初戀をぶちまけ、家庭生活の內情を、そつくり僞らずにお書きになつた時は、さすがの奥様もひどくお怒りになり、一時は敵味方のやうに睨み合つておいででした。けれども、そんな時

でさへ、お二人で口論なさりながらも、必ず日課の散歩には御一緒でお出かけになるといふ風で御夫婦は、決して離れることがありませんでした。

◇榛名へ最後の行列

昭和二年の春、先生は千葉の海濱で腎臓と腹膜を患つて御重態とのことに心配して居りますと、七月の初旬重態のまゝで私どもへおいでになりました。

普通の者なら乘物になぞ乘れる容態ではなかつたのですが、主治醫の正木不如丘先生が、『いけないと云つても承知する方ではないから。』と匙を投げてお許しになつたといふことでした。糟谷のお宅から伊香保まで通しの寢臺自動車で、慶應病院のお醫者さんが二人と奥様が附添で、途中高崎や前橋を過ぎる毎に、『ブジツウカ』と正木先生に電報をうちながら來られたといふ有樣でした。

明治四十年代『ほとゝぎす』全盛の頃最適役と謳はれた伊井蓉峰の武男と喜多村緑郎の浪子

ところが、私どもへおいでになると不思議にも一時非常に經過がよくなられ、

『もう一度榛名の野へ行つて握り飯を喰べたい。』

と、しきりに仰言るのです。例によつて、お止めしても駄目だからといふので出かけることになりました。そのいでたちが大變です。先づ四人かつぎの籠を二臺仕立てて先生と奥様をお乘せし、附添の醫者が二人と看護婦が六人――平素三人交代で常に六人の看護婦を雇つてありました――それに私どもの主人三右衞門と伜、八人の人夫といふ物々しい珍行列で、榛名登山に出かけたのでありました。たしか七月十七日のことでした。とても爽やかな日で、先生はお望み通り草原に坐つてお辨當を喰べて、大喜びでお歸りになりました。

萬一のためにと、出發前に用意して行つた氷や注射器は全く不用で、醫者も先生の元氣には呆れてしまひ、『これは何でもかでも病人のいふなり放題にするに限る。』といふことになりました。

先生の御病氣には喰べ過ぎが一番いけないさうですが、先生は、榛名の鮒だの山魚だのと、いろ〳〵變つた喰べ物を考へ出しては御注文なさるので、これも仰言るまゝにさしあげて居りました。

◇義絕十五年

蘆花先生が兄君蘇峰先生と義絕されてから實に十五年ぶりで、あの有名な劇的會見が行はれたのは、九月十八日御臨終の僅か十餘時間前のことでありました。

蘇峰先生としては、一日たりとも弟の蘆花先生のことをお思ひにならぬことはなく、特に蘆花先生が御病氣にかゝられてからといふものは、矢も楯もたまらず、ある日糟谷のお宅へ足を運ばれましたが、素氣なく玄關拂ひを喰はされ、澁茶一杯にもあづからず、折からの時雨にぬれて、すご〳〵とお歸りになられたとのことでありました。

けれども、蘆花先生もその御本心では和睦したいお心持が充分にあられたことは、あり〳〵とうかゞはれましたので、私どもは一刻も早くその日が來ることを蔭ながら念じて居りました。

すると、九月十七日のお晝頃でした。先生は突然私をお呼びになり、この電報を大至急と仰言るのでした。それは蘇峰先生に宛てて、『只今お目にかゝりたし、すぐおいでを乞ふ』といふ文面でありました。

さア、いよ〳〵時が來たと、奥樣は勿論のこと、私共まで大喜びで電報をうちますと、續いて『電話をかけて返事をきいてくれ。』との御命令。早速おかけすると、蘇峰先生には風邪で御寢み中とのことでしたが、すぐ床を蹴つてお起きになり、奥樣やお子さん達を召び集められて、明朝一番の汽車でゆくとの御返事でありました。この由を申上げると蘆花先生の喜ばれたこと、『高崎で汽車を降りてそれから自動車で來る方が早いからと、もう一度電話をかけてくれ。あしたは晝飯に赤飯をたいて、頭

つきの魚をつけるやうに……』

なぞと飛立つやうなお指圖ぶりでありました。そして、その晩は遂に一睡もせず、夜の明けるのをお待ちわびになりました。

◇劇的會見

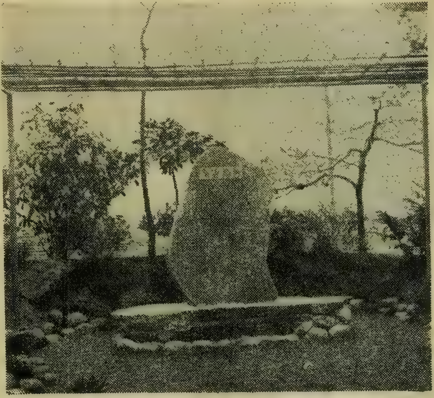
明くれば十八日。雨の日でした。

——この雨だが、兄は今頃汽車に乗つたかしら。熊谷の驛止で、歡迎の電報をうつておけ。高崎へもうつておけ。赤飯の用意はいゝか。——等

等と先生が氣を揉まれたことは一通りではありませんでした。

蘇峰先生が御家族を引きつれてお着きになつたのは午前十一時頃でした。駈け込むやうに病室へいらつしやると、蘆花先生は苦しいお體をベッドに起されて、

『あゝよかつた。間にあつてよかつた。水滸傳々々、敗北々々』



（仁泉亭内のほとゝぎす記念碑）

と叫ぶやうに云はれました。蘇峰先生が、あの嚴めしいお顏を、無限の感情に崩されて、

『暫くぢやつた。偉い文豪になつたな。』

と仰言ると、蘆花先生は、

『私こそ——日本一の立派な兄を持つて、これほどの仕合せはない。』

と云はれ、今までは自分が心得違ひをしてゐた。すまなかつた。と繰り返し〳〵詫びを云つておいでになりました。そして愛子樣を指して、

『これは一人ぼつちになるから助けてやつて下さい。』

と云はれるや、蘇峰先生も遂にたまりかねて、涙にむせばれるのでありました。

やがて、蘇峰先生が、

『何でも望みがあらば叶へてやるから……』

と仰言ると、

『これから寒くなるから暖いところへゆきたい。』

とのこと。そこで蘇峰先生は醫者とも相談の結果、電話を國民新聞社にかけて、熱海に貸別莊を捜させ、夕刻、雨の中を御自身で澁川驛までお出かけになり、驛長に寢臺車を頼み、特に

擔架で線路を越させてくれるやうに交渉したりなさいました。ところが、その頃から蘆花先生は急に『萬熊のところへゆく。』と云ひ出されました。私共には何の事かさつぱりわかりませんでしたが、蘇峰先生の奥様におききすると『萬熊』とは亡くなられた蘇峰先生の御令息のお名前である事がわかりました。

とてもお元氣のやうに見受けられましたが、蘆花先生は、その時既に近づく死をはつきりと意識して居られたのでございませう。永い間結んで解けなかつた御兄弟の和解が出來て、もう思ひ殘すことはないと、お氣を緩められたからでもありませう。その夜の十時五十五分、遂に蘆花先生は眠るが如く安らかに、御立派な大往生をおとげになりました。どなたも、こんな美しい平和な死顔を見たことがないと申されました。枕頭にはいち早く紅葉と秋草が手向けられました。

翌十九日、私どもの主人は人夫を率ゐて、蘆花先生が生前あれ程親しまれた榛名の山から檜を伐り出し、木の香新しい柩を急造いたしました。そして納棺を終るや靈柩車は永遠に伊香保を後にせられたのでございます。

錦織る兩毛の原野――折からの夕空高く、二條の虹がくつきりと描かれて居りました。それは恰度、一世の世界的大文豪の英靈を天國に送る架橋のやうに……。

（完）

さしゑ――笠松紫浪

かぜは萬病の基
早い手當が何より大切！
かぜにトラシン
東知診療所長　田口醫學博士創製
感冒、頭痛、齒痛藥
トラシンは、田口博士が理化學研究所に於て苦心研究の結果完成された高貴藥カロキシン（專賣特許）を主劑とした感冒藥で、神經を麻痺させて一時的に病苦を忘れさせるものと全然異り、合理的に熱や痛みを輕減させ、咳嗽を鎭め、肺炎等を未然に防ぐ特殊作用をもつて居ります。（副作用なし）時正に感冒流行の季節、ぜひトラシンを御常備下さい。
二日分　二十五錢
五日分　五十錢
有名藥店にあり
大日本雄辯會講談社藥品部發賣

長篇小説

善は滅びす

佐藤紅綠

林唯一畫

陸軍大將大槻武文は、友人の紳商北畠昌平に向つて、

『君の子供の毅、魚子の兄妹、あれを夫婦にさせてやれ。』

と申し出た。今を距る二十數年前、昌平は兩國橋畔で男兒の捨子を拾ひ、これを己が子として養育した。それが毅である。其後又數年、當時中將だつた大槻武文の懇囑を受けて、其外妾の子を昌平は亦引取つた。魚子がそれだ。かくて毅と魚子とは、兄妹にして實の兄妹ではない。將軍の勸告の眞意は實に玆に在つたのだ。

だが一方毅は、婚期迫つた愛妹を、彼が畏友の的場青年に與へるべく養母に提議した。それを洩れ聞いた魚子は、『的場さん！』と心に呼んでパッと顏を赧めた。（前號までの梗槪）

囁やく谺

上野の停車場の廣場に日が一ぱいに射し込んで入口の柱の影が數へられるばかりに劃然とコンクリートの上に印された、午前八時、もう乘客は混雜し初める、東に向いた窓々は矢張り直射の光線に恰ら燃える樣な明るさで其れが左側の歩廊の向ふに屛風の如く立つ若葉の山と反射して綠色の空氣を漲らす、春も過ぎ行く初夏の爽やかさである。

がらん〳〵と鈴が鳴る、大きな聲で出發時刻を報らせる、群集は我先にと飛んで行く、改札口で一旦ごた〳〵して其れが又ぱつと散ると歩廊を走る下駄、足駄、靴の音が忙がしい。左側に蜿蜒と長蛇の客車が待つて居る。此の混雜の中を急ぎ足で行く二人の若い男女がある、男は毅の親友の的場讓二で女は其の妹千鶴子である。讓二は飛白の袷に茶縞の袴を穿いて頭に角帽を被り、手に蛤を一ぱいに入れた竹籠を提げて居るので、水が點々として滴つた。

「いやねえ兄さん、そんなものを持つて來て。」

妹の千鶴子は窘なめる樣に兄の顏を見上げて言つた。

「可いんだよ、北畠は蛤が大好きなんだよ。」

兄は笑つた。
『でも先方へ行くまでに腐つてしまふわ。』
『大丈夫、折り〳〵水に漬けるから。』
『でも、そんなもの持つて行くと恥かしいわ。』
　千鶴子は銘仙の矢絣に鼠色の少し褪めかけた袴を穿いて其の房々とした濃い髪を無造作に束ねて居た。急いだせゐか若々しい血は兩頰を染めて、少し狹く見える眉と眉の間は汗ばんで見えた、二人は三等室の内部を覗いた、どれも〳〵滿員である。
『ずつと先へ行きませう。』
　二人は走つた、此の時何處からとなく鈴が聞えた。もう時間がない、後れた人々は一生懸命に走つた。
『やあ失禮。』
　一人の紳士が突然千鶴子の肩に突當つた。
『あら！』
　千鶴子はよろめいて漸と立停つて紳士の方を見やつた。
『どうも、失禮をしました、綺麗な御孃さん。』
　紳士はもう一度言つて片手を擴げて丁度活動の辯士の樣な聲を出したので千鶴子はフイと背後を向けた。
『早く〳〵。』
　若い紳士の背後に立つて居る老紳士は促がす樣に言つた。
『いやな奴！』
　千鶴子は漸と三等室の腰掛に兄と並んでから言つた。讓二はくす〳〵笑つて居た。
『いやな奴！　何んてハイカラな奴でせう。』と千鶴子は未だ怒つて居る。
『美くしい御孃樣と言つたのが實に可かつた。』
『馬鹿にしてるわよ、あら蛤から水が垂れるわよ。』
『そんなに怒るものぢやない、お前あの男を知つてるか。』
『知らないわ。』
『魚子さんに戀をして煩さく結婚を申込んで居るといふ奥田といふ奴だ。』
『あゝ〳〵、あれなの？』
　千鶴子はぷツと噴き出した。
『まあ圖々しい奴、も少し顏を見てやれば可かつた。』
『萬一したら彼奴も魚子さんの別莊へ行くのかも知れないよ。』
『面白いわ、さうしたら私今の復讐してやるわ。』
　兄妹の話には御構ひなく奥田時男と其の父惣七は漸と一等室に納まつた。一等室には客が一人も居なかつた。二人は憚る處なく話し合つた、此の二人は今日も鹽原にある北畠の別莊を訪ねて魚子所望の話を進めようといふのである。

『若しも御父さん、今度いよ〳〵駄目と決まつたら僕は米國へ行つて歸らない積です。』

『まあ多分話が纏まると思ふよ、あんまり氣を焦らん方が可い。』

世界中の如何なるものよりも我が子が可愛い惣七の身に取つては、時男に憂欝な顏をされるのが何より辛いのであつた。去年から今年にかけて前後十五回も北畠家を訪問したが、これといふ確答を得られぬ、其れとも我子は人並より愚鈍だとか、容貌が劣るとか、缺點があるなら諦めもしようが、年は二十七で移民會社の重役であり、英語が上手で洋服の着こなしが上手で、婦人の應對が巧みで、色が白くて眼尻が垂れて唇が紅くて何に一つ女に厭がられる樣な點はない。其れに魚子さんは可い返辭をせぬ。

北畠雪子夫人は恁う言つた。

『何しろ未だ子供ですからね。』

實際魚子さんは子供だから倅の美點が解らないのかも知らぬ。

惣七は恁う思つて氣の毒さうに我が子を見やつた。其處へ突然扉を開いて入つて來た男がある。

『やあ奥田さん。』

『やあ鹿倉さん。』

鹿倉勘十は小柄で額が狹く、下顋の骨が突出た四十恰好の男である、彼は無造作に惣七の傍へ腰を下し、

『鹽原へ御出ですか、なか〳〵御勉强ですな。』

『はあ、貴方は？』

『私も鹽原です、目的は多分貴方と同じだらうと思ひます。いや實に偶然の暗合で、はつ〳〵〳〵。』

小柄に似ず聲は馬鹿に大きい。

『何か急用でもあるんですか。』と惣七は訊いた。

『さうです、急用です。少し婚禮の事に就て……』

『婚禮？』

『北畠さんの令孃の事でね。』

『はあ、どちらかに御決まりですか。』

『左樣、決まつた樣な決まらない樣な……奥田さん、貴方も其の御用件ではないんですか。』

『まあ、さうでもないけれども……』

『いやどうも忙がしい事です、私はあの令孃の事に就て三軒の家から賴まれてるんで、實に……』

『うん、さうですか、どちらです。』

『其れは一寸御話し致しかねますが、あの家は中々複雜つてる

んで……まあ普通の申込では迚も駄目です。』

『どうして駄目ですか。』

時男は怺へかねて叫んだ。

『燐寸を御持ちですか。』

鹿倉は時男から燐寸を借りて吸ひさしの葉巻に火を點け、もや〳〵と太い煙を吐いて、

『普通の手段では駄目だと思ふだけです。』

『何か特別の手段を要するんですか。』

『まあ、さうですな、貴方にした處で只だ正面から斬込んだのでは勞して功なしですよ。』

『其れぢやどうすれば可いのです。』

『さうですな。』

鹿倉は又もや、もやもやと煙を吐いて天井を見上げ、片手で太い髭を上へ撥ね上げた。

『其れは私の口からは申せません、現に私も他から依頼を受けてるんですから。』

『解りました鹿倉さん、貴方が他の依頼を斷わつて私達のために骨を折つて下さるわけにはいきませんか。』と惣七は言つた。

『其れは出來ない事もないですが、併し……』

『成功すれば御禮は決して惜しみません。』

『謝禮に就て御諒解があるなら私も考へて見ませう。』

元來鹿倉勘十は北陸の産で若年の頃から政黨の運動員となり三百代言となり、選擧の度毎に多大の金儲をなし、地方新聞の記者ともなつたが脅喝事件で逃亡し、支那朝鮮を廻つて餘炎の冷めた頃に内地へ逆戻りし、遊廓移轉で一攫萬金を企てたが内閣更迭のために失敗に歸し、其の後は秘密探偵社といふ看板を掲げて實業界に出沒して居る。恁ういふ薄氣味の惡い男であるが、其の代りにどうかすると依頼者のためには生命を的に奮闘するとい

ふ勇猛心がある。奥田は其れを知つて居るので此の男ならば或ひは…といふ氣にもなつた。

『詰りですね、貴方が結婚を申込んでも北畠さんは承知をなさらないのですね。』

『さうです。』

『其の理由を知る事が第一の問題ですね。』

『さうです。』

『貴方は學歷もあり會社の重役でもあり御父さんは資産家であります、北畠さんが承知をなさらない筈がありません。』

『僕もさう思ひます。』

『其れに貴方は美男子で新式ですから、魚子さんが貴方に戀してるかも知れません。』

『さうでもないでせうが。』

と時男は頤を撫でた。

『いや確かにさうです、私の内偵に依ると魚子さんは大分貴方に心が傾いて居る樣です。』

『さうかしら。』

時男は再びニヤリとして襟帶を結び直した。

『其れに貴方との縁談を拒絶するといふのは。』

『どういふ理由ですか。』

『お待ち下さい。』

鹿倉は折鞄から活版刷の規則書を出し、

『縁談に關する秘密調査は百圓を頂戴します。』

『なるほど。』

惣七は紙入から百圓紙幣を出して渡した。

『確かに頂戴しました。』と鹿倉は紙幣を指で彈きながら、

『其れは魚子さんと結婚すべき人が既に決まつて居るからです。』

『そ、そ、それは誰ですか。』

『一寸御待ち下さい、規則に依りますと、內探の用向は其れだけの報告で完結して居ります、其れ以上になると、更らに百圓の追加を願はなきやなりません。』

『よろしい。』と時男は自分の紙入から百圓を出した。

『確かに頂戴。』と鹿倉は二枚の紙幣を折つて衣嚢に收め、

『婿になるのは兄の毅さんです。』

『なに?』

父子は同時に聲を擧げたが、見る〳〵憤怒の血に顏を赧めた。

『貴方は私達を愚弄なさるんか、兄妹が結婚する? そんな馬鹿な事を!』

『其處です。』

鹿倉は落着き拂つて居る。

『誰しもさう思ひます、併し魚子さんは北畠さんの實子ではないのです。此の報告料だけは特別に御負けして置きます。』

『ぢや誰の子ですか魚子さんは?』

『御待ち下さい、此の規則書には特別の大秘密は一千圓とありますが如何でせうか。』

百圓に百圓、二百圓を取つた上に更に一千圓の請求! これには奥田父子も呆れて顏を見合はした。

『いや、一千圓は高價過ぎますからね、御望みがなければ此の位で切り上げる事に致しませう、實は此の點に就ては他の三軒から切に望まれて居ますので其の方へ報告すれば私も儲かるのですから、貴方に强ひて御勸めはしません。左樣なら、其れぢや別莊で御目にかゝりませう。』

平然として去らうとする鹿倉の手を曳いて時男は叫んだ。

『金は惜しみません、御望み通りです。』

『では前金に願ひませう。』

時男は小切手を書いて渡した。鹿倉は其れを衣嚢に收め、上着の釦を堅く掛けて、

『これは實に重大な秘密です、此の世の中に何が面白いと言つて他人の秘密を探偵する程面白いものはありません、秘密は下級よりも中產級に多く中產級よりも上級に多いです、何しろね新聞に花嫁花婿として寫眞が出て居る花嫁に私生兒があつたり、花婿は梅毒病院に通つたり、議會で風敎刷新を叫ぶ代議士が二人の妾に頬ぺたを引搔かれたり、官吏が賄賂を取つたり、市會議員が砂利を飲んだり、私に取つては金儲が路傍にごろご

ろ轉がつてる様なものですよ、其中に何となく面白いのは婦人問題で……』

『誰の子ですか其れを早く聞かして下さい。』

と時男は焦り／＼して叫んだ。

『まあ順序を追うて話しませう、要するに婦人問題は卽ち家庭問題で、家庭問題は……』

『そんな事は後廻しにして下さい。』

『なるほど、要するにですな、魚子孃は大槻大將の落胤です。どうです、千圓の價値正にあり。』

『大槻大將？』

父子は口を合せて言つた。

『さうです、大將が若い時に藝者と關係して、生れた其の子が魚子さんです。其れを藁の中から引取つて我が娘として育てたのは北畠さんです。ですから魚子さんの身體は北畠さんと雖も自由になりません、大槻大將の意思次第です。』

『本當ですか。』

奥田は笊蕎麥の頭を前へ突出した。

『侯爵の令孃！』と時男は叫んだ。鹿倉は二人の顏を等分に見やつて、

『侯爵令孃と結婚なさるとすれば、これや千圓では安過ぎますよ。』

『さうなると。』

奥田の兩眼は慾火に燃えた、北畠昌平が今日飛ぶ鳥を落す大實業家になつたのは大槻侯爵の偉大なる後ろ楯があるためである。今其の令孃を我が伜の嫁にすれば一擧して北畠を壓倒するだけの出世が出來る。伜の戀も副ひ、我が慾望も遂げられゝば、これこそ一石二鳥の幸運である。だが其の方法は？？

鹿倉は矢張り落着き拂つて言つた。

『ですからあの二人は兄妹とは言ふものゝ實際は他人です、北畠さんとしては我が子の毅さんと魚子さんを夫婦にするのは最も賢明な方法です。』

『其れでは僕はどうなるんですか。』

時男は急に悄氣返つた。

『其れを破る事は中々容易でありません、貴方方の奮勵次第です。』

『奮勵と言つても、さう決まつてるなら手の着けやうもありませんな。』

『絶望といふ文字を字書から抹殺なさい。』

『併し……』

『併しといふ文字も字書から……』

『鹿倉さん、成功すれば十萬圓の御禮をいたします。』と惣七は叫んだ。

『私の考では此に三つの策があります。第一は毅さんと魚子さんの間に障壁を築く事です。第二は北畠と大槻との間を割く事です。第三には魚子さんの實母を探して其れを手に入れる事です。』

『なるほど。』と時男は膝を進めたが、此の時惣七は凝と眼を据ゑて溜息を吐いた。

『併しな、私も北畠さんの御世話で漸く一人前の男になつたのですからな。』

『其れは古いです御父さん。』と時男は興奮して『現代は小さな義理などに拘り合つちや居られません、物質の恩は後日物質で返せば可いのです。』

『併し……餘まり酷い事も出來ないからな。』

『御父さんは默つてゝ下さい、鹿倉さんと協議中ですから。』

『さうか、私も能く考へて見よう。』

汽車は停まつた。

『やあ來ましたよ。』と鹿倉は言つた。三人は直ぐ歩廊へ出た、と此の時向ふの三等室の前で朗らかな笑聲が起つた。魚子と毅が讓二兄妹を迎へに來た處であつた。

『やあ。』

『やあ。』

男同士は肩を組む。

『よくいらしたわね、私昨夜から嬉しくて〱眠れなかつたわ。』

『私もよ。』

女同志は直ぐ寄り添つて手を握り合ふ青春に輝やく四人の一組は此の落莫たる那須野に輝やかしき生氣を漲らして笑ひつ饒舌りつ停車場を出た。其處に一臺の自動車が待つて居た。讓二が持つて來た蛤の籠で四人は聲を出して笑つた。

『やあ御孃様！』

時男は魚子に聲を掛けて歩み寄つた。

『御邸へ伺ふつもりで參りました。』

『さう？　ぢや後程ね。』

魚子は一寸會釋して自動車に乘つた。

『いやな奴。』と千鶴子は言つた。四人を乘せた自動車は眞直に街道を走つた。

『おい自動車！　此の驛に自動車がないのか。』と時男は怒鳴つた。

四人が別荘へ着いたのは正午頃であつた、雪子夫人は晝飯の支度を調へて待つて居た、だが晝飯までには中々時間が掛つた、先づ男同士と女同士が手ん手に一

別以來の話をせねばならなかつた、學友の誰々がどうしてゐるとか、六大學の野球はどうなるとか、此の夏は何をして遊んで何の本を讀む積だとか、其等の他人が聞いても一向面白くない話が一通り濟まない中は四人は腰も上げずに語り合つた。其の間女中は料理の鍋を七輪に掛けたり外したりせねばならなかつた。漸と其れが濟むと四人は溫泉に浸かつた、其れが終つてから食卓に就いたのは一時頃であつた、四人の食卓の端に雪子夫人が坐つた。彼女は二人の我が子と、其友達の二人を絶えず微笑を以て眺めた、若やかな空氣、全然子供の樣に無邪氣な四人の話を聞いて居ると自分も何時の間にか若くなる樣に思はれた。

彼女は先づ第一に讓二の一擧一動に注目した、毅が言葉を盡して魚子の良人たる資格のある者は天下只だ此の一人あるばかりだと推薦した此の青年は果して其れだけの價値があるかどうか。これを見るのが此の食卓の主眼である。今までとても屢々讓二を見た事があるが此の日ほど精細に觀察した事はなかつた。

讓二は中肉中丈で健康そのものゝ樣に四角な肩で胸はいかにも岩疊で其の呼吸は規則正しく其の眼は毎も安定して物を見る時には顏と共に動くだけである。餘りものを言はぬが判斷は眞直で、恰ら腹の中を曝らけ出して言ふかの如く見える。洗ひ晒しの紺飛白に洗ひ晒しの袴ではあるが折目が袋になつても紐だけはきちんと結んで、襟元に垢じみた處もないのは、妹が氣を付けて洗濯してくれるためかも知らんが、此の人の几帳面な態度にしつくり適つて居る、これだけで雪子は『なる程』と思つた。其れと隣り合つた毅は全く反對でひよろ長い身體、無造作な態度、能く語り能く笑ふ大きな聲、磊落な諧謔、不揃に着た着物の襟元、懷の奧まで見ゆる樣な着こなし、全然性格の異つた人間がどうして恁んなに仲が可いのだらうと不思議に思はれる。

彼女は亦魚子と千鶴子の方を見やつた、何と言つても上品でふつくりと柔か味があつていかにも魚子が一人居ると室内が明るく見える樣な氣がする、其れと並んだ千鶴子は眉の邊に神經質らしく見える點はあるが、併し其の張り詰めた成熟した皮膚と圓みを帶びた肩から胸、袖口から仄見ゆる肉付きの可い腕、人の話を聞いたり自分で話したりする時に活き〳〵とした眼を臆面なく向けて、恰ら耳で話を聞くのでなく眼で以て話を吸ひ取るが如く見ゆる態度、女としては少し粗放ではあるまいかと危ぶませるだけ其れだけ無邪氣で眞劍な擧動に最初は驚きもしたが、次第々々に現代の女が從來の女よりも其れだけ力強く其れだけ純眞になつて來た樣な氣がした。

併し彼女は千鶴子の銘仙の着物と袴と、袴の間からちらちら見える古びた桃色の紐と、拇指に繼ぎを當てた足袋とを見た時、父も母もなくて兄と二人暮しである事を思ひ出して何とも言へぬ哀れさを感じた。

食事が終ると四人は直ぐ山女釣をしようと言ひ出した。若き人々、汽車の疲れも一浴の下に撃退したらしい、最初毅と讓二は妹達に隱れて、二人きりで釣に行かうとしたのであつたが、魚子に發見されて仕方なしに伴れて行く事にした、そこへ雪子夫人が現はれて私も一緒に行かうと言ひ出した。

毅は襯衣一枚に半洋袴を穿いて、經木眞田の帽子を手拭で縛りつけた、讓二は例の飛白に袴のまゝで、餌箱や魚籠や茣蓙を肩に荷つた、其の後から雪子夫人は肥大な身體をえつちらおつちら運ぶのであつた。

初夏の太陽は黄金の光を萬樹の上に浴びせて綠の葉も茶色の幹も凡て光の海に投げ込む、下蔭は其れに頓着なく濃かな齒朶の葉や、青苔の岩や、冷々した風に戯れて居る。

茣蓙を日蔭に敷いて一同は休んだ、溪流は木々の色を映して淺い處には白い泡を立て深い處には紺碧の色を湛へる、底の見える淺瀬には石の間を走る鯇が見える、木の蔭靜な處には暗綠の山女も居る、薄綠の鮎に似た魚は白い腹を見せて日の光に戯れる。

『居るぞ〳〵。』

毅は子供の樣に勇み出した。

『待て〳〵鈎に餌を付けなきや。』

讓二は悠然として鈎を檢め、其れから餌箱に少しばかりの水を入れ、次に一つ〳〵の餌を檢めて釣竿を一振り二振り振つて見る。

『自烈てえな、早くやれよ。』

『そんなに慌てるな、魚はいくらでも居る。』

『兄さんは氣が永いのよ。』と千鶴子は言つた。

『網でやらう、魚さん、網だ。』

毅は網を取つて立ちかけた。

『網で一度に多く捕るよりも、一尾づつ釣る方が樂みだよ。』と讓二は浮標の位置を考へながら言つた。

『僕は面倒臭い事は嫌だ。』

毅は恁う言つて『慾張らうとするものは僕に從いて來いよ。』

『私網なんか厭よ。』と魚子は言つた。

『私氣短だから網の方が可いわ。』

千鶴子は毅の後に從いて崖を降りた、と直ぐ千鶴子のきやつといふ叫び聲が聞えた、次で笑ひ聲。

『滑べつたんだ、彼奴は粗忽かしいから。』と讓二は言つた、さうして一本の釣竿を魚子に渡して、

『魚子さん、これでやつて御覽なさい、僕は蚊鈎を使ひますから。』

『御母さまは？』と魚子は竿を振つて見て言つた。

『私は可いものを捕つて來ます。』と雪子は微笑して言つた。

『なあに？』

『河鹿を捕ります。』

『御母樣に捕れて？』

『私ちやんと見屆けて置きましたから。』

『死んでる河鹿ぢやない？』

『そんなに馬鹿にするものぢやありません。』

母は崖を降りて行つた、魚子は讓二の背後に從いて反對の崖を昇り其れから山蘭の紫の花が咲き競ふ徑を辿つて大きな合歡木が突出した河岸の岩に降りた。

『どうやるの？　的場さん。』

『僕の通りに御やりなさい。』

讓二はすうと竿を鳴らして綸を飛ばした、綸は流れに從つて下る、下り盡きた處で再び綸を飛ばす。

『綸で水を敲いてる樣なものね。』

『流し釣はこれです、貴女のは默つて流して居れば可いんです、少し離れませう。』

此の時屈曲した岸の茂りの中で毅と千鶴子の聲が聞える。

『そら〳〵逃げた、右だ〳〵、いや左だ、やあしまつた、もう一遍、もう一遍。』

『あゝ〳〵掛つたわ〳〵、あら下を潜つて行つたわ、此方々々あゝ〳〵其方よ。』

其の騷々しき事恰ら大掃除の樣！

『あの人達は今に網を投り出して手摑みに掛りますよ。』と讓二は笑つた。

ほんの五六尺を離れて二人は草に腰を下した、讓二は頻りに釣竿を動かして居る、彼は瞬く間に鮠を二三尾釣つた、魚子は綸を垂れたまゝ浮標を見詰めて居た。

水は綠の上面に銀色の波を跳らして岸に囁き石に首肯き、さつさと涼しさうに過ぎて行く、天は青藍に晴れ渡つた初夏の色で、光が一ぱいに滿ちて居る木々の梢に思ひ出した樣に小鳥が啼く、何の鳥か瑠璃色の尾をして腹の黄色な鳥が一羽、丁度二人の頭の上で何時までも〳〵美くしい聲で囀つたが、其れも飛去つた後は一層境閑かに、天も地も寂然たる太古の靜閑に復つた。

『あゝ私の傍に的場が居る、其れきりだ、他に誰あれも居ないのだ、たつた二人きり！ 何だか此の靜かな山の中にたつた二人きりの人類が住んで居る樣な氣がする。』

魚子は恁う思つた。

『若し此の世の中に私と的場さんだけ住んで居るとすれば……』

魚子はハツと胸を轟かした、微かな紅ゐが頬に浮んだ。

『兄さんが私に此の人と結婚しろと仰有つた。』

今まで胸に秘めて幾度か考へもし幾度か獨り笑ひ獨り迷うた問題の相手！ 其れが今イブとアダムの如く二人きりで此處に居るのである。

『私が此の人と結婚したら……』

彼女は凝と浮標を見詰めた、浮標は波に嬲られて右へ行き左へ行き、又くるくると廻る、眞紅な一點の浮標、其れを見詰めてる中に紅い色が次第々々にぼかされて虹の輪の如く擴がる、輪の輪廓は黃色になり牛乳色になり、柔らかな大氣と溶けて天地一色のエメラルド色の谿谷となり、幽かな寂寞に包まれながら而も彼女の頭の底には或る法悅に似た甘いくく歡喜が湧くのであつた。彼女はもう既に二人は結婚した若夫婦であるかの如く思つた、さうして又其れでありながら、まだくく二人の間には打解けないものがある樣な氣がした。

兎も角不思議である、二人が無人の境に並んで居るのが不思議である。

『あらツ。』

突然彼女は叫んだ、するくくと草を滑つて釣竿は水に流れて行く處であつた。

『どうなすつた？』

讓二は魚子の傍に寄つた、釣竿はもう流れの中央に浮きつ沈みつして居る。

『飛び込んで取りませうか。』

『いゝえ可いのよ。』

魚子は讓二の袖を曳いた。二人は蒲公英の咲いた草の中に脚を投げ出した。此の時岩の蔭に毅の聲が聞えた。

『面倒臭いから飛込みませうか。』

『私も何だか泳ぎたくなりましたわ。』

『はゝゝゝ。』

『ほゝゝゝ。』

『實に亂暴だ。』と讓二は微笑して言つた。『あんな亂暴な妹と貴方の樣な靜かな人とどうして仲が好いのか不思議ですね。』

『いゝえ、私千鶴子さんが大好きなんですもの。』

『彼奴少し氣狂ひじみて居ますよ。』

『そんな事はないわ、其れや烈しい火の様な性格でいらつしやるけれども、純眞だわよ。』

『どうかね、あんな奴でも。』と讓二は感慨に堪へぬものゝ如く

『どうか面倒見て感化してやつて下さい、此の世に於て本當に心を傾けて尊敬して居るのは貴女だけですから。』

『私こそ千鶴子さんにいろ〳〵敎へられてるわよ。』

『僕としてはたつた一人の妹です。』

讓二の眼は露に光つた。

『僕等は貧乏だから學費もありません、併し僕が學校を止めても妹だけは學校へやりたいと思つて居ます、女は男よりも學問が必要ですからね。』

『さうですわ、家庭に入るにしても學問がなければ……』

讓二の顔は急に曇つた。

『家庭！　さうですな、併し千鶴子は家庭に入る事は出來ますまい。』

『どうして？』

『魚子さん、僕等兄妹は日陰者なんですよ。』

『あらツ。』

魚子は吃驚して眼を睜つた。

『呪はれた生涯です。』

『どんな事？　的場さん、話して可い事なら私に聞かして頂戴な。』

魚子の眼に同情の露が光つた。

『僕の父はね。』

讓二は苦しさうに口を切つた。

（つゞく）

珍數字　佐藤誠也

○一億圓

一億圓を一圓紙幣で横にズラリと並べると、其の長さは約一千四百五十五萬米、即ち三千七百里、横濱からスエズ迄達する。積み重ねると其の高さは約九千七百米で、富士山（三七七六米）の約二倍半とは驚く。

○五十錢銀貨

五十錢銀貨には、ギザ〳〵が百三十二ある。これは地金を磨り取られない爲と、僞造防止の爲である。

○金の延性

四瓦の純金を打ち延ばすと約三・六平方米、即ち疊二疊敷以上にもなる。又、一瓦の純金を引き延ばすと九粁位に延びる。軍人のつけてゐる金モールなどは、即ち之で作つたもの。

珍訴訟珍裁判物語

長岡規矩雄

一厘錢事件

よく引用される名裁判は明治四十三年栃木縣宇都宮在に起つた煙草の葉一枚の紛失事件である。實直な農夫白桐文吉君は、葉煙草栽培に營々として汗をしぼり、やがて收穫の秋を迎へて、みごとな葉煙草を專賣局に納付した。

ところが『四千枚納入の筈にも拘らず三千九百九十九枚しかないから一枚私したに相違ない』と此の時の係官が告發し、裁判は宇都宮地方裁判所から東京控訴院へと移され、遂に罰金十五圓の言ひ渡しとなつた。

文吉君『例へ一枚不足であつたとしても私した覺えは毛頭ない、罰金十五圓とはあんまりだ』と聲を放つて泣き出した。これを知つた法曹界の花形、花井、鵜澤の面々すつかり憤激し、一流どころの辯護士十數名を引き具して堂々と大審院の法廷で爭ふことになつたが、流石に『今大岡』の聞え高い横田秀雄氏、明快な語調で、『例へ葉煙草一枚でも納入の不足はよくない。然し僅か金一厘の葉煙草一枚は其價値判斷上何れにしても我我の共同生活を損害させる程度のものとは認め難い。故に本件の如きは法の精神よりして罰すべき性質のものにあらずと思考す。』と無罪を宣告して新判例を作つた。

二錢切手一枚で大審院まで

『人間は感情の動物だ』と、よく云はれるが、中々勘定の動物ではない。時に慾も得もなくなる事がよくあることだ。こゝにも意地づくで僅か二錢の郵便切手一枚の爭ひを大審院迄持ち込んだ近頃珍しい事件がある。

金澤市殿町の堀江務君は、息子二人を早稻田中學に入學させ、監督の爲に二人の毎日の日誌を東京から郵送させてゐたが、これは通信文でないから第四種郵便物として郵劵二錢を貼附してゐた。ところが昭和六年九月三十日金澤市郵

便局で發見『これは第一種郵便物だから一錢不足だ』と倍額の二錢を追徴したので、堀江君は癪に障るといふので、名古屋遞信局や遞信省に問ひ合せたが一向に埒が明かず、遂に金澤市郵便局長を相手取り、金二錢也の返還訴訟を提起したところ一二審共に司法裁判所の問題に非ず』と却下された。然し如何にも心外だと、多額の費用のかゝるのもかまはず、

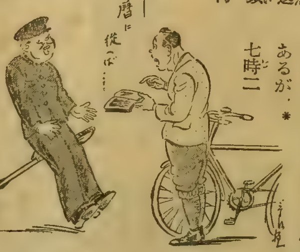
『是が非でも理非曲直をはつきりして貰ひ度い』

と更に大審院に持ち込んだので、大審院も捨て置けず、昨年になつて民事第三部西川裁判長係りで審理を進め、何れとも黒白をつけることになつたが、『日誌は第四種か第一種かの確定判決』は相當注目されてゐる。

晝夜の境界が大問題

それは大正十五年五月十二日午後七時頃、或人が自轉車の燈火をつけずに名古屋市中を乘り飛ばし、道路取締令第八條第一項『牛、馬、諸車等は夜間燈火を用ゐずして通行すべからず』といふ規定に觸れて處罰された。そこで被告は、

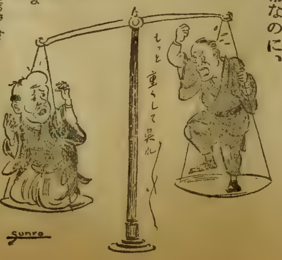
『暦に從へば名古屋地方に於ける大正十五年五月十二日の「日入」は午後六時四十六分であるが、＊



＊「日暮」は午後七時二十分である、而して本件の時刻は午後六時五十六七分であるから、まだ日暮前であつて、即ち諸車に燈火を要する夜間ではない』と爭つた。然し大審院は、大正十五年十月二十七日第三刑事部判決で『當時刻は已に日入を過ぎ將に日暮に垂とする時にて、暮色漸く加はり二三間を距つる時は通行人の面貌を確認し難き狀態にて、例へ未だ日暮前なりと雖も交通の安全を期せんが爲には通行の諸車、皆燈火を要するの時刻なる事勿論にて、それを怠りたる被告の行爲は正しく犯行と認むべきものなり』と斷じ、實際の暗さを考慮に入れて晝夜の別を立てることを明確ならしめた。

もつと重くしてくれ

罪は逃れたい、罰金は出したくない、これが人情の常なのに、自分で自分を控訴した人が居るから世間は廣いものである。長野縣北佐久郡南大井村の佐藤佐助君は、同じ列車に乘り合せた縣會議員と口論の末、遂に憤然立つて相手を亂打し、暴行罪に問はれて罰金二十圓の判決を言渡されたが、もつと重くしてくれと控訴したとは珍しい被告である。



長篇小説

地(ち)に爪跡(つめあと)を殘(のこ)すもの

佐々木邦

細木原青起畫

豐彦君と堅固君とは、何方も地に爪跡を殘さうと努める秀才であり、同時に智惠子さんといふ一人の美女を戀ふ戀敵でもある。軈て一夏、前者は早大文科生として歸省し、後者は一高にパスして戻つた時の事だ。突如土地の新聞に、『角帽の早大と、白線の一高が、同一の女に迷ふのは愼しめ。』といふ投書が載つた。これを見た智惠子さんのお父さんは、兩秀才と我娘の前途の爲に、向後三人の交際を斷つ事とし、最後の思ひ出として、自分も加へて四人の者の一日の舟遊びを提議する。

（前號までの梗概）

中の松原

豐彦君と堅固君は打ち合せに從つて、朝の十時頃村外れで青木さんと智惠子さんを待つてゐた。何方も制服制帽だつた。青木さんは智惠子さんと豐彦君と堅固君をつれて、藤島明神のお祭へ行く。

『大分人が出るね。』

『天氣が好いから、大當りだ。』

『青木さんも考へたな。』

『豪いよ。頭が進んでゐる。』

『昨日村中を歩いたのでも可なり利いてゐる。皆驚いたやうな顏をしてゐるたぢやないか？』

『痛快だつたよ。』

『新聞に取消を出すよりも餘つ程功能がある。』

『明神さまのお祭りとは丁度好く持ち込んだものだ。』

と二人は話してゐた。

藤島明神の祭禮は縣下第一の稱がある。町の人は素よりのこと、近郷近在のものが自慢にしてゐる。山車が十八臺出る。藤島町は十八町といつて、十八の町が夫れ〳〵意匠を凝らす。踊り屋臺が練り歩く。これは有志だから數に制限がない。就中花火が昔から呼物だ。殊にこの兩三年は東京關西の花火師が集まつて妙技を競ふ。

『藤島へ。明神さまへ。』

と五六里四方から寄せかけて、町は湧き返る。龍尾村からも人が出る。字松崎は村の關門だから、青木さんと智惠子さんを待つてゐる豐彦君と堅固君は一寸の間に種々の人を見かけた。

『渡邊村長が行つたね。』

『うむ。厭な奴だ。』

『僕達の顏を見て、ヒョッと横を向いてしまつた。』

『以前は足繁く出入して煩いくらゐだけれど、手の裏を返したやうだ。』

『今に見ろ。』

『しかし年が年だ。此方が出世するまで持ちさうもない。』

『幾つだらう？』

『さあ。』

『君、水門の植田さんが來たよ。』

と堅固君が帽子に手をかけた。植田さんは村會議員中の錚々たるものだ。佐藤家に力瘤を入れてゐる人だから、渡邊村長とは違ふ。ニコ〳〵しながら寄つて來た。

『お揃ひで。』

『はあ。』

『未だお祝ひも申し上げませんでしたが、御兩君ともお芽出度う。』

『有難うございます。』

『片や一高、片や早稻田か。しつかりやつてくれ給へ。』

『はあ。』

『何うですか？　お供しませう。』

『連れを待つてゐるんですから。』

『それぢやお先へ。』

と植田さんは行つてしまつた。

それから間もなく、

『君、小泉が來たよ。』

と豐彦君が見つけた。

『來た〳〵。小泉君。』

と氣の早い堅固君は駈けて行つて、自轉車のハンドルを捉へた。

『やあ。』

『君に會ひたいと思つてゐたところだ。』

『一昨日來てくれたつてね？』

『下り給へ。』

『うむ？』

『話がある。下りろ。』

『何だい？　一體。』

と小泉君は驚いたやうな顏をして、自轉車から下りた。豐彦君も側に來てゐた。

『一昨日行つたけれど、君は居留守を使つた。』

『そんなことはない。僕は藤島へ行つてゐたんだ。』

『自ら欺くな。』

『欺きも何もしないよ。』

と堅固君は語氣が荒かつた。

『僕達がこれから訊くことに誠意をもつて答へてくれ。』

『何うしたんだい？　そんなに眞劍になつて。』

『君は「岳南新報」の投書を讀んだか？』

『讀んだ。』

『あれは君が書いたんだらう？』

『冗談言つちやいけない。』

『小泉君、誤魔化しても駄目だ。』

と豐彦君が初めて口を切つた。

『誤魔化しはしない。僕は一向覺えのないことだ。』

『しかし君が僕に言つた通りのことが書いてある。』

『僕が君に何を言つた？』

『堅固君を送つた時、歸りに何と言つた？』

『あれは忠告の積りだ。君達の爲めを思つて言つたんだ。』

『その忠告がそのまゝ書いてあるぢやないか？』

『僕は知らないよ。』

と小泉君は何處までも否定した。

『知らないとは言はせない。僕達の秘密を知つて居るのは君丈けぢやないか？』

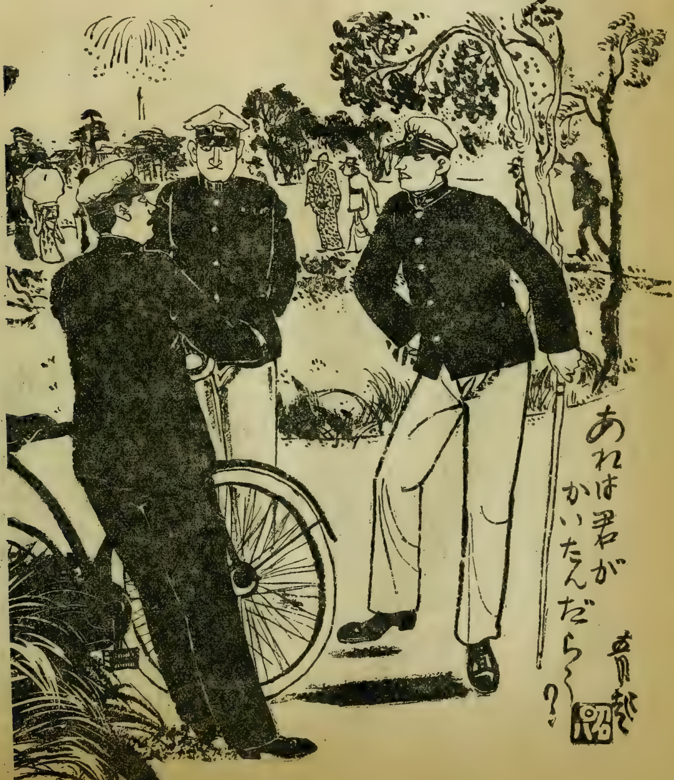
と堅固君が責めつけた。

『……　……』

『僕は君と斷定する。』

『それは無理だよ。』

『いや、君以外にあんなことを書く人間はない。』
『待ち給へ、君達は秘密の積りでも、薄々知つてゐるものがないとも限らない。』
『誰が知つてゐる？』
『それは僕にも分らないけれど。』
『若し知つてゐるものがあれば、君が秘密を洩らしたんだ。』
『僕は妹以外に話したことがない。考へても見給へ。僕は試驗勉强で君達のお世話になつてゐる。苟めにもそんなことの出來た義理ぢやない。』
『君は實際覺えがないか？』
『ない。斷言する。』
と小泉君は胸を叩いて、富士山の方を見た。お山に愧ぢないといふ意味らしかつた。
『よし。』
『君にも豐彦君にも忠告は確かにした。しかし君達の迷惑になるや



うなことをするものか？』

『…………』

『信じてくれるかね？』

『さあ。』

と堅固君は豐彦君を見返つた。小泉君の仕業だと言ひ出したのは豐彦君だつた。

『小泉君、僕は未だ腑に落ちないよ。』

と豐彦君が後を受けた。

『何うして？』

『君が書いたんでなければ、君はあの投書を讀んだ時、僕なり堅固君なりのところへ駈けつけて來る筈だ。』

『…………』

『それだのに、此方から行けば居留守を使ふ。』

『あれは偶然家にゐなかつたんだよ。』

『しかし僕達が行つた意味は分つてゐたらう？ 投書の一件だとは思はなかつたか？』

『それは思つた。』

『思つても今日まで僕達を避けてゐたところが變ぢやないか？』

『…………』

『それだから僕は矢つ張り君だと斷定する。』

『…………』

『何うだ？ 君。』

『無理だ。』

『何うして無理だ？』

『僕は僕だらうと思はれはしまいかと思つて態と避けてゐたんだけれど、實際覺えがないんだ。君。』

『何だい？』

『何うすれば疑ひを晴らしてくれる？』

と小泉君はその方法丈けを問題にしてゐるやうに言つた。

丁度そこへ青木さんと智惠子さんが見えた。豐彦君と堅固君は駈けて行つて迎へた。

『昨日は失禮申上げました。』

『いや、何う致しまして。村中を引つ張り廻して。ハツハ、、。』
と青木さんは前日の機嫌を持ち續けて、自分のやつたことが成功だつたといふ風を見せた。
『お供致しませう。』
『御苦勞ですけれど、何うぞ。』
『大分待つて?』
と智惠子さんが豐彦君に訊いた。
『いや、眞の少時です。』
『私、氣が氣ぢやありませんでした。道で小崎先生に會つて、お父さんがお話を始めたものですから。』
『はゝあ。』
『長いわ、あのツンボ先生。』
『ハツハ、、、。』
『時間勵行の積りでしたけれど、本當に濟みません。』
『いや、一向。』
『堅固さん。』
『はあ。』
『あなた、お手は何う?』
『あゝ、もう直りました。一寸でしたから。』
と答へた堅固君は右手の指に繃帶をしてゐた。昨日大池の舟遊びで舷と岩の間に指を挾んだのだつた。
『さあ。繰り出しませう。』
と青木さんが促した。
豐彦君と堅固君は氣がつくと、小泉君がもうゐなかつた。
『奴、逃げた。』
と豐彦君が言つた。
『あすこへ行く。』
と堅固君は刻々小さくなる自轉車の後姿を認めた。
『小泉さん?』
と智惠子さんが問題にした。
『はあ。』
『お逃げにならなくても宜いでせうに。』
『心に疚しいことがある證據です。』
と堅固君は又疑ひが濃くなつた。
『何うして?』
『あの投書は小泉の仕事に相違ないんです。』
『まあ!』
『今取つ捉へて談判をしてゐたところです。』
『小泉さんなら丁度好いぢやございませんか?』
『何故ですか?』
『斯うしてお父さんと御一緒に出掛けるところを見せて上げたんですから。』
『成程。それは然うですな。』
『小泉さんかも知れませんわね。』

『奴に相違ありません。』
『でも御自分では仰有らないんでせう？』
『はあ。存ぜぬ知らぬと言ひ張つてゐました。しかし白狀させて、制裁を加へてやります。』
『喧嘩になりませう？』
『望むところです。』
『およしなさいよ。馬鹿に構ふものは馬鹿つてことがありますわ。』
と智惠子さんは簡單に片付けた。
『堅固さん。』
と青木さんが後ろから呼びかけた。
『はあ。』
『小泉君に嫌疑がかゝつてゐるんですか？』
『はあ。彼奴に相違ないんです。』
『しかしその爲め喧嘩なんかしちやいけませんよ。小泉君は何と言つてゐるんですか？』
『知らないと言ふんです。』
『それならそれまでの話です。證據のないことですから、結局水かけ論です。もう構はない方が宜いですよ。』
『はあ。』
『小泉君ぢやないでせう。直ぐに嫌疑のかゝるぐらゐのことは分つてゐますから、却つてやりませんよ。』
『いや、馬鹿ですから、それを平氣でやるんです。』
と堅固君は何處までも小泉君と思ひ込んでゐる。
『花火の音が聞えますわね。』
と智惠子さんが言つた。
『はあ。川上で揚げてゐますから近いです。』
と豐彥君が答へた。
『私、花火を揚げるところを見たことありませんわ。』
『今日は行つて見ませう。』
『危いでせう。』
『何あに。尤も直ぐ側までは行けません。』
『大きな音でせうね？』
『はあ。耳から血が出ます。』
『まあ！』
『それですから花火屋は皆聾耳です。』
『本當？』
『噓です。』
『あらまあ！』
『ハッハヽヽ。』
話し〳〵、中の松原へ差しかゝつた。
『こゝは昔は淋しいところでしたよ。』
と青木さんが左側の雜木林を覗いた。右側は廣い田圃で、その果てに富士山がそゝり立つてゐる。
『今でも淋しいわ。』

と智恵子さんが豐彦君の顔を見た。淋しいから學校の歸りに送つて貰つたことがあるといふ意味だつた。

『これでも大分開けたんだよ。昔は藤島を出外れると、三軒家といつて、百姓家が三軒あるばかりだつた。今はその三軒家が字になつてゐるが、あれから松崎まで人家といつては一軒もなかつたんだからね。』

『そんなでしたの？ 今は松原さへ出外れれば、ポツ〳〵ございますから、厭なのはこの松原丈けですわ。』

『晝間は平氣だつたが、夜は氣味が惡かつた。藤島へ行つても、日の暮れない中に歸つたものだ。一本足が出るつて評判だつたからね。』

『何ですか？ 一本足つてのは。』

と豐彦君が訊いた。

『一本足の幽靈です。』

『はゝあ。幽靈に足があるんですか？』

『誰も見たものはないんですが、それが出ると言はれてゐるので、夜通るのが思ひでしたよ。』

『夜お通りになつたことがありますか？』

『ありますとも。用足しの都合で日が暮れます。一本足は出ませんでしたが、狐によく會ひましたよ。』

『はゝあ。』

『晝間でも出たものです。』

『化しはしませんか？』

『好い鹽梅に先方で怖がつて逃げて行つてくれます。しかし一度氣味の惡い目に會ひました。狐ぢやないです。人間です。』

『追剝ですか？』

『初めはテッキリ然うだと思つたんですが實は人違ひの待ち伏せにかゝつたんです。藤島の方から松原へ入ると直ぐでした。「野郎、待て。」といふ聲がかゝつて、男が二人寄つて來ました。眞暗闇の晩でした。「違ふ

違ふ〳〵。野郎は煙草を飲まない。』といふ別の聲が直ぐ後ろから聞えました。私は煙草をくはへてゐたんです。同時に初めの二人は松の木の間へ姿を消しました。』

『危いところでしたな。』

『さあ。氣味が惡い。兎に角、これは煙草を飲みながら行くに限ると思つて、村に着くまで吸ひ續けましたよ。』

『もう會はなかつたんですか？』

『會つたら大變です。翌朝、何うです？松原に人殺しがあつたといふ話を聞いた時、私はゾクッとしましたよ。』

『はゝあ。』

『匕首でやつたんです。三人に一人だから敵ひません。丁度私が出會したところで切りさいなまれてゐたさうです。煙草を吸つてゐなかつたら、人違ひで此方がやられてゐましたらう。』

と青木さんは二十年の昔話だつた。

『間一髪でしたな。』

と堅固君が溜息をついた。

『危いところでした。あの時やられてゐれば、智惠子も何もありま

せん。』

『御結婚前でしたか？』

『はあ。丁度君達ぐらゐの時でした。』

『何處の人ですか？　殺されたのは。』

『それが分らずしまひでした。土地のものぢやなかつたです。その頃は東海道の鐵道工事で方々から人が入り込んでゐましたから、恐らく殺した方も殺された方も工事に關係してゐた人達だらうといふ評判でした。』

『そんな怖いお話、もうよしませうよ。花火が揚つてゐるわ。』

と智惠子さんが言つた。

『煙草を吸つて歩くに限りますね。』

と豐彥君は冗談ながら煙草に火をつけた。

『私もその當座は然う思ひましたが、又考へ直しました。若しあの時、日頃煙草を吸ふ人間を待ち伏せしてゐたとしたら、何うでせう？　一も二もなくやられてゐませう。』

と靑木さんは未だ話に實が入つてゐた。

『成程。』

『兎に角、あゝいふ目に會ふと臆病になりますよ。尤もそれからといふもの、一本足のことなんか忘れてしまひました。人間ばかり怖いんです。』

『それが本當ですな。無法な奴が一番恐ろしいです。』

『煙草を吸つて宜いんだか惡いんだか分りませんから、以來私はこの松原を夜通る時、咳拂ひをしたり、靑木だ〳〵と斷つたりしました。靑木と承知でかゝつて來る奴があれば、もう仕方ありません。』

『ハッハヽヽ。』

と堅固君が笑ひ出した。靑木さんに暗討を食はせた大野さんを思ひ出したのだつた。

十町續きの中の松原は龍尾村の人に必ず何かの感銘を與へてゐる。現に豐彥君と堅固君が智惠子さんの爭奪を始めたのも、この松原が最初の場面だつた。智惠子さんにしても中の松原と所謂人生經驗が結びつく。

『靑木さん、僕達は若し他日志を得たら、この松原にお地藏さまを一つ建立したいと思つてゐます。』

と豐彥君は三須先生を思ひ出した。

『何ういふ御發心ですか？』

『あの松です。』

『三須先生の松です。』

と堅固君は帽子を取つて指さした。豐彥君が說明を續ける。

『先生があの松に登つて、お山を見てゐたんです。それが抑〻の初まりでした。ついこの間のやうですが、もう二年たつてゐます。僕達は三須先生のお蔭で發憤したんです。』

『餘程豪い先生だつたと見えますね。』

『學問も人格も類がありません。お亡くなりになつたけれど、僕達の心の中に生きてゐられます。』

『おい。僕にも話させろ。』
『話せ。』
と豐彥君は爭はなかつた。
しかし堅固君は默つてしまつた。首を垂れて、先へ步いて行く。
『何うした？』
『……………』
『おい。何か氣に入らないことがあるのか？』
『違ふ　僕達は自ら欺いてゐるんだ。先生の靈は確かに悲んでゐる。』
『何故？』
『矢つ張り僕達は先生の遺訓に背いてゐるんだ。』
『……………』
『今僕達の足は學問の方へ向いて進んでゐないと思ふと、申譯のない心持がする。』
『それは仕方がないよ。』
『それぢや矢つ張り何處までもやるのか？』
『やるさ。』
『勝手にしやがれ。』
と堅固君は血相を變へた。
『何だい？　君は。』
『もう宜い。度胸を据ゑる。』
『分つたよ。』
『君の心を訊いて見たんだ。』
『……………』
『僕は自分を圖太い人間だと思つてゐたが、君の方が餘つ程圖太い。』
『おい。君は又喧嘩をしかけるのか？』
と豐彥君は持て餘した。
『やるぞ、僕は、何處までも。』
『やれ。此方もやる。』
智惠子さんが追ひついて、
『仲よくして頂戴よ。もう今日きりぢやありませんか？』
と言つた。
『何でもないんです。』
と振り返つた堅固君はもう笑つてゐた。
『お父さんが心配なさいますわ。』
『お地藏さまを建てる相談をしたんです。』
『本當？』
『えゝ。出世地藏とします。』
『いけない。出世なんて俗だ。學問地藏の方が先生の性格に適つてゐる。』
と豐彥君もそれを問題にしてゐたやうに調子を合せた。
靑木さんは後から來た村の老人と話し始めて後れ勝ちだつた。矢張りお祭へ行く人が多い。中の松原としては年に一度の賑ひだ。
『お父さんは？』
と智惠子さんが度々振り返つて手招きをした。靑木さんはその都度手を振つて答へた。松原の出外れへ近づいた時、

『おや、小泉がゐる。』

と豐彦君が見つけた。小泉君は松の木の下に自轉車を止めて、手を擧げてゐた。

『小泉さんよ。』

と智惠子さんは歩を止めた。

『構ひません。』

『厭よ、私。又新聞に書く積りかも知れませんわ。』

『大丈夫です。』

『でも。』

『いつまでも厄介な奴だな。』

と堅固君は癇癪を起して、駈けて行つた。

『君、待つてゐたんだよ。僕は何うしても氣が濟まない。』

と小泉君は極く穩かに迎へた。

『白狀するのか?』

と堅固君は無暗に荒かつた。

『知らないことは仕方がない。しかし納得の行くやうにしたい。』

『何うするんだ? それぢや。』

『これから一緒に岳南新報社へ來てくれ給へ。投書のハガキを見せて貰はう。』

『あれは見せないさうだよ。』

『見せるも見せないもない。僕は迷惑してゐるんだから、要求する權利がある。』

と小泉君は眞劍そのものだつた。そこへ豐彦君と智惠子さんが追ひついた。

『豐彦君、僕と一緒に岳南新報社へ來てくれ給へ。』

『何うするんだ?』

『僕は君達の疑ひを晴らしたい。投書のハガキを見て僕の手でなかつたら納得してくれるか?』

『さあ。』

『實際僕ぢやないんだけれど、君達は僕の辯解を聽いてくれない。賴むから、新聞社まで來てくれ給へ。』

『よし。行かう。』

と豐彦君が應じた。

小泉君は自轉車を引いて先に立つた。折から花火が揚つて、喧しい

音がした。もう藤島が近い。

『三尺玉だ。』

と通りがかりの若い衆が言つた。殆んど同時にワーツといふ聲が前方から聞えた。

『何だらう？』

と言つて、皆覺えず首を伸した。時しもあれ、空馬車が一臺、宙を飛ぶやうな勢で駈けて來た。

『危い！　危い！』

と通行人は右往左往に避けた。豐彦君と堅固君は右左から智惠子さんの手を取つたが、慌てゝ兩方へ引つ張つた。智惠子さんは脚が浮いて仰向けに倒れた。

『危い！』

と叫んで、小泉君は自轉車を放すが早く、智惠子さんを蔽つて突つ伏した。馬はその上を跳ね越したが、車が小泉君の肩を打つて彈んだ。青木さんと話しながら來た老人は二間ばかり投げ飛ばされた。馬力は松の幹に引つかゝつて、馬ばかり松原道を一散に走つて行つた。

『小泉君、小泉君。』

と豐彦君と堅固君が縋りついた。

『智惠子、智惠子。』

と青木さんが狂亂のやうになつて呼んだ。二人とも氣を失つてゐた。大騷ぎになつた。小泉君と智惠子さんは藤島の町立病院へ擔ぎ込まれた。智惠子さんは間もなく意識を取り戻した。不思議に擦り傷一つ受けてゐなかつたが、止め度もなく泣き出した。小泉君は右の肩と右の腰に重傷を負つてゐた。呼んでも通じない。唯唸るばかりだつた。

豐彦君と堅固君は小泉君の枕頭に侍した。青木さんは智惠子さんの部屋と小泉君の部屋を往來して、

『何うですか？　何うですか？』

と少時も落ちつかない。

『智惠子さんは何うですか？』

『藥を飲んで眠りました。眠りさへすれば宜いんださうですが、小泉君は何うですか？』

『お醫者さんは頭さへ打つてゐなければ大丈夫だと言ふんですけれど。』

『困りましたなあ。』

『頭を打つたんでせうか？』

『さあ。』

『小泉君。』

『おい。小泉君。』

と豐彦君と堅固君は又呼んだ。

醫者が廻つて來て、靜肅を命じた。脈を檢めて、注射をした。

『何うでございませうかね？』

と青木さんが訊いた。

『院長の仰有るには、頭さへ打つてゐなければ大丈夫ださうですが……』

『頭を打つてゐるんでせうか？』

『未だ徴候が見えません。』

『頭に傷はないやうですな。』

『はあ。肩と腰丈けだらうと思ふんですが……』

と若い醫員は怪我人の額に少時手を當てゝゐた。花火がドン〳〵揚がる。

『やかましいなあ。』

と堅固君は顏を蹙めた。

それから一時間後に小泉君のお父さんとお母さんが駈けつけた。青木さんが一部始終を説明した。

『精一や。精一や。』

とお父さんが呼んだ。

『うゝん。』

『精一や、お父さんとお母さんだよ。』

とお母さんは涙を流した。

『うゝん。』

『精一や。』

『岳南新報……』

『うむ?』
『僕ぢやない。』
『うむ? 精一や。』
『……………』
『分るか? お父さんだぞ。』
『僕ぢやないよう。』
『何うした? 何うした?』
『僕ぢやない!』
と小泉君は投書のことだつた。
『讒言を言つてゐる。』とお父さんは腕を組んだ。
『小泉君、堪忍してくれ。』
『おい。小泉君。』
と豊彦君と堅固君は泣き出した。
その聲が通じたのか、小泉君は目を見開いた。
『これ、精一、お父さんだぞ。』
『はあ。』
『お母さんだよ。精一や。』
『はあ。』
『分るかい?』

『はあ〱分ります。』
『もう大丈夫だよ。』
『はあ。はゝあ。』
と小泉君は覺束なくも周圍を見廻して、病院だと氣がついたやうだつた。そのまゝ目を閉ぢた。涙が目頭を湧き出した。
『好い鹽梅ですよ。』
と醫員が囁いた。
『正氣づいたやうですな。』
『はあ。一寸彼方へ。』
『はい〱。』
とお父さんお母さんが立つた。青木さん初め豊彦君も堅固君も續いて廊下へ出た。
『差當り絶對安靜の必要がありますから、病室は御兩親丈けに願ひます。』
と醫員が注文した。
『はあ。しかし何うでせうかな? 容態は。』
『院長がもう一遍御覽になりますから、その折お話がございませう。』

『何うぞ宜しく願ひます。それでは皆さん、何うも有難うございました。』

とお父さんお母さんは病室へ入つた。

院長の診察の結果は經過良好といふことだつた。

『餘病さへ出なければ、大丈夫ださうでございますから。』

とお母さんが元氣好く知らせてくれた。

智惠子さんの方へもお母さんが駈けつけた。二字遠い丈けに晩かつた。

『まあ。何うしたといふんでございますか？ あなたがついてゐながら。』

と昔の田川小町は家つき娘の本領を發揮したけれど、怪我がなかつたと聞いて、直ぐに靜まつた。智惠子さんはスヤ〳〵眠つてゐた。

『此方は心配ないんですから、何うぞもうお引き取り下さい。』

と青木さんが言つた。それにも拘らず、豐彥君と堅固君は夕刻まで病院の廊下に控へてゐた。小泉君は引き續いて異狀がなかつた。

『歸りますから、何かお家へ御用はありませんか？』

と看護婦に傳へて貰つたら、お母さんが出て來た。

『悉皆直るまでに三週間かゝるさうでございます。命に別狀ないと聞いて、又慾が出ました。あなた方にお願ひがありますが、お聽き屆けて下さいますか？』

『お役に立つことなら何でも致します。』

と豐彥君が引受けた。

『院長さんは三週間と仰有いますが、一週間で直したいと思ふんです。ついては五反田に日切りのお地藏さまといふのがありませう？ 御存じでございますか？』

『はあ。』

『一週間なら一週間と日を限つて御願ひすれば、必ず叶へて下さいます。今晩から御參詣お願ひ出來ませんでせうか？』

『承知致しました。』

『お百度を踏むんでございますよ。』

『見たことがあります。』

『二十一歲の男ですが、大怪我を致しました。何うぞ一週間の中に元の丈夫な身體にお戾し下さいますやうに。と斯う言つて賴むんでございます。病院では三週間かゝると言つてゐるなんて仰有らない方が宜うございますよ。』

『はあ。』

『今晩から何うぞ。二十一歲の男ですが、大怪我を致しました。何うぞ一週間の中に元の丈夫な身體にお戾し下さるやうに。』

とお母さんは賴んで見せた。

豐彥君と堅固君はもうお祭りどころでなかつた。病院を出ると直ぐに村へ向つた。お祭りへ行く連中が押しかけて來る。

『思ひもかけないことが起るものだな。』

と豐彥君は沈み切つてゐた。

『うむ。何が何だか分らなくなつてしまつたよ。』

『しかし小泉君が死なくて宜かつた。』

『危いところだつたよ。』

『小泉君がおつ被さらなかつたら智惠子さんは大怪我をしてゐるぜ。』

『死んだかも知れない。』

『小泉君は矢つ張りいざとなるとやる。』

『僕達だつてその積りだつたけれど、彈ね飛ばされてしまつたんだ。』

『驚いたよ。』

『三人の中何の道誰か怪我をする運命になつてゐたんだらう。』

と堅固君は自分達に都合の好い解釋を下した。この筆法で行くと、小泉君が三人の運命を代表したことになる。

『しかし……』

『何だい？』

『小泉君が智惠子さんの爲めに犠牲になるのは間違つてゐる。君か僕が命がけをするのが本當だらう。』

『無論さ。その積りだつたけれど、地勢が許さなかつたんだ。』

『然うとも考へるけれど。』

『小泉君のゐたところにゐれば、僕だつてあゝしておつ被さる外はなかつたんだから。』

『兎に角、僕は小泉君に感心した。』

『無論殊勳者だ。』

『それからもう一つ僕は小泉君を疑つたのが惡かつたと思ふ。』

『投書かい？』

『うむ。』

『あれは矢つ張り小泉君ぢやないよ。』

『ない。譫言にまで言つたんだもの。』

『濟まなかつた。』

『うむ。申譯ない。』

『これは後からあやまる積りだ。』

『僕もあやまる。』

『要するに僕達は小泉君に負けたんだ。』

と豐彥君はそれが結論だつた。

『僕もそんな心持がする。』

『堅固君。』

『何だい？』

『僕達は餘つ程考へなければならないぜ。』

『何を考へる？』

『學問の成績が好いぐらゐを鼻にかけて豪い積りでゐるのは大間違ひだ。』

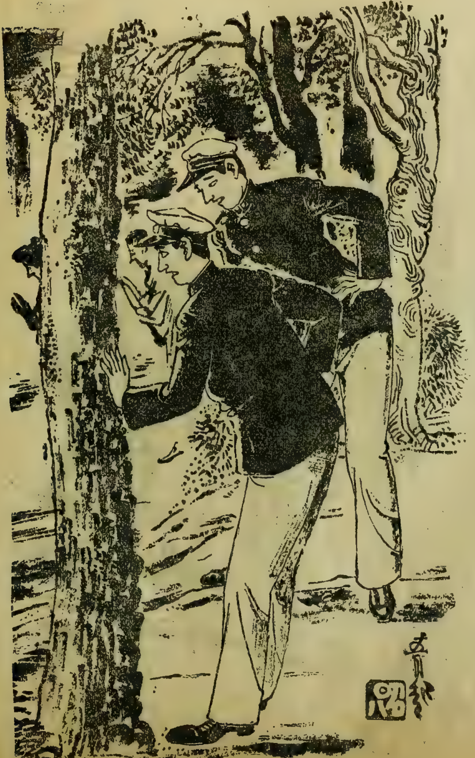
『別に鼻にかけてもゐないけれど。』

『兎に角、低能だと思つてゐた小泉君が今日は僕達を完全に打ち負かしてゐる。』

『君から理窟を聞かされると益〻負けたやうな心持になつて來るよ。』

『小泉君があのまゝ死ぬとしたら何うだらう？　英雄の死だぜ。身を殺して人を救つたんだ。それも僕達なら利害つてものがある。しか

し小泉君は智惠子さんを何とも思つてゐないんだからね。』
『偶然も手傳つてゐるぜ。』
『何うして?』
『地勢が地勢だ。僕達だつて小泉君のゐたところにゐたら、確かにおつ被さつてゐる。』
と堅固君は再び地勢論を持ち出した。豐彦君とは解釋が違ふ。單に競爭で負けたと思つてゐる。豐彦君は精神に於て打ち負かされたと信じてゐる。
『僕は生活を建て直さなければならないやうな氣がする。』
『何ういふ意味だい?』
『學問ばかりぢや駄目だ。』
『それは分つてゐる。』
『その多少分つてゐることを小泉君によつて敎へられたんだ。』
『文學者は違ふ。』
『何でも宜いよ。』
と豐彦君は默つてしまつた。
椿事のあつたところへ差しかゝつたが、もう跡方もなかつた。それから中の松原を辿つた。
『おい。出世地藏で思ひ出したが、大變なことを引受けてしまつたね。』
と堅固君が話しかけた。例の松の木を通り過ぎてからだつた。
『日切りの地藏さんかい?』
『うむ。』
『仕方がない。行かうよ。』
『僕は御免だ。』
『何故?』
『君が引受けたんだ。』



『しかし小泉君のお母さんは君と僕に賴んだ積りだよ。』
『病院で三週間と言ふのに、一週間で直してくれといふのは無理だ。お地藏さんが迷惑する。』
『しかしこの際だ。看病するお母さんの氣を勵ますんだ。迷信つてことは分つてゐるけれど、理窟の問題ぢやない。』
『五反田だぜ。』
『うむ。僕達の運命を代表した小泉がウン〳〵唸つてゐるんだ。安閑としてゐちや申譯が立つまい？』
『今夜丈け附き合はう。』
『然うしてくれ給へ。後は又相談する。』
と豐彦君も元來進んでゐない。
二人はその晩五反田へ出掛けた。直ぐ隣の字だ。地藏さんは大池の畔にある。月夜だつたから、涼みの積りだつた。忽ち、
『二十一歳の男でございます。今日大怪我を致しました……』
といふ聲が聞えた。
『おい。誰か來てゐるよ。』
『來てゐるやうだ。』

と豐彦君と堅固君は立木の間を拔けた。來てゐるどころでなかつた。小泉家の小作が男女數十名お百度を踏んでゐた。
『誰だね？　やあ、佐藤さんか？』
と呼んだ音頭取りは正に小泉君のお父さんだつた。

『はあ。』
と堅固君が答へた。
『容態が好いやうですよ。』
『はゝあ。』
『ちよつくら拔け出して來ました。何うぞ宜しく。さあ、皆、やれ。二十一歲の男でございます。今日大怪我を致しました。これから一週間の中に……』
豐彥君と堅固君は一週間每晚參加しなければならないことになつた。その御利益か、小泉君は二週間目から急に元氣が出た。二人が見舞ひに行つたら、もう面會しても差支ないといふことだつた。
『何うだい？』
と豐彥君が聲を潛めるやうにして訊いた。
『有難う。大分快い。君達は日切りの地藏さんへ行つて、お百度を踏んでくれたつてね？』
『うむ。』
『お蔭さまだ。』
『血色も好いぜ。』
と堅固君が勵ました。
『しかし豪いことになりさうだよ。』
『何うして？』
『右の腕が肩から上へ上らない。こゝ丈け片輪になるんだつて。』
『ふうむ。』
『一年志願が出來ないと思ふと殘念だけれど、一年志願が出來ないくらゐなら、もう卒業しなくても宜いんだから、それを思ふと安心だ。』
『相變らず小泉流だね。』
『僕の誠意が通じたかい？』
『あのことなら、もう分つてゐるよ。』
『僕達はあやまりに來たんだよ。』
と豐彥君が明かに言つた。
『あゝいふ時は頭が働く。疑はれるくらゐなら死んでも宜いと思つた。』
『うむ。』
『死ぬくらゐなら君達の爲めにならうと思つたんだ。』
『君は英雄だよ。』
『心持が分つてくれたね。有難い。』
と小泉君は如何にも滿足のやうだつた。

（つゞく）

豆知識

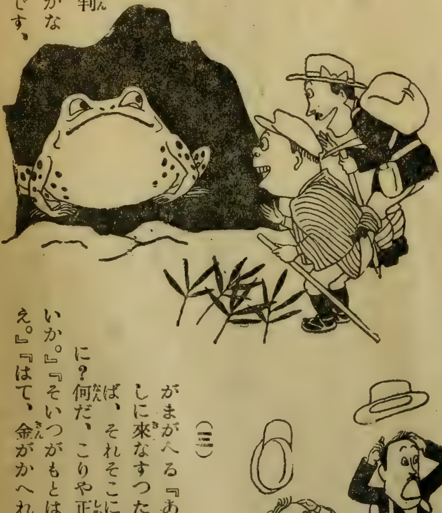
●新聞の事をニユース（News）と云ふが之は東西南北の頭文字ＥＷＳＮを組合せ四方から知識を集めるといふ字。
●夢は五臟の疲れと云ふが、事實に於て消化不良、神經の衰弱、呼吸の不自由等が最も多い原因であると。
●手を打つと池の緋鯉が寄つて來る譯は、音響が水に傳はり、それが魚體の鱗の側線にある神經に傳はるからだ。
●宇宙で一番速いものは光、每秒二十七萬九千キロで、卽ち一秒間に地球を七廻り半するとは超スピード。

マンガコント

金まが

（一）

『信州戸隠の裏山に、山賊兒雷也が立て籠つた窟屋といふのがありましてな。そこには、兒雷也の奴が盗み貯へた黄金小判百萬兩が藏してあるといふことを、たしかな筋から聞き込んで來たんですがな。どうです、一つ索しに出かけようぢやありませんか。』



（二）

『ハ、ア、兒雷也の窟屋といふのはこれですか。オヤ、奥の方に何かゐる！ ウワア、がまがへる！』『さては兒雷也の奴妖術をもつて黄金をがまがへるにしたと見える。やいそこながまがへる、とつとと、もとの金になれ。』

（三）

がまがへる『あゝお前さん方は金を探しに來なすつたんぢやな。その金ならば、それそこに澤山ある。』『どれどこに？何だ、こりや正月飾りの裏白ぢやないか。』『そいつがもとは金だつたのさ。』『へゝえ。』『はて、金がかへれば裏白ぢやないか。』

水島爾保布

父近藤勇の最期を見る

近藤勇五郎 談
近藤潔 記

近藤勇五郎翁

慶應四年四月二十五日の朝。

義母（近藤勇の妻つね――清水家臣松井八十五郎娘、明治二十五年七月二十一日五十六歳で病歿）の云ひつけで板橋まで義父の安否を訪ねに行きました。

その前夜はどしや〳〵降りでしたが、明け方から止んだ様子で、珍しい晴れ上つた空で、一寸歩いても汗ばんでくる位暖かだつたと覚えてゐます。

その頃私は勇の娘で後に私の家内になつた瓊子（當時七歳――明治十九年六月二十七日二十五歳で病歿）と義母の三人で中野村の成願寺といふ寺に隠れてゐました。

そこへ勇の門人で江戸與力の福田平馬といふのが、

『どうも先生は官軍に捕へられて板橋の問屋場に監禁されてゐる様です。』

と知らしてくれました。

只問屋場にゐるらしいといふ程度の事は、その前にもうすうす風のたよりに聞いて、三四度行つて見たのですが、兎に角もう一度――といふ事で、その朝早く家を出たのです。

私は當時十八歳で刀一本さゝず隠れる様にして行くので、恐い恐いと思つてゐるせゐか、度々來てるんだがさつぱり問屋場の様子がわからないので、その附近をウロ〳〵してゐますと、

『今日は立派な旗本が斬られるらしい。』

といふ話をしてゐる者があるんです。

私は、

『はゝあ義父だなッ。』と直感しましたので、その邊をまご〳〵して尚よく確めたいと様子を見てゐますと、わい〳〵と云ふ聲と一所に誰か引立てられて來ました。胸をワク〳〵させながらそつと覗いて見ると、それは人違ひでした。

お晝少し前に山駕籠が一挺廣つぱの方にやつて來ました。駕籠の前後を三十名許りの鐵砲隊が嚴重に守つて、隊長らしいのが一人、六ケ敷い顏をして馬に乘つてついてゐました。駕籠の中をよく〳〵見ると確かに義父勇に相違ない、顎ひげが少し延びて、江戸の家に居たとき着てゐた龜綾の袷を着て居ました。

何んだか、目の前が暗くなつた樣な氣がしましたが、强ひて元氣を出して、その駕籠にどん〳〵ついて行くと庚申塚の原へつきました。

見ると大變な人群りで、人をわけてのぞいて見ると、もうちやんと穴が掘つてあつて、新しい莚が敷いてあります。

こゝで駕籠が止つて義父は靜かに下りましたが、莚の上に突立つて、帶の處へ手をやつてシバラク江戸の方の空を眺めてゐた樣です。

近藤勇

どうした譯か、その日に限つて素足だつたことをよく覺えてゐます。

駕籠の中で髭をそつた話はよく傳へられて居りますが、あれは本當です。

間もなく、義父は傍の武士に、

『長々御厄介に相成つた。』

といふ挨拶の聲がハツキリと聞えました。

刀を持つて義父の後に立つた少し痩せぎすな丈い高い四十一二の武士が、馬鹿に憎らしく見えましたが、もう一人の方は二十の上を漸く二つ三つも出たかと思はれる位の若い綺麗な武士で、白地に見事な墨繪をかいた陣羽織を着てゐた樣に覺えてゐます。

その丈の高い方の人が斬首の用意をすると、義父は自分で髻を並の方に持ちあげると同時に、

『やッ。』

と氣合で見事に一太刀で斬つたらしく、何んでもピカツと光つた樣に覺えてますが、その時は、私は一目散に五里餘りの道を、上石原の宮川家（勇の生家。勇は宮川久次郎の三男で天然理心流近藤周助邦武に所望されて養子となる。宮川家は現在も土地の豪家で勇の長兄音五郎の血統がつゞいてゐる）へ飛んでゐました。

落付いて考へると、首を拾ひあげて、新しい手桶でこれを洗つてゐる――處までハツキリ見た樣にも覺えてゐますが、何しろまだ十八で膽つ玉も据つてゐなかつたのは事實でした。

上石原の方はひどい田舍道で、私が上石原の家へついたのはもう六つ半刻（午後七時）でしたから、田舍の百姓家はみんな寢てゐました。

泥だらけの顏や姿で、中野に居る筈の私が、

『大變だ〳〵。』

と戸を叩いて騷ぎ立てたので、さア家中が大騷ぎで私を取卷きました。

『今日、板橋で義父が首を落されたッ。』

と詳しく話すと、ワツと云つて聲をあげて泣立てるものもありました。

その夜の中に中野の義母にも知らせ、與力の福田さんへも知らせて、先づ佛壇にお燈を供へ、御線香まであげてる内に、夜が白々と明けて終ひました。

追々親類の者なども集つて來て云ふのに、『たとへどんな御科めがあらうとも先生の身體をあんな處へあのまゝ埋めて置くわけには行く

まい。』といふので、いろ〳〵相談の結果、『首を持つてくるといふ事は面倒だが、何んとか金でも使つたらうまく持出されぬ事もなからう、兎に角俺が手配をして、ぜひお身體だけでも先生の生れ故郷へお連れせねば、吾々門弟としての義理が立たぬ。』と勇の道場世話役寺尾安次郎さんといふのが云ふものですから、斬首の翌々日の晩、寺尾さんを始め勇の一番上の兄、つまり私の實父音五郎、それに親類の宮川彌吉と三人で板橋に乘り込みました。

寺尾さんは田安家の御家來で腕も出來たし、日頃から大變親切な方ですから、萬事お任せする事にして、私達だけその夜は旅籠屋に泊りました。

翌二十八日の朝早く寺尾さんがやつて來て、

『大變都合よく行きましたよ、今夜五つ（八時頃）頃に先方に着く樣に出かけませう。』

サア、お蔭で義父の身體を迎へる事が出來ると思ふと、その日が馬鹿に長くて、夜になるのを待ち兼ねたもんですから、早速、四角な箱（これは棺箱で桶ではないのです）荒菰等を用意して、一寸見は何かの荷物の樣に見せかけて、板橋の刑場へ出かけました。

眞つ暗な夜で、たつた一つだけ私が提灯を下げて、みんな默つてトボ〳〵と歩いたものです。

どうも無氣味で今思ひ出しても、かう襟元がゾク〳〵する樣な氣がします。

それに今でこそ賑やかですが、何しろ七十年も前の事で、しかも宿外れの廣い原つぱの向ふにたつた一つの小ちやな小屋があつて、こゝが番人小屋です。寺尾さんが先頭になつて、その小屋をたづねて番人を呼び出したのです。

父の音五郎が何かかう一生懸命に御禮を云つて包金を出した樣でした。これは寺尾さんの指圖で三兩だつたさうです。

眞つ暗な處でハツキリ判りませんが、縞の着物を着た瘦せた男で、受取るとペコ〳〵頭を下げて、私達を勇を埋めた處へ案内してくれました。

提灯の灯で見ますとまだ土の色が新しいし、二十五日の當日に私がよく見ておいた附近の樣子でスグ判りました。

寺尾さんは前にも云ふ通り格式の御武家ですから、いつ迄もこんな處にマゴ〳〵してゐて、萬一目付かる樣な事でもあつては——といふので、父と話し合つて、

『ではまア氣をつけてやんなさい。』

と云ひ殘して、提灯も持たず一人で江戸の方へサツサと歸つて行きました。

サア私達だけになると、なんだかかう大きな事件でも突發する様な氣持がして、胸がドキ〳〵して――この時の氣持なんてものは、私の八十餘年の永い生涯にタツタ一度しきやア味はなかつた怖しい氣持でした。

　用意した鍬で土を二三尺掘り下げると、新しい莚が一枚出ました。

（近藤勇の墓碑）

　これをはねのけるとその下に死骸があつたのです。提灯で照して見ると、胴體だけがかううツ伏になつてゐるのです。

　斬られる時には、確かに龜綾の袷を着てゐたのに、これがどうしたものか白い肌着一枚と下帯一本の姿なので驚きましたよ。

『着物がない。』

と私がウツカリ大きな聲で叫ぶと、父の音五郎が手で制して、

『默つてゐなさい、こりやアお前番人達が、土をかぶせる前に剝ぎとつたんだよ。』

と云つて、別に氣にもしませんでした。

首がなくても京都の墨染で、元參謀職をした伊東甲子太郎の殘黨に擊たれた左の肩の鐵砲傷の痕が、只今の丁度一錢銅貨位の大きさなのですぐ判りましたよ。

　棺箱へ入れる時に、何しろ斬られてから三日目といふのでズルズル皮がむけて困りました。

『おゝ殘念だらう〳〵。』

　さすがの父も泣き聲で喚くので、私も思はず聲を出して終ひました。

　三時間ばかりでスツカリ包んで、その時分からぽつぽつ雨のおちて來た中を大急ぎで上石原の家へ戻りました。江戸の空がポツと眞赤になつて、足音がピシャピシャ響く、何んとも云へない淋しい夜でしたよ。

　首のないその屍を埋めたのが今の上石原龍源寺――これは菩提寺ですからその裏にある『近藤勇の墓』がさうです。心勝院大勇儀賢居士といふ戒名です。

　今考へて見ると、まるで夢の様な話で、隨分變つた世の中になつたものですね。

　註、勇五郎翁は勇の長兄音五郎の次男で、つまり叔父のひとり娘瓊子の夫となつてその家をついだのですが、少し中風の氣

味ではあるけれども今も尚調布町上石原に八十三歳の長壽を保つてゐられます。瓊子は二十五歳で若死をし、二人の間に久太郎といふ子があつたが、これは日露戰爭で戰死しました。後添との間の新吉氏は目下府中警察署勤務。父に代つて理心流五代の道場撥雲館に集る青年に教授をしてゐます。

板橋で斬られた近藤勇の首は鹽漬になつて京都へ運ばれ、三條磧へ晒され、後粟田口の刑場へ埋められたといふ事になつてゐるのですが、事件後間もなく勇の賄方をしてゐた忠助といふ者が、夫婦で一生懸命に探し、後年にも、勇を追慕する人達が、更にどう探しても、行衛を知る事が出來なかつたのです。一説には、大阪の千日前にも晒されたと云はれてゐます。

——をはり——

さしゑ——小山榮達

珍聞話の種

●冒險好きのキユバの土人は、七十五尺もある椰子樹の上から、同樹の葉を羽代りとしてフワリフワリと飛び降りる。落下傘の元祖だらう。

●氷點下五十度にもなるアリユーシャン群島の土人には、雪と氷との寒風の十二月に、素ツ裸でダンスをやる風習がある。つまり日本の盆踊みたいなもの。炬燵もぐりの人に聞かせたい話。

●阿弗利加象の射止められる頭數は年々四萬乃至十萬以上といはれてゐる。二本の象牙があるばかりの此の犧牲。彼等は土人を見るとゾーとするさうだ。

●東京の人達は一日に、鷄肉を約一萬羽以上も食べてゐるが、其の三割は京橋日本橋の兩區だけで捌けて行く。今年は酉年、一層食べるかも知れぬ。

●運送屋さんでは豆撒に『福は内、鬼も内…』と云ふ家がある。即ち『鬼も内』は『大荷も内』の意味である。聞いて見れば御尤も。

先哲酒訓

○おもしろの酒宴や、本心を失はぬほど。（小早川隆景）

○酒と色とは敵とするべし。（水戸光圀）

○興に乘じて酒を呑めども、酒に乘じて興を呑む事なかれ。（平賀鳩溪）

○酒は膳の前後をすべて、三盃を過ぐべからず。（横井也有）

○酒は飲むべし、飲むべからず。（太田南畝）

藝界噂

時價五萬圓の時計

『世界で一番高價な時計を持つてゐるのはわたしよ!』

と物凄い大見得を切つて、最近米國の富豪連を煙にまいてゐるのがワーナー社の人氣女優バーバラ・スタンウイック孃です。それはポーランド王が嘗て所持してゐたとか云ふ曰く因縁を持つた、時價正に一萬弗(約五萬圓)と云ふ素晴しい時計なんです。寄贈者は?なんて心配する人もありませう、が、それは彼女の最愛の夫フランク・フエイ氏ださうですから御安心下さい。

明石屋憤慨

大谷友右衞門が泊つた京都の宿屋へ泥棒が入つて、宿泊人の金を大分盗んで行つたが、不思議に友右衞門は一文も盗られなかつた、否、盜られなかつたのではない、明石屋其晩は一文も持つてゐなかつたのだ。

目を覺した友右衞門、何心なく枕元を見ると、小さな紙片に何か書きつけてある。

讀んで見ると、

友右衞門金が無いので好く眠り

とあつた。

『ば、馬鹿にするなッ。』

國籍不明のグレタ・ガルボ

世界最大の映畫女優と迄云はれてゐるグレタ・ガルボ孃の嘗ての愛人故モーリス・シナルラー監督の莫大な遺産が、此程彼女に渡される事になつたが、さてシナルラーは人も知る瑞典が生んだ世界的名匠、財産管理人は彼女の國籍が瑞典でなければ遺產は渡されぬと我ン張つて居る。處で彼女は瑞典に生れてポーランド、獨逸、フインランド等に住み、トルコで故監督と相愛の仲になり、最近はずつと米國で働いてゐるので、果して彼女の國籍が何處にあるか更に判明しない。そんな騷ぎには馬耳東風のガルボ孃

『國籍の事などうるさく聞かなくたつていゝでせう。わたしは世界人よ!』

と許り絕對に語らない。さて〳〵ガルボ孃の國籍を御存知の方はありませんか?

不死身(伏見)姉妹

日活の人氣女優伏見直江、信子姉妹は、いよ〳〵脫退して、信子は蒲田に入り、直江は實演の舞臺に立つてゐるが、この姉妹、生れる時は違つても、死ぬ時は一緒よ、と、いふ位仲がいゝ。直江が父の三郎と共に舞臺に出

てゐた頃、信子も三歳でお父さんに抱かれて舞臺に出て以來、最初の帝キネ入りから日活へ、日活から松竹へまで一身同體といふ仲のよさに、蒲田の六車次長感心して、

『全く切つても切れぬといふのは、あの姉妹さ。』に、清水監督、うつかり、

『成る程。』と、云へば、

『不死身（伏見）姉妹だもの。』

子供は正直

同棲生活で、村田みね子の美津子が、上等のロースをみやげに持つて來て、八重子の倅子と色氣はなれて仲よく食べて、みね子は歸つて了ふ、後で八重子が引續いて芝居をしてゐると、段々鍋が燒付いて、こげくさい匂が客席に漂つて來る、前の方にゐた十位の女の子、母親に、

『マヽ、あの人馬鹿ねえ、お鍋が焦げついてゐるぢやないの……』

と大きな聲。

世界一の人氣者は誰か？？

世界で一番フアン・レターを貰ふ人？

最近世界映畫界第一の人氣者は、米國パラマウント社の漫畫の主人公ミッキー・マウスといふあの可愛らしい鼠と判明した。

と、云ふのは、この漫畫を書いて賣り出したウオルト・デニー氏は、最近一年間に全世界のフアンから約八十萬通の手紙を受取つたといふのである。一年に二十萬通のフアン・レターを貰つた往年の人氣女優クラ・ボウ孃も、あの可愛いゝ鼠には及ばないわけだ。

嘘ばつかり

田之助の與三郎、松莚のお富で玄冶店を出す前の事、そこは兄弟、一つ屋根の下に住んでゐる重寳さ、時とんぼなしに稽古が出來る。

『おかみさんへ、お富さんへ、いやさお富、久しぶりだなア。』

と田之助が云へば、新參の女中腹を抱へて笑ひ出し、

『まあ、いやな若旦那、けさも一緒に御飯を上つた癖に、久振だなアなんて、オホヽヽ。』

幕末小説

義賊男裝女裝

前田曙山
苅谷深隍畫

白晝飛道具の脅迫

文久年間の京都は、勤王黨と幕府方との黒烟立つた火を摺る爭そひ、夫に加へて旨い事づくめの公武合體を唱へたり、異國恐怖の開國互市を叫んだり、各自に勝手次第の議論をするのが、いづれも認識不足から出發してゐるから、宛ら鼎の沸くが如く、剰さへ直接行動の暗殺、斬つたり斬られたりの上に、不思議な盗賊が横行するので、天朝御膝下の町人は、生きた心地もなく竦え上つて居ました。

時は文久三年の春、世は苅薦と亂れても、花は年々歳々時を違へずして、祇園の糸櫻は、蒼い空から瓔珞を下げ、赤前垂の甘い女の聲が、媚めかしく浮かれた魂を喚むで居ます。其笑ひさゞめく表面を見ただけでは、世の中が行詰り、血なまぐさい雰圍氣がのた打ち廻つてゐようとは考へられません。

三條通寺町上るの兩替屋、公儀御金御用達の丹波屋甚左衛門の表座敷に、主人と對坐して居るのは、町奉行組下の與力で、勤王狩の鬼と呼ばれる梶山傳藏、祿高は百俵に過ぎぬけれど、所謂役徳といふ袖の下の行渡りで、裕福な暮しをしてゐるだけ、五分もすかさぬ身の廻り、小氣の利いた拵らへといふのが、武士の端くれには不似合でした。

「然らば御用金は、相違なく今日中に御奉行所へ屆けるやうにして貰ひたい。明日の朝御入用との事だから、どうでも今日中でないと宜しくない。」

所司代や町奉行所の御金御用を仰せ付

かる毎に、丹波屋の身代が太ると共に、梶山も其匂ひを嗅いで身に濕ひが附くのでした。

『ハイ〳〵、承知致しました。恰度鴻池の方から、今朝廻送して參つた千兩金、其儘手を附けずに有りますから、それをそつくり差出しまする。』

『然し白晝とはいへ、大金の事であるから人目に立たぬやうせぬと不用心で御座るぞ。……例の勤王義賊の奴が横行するによつて、覘はれぬやうしたがよい。』

勤王義賊といふのは、此頃京中の分限者を襲つて、根こそげ金品を奪掠する恐ろしい一團であります。しかも彼等が押入る先は、寺院といはず、武家屋敷と言はず、凡そ幕府方に深い緣故を持ち、關東公儀の息のかゝる處に限るので、其徒黨も多き時は七八人、少なくも三四人、風の如く來り、風の如く去り、一人たりとも召捕れぬのであります。

『手前共では用心の爲に、劍術つかひを兩名賴むでありますで、マア安心はして居りますが、どうも困つた事で御座います、中々御手當になりませぬさうで、御役人方も御苦勞な事と、憚かりながらお察し申上げます。……矢張噂の通り、寺町樣が徒黨の尻押をしておいでになりますかな。』

『拙者の睨むところでは、尻押どころではなく、盜人の頭はあの惡人の少納言で、自分が先に立つて押込を働くに相違ないと存ずる。』

『いやもう恐ろしい事で御座います、堂上の御公卿衆が押込强盜とは。……世の中はワヤで御座いますな。』

二人の話題になつた寺町少納言といふのは、名を泰知卿と呼ばれ、勤王無二の忠節を以て、窃かに勤王浪人に推され、武家を滅ぼして、大君の御世の光を仰ぐべく、密々計畫したのが洩れて、危ふく召捕られようとしたが、巧みに公儀役人に目鱠を食はせて、跡を晦まして了ひましたが、それから一月ほどしてから、勤王義賊と名乘るのが現はれたので、誰いふとなく、其首魁は少納言だと極められて了ひました。

町奉行所では、草を分け瓦を起して、少納言の行方を探るが、天に翔つたか、地に潜り込むだか、全く地上から姿を消したのですが、勤王義賊の被害は、頻々として各所から訴へ出られるので、所司代では町奉行の詮議手ぬるしとして、其頃出來た京都見廻組や新撰組に吩咐て、町奉行とは別途で、勤王義賊を追廻させたが、依然として影だに摑めぬのみか、反つて彼等の狼藉が烈しくなります。

『然し丹波屋さん、見て居なさるがよい、寺町少納言は必ず拙者が召捕つて見せる。……見廻組だ新撰組だと言つて、劍道は

達者かも知らぬが、刀で賊が召捕れるものではない、素人がヤキモキ騒いでも、詰りは勞して効なし、矢張餅屋は餅屋だでな。』

所司代から直々に、見廻組や新撰組に加勢を命ぜられたのが、町奉行所の權威を潰され捕吏の顏を潰された心地がして、内心不愉快でならぬのです。

『御尤もで、永年馴れて居られる途は別ですからな。……隨分毎日のやうに、怪しい者が引立てられると聞きますが、其中に勤王義賊の手下は居りませんので。』

『左樣、少しでも上の御不審と睨む奴は、片端から引上げて、嚴しい拷問にかけるが、どうも本物は引かゝらぬらしい。』

『然し梶山さま、餘り嚴しくなさると、下らぬ怨みをお受けなさると宜しく御座りません。』

梶山が世間から不評判で、多くの人の怨みを受けつゝあるのを、丹波屋は氣支つてゐました。

『いや、もう受けてゐる。勤王義賊の名前で、拙者に天誅を加へるなどいふ書面が、度々屆くのぢや。』

梶山は大勇に笑つたが、其脅迫の書面といふのが、奉行所詰所の机の上に置かれてあつたり、思ひもかけず袂へ入つてゐたりするので、内心薄氣味惡くない事もないのでした。

『いや大分長話を致した。然らば御用金は成るべく早く屆けるやうに。』

梶山與力が雪駄をチャラ附かせて歸つて行つたのは、未刻(午后二時)少し廻つた頃でありました。

『サア〳〵皆手傳つてな、其金箱は菰包にして、手車へ載せて行くのだ。お急ぎの御用だから。』

甚左衞門が店へ出て指揮をしてゐる處へ、外の千本格子を明けて、ドヤ〳〵と入つて來た六人の異樣な風態、眞晝間だといふに、覆面をしたのもあれば、顏中熊のやうに毛を生したのも有る、一目に知られる曲者ではあるが、白晝といひ、京の目貫の三條通り上つた處に、押込が入らうとは、夢にも思はなかつたのであります。

『神妙にしろ、我々は勤王義賊だ。』

首魁と覺しいのは、撫肩の小柄の男で、目ばかり出した覆面の僅かに洩れるところでは、女よりも色の白い優男、白小倉の袴に無紋の羽織、夫を守護するやうに取卷いてゐるのは、鬼をも一挫ぎにすべき屈竟の大男達でした。

アッと言つたなり、主人が竦み上つて、ガタ〳〵震へると、店の手代達は他愛もなくヘナ〳〵と腰を拔かして了ひました。

途端に奥から飛び出して來た二人は、用心棒として、豫かじめ雇ひ込むで置いた自慢の劍道者。

『貴様等、見損なつたか。』

大喝一聲、拔討に斬つて懸るべく、刀の欛へ手をかけると同時に、二人ながら其儘居竦みにタジ〳〵と下りました。

優男の首魁の右手には、種ケ島の懐鐵砲が、物凄い筒口を明けて、ジツと見つめてゐるのです。其外の手下達、いづれも飛道具を差附けましたから、さしもの劍客も、苦しい唸りを搾り出したまゝ、立往生をして了ひ、主人や手代達は、土氣色になつて、生きた空も有りません。

『此繩で其二人を縛りなさい。』

首領の決然たる命令は、無慙にも丹波屋の主人に向つて發せられました。

『へエ〳〵其どうも、命ばかりはお助けを。』

『其者を縛れと申すのぢや。』

筒口は主人の眼の動くに從つて覘け廻します。言ふ通りにしなければ、火蓋を切つて此世から彼世へ一足飛に消し飛ばねばなりません。用心棒の劍道者は、眞赤な顏を熱沸させ、ダラ〳〵と膏汗を流してゐます。

主人甚左衞門は飛道具に物を言はれて、是非なく自分の用心棒二人を後手に縛りました。自分が用心に雇つた者を、自分で縛

るのは、我と我身を自滅させるのですが、今更如何ともされません。劍道者も平生大言壯語して居ましたが、飛道具の脅威では、赤兒よりも脆く扱はれて了ひます。

『今度は貴樣だ。』

手下の一人がヌッと蹈出して來て、甚左衞門を括し上る間に、外の手代達も、他愛なくグル／＼巻にされた上、いづれも猿轡を嵌められましたが、意氣地の無い事、馬鹿々々しい位でした。

『サア皆其戸棚へ入れ。』

一人々々戸棚へ突込むと、板戸を引いて、外からピンと錠をかけて了ひました。もう動きが取れません、高い給金で用心棒を雇つたのは、何の爲だつたか解らない。

暫らくして、隣から用事で來た者が、店の樣子を不審に思つて、始めて戸棚の人の氣配に氣が附き、戸を破つて引出した時には、千兩箱は店の眞中に有つたけれども、中味は片ら一枚も無い全くの空箱、勤王義賊は例によつて風の如く來り、風の如く去つたので、然も白晝の盛り場で有りますから、其大膽と機敏さは、神樣でも不可能な藝當でした。

見張所脫出の詭計

白晝押込の丹波屋の騒動は、京都警備の役人達を震駭させ、上殿上の人々から、下辻々の町人までを震ひ上らせまし

た。況して奪ひ取つた大金が、公儀御用金だつたから、幕府の威信にも拘はる椿事です。與力梶山傳藏の如き、自分が丹波屋の店を立出ると、殆んど同時の出來事でしたから、地鞴踏むで躍り上り、齒を噛むで口惜しがり、必らず此賊を我手で召捕るやうにと、男山八幡宮に必死の祈願を込めた位でした。

　奉行所では寺町少納言以下の賊徒が、洛中に潜伏してゐるものと見込み、高飛を防ぐ爲に、新に見張所を八方の街道筋に設け、上下の出入を嚴重に警戒しました。

　伏見口の見張所には、腕つこきの同心物集久五郎が、二三人の手先を從へて、凄い目を光らして居ます。伏見は大阪への通路で、大切な街道、人の往還が烈しいから、少しも油斷がなりません。

『旦那、御骨折で御座んすな、大抵ぢや有りますまい。』

　此見張所へ來て聲をかけたのは、目明親分の猿眼の佐兵衛、其頃押小路の文吉といふ目明と列むで、京都では屈指の親分でした。

『ヤア佐兵衛か、手前も探索で根氣が勞れるだらう。どうだ少とは當りが附いたか。』

　物集同心は苦り切つたやうに下唇を反らして、スパリ〳〵烟草を吸ひながら、話の中にも往還から目を放しません。

『どうも皆目なんだから弱つて了ひやす。それに旦那の前だけれど、俺にや腑に落ちない事があるんで。ねえ旦那、寺町少納言といふのは、上丈が五尺六七寸も有つて、大々した恰幅の大男だといふんでげせう、夫だのに今度丹波屋へ押入つた盜人の頭といふのは、五尺一二寸漸くの丈で、女のやうな撫肩の優男、覆面越の眼元といふのが、何とも言へない良い眼附、丸で俳優のやうだといふぢや有りやせんか、さうすると、丹波屋へ押込むだのは、寺町少納言ぢや有りやせんね。』

　猿眼は此疑問を第一に解決しなければ、盜賊の詮義が困難だと考へるのでした。

『ウム、其處もあるが、寺町少納言がそんな大男だつたかどうか、御奉行所の方ぢや、誰も前に逢つてる者がない、只御所向から聞いた人相書なんだから、間違がないとも限らぬぞ。』

　九重の宮中と公儀役人とは、緣が近いやうで、實は百萬里も懸け隔たつて居るから、動かぬ眞相は容易に攫めないのです。

『間違なら可いが、間違つて居ないとすると、寺町少納言が二人出て來た事になりやすから、此捕物は愈々以て諄う御座りやすぜ。』

『だから俺も其氣で頑張つてゐるんだ、外の見張所は知らないが、此處ぢや蟻一匹でも見逃すんぢや無いから、此方角から逃

げ出さうたつて、それは出來させないぞ。』

自信の強い物集久五郎は、外々の見張所が、賊の詐瞞にかゝらねば可いがと思つてゐます。

『旦那が見張つて居なすつちや、彼奴等だつて命が怖いから、通りはしやすまいよ。』

『俺は通つて貰ひたいのだ、屹度見顯はしてくれる。……時に佐兵衞、手前は何處へ行くのだ。』

『なんだか南の方に、怪しい奴が隱れてゐるといふ事ですから、一つ中書島の方へ伸して行かうと思ひやす。』

『何にしても、曲者は此方の手で上げざアならない、見廻組や新撰組に捕まへられたら、御奉行所は鼻を明かされるんだからな。』

『さうですよ。……梶山の旦那も、八幡樣へ願掛してゐなさる位だから、屹度此方の手で遣附けられやせうよ。』

『どうか左樣したいものぢや。』

佐兵衞が出て行つてから半時ばかりすると、三人ばかりの侍が肩臂怒らして遣つて來たが、見ると一人の安浪人らしいのへ、腰繩を打つて引立てゝ居ます。

『手前は洛中見廻組の木崎源之進と申す者、御手前が當所の宰領でゐなさるか。』と、ぎごち無い横柄な言ひやうです。

『如何にも、申遲れましたが物集久五郎と申し、昨日から當所へ詰め居る奉行所役人で御座る。』

『それは御苦勞千萬。此處に召連れたは、丹波屋押込みの賊の一味、召捕つて傷め吟味にかけた處、頭と戴く曲者が八幡近くに潜伏致し居るといふので、只今より此者を見知り人、又案內人として引立て參るので御座る。』

『それは一段と御苦勞、折角御大切に。』

口では言ふけれども、內心は面白く有りません。奉行所で手に合はなくて、素人の見廻組に捕へさせたといふのは、上役人の不面目で、世間へ顏向けもなりません。

『物集氏、此度の賊は容易ならぬ曲者で御座るし、同類も多い事だによつて、如何なる巧妙の工夫を凝して、此處を脫出ようとするか存ぜぬから、必ず油斷なさらぬやうに。』

『辱じけなう御座る。』と色代したものゝ、物集は益々面白くない、素人から捕物の說教を聞かされるやうになつてはお了ひだと、忌々しくてなりません。

『御念には及びませぬ。當見張所は手前が預り居りますでな。』

見廻組が出て行くと、物集は後で唾を吐きました。生意氣な野郎だ、釋迦に說法といふ事を知らぬかと、一人で力み返つて、

不愉快の暗雲を拂はうとして居ました。

春の日が長いとは言ひながら、西山が紫に仄めいて、薄ら寒い風が音もなく薄暮の寂しさを誘つて來ます。曲者が見張の隙を窺ふのは、大方夜陰を利用するのだから、之からの見張が大切です。

『當所は物集氏が預り居る筈ぢやが、見張所を明けておいては、役義粗漏と申すものぢやぞ。』

表で呟やいて居る樣子は、上役の見廻りに違ひないから、物集は辨當の箸を擲り出して出て來ました。

『拙者梶山ぢや。』

『へーどうも、只今一寸食事をして居りましたので。』

梶山傳藏は明るい方を背にして居るので、顔はよく見えませんが、物腰恰好といひ、聲柄といひ、紛れもないから、物集は其處へ畏まりました。

『早速尋ねるが、先刻當所へ一人の男を縛して、引立ながら通行した武士は無かつたか、如何ぢや。』

『ハイ、一刻ほど前に、京都見廻組木崎源之進と名乘る方が、下の方へ通行されました。』

『ウム、通つたか。』

梶山は滿身の溜息を肩口に凝して、ウームと強く唸りました。

『如何致しましたか。』

『如何ではない、見廻組などとは眞赤な僞りぢや。勤王義賊の一味が、左樣な事を申して當所を欺むき、貴公の目を晦まして逃げ去つたのぢや。』

物集は二つの耳がグワンと鳴つたなり、大砲の音も聞えなくなつたやうな異常の感じに襲はれ、フラ〳〵と腰の番が弛むで來ました。

『あの木崎源之進といふのは僞者で。』

『元より。……召捕つたといふ賊も案山子だつたと心附かむのか、迂濶千萬な事、貴公は同心中でも權者であらつしやるが、何といふ手ぬかりをさつしやつた。申譯は立つまいが。』

『何とも早。』

物集は騙された無念の怒よりも、差當つて我身の落附が心配になつて來ました。御役御免差控へとなつては、人間の廢物となり、妻子の干物が出來るではありませんか。

『それにしても、曲者は首尾よく貴公を誑らかしたと思ひ居るであらうから、案外急ぎもすまい。足取りが解り居るによつ

て、これより後追駈けて召捕つて吳る。上役人は皆盲目と存じ居るのぢや。』

梶山の顎の指揮で、七八人の手先はバラ〳〵と駈け出しました。

『賊は如何にも惡策に長けて居るによつて、最早明朝まで何人も通行さしてはなりませんぞ。』

散々に叱られて、物集は落膽して了ひました。空しく梶山の後姿を目送したまゝ、ぼんやり口を明けた儘立つて居ます。猫の子一匹通さぬと豪語した新關は、マンマと勤王義賊の一味を、色代して送り出したのであるから、氣が拔けたも尤もです。

色年增の道伴

年倍ながら小粹な扮裝の侍が、美しい娘と、山出しの仲間を連れて、伏見街道を稻荷の方へと歩いて來ました。勤王義賊の爲めにすつかり神經をいためつけられた梶山親娘です。

春の日は夕暮かけて媚めかしい程なごやかで、骨も肉も自然と鞣されて來るやうです、柳が招けば櫻が媚る、尖つた人心も、自と圓く滑らかに伸びて行きます。

此二人の後になり先になり、一人の粹な中年增が、姉樣かぶりの手拭に、結ひ附け草履の旅姿といふ程でもないが、一里や二里の道をめざすのでは無いらしく見えて、話相手もない心淋しさに餓ゑて居るらしく、トボ〳〵と步いて居ます。

齡は二十歲の上を、もしかすると三つか四つ出て居るかも知れぬが、眉毛落して鐵漿附けたのが、目もさめるやうに鮮やかで、女の妙なる旨味が、身體の軟かい線から零れ落ちさうなのを、梶山はヂロリ〳〵と好もしく橫目で見ました、女も何となく慕はしさうに、時折梶山をぬすみ見ます、其しめつぽい眥を受けると、梶山は天窓の腦天から臍の奧の丹田まで、金の針を突徹されたやうな、痛いながら快い魘えに襲はれました。

町奉行附の與力で、盜賊改めの恐い役目を持つてゐるけれど、此道にかけては、藁で縛つた海鼠のやうな梶山は、夢中に逆上た胸が、聞分もなく轟き出します、然し、生憎娘を連れて居るので、親の威嚴を保たねばならぬ爲、靴を隔てゝ痒きを搔く物足なさにヂリ〳〵しました。

年增女と前後して四五町來たところで、娘は俄かに胸へ差込むと言ひ出しました。

『オウ痛い、キリ〳〵突上げて來て。阿父さま困つて了ひました。』

『ウム弱つたなお梅。どうだもう少し耐忍は出來まいか。』

『えゝ耐忍してゐるんですけれど、……あゝ痛々。』

お梅は其儘立竦むで歩かれさうにもない。すると仲間が彼方此方を見廻して、

『旦那さま、其處に腰障子が立つてゐるのは、茶店かと思ひます。少し彼處でお休みなすつては。』と指さす彼方に、葭簀を立てかけ、腰障子を篏めた薄汚ない家が見えます。

『オウ、幸ひだ、暫時休息したら納まるだらう。』

急いで茶店へ入つて、投られたやうに、ドツカリと床几に腰を下しました。

『ア痛ツ〳〵。』

お梅はハア〳〵と肩で息をして苦しみます。

『よし〳〵待つてゐなさい、確か持藥がある筈だ。』

侍は腰を撫で廻したが、今日に限つて印籠を忘れて來ました。

『困つたな、生憎合藥を持つて來なんだ。……兵助其邊に藥種屋はないか、捜して來い。』

立つたり居たり忙てゝゐると、侍の後に優しい聲が聞えました。

『モシ、何とぞなさいましたかえ。』

侍が振返ると同時に、男の魂を滅茶々々に揉みくだくばかり、媚めかしい麝香の匂ひと、冠下香の誘惑の薫が、邪慳にとろめいて來ました。

『オウ御身は。』

侍は有頂天に蹈外すばかりです。娘の急病の爲、危ふく念頭から逸し去らうとした旅の女が、いつの間にか此茶店へ入つて來たのでした。

『先刻からお見かけ申したお武家様、お嬢さまがお惡いやうにお見受しますが。』

『少と胸へ差込みが參つて難澁、生憎藥を忘れて當惑しますでな。』

『あゝお差込ですかえ、妾も差込が持前ですから、いつも合藥を持つてゐます。差上げませうかえ。』

『それは辱じけない、御無心ぢやが少々。』

『お易い御用で御座います。……さあお嬢さま召しませ。』

女は紫紺縮緬の小さい巾着から、銀粉を着せた丸藥を出してお梅の掌に受けさせ、肩から背筋へと、優しい手で撫で下げて介抱してくれます。

『難有う存じます、お蔭さまで大層樂になりました。』と、お梅は吻と甦生つた心地になつて、厚く禮を述べ、女も思ひの外早く藥効の有つたのを、我事のやうに喜びました。

『御無禮ぢやが、御身は一人で何れへ參られるな。』

ニヤ〳〵笑ひながら、梶山は親切ぶつて訊ねました。

『ハイ、妾は姉が枚方に嫁附いてゐるものですから、少と急の用事で参ります。』

『左様で御座つたか、然しモウ日暮になつて、之から枚方まで女子の脚では無理では御座らぬか。』

『ハイ、それで先刻から苦勞してゐるので御座います、伏見や中書島へ泊りたくても、女の一人旅は格別嚴しいので、何處の旅籠でも泊めないとか申します。』

女は遣る瀬ないやうな、人狎こい瞳で梶山を見ました。

『それなら恁致したら如何で御座らう。拙者は明朝男山八幡の朝詣をする爲、態と未刻過に京都を立つて參つた、今夜中書島へ一泊する筈ぢやによつて、拙者同伴の積で泊られたら宜しからう。拙者は京都町奉行所の與力で梶山

傳藏と申す者、更々御心配はない。』

『オヤ梶山さままで入つしやいますか、お名前は伺つて居りました、思はないところで御知己になつて、此樣な嬉しい事は御座いません。それでは何卒お供させて下さいまし。妾は二條堀川の染物屋丸三の女主人、後家を立てゝ居りますお小夜といふ者で御座いますから。』

堀川丸三の女主人、今の若さで美しい後家と聞いた時に、梶山は武者ぶるひする程ゾッとなりました。

『兵助、此先に見張所がある、物集が詰めてゐるであらう、乃公が參つたと知らして置け。』

兵助が飛んで行つて、物集に告げると、物集同心は怪訝な顔をして、目を瞬たゝきました。

『成程和主は梶山樣の仲間だが、和主の處の旦那は、半刻ほど前に此處を通つて、南へと下つて行かれ

た。今頃京の方から、お嬢さんを連れて遣つて來よう道理はないわい。』

物集は梶山に叱られた瘡痍がまだ生々しいのに、其梶山が方角ちがひから來る理由がないと、堅く信じてゐます。

『愚言はつしやらねえもんだ、宅の旦那が何で此處を通るものか、俺がお供して、未刻過に京を立つて來たで御座いますよ。』

『貴様お稲荷さまに憑まれてゐるぞ。』

と、物集は天窓へ落ちかゝる稲荷山を見上げて笑ひます。

『何言はつしやる、論より證據、それ其處へ旦那さまが來なすつた。』

兵助に指さゝれて、物集は目前へ迫つて來た梶山の一行を認めて愕然とすると、百千の霹靂が腹の中で轉がり廻るかと驚きうろたへました。

『これは梶山様、いつの間に此方へお戻りになりましたか、少とも心附ませんで。』

梶山が見張所の前を再度通過したのを知らなかつた事は、役義の懈怠として、又一談義聞かねばなりません。

『物集氏、何を言はつしやる。拙者は戻るも戻らぬもない、未刻まで役所で種々の手配や用向を濟ませ、夫から直と此方へやつて參つたのぢや、明日男山樣へ朝詣をせねばならぬでな。』

『滅相な、それは何か御覺え違ひ、尊公樣は夕景近くこれへおいでになりまして、勤王義賊を巨椋の方へ追つておいでになりました。』

『どうも解せんではないか。其人物は確かに拙者だつたのか。』

『生憎御顏は判然と知れませんでしたが、お聲柄といひ、お身體の恰好といひ、何で手前が間違へませうか。』

『間違へぬというても、拙者は始めてこれへ遣つて參つたのぢや。』

『物集の旦那はコン／＼樣に憑まれなすつたぞ。』

兵助は今嘲けられた竹篦返しを聞けがしに呟やいて、溜飲を下げました。

物集同心の腕利自慢も散々になつて、夢の中で引掻き廻される心地、到頭見廻組の通行から、梶山と見せかけた男が、六七人の手先を連れて追つて行つた一伍一什を告げるより外ありません。

『それこそ正しく拙者に似せて、御手前の節穴のやうな眼のくり玉を誑らかしたに相違ないわい。』

『左樣でげしたらうか、尊公樣とばかり思ひ込みましたので、……成程今考へれば、暗い方へ／＼と、顏を向けてゐたが。』

『物集氏怪しからんではないか、前と後と二度の見張所拔けを合せると、どうやら十人位にならう、然らば勤王義賊少納言の一味は、殘らず京を脫出して了つた事になる、何の爲の見張所だと思はつしやる。』

叱り附けられて言句もなく、物集は泣き出さんばかりの顏をしてゐます。どれが眞物だか僞だか、分別が附かなく、頭腦の中が綿屑のやうになつて了ひました。

丸三後家の疑問

伏見中書島は賑やかな町で、媚めかしい紅燈が春の宵にふさはしく點つて居ます、町の家並の店頭には、屋號を記した置行燈が目標になつて、其火影に柳の糸の搖ぐも軟らかい風情の一つです。

梶山傳藏が娘お梅と、京堀川の丸三の女主人お小夜とを伴なつて泊り込むだ家は、高野屋といふ昔からの旅籠で、京まで聞えた店でありました。

お小夜は始めから別室に泊り、お梅も父とは別の部屋を取つて貰ひました、それは梶山が今夜此處へ泊つても、京との連絡

を附けて置かないと、上御用の上に不都合が有つてはならぬから、自然御用向で尋ねて來る人があらう、其用談に娘が同室では、來た方で氣兼があらうといふ遠慮からでした。

果して目明猿眼の佐兵衛が窃かに尋ねて來て、伏見見張所の物集同心が賊徒に欺むかれ、暗々多數の一味を脱出さした手ぬかりなどを、忿激しつゝ罵しつて居ましたが、軈て佐兵衛は聲をひそめて、

『旦那、俺は變な筋合を聞かされたんですが、丹波屋の盗人の首魁といふ奴は、どうも女に姿を變へて、京から逃出したらしいと言ふ事で、此方の見當に巣を拵へてゐるといふから、晝間からかけて、ズツと搜し廻つてゐるんですが、どうも旨く覘ひが附きません。』

『何を言つてゐるんだ、丹波屋の賊は勤王義賊なんだから、寺町少納言に極まつてゐるではないか。』

『へエ、それは左樣で。』

『然らば女になれやうはない、五尺六寸とか七寸とかいふ大男だと申すではないか、彼時丹波屋へ入つた首魁といふのは、五尺一二寸優形の俳優のやうだつたと申すが、それは首魁ではない、首魁のやうに見せかけ居つたので、誠の首魁は反つて手下の風をして居ると、俺は睨むでゐる。然らば五尺六七寸の大男が、どうして女になれようか、考へて見ろ。』

『ですが旦那は寺町少納言といふ人を、見なすつた事があるんでげすか。』

佐兵衛は並大抵の説明では引退る男ではありません。

『いや無い、俺ばかりではない、御奉行附の者は誰も逢うた事があるまい。少納言は武家應待の傳奏のやうな役目でなく、大抵は非役同然屋敷にばかり引籠り、勤めに出ても御書物倉の預かりで、世の中に縁の遠い役目だから、武家の人は出會ふ用があるまい。』

『それでよく五尺七寸で、眼の大きな、色の淺黑い、どんな人相だと、判然知れましたな。』

『其處は御所向へ問合せたからだ。』

『其奴は不可やせん。』と、佐兵衛は首を振つて乘出しました。

『何だつて公卿衆と來たら、人の惡い骨頂で、皮肉の行止りでげすもの、町奉行から少納言の人相など聞合せたら、此方を手古摺せようと思ふから、取つても附かない事を知らせたに違ひありません。』

『ウム、其邊は乃公も考へぬ事はない。』

『さうでげせう、俺が内々聞出した人ぢや、矢張繪にかいた御公卿樣の通り、業平擬きの優男らしいといふ事ですから、女

に化けねえたア極りやせん。』

酷く穿つた佐兵衛の推測に、梶山も少し動かされたらしく、腕を組むで考へ込みました。

『旦那、少納言が女に化けたとすると、京都から逃げ出すばかりでなく、其外に望みが無くちやならねえと思ひます、京都から逃げるだけなら、何も骨を折つて、女などにならずとも、あの悪智慧なら、大して骨の折れる仕事ぢや有りやすまい。……尤も此方でも油斷はしやせんが。』

『すると外に何が目的かな。』

『俺や旦那の首だと思ひやすね。』

『これ脅かすな。』

梶山は少し忙てゝ苦笑をして居ます。嘘にも首を狙はれるといふのは、餘り氣持のいゝものでは有りません。

『彼奴等が目の上の瘤に思つてゐるのは、旦那より外に有りやせん、だから何度も脅かしの書附なぞを寄越したので。……旦那の首を貰ふと言つたら、全く貰ひ兼ないのは彼奴等でげす。……其處で少納言が女に化けたのは、旦那に近よる手段かも知れやせんから、用心にしく事は有りやせん。』

『其心配は難有いが、お粥腹のヒヨロ〳〵公卿などに持つて行かれる首でもあるまい。』

梶山は自分の手で首骨を敲いて、附元氣に豪語しました。

『それで旦那、今夜此處へ連れて入しつた女は、兵助の話ぢや、途中で俄かに連れになつたんだと言ふ事でげすが。』

飛んだ苦勞症の佐兵衛は、人の疝氣を頭痛に病む男だと、梶山は內心苦り切つてゐます。女の事を言はれると、臑の疵をはしで觸られる心地がします。

『いや早飛んだ心配だ、あれは二條堀川の丸三といふ染物問屋の內儀だ。素性がチヤンと知れてゐる。』

『ハテ丸三……あの家は俺も見知越でげすが、あんな綺麗な內儀は居ない筈でげす。』

『內儀と言つても女主人、若後家なんだ。』

『どうも腑に落ちない。』と、佐兵衛が首を捻るのが可笑しくつて、

『よしんばあの女が丸三の女主人でなく、優男が化け込んで居るとして、あんな軟弱い者に、首を持つて行かれると思ふのか、愚々しい。』

頑として聞入れないので、佐兵衛も仕方無しに匙を投げました。成程考へて見ると、ビイドロを逆さに釣つたやうな女が、俄かに悪鬼夜叉となつて、寢込の生血を吸はうとは思はれません。

危ふく救つた父の命

風邪氣味だと言つて、浴は引かなかつたが、綺麗に化粧をした丸三のお小夜は、瓜實顏の中高で、引しまつた丹花の唇、切の長いパッチリした眼、濡烏よりも艶やかな髪の毛、形のいゝ割唐子の髷、細い透き徹るやうな襟筋の色つぽさ、浮ついた男は元より、女さへも思はず見惚れる位の嬋娟さで、茶がかつた六疊の間が、俄かに軟らかく仄めきました。

少しの間に仲睦ましくなつた女同士、梶山の娘お梅は、跫音を忍ばせて、此座敷へ入つて來ましたが、行燈を前にしたお小夜の側へ犇りと坐つた樣子が、只ならぬ氣配だから、お小夜は軟らかに眺めました。

『お小夜さま、妾は內々で貴方に伺ふ事が御座います。』

『オヤお孃樣、改まつて何で御座います。』

『外では有りません、貴方は恁して女姿をしておいででも、誠は殿御で御座いませう。』

靜寂な湖水の表面へ、突如として大きな石を投げつけたやうな詰問、一波は忽ち萬波を展開せねばなりません。お小夜も定めし意外の問に脅やかされるだらうと思ふと、ニコリと笑つたまゝ、何の衝激をも受けたらしくもなく、チンと澄して落着拂つて居ました。

『オホヽ、さう見えますかしら。嬉しい事で御座います。』

お小夜は天で相手にしさうも有りませんが、それなり引退るやうなお梅では尙有りません。

『いえ〳〵お隱しなすつては不可ません。』

『オホヽ、あんまり御無理ぢや御座いませんか、妾を男だなぞと、嘘とお思ひなら、身體を改ためて御覽下さいまし。』

言葉は優しいけれど、お小夜も引けは取りません。兩者は正に正面衝突に及んだのです。

『貴方は御風呂も風邪氣だと言つて、お召しになりません。疑へばそれが第一の怪しい節で御座います。それに貴方を確かに男と見切つて、此宿まで尾けて來てゐる者が御座います。』

『何といふ物好な人でありませう。……そんなに迄して、若し妾が男であつたら、どうするのでせうね。』

『向ふがどうするよりも、貴方がどうするお積で、女になつて此宿へお泊りでしたでせうか。』

お小夜も確かり者なれば、お梅もグイ〳〵詰めて行く利かぬ氣でした。

『妾は男で無いから解りませんよ。』

『妾にはよく解つてゐますけれど。』

『では。』

息づまる程切迫して居ても、女だけに優しい濕ひがあります。

『貴方は女になつて父を騙した上、父の首を討つて怨みを晴す思召しで御座いませう。』

『どうしてさうお思ひになりました。』

『妾は始めに貴方が妾達の後や先になつて、歩いておいでの時から、可笑しいと思ひました。勤王側の人から、憎んで憎んで憎まれてゐる父、これは油斷がならないと感附いたので御座います。それから一つ試して見ようと存じて、妾は急に假病をつかつて、差込むと言

つて茶店へ仆れ込みました。父はそんな事を知りませんから、眞實だと思つて、忙てゝ介抱してくれます、さうすると貴方が、態とお藥を持つて來て下すつて、それを御緣にして、到頭道伴になつて、一つ旅籠へ泊る事になさいました。父は何にも氣が附きませんが、妾はチヤンと見拔いて、胸一つに納めて居ます。今夜貴方は父を討つお考へで入つしやいませうね。』

凄い迄に見透すお梅の慧眼は、照魔鏡其儘、妖怪變化は隱れやうが有りません。お小夜の顏の色にチラリと動搖が見えましたが、直に元の顏色になつて、玉を琢いたよりも美しく照り榮えました。

『お孃樣は一人で考へて、一人で心配を拵へておいでですね。妾が男と見えたら男になすつておいて下さいま

し。妾は事々しい辯解は致しません。』

『では左樣致しますよ。さうして貴方は先立つて三條の丹波屋へ入つた勸王義賊の少納言樣で御座いませう。』

お梅の追擊は益々急になつて、徹底的に息の根を止めなければ濟しません。

『何とでも貴女のお考へにお任せします、假令さうでないと辯解しても、一旦御不審が懸れば、何と言つても公儀では、御承知なく、理不盡に繩を打つて、揚句は拷問でどうでも罪科に墜しなさるのですから、貴女がさう思召たら、お父樣なり、又妾の跡を尾けて來た人に言つて、妾に繩を打つたらよいでは有りませんか。妾は逃げも隱れもしませんから。』

果してお小夜の度胸は、女の持ち合せる仕入物では有りません。

二人の間に一瞬間の沈默がありましたが、それは太古の森林其儘の靜けさでした。

『お小夜さま、もし貴方、妾が貴方を惡く思ふやうなら、始めから窃と來て、このやうな事は言ひません。』

『それでは、妾をどうなさらうと思召します。』

公儀捕方役人の娘として、胸中の善惡がお小夜には俄かに推測されませんでした。

『妾は貴方が父を狙はないと誓文かけて下さるなら、此儘お逃し申します。妾は始めから貴方を殿御と思ひました、雲の上の尊い御身を以て、畏くも四海の君樣へ御忠節、其御志がお傷はしいやらお慕かしいやら、成らうなら此身を御身代り

としても口惜しくないと思ひ詰めまして御座います。』

お梅の目には麗はしい涙が潸々と滲むで、露を玉と長い睫毛に宿してゐます。それは女の赤心を搾つた生々しい精根の滴たりでは有りませんか。お小夜の顏には言ひ知らぬ感動が迷走します。實に二人ながら眞劍の極度に亢進し、人間の純情が底知れずに燃え上つたのでした。

『父は貴方樣の敵でも、妾には大切な親で御座います、何處の國に親の殺されるのを、見て見ぬ振をする者が有りませう、妾は何處までも父の命を助けなければなりません。ですから如何にお慕はしく存じても、貴方樣が父の首をお狙ひなさるなら、憚かりながら、此場で耦刺へて死にまする。それとも妾の悲しい心をお酌み遊ばして、此後とも父をお助け下さるなら、妾は誰にも言はずに、貴方樣を内處でお落し申上げまする。又父にも御役御免を願はせて、勤王方のお妨げしないやうに致させます、これが妾の思ひ餘つた心で御座います。』

お小夜の匂やかな前髮はガツクリと搖れました。心は矢長にはやつても、情にもろい涙は、湯よりも熱く、ポトリと膝の前へ殞ちました、快よい撫肩には、幽かに浪を打ちます。

『あゝよく解りました。もうお梅さま、妾はどんな時でも、自分を全くする途を知つてゐますから、此處へ幾人の捕方が押かけても、少しも困る事はありませんが、それかと言つて、妾が明日の朝まで、此儘此宿に居るなら、明日の朝息の無い貴女のお父樣を見なければなりません。妾は貴女の優しい孝心に感じて、仰しやる通り此處を立退きませう。』

小聲ながらキビ〳〵と冴えた聲で、お小夜はキツパリと言ひ切りました。

『アヽお聞き入れ遊ばして下さいますか。』

『貴女のお父樣は、一生無事でお暮しなさいませう。』

『難有う御座います。それで妾は甦生りました。此御恩は生涯忘れは致しません。』

始めて弱い女になつて泣き伏すと、隱し持つてゐた懷劍が、パタリと疊の上へ落ちました。

『今日の思ひ出に、此匕首を頂戴させて下さいまし。』

お小夜は押戴いて、帶の間へ深く差込みました。

『貴女の魂は、いつも妾の懷にゐると思つて居ます。』

『アヽ勿體ない貴方樣、今お別れしては、又お目通する事は御座いますまいが、關東公儀の御家臣の娘でも、勤王方御忠節の貴方樣を、一時も忘れず思ひ詰めてゐる者の有る事を、時たま思ひ出して下さいまし。』

『お梅さま、もうお別れで御座います。』

『どうぞ御身御大切に。』

二人は手を堅く握り交しました。高鳴る赤い血は、皮膚を透して互ひに通ひ合はねばなりません。

色年増は紛れなき色年増

賑やかな旅籠も寢靜まると、物寂しさは掌を返すやうに襲つて來ます、廊下の有明は幻に點つて、闇いより一層物凄く感じられる、鼠の騷ぐ音も消え、家の棟も三寸下るといふ眞夜中です。佐兵衞は何と梶山を說き伏せたか、二人とも十分に結束して、跫音をぬすみながら、お小夜の部屋の障子を細目に明けました。不意の寢込を襲つて、女と化けた怪賊の張本、寺町少納言泰知卿を召捕る積です。

さしも不敵な曲者も、運命の盡きるところか、妖艶な濡鬢を斜めに、半面を夜着に埋めつゝ、スヤ／＼と眠つてゐます。

二人は默つて目交をしました。燃えさかる功名心は、此怪賊を召捕つて、立身出世をしようと咬り立つのであります。

『御用だツ。』

佐兵衞が眞先に夜着の上から乘しかゝりました。

『アレ、何をします。』

『何も糞もあるか、神妙にしろ。』

グッと手を延して、起きんともがく頭を押へ附けました。

『お前は佐兵衞ではありませんか、何の眞似です。』

金切聲に叱り附けたのは、お小夜と思ひの外、梶山の娘お梅でしたから、佐兵衞はアツと言つて飛退きました。

『お梅、どうして此處に來て居る。』

事毎に鶍の嘴となるばかりですから、梶山はもう手も足も出ず、呆氣に取られました。

『お父樣、どう遊ばしたのです。妾は先刻お小夜さんが、どうしたものか寢附れないから、座敷を替へては貰へまいかとお言ひだから、取替つこをして臥つたのですよ。ですからお小夜さんは、妾の座敷で寢て居なさいませう。』

『それツ、ぬかるな。』

聞きも畢らず、二人は取つて返して、お梅の部屋へ飛込むで見ると藻拔の殼。

『サア家探しだ。逃してなるものか。』

佐兵衞が躍起ともがいて、廣い旅籠屋を座敷から物入れまで一間も殘さず檢ためたが女の姿は有りません。

『また取逃したか。』

落膽氣拔して、梶山が悄々と己が部屋へ戻つた時に、思はず悲鳴を上げて驚きました。彼が座敷へ置いた荷物から懷中物、

羽織袴、凡そ梶山の身に附く程の品は、何一つとして塵葉も止めず失せて居ます。

『ウーム、畜生め。』

切齒をして唸り續ける處へ、澁い泣顔になつて飛込むで來た猿眼の佐兵衛。

『旦那偉い事になりやした。俺は懐の紙入から手拭まで、一切合切掻浚はれて、天上天下無一物になつてしまひやした。あの阿魔が行がけの駄賃に持つて行つたんで、これぢや京へ歸る事さへなりやせんや。』

『手前ばかりぢや無い、見なさい、乃公の座敷には宿の蒲團が殘つてゐるばかりぢや。』

『旦那もですけえ。ぢや俺ばかりで無くてまだよかつた。』

キヨト〱四方を見廻すと、目に附いたのは床の間の置手紙、梶山傳藏殿、勤王義賊と墨の香匂やかに認ためて有ります。

『何を書きやがつたか、旦那讀むで御覧なせえやし。』

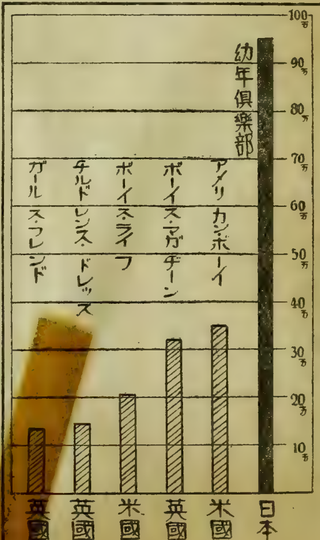
ウムと氣の無い返事をしながら、梶山は封を切りました。

『其方事天意に悖り大逆を助け忠義の志士を苦しめ候により既に天誅を加ふるの處 娘の孝心殊勝に存ぜらるゝに依り一命助け置き候今後速やかに精神を入れ替へ正道を蹈むべく候尤も其方所持の財物は勤王誠忠の軍用金として差出し候事神妙の至り正に受納候ものなり。

追つて返す〱も不愍なるは其方娘の傷しき志に候間我等眞實の身の上を明し置き候 我等事は寺町少納言には無之實は少納言の内方に候 丹波屋へ軍用金申附け候節は男子體に變裝致し候も本日は元の女子に復り候者に紛れなく候』

讀むでゐる中に、梶山は眞蒼になつてガチ〱慄へ、胸先は亂拍子に脅え、娘は色白の顔を眞赤に染めて、疊の目へも消え込み度、極りの悪い膏汗を、滑らかな背筋から脇の下へと辷らせるばかり、立上る元氣も有りませんでした。（をはり）

世界著名子供雑誌一覧（昭和六年 広告年鑑に依る）



寒さ時や氣候の變化が殊に恐しい
喘息の鎭靜と根治療は
如何にすべきか？

△油斷のならぬ病氣

喘息は發作したら最後、實に猛烈な症狀を呈する頑强な疾病ですが平素は案外穩かでありますから、喘息を治療せんとする方には特に此の性質を充分に呑み込んで、これを豫防することが重要であります。

殊に寒い今の時期や、季節の變り目等は喘息發作の機會が多い時ですから、平素油斷なく看視し少しでも變調が見えたら直ちに適當な手段を採つて鎭壓して仕舞はなければならないのです。それには精神を緊張させ、一切の無理、過勞、暴飮暴食、睡眠不足等をせぬ樣に心掛け、一般の養生に注意を拂つて健康狀態をよくすること等勿論必要ですが、努めて喘息の發作を起させぬやう、御家庭にあつて豫防することが最も大切なことです。しかし五年十年といふ樣な慢性喘息になると、とても一寸した豫防位では安心出來ませんし、まして發作の苦しみから逃れるといふ樣なことは望まれません。從つてどうしても無害で有効な信用出來る實際効果の著しい藥の力を借りねばなりません。

△最も合理的なる喘息藥

小社に於て數年來絕えずその實驗成績を報道し、本誌の愛讀者に絕對確信をもつて推奬して參りました『喘息エキス』は他の一時的の頓挫藥や、一時は押へることは出來ても習慣性になる類のものとは、全然その性質を異にし眞に効力の著しい事から喘息藥中隨一の名聲を博し『喘息エキス』の服用により幸福を得られた方々の通信は每日數多く、既に社會的試驗の合格品であります。

由來喘息（氣管支喘息）は御存知の如く決して痰咳の病でなく、氣管支筋に於ける發作性の痙攣でありますから、直接喘息の本體である氣管支筋の痙攣を鎭靜消失させる作用の特に著しいこの『喘息エキス』が如何に完全なる効果をもつかは今更こと新しく申述べるまでもないでせう。

本劑の効果に就き百三十一名の實驗者からの精密なる調査の結果を發表しますと――

▽喘息エキスにより著しき輕快者……二四
▽使用以來發作せずといふ者…………一五
▽全治と報告ありし者…………………七八
▽相當効果あり愛用すといふ者………七
▽不變若しくは無効といふ者…………七

以上はほんの一例に過ぎませんが、喘息エキス數十萬の愛用者を思へば更に〳〵、どれだけの全快者を出してゐるか分りません。

要するに喘息根治の秘訣は輕い中に治療することであつて、萬一少しでも發作が起りましたならば、一刻も早く『喘息エキス』を用ひ發作を抑へ〳〵してゆけば、何時か忘れる樣になり根治させることが出來ます。

『喘息エキス』は藥價（試用分）一圓三十錢（三十回分）二圓五十錢（六十回分）四圓八十錢（百回分）七圓、全國各地の藥店百貨店藥品部にありますが品切れの節は送料内地十五錢領土四十二錢を添へ東京本鄕區駒込坂下町 大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九）へ御註文下さい。

文部大臣 鳩山一郎閣下跋
茅原華山先生著

日本國民に遺言す

是ぞ！・現代日本に一大光明を與ふる不朽の大名著

著者は十七年前『國民的悲劇の發生』の豫言を殘して世と斷ち、只管內觀、自彊、靜思つひに今日に及んだが、世は今や將に華山氏豫言の如くになりつゝある。佛國の社會黨首領、レオン・ブルム曰く、『歐洲は破船が沈む前に激浪に旋回する如く、相衝突した幾多の思想の渦卷の中に旋回してゐる』と。

日本も亦この渦中に在るのではあるまいか?! 果して然らば、日本は如何なる？ 我々はどうすればよいか、此の難局を坐視するに忍びず、多年の蘊蓄を傾け、渾身の熱筆を以てこの難問に解決を與へたのが本書だ。

十八歳にしてギゾーの文明史を讀み、內外の社會思想の研究と、文明批評を一生の事業とし、日、支、歐米の學に通じ、詩を良くし、

書を良くし、雄辯家として又名文家として聲名ある著者が、雌伏十有七年、或は親しく歐米に渡りて社會の缺陷を探り、或は再三、支那より、希臘、羅馬を訪ねて東西思想の眞髓を究め、而してまた内外古今の書を渉獵して人世の實相を詳かにし、大所高處に立ち、世界と日本の現勢を凝視し、日本國民の思想と生活に解剖のメスを揮ひ、茲に世界を包容する日本精神を高揚する。

その卓拔なる識見、雄大なる氣宇、絢爛たる筆鋒、これこそ眞に日本の行手を明示し、吾等の生活に光明を點ずる燦然たる燈明臺である。

見よ！日本民族のあらん限り不朽に傳へんとする嘔心吐血の大文字！

目次の一部

◇スターリン――伊藤公
◇日本問題
◇空想國の不戰條約
◇日本は生活の鎔鑛爐
◇人間となるが私の專門
◇心中獨り盛んなり
◇權威ある言語
◇精神的思想的亂世
◇人類に最も尊崇された人物
◇意見のない人間
◇小兒を損ふ母親
◇家庭は經濟を超越す
◇模倣亡國論
◇サヨナラ十分
◇日本の戰鬪哲學
◇投機あつて商賣なし
◇哲人的獨裁政治
◇ソヴイエット露西亞とファッシスト伊太利
◇日本の政黨の實體
◇政黨否認は議會否認とはならず
◇革命の心理
◇日蓮上人と弘法大師
◇日本のマホメット
◇日本にないものが一つある
◇唯物史觀か無一物史觀か
◇支那の共同管理說
◇英米聯合艦隊

鳩山文相極力推奬！ 感激溢れ萬人熱狂する天衣無縫の絶品!!

茅原君の豐富な天賦と、その異常な努力とは全く敬服に値する。君の著述は該博な其の學識と、世界的な其の閲歷から溢れ出たものの結晶とも謂ふべきであると思惟する。恐らく一語一語を考へながら、味つて讀むべきである。勿論君は不羈獨立、自由にその言はんと欲する所を言ふべき立場にあるのであるから、其の思想に就いて、私ばかりではない、或は世と相乖くところがあるのは、因より當然過ぎたことである。其の自由にして嘗て他に拘束せられざる所說、主張こそ、私のみならず、一般公衆が十二分の敬意を拂はねばならぬところである……。

眞に刻下必讀の國民讀本!!

定價一圓二十錢（送料十二錢）

東京本郷 大日本雄辯會講談社發行（振替東京二九三〇）

奇談　鏡の中の男

西田鷹止
竹中英太郎畫

一

世の中に何が不思議と云つて、私が經驗したやうな幻怪不思議を極めた事件は、又とあるものではあるまい。

私は京都大學の文科一年に在學中の小泉昌介といふ二十二歳の學生で、大學裏、白川通の山田シヅさんといふ家の二階に下宿してゐたのです。小母さん（その女主人）は、軍人の未亡人で、美代子、喜美子といふ二人の娘の母でした。妹の喜イちやんは、まだ五六歳の子供であつたが、姉の美イさんは年頃の十七、分けて美しい京娘であつた

ので、自然、何時しか私達は戀仲になつてゐたのです、――といふことを先づ、前以て知つてゐて下さい。それから、妹の喜イちやんも、姉そつくりの瓜二つのやうによく似た可愛いゝ子であつたことをです。

　或る日の夕刻、私は手拭と石鹼とを持つて二階の部屋から下りて來ました。

「ちよつと風呂に入つて來ますよ。」

　さう云ひながら、私が表戸を出ようとすると、小母さんが臺所から顏を出して、

「あら、もうお飯が出來ましたに、食べてから行かはりませな。」

　茶の間で御膳ごしらへをしてゐた美イさんも顏を出して、

「さうおしやすな。お好きのソボロやわ。ホヽヽヽ。」

　併し、私は、その午後學校で野球の練習をやつて來たので身體も汚れてゐたし、疲れてゐたので一風呂浴びて、ゆつくり夕食

の卓へ向ひたかつたのです。

『土まみれで氣持が惡いから一風呂洗つて來ます。なアに十五分もかゝりませんよ。待つてゝ下さいね。』

私はさう云つて、近所の風呂へ出かけて行つたのです。

宜いですか、間違へないやうに、よく注意して聽いて下さい。私は、さう云つて、小母さんと美イさんに止められるのも聞かずに近所の錢湯へ出かけた――それが、六月の暑い日の午後六時頃のことです。

然るに、――

その翌朝、ふく／＼した絹蒲團にくるまつて私が眼を覺ました所は何處であつたと思ひます。恐らく皆さんは、フン君は夢を見た話をでもするのだらうと疑はれるかもしれません。よろしい、もし、さうだつたら、私は、自分が京都の大學生であつたことの方が夢であつたとでも申しませうよ。何故なら、それほど、翌朝私の身邊に起つた出來事は、眞正々銘の現實の出來事だつたからです。

二

部屋は床の間付の、とても綺麗な八疊です。立派な書畫の額と掛軸が懸つて居り、生花、衣桁、脇息等の調度も備はつて、何處かの富豪邸の客間かと思はれる部屋でした。

私は、そんな素晴しい部屋に、絹蒲團に埋まつて寢てゐたのです。

『一體此處は何處だらう。どうして自分はこんな家に來てゐるのであらう。』

どんなに考へて見ても前夜のことは何の記憶もない、どうして自分がそんな立派な部屋に寢てゐたか全然見當もつかないだけ、愈々薄氣味が惡いのです。實際、あまりに不思議なことは恐怖と等しいものですよ。

ざアざアと、最初は雨かと思つたのですが、實は部屋の下の方から響いて來る川瀬の水音らしいのです。私は床を出て寢衣のまゝ部屋の障子を開けて見ると、外は、欄の硝子戸との間に長い廊下が續いて居りました。私は非常な好奇心に誘はれて、硝子戸を開けて屋外を眺めました。すると前面には、朝霧に包まれた山の斜面が壁をなして高く遠く左方へ連なつて居り、見下す眼下には谷川の清流が雪の泡を立てゝ流れ落ちてゐるではありませんか。今、私の立つてゐるのは、その谷川に臨んだ大きな家の三階の一室だつたのです。

『うむ、多分此處は何處かの山の中の溫泉らしい。』

川の對岸に建並んだ家々が皆な二階三階の旅館風の建物ばか

りであるのを見て私は、すぐにさう思ひました。私の泊つてゐた家も確かにそれ等の旅館の中の一つに違ひないのです。

それにしても、一體、何處の何といふ溫泉であらう。いや、それよりも、私が一體どうして、こんな溫泉宿の客となつてゐるかです。

私が廊下の硝子戸を開けた音を聞きつけたか、やがて、階段の方に足音がして二十五六の女が上つて來ました。

『お目覺めでございますか。お早うございます。』

愛想の好い辭儀をしてから部屋に入つて、彼女は今迄、私が寢てゐた夜具を片づけにかゝつたのです。宿の女中です。

『君、僕は氣が違つても、寢ぼ

けてゐるんでもないんだ。眞面目に訊くが此處は何處だね。それから、僕は昨夜、何時頃、どうして此處へ來たか、それを聞かしてくれ。』

『ホヽヽヽ、あんなお戲言ばつかし……』

女中が、私が戲弄つてゐると思つたのも無理はありません。世界中を探したつて、そんなことを訊く男は私より他にはないでせうからね。併し、私にして見れば大眞面目の眞劍だつたのです。

『いや、戲言ぢやない。僕は、昨日午後六時頃には京都の下宿にゐたのだ。それがどうして今朝、こんな山の中に來てゐるか、さつぱりその間のことが解らない、狐にでもつまゝれたやうな氣持だ。』

『昨日京都にゐらつしやいましたつて？　まあ、あんな嘘ばつかし、昨夜は東京から來たと仰有つたぢやありませんか。』

『ナニ東京から來た？　僕がそんなことを云つたかい。いや、僕は、東京へはまだ一度も行つたことはないんだ。』

『でも、さう仰有いましたわ。朝東京を立つて、熱海で暫く遊んでから、伊東へ廻つて自動車で山越えしてこちらへ來たつて、さうお話しになりましたわ。』

『馬……馬鹿な、昨夜の六時には京都に居たつて云つてるぢやないか。』

『ホヽヽヽ、でも、六時に京都にゐらしつた方が八時に、百何十里も離れてゐる此處へどうしてお着きになりますの、オホホヽヽヽ。』

『昨夜八時に僕は此處へ來たのかい。おい、此處は一體何處なのだ。』

『まア、訝かしなお客樣。此處は伊豆の修善寺溫泉ぢやありませんか。』

私は、世の中が、何が何やら解らなくなりました。

三

私は、重大なことに氣づかずにゐたことを知りました。それは、寢衣一枚で立つてゐる自分が非常な寒氣を覺えたからです。ばかりではない、階下へ下りて行つた女中が間もなく、澤山の炭火を持つて來て火鉢へつぎ込んで行つたからです。

如何に山の中とは云へ、六月の眞夏に火鉢に火を入れる所はあるまい。して見ると、昨夜と今朝との間に數ケ月が經過してゐるのであらうか。確かに今朝の季節は、秋の末か冬に違ひないのです。

着物を着ようと思つても、勿論、自分の着物などは見當らな

い。衣桁に外套が懸つて居り、その下に背廣がコート、チョツキ、ズボンと重ねてたゝんであるのです。多分昨夜自分の着て來たものらしいので、それを着るより仕方がないのです。

洋服を着てしまつてから、ポケットを探して見ると、眼鏡、烟草、ハンカチ、チョコレートなどが入つてゐました。コートの内側のポケツトに財布が入つてゐて、中には三十五圓ばかり入つてゐるのです。

その他、部屋を見廻してゐると、帽子と、床柱の下に小さなスーツケースが一個置かれてあるばかりでした。ケースの中を調べて見ると、三角形の革袋が入つてゐる――ピストルです、充彈した六連發の短銃ではありませんか。併し、次に私は更に驚くべきものを發見しました。娯樂雜誌、旅行案内等ゴタ〳〵入つてゐる中から何か絹のハンカチで包んだものを見出したのです。解いて見ると、それは五圓十圓を合せて千圓にも餘らうと思はれる紙幣束だつたのです。

おゝ、次から次へ起る奇怪事――私は、自分の頭が誰の頭であるかゞ解せませんでした。とても人間の頭では考へられない不可解事です。どうして自分が修善寺溫泉に來てゐるか。どうして東京に行つてゐたか。どうして背廣服の紳士となつてゐるか。亦、どうしてこんな千圓にも餘る大金を所持してゐるか？

考ふれば考ふるほど、これが夢でなければ、自分が氣狂になつたものとしか思へません。併し私は斷言することが出來ます。決して夢ではない、氣が狂つてゐるのでもないのです。

女中が朝の膳を運んで來たけれども、食事もおち〳〵喉を通りません。膳を下げさせると早速ポケツトの金で勘定を濟ませて宿を出ることにしました。

無論、京都へ歸る決心をしてゐるのです。このとてつもない奇怪事を、何處へ、誰へ持つて行かうやうもない、京都へ歸つて自分が風呂へ出かけた後の行動を調べて事の眞相を明かにするより道はなかつたからです。

元來、呑氣な性分の私だけれども、物事に對する探究慾は充分持つてゐます。世の中に不思議といふものはいくらもあるが、その不思議には、それ〳〵、それだけの理由がなければならないものです。恐らく私の場合に於ても確かに理由がなければならない。恐らく、私は、何か心理上に一大錯誤をやつてゐるに違ひないと思ひました。その眞相、原因を探究して見ることは一方に茫然と面喰つてゐながら、亦一方には非常な好奇的興味をさへ覺えたのです。

車で修善寺驛へ駈けつけ、駿豆線で三島へ出で、沼津驛で待つほどもなく東海道本線の神戸行下り急行列車が到着したので

私はその列車の三等客として乘込みました。その列車は午後の九時に京都に着くことになつてゐたのです。

四

私は本線の汽車に乘つてからも繰返し、昨日の記憶を辿つて見ました。

近所の白川湯の浴槽の中に浸つてゐたこともはつきり記憶がある、夕食は支那料理のソボロだと美イさんが云つたので、それを樂しみに大急ぎで洗場を上つたことも覺えてゐるのです。ところが白川湯の暖簾をくゞつて表の街路へ出てから後のことが全然記憶がないのです。どうして家へ歸つたか、――いや下宿へは歸つてゐないらしい、それから二時間の後には修善寺へ來てゐるし、而も、今朝になつて見ると、昨日までの夏が冬となつてゐるのです。實際、何が何やら譯の解らないことです。宿の女中は昨日私が東京から來たなどと云つたけれども、私はどんなに考へて見ても、昨日、自分が京都以外の土地にゐたとは思へないのです。

何としても、この奇怪事の原因は、白川湯を出てから私が意識を失つたことにあるのは明かです。で私は、どうしても、その間の記憶を――白川湯を出てから、今朝までの間の記憶を呼び起すことが必要だと思つたので、車窓に頭を抱きながら頻りにその努力をして居りました。

すると、不圖私と背中合せの座席にゐる二人の男が新聞を見ながらこんな話をしてゐるのを聞いたのです。

『おや、とう／＼大阪府の警察部では五百圓の懸賞をかけましたな。』

『何の懸賞です。』

『あの強盜殺人犯の浦川重五郎を逮捕した者或は所在を密告した者には五百圓の賞金をやるといふのです。』

『へえ、その重五郎といふ奴が人殺しをやつて逃げたんですね。』

『ぢや、あんたは、まだ此頃關西であんな大騷ぎをやつてゐる重五郎事件のことは知らないんですね。』

『そんな大事件ですか。』

『二ケ月ばかり前に北海道の網走刑務所を脱獄した浦川重五郎といふ重罪囚がゐたのです。その當時全國的に警察の捜査網が張られたけれども、どうしても捕まらないでゐる内、今月に入つてから大阪神戸方面に頻々として強盜殺人事件が起り始めたのです。とても狂暴なやり口で上方の人達を身慄ひさせたものですよ。』

『なるほど。』

『何しろ、十五六件續けざまに毎晩のやうに起つたんですからね。大阪、神戸の警察では總動員で捜査に當つたが何者の仕業であるか、始めどうしても解らなかつたのです。ところが、此頃になつて指紋判定の結果、それが網走を破獄した重五郎の犯行だといふことが解つたんですね。』

『へえゝ、ひどい奴ですね。そこで懸賞捜査となつたのですね。』

『さうです。それがこの二三日前から東京方面へ入り込んだ形跡があるといふので、關東地方の警察でも非常に神經を尖らしてゐるらしいんです。』

『なるほど、これが犯人の寫眞ですね。薄氣味惡い顏をしてゐますな。』

『その人相書にもある通り、額の眼の上に大きな刄物傷があるのが特長です。何しろ、そんな目じるしがあるのだから、如何に變裝がうまくたつて遠からず、捕まらずにはゐますまいよ。』

『ひとつ、五百圓せしめたいものですな、へゝゝゝ。』

『へゝゝゝ。』

二人の客は、新聞を見ながら、そんな話をしてから、コーヒーを飮みに食堂車の方へ立つて行きました。

五

私は、何氣なく、二人が立つたあとに落ちてゐる新聞を手に取つて見ました。

新聞には、今の男が話してゐたやうな記事と共に、脫獄囚浦川重五郎の大きな寫眞が載つて居ります。懸賞廣告の人相書は次のやうなものでした。

無籍者、前科二犯　浦川重五郎

一、顏、面長にして眼は凹み大なり。髮は五分刈、鼻は高く口は普通、前額左眼上に二寸餘の傷あること特長なり。

一、身長、五尺四寸位なり。

一、年齡、年齡は不詳なるも外見四十五六歲と見ゆ、但し變裝自在なり。

右は去月七日北海道網走刑務所を脫監せる者にして、破獄後當管內に於て十數件の强盜殺人を行へり。逮捕又は所在を通知せる者に對し五百圓の賞を懸く。

大阪府警察部

新聞に載つてゐる寫眞は、この人相書の通り、面長な顏で眼の大きい見るから獰猛さうな不氣味な面相でした。

併し、私は、そんな犯罪事件に興味を持つよりも自分自身の問題が重大だつたので、新聞は元通り捨てゝしまひました。といふのも、私がその脱獄囚と重大な關係があらうなどとは、その時夢にも思はなかつたからです。

私は、便意を催したので便所へ立ちました。用を濟ませて、便所の前の洗面所へ入つて手を洗つてゐた時です。不圖見ると私の前に妙な男が立つて私を見つめてゐるのです。色の黒い、眼の凹んだ四十七八歳の瘦せた長顏の男です。

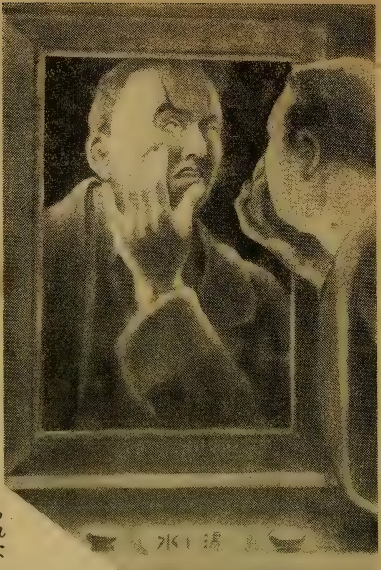
『呀ッ』

私は思はず驚愕の叫を上げようとしました。その男の額に、三寸近いなめくぢのやうな形をした大きな傷が左の眼の上を横に走つてゐたからです。おゝ、今、新聞で見たばかりの寫眞の顏です。浦川重五郎が立つてゐるのです。

あゝ、併し、その次の瞬間、私はもつと大きな驚愕と恐怖のために氷のやうになりました。重五郎が立つてゐると思つたのは間違ひで、それは洗面所の鏡に映つてゐる顏だつたからです。私は周圍を見廻しました。併し、あたりには、私以外には誰もゐないのです。私は身の毛の逆立つ思ひがして帽子を取ると、眼深く被つて自分の座席へ逃げ歸りました。

一體こんなことがあり得ることだらうか。あの鏡は魔物だ。自分の顏を他人に映すあの鏡こそ魔物でなくて何であらう。私は幾度でも申します、私は京都大學生の小泉昌介です。その私の鏡に映つた顏が殺人犯人の重五郎であらうとは！　おおあまりに恐ろしいことです。これがこの世の出來事と云へるであらうか。

私は早朝から、不思議と怪奇とに襲はれ通して來ましたが、この時ほどの恐怖ではありませんでした。胸は大波を打ち、唇は慄へ、眞蒼な顏をして私は、周圍の人々に額を見



られないやうに帽子を眼深く被つて窓傍に身を縮めて居りました。併し、私はどう考へて見ても、今洗面所の中で見て來た事實を信ずることが出來ませんでした。何かの思ひ違ひではなかつたらうか。何か自分の眼の錯覺ではなかつたらうか。とさう思ふと今一度行つて鏡の中の顏を確めて來ずにはゐられなかつたのです。

で私は再び洗面所へ出かけて行きました。そして怖々ながら今一度鏡の前に立つたのです。併し、私は鏡の中の五十男を一目見ただけで、おゝ、あのなめくぢのやうな不氣味な斬傷を一目見ただけで、自分の顏を兩手で被うて、再び座席へ逃げ歸つてしまつたのでした。

一體……一體、自分は誰なのであらう。いや、あの鏡の中の男こそ誰なのであらう。

六

私は汽車中を魘される熱病患者のやうな氣持で過しました。隨つて時間の經つのも殆んど知らずにゐたのですが、不圖氣づいて見ると、何時の間にか名古屋、大垣驛も通過して江州米原驛に着いて居りました。電燈が點いてゐて既に夜です。

私は同驛で新聞を買つて見ました。するとその夕刊に、次のやうな記事が、沼津電話として大見出しで掲載されてあるのです。

目下全國を騒がせつゝある例の殺人强盗、脱獄囚、浦川重五郎が、昨日熱海温泉に現はれたるものの如き形跡あるを探知したる同警察署に於ては昨夜は徹宵同地附近一帶の温泉宿を虱潰しに捜査したるも終に發見するに至らず、漸く今朝に至り、修善寺温泉菊屋旅館に一泊せることと判明せるも既に同

旅館出立後にて、捜査隊は地團駄踏んで口惜しがれり。
彼は昨日東京より熱海に來り、同地海岸すきやき料理店壽屋にて中食を濟ませ、それより伊東へ向ひ、同地より自動車にて柏峠を越えて午後八時過修善寺着、菊屋旅館に投宿せるものにて、服裝は、紺背廣に駱駝色の外套を着し、小型スーツケース一個を携帶し、一見會社員風の紳士に變裝し居れり。菊屋女中の言によれば、彼は今朝七時前起床、譯の解らぬ不思議な戯言めいたことを口走りなどしたるよしにて、朝食は箸を取りしばかり半膳も食せず、そこ／＼に勘定をすませて出立せりといふ。
恐らく、彼は、同旅館出立後、駿豆線にて三島に出でたるものの如く、それより本線を何方へ向ひたるか不明なるも目下沼津靜岡方面一帶を極力捜査中なり。

この記事を讀むまでもなく、全國の警察が手ぐすね引いて捕へようとしてゐるのが私であることは最早、明かな事實です。

『馬……馬鹿な、警察になんか擧げられてたまるもんか。僕がどんな惡いことをした。何の罪を犯したのだ。世間の奴等は何をこんな馬鹿騷ぎをやつてゐるのだ。』

と、いくら力んで見ても、私の眼底には、あの鏡の中の男の物凄い顏がこびりついて離れないのです。彼奴が私を苦しめるのです。何といふ呪はれた私だつたのでせう。何といふ幻怪極まる恐ろしさだつたのでせう。畜生ツ、惡魔つ、貴様は……貴樣は一體何者なのだッ。

と、私は不圖、今讀んで膝の上に乘せてゐる新聞の裏面に大きな歳暮大賣出しの廣告が出てゐるのを見て『おや』と思ひました。

『歳暮賣出しとは何のことだ。』

といふのも、其時まで、私は今日が何月何日であるかを考へてゐなかつたからです。勿論昨日の翌日としか思つてゐなかつたのです。

で新聞の日附を見て見ると十二月二十四日（水曜）とあるのです。併し、私の驚きは、その十二月よりも、その上に六年とあつたことでした。

『六年？ 六年とは何のことだ。』

私は誤植ではないかと、次の頁をも調べて見ましたが、矢張頁六年となつてゐます。併し、あゝ、その六年よりも、更に私を驚愕させた文字がその六年の上に書かれてあるのを發見したではありませんか。昭和といふ二字です。

『昭和……昭和とは何であらう。年號のあるべき所にある文字ではないか。』

併し、無論、私は、昭和などといふ年號は聞いたことも見たこともないのです。私は、又してもこの怪奇に遭遇して茫然となつてしまひました。

七

私といふ者の身邊には、何か想像も及ばない不可思議神秘な力が作用してゐるに違ひないのです。とても、人間の理性では判斷されないことばかりです。

『が併し、兎に角京都に歸ることだ。下宿に歸つて昨日のことを調べて見たら總てが判明するに違ひない。』

と、私はそれを唯一の恃みとして汽車が京都へ着くのを一圖に待つのでした。

大津を過ぎると京都は待つほどもありません。午後九時かつきりに豫定通り汽車は七條驛に着きました。降車口を出ると早速人力車を雇つて洛北白川へ急がせたのです。

車の上から通る街々を見ながら、變だなと思ひました。町の樣子が昨日までの京都とは、ずつと變つてゐたからです。それに、第一、驚いたことには自動車の數が馬鹿に多いのです。

上京吉田町、——大學病院横を高等學校前通りに出て左に曲ると白川通はすぐです。私にこの大問題を起させた白川湯の前を通り過ぎて一丁も離れてはゐません。私は下宿の前に車の梶棒を降させました。

表格子を開けて玄關へ入ります。

『小母さん、只今、僕です。』

私は、さう云ひながら家の中の樣子がすつかり變つてゐるのを見て又しても變だなと思ひました。

『小母さん、居ませんか、美イさん、美代子さん。』

重ねて呼びながら茶の間へ入つて行くと、その時二階の段梯子を下りて來る人の足音を聞きました。美イさんなのです。

『お、美イさん、僕です、僕は修善寺へ行つてゐたのです。いや、とても譯の解らぬ不思議な目に會つてゐるのです。とに角ゆつくり話しませう、充分研究して見なけりやならんのです。』

と、美代子は怪訝な顏をして私を見るのです。

『あんたはん、誰方どすえ。』

『誰方？ 誰方とは何です。僕ですよ。』

『わて、あんたはん見たいな方知らんわ。』

『美イさん、どうかしてゐるんですね、今日は。』

『まア、妙な人、島田はん。ちよつと、下りて來ておくれやす。』

と彼女は二階へ向つて呼びました。すると、一人の大學生が階段を下りて來たのです。その時私は嫉妬に似た憤怒の情にむ

ら／＼となりました。美代子が今迄、その大學生と二人だけで私の部屋で何をしてゐたかを想像したからです。

『君は誰だね、人の部屋に無斷で入るなんて失敬な奴だな。』

『人の部屋とは何がです。僕は、僕の部屋にゐたのです。』

『僕の部屋から下りて來たぢやないか。一體君は誰だね。』

『君こそ誰です。何の用があつて來たのです。』

『何の用とは何だ。自分の下宿に歸つたのが、何が何の用だ。』

『妙な人だな。此家は僕の下宿です。』

『まア、島田はん、この人氣狂やわ。』

彼女がさう云つた時です。私の顏をじろ／＼見つめてゐた大學生が『呀ツ』と叫んで表へ駈け出て行きました。彼は私の額の傷を認めたに違ひないのです。あると美代子も恐怖に襲はれて學生のあとを追つて、ばた／＼跣足で逃げ出て行きま

ました。私は、今迄忘れかけてゐたあの鏡の中の男の恐ろしい顔を又思ひ出しました。

『畜生ツ、交番へ走つたんだな。どうしたものであらう。』

急に私が狼狽してゐるところへ、がらがらと裏口が開いて石鹸と手拭とを持つた女が入つて來たのです。

『お、小母さんでしたね。僕です、僕です。』

八

『小泉昌介はんいうたら、十四五年前、家にゐた人やけど、その小泉はんがどうしたと、あんたはんお云ひやすのかいな。』

『何云つてんのです。小母さん、僕がその小泉ちやないですか。』

『あほらしい、あの人が生きてゐたら幽靈だつしやろ。』

『どうも解らない。美イさんばかりでなく、小母さんまでが僕

を知らないといふんですか。』
『美イさんて、あんたはん、神戸の美代子とお知合の方だすかいな。』
『神戸の美代子？　今此處で會つたのです。』
『ほんなら、喜美子だつしやろ。』
『喜美子？』
『喜美子に何の用でお出でやしたのどうかいな。何處の誰方はんどすえな。』
　私は小母さんの顔に皺が多く、髪に白髪の混つてゐるのを認めました。
　と恰度その時、表が騷がしくなつたかと思ふと誰か戸口を駈け込んで來た者があります。見ると二人の警官です。
『呀ツ。』
　私は本能的に電氣にでも打たれたやうに、二階へ逃げ上りました。
『惡黨ツ、待てツ、重五郎御用だツ。』
　とばかり、追つて來る警官と私の部屋の入口で格闘が始まつたのです。
『何をこの野郎。』
『何が何だ。』
　ところが、私は自分でも不思議に思ふほど、力が强いのです。遂に二人の警官を振り切つて部屋の窓から屋根の上へ飛び出しました。
『待てツ、こらツ惡黨ツ。』
　二人は追つて來ます。
　勿論、私は自分が小泉昌介であることは信じてゐます。併し、同時に鏡の中の男でもあるやうな氣がして、この場合逃げずには居られなかつたのです。捕へられたら死刑は解りきつたことだからです。
　屋根傳ひに隣の家へ飛び移り、瓦の上をこけつまろびつ二三軒の家を通過しました。道路の上なので、下には最早十數名の彌次馬が集まつて來てゐて、あれよ〳〵と追つて來るのです。
　五六軒目の家の屋根を裏に廻ると寺院の塀らしいものの上に出ました。私は夢中でその塀を越えて一躍、寺の境内へ飛び下りました。
『何をツ、重五郎待てツ。』
　と警官達も追つて來たのですが、私は實に敏捷でした。境内を出ると暗い道を二三回右へ、左へと曲つて逃げてゐるうちに遂に警官をまいてしまひました。
　と恰度、その時、眼前に低い黑板塀があつたので逸早く、そ

の塀を乘り越えて邸内へ忍び込んでしまつたのです。

その邸はあまり廣い家ではなく、庭の樹木の間へ書齋らしい洋間が突出てゐて、室内に燈が點いてゐるので、不圖、中を覗いて見ると、眼鏡をかけた老人が書見をしてゐるのです。よく見ると、それが、大學教授の久留島博士ではありませんか。

『うむ、此處は先生のお宅だつたのだな。かうなつては先生に救ひを求むるより道はない。』

私は、この幸運を喜びながら、まだ戸の閉まつてゐない緣側へ上り、土足のまゝ博士の室へ駈け込んで入つたものです。

『先生、だしぬけにお許し下さい。私です、文科一年の小泉です。どうか救つて下さい。私には今非常な危險が迫つてゐるのです。いえ、とても譯の解らぬことばかりなのです。』

『文科の小泉だつて？　俺は君のやうな生徒は知らないがね。』

博士は別に驚いた樣子もなく落ちついてさう云ひます。

『小泉昌介です。毎週、私のクラスへ心理學の講義に來て下さるではありませんか。』

『さうだつたかな、君のやうな生徒がゐたのかね。併し、眞蒼な心配さうな顏をして、どんな危險が起つたといふのかね。とも角それを話して見たまへ。』

そこで私は、今朝からこれまでのことを殘らず話して博士の助力を求めたのでありました。

九

葉卷を喫ひながら、じつと私の話を聽いてゐた博士は、語り終るのを待つて、口邊に微笑を浮べながら、

『うむ、十四五年前に、文科の生徒で行方不明になつた男があつた。當時、警察方面では殺害されたものとの見込で大搜査をやるし、新聞でも奇怪な事件として大分書き立てたやうであつたので、俺はよくおぼえてゐるが、では、あれが君だつたのだね。』

『先生も十四五年前と仰有るのですか。』

『なるほど、それで總てが解つた。君は二重人格者だつたのだ。』

『えつ、二重人格？　それは何です。』

『二重人格といふのは、一人の人間が交互に相異つた二つの人格を持つてゐるものを云ふのだ。いや、二重どころではない、稀には三重四重の複重人格者もないではない。獨逸のドクトル・キルソンといふ人の如きは、十種以上に人格分裂をする少女を取扱つたと發表してゐるほどである。』

『解りません、先生、そんなことが、實際この世に有り得るこ

『先生、お話を承つて始めて、すべてが解りました。私はそんな特異な人間だつたのでせうか。それは病的現象でせうね。』

『變態的心理現象であつて、その人格變換の原因機會等に關しては、科學的說明を下すべくあまりに神祕だと云ふよりない。槪してこの種の事件は米國の心理學者ヰリアム・ジエームス敎授の發表してゐるセシル・ボーン牧師の事件、佛蘭西のフエリーダの話など、外國でも仲々劇的興味のある事件が多いのであるが、君の場合に於てはあまりに悲しむべきものだつたのだ。君は、取返しのつかぬ數多の犯罪を犯してゐる、最も狂暴性のものだつたのだ。』

『先生、それです、それを知つて、私は益々恐ろしくなりました。一體私は、どうしたらばいゝのでせう。』

『自首して出るよりあるまい。公判が正當に審いてくれるだらう。但し、俺は君のため、出來るだけ辯護的證言乃至鑑定書を書いてあげようと思ふ。』

この時、博士邸は數十名の警官隊によつて包圍されてゐたのです。私は、博士に勸めらるゝまゝ、縛につくより仕方がありませんでした。

十

とでせうか。』

『現に君がそれなのだ。世間にその例は決して珍らしいものではない。大正十年六月頃愛知縣、渥美半島に隈本安吉といふ左官職がゐた。或る日仕事に出たまゝ行方不明になつたが、二年後、東京本所の或る鐵工場に働いてゐた一職工が、突然、(此處は何處だ)と云つて騷ぎ出した。それが安吉だつたのだ。大正十三年沖繩にも、田中つねといふその種の女が現はれてゐる。昔から日本では神隱しと云つてゐるのがそれだ。文獻によると寬延、寶曆の頃、江州八幡町に松前屋市兵衞といふ者がゐたが、この男の如きは、夜中に厠に立つたまゝ、二十年間歸らなかつたといふ記錄を持つてゐるのだ。』

博士の話を聞いて私は驚き且つ怪しまずにはゐられません。自分はそんな特殊な人間だつたのであらうか。

『この種の二重人格者に於ては、第一第二兩人格の間に、全然記憶の聯絡がないのが特長である。隨つて第二人格となつてゐる間は、第一の人格については何の記憶もなく、第一人格に歸るや否や、第二人格時代のことは忘れてしまふのが定則である。しかも、第二人格時代の時間的經過が、記憶の中にないのだから、君が十五年前のことを昨日と信じきつてゐるのに何の不思議もないのだ。』

斯くして終日私を苦しめた奇怪事の眞相も判明し、私は寧ろ肩の荷を卸した氣持で警察へ曳かれて行きました。

私の第二人格、浦川重五郎の經歴についての、其筋の調査によりますと、——

私は大正五年六月二十三日の夕刻、白川湯を出て下宿へ歸る途中、人格變換が行はれたものでその後、どんな經路を辿つたかは全然不明ですが、重五郎の經歴は、其年の暮頃、大阪の築港附近で勞働者仲間に入つてゐた時から始まつてゐるのです。

彼は、大阪で一年ばかり勞働した後、船乘となつて近海航路に從事してゐる間に惡友仲間から、賭博、女買等を敎へられたらしく、遂に窃盜罪、傷害罪を犯して二度まで刑務所との間を往復してゐるのです。最後に强盜犯で捕へられ、北海道の重罪監に送られたのが二年前の昭和四年春のことで、一ケ月前脫獄、今回の大罪を犯すに至つたものでした。勿論その間の長い罪惡史は、いくらお話しても盡きるものではないのですが、御免除を願ひ度いのです。

で、その長い十餘年の陰慘、兇惡な生活のために、白面秀眉の私も、肉は落ち、悽慘な面相に荒んで、自ら自分の顏を認め得ないまでに變りはてゝゐたものでした。小母さんが知らなかつたのも無理はありません。

最後に公判の結果はどうであつたかと云ひますと、これが亦、法曹界に大問題を惹起したものです。犯罪の主體は私といふ肉體の持主だから、有罪が當然だと云へば、いや、小泉昌介なる者は犯罪と何等關係のない者だと、非常な論議が沸騰したものですが、その點、私は久留島先生に如何に感謝しても足りないと思つて居ります。先生のお蔭で、遂に私は無罪となつたのです。

けれども、如何に變態心理作用の結果とは云ひながら、社會に對し大罪を犯したことを思ふと生きては居られないやうな氣持がします。現在私は、國に歸り、年老いた兩親のもとで、信仰生活に入り、罪の償ひをなしつゝあることを申してこの奇怪な懺悔談を終ることにします。

——終——

名諺落穗集

○叱言百より情の一語。
○失言は放ちたる矢の如し。
○知る者は言はず、言ふ者は知らず。
○大口をあけると腸が見える。
○長口上は欠伸の種。
○腹の立つ事は明日言へ。

○目で見てから口で言へ。
○賢者は口を愼み。虎豹は爪を愛す。

ユーモアコント

嘘の電話

吉祥寺猪水

島崎欣之助は、カフェー『銀猫』から、自宅の新妻へ嘘の電話をかけたのです。

『モシ〳〵、喜代さんかい、あのね、今日は役所の仕事が忙しくて午後の九時まで居殘りになつたから、食事は待つてゐなくてもいゝよ。』

『さうでございますの、では、そちらで召上つていらつしやるわね。』

『うん、丼を誂へたから。』

『では、お早くお歸んなさいまし。』

『多分、九時半頃には歸れるだらうから。』

『は、承知いたしました。』

午後の四時半、役所が退けてから、二三の惡友に誘はれて銀座裏へ進出した彼なのです。新婚早々で、早く家に歸り度いのは山々だけれども、元來が酒と聞けば憎くない方で惡友の誘惑には勝てず、この『銀猫』へ出動するのもこれで三度目かの彼なのでした。

『なアに、八時頃まで飲んで、それから一時間ばかり公園をぶらついて醉を醒ましてから歸ればいゝんだ。』

彼氏すつかり御輿を据ゑてエロ女給のサービスで洋酒の盃を重ねたものです。

すると一時間ばかりしてから、醉も大分廻つた頃、帳場の方にゐた艶子といふ女給が、

『島崎さん、お電話よ。』

と呼びに來たのには驚いた。誰からなのだらう。一體、誰が、どうして、自分がこんな家に來てゐることを知つてゐたのであらう。

彼氏不審でならず、人違ひではあるまいかと思ひながら、受話機を取つたものです。

『モシ〳〵僕島崎ですが、誰方でせう。』

『ア、あなた？ あたし喜代でございますの。あのね、目黑の叔母樣が今夜、急にお容體が變つて、亡くなられましたのよ。』

『なにつ、目黑の叔母さんが……』

『えゝ、今ね、さう云つて電話で知らせがありましたので、あたし、これから行かうと思ひますけれど、あなたどうなさいます。そちらのお用の濟み次第、向ふ

へ行つて下さいますか、それとも、一旦家へ歸つてからになさいますか。』

『そいつは大變、かうしちやゐられないよ。兎に角僕もこれからすぐに向ふへ行くから、お前もさうしておくれ。』

『さう、ではお衣裝は向ふへ持つて行つときますから、どうかお早く。』

『うむ、大急ぎで行く。』

さう云つて電話は切つたものの、彼氏すつかり面喰つてしまつたものです。叔母の死にも驚いたことではあるが、それより、第一妻が、どうしてこの『銀猫』へ電話をかけたかそれが不思議でならなかつたのです。彼氏は少からず自尊心を傷けられました。新妻に日頃、素行を密偵でもされてゐたやうに不快で侮辱を感じたものです。

その夜は叔母の通夜、それから翌々日の葬儀までごた／＼續きで妻とゆつくり話す機會もなかつたが、葬儀も濟んでからの或る夜、彼氏は遂にこの重大問題――實際彼にとつては不可解な重大問題に違ひはなかつたのです――について妻に切り出さずにはゐられなかつたのでした。

『おい、喜代子、お前、あの晩、僕がカフエーにゐることをどうして知つたんだ。お前、きつと、かねて僕の素行調査をやつてるな。』

『オホヽヽヽ、あなた、とう／＼お自分で白狀してしまひなすつたわね。』

『白狀つて、僕、何も疚しいことはないんだ。』

『だつて、何故あんな嘘の電話なんかおかけなさいましたの。』

『それは、お前に餘計な心配をかけまいためだよ。一體どうして解つたか話しておくれ、あんまり不思議でならないからね。』

『それはね、多分あのカフエーには帳場の電話機の近くに時計がありますでせう。あなたが最初に電話をおかけなすつた時、五時を報じてゐる音が耳に入りましたのよ。それから電話を切つてから不

圖、家の時計を見ますと五時十分前でせう、宅の時計は毎日時報に合せてゐますので一分でも間違つてはゐない筈ですし、お役所の時計ならもつと正確でなければならないのに、と思ひましたので、これは、てつきりあなたがお役所以外の場所から嘘の電話をおかけなすつたに違ひないと感づきましたのですわ。』

『なるほど、お前仲々頭腦がいゝな。併し、「銀猫」だつてことは？……電話番號までどうして知つたのかね。』

『それはね、この間、あなたの洋服をたたんで居りますと、ポケットにあの家のマッチが入つてゐたからですわ。でも、あの晩、叔母様の一件が起りませんでしたら電話なんかおかけするんぢやなかつたのですけれど、何しろ急を要することだつたものですから、多分さうだらうと思つて、あのマッチの電話番號を見ておかけして見たのですが、案の定、行つていらつしつたのですわ。あなた、初中終、あんな家に出入していらつしやるの。』

『おい、疑つちや困るよ、お前。僕がおすこの女給に迷つてゐるなんて思つてるんぢやあるまいね。たゞ友人に誘はれて二三度行つただけなんだ。』

『ホヽヽヽ、さうむきに辯解なさらなくても、實はその點あたしも安心して居りますわ。でも、怪しいことでもあるのでしたら、あなたが、うつかりマッチなんかをポケットに忘れていらつしやる筈がないんですもの。』

『なるほど、心理推理といふ奴だな。お前はシャロックホームズ見たやうな女だな。』

『だからですわ、これから絶對に嘘なんか仰有つてはなりませんのよ。嘘といふものには、きつと神様が、何處かに缺陥をこしらへておいて下さいますので、必ず露見せずにはゐないものです。それに、何時も、行先は、はつきり本當のことを云つて置いて下さらないと、お留守中家にどんな突發事が起らないとも限りませんからね。』

『おい、說法かい、まゐつた、まゐつた。』

これが、後年、彼氏がマダムに頭が上らなくなつた最初の──そして悲しむべき、實に記念すべき新婚早々の事件でありました。

──終──

誰方も自宅で出來る鼻病の手輕な療法

肥厚性鼻炎、急性鼻炎、蓄膿症等の治療豫防にトテモ効果ある新發見の洗鼻器！

鼻腔と頭腦

は密接な、而も重大な關係があることは充分御存じの事と思ひますが、頭の重い人、頭痛のする人或は氣分のすぐれない人は殆ど鼻の故障が原因してゐるのでありまして、殊に我が國は氣候の關係上鼻の惡い者が非常に多く知らず不識の間に鼻病に冒されてゐるものが決して尠くないのであります。

又、子供で學校の成績が惡かつたり、魯鈍だつたりするのは多く鼻腔の故障が原因してゐることが發見されるのであります。或は頭腦明晳だつた學生が、鼻を患つてから、記憶力、判斷力が著しく減退した例、家族が蓄膿症になつて家庭が暗く不愉快なものになつてしまつたとか其他鼻腔の故障が原因して色色な悲劇を惹起した實例は非常に多いのでありまして、これ等は鼻腔と頭腦が如何に重大な關係があるかを物語るものであります。

斯く

鼻と頭とは密接な關係がありますから一度鼻病に冒されると不愉快なことが多いのでありますが、たゞ不愉快なばかりでなく色々な危險を伴ふものであります。冬期に多くの人々が惱む急性鼻炎は咽頭、氣管支等を侵す危險があり、又鼻腔の故障が原因してあの恐しい中耳炎を併發することがあります。又鼻病の中で最も惱まされるものの多い肥厚性鼻炎や蓄膿症は皆樣も既に御存知のことと思ひますが、何れも仕末の惡い病氣であります。從來是等の治療には、

外科的處置をするものゝ外鼻腔の洗滌、藥物の塗布等が行はれて居りますが、容易に根治し難いのであります。ところが、茲に御紹介する醫學博士高木愼先生實驗推奬の洗鼻器『フーピー』は子供や婦人にも手輕に使用が出來て、容易に鼻腔の惱みを一掃する理想的のものであります。即ち、

この洗鼻器

は獨特の洗滌藥によつて消炎作用、殺菌作用が行はれ、急性鼻炎は二三回の使用で症狀が減退し、肥厚性鼻炎も數回にして快通して、頭は輕くなり、記憶力、判斷力も回復して何時も愉快に生活が出來ます。其他凡ての鼻の疾患に著しい効果が認められ、鼻つまりなど快く通じます。尚空氣の惡い所や、塵埃の多い所で仕事をしてゐる方、受驗勉強中の學生方、其他誰方でも朝夕御使用になれば、蓄膿症、肥厚性鼻炎の豫防となり、鼻腔が強健になつて容易に冒される事がありません。

洗鼻器『フーピー』は定價一組（洗滌藥共）一圓三十錢（送料內地十五錢、領土四十二錢）補給用洗滌藥定價五十錢（送料內地十錢、領土四十二錢）御注文は東京本郷、大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九）へ。

幕末巷談

風流活人劍

野村胡堂
羽石弘志畫

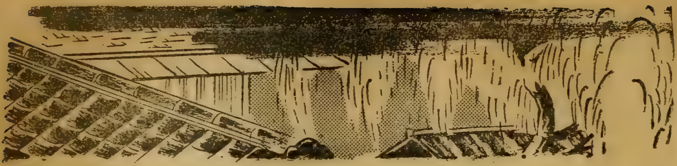
『錢屋五兵衛の殘黨江戸攪亂を企つ』との飛報に、幕府捕方は急遽其巣窟に殺到したが、妖女お蘭怪童お玉、分けて隻腕の怪劍士篠原求馬の爲、脆くも潰されて敗退した。

其同じ夜、妖女お蘭は此怪劍士求馬を、濱町の隅に隱れ住む故五兵衛の孫娘お京に引合せた。

噫お京！それこそは嘗て求馬の戀を拒けて、加賀の家老横山遠江の甥新太郎に走つた女である。而も今は其新太郎に見捨てられ、果敢なき生を送る身だとか。求馬の腸は煮返つた。横山遠江といへば己れに取つて不倶戴天の親の敵。『此上はお京殿の恨みも兼ね、其横山の伯父甥を眞つ二つ』——勃然として隱れ家を駈出る彼の鼻先きへ、突如闇中から斬りかけた一閃の刄影。

（前號までの梗概）

一喝の氣合に相手を倒した



昔の戀人、錢屋五兵衞の孫娘お京と別れて、濱町河岸へさしかかつた、隻手の劍豪篠原求馬へ、闇を劈いて、颯と斬りかけた者があります。

加減も容捨もない凄まじい太刀筋、眞つ二つと見えた求馬は、さすがに危ふいところで身をかはしました。

「何者ッ、名乘れッ。」

二三間跳び退つて、打と鍔際を叩きましたが、併し、それに挨拶するやうな生優しい相手ではありません。求馬の聲を闇の中に聞き定めると、二度目の太刀は、飛込み樣風を剪つて右の胴へ入ります。

二間あまりを一氣に飛んだ身の輕さ、一本しか腕の無い求馬の弱點を知つて、眞一文字に防ぎの無い右胴へ斬り込んだ鋭さは、相手が求馬でなかつたら、全く避けやうも無かつたでせう。

「己れッ、卑怯な奴。」

僅かに身を捻つた求馬、拔きもやらぬ一刀の柄に、發止と白刃を受止めました。柄糸はバラリと斷れて、亂れ獅子の目貫が鏘然と鳴ります。

相手は一歩退きました。が、息も吐かせぬ三の太刀、求馬の喉笛目がけて、突いて來るのを、左手に拔き上げた、鍔際に圍つて、

「か――ッ。」

裂帛の氣合、

大川の水を、漆黑の闇ごと、眞つ二つに叩き割つたやうな、それは譬へやうも無い物凄いものでした。

相手の曲者は、あまりの猛襲に氣を打たれて、刄を構へたまま、ヨロリとした樣子、すかさず求馬は颯と寄つて、體當りを一つ、脆くも倒れるのを、のしかかるやうに、右足で踏み締めて了ひました。

覗いて見ましたが、如法の闇、曲者の顏までは見定めが付きません。

一喝の氣合で、相手を倒すといふことは、如何にも不思議に思へますが、近代の進歩した精神科學は、反つて、これが不思議でも何んでもないことを證明して居ります。怪力亂神を語らず、と、昔の聖人は訓へましたが、五十貫の鐵啞鈴を振り舞はし、二百數十貫の物を持上げる人間が、我々と一緒に生活して居ることが、最近の新聞に傳へられた位ですから、見ぬ世の武藏坊辨慶も拳骨和尚も、決して架空の人物とは申されません。

精神力に於てもその通りで、猛獸を睨み縮めるとか、氣合で敵を倒すとか言ふことは、今日の精神科學から言ふと、指頭術や、御靈氣ほどの不思議でもないのです。素より誰にでも出來ると言ふものではなく、六分、或は七分迄は生れ付き精神力の旺んな人に具はる特長で、あとの三分乃至四分は、その人の非常な鍛練で自得するより外に方法は無いのです。

澤庵禪師、梅辻規淸、柳生重兵衞、――など言ふ人は、この精神力の體得者で、大政治家、英雄、劍聖、高僧――などは、多かれ少なかれ、この力を持つて居ります。

精神力の不思議な働きは、書けば長くなりますが、詳しい事は後日に讓つて、差當り私は、風流活人劍のロマンスに還らなければなりません。

美少年村之介に 惡罵と凌耻の嵐

『お蘭、お蘭、灯を持つて來い。』

篠原求馬は、曲者を片手業に押へたまま、振り返つて、今出て來た路地の方へ、遠音に響かせるやうな、一種の囁やきを送りました。往來も絕えた濱町河岸、劍戟騷と知つては、雨戶を開けるやうな無謀な近所も無いのですから、大きな聲を出しても差支は無いやうなものですが、求馬はさすがに、こんな大人氣の無い圖を、あまり多勢の人に見て貰ひ度くなかつたのです。

『ハ、ハイ、ちよいと、お待ち下さい。』

突嗟の出來事、さすがに提灯までは用意し兼ねたものか、お蘭は行燈を提げて、お京と一緒に路地の外へ飛出しました。

『怖いことは無い、喰ひ付きも何うもせぬ、もつと近く。』
求馬に言はれて、組敷かれた曲者の前へ、行燈の口を向けたお蘭は、
『あッ。』
思はず聲をあげて了ひました。
求馬の膝の下に、神妙に泥を嘗めて居るのは、水も垂れさうな前髮立の美少年、下げ緒の早襷に絞つた曙染の大振袖、精好の袴の折目まで眞新しい、それは繪から抜け出したやうなお小姓姿だつたのです。
『村之介殿とか言はれたな。』
篠原求馬は、たつた一本の手に引起すと、自分の弟でもいたはるやうに、少年の胸から裾へかけて、斑々たる泥を拂つてやらうとするのでした。
『あッ、飛んでも無い。』
少年は飛退つて、凍る大地の上へ兩手を突きました。
『無禮を仕りました、大縣村之介と申します、御見知り置き下さるやう。』
『ホウ、阿部勢州樣の御小姓であつたな、それにしても、心得難き太刀筋。』
『ハツ。』
『あんな激しい斬り込みを、闇の中から喰はされると、大抵の者は助からぬぞ、怨は何んだ、親の敵とでも思つたか、それとも、主君の言ひ付けか。』
求馬は腑に落兼ねた樣子で、瞬く灯の前に、折目正しく坐つた地上の美少年を見やりました。精々十七八でせうか、白玉に刻んだやうな面、黑曜石の眼、唇は女の子のやうに紅く、額は智謀逞ましい中年男のやうに秀でて居ります。
『飛んでもない。』
『隱すな、あの氣組は洒落や冗談では無い。』
求馬は今になつて、次第に眞劍さを加へます、謎の美少年の返答一つでは、恐らく、腰間の一刀が、血を啜らないとも限りません。
『篠原樣の本當の腕が知り度かつたので御座います。』
『何？』
『先程、中の鄕の袋路地で、一度身の程も知らず立ち向ひましたが、妖しい眼の光に射縮められて、存分に立ち合ふこともなり兼ねました。』
『それで？』
『闇の中なら、あの眼の妖しい光も見えまい、不意に斬りかけたら、厭應なし、そのお腰の物を抜いて防ぐであらう、――私

は篠原様の本當の腕が知り度かつたので御座います。』

大縣村之介の眼――求馬を見上ぐる清らかな眸には、好奇と熱心が火の如く燃えて、水の如く冷たい求馬の心を、妙に掻き亂すものがあるのでした。

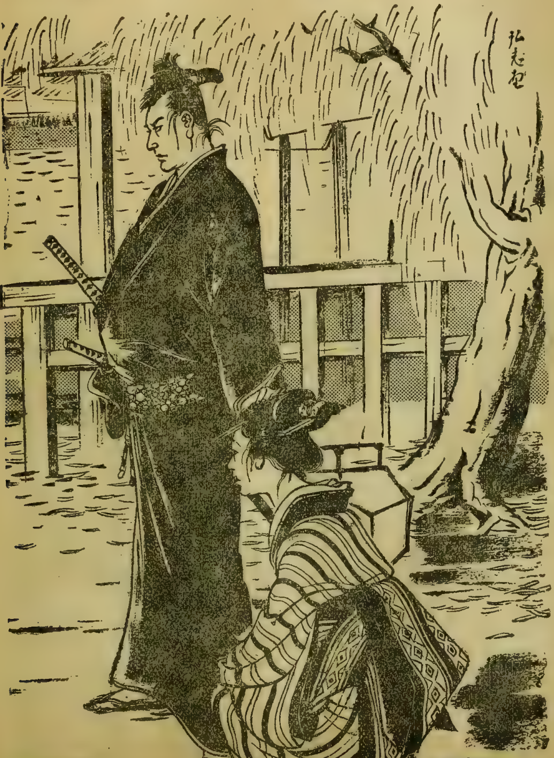
『つまらぬ道樂だ、若し俺が弱かつたら何うする。』

『致し方が御座いません、斬つて捨てるまで。』

『フ――ム、顔に似合はぬ無法者だな、で、俺の腕を見て、何うしようと言ふのだ。』

篠原求馬も、相手の出やうが亂暴なので、少しムツとした様子です。

『弟子入が致し度う御座います、刃も抜かずに、名ある劍豪を三人五人と追ひ退けた不思議な氣力、闇の刃を事も無げに封じた、あの早業、私はそれが習ひ度いので御座います、天下廣しと雖ども、この大縣村之介が師と仰ぐは、篠原様より



外には無い――』

『これ〳〵逆上てはいかぬ。』

一斛の冷水を浴びせられたやうに、村之介はハッと求馬を振り仰ぎました、たつた一本の腕を懷に容れた、傍若無人の立ち身のまゝ、求馬は凡そ輕蔑し切つた視線を、村之介の上へ投げかけて居るのです。

『逆上?』

『さうだ、お前は少し逆上て居るやうだ、主君の御覺が目出たいので、ツイふら〳〵とそんな氣持になつたのであらう、弱輩の身を以つて、一藩に人も無氣なる事を言ふと、世上の人が笑ふぞ。』

『ハッ。』

『そんな生若さで、唯心流の玄妙が學べるものでは無い、出直すが宜い。』

『ハッ。』

『中の郷で、隣屋敷の物見から飛降りたところを見ると、少しばかりの身輕さが自慢のやうだ、――併し、そんなものは武道のいろはだ、嘘だと思ふなら、中の郷の加賀屋のお玉――お前も知つて居るであらう、先刻屋根の上から黄金をバラ撒いた、あの小娘に逢つて見るが宜い。

『…………』

『あのお玉といふ小娘に勝てる見込が付いたら、何んでも敎へてやる、なまじ、少しばかりの身輕さに慢じて、物見から飛降りたり、少々の腕に增長して、力の知れない相手に斬り掛ける

やうな事では、俺の唯心流は教へられない、出直すが宜い。』
『…………』
何んと言ふ辛辣な惡罵でせう、大縣村之介は、血の出るほど唇を噛んで、默然として俯向くばかりです。
『歸れ〳〵、口惜しかつたら、せめてお玉に勝つて來い、――武道は上を見れば果てしは無い、劍は取らないが、俺には駒井駒造と言ふ先生がある、駒井駒造殿の上には、これも劍とは緣が無いが、梅辻規清先生がある、慢じてはならぬぞ、其方如きは天下に何千百人あるか判らぬ、伊勢守の愛臣ではあるだらうが、俺の目から見れば小兒も同樣だぞ。』
『ハイ。』
惡罵と凌辱の中に、消えも入り度い思ひだつたのでせう。村之介は首うな垂れたまま、後ろ退りに、闇の底へ消え込んで了ひました。

錢五の金は貰はぬ
求馬の我慢

『可哀想ねえ、求馬樣。』
お蘭は大地に置いた行燈を提げ乍ら、闇に紛れて行く、お小姓姿を見送ります。
『伊勢守に言ひ付かつたのだ。』
『えツ。』
『可愛らしいと思つて油斷をしてはならぬぞ、三十五萬兩の在所を忽ち嗅ぎ出される。』
『まア、求馬樣。』
『何がまアだ、女は綺麗なお小姓でも見ると、直ぐそんな氣になるから危ない、用心するが宜いぞ、お蘭、さらばだ。』
『あツ、待つて下さい、求馬樣。』
『まだ用事があるか。』
去り淀む求馬、後ろからお蘭とお京は、何やら囁き交し乍ら、その孤影悄然たる隻手劍豪の、後ろ姿を見て居りました。
羊羹色の紋付、七つ下りの袷、右腕の肩から無いのも寒さうで、如何にも尾羽打枯した求馬の姿です。
『ほんの少しばかり。』
お蘭が引止めて居る間に、お京は家へ小走りに歸りましたが、やがて、何やら持重りのする物を、双の袂に搔い抱くやうに、お蘭のところへ持つて來ました。
『求馬樣、お孃樣から、心ばかりの品、御納め下さるでせうね。』
『何?』
うつかり出した求馬の左手へ、お蘭は袂に包んだものをそつ

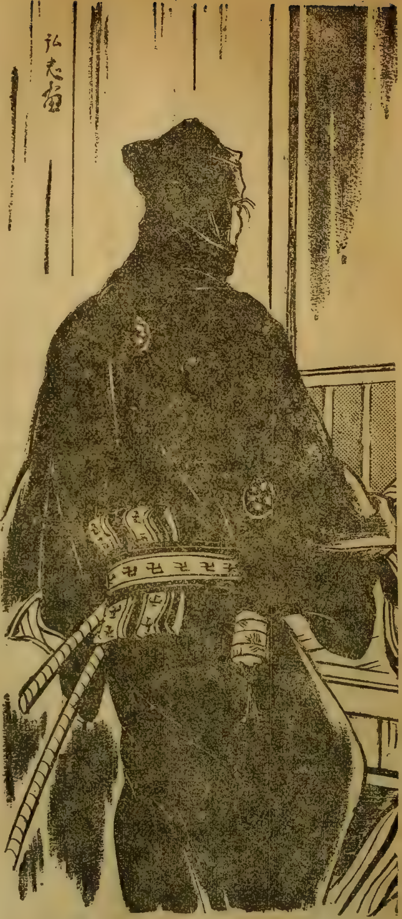
と置きます。
　ズシリと持重りのする品、ハツと眼を落すと、切餅が八つ、紛れもなくそれは、小判で二百兩の大金です。
『金ではないか。』
『お腹を立てないで下さい、求馬樣、浪々の御身の上は何彼と御不自由、お孃樣の志で御座います。』
路地の闇へ小さくなるお京へ、行燈の灯を差し向けるやうに、お蘭は取なし顏に物を言ひます。
『折角だが、これは斷わる。』
『えツ。』
『見る通り、俺は尾羽打枯して居る、が、父上、篠原主殿は、錢屋五兵衞殿の拔け荷に掛り合つたと誣ひられ、御家老横山遠江の指金で、詰腹切らされて相果てた。』
『…………』
『それは、加州百萬石安泰の爲、幕府へ申譯の細工であつたが、亡き父上の汚名を雪ぎ、横山遠江に思ひ知らせるのは、子として俺の仕事であるに何んの變りがあらう。』
『…………』
『今、横山遠江と、その甥――お京殿を捨てた、あの新太郎の首を申受けに行かうと言ふ矢先、錢屋一家の金を貰つて武士が立たうか。』
『求馬樣。』
『お蘭、氣の毒だが、此金は返すぞ。』
　求馬はお蘭とお京に近づきましたが、後ろに退つて、切餅を受取りさうも無いと見ると、思ひ切つた樣子で、路地の闇へポンと投りました。
『あツ。』
紙は破れて、霜の大地に、ザクリと散る山吹色の小判。

お蘭をいどむ
「跛者劍客の正體」

『親分、見なすつたかい。』
『シツ。』
御用聞の黑船の丹七は、子分の朧の三太をたしなめて、求馬の後ろ姿を見送りました。
『追つ驅けませうか。』
『放つて置け、あの浪人は空つ尻だ。』
『へエ。』
『兇狀持を嗅ぎ出すんぢやねえ、三十五萬兩の在所が判つたら、此處掘れワンワンと言や役目は濟む。』

『飛んだ花咲爺さ、ところで親分、あるところにはあるものだねえ。』
『何が？』
『金を湯水のやうに費ふと言ふのはあれのことだ、癪にもさはるが羨ましいよ、俺も一生に一度で宜いから、小判で立てた湯へ入ツて見てえ。』
『馬鹿野郎、仕舞湯に茹つて、下手な都々逸を唸るのが手前の身上だ。』

『情ねえ身上だよ。』
『シツ。』
丹七は子分の袖を引いて、際限も無い饒舌を封じました。
此時、兩國の方へ消えた求馬の姿と入れ換るやうに、闇の精のやうな人間が一人、路地の奥、お京の家の灯に慕ひ寄つたのです。
『誰だい。』
とお蘭、お京を庇つて、入口に立ち塞がると、後から續けて來た、影のやうな人物に、美しい半面を見せました。
『俺だよ。』
『あツ。』
『相變らず綺麗だなアお蘭。』
『畜生ツ、何んだつて又出て來あがつたんだ。』
お蘭は家の中へ飛込み樣、後ろ手に雨



戸を締めようとしましたが、どつこい、男の足は早くも敷居を踏んで、一寸も動かさせません。

『お前は一年振りだらうが、俺の方から言へば、毎日お前を見張つて居たよ。』

『えツ。』

『ツイ半刻前も、中の郷の加賀屋の袋路地で顔を合せたではないか。』

『あツ、さう言へばお前。』

『近頃江戸中に響いた跛者劍客、大藏鐵心とは世を忍ぶ假の名、眞本名は——名乘るのも野暮だ、大伴の黒主とでも、在原の業平とでも勝手に思へツ。』

ヌツと灯の中へ姿を現はしたのは、姿こそ變つて居りますが、紛れもない、跛者劍豪大藏鐵心、黒羽二重をゾロリと着流して、細身の兩刀を少し落し加減に、黒の覆面頭巾、傍若無人な懐手、お蘭を見据ゑ乍ら、胸から手を出して、頭巾を脱る恰好は、何う見ても素直な劍術使ひではありません。

『お前は——よくものめ〳〵と、斯んな場所へ。』

お蘭の嵩にかゝる啖呵を、

『お互だよ、去年の秋の大地震で、世の中がすつかり變つて了つた、錢五組の一味も、江戸へ入つて、斯うのさ張り返つて居

られる世の中だ、お互に洗ひ立てるだけが野暮さ、なアお蘭。』

苦味走つた顏、鋭い眼、高い鼻、惡魔的な苦笑が顏中に瀰漫すると、何んとも言へない物凄い表情になるのを、お蘭はかき退けるやうに手を振りました。

『歸つておくれ、お前などに用事は無い。』

『用事は俺の方にあるよ、中の鄕に居ると、あのお玉とか言ふ娘が見張つて居て、染々物を言ふこともならない。』

『畜生ツ、歸らないと大きな聲を出すよ。』

『宜いとも、存分に張り上げて見な、錢屋五兵衛の仲間が此處に隱れて居る、褒美の欲しい者は、來て捕へるが宜い――とな。』

『えツ、お默りよ。』

『默つてやるとも、其代りお前の身體が入用だ、三年越し付け廻した心中男だ、滿更憎くもあるまい。』

『何をつまらない、近寄ると喰ひ付くから。』

お蘭は腕を鉾に、上り框に片足を掛けて、逃げ腰の姿態になり乍ら、それでも、口だけは容易に負けては居ません。

『そのピンシヤンするところがたまらないよ、惡いことは言はない、一緒に來るが宜い、大藏鐵心今は町道場の主だが、年內には御老中阿部伊勢守樣の御取なしで直參になる筈だ、その奥方は大した出世だぜ。』

『勝手にしあがれ、盜賊猛々しいとはお前のことだよ。』

エレキテールの呼鈴は鳴り渡る

大藏鐵心は、お蘭の惡罵を耳にもかけませんでした。ツと寄つて、その華奢な手を引くと、口ほどにもない非力なお蘭は、引かるるままに、

『あれツ。』

よろけて、鐵心の腕の中へ倒れ込みます。

『騷ぐな、お蘭、取つて食はうとは言はぬ。』

『えツ、お前なんかの儘になる位なら、犬に食はれた方が餘つ程優しだよ。』

『言つたなお蘭。』

『臭いよ、畜生ツ、放さないと大きな聲を出して、町內中の人を呼ぶから。』

『先刻から、遠慮することは無いつて言つて居るぢやないか、存分に張り上げて見な。』

引寄せたお蘭の身體が、美しい鳥のやうに、腕の中に羽搏くのを、大藏鐵心は、享樂し切つた心持で、犇々と抱き寄せま

した。

火のやうに激しい氣性の持主なるお蘭も、惡人乍ら、大藏鐵心の筋金入の腕に叶ふ道理はありません、殆んど無抵抗に引寄せられて、大きい薄い唇――少し紫染んでさへ見える中年男の唇が、その豐かな頬へ、刻んだやうな鼻へ――と臨みます。

『お孃さん合圖。』

お蘭は必死と藻掻き乍ら、首を左右に振つて、僅かに斯う言ひました。

其時まで呆氣に取られて見て居たお京、お蘭の注意にハツと氣が付くと、柱に取り付けた小さい釦――その頃ボタンと言ふ言葉はありません、――得體の知れぬ象牙の疣を押すと、手に從ツて何處とも知れず、遙かのあたりに、リンリンリンリンリンと高鳴る鈴の音、

『あツ。』

驚く大藏鐵心の頭の上のあたりで、それに應へるやうに、もう一つの鈴が、リンリンリンリンと消魂しく鳴り始めたのです。

大藏鐵心は、あまりの事に仰天して、お蘭の身體を離すと、一歩戸の外へ出ました。

入れ違ひに、隣の家の木戸を開けて飛込んで來たのは、五十年輩の老實な男、

『何うした〳〵。』

『あツ、駒井の小父さん、曲者がツ、曲者がツ。』

勝氣のお蘭も、氣が緩むとツイ身體が挫けて、外から入つて來た中老人に縋り付きました。

『何んだ、お蘭姐さんか、日頃のお前さんらしくもない、何に驚いたんだ。』

『泥棒が、あの。』

『私の仕掛けて置いた、電氣の鈴に驚いて逃げ出したと言ふのだらう、ハツハツ、ハツハツ、これは面白い。』

駒井駒造と言つて、兩國へ小屋を出して居る名題の手品師ですが、その頃幕禁を犯して機械類を紅毛人から買入れ、隱れた窮理學(今日の物理化學)の大研究家として、當時の學者間に重きをなした人物です。

元は幕末の大精神家で、幕府の忌諱に觸れ、八丈島に流謫中死んだ、賀茂の神主、梅辻規清翁門下の逸足、今の世の諸葛亮と言はれた、諸葛亮三郎の、これが成れの果てだつたのです。

篠原求馬に虎を睨み縮める術を敎へたのも此人、輕業のお玉や、蘭醫杉田成卿と共に、通事多三郎ことフレデルストンを助けて、無事に神奈川條約を締結さしたのも此人の手柄だつたの

です。

老實で、溫厚で、少し爺むさくさへある人柄は、兩國の手品輕業で、江戸中の人氣を渫つて居る駒井駒造とは見えません、ましてこれが、窮理學の大家で、梅辻規淸翁の衣鉢を繼ぐ、稀代の精神家、諸葛亮三郎とは誰が氣が付きませう。

『ハツハツハツ、これは面白い。』

駒井駒造はもう一度聲を放つて笑ひました、お蘭やお京の驚いた顏が面白いのではなく、自分が蘭書から學んで取付けた電氣の鈴が、劍豪大藏鐵心を走らしたのが、腹の底から愉快だつたのでせう。

求馬を討つより 三十五萬兩を探せ

閣老、阿部伊勢守正弘は、何やら濟まぬ心持で眼を覺しました。輕い朝の食事を形ばかりに攝ると、登城の仕度を整へる間に、小姓の大縣村之介を呼び出したのです。

『村之介、御苦勞であつたな。』

『恐れ乍ら、御機嫌の體を拜し――』

『あ、これ〳〵挨拶はそれ位でよい、昨晩の始末が聽き度い、何うであつたな。』

愛臣村之介の前髮姿を、少し興じた調子で斯う見やります。

『面目次第も御座いません、散々の首尾――』

『何？』

『恐れ乍ら此村之介に、長の御暇を仰せ付け下さるやう。』

『何んと申す。』

『この村之介如きを人がましく御吹聽遊ばしては、わが君様の御榮えに係はります、一と修業いたして歸るまで、御暇を下し置かれまするやう――』

村之介は、廣い額を靑疊に摺り付けて、斯う言ふうちにもポロ〳〵と泣いて居ります。

『何んな事があつたのぢや、先づそれから申せ、暇をくれとあらば、やらぬでは無い。』

伊勢守も仔細あり氣に見て取つたか、膝を前めて、悲憤の淚に暮る村之介を、慰め顏に見やるのでした。

『あの浪人者の後を慕ひ、兩國まで參りましたところ、錢屋五兵衞の孫娘――お京と申す者の隱れ家へ入りました。』

『それを突き止めたのは、大變な手柄ではないか。』

『與力、佐伯東一郎殿に申しましたところ、町方役人はとうの昔から御存じで。』

『下世話に申す餅は餅屋だ、其方に手柄にはならなかつた

かな。』

　下情に通じた伊勢守は、こんな洒落を言つて居ります。

『そればかりでは御座いません、あの浪人の歸りを待ち受け、氣合も掛けず斬りかけましたところ。』

『無法だな。』

『手もなく組み伏せられて、面體を往來の泥に塗れさせた上、散々の惡口、――恐れ乍ら我君の御尊名までも引合に出しました。』

『フ――ム。』

『あの篠原求馬とか申す浪人の首を提げて歸るまで、暫らくの御暇を御許し下さるやう、平に願ひ奉ります。』

『これ／＼、お前は、あの男の首を取る積りか。』

『ハツ。』

『それより予は、錢屋五兵衛が隱した、三十五萬兩の在所が知り度いのだが――』

『…………』

『言ふ迄もなくその金は、お上で沒取洩れの不淨財だ、それを召し上げて、海防費に加へることが出來れば、露佛梵鐘を破却して、大砲を鑄るやうな事も止むであらうし、旭丸ほどの軍艦が十隻も造られる。』

『…………』

『攘夷派の人々が、神奈川條約を非議しても、今の有樣では如何ともなり難い、開港も、攘夷も、御藏に金があつての上の事だ。』

『…………』

『村之介、その方長の暇を願ひ出た序、三十五萬兩の在所を探つて來ぬか、篠原求馬とやら言ふ、痩浪人の首を取るより、その方がどんなに天下の爲になるかわからぬぞ。』

　思ひ入つた伊勢守の風情に、村之介はもう一度ひれ伏しました、新しい涙――蒲柳の質で、國事に盡瘁して居る主君のやつれを見せられる新しい涙が、ハラ／＼と疊の上へ散ります。

『解つたか村之介、一人の敵を斃すよりは、天下の爲に命を捧げる氣は無いか。』

『恐れ乍ら、其儀――』

『引受けてくれるか。』

『命の限り、御言葉に添ひ奉ります。』

『よし、行け。』

『ハツ。』

　涙乍らに引下る村之介と入れ換つて、

『恐れ乍ら、御機嫌の體を拜し、恐悦に存じます。』

『數馬か。』

『ハツ。』

愛臣の内藤數馬、用事あり氣に平伏して居ります。

『何んぢや。』

『今宵、御上屋敷に於て、御氣晴らしの爲、江戸の高名藝人を御召遊ばすやう。』

『誰の智惠ぢや。』

『大藏鐵心の目論見に御座ります。』

『フ――ム。』

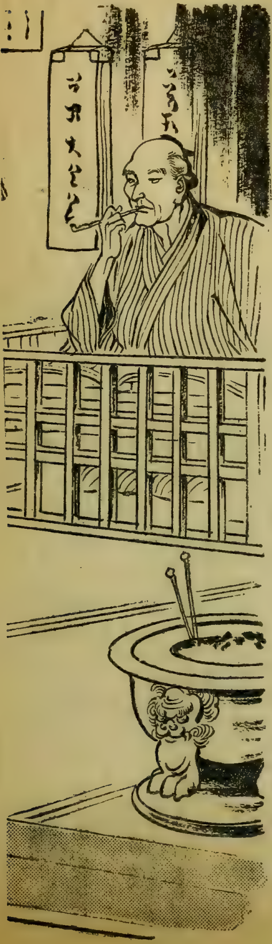
『次第書はこれに。』

差出した書面を一と通り眼を通すと、

『よきに計らへ。』

『ハツ。』

阿部伊勢守は席を起ちました。刻下に迫る海防を充實して、攘夷黨の輿論をなだめることが出來なければ、



何時でも自分の地位を投出さうと言ふ決心、秀麗な眉宇が次第に曇つて、日一日と、寛濶さを喪ふのは、傍近く仕へる者にもよく判ります。

町人に身をやつして
お玉の弟子に

その日の夕刻、中の郷の質渡世、加賀屋九兵衛の暖簾をくゞつた若い男がありました。前髪立、遠州縞の袷、姿は町人に相違ありませんが、玉を刻んだやうな美しさ、氣高い品位も、角の取れない言葉使ひも、素より町人ではありません。

『御免。』

『入らつしやい。』

九兵衛は帳場格子の中から、額越しに見やりました。

昨夜の今日ですが、すつかり落付いたもので、逃げ出すどころか、店を締めようともしません。

恐らく智恵者のお蘭が、老中阿部伊勢守の引揚げ振りの見事なのから察して、暫らくは無事と

判じた爲でせう。

『此處に、お玉殿といふ方が居るであらうな。』

『居るよ。』

九兵衞の眼はギョロリと光りました。遠州縞を着た丁稚手代風の男が、こんな口を利く道理が無いと思つたのでせう。

『ちよつと逢はして貰ひ度い。』

『いやだぜ若えの、お玉はあんなに荒つぽい娘だが、年から言や娘盛りだ、若い男に逢はせるわけには行かないよ、――それとも約束でもあると言ふのかい。』

怪商錢屋五兵衞の密貿易に、船長まで勤めた九兵衞、相手が腳臭からうが、侍の匂ひがしようが、そんな事に驚くやうな爺仁ではありません。

『飛んでもない、――昨夜、篠原求馬殿に出逢つた節、お玉殿に體術を學ぶやうにと敎はつて參つた――』

『何んだ、お前さんは、伊勢守樣のお小姓かい、變な風をして來るから、俺はまた、お玉坊へチョツカイを出しに來た町內の若い衆かと思つたよ。』

『…………』

『成程さう言へば武家言葉だ、ハツハツハツ、こいつは大笑ひだ、――お蘭、お玉坊は居るかい、昨夜濱町で泥を嘗めさせられたお小姓が見えたぜ。』

遠慮もなく張り上げる九兵衞の後ろへ、美しい顏が二つ、暖簾を分けて、實つたやうに莞爾しました。

上のは九兵衞の娘お蘭、下のは怪少女お玉、年はざつと十位違ひますが、美しさに優り劣りがありません。お蘭の艶やかさ、お玉の淸らかさ、本當に二顆の名玉をかけ並べたやうで、覺悟して來た筈の大縣村之介も、何んとなく顏が赤くなります。

『ところで、主人、拙者は武術修業の爲、主家を浪人して參つたが、暫らく此店で使つては下さるまいか、仕事の合間々々、お玉殿に、體術の玄妙を授けて頂き度い。』

折入つた樣子で、村之介は上り框に双手を突きました。前髮を下げると、鼻筋がスツと通つて、その優しさと言ふものはありません。

『飛んでも無い、髮形を直しや、その日から商人になれると思ふと大違ひだ、此處へ坐つて、その左樣然らば、拙者――てなのをやらかして見ねえ、客の方で驚いて、皆んな歸つて了ふ。』

九兵衞は雁首を引つ叩くと、白い眉を顰めて、頑固に首を振りました。

『さう仰しやらずに御主人、店が不向とあらば、庭掃き、水く

み、薪割、何んなと致さう、是非此處へ止め置いて頂き度い。』

『ならないよ。』

『たつてならぬと仰しやれば、此儘幾日でも此處へ坐り通すが、それでも――』

『冗談ぢやねえ、まるで人間の押賣だ、何んと言つたつて、要らねえものは要らねえよ。』

『それでは致し方が無い、御許があるまで、此處に――』

『あ、これ〳〵そんな場所にとぐろを卷かれてたまるものぢやねえ、斷つて歸らなきア摘み出すぞ。』

九兵衞は元氣者でした、いや、どうかすると、無法者らしくさへ見えることがありました。村之介の執拗な態度に、すつかり腹を立て、帳場格子の中から、算盤を片手に立上りました。千石積で、荒くれた船頭衆を叱り飛ばした調子で、この美玉のやうなお小姓を吹き飛さうとかかつたのです。

『爺さん、お待ちよ。』

暖簾から覗いて居た艷麗な方の首―― 娘のお蘭が到頭飛出しました。

『放つて置いてくれ、此野郎に中の鄕の土を嘗めさしてやらなきア、腹の蟲が納まらねえ、濱町の土と何方が鹽辛いか、よく覺えて行きあがれ。』

娑婆つ氣でハチ切れさうな九兵衞、若いのに甘く見られて、我慢をして居るやうな男ではありません、猛然と跳びかかる胸倉へ、娘のお蘭は物馴れた調子で、サッと飛付きました。

『お止しなさいよ爺さん、年寄のくせに見つともないぢやないの、そんなに此家に居たきア、置いて上げたら宜いぢやありませんか。』

『何を、だから俺は女が嫌ひだ、少しのつぺりしたのを見ると、いやに肩を持ちあがつて。』

『あつ爺さん、何んて惡い口だらう。』

『さうぢや無いか、見す〳〵伊勢守樣の家來と知つて此處へ置くのは、御老中の犬を飼つて置くやうなものぢやないか。』

『だからさ爺さん、判らないねえ、世間並の武者修業や奉公人なら斷わるが、御老中の御家來だけに、默つて置いて上げた方が宜くはない、ね、ね。』

『いやな眼付きをするなよ、俺はそんな事の通用する人間ぢやねえ。』

『判らない爺さんだよ、じれつ度いねえ、町方役人が出入に繼け廻して、うるさくてやり切れないから、せめて御老中の家來を置いて上げようぢや無いか、ね、ね、ね。』

お蘭の眼の言葉を、九兵衞は漸く呑込んだ樣子でした。

『なあ――る程、手前は軍師だ、女には勿體ない。』
『つまらない事を言つておくれでない、爺さん、玉ちやんが笑つてるぢや無いか。』
『なあ――る、老中の家來だから。』
『まだ感心して居るよ、さア、爺さんの機嫌が變らぬうち、上り込んで下さいな、お前さんの名は一體何んて言ふの？』
『村――、大縣村之介。』
『まア、何んと言ふ尤らしい名前だらう、村さんだけで澤山ぢや無い？』
とお蘭、手を執らぬばかりに村之介を引上げます。
『いづれとも宜しきやうに。』
『ホ、ホ、ホ、ホ、何んと言ふ御挨拶でせう、腰の物を取拂つたつて、それぢや何んにもなりはしない。』
『ハツ。』
『玉ちやん、お出よ、お前さんに弟子入がし度いとさ。』
『嫌、お蘭姐さん。』
お轉婆なやうでも、お玉も取つて十五でした、水も垂れさうな村之介の美しさに、ツイ出場を失つて、暖簾をまさぐり乍ら、可愛らしい顏を、出したり引込めたり、引込めたり出したりして居ります。
『何をして居るのさ、玉ちやんらしくも無い、昔取つた杵柄で、邯鄲夢の枕でも、鶯の谷渡りでも何んでも敎へて上げるが宜い、ホホ、ホホ、ホホ、ホホ。』
お蘭の嬌笑が、いとも朗らかに、質屋の店一杯に響き渡るのでした。言ふまでもなくお玉は、小玉太夫と名乘つて一年前までは輕業の名人で鳴した娘だつたのです。

閣老邸に集る 江戸遊藝人の中に

神田昌平橋内の阿部伊勢守上屋敷では、その晩、閣老伊勢守、役目の欝晴らしの爲とあつて、その頃江戸中に聞えた、一流の藝人を呼び集め、表も奥も、立ち交つて、時ならぬ餘興に笑ひさざめきました。
舞臺は大書院の次の間、主人伊勢守は、南の町奉行池田播磨守と一緒に、二間床を後ろにし、脇息にもたれたまま、片手に盃を擧げて、入れ代り立ち代り演ずる遊藝を、樂んで居りました。
書院から續いて、三間押つ通しの廣間は、全部で百疊あまり、家中の重臣はもとより、奥方、奥女中までも座に連なつて、まだ正月氣分の拔けきらぬ、他愛もない樂しみに餘念もありま

せん。
　輝やく銀燭、さざめく笑ひ、炭の香と、酒の匂ひと、それに高貴な脂粉の香と蒸れ合つて、何時盡くるとも知れぬ春興が、夜と共に深まさるばかりです。
　第一番に出たのは、三味線の岸澤古式部、續いて、端唄の歌澤芝金、これは初代の名人です。それから、話し家の古今亭志ん生、一座をすつかり笑はせて引下ると、その次は百瀬檢校、これも一代の美音家、滿座はさながら醉はされたやう。
　番數が進んで、最後に出て來たのは、當時東兩國に手品輕業の大看板を揭げ、江戸中の人氣を一人占めにして居る駒井駒造、五十左右の老實な人體、霰小紋の裃、折目正しく末座に平伏しました。
『駒井駒造と申します、奇術は名譽の腕前、今宵は取りわけ秘藏の品玉を御覽に入れる由に御座ります。』
　取次の聲につれて、駒造はもう一度、疊に額を押當てました。
『名前は存じて居る、苦しうない、近う。』
『…………』
『直答を許すぞ、存分にいたすが宜からう。』
『ハツ、恐れ入ります。』
　駒造は靜かに頭を擧げて、伊勢守の顏を見ました。
『其方の顏を存じ居るやうに思ふが、何處で逢つたであらうな。』
『ハツ。』
　恐ろしい眼力、駒造は思はずハツとしました、米利堅人から窮理の本や機械を求め度さに、神奈川の異人宿へ、爺やになつて入り込んで居る頃、阿部伊勢守は老中として、外交談判の衝に當り、折々やつて來て駒造の顏を見て居るのです。
『追つて思ひ出すだらう、兎に角、品玉とやらを致せ。』
『ハツ。』
　駒造は庭先から差し廻した、南京箱のやうなのを二つ左右に据ゑると、蠟燭の灯をかき立てて、ピタリと着座しました、伊勢守から五間あまり、思ひ切つて近く差し招いだものですが、其代り左右前後は、家中の荒武者が取圍んで、イザと言はば獵犬のやうに飛付かうと構へて居ります。
『最初は小手調べ、扇の奇術。』
　銀燭に照された白扇が、翩飜として空に舞ふと、やんや、やんやと褒め言葉が湧きます。續いて『歌留多の術』『當てもの』と次第に進んで、やがて、氣合一つで、兎や鳩などを眠らせる術、最後は、懷中、髷の先、拳、膝口などから、凄まじい火焰

を出して、一座を冷々させます。
駒井駒造は最上等の成績で番組を了り、三尺ばかり下つて平伏しました。
後には湧き上る褒め言葉、灯も搖ぐばかりです。
『恐れ乍ら、それなる術に、不審の廉が御座ります。』
遙か末座、疊縁の小暗いところから、にじり出た者があります。
『お、大藏鐵心であつたか、駒造の術に不審があると申すか。』
氣輕な伊勢守は、直々に浪人者へ言葉をかけました。
『御言葉で恐れ入ります、手品、品玉は、昔から方式の備はるもの、新しい古いと申しても、種の無いものは御座いません。』
『フ――ム。』
『駒井駒造の奇術とやら申すもの、手品の種らしいものは一つも御座りません、扇を舞はせ、兎、鳩を眠らせ、火焰を弄ぶなど、悉く切支丹の魔法から採つたもの、紛れもなく禁制の品玉に御座ります。』
『何んと。』
『不審の廉は、そればかりでは御座いません、駒井駒造と申して居りますが、本名は、――八丈島流配中の梅辻規淸門下、諸葛――』
言はれて駒井駒造は、遙かの方へ眼をやりました、柱の蔭で、定かには判りませんが、物越し、言葉の癖、紛れも無い それは、梅辻先生の門を追はれて、器用で體得したいろ〳〵の術を惡用し、惡事に惡事を重ねて居る、庵原山之丞だつたのです。
昨夜もお蘭を手籠にしようとした曲者、大藏鐵心と名乘つて、劍客面をして、權門に取入る毒虫、
『默れ、庵原。』
ツイ駒造も聲が高くなりました。
『恐れ乍ら、其者、錢屋五兵衞の不淨財三十五萬兩の在所を存じ居ります、繩打つて糺明遊ばすやう――』
自分の素性がバレ相になると、庵原山之丞の大藏鐵心、威猛高になつて最後の切札を投出します。

濛々たる煙の中に
殘した千兩箱が十箇

『何を奸賊ッ。』
膝を叩いて立ち上らうとする駒井駒造、
『騷ぐな、御前だぞ。』
安藤數馬は聲高らかに制しました。
『駒造とやら、大藏鐵心の申すことも一理ある、其方錢屋五兵

衛の不淨財の在所を存じ居るに相違あるまい。』

伊勢守は一番冷靜でした、御前を滑らうとする駒造の上へ、斯う、動きの取れぬ質問を浴せかけます。

『存じませぬ――と申上げても、御許しは御座りますまい、大方存じ居ります。』

『何と申す。』

愕然とした一座、空氣は鋼鐵やうに硬張ります。

『存じ居りますが、申上げるわけに參りませぬ。』

『無禮であらうぞ。』と安藤數馬、

『私奴を此處に御呼出しになりましたのは、拙い手品を御覽の爲ではなく、三十五萬兩の在所を訊す爲で御座いませう、それは最初から覺悟いたして居ります――が。』

『…………』

一座は水を打つたやうに鎭まり返りました。

『殿樣には、海防の爲御入用のやうに仰せられますが、玩具の如き青銅砲を鑄て、メリケン、オロシヤ、イギリスの黑船を攘拂ふなどは愚かしきこと、品川灣もろくに漕ぎ出せない、怪しい軍艦をお造り遊ばしても、所詮は天下の耳目を欺くに過ぎませぬ。』

『何んと。』

伊勢守も、あまりの事に膝を乘出しました。

『海防を口實に、幕府の御金藏を肥す爲入用の三十五萬兩で御座いませう。』

『無禮を申すな。』

押つ取刀で十五六人、サツと駒井駒造を取圍みました。その中に泰然自若たる中老人の駒造、蟠りの無い微笑をさへ浮べて續けるのでした。

『蘭書英書の取調、軍事窮理の研究、又は海外派遣の留學生の使用、巨船大舶の建造費、又は眞に有用の海防費ともならば、三十五萬兩を惜し氣もなく獻じませう、海防費に名を假りて、幕府の金藏を肥やす金は、たつた一兩も差上げること罷りなりません――いや、錢屋五兵衛の身寄の者は斯う申すところで御座いませう、メリケン、オロシヤと取引して、九族を刑せられた五兵衛の寶を、そんな事には費ひ度く御座いません。』

駒造の氣焔は虹のやうでした。全く、その頃造つた軍艦旭丸は、グル〳〵同じところばかり廻つて居るので、厄介丸と言はれ、玩具のやうな青銅砲さへ間に合はなくて、吊鐘をそのまま海岸に並べて、米艦へ大砲に見せようと苦心したなど言ふ話のあつた頃です。外國の事情に詳しい駒井駒造の憤激するのも無理のないことでした。

閣老伊勢守の苦心はさること乍ら、駒井駒造のやうな、頭の進んだ者から見れば、もつともつと、有用に金を費ふ方法が、いくらもあつて仕様が無かつたのです。

『無禮であらうぞ。』

默つて腕を拱ぬく主君の心も知らずに、十數名の近侍は、誰か發する者さへあれば、一齊に刀を拔いて、膾にしようと犇めきました。

『騷がれな、各々、三十五萬兩は、費途を判然承つてから、御返事申上ぐるとして、差當り、大地震で家を失ひ、生計を失ひ、この寒空に、大地の上に虫の如く棲んで居る人々の爲に、少しばかりの土産物を持参いたした、支配の方、町方役人に申付けて、宜しくお取はからひ下さるやう、――お救ひ米も絶たれて、明日の物にも事缺く人は、江戸中何萬人あるか判りませぬ、遊藝、手品に、一夕の興をやられるのは差支無いとしても、もう少し市中の様子を御覧下さらなければ、老中とは申されませんぞ。』

『己れツ、舌長な。』

『斬つて了へツ。』

疊かけて十數條の刄、主君の前も忘れて、サツと駒造の上へ降り注ぐを、早くもかはいて、南京箱で丁と受止めると、何處に仕掛けがあつたものか、濛々と渦巻く煙、薫ずる異香、

『あツ。』

たじろぐ隙に、駒井駒造の姿は、掻き消す如く失せて了ひました。

『魔術でも、幻術でも御座らぬ、これが電氣と窮理の術から割り出した遁身術、御免。』

庭前に聲がありましたが、障子を開けると、漆のやうな闇、駒井駒造の姿などは素よりありません。

『あツ、これは。』

飛出した近侍達の前、縁先に累々と積まれたのは、千兩箱が杉なりに十箇、これだけの大金を、駒井駒造たつた一人で、何うして持込んだかわかりません。

一番上の箱には奉書が挾んで、その上に墨痕鮮かに書いた文字は、『天窮民を恤れむ』と讀めます。

（つゞく）

處世標語

○口の泡より腕の汗
○夜風毒藥、朝風妙藥
○鉄勤借金、皆勤貯金
○一人の勝手は萬人の迷惑
○線香の火から萬戸の灰
○身體きれいに口の養生
○時を活せば身が活きる
○愛灑れば和氣溢る
○安全裝置より注意の心

なんと幸運ホク〳〵物語

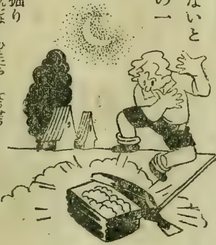
規矩雄

夢のやうな百萬圓

一介の學僕が、朝目をさまして見たら二十萬弗（時價百萬圓）の金持になつてゐた。――この幸運な男は、島ゼッス（名はアメリカ流に呼んでゐる）といふ日本青年で、ワシントン社交界を牛耳つてゐたヘンダーソン夫人方で七年間忠實に働いてゐたが、昭和六年春、夫人が八十何歳かで死に、その遺言によつて彼に二十萬弗の遺産がころがり込んで一躍資産家になつたのである。

金壺を掘り當てた少年

寶探しは多く失敗に終るものだが、昨昭和七年の事、十六歳になるアメリカはマサチュセッツ州のフランクリン・ベリー君は、友人から彼の亡父が銀行は信用が出來ないといふので、庭の一隅に黄金を埋めたといふ話を聞かされた。そこでベリー君はセッセと掘りにかゝつた。近所の人達は嘲笑したが、ベリー君少しも驚かず學業の餘暇を利用して月明の晩に掘つたこともある。ところが驚くべし一心天に通じたかとう〳〵掘りあてたのはガラスの壺、中に金貨が合計一千圓程入つてゐた。その中にあつた一葉の書付によつて、それが埋めてから十八年たつたことがわかつた。



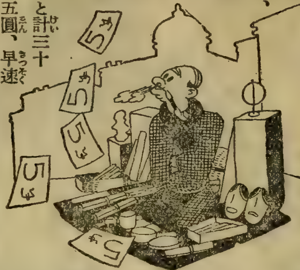
赤ちゃん大富豪

話は古いが、昭和三年春のこと、英國ダービー大競馬の馬券はカルカッタ（インドの首都）でも發行され多大の人氣を集めたが、その際一等の馬券を買當て一躍二十五萬ポンド（約二百五十萬圓）の大富豪になりすました幸運兒の身許を調べて見ると、イブラヒム・カジスと呼ぶインド人の子供で、然も生れて八ケ月にしかならない赤ん坊とわかり、インドを擧げての評判となつた。

五圓札がバラ〳〵

昭和七年十一月一日の夜のこと。銀ブラ連の出盛る九時頃、銀座一丁目東側伊勢伊時計店の前から京橋寄りにかけて、何んと五圓札が三十一枚落ちてゐた。發見したのは骨董露

店を出してゐる橘喜三郎さん、店に坐つて人混みの足並みを見てゐると、いつも歩道に落ちてゐるやうな小さなビラが時々風で舞ひ上る。一枚拾つて見るとこはいかに五圓札、おやと思つてその先を見ると、今まで店に坐つて見てゐたビラが皆立派な五圓札、興奮した喜三郎さん拾つた札を數へて見ると計三十一枚の百五十五圓、早速警察に屆けたところ、翌日早速落し主が判つて、お禮をタンマリ貰つてホク〳〵。



轉げ込んだ二萬圓

この不景氣に二萬圓の現金が、スーッと懷に轉り込んだといふ素晴しい昭和の幸福男がゐる。それは東京府下府中町の早川齒科醫院の主人秋元七郎君で『昭和七年四月一日は何たる吉日ぞ』とホク〳〵してゐる。それは十五年前に買つた第八十六回勸業債券第九〇一〇九番四通が一等割增金五千圓に當籤し、計二萬圓の手の切れるやうな札束で、心地よく頰ぺたを愛撫された記念すべき日だからである。

一度に一等五千圓が四枚も當るなんて債券當籤のレコード・ホルダーで、よく〳〵福の神の寵兒と見える。

古葛籠から紙幣束

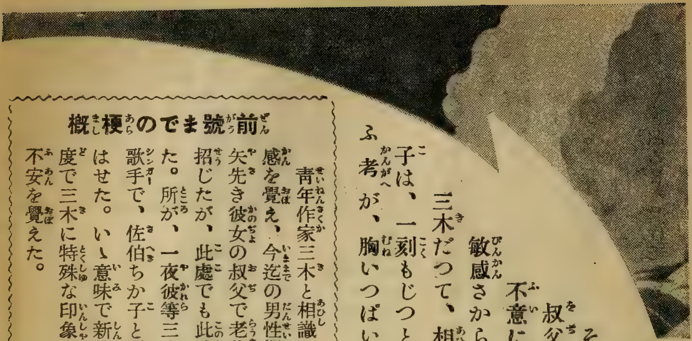
『正直の頭に神宿る』といふが、舌切り雀の改題のやうな實話がある。昭和七年七月、東京市足立區西新井町の紙屑商貝塚清太郎さんが、同區梅島町の內山市藏さんからボロを七十錢ほどで買ひ、その上古葛籠を買つて歸宅した。どつこいしよと葛籠を下して、ふたを開けて見るとこれはしたり、ボロの中から現れたのは大判小判ならぬ十圓札が二十枚。『ヤツ二百圓！』驚いた清太郎さん、『ボロは買つても紙幣束を買つた覺えはねえ』と返しに行くと、これ又正直者の市藏さん『紙幣束があらうがあるまいが、葛籠を賣つたんだから、これは受取れない』と來た。そこですつたもんだして警察へ持ち込み、警察の仲裁で四十圓の謝禮を貰ふことになつた。――ところでこの二百圓といふのは、市藏さんの實母が『死んで伜に迷惑をかけたくない』と飴屋をしながら溜めた虎の子を古葛籠にしまつておいたが、その二十日ばかり前に死に、金のことを知らぬ市藏さんが、何の氣なしに古葛籠を處分したといふ始末。『思ひもよらぬ百六十圓、これも神のお授けもの』とホク〳〵。

現代小説

蒼眸黒眸（さうぼうこくぼう）

菊池寛

富永謙太郎畫



前號までの梗概

青年作家三木と相識つた壽美子は、其素樸な風格に好感を覺え、今迄の男性櫻井への關心は次第に薄れた。此矢先き彼女の叔父で老作家の槇は、三木と彼女を熱海に招じたが、此處でも此感情は、愈ゝ彼女の胸に根を擴げた。所が、一夜彼等三人は、同じホテルに滯留るジヤズ歌手で、佐伯ちか子と呼ぶ女性を招き、一緒に麻雀を戰はせた。いゝ意味で新時代式の此ちか子の言動は、唯一度で三木に特殊な印象を殘したらしい。壽美子は微かな不安を覺えた。

上品な趣味

その夜壽美子は、床に就いても、なか〳〵眠むる事ができなかつた。

叔父達の寢てゐる隣の室からは、もうかるい鼾がきこえてゐた。

不意に現はれた佐伯ちか子が、三木の人柄に、魅力を感じたらしい事は、女のある敏感さから、忽ち解つた。

三木だつて、相手に感じ入ると云つた風な好意を持つたらしいし、さう考へて來ると、壽美子は、一刻もじつとしてはゐられないやうな氣がした。三木を早く自分一人のものにしたいと云ふ考が、胸いつぱいに擴がつて來た。

と云つて、相手が小説家である以上、はしたない事をして、輕蔑されたりなんかしたくはなかつた。今まで感じた事のないやうな不安で、壽美子は脅かされた。

——明日からは、もつと大膽に積極的に云ひたい事を云はう——

と、そこで壽美子は眼をつむると、もう何も考へまいとした。

翌日も、熱海は晴れてゐた。壽美子が眼を

さますと、早くも着物を改めた叔父が、枕元に立つてゐた。

『もう起きた方がいゝぞ。』

『何時？』

『九時近いよ。』

『まあ。』

『三木は一人で散歩に出かけたよ。』

『昨夜寝つかれないで、三時頃寝たんですもの。』

壽美子は、ちよつと顔を赤らめて、起き上つた。

壽美子は、化粧室に入ると、先づ生々とした自分の顔色を、よろこばしく思つた。

食事がすんでも、三木が、姿を現はさないので森鷗外全集の小册を持つて、テレースの籐椅子に腰をおろして、頁をくつてゐた。

『卽興詩人』を中途からよみ始めてゐると、三木が散歩から歸つて來た。

『貴女を誘はないでよかつた。熱海の町は、あまり愉快ではなかつたですよ。』

と云ひながら、三木は籐の小卓を隔てゝ、壽美子の向ひに腰をおろした。

うらうらと照る日を受けてゐるせゐか、三木の双頬は、何となく色がすぐれなかつた。

『何を讀んでいらつしやるのです。』

『卽興詩人！』

『鷗外ですか。』

『えゝ、あまり前によんだので、よみ直して居ります。』

『はア。』

三木は、のどかに紫煙を吐きながら、

『鷗外の作つた琵琶歌がありますね。』

『長曾我部信親ですか。』

『さう、さう。あの中に、ギリシヤの昔、トロヤにて、愛兒ヘクトルの骸をば、敵の陣屋に乞ひ得たるプリアモス王の悲しみに、似たる恨みは日振なる……と云ふのがあるが、いゝ文句ですね。』

壽美子は、三木の話が、いつも漂々として、つかまへどころのないやうなのが、もの足りなかつた。

櫻井のやうに、三木がもつと現實的な、此方が乘つて行けるやうな話をしてくれゝば、よいのにと思はずにゐられなかつた。

『お仕事は？』

『此方にゐる間は、全然仕事はしないつもりで、やつて來たのです。どうです、自動車で十國峠の方へでも行つて見ませうか。』

『えゝ。でも、自動車で行かれますの？』
『此間、新聞に學生の操縦してゐた自動車が、墜落したとありましたが、そりや素人だからでせう。』
　壽美子は、少しでも冒險がある方が、却つて刺激的でいゝと思ふと、
『さう。ぢや、お伴しますわ。』
　壽美子の頬が、輝いて、互の眸が、チラと會つた。
『直ぐ出かけられますか。』
『えゝ。叔父を誘つて來ますわ。』
　一應は、叔父を誘はなくてはいけないと、さう思つて叔父の部屋へ行つたが、叔父が、(二人で行つて來い)と云つてくれることを豫期してゐた。
　が、叔父は部屋にゐなかつた。ボーイに訊いて見ると、多分浴室だらうと云ふことだつた。
　玄關に立つてゐる三木の處へ歸つて來ると、壽美子は當惑さうに、
『叔父さん、お湯らしいのよ。』
　と、云つた。
『ぢや、二人で出かけませう。』三木は、いつものやうに漂々として云つた。
『えゝ。』
　壽美子の聲は、小さかつた。
　三木が、注文してあつたと見え、幌を倒してオープンにした大型のハドソンが、玄關に横づけになつてゐた。
　二人とも、朗かなはずんだ氣持で、クッションに並んで腰かけた。
　車は、熱海の町には入り、曲りくねつた細い道を、右に左に急カーヴを切りながら、通りぬけると町の背後の山へと昇つて行つた。
　微風が、壽美子のうすいえんじのアフタヌーンの短い袖を、吹きなびかした。
　後をふり返へると、薄白い湯の煙が、所々に湧き立つてゐる熱海が、一眸の下に見おろされ、海が近くで見るよりも蒼く美しかつた。
　急な勾配を、車は一杯の力を出して軋しみ登ると、そこで危かしいカーヴを切つてから、また更に新しい勾配にさしかゝるのだつた。
『いゝ氣持ね。』
　壽美子は、三木を顧みて云つた。
『愉快ですな。』

三木は微笑して答へた。

日金山から、箱根へかけての山々の黄ばんだ肌が、くつきりと右手に浮んで見え始めた。

山が、だん／＼高くなるにつれ、冷めたい風が、二人の頬を打つた。

『わたし、コートを着て來るんだつたわ。』

壽美子が云つた。

『寒くありませんか？』

『え〻少し。』

『僕の羽織でも着ませんか。』

『い〻のよ。』

壽美子は、三木の心づかひだけで、滿足してゐた。

『富士です！』

三木が、初て富士を見つけて指した。もう、五合目あたりまで、白くなつてゐる富士の純白な姿があざやかだつた。

『頂上です。』

運轉手が云つた。

『降りて休みませう！』

三木が云つたので、二人は車を捨て〻、逆に降り立つと、左側の山へ三十間ばかり登つた。そこからは、左に相模灣が、右に駿河灣が、縹渺として、見渡された。

『こ〻は、素的ですな。』

と、三木が云つた。

壽美子は、ウツとりとした眼をして、うなづいた。

『日金山地獄と云ふ傳說があるの知つてゐますか。』

『い〻え知りません。』

『ある武士が、日金山を下つてゐると、恐ろしい顏の老人がゐて、麓から自分の娘が登つて來る筈だから、會つたら早く上つて來るやうに傳へてくれと云ふのです。それで、武士が老人と別れて下りて來ると、十七八の美しい娘に會つたので、その事を傳へると、娘はだまつてうなづいたま〻で、山を登つて行つたのですが、老人のゐたあたりへ行きついたと思ふ頃に、恐ろしい娘の悲鳴と、人を毆ぐりつける物音がきこえて來たと云ふのです。武士は、不思議に思ひながら、麓へ下りつくと、丁度麓のある大きい百姓家で、今娘が死んだと云つて、さわいでゐた所だつたと云ふのです。つまり、死んだ娘が日金山を登つて、地獄の鬼に責められる聲を武士がきいたと云ふんですな。』

『まあ！』

壽美子は、三木が漂然としてゐてもさすがに、作家らしくいろ／＼な知識を持つてゐるのに、感心しながら聽いてゐた。

『ところが、後世の啓蒙學者が、その傳說を否定して云ふのです。そりや、死んだ娘の亡魂ぢやない。やつぱり、樵夫か獵師かの娘なんだ、樵夫か獵師かゞ、娘の歸るのを待つてゐたのだ、すると娘が、老人の傍へ行きつく少し手前で、狼に襲はれたのだらう。それを老人が、きゝつけて娘を救ひに走せつける、武士の聞いたのは狼に襲はれた娘の悲鳴と、獵師が狼を毆ぐりつけた物音だと云ふのですよ。』

『まあ！ その解釋も面白いですわ。』

『むかしの人は、のん氣でも、中には理論的に考へた男もゐるんですな。』

『貴君と一しよにゐると、勉強になりますわ。』

『いや、僕の方も勉強になるんです。昨日、一しよに魚見崎へ行つた時も、勉強になりました。』

『まあ、なぜですの？』

『貴女のやうな、新鮮な女性と一しよにゐると、いろ〳〵な物が、一段美しく見えるですよ。今まで、感じなかつた物の形のよさが、感じられるのです。』

『まあ！』

壽美子は、三木の絕讃之辭と云つてよいやうな、ほめ方で顏を赤くして、うつむいてしまつた。でもなぜ、そんな遠廻しな云ひ方をしないで(貴女を愛する)と、云つてくれないのだらうかと思つた。

『槇さんは、明日歸られるのでせうな。』

『えゝ、何だか急な用事が出來たさうですわ。』

『ぢや、貴女も一しよですな。』

『えゝ、……』

壽美子は、言葉をにごした。三木が、(叔父さんが、お歸りになつても、二、三日いゝぢやありませんか)と、云つてくれゝば、どんなにうれしいだらうかと思つた。

『僕は、もう二日ばかりゐたら、歸ります。』

と、三木が云つたとき、壽美子は少し、淋しかつた。

『東京へ歸られたら、時々僕の處へ遊びにいらしつて下さい。』

『えゝ。よろしかつたら、うるさいほど伺ひますわ。』

『ほんとですか。』

三木が子供のやうに、念を押すので、壽美子は、ハンカチーフで笑ひを忍んだ。

だが、三木は壽美子と、より添つて坐つてゐながらも、櫻井のやうに、貴女が好きだとか愛するとか、そんな事は、一言も云はなかつた。

壽美子は、大膽に積極的に出ようとは思ひながらも……三木

が自分に好意を持つてゐてくれることは、充分分つてゐても、何にもさうした問題に、ふれて來ないので、女性として自分の方からふれて行くわけには行かなかつた。

二人ともロマンチックな氣持になつてしまつた。人目のないこんな所で話し合ふ機會など再び來ないと思ひながらも、どうすることも出來なかつた。

壽美子も、何か三木の愛を求めるやうな事を云つて、敏感な彼から自分の氣持の底を、見透されるのも、いやだと思つた。

三木が、自分を愛し始めてゐることも分つてゐたが、しかし彼は、その持前の漂々たる性質から、それを具體的な言葉では容易に云ひ現はさうとはしないのだつた。

二人は、お互に愛を感じながら、そのあまりに、上品な趣味から、(愛してゐる)とか(愛して下さい)と云つたやうな、生々しい言葉を出すことが出來なかつた。

魅惑の手

階下のホールから、ジャズが聞えて來た。

東京では、毎朝きつと聞いてゐた、ショーソンのコンチェルトニ長調が、浮々と唇の端に、のぼつて來た。

調子を取つてゐると、それまでは全く忘れてゐた映畫俳優の二枚目にしても通用しさうな櫻井の顔が、ふいと頭に浮んで來た。

壽美子は、音樂の樂しさをすべて、櫻井に教へられてゐたと云つてもよかつた。

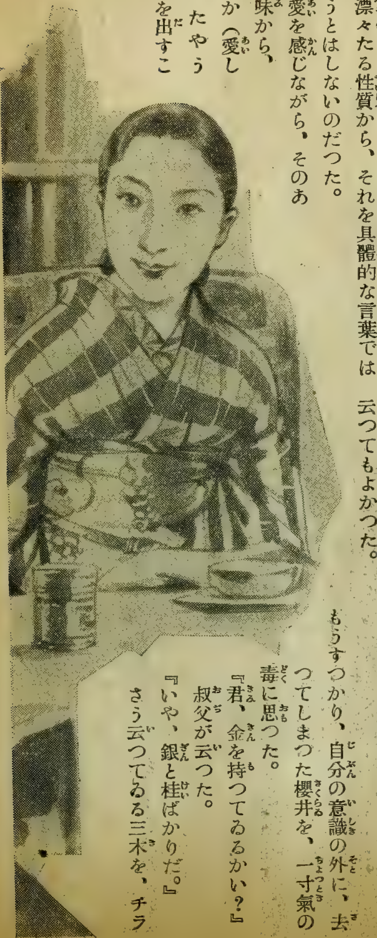
もうすつかり、自分の意識の外に、去つてしまつた櫻井を、一寸氣の毒に思つた。

『君、金を持つてゐるかい?』

叔父が云つた。

『いや、銀と桂ばかりだ。』

さう云つてゐる三木を、チラ



と見ながら、壽美子は、露臺へ出た。

『これで、どうだ！』

叔父が云つた。

『角で取つたら。』

『ぢやかうする。』

『こちらへ逃げると、まだ金があるか？』

『うん。金も銀もあるぞ！』

『困つたな！』

三木は考へこんだ。

『もう、駒を投げる外ないだらう！』

三木は、

持つてゐた駒を、盤の上へ投げ出しながら、
『また負けたか。』
『君とは、一枚落して丁度いゝな。』
三木は苦笑した。
『もう一度來るか。』
叔父が、さう云つた時だつた。昨夜此方から佐伯の處へ使ひにやつた年增の女中が、
『御免遊ばせ！　恐れ入りますが三木先生、一寸！』
と、敷居ぎはで云つた。
『はあ、何です？』
三木は、氣がるに立つて、部屋の外へ出た。
『あのう、恐れ入りますが、佐伯さんのお部屋へ一寸いらしつて頂きたいんですが……』
と、云ひながら女中は先きに立つて歩いた。
『佐伯さんが、僕をよんで來いと云つたのかい。』
『はい、何の御用事か知りませんが……』
昨日會つたばかりだのに、たつた一度麻雀をしたばかりだのにと思ふと、三木は何のために自分が呼ばれなければならないのか分らなかつた。
佐伯の部屋は、三階の和室であつた。三木が階段を昇ると、そこの廊下で待つてゐた佐伯は、袂をひるがへして、先きに自分の部屋へは入つた。
三木が、けゞんな顔をして入口に立つと、
『さあ、どうぞ。びつくりなすつた？　わたし退屈だつたので、お目にかゝりたかつたのよ。お部屋に邪魔させて頂かうと思つたのだけれど、槇さんやお孃さんには用事がないんですもの。いけなかつたですか。』
と、艶然と眉を上げて、微笑みながら、三木を卓の前に請じた。
（此奴、人を食つてゐやがる！）と、苦笑しながらも、三木は怒る氣はしなかつた。
『めしあがらない？』
と、クレイヴンと云ふ煙草のうすみどりの罐を、トンとさし出した。
『驚いた！　何事か起つたのかと思つてゐる裡に、來てしまつた。』
『ほゝゝゝ、あの女中が、あんまり私の云つたことを正直に實行したのよ。』
と、手元の急須にお茶を入れながら、うれしげに聲を立てゝ笑つた。
やゝうつむいた横顔は、正視するに堪へぬほど、美しかつ

た。その美しさで、彼女の傍若無人の振舞は、凡て許されさうにさへ思へた。

向ひ合つてゐると、『考へ』を失つてだん〳〵夢心地になりさうな心を、情なく思ひながら三木は、

『階下へいらしつたら、どうです。僕は貴女の直覺のやうに、面白い男ではないのです。御茶を御馳走になつたら退散します。』

『ほゝ、三木さんも大袈裟ね。取つて喰べようとはしないことよ。一寸おどかして、あげたかつただけよ。好いわ。お歸りになつても――一寸さへ來て頂けば氣が、すんだのですの。此方に、何日までいらつしやいますの。』

『二三日居ります。』

『東京へ歸つたら、また時々驚かして上げようかな。』

『あまり驚かさないで下さい。僕は小心者だから。』

『ほゝゝゝ、どうですか。そんなに、落着いていらつしやるくせに。』

三木は、今日晝間、一しよにドライヴした壽美子と目前にゐるちか子とを、比較せずにはゐられなかつた。

壽美子とゐると、なんとなく心がたのしく、落ちついて來て、接吻しようとか手をにぎらうとか、さうした俗念は少しも頭の中に湧いて來ないのだつた。

それだのに、ちか子と會つてゐると、壽美子の半分も三分の一も好きでないのに、心がみだれて來て、胸があつくなり、何だかそのいたづらつ兒のやうに、いき〳〵とうごく小さい顏を、片手でぐツと引き寄せて接吻して見たいやうな衝動に驅られるのだつた。

『貴女は、此處ではずーつと一人ですか。』

『えゝ。一人よ、一人だつたらいけません？』

『貴女のやうな人が、一人ぎりでゐると云ふことが、をかしいですな。』

『をかしくないわ、ちつとも。今愛人を物色中よ……』

さう云つて、じつと三木の顏を見つめた。

（僕ぢや、間に合ひませんか）

三木は、半分冗談にさう云つてやりたいのを、やつとこらへた。

『私は、積極的に追ひかけて來る人は、嫌よ。だまつて、すましてゐる貴君のやうな方を、此方から追ひかけて行つて、クチャ〳〵にしたいのよ。』

『それは、惡趣味ですな。』

三木は、さう云つて笑つた。

『貴君は、相當なもんね。』

ちか子は、ほがらかに笑ひ返すと、クレイヴンを一本鑵の中からとり出して、それを自分の口にくはへて、火をつけて一口吸ふと、それを三木にさし出した。

『吸ひつけ煙草なんて、おいや？』

三木は、苦笑しながらそれを受けとると、

『女給は、よくかう云ふ事をしますね。』と、云つた。

『いゝわ。何とでもおつしやい！　どうせ、貴君は、あのお孃さんの方がいゝんでせう。』

と、にらむ眞似をした。

『さういふ點もありますな。』

『ぢや、私のいゝ點もあるの。』

『少しは……』

『少しはだつて、意地わる！　今に、萬事私でなければいけないと云ふやうにしてあげるわ。』

『はゝゝ。どら、僕は下へ行かうかな。』

『まだいゝわよ。いらつしてから、十五分しか經つてゐないわ。それとも、あのお孃さんがこはいの？　あの、眸のどつか蒼い井上雪子のやうな方が……』

『こはいことなんか、ないですよ。まだ、二三度しか會つてゐないんですもの。』

『ぢや、私の方立ち遲れと云ふわけぢやないわね。』

『僕を中心に、鞘當ですか。』

『さうなるかも知れないことよ。』

さう云つて、ちか子は艶然と笑つた。

大敵

女中の後から三木が出て行つてから、三十分も經つた。

『三木は、どうしたのだらう。客でも來たのかな。』

槇は、バルコニイにゐる壽美子に聲をかけた。

『さあ！』

『また、あのジヤズ。シンガーを呼んで來て、麻雀でもやるかな。』

叔父が、さう云つた時、女中がはいつ

て來た。

『まだお床は、およろしいでせうか。』

『うむ、まだいゝだらう。壽美子のところは、敷いて貰つて置くか。』

『えゝ。』

壽美子は、三木のことが、何となく氣になつてゐた。

『かしこまりました。』

女中が、立つて行かうとするのを、槇が呼びかけた。

『三木君は、どうしてゐる？』

女中は、一寸返事をためらつたが、すぐ、

『あの三階の佐伯さんの處へいらしつてるらしいんでございますよ。』
『ほゝう。ぢや、先刻佐伯さんから、呼びに來たのかい？』
『はい。』
槇は、あきれたと云ふ顔をして、女中が去るのを待ちかねて、壽美子に云つた。
『おい！　三木をどう思つてゐる！』
『どうつて！』
壽美子は、心にもない餘裕を示しながら云つた。
『三木が、少しでも好きになつてゐるとしたら、あれは大敵だぜ！』
さう云はれた刹那、壽美子の心に、叔父にともなく三木にともなく、反抗的な氣持がグッとこみ上げて來た。
『まあ！　馬鹿にしてゐるわ。なんと云ふ氣の早い叔父さんでせう！　私あんな人と、三木さんのとりつくらなんかいやだわ。』
そのくせ、心の中はカッと熱くなつてゐた。
『それならいゝがね。』
さう云ふと、叔父は座蒲團を枕にして、仰向けにねころんでしまつた。

（つゞく）

作者の麗筆はいよ〳〵冴えて、深刻なるメスは、壽美子、ちか子、三木、三人の頭上に躍ります。さて次號には如何なる場面が展開するか……何卒御期待下さい。

久米正雄先生著

白夜は明くる

愈々怒濤の如き大評判!!

結婚難、戀愛難の時代に、これこそ若き男女に與へられた指標だ!!

と果然問題となり飛ぶやうな賣行です！夏の都、鎌倉に、白面の一美青年と清楚白百合の如き一處女と艶麗無比のブルジョアの二令孃とが纏れ絡まり惱ましくも生み出せる戀のロマンス。この多角な戀愛は悲痛な復讐を生み、軈ては花の都大東京に亂れ咲く。著者は近代的感覺とデリケートな描寫になるこの一篇のメロドラマの中に、心躍る若き日の感激と、青春男女の陷り易き痛切な問題とを盛り込んで、心ゆくばかりモダン日本の世相を描破し、その裏面を暴露して讀者をして熱狂嗟嘆せしめずには措かない。すぐ御一讀下さい。定價一圓六十錢送料十二錢本社發行。

多門將軍强襲奇談

濱川清

多門中將

馬占山が、日本の多門師團を擊退すると意氣込んで大軍をひきゐて、昂々溪驛の線までのり出したとあつて、彼は一躍人氣の頂點に奉りあげられた。

『馬占山といふ奴は一寸エライぢやないか、鬼といはるゝ日本の多門將軍と一戰をまじへようと云ふのだから、敵乍ら天晴れだ。』

『めくら蛇におぢずさ。』

討伐に向つた多門師團の我が兵は、前線でこんな噂をしてゐた。

丁度一昨年の秋十一月十八日の事であつた。もう皇軍の飛行機は、朝の中から翼をつらねて敵陣地の上を翔つて猛烈に爆彈投下を始めた。

ブーン、ブーン。

プロペラの音をきくと、馬軍の將兵は、塹壕の中へかくれて了つて、てんで頭を出さない。かゝる間に我が軍からは、三十餘門の野砲が、ど、ど、どと一齊に打出された。

我が多門師團と馬軍との、戰の火蓋が切つて放された。

敵もさるもの、陣地は嚴重に固めてあつたが、それでも後方陣地にあつた馬占山は、氣が氣ではない。第一線の旅團長に向つて、

『どうだ、大丈夫か。』

野戰電話をかけた。

『正に、大丈夫です、些しも御心配には及びません。』

旅團長の賴しい返事があつた。

『よし、一歩も退くな、骨が舍利になつても陣地を渡すな。』

『分つて居ります。』

馬の悲壯な命令を力强く引受けた。

それから十分の後であつた、馬占山は、又心配になるので、

第一線へ電話をかけた。

『大丈夫か。』

『將軍、不可ません、此の陣地は、もう持ちこたへることは出來ません、日本軍は猛烈な突擊にかゝりました。』

たつた十分間！　形勢は轉一轉して、馬軍の第一線は、忽ちにしてくづれたつた。これは、日本陸軍でも戰略戰術の權威と讃へられる、多門將軍得意の中央突破の戰略が奏効したのである。

全線にわたる小ぜり合ひを止めて、主力をもつて、敵の中央を突き破り、左右兩翼の連絡をたち切つて、敵を混亂に導かうとする大膽な戰法である。

こゝぞ！

敵の前戰が逃腰になるのを見計らつて、師團は進擊に移つた。

『それ、つゞけ。』と、此の時、多門將軍は上野參謀長以下を從へて、師團司令部を前線にすゝめた。進擊又進擊。日本軍が敵の第二線昂々溪に突擊した時には、日が暮れた。

此の夜は、牙のやうな弦月が僅かに照らしてゐる丈けて、殆んど眞暗な闇だつた。敵は、すつかり混亂に陷つたが、一方、西のハイラル方面から逃げて來た將兵が、この渦巻の中に吸込まれた。その中を多門將軍は上野參謀長と高木副官と共に、長谷部旅團の自動車にのり、運轉手と僅かに四人で、第一線へ進擊した。混雜してゐたので、師團司令部とも分れて、師團長以下四人が全く孤立し、その自動車は敵の精鋭なる黑龍江騎兵に取り卷かれた型となつて了つた。

『窓の外を見ろ、敵ぢやないか。』

多門將軍が第一に敵を發見した。窓の直ぐ外だ。上野參謀長が見ると、乘馬の眞黑なものが車の左右をゾロ〳〵と通つてゐる、服裝が正に日本軍と違つてゐる、袖が長く、如何にも支那騎兵だ。

『燈りを消せ、止まれ。』

上野參謀長は驚いて命令した。運轉手の兵はヘツト・ライトを消し、敵の眞只中に車を停めた。

支那騎兵は直ぐ側に日本軍の多門將軍ありとは知らず、一列

になつて走つて行く。
　支那軍の高級幹部は概ね自動車に乗つてる爲めに間違つたらしい。
　師團長危しと知つて、勇敢な高木副官が車を飛び降りた。軍刀に手を掛けたが、防寒手袋が厚く柄へ手がはいらなかつた。上野参謀長も續いて飛び降り拳銃を取り出し、つい二、三米突のさきに現はれた支那騎兵に今しも狙を定めた。
　そこへ悠々と將軍が車を降りて來た。
『閣下、危う御座います。おはいり下さい。』
上野参謀長が敵に狙ひを付けたまゝ小聲で云ふと、
『何に、えゝよ、射つな／＼。』
將軍は、さう云ひながら、日本軍の無線電信兵が七八名、これも混亂に紛れて進んで來るのを見つけて、
『待て、此所へ來い。』危急の中に上野参謀長が聲を掛けた。それで七八名が一樣に止まつた。
『幾人居るのか。』参謀長が尋ねると、流石は日本兵だ、此の危急混亂の中にあつてスッと一列に並んで番號をとなへ始めた。
『一、二、三、四……』
　皆で九名。
『よし、彈丸は幾發持つてるか。』
『二十發あります。』
『二十三發あります。』一人宛自分の彈丸を數へて答へた。
　すると、多門將軍がそばへ來て、靜かに云つた。
『射つちやいかんよ、こゝで射つちやいかんよ。』
　師團長閣下が、此の敵中にありと知つて兵の驚きは云ひ樣もない。しかも射つなと云はれる以上、命令は神聖だ、射撃は出來ない、が、今や師團長閣下の危機だ、九名の兵は敵が側を通つて行くのを見るとたまらず銃劍を振りかざし／＼、俄然勢立つて飛び掛つた。
　將軍のすぐ側で、火の出る樣な大格鬪が始つた。闇の中に不意をうたれた敵兵は叫びながら四方へ逃れる。又後から來る。又突きまくる、そこへ實に折よく日本軍の機關銃隊が來た。上野参謀長は早速にそれを指揮して自動車の四圍を警備させた。
　かくして漸く混亂の中を多門將軍は再度自動車に乘り少數の警備兵と共に悠々前進し始めた。
　朝が再びやつて來た、危機は漸く去つたので、上野参謀長は吻として、多門將軍にたづねた。
『閣下、昨夜、どうしてあゝ仰在つたのですか。』『何か。』
『いえ、射撃してはいけないと御命令になりましたが……』
『む、あれは君、あの闇の中だ、敵の居る背後に、我が戰友が居るかと思うたからぢや、もしさうなると、同士射になるぢやらうが……』
　部下思ひの將軍は、生死のまぎはに在つても、行き屆いたところ迄氣を遣つてゐた事が判つて、新しい感激が、幕僚の胸先につきあげて來た。（をはり）

漱石のモデル・猫の話

夏目鏡子談
松岡讓記

夏目といへば猫、猫といへば漱石といふ風に、いつの間にやら猫と漱石とは親類みたいに世間から言はれるやうになつてしまひましたが、それはいふ迄もなく『吾輩は猫である』を書いて一躍有名になつたからの事で、元々當人が猫が特別好きだつたの、その又猫が昔譚の猫騷動の化け猫よろしくの怪猫だつたといふわけでもないのです。少しは變つて居たかも知れませんが、まづ〱ありふれた猫だつたのですが、それが少し變つた主人の筆にかゝつて、主人が有名になると一緒に、猫迄有名になつてしまつたのです。しかし最初夏目を有名にした『吾輩は猫である』がその猫から出來たのであつて見れば、猫と漱石、漱石と猫、この二つはやつぱり不即不離といふ風に見られても仕方がないかも知れません。とにかくこの猫から夏目の芽が出たといつていゝと思ひます。

（夏目鏡子夫人）

其頃夏目は帝大の英文科で講義をし、一高で英語を教へて居りまして『猫』の中にも教師教師と、いかにも教師がいやだいやだといふ風に書いてありますが、後の漱石とは違つて、以前熊本の五高の教授をして居た頃しきりに俳句を作つた頃のやうに俳句も作らず、洋行してかへつて來てからは專ら學者として勉强して居るといふ風でして、創作などといふ事とは緣遠い生活振りであつたのです。今もその家はありますが、本鄉千駄木五十七番地の齋藤阿具博士の家をおかりして、そこから大學一高へ通つて居たわけです。此間御令息の森鷗外さんの追憶を拜見して居ますと、やはりこの家に私共が入る前に森さんが居られた事があるやうに書いてありましたが、さうだとするとこの

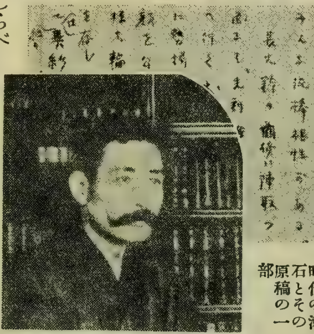
お家は明治文學には少からぬ因緣のある家だといはなければなりません。

明治三十七年の夏の初め頃かと覺えて居ります。どこからともなく生まれて間もない小猫が一疋家の中に入つて來ました。全身濃い灰色の虎斑のある一寸見たところ黒猫といつていゝつひぞ見なれない猫でしたが、私は猫嫌ひなのですぐにつまみ出します。つまみ出すのですが、又いつの間にやら、家の中に入り込んで來て居ります。日に幾度も入つてはつまみ出され、つまみ出されてはいつの間にやら忍び込んで、夜雨戸をしめる段になるとやつぱり居るので、又かとばかりにつまみ出すとは、翌朝雨戸を繰ると、ニヤンといつて入つて來るといふ鹽梅式。誠に性懲りもないのですが、それで居て一向惡びれもしないといつた工合で逃げも隱れもせず、何しろ夏の事で戸障子も明け放しの事とて、入つては出され、出されては入つて、毎日毎日同じ事を幾度となく繰りかへして居たのです。

私が第一猫嫌ひなところへ、子供が又あんまり好きません。それといふのもどこの捨て猫か知れない癖に、まるで家つきの猫のやうに子供たちにじやれつき、夜ねて居ると蚊帳の外から子供たちの手足をひつかいたり、いきなり暗いところから出て來て足にじやれついたりします。その度毎にそれ又猫がといふ鹽梅に因業につまみ出されるのですが、又もや入つて來ては、殊に私が嫌なのはチヤンと御飯のお櫃の上に上がつてすまして居る事です。あんまり小面憎くつてうるさいので、誰か書生さんにでも賴んで遠くの方へ捨てゝ來て貰はうと思つて居ると、或朝又もやお櫃の上ですまし込んで香箱をきめ込んでるのを夏目が見まして、この猫はどうしたのだと尋ねます。これこれで手を燒いてる始末だと申しますと、そんなに迄入りたがつてるんなら、何の猫の

一疋位置いてやつたらいゝぢやないかとかういふのです。主人のお聲がかりなものですし、私にしても少々根敗けの形で、それからといふものはずる〳〵に家の猫になつてしまつたわけなんですが、さてさう公認されて見ると、なほの事大ぴらにお櫃の上にのつかつて、子供の手足にはじやれつくし、比較的安全地帶とでも思つてるのか、主人が腹ばひになつて新聞を讀んでると背中にのぼり、來客があると膝にうづくまつたりして居るのです。

私は其時分から始終肩がこる性分なものですから時々按摩にかゝつて居りましたが、いつも療治に來るお婆さんの按摩が、ある時膝に來た猫を物珍らしげにつく〴〵しらべあげて見て居りましたが、奥樣、この猫は全身爪の尖迄黑うございますが、これは珍らしい福猫でございますよ。大事に飼つてお置きなさいますと、いまにきつとお宅に福が來て御繁昌なさいますよとかういふのです。昔から三毛猫の雄がどうとかいつたやうな話を聞いても居り、子供はふえるしわづかばかりの教師の俸給では財政は苦るしいし、旁々そんなこんなで福の神が舞ひ込んだといふのを取りにがしてはなるものかと、とにかく緣起のいゝ話に、そこは現金なもので忽ち待遇が變り、女中が御飯をやるのを忘れてると、私が進んで御飯をやつたり、それのみならずおかゝをかいてかけてやつたりしたのですから、猫の方でもこれは變だぞと底氣味惡るく感じたかどうか知りませんが、そんな工合に好くもてなし出したので、自然毛なみもよくなるし、めき〳〵いたづらも盛になつて、夜になると子供たちが寢て居る床の中にもぐり込むので、二番目の娘が殊に猫嫌ひで、猫があといつて喚き立てます。するとそれといふので夏目が物指をもつて頭をどやしたり追つかけたりの活劇がしば〳〵行はれたものです。さうなると元々好きで可愛がる猫ではないのですが、福猫ときかされてるので、打ちどころが惡るかつたりで萬一の事でもあるといけないと、あべこべに今度は私の方で心配したりしたのですから、人間も現金なものです。



「猫」執筆時代の漱石とその原稿の一部

　ところがこの猫君甚だ横着者で、一向鼠も捕らず、番犬でないからそんな不足迄持ち込まれては筋違ひかも知れませんが、泥棒が入つてもニヤンとも泣かず、妙に人の顏をじろ〳〵見る

ばかりで、相も變らず子供にじやれる以外能がないのです。何となく皮肉の感じがするそこんところが面白かつたのですか、その年の暮に高濱虛子さんにすゝめられて、書いて見たのがこの『吾輩は猫である』の第一回。しかも題名も『猫傳』としようかどうだらうといふ話を、それは『吾輩は猫である』に限ると虛子さんがおきめになつたといふ、ほんの本人としては樂しみ樂しみ書いたいはゞ餘技的なものだつたらしいのですが、それが『ホトトギス』の一月號にのると一ぺんに有名になつてしまつたのです。さうしてこれを出世作にして、それから續々と小說を書いて發表するやうになりました。明治三十八年の一月號ですが、夏目は其年三十九歲になつたわけです。隨分遲く小說を書き出したものです。按摩の言つたやうに本當に福猫だつたのかも知れません。『吾輩は猫である』は三十八年の一月號から三十九年の八月號迄、時々『ホトトギス』を賑はしたものですが、その三十八年三十九年の年賀狀には、隨分方々から猫の繪端書がよせられました。相當の數がありましたでせうが、繪端書だけはみんな殘しておきましたので、今でも亡くなつた當時のまゝの書齋に保存しておきます。が小說が評判になると同時に、その又猫も一躍名士になつたわけで、宅へおいでのお客など猫を見ては、はあこれですねなどと仰言つて居たものです。小說の二回目に猫がお正月の御雜煮の餅をたべて苦しまぎれに踊るところがありますが、あれは本當にあつた事で、猫が踊つてるといふので家中で臺所に出て見て、お正月らしく笑つた事でしたが、猫の事に限らず家族の事など隨分あの小說の中に書かれて居て、お蔭で猫が有名になつたばかりでなく、私の頭の禿や寺田博士の前齒のかけてるのまでが、序に天下に名をなしてしまつたのはとんだ事です。

小說の終りでは、猫がビールに醉拂つて、猫ぢや猫ぢやを踊るうちに水瓶の中に落つこちて成佛する事になつて居ますが、これは小說の結末で、本當はその後西片町に移り、それから又早稻田南町に移つて、その度每に紙屑籠の中に入れてぶら下げられながら、持つてる人に小便をひつかけたなどといふ笑ひ話をのこして、早稻田の家で少々まうろくの氣味で亡くなりました。その西片町へ移つた時、猫が紙屑籠から出るとにやんにやん啼いて居ましたが、それなり居なくなり、どうしたのだらうと言つてると、もとの千駄木の家に戻つて居た事がわかり、三日ばかりでかへつて參りました。亡くなつたのが明治四十一年九月十三日。裏庭へ埋めてやりましたが、其時夏目が書いて出した猫の死亡通知があります。ハガキに黑枠を筆で書いたもので、文面をよむと『辱知猫儀久々病氣の處療養不相叶昨夜

何時の間にか、裏の物置のヘッツヒの上にて逝去致候　埋葬の儀は車屋をたのみ箱詰にて裏の庭先にて執行仕候。但主人「三四郎」執筆中につき御會葬には及び不申候　以上九月十四日』となつて居ります。箱といふのは蜜柑箱で、そこへ墓標を立てゝ、それに自分で句を書きました。

　この下に稲妻起る宵あらん　漱石

　其の前年に夏目は學校關係を一切やめて、朝日新聞に入社すると共に作家として立つたわけです。さうして第一に書いた小説が『虞美人草』其翌年に書いたのが『三四郎』です。つまり『猫』によつて運命が變はつて來たわけです。

　これがつまり初代の猫の一代記ですが、それからも夏目の家といふと猫がといふわけも手傳つてか、福猫の爪の尖迄黒い、黒猫を貰つたり拾つたりで代々飼つておきましたが、中には足にまとはりついて居て、つい誤まつて踏み殺されたのがあつたりしましたが、よく人様がこの猫は何代目だなどと、猫を見るとよくお尋ねになつたものです。それから私も猫は大事にするやうになり、初代の命日には心ばかりのお祀りをして、供物などを近所にわけたり、猫の置物を飾つてそれに鰹節や肴を供へるといつた事もいまだに忘れずにつゞけて居ります。だものですから識つた方々などがいろ／＼の玩具の猫を下さるので、今では樣々の形をした黒猫がかなり集まりました。玩具や人形を陳列する小い箱の中にならべて座右に置いときます。

　其後文鳥が死に、又犬が死んで、みんな猫の墓の傍らに埋められ、犬の墓標には、

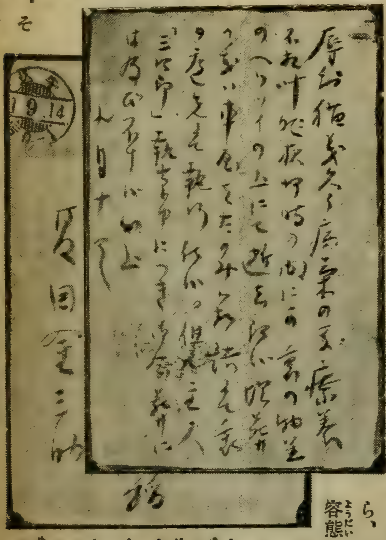
　我犬の爲に秋風の聞こえぬ土に埋めてやりぬ　漱石

　といふ句を書きました。澤庵石のやうな石が墓でその上によく水を手向けておくのでしたが、小い子供がその水をのんだなどといふ事がよくありました。子供達が眞似をして金魚が死んだりするとこゝへ埋めて、金魚の墓などといふのをたてて、ま

るでこゝは小動物の共同墓地みたいになりましたが、猫の十三回忌を營んでやる時に、猫を中心にこれらを合祀して記念の供養塔を建てました。猫は申す迄もなく、文鳥でも犬でもみんな夏目の文章に描かれて居るので、その墓石を臺石にしてかうしたものを建てたのです。猫に對しては何だか一種謝恩といつた氣持があるのであります。

宅の猫の話は大體そんなものでせうが、最後に猫と夏目との因縁譚みたいな怪談めいた話を御披露致しませう。

いつの頃からか私は占者にみて貰ふといふ習慣と申しますか、ものによつてはみて貰はないと何だか氣がすまないといつた氣持を持つやうになり、お前は亭主に相談する前にいつも天狗に相談するなどと笑はれたり、子供達なんぞからも迷信的だとよく小言をいはれるのですが、その天狗といふ占者が牛込にありまして、そこへ私が自分の安心の爲に時々見てもらひに行つたものです。明治四十三年の夏、夏目は修善寺溫泉に療養に行つてゐる間に、胃潰瘍の大内出血で一度假死狀態になり、辛うじて一命を取りとめた事がありましたが、その前日といふと八月二十三日のことでしたのですが、どうも側について居て見ると夏目の容態がはか〳〵しくないので、例の安心が得たさに、これ〳〵かういふ風だと病人の容態の事をその天狗に書き送りまして、どうか占をしてその上で御祈禱をしてくれるやうにと頼んでやつたものです。ところが中一日おいて二十五日に返事がまゐりまして、易を立てゝ見たところが、謂はゞ體に彈丸が當つて爆發したやうな形とでもいはうか、實に易が惡い。とにかく齋戒沐浴して三七日の間懸命に御祈禱をして見ますが、一週間目に息をぬいて一休みするから、一週間たつたら容態を知らせてくれろといふ返事なんです。丁度二十四日の危篤の日を挾んでの手紙の往復なんですから、時も時とて、二十五日といへば漸く夏目が息を吹きかへしたといふ文



（鈴木三重吉氏へ出した猫の死亡通知）

（塔の猫）

けで、まだ〳〵半死半生といつた危險狀態の眞最中だつたのですから、私がかうした手紙をもどんなに手賴りにしたかおわかりになりますでせう。とにかくそれから七日目七日目に此方の容態をしらせてやり、さうしていゝ工合になほつたので禮狀を出し、それから歸京しましてから御禮に行きました。すると天狗がこんな事を申します。

何でも私の手紙を受け取つた二三日前、どこからともなくつひぞ見なれない猫が――全身全くの黑猫だつたと申します――天狗の家に入り込んだきり、追つても逃げもせずそのまゝ居ついて、御飯をやれば平氣でたべるし、第一をかしいのは慣れもしない膝へ來ていゝ氣持さうに抱かれるといつた工合で、どこの猫なんだらう、不思議な猫もあるものだと言つてるうち、私の手紙でいよ〳〵御祈禱の壇を組んだりしてゐると、いつの間にやら姿を消して、それなり影も形も見せなくなつてしまつた。さて〳〵變な猫もあるものだ、煙の如くやつて來て又煙の如く消えてなくなつたが、一體どこへどうしてしまつたんだらう、時々御祈禱の合間合間に思つたりして居るうち、丁度滿願といふ日の前にかへつて來て、しかも壇の側で血を吐いてそのまゝ死んだといふのです。猫が身代りになつたんぢやないかなどと言つて居ましたが、場合が場合である上に、夏目と猫との取り合はせですから、そんな因緣もつけたいやうな話です。

猫の話はこれ位ですが、近頃夏目の描いた猫だといふ怪しげな猫の畫賛ものなどがチョイ〳〵現はれて、書畫の好きな方々に迷惑をかけてる模樣ですから、序ながら贋物に注意されるやうこゝへ申し添へておきませう。

さしゑ――河村目呂二

夏目漱石名言集

◇やらうと思はなければ、横に寢た箸を竪にする事も出來ん。
◇人間は只眼前の習慣に迷はされて根本の原理を忘れるものだ。
◇運命は神の考へるものだ。人間は人間らしく働けばそれで結構だ。
◇人一人眞面目になると當人が助かる許りぢやない。世の中が助かる。
◇意志のある所には天佑がごろ〳〵して居るものだ。
◇智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。
◇最も强い返事をしようと思ふ時には默つてゐるに限る。無言は黃金である。

胃腸病者の福音

從來の胃腸藥に滿足の出來ぬ方々に
絶對優秀の田口博士創製『イノール』のお奨め

すべてのものに冬眠がある様に吾々人間も夏は積極的であるが冬は比較的落付きがちであることはやがて體内各部の活動にも影響して參ります。殊に著しいのは運動不足等から消化機能の澁滯となり、食慾不振や消化不良を起し、その弱味につけ込んで種々の病氣が頭をもたげ、思はぬ患など引起すことも決して珍しくありません。然もその原因となるのは胃腸の障害が大部分であることは爭はれない事實であります。

然し胃腸の障害と一口に申しましても、その症狀により原因も異る如く、療法も單一なありふれた胃腸藥等のみに頼つては、自ら墓穴を穿つにも等しい危險千萬な事であります。從つて單に胃腸が惡いから、お腹が痛むからと言つてもどんな藥品を選ぶべきかは、餘程重要な事であります。そこで田口博士は多年苦心研究の結果、何れの胃腸疾患に用ひても極めて具合よく奏効する『イノール』を創製されたのであります。

『イノール』は今までの藥品の様に重曹やヂアスターゼを主劑としたあり來りの胃腸藥と異り、現代の治療藥中にはその藥効の點からその比を見ないと學界の權威も御推奬になつて居られる數種の理想藥の配劑より成る全く權威のある胃腸藥で、適用してくせにならず、胃壁を害する如き副作用は絶對にないばかりでなく、急性にも慢性にも、この病氣の根本から治療する特殊な効果があります。

即ち『イノール』の主要な配劑効果について申し上げますと、病氣を慢性化し習慣性となる重曹類の代りに『硅酸、燐酸化合體』を主劑とし、病變部を保護し、根本から胃腸を丈夫にする作用をなさしめます。

『過酸化マグネシヤ』は胃酸過多を防ぎ、その上種々の病菌や腐敗菌を殺します。

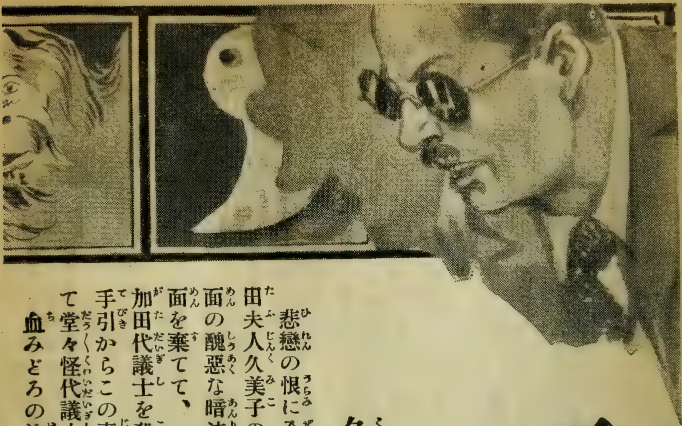
『活性酵母』と『水溶性葉緑素』は胃壁の病態を健全の狀態に還さしめ、消化液の分泌をよくし、消化作用を强くし、身體全體の榮養をよくします。

『ヂオタール』も胃の中で食物の醗酵するのを防ぎ、食慾を増し、消毒殺菌の作用が强大。

『ホルモン催進劑』は膵液其他の重要な消化液の分泌に驚くべき作用があるので、一時的の消化藥でなく、胃腸の機能を充分に發揮持續せしめる大効があります。

斯る卓絶した配劑より成つて居る『イノール』は、よく各種各様の胃腸疾患に對して著しい治療効果がありますが、主な適應症は、急性胃腸カタル、慢性胃弱、胃酸過多症、消化不良、胃下垂、二日酔、むねやけ、腳氣、等に目覺ましい効果のあることは既に專門醫界に定評ある所で、實驗せられた方々も悉く驚嘆、激賞せられて居ります。

實價五日分・五十錢。十二日分・一圓、全國藥店にあります。



探偵小説

死の密約

保篠龍緒
岩田専太郎畫

久美子を逐ふ

悲戀の恨に全身を燃し盡した槌田秋朗は、世にも恐ろしい復讐鬼となつて、目加田夫人久美子の身邊に呪の毒氣を吹きかけ初めて幾年、佞奸極りない彼は、政界裏面の醜惡な暗流に棹して、遂に某鐵道大疑獄の機密契約書を摑むや、俄然一切の假面を棄て、一方自己の利益の爲めに政界名士の脅迫を開始すると同時に、戀仇目加田代議士を殺し、猛然として久美子に迫つた。丁度その時、久美子の愛兒次郎の手引からこの事件の渦中に捲き込まれた俠盗王泉龍川が、義憤、仁俠、敢然と立つて堂々怪代議士に戰を宣告し、玆に奸兇と仁俠の兩雄が互に鎬を削り火花を散して血みどろの決鬪を開始することになつた。怪魔槌田はぐい〳〵と龍川を壓迫し、

公判廷での次郎の叫びに一層龍川の心を暗くした。時も時、槌田の底知れぬ魔手は遂に大島に隱した久美子夫人にまで延びて、東京へ僞電で誘き寄せたらしい形勢になつて來た。

愛する部下次郎は死の獄裡に、そして久美子夫人は怪兒の魔手に猛然、憤然と蹶起した大盜泉龍川は必死の形相は物凄いものがあつた。

「自動車をツ！　早くツ！　丸ノ内ホテルへッ！」

冷靜水のやうな龍川の、初めて叫ぶ興奮の怒號が室一杯に響き渡つた。

自動車は一直線に丸ノ内ホテルへ走つた。

「川上樣でいらつしやいますか……」と帳場がいつた。「加田と仰しやる御婦人の方が御待ちでございまし

たが、急用で御立ちになりました。御預りした御手紙は御立ちの節御持歸りになつたさうで御座います。何んでも電報が參りました御樣子で……』

『電報が？』

『ハイ……』

『何處へ行くともいはなかつたかい？』

『さあ、私共では解り兼ねますが、部屋付のボーイが或は承知してゐるかも存じません。』

龍川は早速部屋付ボーイに會つた。

『あ、あの三十番の御婦人で御座いますか。電報を御受取りになりますと、直ぐ御立ちの御用意で……福島へ行く汽車の時間を御調べになりました……』とボーイがいつた。

『福島へ？　東北のか？』

『ハイ、……飯坂溫泉へ行くには如何行くのかと御訊ねで御座いましたので、福島から電車か自動車でいらつしやいますやう申上げました。……丁度汽車の時間の都合もよろしいので、直ぐ上野驛の方へ御出でになりました。』

龍川は早くも槌田の魔手が彼女の上に完全に伸びて、彼女を孤立無援の地に誘ひ出す方策だと直感した。斯うなれば一刻も猶豫出來ん。平常の龍川にも似合はず、帳場やボーイの話を深く考へる事を忘れてゐた。彼は一圖に久美子を思ひ、槌田の行動を考へるので一杯だつた。

『野郎、飯坂溫泉へ引張り出しやあがつた。斯うなれば、却つてこつちの爲めにもいゝ。きつと槌田も泊つてゐるに相違ないから、今度槌田に會つたら最後……』

龍川は上野驛へ急ぐ自動車の中でこんな事を叫んだ。

上野驛へ馳け付けた彼は改札に就いて調べて見た處、それらしい婦人が時間間際に馳け込んで來て乘つたといつた。

久美子は飯坂へ！　恐ろしい陷穽があるとも知らずにひた向きに龍川を追つて走つたのだ。が如何なる口實と手段を以て、久美子を斯うまで自由に操つたのか？

流石の龍川も解らなかつた。と同時に怪物槌田の底知れぬ恐ろしい力に驚きもした。

汽車の出るまでに約一時間餘りあつた。龍川は待合室の片隅に默りこくつて腕を組んでゐた。龍川に連れられた新吉と馬留、如何なる事か解らないので、物凄く興奮した首領の顏色を恐々うかゞつてゐるだけだつた。

龍川は槌田怪代議士の底力と活動力を驚くと共に、其處に必然的に來るべき久美子の運命を考へてゐた。と同時に飯坂の宿で槌田に會つた時の作戰にふけつてゐた。如何にして槌田を

取り押へるか？　下手をすれば一方は恐るべき秘密の護符の勢力を持つ槌田であり、且つ代議士といふ肩書を持つてゐるのだから、如何な怪手腕を地方官憲の上に振はないとも限らない。然も自分は一介の盗賊である。變裝變名自由自在だとはいへ、天下を擧げて怪盗龍川に對する官憲の目が光つてゐる。

『これが龍川だぞ！』

と叫べば、地方の警察官など盲滅法にこれを信じて襲ひかゝるに決つてゐる。

又一方考へて見れば、久美子を誘拐した反面には龍川誘ひ出しの裏がないと誰れが斷言出來よう。久美子を囮にして龍川を釣る。其處には警視廳村瀨官房主事を通じて、如何な奸策が樹てられてゐないとも限らない。

危い！　槌田代議士は所謂王手飛車取りと差してゐるのだ。迂闊に敵の本陣には乘り込めない。

考へれば考へる程物凄くも企らんだ敵の怪手腕！　何故今迄にその對策を講じてゐなかつたのか？　龍川一流の非常手段を講じなかつたのか？　後手に後手にと組んで此の勝負、勢ひここに至るのは當然すぎる程當然なのではないか？

自分の手腕を信じ過ぎた泉龍川、一代の不覺か？

とまれ、行く所まで行つて、死鬪血戰、最後の運命を打開しなければならないのだ。

汽車を待つ間の一時間、龍川にはゐても立つてもゐられない程の焦慮だつた。

チロリ！　龍川の眼が光ると一種の合圖が新吉と馬留の胸に流れた。

片手を擧げて眼を二度撫でた。

『尾行の有無、四邊の警戒』といふ合圖だつた。

心得た新吉と馬留、分れ分れに立ち上るとそれとなく四邊に警戒の眼を放ち初めた。

龍川は時計を出して見た。まだ發車には四十分餘りある。

十分ばかりすると新吉が龍川の前を太股を搔き〳〵通つた。

『尾行なし。』といふ返事だつた。

と間もなく馬留が向ふ側へ腰をおろして帽子のごみを指先でしきりに拂ひ初めた。

『警戒なし。』といふ返事なのだ。

龍川は立ち上つた。悠々と便所へ入つて行つた。警戒や尾行の有無に關する最後のテストなのだ。新吉と馬留の目がぢツと四邊の氣配にそゝがれる。暫くして新吉が立ち上つた。

龍川が大便所へ入つて十五六分、出て來た時には姿がガラリ變つて鑛山の監督か請負師風。八字髭に獵虎の襟卷に、太い金

鎖り、パンツに編上靴、ふくらんだ鞄を抱へて出て來た。手を洗ひ乍ら再び手先の合圖、

『俺にならつて變裝しろ。』

便所の入口に頑張つてそれとなく警戒の任に當つてゐた新吉と馬留が代る／＼大便所へ入つた。

一人は工夫に、一人は土方風に、夫々の柄に合つた美事な變裝だつた。

汽車は三等。七時發の汽車に乘つた。汽車中龍川は默々として一語も發しなかつた。そして間もなく眠つて仕舞つた。

福島驛に降りた三人。驛の出口で新吉と馬留とから『異狀なし、安心して可。』といふ合圖があつた。

驛前には客引が盛んに出てゐた。

『相手の宿がわからんから、捜りを入れろ。多くもない宿屋だ。』

と龍川がいつた。

『此處は電車でも自動車でも同じ時間ですね、三十分かゝるといやあがる。』

と新吉がいつた。

結局二人は電車で、龍川は自動車に乘つた。

電車の終點で落ち合つた三人は片端しから宿屋捜しを初めた。桝屋、赤川屋、角屋、泉洲閣、花水館等、捜し廻つた。

『その御婦人で御座いますか、手前共へ御出になりましたが、……』と花水館の番頭がいつた。『電

報を御受取りになりまして、直ぐ御立ちで御座いました。今一時間前位で御座います。』

『何處へ行くといひましたか？』

『女中の話によりますと花巻へいらしたさうで……』

『花巻へ？ フーム。』と龍川は考へた。

『でその婦人の來る前に誰れか來はしなかつたか？』

『いえ、別に御座いません……御婦人の方が、加田様と仰しやいました……泉様は御見えにならないかと仰しやつて御尋ねで御座いました。』

久美子は僞龍川から再度の電報で花巻へ引張られたのだつた。

次の上りを待つ間、彼は郵便局へ行つて花水館内

加田といふのに宛てた電報の有無とその內容を調べた。小さい田舍の町の事だから直ぐ解つた。

電報は花水館內加田久美子宛。

『センポウノツゴウデハナマキヘユク　ハナマキショウウンカンヘコイ　イヅミ』

發信は仙臺局からであつた。

『ウーム。』と龍川は唸つて考へ込んだ。

龍川は宿の帳場に就いて婦人の人相を詳しく尋ねた。どうも久美子夫人らしくない節がある。服裝、持物等に就いても聞き正した上、

『新吉と馬留は驛へ行つて、その婦人の行動を洗つて來い。』

と龍川がいつた。

『へイ。』

『俺にやあどうも腑に落ちねえ。』

彼は花巻の松雲館へ電話をかけた。三十分許りすると通じた。

『川上樣？　いえ何も承つてゐません。え？』

龍川は槌田の人相をくはしく話した。

『いえ、さういふ方もいらつしやいません。』

益々不審に思へて來た。何の爲めに俺を茲まで引張つて來たのか、引張り出すのか、何かしら其處には恐ろしい陷穽があるやうな氣がしてならない。

『東京へ引き返さうかしら？』

そんな事を考へてゐた時、驛の搜査に出した新吉から電話がかゝつて來た。

『首領ですか？　驛の出札を調べた處、さういふ女が下りに乘つた事はないといふんです。上りで來て降りたのを見たといふんですけれども、其後その女はまだ驛へ現れてゐません。』

『電車や自動車は？』

『宿からは電車に乘つたらしく、自動車屋の方では知らないといふんです。そして電車の方ですが、その當時の電車の車掌が乘務中でまだわかりません。が電車の附近のものの話では電車を降りて市中へ歩いて行つたといふんですが、これはまだ確定的ではありません。留が主だつた宿を調べてゐますから、私も手傳つて……』

『いや、お前は驛に張り込んでゐてくれ、俺も直ぐ行く。上りは？』

『あと二十五分で發車します。』

龍川は大急ぎで宿を飛び出した。

絶望の陥穽

大島から龍川の招電に接した久美子は、東京灣汽船發着所へ上つた時、見知らぬ男が彼女に一通の手紙を渡してスツと消えて仕舞つた。

『最近警視廳の目が光つて活動意の如くにならない。部下の身邊も危險に瀕してゐる。一まづ丸ノ内ホテルへ行かれ度い。その上で面會するか又は手紙を差し上げる。』　龍川からの指令である。

心を痛め乍ら久美子は丸ノ内ホテルへ着くと間もなく第二の手紙を持つて來た男がある。

『槌田が今夕の急行で大阪へ行くらしい。御足勞ながら、槌田に尾行して行く先をつきとめられ度い。委細は東京驛止の手紙又は電報を願ひ度し、當方宛名は川上出といふ事に願ひ度、そちらは加田久子と仰せ願度し。

東京驛に張り込を頼む。

小生報知を受け次第出發急行。

東京より關西の方が活動には却つて便利と思考さる。』

で久美子は大急ぎで東京驛へ出かけた。

夕景槌田が單身で現れた。一等寢臺に納つて神戸行急行に乗り込んだ。彼女もそつと一等寢臺へ入つた。

大阪に着いたのが早朝だつた。彼は驛前の自動車を拾つて寶塚ホテルへ入つた。無論久美子も寶塚ホテルへ逐ひかけた。

槌田の室は二階の二室を占領したし、久美子は同じ廊下の一端にかくれた。槌田の室の右が空いてゐた。彼女は早速それを友人の名義で豫約して、敵の動靜をさぐらうとした。

槌田は晝頃になつて出て行つた。久美子はそれも尾行しようかと思つたけれども、荷物が置いてあるので、安心して龍川への第一報を東京驛止めで打電した。

一日中室に入つて龍川の來るのを待つてゐたが、何の音沙汰もなかつた。

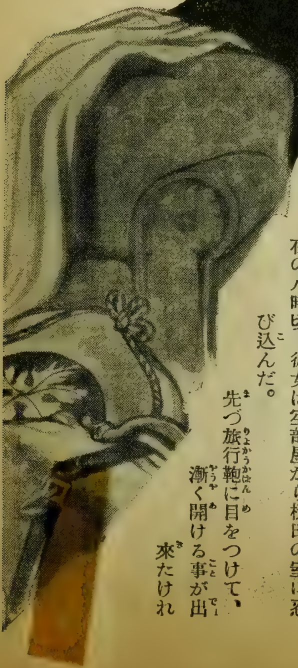
夕方に槌田が戻つて來たが、直ぐに外出した。ホテルで調べると『今夜は遲くなる』といひ殘してある事が解つた。

久美子にとつては絶好のチヤンスだつた。

彼女は空いた室へ入つて、今後夜の探偵に便利なやうな準備をした。それから槌田の室へ忍び込み、空室との間の扉の鍵をはづしておいて、何時でも槌田の室へ忍び込めるやうにした。

彼女は槌田が例の重大な密約を常に肌身離さず持つてあるい

てゐる事を知つてゐた。何處へ隱したか？ 邸にゐる時には全般的の捜査は困難だけれども、旅なれば持物も少く、全部の捜査をするに都合がいゝ。



そして又空部屋へ忍び込んでゐれば、夜分にでも槌田の一擧一動を觀察する事が出來る。そしてその細かい動作の中から、彼の秘密を觀破しようと考へた。

寶塚の第一夜はホンの小手調べで終つて仕舞つた。

翌日は一日中、槌田が部屋に頑張つてゐて色々な人物を引見したので彼女にチャンスが惠まれなかつた。

夕方になると再び彼はホテルを出た。

『今夜は十二時過ぎる。』

とボーイにいつてゐるのを彼女は空部屋の中で聞く事が出來た。

今夜こそは！

夜の八時頃、彼女は空部屋から槌田の室に忍び込んだ。

先づ旅行鞄に目をつけて、漸く開ける事が出來たけれ

ども、中にはワイシャツ、靴下等で何物もなかつた。小さい手提、旅行鞄、戸棚、机上の品物そんなものを夢中になつて調べてゐる時、

『オイツ！』背後で聞き覺えのある聲がした。

『ハツ！』

として振り返ると怪物槌田がニヤ〳〵笑ひ乍ら立つてゐた。

『…………』

久美子は聲も立てなければ、取亂しもしなかつた。驚いたり騷いだり悲鳴を擧げたり、狼狽したりする心の暇がなかつた程、彼女は眞劍だつた。一生懸命だつた。他の何者も顧みる餘裕がなかつた。萬一現場を見られたら？……などといふ考へはなかつた。萬一は萬一に所する覺悟がある。それ程彼女は必死だつた。槌田が現れようが、刑事が來ようが、久美子は其處でどうしようなどとは考へてもゐなかつた。

血走るやうな眼でヂロリと槌田を横目で睨んでおいて、不變らずに捜査を續けた。

『ハツハヽヽ奥さんどうです、捜し物はあつたかね……いや、さう懸命に片付けてくれなくてもいゝ。』と槌田が笑ひながらいつた。『捜し物でしたならば、俺も御手傳ひしようか。

この卓子の上、こゝには何もないですよ。そこの戸棚？　ほんの旅行用品ばかりです。え？　その箱？　その中には楊子、齒磨き、……そちらの箱、それは剃刀道具一式……や、この箱は、ホラ、カフスボタンだけですよ……御望みの水晶の飾り玉は、さて、どこに入れましたかなあ……とんと忘れてしまひましたよ。』

『…………』

久美子は默つて恨と口惜さに籠る眼でヂツと仇敵槌田代議士の顏を見守つてゐた。

『久美子さん、さう恐い顏をしなくともよいぢやらう。……折角の珍客の御入來ぢやから、何はなくとも一餐差し上げませう……いや、遠慮には及ばない……食事でも濟ましてゆる〳〵御捜しなさい。槌田秋朗、決して隱し立てはしませんよ。ハツハヘ、ヽ。』

笑ひ乍ら彼はベルを押した。

ボーイが來た。

『注文しておいた食事の用意は出來てゐるか？』

『ハイ、出來てゐます。』

『二人前だね？』

『ハイ。』

『飮みものはシャンペンに葡萄酒ぢや、直ぐ運んでくれ。』

かねて用意してあつたと見えてボーイは直ぐと食事を運んで來た。

『ゆる〳〵食事をする。用事があれば、呼ぶから……』

ボーイ達は室を出て行つた。

『久美子さん。さあ、どうぞ。』

久美子は無論見向きもしなかつたが、槌田は平氣で食卓について。そしてシャンペンを杯につぎ乍ら、

『斯うして差し向ひで食事をするのも、あの陶山樓以來ですな……實は我輩、最近、鼠共が小うるさく付きまとふでな、堪忍が出來なくなつたのぢや。で、貴女と二人限りになつて、ゆるゆる話をしようと思つて、わざ〳〵御出を願つたのぢやが、貴女が巧く我輩を尾行てくれるかどうか、それが一番氣がかりぢやつた。が幸ひ我輩の指導よろしきを得て、こゝまで來て下すつたので、我輩も頗る滿足、且つ感謝に堪へない次第です。貴女の憎しみに光るその黑い眼、……實に何ともいへない魅力ぢや……今日こそは多年の望みがかなつた、斯うして寶塚ホテルで、夫婦差向ひの食事が出來るといふ、我輩實に嬉しいんぢや。電報で、わざ〳〵御出を願つた甲斐が、あるといふものぢや。』

電報で、わざ〳〵御出を願ふ？ さてはあれは槌田の細工か、龍川の僞電、僞手紙、さうして自分を茲まで釣り出し誘き出したのか！ 恐ろしい陷穽、恐ろしい槌田の策謀！ して見ると何も知らない龍川は？

不安に馳られた久美子は、

『それでは、僞電でわたしを……』

『まあ〳〵、そんなものぢやよ。』

もうこれ迄だ。龍川、村瀬等重圍の中にあり乍ら、其處を脱出したのみならず、遠く大島へ僞電して久美子を呼び出し、僞手紙を巧みに配つて悠々大阪まで彼女を誘ひ出し、故意にホテルの室内を探させて適當な機會に退引ならぬ羽目に彼女を陷れたその奸智、奸惡さ、斯うなつた以上、女手一つで如何ともする事は出來ない。こちらは纎弱い女の身一つ、相手は絶大の勢力と無盡の奸智を持つ怪人物、如何して眞ともな太刀打ちが出來よう。結局は男の自由にされて仕舞ふより仕方がないのだ。

絶望の陷穽だ！ 孤立無援、然も兇惡な魔人に摑まれた久美子は泣くに泣かれぬ窮地に退進谷つて仕舞つた。

恨重なる此の男、愛する次郎を邪道に陷れて、殺人の罪に何にも知らぬ鐵窓に閉ぢ込めて仕舞ひ、愛する夫を苦しめて殺して仕舞ひ、そして又今自分の身も心も喰ひ荒さうとする！

この恨、この口惜しさ。

さうだ！ こんな男は生かして置いていゝものか。天下の大疑獄の秘密を握つて惡事の限りを盡す男、天下の爲めにも、自分の爲めにも、さうだ最後の手段だ！ 殺せ！ 殺して仕舞へ！

彼女は決心した。胸肌に隱した小型ピストルを取り出して、キッと槌田を狙つた。

『死んぢまへッ！』

『ハッハッハヽヽヽ、撃てますか？ 彈が當りますか？ さ、我輩防彈チョッキは着てゐませんから、この胸を、貴女の爲めに高鳴る心臓を狙つて……一……二……三ッ！』

久美子は引金を引いた。

カチリ！

意外、さゝやかな引金の音のみであつた。

最後の貞操

『どうした？ ピストルまでが、貴女の意志通りにならないと見えるね。』と槌田はフォークを手にしながら笑つた。

カチリ！

再度も出ない。彼女はピストルを開いて見た。彈は一發も入

つてゐなかつた。昨夜まで確かに裝彈してあつたのに……槌田の魔の手は玆まで伸びて仕舞つてゐたのだつた。

駄目だ！　もう絕望だ！

『久美子さん。』急に語調を改めて底力の籠つた聲で代議士がいつた。『そんなに周章てる事はないだらう。まあ、落付いて話をしようぢやないか。え？　これを御覽なさい。そしたら少しは落付けるでせう。』

彼は一通の電報を差し出した。

殺さうとまで張りつめた久美子の心は、ピストルの不發で一度に『絕望』に突きくづされて仕舞つた。そして殘る處は『絕望』から來る女の心弱さであつた。極度に張りつめた氣持が一旦にくづれた彼女の頭腦は殆ど何が何んだか解らない位に混亂してゐた。血走つた眼ではあるがその光は空ろであつた。蒼白に引きしまつた顏ではあるが勇氣が失せてゐた。

彼女は殆ど無意識に手を出してその電報を受取つた。

リウセンハナマキオンセンデホバクシタ　ゴ　コウイヲシンシヤス　ムラセ

『嘘ですツ！』

一目見た久美子が叫んだ。

『嘘？　發信地が花卷溫泉で、然も官報ぢやよ。花卷溫泉なぞへ龍川が行く筈がないと云ふぢやらうが、これには深い仔細のある事、まあ、お聞きよ久美子。』

『默んなさい、失禮な……そんな……そんな……』

餘りの狎れ〳〵しさに久美子は蒼白の顏を擧げて叫んだ。が相手は却つてフフンと嘲笑一番、

『……ハツハツハツまだ興奮が醒めないな。まあ〳〵心を落ち付けて……第一村瀨官房主事なぞが、こんな電報を寄越すのが不審ぢやらうが、それには立派な理由がある。』

彼は波々と注いだシヤンペン酒をグイとあふつて悠々喋りつづけた。

『村瀨と我輩とは仇同志ぢやつた。處が、流石の村瀨もさうばかりはいつてゐられない事が起つたのぢやよ。といふのは我輩の友人に北海道出身の元代議士の馬場捨吉といふのがゐる。こいつが例の鐵道事件に連坐して立派に署名してあるのぢやが、餘りつまらない奴ぢやから、我輩今日まで大目に見てやつてゐた。處が、馬場の奴、最近すつかり尾羽打ちからして仕舞うたものぢやから、我輩の處へ書面を寄越して『實は小生が連名簿に名を連ねたのは村瀨官房主事の代理を勤めたに過ぎず、村瀨より代理として連名に加入され度旨の書面、並に小生と村瀨との此の件に關する利益分配契約書を所持してゐるが、目下窮

迫せるを以て、村瀬を脅迫、應分の援助を乞ふ積りにつき、右本件に關する一切の秘密を握らるゝ貴下の了解を得る」といつて來た。で我輩早速村瀬關係の書類を買收するからといふてやつた處、馬場も喜んで之に應ずるといつて來て、既に手金を送つたので、近く北海道から上京するというて來た。で我輩は馬場からの賣渡證を村瀬に見せてやつた處、村瀬の奴、一も二もなく降參しよつたのぢやよ。でその結果、村瀬も一身上の浮沈には代へられないから我輩のいふ事を聞く事に妥協したのぢや。』

彼は得意氣に言葉を切つた。恐ろしい惡代議士の魔手は遂に積年の仇敵の弱點をさへ押へて自己の前に膝を屈せしめて仕舞つたのだ。

『そんな事で、我輩今度の計畫には、龍川捕縛を條件に村瀬と手を握つて、まあ今日此處まで進行したといふ譯ぢや……』

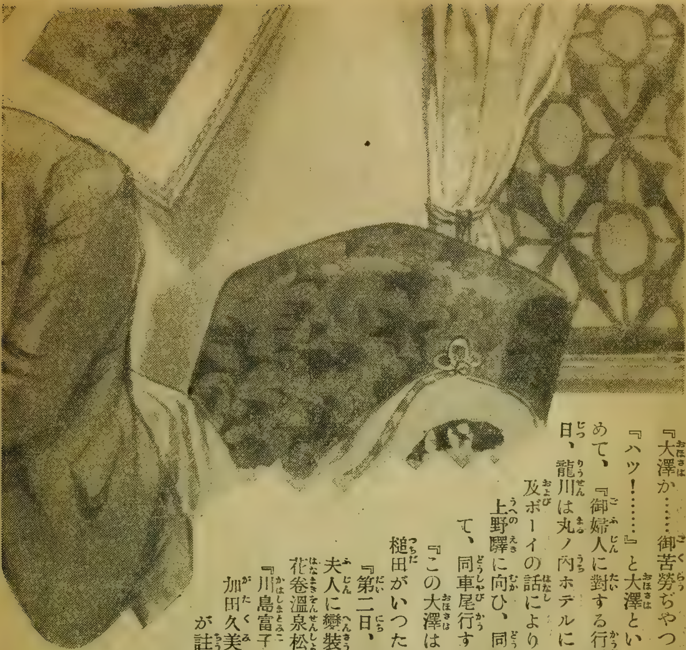
奸惡極りない槌田代議士の毒手振りは、斯うして久美子誘拐と龍川捕縛の一石二鳥の陰謀になつた。

『處で、龍川ぢやが、貴女は先頃から、あの大泥棒の口車に乘かつて、一切を委したさうぢやね。アツハヽヽヽ、ぢやが、流石の大盜龍川も、我輩にかゝつては手も足も出んのぢや、此の間も浩少年を一寸連れ出した時に、ノコ〳〵と下手な變裝でやつて來よつたから、小ぴどく面の皮をひんむいてやつたので、奴さん、警視廳の連中に押かけられ、這々の態で村瀬の自動車に乘つて逃げだした始末ぢや。泥棒は泥棒だけの智惠しかない。自分では天下の俠盜泉龍川なぞと自惚れてゐるが、警視廳の役人どもが頓馬ぢやから、捕らないだけの話、第一貴女のやうな婦人でさへ、寢込を襲はれて水晶の飾玉を、反對に盜まれてゐるんぢやからな……高が知れた小僧共ぢや……それを貴女が次郎を助けるのなんのといふ口車に乘せられて、俠盜龍川を偉い奴ぢやと信じてゐるのが可笑しい……あんな狗鼠泥など、我輩の目から見れば、捻りつぶすに手間暇はいらない……裁判所でルンペンを買收して、怒鳴らせたり、我輩の出入りに、人並らしく尾行をつけて見たり、餘り五月蠅いから、村瀬と妥協ついでに、村瀬への贈物として龍川を呉れてやつたのぢや……どんな風にして呉れてやつたか？……現場を見て來た奴がゐるから、それから話を聞かせて上げよう……』

彼は電話機を取り上げてホテルの帳場にかけた。

『槌田ぢやが、我輩の面會者が待合室に來てゐる筈ぢやから、……大澤といふ……室へ通してくれ。』

間もなく眼の鋭い俊敏さうな小男が室へ入つて來た。船付場で久美子に手紙を渡した男だつた。



『大澤か……御苦勞ぢやつた。龍川尾行日記をそこで報告してくれ。』

『ハツ！……』と大澤といふ男が直立不動の姿勢で答へ、手帳を出して讀み初めて、『御婦人に對する行動は省略して龍川だけの事を申上げます……第一日、龍川は丸ノ內ホテルに部下二名と共に現れ、私が買收しておいた帳場の話及ボーイの話により、加田夫人は上野發飯坂溫泉に行きたるを確信し、上野驛に向ひ、同驛の便所內にて變裝し、三等車に乘り込みたるを以て、同車尾行す……』

『この大澤は刑事を永年してゐて尾行の名人ぢや。』と滿足さうに槌田がいつた。

『第二日、翌早朝、福島下車、飯坂溫泉花水館に到着。然し加田夫人に變裝先發せる川島富子は小生よりの打電により、宿へは花巻溫泉松雲館へ行く旨を傳へて福島驛に引き返せり……』

『川島富子といふのは矢張り我輩の部下で、龍川誘引の爲め目加田久美子夫人の身代りになつていつとるのぢやよ。』と槌田が註を入れた。『……で次は？』

『龍川等は多少疑念を抱きたるものの如く、部下を福島驛に派し夫人の行動を搜査す。小生等は直ちに引き返す豫定なりしも、富子と相談の結果、富子を花巻溫泉まで派遣する事とし、小生はその旨、槌田代議士に打電す。小生は桑折驛に先發、龍川一行を待ち受く。然るに富子より來電、龍川等は富

子を尾行するらしきに付き、富子は之れを利用して花巻まで誘致する旨申來る。小生は桑折驛にて富子、龍川等を見送り、富子よりの密書を受取りて、そのまゝ東上、直ちに大阪に向ひ、本日來阪せり以上……これで私の分は終りました。』

『それからの分を我輩が報告しよう』

と槌田がいつた。『大澤からの報告電報を受取ると直ちに、我輩は、警視廳村瀬主事宛に電報を打つた。つゞいて村瀬からは萬事手配濟の返電が來、間もなく龍川逮捕の電報が入つた次第であります……』

いひ乍ら彼は大澤を扉口に送り出し、扉を閉め、鍵をかけ、閂をさした。それから、久美子に向つて、

『どうぢや、我輩の計畫の眞實性が了解出來たぢやらう。』

久美子は何もいひ得なかつた。神出鬼沒、幻の如く、奇策縱横、無人の境を往く如く一代の奇盜怪賊泉龍川を僅かに一擧手の勞を以て捕縛させたのみならず、深讐綿々として身邊を狙つてゐた警視廳の最高幹部の弱點を押へて完全に自己の意志のまゝとし、同時に十年悲戀を抱いて蛇の如き執念さで狙ひに狙つた薄命の美女を最後の陷穽に陷れた槌田代議士の怪手腕、その大膽な、その敏速なその周密な策戰奇謀に對して、如何に氣丈夫の久美子と雖もうどうする事も出來なかつた。

唯一の頼みの綱とした龍川も、無殘や灰色の壁の中に閉ぢ込められて仕舞つた。天上天下に身の置く所もなくなつた彼女獨り、今は唯運命のまゝに、雨に濡れ風に叩かれる一本の女郎花に過ぎなくなつて仕舞つたのだ。

泣くに泣かれぬ現在の自分、獨りなれば、自殺も出來よう……が然し、獄裡に空しく救ひを叫ぶ愛兒次郎は？　大島のほとりに淋しく一人殘したいたいけな浩少年の行末は如何ならう？

久美子の心は痲のやうに亂れに亂れた。

槌田は勝利の甘酒に醉ひしれて、殘忍な惡魔の微笑を浮べて、小さい小鳩に最後の止めを刺すばかりだつた。

『おい久美子ツ！』惡魔の聲は針のやうに鋭く氷よりも冷かつた。『久美子、お聞きツ！　俺は村瀨を倒して仕舞つた。俺は天下無敵といはれた泉龍川さへ四角な壁の中へ押し込めて仕舞つた。そしてお前の身體もこの室の中へ突然に閉籠める事が出來た。そして、久美子、この萬能の俺はお前の子供次郎を、あの冷い牢屋で助けを叫び、苦しみに泣いてゐる次郎を生かすも殺すも自由だ。俺の前には何者も、俺の前途を阻む者が無いんだ！　俺は萬能だ。俺の摑んでゐる大秘密の前には、大臣もない政黨もない、何者も無い、俺は萬能だ。その俺がいふ、久美子、あの性質の善良な青年次郎を殺すか生かすか、あの可愛らしい浩少年を殺すか生かすか？　すべては、久美子、お前の胸にあるんだ。お前の胸一つで二人の小さい生命が失はれるか生きるかなんだ。よしんば二つの生命を失つたとしても、今此の室で、お前は如何なる事も出來ないんだ。叫び度ければ叫べ、泣きたければ泣け。構はない。然し叫んでも泣いても誰れも來ないぞ。さ、人の子の母としての久美子、次郎を殺したいか、浩少年を殺したいか。生かしたいだらう？　俺は次郎を即座に生かす事が出來る。牢獄の苦しみから救ひ出す事が出來る。次郎、次郎！　次郎を救へ、そして次郎を救ふには俺に……』

悠然と椅子に深々と腰をかけて底力のある聲で久美子に迫る槌田怪代議士。

ぢツとその言葉を聞いてゐる久美子、もう立つてゐる事は出

來なくなつた。槌田の目的は始めから解つてゐる。が彼に對する恨、彼に對する呪に全身を燒きつくしても……次郎は！　浩は！　あゝ、あの子供達は如何なるだらう？

薄命の久美子の大きく見開いた恨の眼からは大粒な涙がハラハラと流れ出した。

涙！　涙！　涙！　血の涙だつた。

久美子は傍の椅子に倒れるやうに腰をおろした。堪へても堪へても出て來る悲憤の涙！

『泣きたければ泣け。然し俺の心はその涙では解けないぞ。さ、返事をしろ。久美子、次郎を助け度いかツ！　助け度いかツ。』

『…………』

『助けたいかツ！』

『えゝ！……』

血を絞る最後の返事！

『ウムツ！』と槌田が唸つた。

十年悲戀の目的を達したのだ。十年恨の目的を今達したのだ。悲慘な母の最後。殘忍酷薄な歡喜が彼の全身にうづついた。

『では、無論、次郎を助けるに就いて、俺の條件を承知だらうな。』

『えゝ。』

涙の中に細くかすかにうなづいた。

『確かに承知するな。』

『えゝ。』

『俺の妻になるか？』

『えゝ。』

あゝ、悲痛な此の返事！　我子の爲めにすべてを犧牲にする母親の悲痛な叫び。恐ろしい拷問に責めさいなまれて、唯だ我子の爲めに……たゞ我子の爲めに……忍ぶべからざるを忍ばなければならない彼女なのだ。心の弱い爲めではない。自殺も出來ない此の場の母親の心、それこそ尊い悲慘な悲痛な決心なのだ。自殺するよりも苦しい決心なのだ。そして又如何ならうとなるやうにしかならないといふ一種の悲しい諦めも交つてゐた。…………

『ハツハツハツ……』と槌田は室一杯に哄笑した。『素晴らしく穩しいな。これも次郎を救ひ出し度い爲め……ぢやが、さて次郎は出たわ浩も無事といふ事になると、何口約束などといふ事になる……ぢやから、約束は即時に……』

彼はズイと椅子を進めた。

『ぢやが、その前にいうておく事がある。……今日が今日次郎を助け出す譯には行かない。夫々法の手續といふものがある。』

その手續をするまでに一ヶ月はかゝると思はなければならない。承知ぢやらうな？』

『えゝ、承知しました。』

彼女は一切を悲しくも斷念した。

『ハツハヽヽヽ、その次郎を救ける爲めにはお前は地獄の呵責を受けなければならないぜ。』

『覺悟してゐます。』

彼女は身を慄はせて答へた。

槌田は彼女の傍に身を摺り寄せて來た。

『久美子、俺は二十年の戀に焦れて來た。惡魔の戀だ。お前は俺が嫌ひだ、俺を憎んでゐる、俺を呪つてゐる。俺を恨んでゐる……がそんな事は俺は何とも思はない。憎め、呪へ、恨め、……だが俺の慾しいものはお前のその身體だツ！　俺は俺は……』

醜惡な惡魔の情慾に燃えさかつた槌田が、いきなり久美子の手を摑んだ。久美子はブルッと身慄ひして思はず身をすくめた。

『何んだッ！ それは！ 今更、厭でも、何んでも駄目だぞ、お前は俺の妻だ。お前は子供の爲めに身を賣つたんだ。お前は俺のものだ。永久に俺のものだ。俺のものだ、俺のものだ……さあ、お前の唇を！ 唇を……唇を……』

久美子は懸命に腕をのばし、身をそらして防いだが、悲嘆と絶望と疲勞し切つた彼女は、最早男の力をさゝへる事は出來なかつた。

『…………』

『久美子ッ！』

醜惡と非倫の猛獸はたけりに猛つて襲ひかゝつた。絶體絶命。あの醜い唇が、あの狒々の唇が、邪淫の蛇の舌が……迫つて來る……

『次郎…… 浩…… 次郎……あゝッ！ 眼が……ゴリラの眼が……』

叫ぶと等しく久美子は氣絶したやうに眼を閉ぢた。と、突然に、槌田の身は強い電流にでもかけられて、痺れたやうになつてしまつた。口も利かない死のやうな沈默だ、化石だ。最後のこの急變、最後の瞬間に、刹那に、惡鬼にわづかの悔恨があつたか、良心があつたか？ 或は

神の怒に急死したか？……

久美子は僅かに眼を開いた。

眼を開いてアツ！と驚いた。驚いて呆然として仕舞つた。

あの醜悪な顔、それが情慾に燃えた顔とは打つて變つて、恐怖にゆがんでゐる。

今が今、眼の前に迫つた異様の眼、ゴリラの眼のやうな異様の眼は、もう黒い二重の眼鏡にさへぎられて見えないが、彼女を見詰めずに、彼女の頭越しに椅子の上を睨めてゐる。

彼女が如何して、ゴリラの眼と叫んだか、彼女自身には意識しなかつた。彼女は恐ろしい彼の目を見たやうな氣がしたのだ。幻のやうに見たのだ。彼女の夫が死の斷末魔に叫んだ言葉の『ゴリラの眼！』と同じ言葉を叫んだのは、死んだ夫の靈が、彼女の身を守つたのか。

その爲めに人獸槌田が恐怖を感じたのか？

否。それではなかつた。

久美子は僅かに身を乘り出して椅子の上を眺めた。と再びハツとした。

二挺のピストルの筒口が椅子の上、右手にヌツと突き出てゐる。槌田の眞正面を狙つてゐるのだ。久美子にはそれだけしか見えなかつた。

巨大なピストルが憤怒の手に緊と握られてゐる。今にもダンツ！と打ち出しさうだ。

槌田の顔は恐怖の爲めに次第に蒼く變つて行つた。

と同時にバツ！と彼の背後から襲ひかゝつた。猛然と躍り出た男の影が、腕がグイツと槌田の頸にかゝつて、恐ろしい超人的の力で、槌田の顔をグイツと捻ぢ向けると、白い綿様のもので、その口と鼻を覆つた。プン！と匂ふクロ、ホルムの臭氣！流石の槌田、叫ぶも防ぐも寸隙のない早業。

踠かうとする槌田の兩腕は早くも他の男の手で押へられた。

『來いツ！新吉ツ！大丈夫だ。』

四邊に響くその壯快な聲！

龍川だつた。

泉龍川だつた。危機一髪の刹那に、忽然と密閉した室内に出現した龍川！

既に警視廳の手で捕へられてゐる筈の快盗泉龍川！

その龍川が出現したのだ！

その龍川が久美子の危機を救つた！

快俠龍川の出現！神出鬼沒の名に恥ぢぬ龍川の出現。

恐ろしい奇蹟だ、嬉しい奇蹟だ！

かくて事件は意外から意外へ展開して來た。（つゞく）

東京帝國大學首席卒業士名番附

番付	卒業年・學科	經歷	氏名
横綱	明治一六年醫科	醫學博士・東大名譽教授	河本重次郎
大關	同 一九年農藝科	農學博士・東大名譽教授	古在由直
關脇	同 二一年英法科	樞密院副議長 法學博士・日本大學總長	平沼騏一郎
小結	同 二二年英法科	貴族院議員	犬塚勝太郎
前頭	同 二五年佛法科	貴族院議員・男爵 民政黨總裁	若槻禮次郎
前頭	同 二五年建築科	工學博士・早大教授 東大名譽教授	伊東忠太
前頭	同 二八年政治科	法學博士・貴族院議員 東京帝國大學總長	小野塚喜平次
前頭	同 二八年物理科	理學博士・東大教授	田丸卓郎
前頭	明治三二年採鑛冶金科	貴族院議員 工學博士・子爵	井上匡四郎
同	同 三三年政治科	貴族院議員 法學博士・男爵	松岡均平
同	同 三三年漢學科	文學博士・東大教授	宇野哲人
同	同 三六年實驗物理學科	理學博士・東大教授	寺田寅彥
同	同 三七年政治科	法學博士・著述家 東大法學部講師	吉野作造
同	同 三九年政治科	南滿洲鐵道株式會社理事	木村銳市
同	同 四一年獨法科	法學博士・代議士・辯護士	鳩山秀夫
同	同 四一年政治科	前大藏省主稅局長	青木得三

行司			
	大正二年國史科	文學博士・史料編纂官 東大教授	中村孝也
	大正四年政治科	內務省土木局長	唐澤俊樹

年寄			
	明治二五年英法科	法學博士・東大名譽教授 貴族院議員	土方寧
	明治二六年哲學科	文學博士・『我觀』主幹	三宅雄二郎

番付	卒業年・學科	經歷	氏名
横綱	明治一七年政治經濟科	貴族院議員 法學博士・男爵	阪谷芳郎
大關	同 二〇年政治科	法學博士・宮內大臣・議定官	一木喜德郎
關脇	同 二〇年醫科	宮內省御用掛 醫學博士・東大名譽教授	三浦謹之助
小結	同 二四年佛法科	法學博士・代議士 政友會總裁	鈴木喜三郎
前頭	同 二五年英法科	法學博士・貴族院議員	水野錬太郎
前頭	同 二七年獨法科	法學博士 東京商科大學名譽教授	中村進午
前頭	同 二八年英法科	日本銀行總裁	土方久徵
前頭	同 三〇年英法科	法學博士 東大・國學院教授	筧克彥
前頭	明治三二年政治科	法學博士・東大教授 專修大學學監	河津暹
同	同 三三年獨法科	貴族院議員 法學博士・辯護士	松本烝治
同	同 三五年漢學科	文學博士・東大教授	鹽谷溫
同	同 三六年獨法科	法學博士・東大教授	牧野英一
同	同 三九年哲學科	文學博士・京大教授	野上俊夫
同	同 三九年英法科	前農林次官	松村眞一郎
同	同 四二年獨法科	法制局長官	堀切善次郎
同	同 四五年獨法科	法學博士・東大教授	末廣嚴太郎

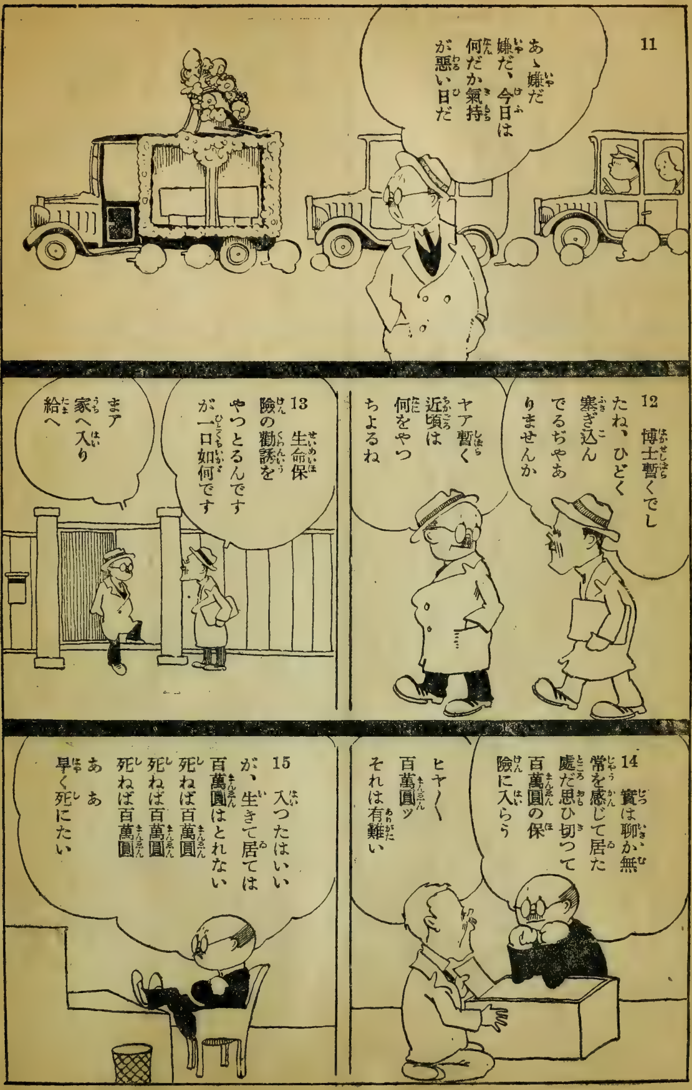
長岡規矩雄

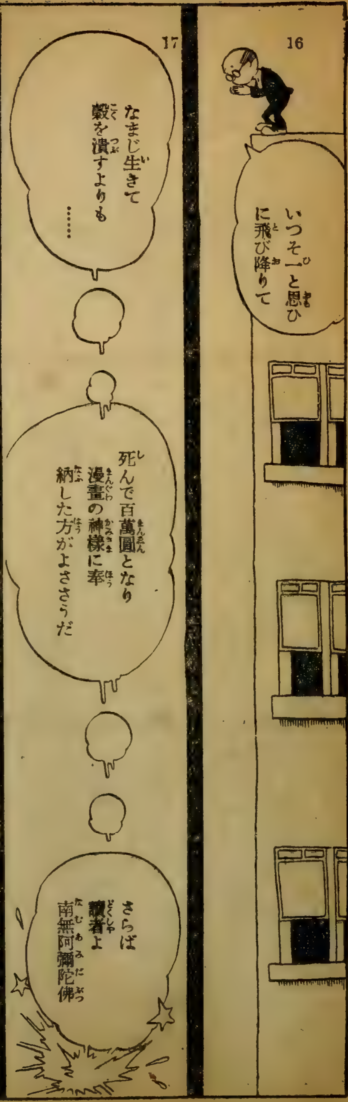
連載漫画 ぎんちゃく博士

百万円の命

田河水泡

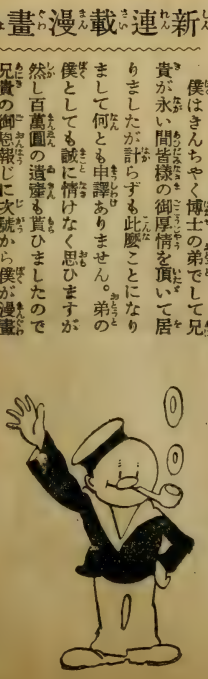
5
たまには墓詣りもいゝ心地だ
6
オヤ黒枠の手紙が二通も來て居る
7
墓地を見て來たり黒枠の手紙を貰つたりするといくら科學者でもそぞろ無常を感じるね
8
さう思ふとわしなども何時ポックリゆくか解らん一つ健康診斷でもして貰はう
9
如何です壽命はまだありますかな
右の通り相定め
医師会組合
10
先づ御心配ありませんな
左樣ですかそれで安心しましたよ


11
あゝ嫌だ嫌だ、今日は何だか氣持が惡い日だ
12
博士暫くでしたね、ひどく塞ぎ込んでるぢやありませんか
ヤア暫く近頃は何をやつちよるね
13
生命保險の勸誘をやつとるんですが一口如何です
まア家へ入り給へ
14
實は聊か無常を感じて居た處だ思ひ切つて百萬圓の保險に入らう
ヒヤ〳〵百萬圓ッそれは有難い
15
入つたはいいが、生きて居ては百萬圓はとれない死ねば百萬圓死ねば百萬圓死ねば百萬圓
ああ早く死にたい



新連載漫畫豫告

僕はきんちやく博士の弟でして兄貴が永い間皆樣の御厚情を頂いて居りましたが計らずも此麼ことになりまして何とも申譯ありません。弟の僕としても誠に情けなく思ひますが然し百萬圓の遺産も貰ひましたので兄貴の御恩報じに次號から僕が漫畫の主人公を相勤める事になりましたから、どうぞ兄貴同樣熱烈なる御聲援を賜り度くお願ひいたします。



新作講談

甲州女狩り

藤田保盛
尾竹國觀畫

一

當今でも、まだ時折金權結婚といふのが行はれるやうでございます。名もない某くれがしが、何かの拍子で、大金儲けをして一代の成金になる。お金には何不自由のない身分になつたが、さて、世間の人人からは、あれは成りあがりものだとか、一代分限だなぞと云つて、蔑すまれないまでも、あまり尊敬されない。そこで、何がな自分の身に箔をつけたいといふ考へから、ふんだんにあるお金の力をもつて、貴顯名門と姻戚關係を結ぶ。つまり、お金の力で、先方の身分や家柄の臭ひを買ひとるやうなもので、まことに馬鹿げた話ですが、これが、

家柄といふものを殊の外やかましく云つた昔にあつては、一層盛んに行はれ、たゞにお金なぞといふ生やさしいものだけでなく、時には、權力や暴力まで用ひられることさへあつたのでございます。或る生物學者の說によりますと、人間には誰でも、自分よりも優れた種族の配偶を求める本能があるさうですから、これなぞもその本能の現れの一端だと云つてしまへばそれまでですが、何れにしても、その犧牲になる當人こそ災難で、——

閑話休題、慶長五年九月、關ヶ原の一戰によつて、事實上天下の實權を握つた德川家康、年來の宿望こゝに達して、今は心にかゝる雲もなくなりましたが、たつた一つ物足りないのは、自分がもと三河の名もない小大名の出であるといふこと。そのために、三河以來の譜代の大小名はいゝとしても、まだ大阪城に殘つてゐる豐臣秀賴母子は云ふに及ばず、それに心を寄せる豐臣恩顧の諸大名、さては、全國各地に蟠居する、數多の外樣大名たちは、ともすると、何の小大名あがりが——と家康の家柄を蔑すむ心は、自然家康その人をも輕んずる心となつて、心底から家康に服しないばかりか、あはよくば、自分が家康にとつて代つて、將軍職につかうといふ氣ぶりの見えるものさへあります。

「どうも困つたものぢや。今こそわしの威令が、日本國中津々浦々に

まで行はれてゐるからいゝやうなものの、どうかして、一旦徳川家の勢威に、少しでも衰へが見えるやうなことがあつたら、それこそ、どんな不心得者が現れぬとも限らぬ、これはひとつ、由緒正しい家柄に生れた女を、愛妾として入れたなら、それだけ徳川家の家格があがるばかりでなく、幸ひ子供でも生れれば、文句なしに名家の血筋、世嗣に直さないまでも、さうしたものが徳川一門にあるといふだけで、天下の大小名は期せずして靡いて來るに相違ない、ところで、その愛妾として入れるべき女ぢやが――』

　あれかこれかと、その方の事情に通じてゐるものに調べさせた結果、家康が、これは耳寄りな――と思つたのは、武田勝頼の娘で、吳羽姫といふ稀代の美人が、武田家滅亡に際して、乳母とともに危難を遁れ、在所は確とは判らぬが、確かに甲斐の民家に姿を變へて世を忍んでゐるといふこと。

『うむ、武田家と云へば、甲斐源氏のちやき〳〵、弓矢とる武門のうちでは、これに越した家柄はない。早速その吳羽姫とやらを探し出すといたさう。』

　そこで、自ら直々に、旗本の次男三男と云つた手合數十人を選び出し、吳羽姫の在所探索のために、數回に分つて甲斐國に變裝潜行させましたが、その第何回目かの一人に選ばれたのが、旗本三千石苫米伯耆の次男上總。まだ二十三才の弱年ながら、文武兩道に達してゐる上に、智もあり、思慮もあるなか〳〵の美丈夫。

『はあてな、これがもし戰場の一番乘りでも命ぜられたのなら、氣乘りもするが、いかに大御所さまの御命令とは云へ、女探しの隱密とあつては、たとへ首尾よく使命を果したところで、一向ぱつと榮えないばかりか、子孫への武功にもならぬて、世の中が泰平になると、われ〳〵武士も、こんなことの外に使ひ道がないと見える。』

　苫米上總としては、心中いさゝか不服でしたが、大御所家康の命とあつては、拒む譯にも行かず、止むなく蟇の脂賣りに身をやつして、同行の六人とともに江戸を發足、泊りを重ねて、甲斐路に足を踏み入れたのは、もう秋も終りに近い十月初旬。

　これから一同別れ〳〵となり、たゞ一人行き行いて、鹽山の宿にさしかゝつた上總が、とある立茶屋の緣臺に腰をおろし、箸をつける氣にもなれぬ不氣味ないなごの佃煮を前に、欲しくもない酒を一二杯傾けてゐると、表の方にあたつて、俄かに戞々といふ馬蹄の響き。つゞいて通りかゝつた二十騎ばかりの馬乘隊。何氣なくひよいと見て、上總が驚ろいた。戰國亂世の氣分がまだ失せ切らない頃とは云へ、馬上の人は、みなうら若い女

ばかり、而も、鄙には稀などころか、江戸にもさうざらにはあるまいと思はれる美人揃ひ。中でも、三十前後の﨟丈けた美人を眞ん中にして、それを圍むやうに左右に附き添つてゐる殊の外勝れた四人は、何れも紫染の大振袖。あとの十四五人も、薄桃色の生地に秋草模樣の繡を入れた揃ひの大振袖に、馬乘袴。それがみな、大刀を緋の紐で斜めに脊負ひ、丈長の黑髮を打ちさばき〳〵風に靡かせてゐる態は、天女の群が馬に乘つて下界に舞ひ降りて來たかと思ふばかり。この世で見られるとも思へぬ浮世ばなれのした艶やかさ。

『いや、こ、これは驚ろいた、これが山國甲州の、而もこんな片田舍で見られる風物と誰が思へよう、――まてよ、稀代の美人だといふ吳羽姫を探さうなんてやつて來たので、もしかすると、狐狸妖怪の類ひが、拙者の心を惑はさうと思つて、こんな惡戲をするのかも知れないぞ。』

審かりながら、そつと股の肉をつねつて見ると確かに痛い。おまけに、晩秋の薄陽ながらも日の照つてゐる晝間。

『ふむ、とすると、矢つ張りこれは、夢や狐狸妖怪の仕業でない正眞正銘の事實だな。』

と思ふと、そこはまだ年若な上總のこと、度膽を拔かれながらも、いつの間にか盃をそこへ放り出して戶口に立ち、ぽかーんとした顏で、美人乘馬隊の一行に見惚れて居ります。と、紫衣の四人のうちでも一際あでやかな一人が、何と思つたか、上總の方を向いてにつこり笑ひましたから、思はずぞくつとして、全身の血を沸らした上總は、

『おゝ。』

と叫んで、吸はれるやうに二三步前へ泳ぎ出し、念のために、もう一度ぎゆつと股をつねつて見て、

『あつちゝゝゝ。』

しかめた顏を、ひよいとあげた時には、美人の一隊は早くも風のやうに驅けぬけて、あとには濛々たる砂煙。

『えゝ、何のことぢや。につこり笑つて見せて、そのあとで砂煙の御馳走は、ちと人が惡すぎるぞ。』

上總は舌打ちして、もとの席に歸り、放り出してあつた盃をまたとりあげましたが、いまこつちを見て笑ひかけたあでやかな美人の顏が、眼の前にちらついて離れない。

『あ、これ、婆さんや、いまこゝを通つた女たちは、ありやどこの人か知らないかね。』

『あのお方々でございますか、あれはもと美濃の齋藤さまに仕へてゐらつしやいました稻葉さまの御一族とか承りました。只今では、石和の奥に牧場をお持ちになり、時々奥さまがあゝし

て、お侍女衆をおつれになつて、お遠乗りを遊ばすのでございますよ、はい。』

美濃の齋藤と云へば、織田信長に攻め亡ぼされた齋藤龍興のこと、その齋藤家に仕へた稲葉とあれば、龍興の幕下で三人衆と謳はれた稲葉伊豫守定通。こんなところに、その一族がかくれて牧場を持つてゐようとは、上總もこれが初耳。いさゝか驚ろきましたが、今はそんなことよりも何よりも、先刻の美人のことで頭

の中が一杯になり、どうかすると、主命をさへ忘れ勝ちの上總は、

『ほう、さうかね。』

何氣なく云つて、食事の代を拂ひ、あたふたと茶屋を出て、勝沼から石和の方へと足を早めながら、途々人に訊ねて聞き得た所によると、牧場の主は稲葉伊豫守の弟にあたる稲葉利通の世を忍ぶ姿で、その屋敷は御坂山の裾にあるとのこと。で、更に山路を人に訊き〳〵進んで行くと、やがて、眼に入

つたのは、草原に幾百頭となく戯れてゐる馬の群と、少しく離れた林の蔭に、濠と塀とに圍まれて、小さな城を思はせる宏莊な幾棟かの建物。

『ほう、これが利通の牧場と屋敷だな、緣あれば、千里も相會ふといふが、さつきあの美人が笑ひかけたのは、確かに何かの吉兆に相違ない。』

とは思ひましたが、いよ／＼利通の屋敷を訪ねる段になつて、上總ははたと當惑した。といふのは、こゝまでは、戀の一本氣から、別に深い考へもなくやつて來たものの、さて、何と云つて稲葉を訪ねたらよいかといふこと。

『大御所さまの御命令をふりかざして、役人どもを連れて行く分には差し支へないが、自分の戀のために、大御所さまを煮出汁に使ふのは、武士にあるまじき卑怯な仕方、それに對手は名だたる稲葉の一族、たとへ役人どもを集めて踏み込んだところで、さう易々と命を奉ずることはあるまい。殊に、これまで一度や二度は、女狩りの旗本が手を入れてゐるだらうから、そこへ、幕府の命によつて――なぞと云へば、笑はれるに相違ない、これは困つたことになつて來たぞ、はて――はて――何とかいい工夫はあるまいか。』

上總は兩手で頭を抱へ、一生懸命に稲葉屋敷訪問の口實を考へましたが、別にこれといふ名案も浮ばないうちに、早くも日はとつぷりと暮れてしまひました。

二

翌日も、その翌日も、苫米上總は旅籠の一室に閉ち籠つたきり、相變らず稲葉屋敷訪問の口實を考へて居りましたが、三日目のお正午頃になつて、やつと名案でも浮かんだものか、ぽんと膝を打つて立ちあがると、早速浪人姿に身なりを改め、ぶらりと宿を出て、やつて來た稲葉の馬屋敷。門番の男を見つけると、つか／＼と側へ寄つて、叮嚀に頭をさげ、

『拙者はもと、今川義元公の幕下に仕へた安宅三左衛門の悴三八郎と申すもの、今は天下に賴むところもなく、その日の生計にも困る浪々の身でござる。當お屋敷の御主人は情厚き御仁と承り、はる／＼訪ねて參りました。ついては、牧馬の見張番になりと傭つていたゞきたく、甚だ厚顏しいお願ひでござるが、この儀お取次ぎ下さるまいか。』

『そりや、お取次ぎはいたしますが、お會ひ下さるかどうか判りませんぞ。』

と云つて、門番が腰をあげかけた時、そこへ、屋敷内のそゞろ歩きでもしてゐるらしく、二人の侍女を從へて、ゆつたりした

足どりで通りかゝつた着流しの威風堂々たる總髮の男。見るより、門番はべつたりとその場へ土下座、いま上總から聞いた口上を、恭しく披露するのは、正しく總髮の男がこの屋敷の主人稻葉利通である證據。それと見て、上總が慇懃に頭をさげるところを、うちうなづいて門番の口上を聞いてゐた利通は、何と思つたか、いきなりそこにあつた欅の八角棒をとるより早く、

『えいつ。』

といふ鋭どい氣合もろとも、上總の頭上のぞんで、微塵になれと打ちおろした。あはや上總の身體は粉々になつたかと思ひの外、さすがは江戸木挽町柳生の道場で免許をとつた腕前、ぱつと二三間とび退いて、利通の方を見てにこ／＼笑つて居ります。とび込んで行つて、とつて押へることも、さまで難しくはなかつたが、戀のために心がやさしくなつてゐる上總は、こゝで對手に花を持たせてやる方が、何かにつけて便利だと考へたのでございます。これを見ると、利通は棒を侍女の手に渡して、から／＼と打ち笑ひ、

『あはゝゝゝ、御浪士、失禮仕つた。お若いに似ず、なかなか出來なさるな、拙者が稻葉利通でござる、まづ、ゆつくりと膝を交へてお物語りいたさう。――里、この仁を座敷へ御案內申せ。』

云ひすてゝ、さつさとそこを立ち去つた。

『さ、どうぞこちらへ――』

『然らば、恐縮ながら御案內賴み入る。』

里と呼ばれた侍女のあとからついて行くと、屋敷の中は、自然の風致をとり入れた庭園が打ち擴がり、表玄關から、長い廊下を渡つて、やがて導き入れられたのは、池に臨んで、勾欄をめぐらした立派な一室。待つ間ほどなく、衣服を着更へて立ち現れた利通は、更めて、上總の生國、姓名などを訊ねた後、

『先刻のお手の內、並々ならずと拜見仕つた。劍法はいづこの誰について學ばれましたな。』

『されば、幼少の頃より諸國を流浪いたしました私、自然、これと申して定まつた師匠もなく、ほんの自己流でお恥かしい次第でございます。』

『いや／＼、自己流にもせよ、何にもせよ、天晴れなお腕前。いかゞでござらう、拙者に當年とつて十五才になる高美と申す悴がござるが、これまで、貴殿のやうに訪ねて參つた浪士を、次から次と師匠にいたして劍法を學ばせても、遂にこれぞと云つて上達の跡も見えず、實は困つて居るところ、悴の劍法の手ほどき、何と賴まれては下さるまいか。』

『これはまた望外の倖、御子息の劍の師匠と申すよりも、お

遊び相手を仰せつけ下さるやう、實は、生計に困つて、牧場の見張番になりともと——存じて參上いたしました。』

『あつはゝゝ、安宅氏、何もそのやうに御遠慮なさるには及び申さぬ。では、御承知下されたものと見て、失禮ながら、月月のお手當にお望みでもござるなら、この場で仰せ聞けられたい。』

『とんでもないこと、その日〳〵に困りさへせねば、この上もない滿足、今後もし御意に叶ひましたなら、願はくは妻のお見立を煩はし、永くこの土地に安住いたしたいものと、それだけが望みでござります。』

いざといふ時の用意にもと、今からそれとなく網を張つて置くところ、上總もなか〳〵拔け目がない。

『あはゝゝ、いや、その儀はしかと承知いたした。』

これから利通は、悴高美並びに數日前騎馬隊の中央に紫衣の四美人にとり圍まれてゐた主婦人——利通の夫人を呼んで上總に紹介せ、侍女に命じて、自分が一二度手を通した着物を持つて來させて、上總に着更へさせた上、更めて打ちとけた近付きの小酒宴。その席へは、物を運んで、多くの侍女たちが入り替り立ち替り出はいりするので、上總は、もしや目指す女が現れはせぬかと、それとなく注意して居りましたが、とう〳〵最後まで姿を見せなかつたので、がつかりしてしまひました。

いよ〳〵翌日から、高美に劍法を教へることになつた上總は、何しろ、年が若くて、美男で、劍法の妙に達してゐる上に、教養もあり、人物もよく出來てゐるので、間もなく邸內の人氣者となり、あつちからも、こつちからも、

『安宅さま、ちよいと——』

『安宅先生、ちよつと——』

と、まるで引つ張り凧。身體が二つあつても三つあつても足らぬ位。けれども、上總は少しもそれを鼻にかけないので、評判は益〻よくなるばかり。たゞ本意ないのは、あれからいつしか半年近くの月日が經ちましたが、日頃出來るだけの注意を拂つて來たに拘はらず、つひぞ、目ざす美人の姿を見かけなかつたことでございます。

そのうちに、ふとした機會から、上總が二三度高美に四書を講じてやると、子供心にも高美が驚ろいた。

『これまで足をとめた多くの浪士の中には、文字なぞの讀めるものは一人もなかつた。その癖、侍女に附け文するやうな不心得者が多く、よくこのわしに下書を頼んで來たので、いつも小つぴどくはねつけてやつたつけが、安宅先生は劍ばかりでなく、文字の方もよくお出來になる。』

と思つて居ります。と同時に、毎夜父利通から漢籍を教へられ、翌日の課題に惱まされ勝ちだつた高美は、これ幸ひと、それから後は難かしい課題を出される毎に、そつと上總に解いて貰ひ、それを父の前でずら／＼とやつてのけましたから、今度は利通が驚ろいた。

『はてな、今までに、つひぞこんなことはなかつたが――』

不審に思つて、或夜高美を詰りつけると、實はかう／＼云々と殘らず白狀。

『ほう、安宅氏が、――道理で、あまりよく出來すぎると思つた。』

そこで、早速上總を呼び入れ、多くの漢籍の中から特に難かしい一冊を出して讀ませて見ると、讀みも解釋も、まるで立板に水を流すやう。利通も到底及ばぬほどの鮮やかさ。

『安宅氏、これほどの素養を持ちながら、今まで何故かくして居られた。貴殿の如きは、まこと文武兩道の武士、とも知らず今日までの無禮、平にお許しが願ひたい。これからは悴の漢學の師匠になつて下さるとともに、拙者の相談對手にもな、賴み申すぞ。』

とう／＼利通は、上總を重要な相談對手に引きあげ、同時にこれまでとは、待遇もがらりと一變。さあ、かうなると、上總はいかに戀のためとは云へ、今まで利通を僞つて來たことが心苦しくてならない。

『この上は、一日も早くあの女にめぐり會ひ、わが望みを達した上で、稻葉どのにもこれまで僞つて來た罪を詫び、主命のために力を盡さねばならぬ。』

そこで、或日牧場の男たちの集つてゐる所へ行つて酒を買つて來させ、一同に振舞ひながら、たつた一度見たばかりではあつたが、忘れようとしても忘れられぬ例の美人の人相を賴りに、それとなく訊いて見ると、紫衣の四美人は夫人お氣に入りの侍女で、平生は一切人の眼に觸れるところへは出ないことになつてゐるとのこと。

『成程、さうであつたか、道理で今日まで一度も會ふことが出來なかつたのだ。それにしても、これから先何年經つたら、この身の望みが達せられることか。いや／＼、いつまでしても、望みを達することは愚か、再び相見ることさへ出來ないのではあるまいか。』

と思ふと、上總ほどの武士も、叶はぬ戀の切なさ、やる瀨なさ、それに、利通を僞つてゐる心苦しさ、主命を忽せにしてゐる罪、それやこれやで、日頃の元氣も次第に失せ、暇さへあれば、自分の部室に閉ぢ籠つて、ぼつねんと物思ひに沈みながら、

深い吐息ばかり漏らすやうになりました。

三

近頃、次第に元氣が失せて行く上總の樣子に、ふと氣がついて不審に思つた利通は、或日、あれかこれかとその原因について考へて居りましたが、とう〳〵くすりと噴き出して、

『ふゝゝゝ、朝夕美しい侍女どもを見て、人知れず戀に惱んでゐるのだな、はじめてこゝへ來た時にも、今後御意に叶つたら、妻を見立てゝくれなぞと申して居つたが、何にしても、年若に似ず天晴文武兩道の武士、恰度幸ひ、妻を見立てゝやつて、いつまでもこゝに住はせて置くのも面白からうて、――はつはゝゝゝ、こゝに氣がつかなんだのは、この身も迂濶千萬であつたわい。』

笑ひながら、やをら立ちあがると、そのまゝ夫人の部室へはいつて行きました。

と、それから二三日過ぎてのこと、何氣なく上總の部室を訪れた老女は、四方八方話を交はした後、

『時に、安宅さま、あなたも、いつまでもお一人でゐらつしやつては、何かと御不自由、多くの侍女衆のうちで、お氣に入つた方がございましたら、妾がおとりもちして、御主人さまへ表向き願つてあげませう。』

世間馴れた調子で云ふ老女の言葉に、占めた――と思つた上總は、

『お言葉忝う存じます。お恥づかしながら、拙者もいさゝか思ふ對手もござれど、侍女衆の

どの方と、はつきり申しあげようにも、これまでしみ〴〵言葉を交はしたこともありませぬので——』

『ほつほゝゝゝ、もう疾つくに思ふ方がおありになるとは、ても、あなたも隅に置けない方でございますこと、何にしても、奥さまをお貰ひになることに御異存がなければ、別にまた妾にも手段がございます。』

『よろしくお願ひいたしますが、然し、御一存に決められても——』

『それは、よう判つて居ります。』

『で、拙者といたしては——』

『何かお望みでもございますか。』

『御老女どののお情けで、侍女衆御一同を、一人々々拜見できましたら——と——』

上總としては、一人々々見ることが出來たら、目指す女がゐるのは勿論、何しろ美人揃ひの百人からの侍女たち、その中には、もしかすると吳羽姫らしい女もゐるかも知れない。居れば家康から渡された人相書もちやんと手許にあるこ

と、一石二鳥、自分の望みを果すと同時に、主命も果せる――と、またしても拔け目のないことを考へたのでございます。とも知らぬこちらは老女。

『まあ、慾ばつてゐらつしやること、ほつほゝゝゝ。では、何とかお顏改めの出來るやうに取り計らつてあげませう。』

『恐れ入ります。』

思はず赫くなつて、双手で頭を抱へる上總をあとに、老女は長い廊下を、聲を立てゝ笑ひながら、利通の部室へはいつて行きました。

その夜のこと、再び上總の部室を訪れた老女は、

『安宅さま、御主人さまがお呼びでございます。』

『え、御主人が――』

何となくくすぐつたい氣持で、老女のあとからついて行くと、やがて、導き入れられたのは、この馬屋敷第一の大廣間。その入口に立つた刹那、

『おゝ。』

と叫んで、上總が棒立ちになつたのも道理、百疊敷の大廣間の上席、燈が煌々と輝やいてゐる所には、利通夫妻が並んで坐り、そこから左右廊下へかけて、各々正裝をこらした侍女百人ばかりが、俯向き加減にずらり。それが、上總のはいつて來た氣配に氣がつくと、一齊に二百からのやさしい瞳を、上眼づかひに注ぎかけたのですから、これぢや、誰だつて、度膽を拔かれるのがあたりまへ。――尤もこんな度膽なら、いくら拔かれたつて、拔かれるほど結構で、えへゝゝゝ。――上總も最初は面喰ひましたが、

『今度こそ、長い間の望みが達せられるのだ、泡なぞ食つて、思ふ女を見落してなるものか。』

と思ひますから、下腹にぐつと力をこめ、くら〳〵する眼を無理に大きく見張つて、仁王立ちになつて居ります。何のことはない、これから、柔道の試合でもするやうな恰好で、――それを見た利通は、思はずにつこりして、

『安宅氏、日頃貴殿がつくして下されたほんのお禮心、この侍女たちの中から、どれでもお氣に入つたのを一人選んでいたゞきたい、一同にも、この旨申し含めたところ、みんな貴殿の奧方になることを望んで居る、――のう、みなのもの――』

勿論、さうだと言葉に出して答へるものはなかつたが、一齊に双手をつかへて頭を垂れたのは、それに違ひないといふ證據。老女はいつの間にか雪洞に灯りを入れ、それを片手高にささげて案内役。

『さ、安宅さま、御遠慮なく首實檢をなされませ。』

云ひながら、もう一番手近に坐つた侍女の顏近々と、雪洞をかざして居ります。これなら、蚤の喰つた痕でも見落す心配はない。

『さあ〳〵、安宅氏、どれでも選りどりでござるぞ。』

利通は、デパートの均一賣り出しか何ぞとでも思つてゐるらしい。その聲を夢のやうに聞きながら、老女について見廻る上總は、さすがに膝はがく〳〵、身體はぶる〳〵。それでも、こゝを先途と思ひますから、いや、その眼付の凄いこと〳〵。人間色男にはなりたいもので、――それはさて措きその昔、一族が大名の端くれに連なつた名殘りを、こゝに見せてゐる利通の豪華な生活の一端、何れも苦心して召し抱へたほどあつて、どれと云つて美しく氣品高くないものはなかつたが、どうしたことか、上總の目ざす美人の姿が見えませぬ。がつかりした上總は、末席に力なく平伏して、吐息まじりに利通に向ひ、

『有難き仕合はせに存じました。』

『いかゞぢやな、お氣に入つたのがあつたら、御遠慮なく――』

『はつ、そ、そのう――』

とかすれた聲をとぎらせたのは、氣に入つた女のない證據。それを聞くと、侍女たちは白けきつて、中には、女の自尊心を傷つけられた腹立たしさを、あり〳〵と顏に見せたものさへあります。殊に、いま〳〵しく思つたのは利通夫人で、自分たちがこれまで苦心して集めた百人からの美人の中に、一人も氣に入つたものがないなぞとは、素浪人の分際として、あんまり思ひあがつた奴――と思ひましたから、

『安宅さま、お氣に召したのがないならないと、何故はつきり仰言いませぬ。』

鋭どい聲で詰られて、あわてゝ顏をあげた上總は、いまこゝで夫人に腹を立てさせては、折角こゝまで漕ぎつけた苦心が水の泡になる――と思つたので、

『まづ、まづ、奥方さま、御立腹をお靜め下されたい。私に多くのお侍女衆を選ませて下さつた御厚志、千萬お禮の申しあげやうもござりませぬ。然し、この上慾を申さうなら、まだこゝへ出られぬお侍女もあるやうでござりますれば、まことにもつて鐵面皮の至りながら、一人殘らず拜見いたしたく――』

上總はもう一生懸命、その聲には灼くやうな熱があり、その言葉には切々たる哀願がこもつて居ります。それを聞くと、夫人ははじめてにつこり。

『まあ、それは妾の手拔かりでした、いかにも、まだあとに四人ほど殘つて居りますから、すぐこゝへ呼んでお目にかけませう、――誰か、あの四人を案内してたもれ。』

『はい。』

一人の侍女が立つて行くと、すぐそこへ、別な老女に伴はれて姿を見せた奥方つきの四人の侍女。上總は、今度こそ――と思つたので、瞳を定めて、ぢつと四人を見つめると、右から二番目に坐つたのが、確かにこれまで半年近くの間、片時も忘れたことのないあの鹽山の宿の立茶屋で馬上から自分に笑ひかけた女でしたから、

『あつ。』

と叫ぶと、人前も忘れて思はず膝を乘り出した。

『ほつほゝゝゝ。どなたかお氣に召したのがございましたか。』

『う、ん、うゝゝ――』

上總はもう、うれしさ恥かしさに、舌がもつれて聲さへ出ない。

『どうなされました、はつきり仰言いませな、あなたも男ではございませぬか。』

男だから妻を選んでゐるので、これが女だつたら大變です。

『こ、この方を、――た、たのみ入る、御老女どのつ――』

今は上總、聲もしどろに、ふるへる手で右から二番目の美人を指ざすと、最後の、御老女どのつ――といふ叱りつけるやうな大聲にびつくりしながらも、老女は、

『お君さまでございますか、安宅さま――』

『はつ、そのう、名は存じませぬが、右から二番目の方を、な、何卒――』

と云つて、面を伏せた上總の脇の下には、冷たい油汗がぐつしより。お君と聞くや、利通は半眼にしてゐた眼を、かつと見開いて、

『な、なに、お君を――』

ちらと夫人を見ると、これも顏色を變へて、うろたへてゐる樣子。利通は、ちよつとの間、何やら思案の態でしたが、何思つたか、すぐ大きくうなづいて、

『うむ、さうか、よし〳〵、――では、安宅氏、貴殿の望みに任せ、いかにもこのお君を差しあげよう。したが、まづ、素性を申されい、いやさ、貴殿の――』

『えつ。』

『江戸旗本、何の某と申される方と見ましたぞ。』

『えゝつ。』

『はつはゝゝゝ、何もそのやうに驚ろかれるには及ばぬ、實は近頃、旗本が變裝して、この甲州に乘り込むもの數知れず、別して拙者屋敷へは、牧夫にしてくれの、門番に傭つてくれの

と――』

『と、仰せられるは――』

『女狩りぢやて、家康の、はつはゝゝゝ。』

『拙者は決して左様な――』

『えゝ、お默り召されい、この期になつても、利通を盲目にいたさるゝ氣か。』

『いや、なか〳〵もつて――』

上總はどこまでも否定いたしましたが、急所を突かれて、その聲には力がない。そのさまを、ぢつと見てゐるお君を手招きして、何やら二言三言囁やいてゐた夫人は、つと利通の方へ顏を向けて、

『あのう、君は安宅さまの妻になつてもよろしいと申しまするが――』

『え、――そ、それはまことか、君――』

『は、はい。』

『よし、――いや、安宅氏、どこまでも素性をかくされるなら、強ひてとは申すまい、江戸の旗本だらうが、何だらうが、素性にくれるのではなうて、男に差しあげるのぢや、――これよ、すぐに祝言の支度をいたせ、今宵のうちにとりきめるぞ。』

これには上總も驚ろいた。

『そ、それはあんまり御性急でござる、御主人、お君どのが御承知下された上からは、何もそのやうに――』

けれども、利通は上總の言葉に耳をも藉さず、

『早く、早くいたせ、お君によい婿殿がきまつた芽出度い夜、外の女に眼移りしないうちにぢや。』

いや、恐ろしいスピードぶり。一日のうちに話がはじまつて、見合ひをして、話が決つて、祝言まですまさうといふのですから、これぢや、當今の世の中へ持つて來ても、確かに尖端結婚、スピード結婚の見本にするだけの値打がございます。

四

やがて、祝言の準備萬端が瞬く間に整ふと、すぐにその場で三々九度の杯事。高砂やあ、この浦船に帆をあげて――も芽出度く謠ひをさまつて、間もなく賑やかな祝宴も終り、上總とお君は、利通夫妻にお禮の言葉を述べて一室に退り、二人きりになつた時、お君は上總の顏を見てにつこり。

『あなたは、本當に御浪人でゐらつしやいますか。』

問はれて、上總がまた困つた。長い間悶えつゞけて來た戀が叶つた上は、問はれなくとも、自分の素性を新妻に打ち明けるが道ではあつたが、然し、まだこれから主命の女狩りがあると

かず、

思ふと、いまこゝで打ち明ける譯にも行

『そんなことは、今宵訊かなくとも、追つて申し聞かせる折もあらう。』

『いやでございます、本當のことを仰言つて下さりませ。』

『そなたは、浪人安宅三八郎と知つて、妻になつてくれたのであらう。』

『それはさうでございますけれど、でも、何だかさうでないやうなことを、御主人さまも奥方さまも、二三ケ月前から、お奥でお噂してゐらつしやいましたので――』

『そ、そんな噂を――』

『はい、こゝの御主人さまは、八方に隱密見たやうな人を走らせて、天下の情勢を探つてゐられるのでございます。』

『ほう――』

『それで、近頃江戸から戻つた二三の人の注進によりますと、去年の秋、甲州路へ女狩りに出た多くの旗本も、大抵は空しく

江戸へ歸つたさうでございますが、いつか七人づれで出たうちの、二千三百石の三男河路久之進、八百石の次男山野五郎、一千石の四男結城又七、三千石の次男苫米上總とかいふ四人だけは、未だに戻つて來ぬとやら――』

『うむ。』

と唸つて、上總は思はず眼を瞠りましたが、お君は、おくれ毛を搔きあげながら、あどけなくにつこり。この笑ひこそは、上總を今日まで悶え苦しませ、大切な主命まで忘れさせた恐ろしい魅力のある笑ひ。

『大の殿方が、主命とは云ひながら、女探しに歩くとは、御本人たちの御苦勞よりも、甲斐の女たちが迷惑でございます。若い女の身といたしましては、たとへ將軍さまであらうと、家康公のやうな老人の愛妾になることを、何で喜びませう。武田勝賴公の姫君吳羽さまとやらが、ほんにお可哀さうでなりませぬ、妾なら――』

『そなたなら――』

『たとへ浪人であらうとも、年若い似合ひの殿御の妻に、――あら、まあ、妾としたことが――』

つい、言葉を辷らして、眞つ赤になつたお君は、つと片手を上總の膝へかけて、恥かしさうにうなだれるのでございました。

さて、その翌日のこと、上總とお君が、恥かしい中にも樂しさうに語らつてゐると、ふと、廊下にあたつて、

『安宅さま御夫婦、御主人さまがお呼びでございます。』

といふ昨夜の老女の聲。上總は、今朝ばかりは人に顏を見られたくないと思ひましたが、呼ばれて行かない譯にも行かなかつたので、すぐお君とともに、利通夫妻の前に罷り出たものの、さて、面映ゆさに、やたらに頭を疊にこすりつけるばかりで、

物も云へない始末。それを見ると、まづ、夫人がにつこり。利通も相好を崩して、

『安宅氏、まづはお芽出度う。』

『うつ、へえ、な、なに、その――』

變な返事があつたもので、――すると、俄かに改まつた利通。

『それについて、貴殿に更めて申し渡すことがござる。外でもないが、今日限りお君をつれて、當屋敷を立ち退いていたゞきたい。』

『えゝつ。』

寢耳に水の云ひ渡しに、上總はちよつと驚ろきましたが、考へて見ると、どうせ主命半ばにある身、いつかはこゝを立ち退かねばならぬ譯。それを利通の方から立ち退きを命ぜられたのですから、却つて、恰度いゝ折とは思つたものの、さて、右から左に、左樣でござるか――とも答へかね、返事に困つてゐると、

『お返事なきは承知と見た、いや、さうなうてはならぬ筈、貴殿には使命がある、甲州女狩りの一人、浪人安宅三八郎とは眞つ赤な僞り、旗本三千石苫米伯耆どのの次男上總どのでござらう。』

『あゝつ。』

圖星をさゝれて、上總が驚ろきあわてるのを、利通は、にやり／＼と笑ひながら、

『したが、上總どの、吳羽姬はもう探すに及び申さぬ、拙者の手で、ちやんと貴殿へ探して進ぜた上、一夜たしかにお預けいたした筈ぢや。』

『えつ、――と仰せられるは――』

『お判りにならぬかな、これなる君が吳羽姬でござるぞ。』

『え、えゝつ、こ、このお君が吳羽姬――』

もし、それが本當だつたら、大御所さま所望の女を、わざわざ探しに來ながら横どりした自分、決してたゞではすむまい――と思ふと、上總は天地が一時に崩れかゝつて來たやうな心持ち。へた／＼となつたきり、息もつけない。それには構はず、手文庫の中から小さな卷物をとり出した利通は、それを擴げて、ぶらりとお君の顏に近づけ、

『これを御覽ぜられい、貴殿たちが御所望の姬の人相書――』

はつと思つて、上總がよく見ると、どこでどうして手に入れたか、正しく家康から自分たちに渡されたのと同じ吳羽姬の人相書。而も、お君の顏は、その人相書にそつくりそのまゝでしたから、

『おゝ、おゝうつ。』

と叫んで、思はずのびあがつた上總は、呆れ返つて、物も云へない。戀に眼がくらんで、人相書のことを忘れたのが一期の不覺とは云へ、もう夫婦の契りを結んでしまつた今となつては、どうしやうもない。よしそれが、利通の家康に對する惡戲であつたとしても、落度になるのは上總自身、丁の裏は半、あまり話がよすぎたのも、たつた一夜でどんでん返し、途方もない過失をしでかした自分の阿呆さを悔むばかり。然るに、利通夫妻やお君は平氣の平左、互ひに顏見合はせて、にこ〳〵笑つて居りましたが、やがて、徐ろに口を開いた利通。

『これまでも、女狩り衆が何人となくまぎれ込んで參つたが、今日まで巧みに姫をかくし了せた拙者も、貴殿の初心な女選みに、ついひつかゝり、まさかと思つて姫を席上へ出したところ、主命そこのけの貴殿の執心ぶり、姫の心を聞いて見れば、貴殿なら良人にもつても恥かしくないとの返事――』

『うむ。』

『今更姫を家康如き老人の愛妾にやられたものでなし、それに、姫の日頃からの仰せには、榮枯盛衰極りなき國主大名の室になるより、身に一藝一能ある男を良人に――とのこと。そこで、貴殿が吳羽姫と氣づかぬ間に、とり急ぎ祝言の杯をいたさせた次第。これから、幾久しう、芽出たく添ひとげられよ、上總どの、何を思案いたし居られるな、姫を妻にいたせば、天下に身の置き所がないとでも思はれてか、馬、馬鹿な、はつはゝは、この上は姫とも〳〵江戸へ歸り、家康の前へのこ〳〵と出て行かつしやい。』

『えつ。』

『家康もそれほど物の判らぬ男でもござるまい、それに、逃げようとても、貴殿の身邊には隱密がついてゐるばかりでなく、昨夜祝言の席へ忍び寄つた一人の牧夫は、姫を見て、宙をとんで江戸へ走つたやうぢや、こゝはひとつ度胸を決めて、家康の前へ出て行くに限り申すぞ、天下晴れて夫婦になられたら、お二人揃うて、更めて當地へ遊びに參られい、――それ、山駕籠の用意はできたか。』

利通は、どこまでも超スピードぶり、まだぼんやりしてゐる上總をやたらに急き立てる。かうなつては上總も一か八か、度胸を定めて見ると、重苦しかつた胸も案外にほぐれて來て、

『御厚志千萬忝うござる、生命あらば、また更めて御禮言上に參上仕る。』

そのまゝ立つて、吳羽姫とともに二挺の山駕籠に乘り、江戸をさして、稻葉屋敷をあとにいたしました。

五

さて、利通の好意で、途中恙なく江戸へ歸つた上總は、いくら家康の前へのこ〳〵出て行けばよいと云はれても、たゞ不用意に出たのでは、お咎めをうけるに決つてゐると思つたので、父伯耆、兄備後とも相談の結果、これはひとつ、家康も一目置いてゐる自稱天下の大目付、我がまゝ御免の大久保彦左衞門老人にとりなし方を頼んだがよからう――と話が決つたのは夜分のこと。然し、こんなことは一日おくれゝば、取り返しがつかぬことになるかも知れない。彦左衞門老人にだけでも、一時も早く頼んで置いた方がよいといふので、夜中ながら、駿河臺の彦左衞門を訪れ、詳しく事情を述べた上、

『何卒、よろしくおとりなしを――』

と頼み込むと、元來こんなことが大好きな彦左衞門老人。

『よろしい、いかにも承知した、これより拙者同道登城せられよ。』

二つ返事で引きうけて、早くも立ちあがりましたから、上總が驚ろいた。稻葉利通もよく自分を急き立てたが、この老人も負けずに急き立てる、よくもかう性急な人ばかりあるものだ、急いでくれるのは有難いが、いくら何でも夜更けの登城は大御所さまに對してあまりに不躾、却つてお咎めが大きくなりはしまいか――と思ひましたから、

『早速の御承知、千萬忝く存じます。さりながら、かゝる夜更けに登城いたしますのは、御老體にもお氣の毒、また、大御所さまに對しても、あまりに不躾け――と――』

『うんにや、構はぬ、かやうなことは、一度大御所さまのお耳に入つてからでは事面倒、一時も早い方がよろしい。』

上總が彦左衞門を訪ねる時に思つたと同じやうなことを云つて、どん〳〵登城。天下の一大事といふ前觸れでお目通りを願ふと、折柄家康は寢所へ入らうとするところでしたが、外ならぬ彦左衞門のこと、特に目通りを許されたので、彦左衞門は、上總を次の間に殘し置き、一人家康の前に出て、

『お上、夜更けにお目通りを願ひ出で、恐縮に存じます。』

『して、天下の一大事とは何事ぢや。』

天下の一大事は彦左衞門の日頃の口癖なので、家康は大して氣にもとめず、たゞ苦笑して居ります。

『されば、拙者今宵床に入りかけましたところ、ふと年をとりましたことに氣づきまして、お上もお年を召されたと思ふと、これは天下の一大事と存じて、夜中ながら登城いたしましてござる。』

なるほど、かう理窟をつけて行けば、木の葉が落ちたことでも天下の一大事になります。
『それが何で天下の一大事ぢや、後繼のことはもう定つて居る。』
『とは申せ、お上がいつまでもお若くおはせば、和子や姫君方たが、お氣強うあらせられませう。』
『それは申さいでも――』
『それ御覽じませ、これが天下の一大事でなうて、どういたしませう、拙者も今のうちに、せい／＼子供を澤山こさへて置かうと念がけて居りますが、何しろ、この年で――』
彦左衞門の、いつにない色氣話に、家康も思はず相好を崩して、
『男は年をとつてもだ、彦左、さう氣を落すまいぞ。』
『ところが、それがその――』
『何としたのぢや。』
『實は、拙者が目をつけた若い娘がござりましてな。』
『うつぷ。』
家康は、危ふく噴き出すところでしたが、彦左衞門はどこまでも眞面目、にこりともせずに、
『その昔、十六才の砌り、鳶の巣文珠山の初陣功名から說き起し、何とかして物にいたさうと、こゝ一ケ月ばかり焦りつゞけましてござります。』
『女を口說くに、戰場の武功を申し立てる奴があるか、して、物になつたか。』
『なか／＼もつて、つい昨夜のこと、さる男に云ひつけて、その娘を迎へにやりましたところ、あらうことか、迎への男奴が、たつた一度で對手の女をちよろまかし、彼奴の長屋で添ひ寢をいたして居りましたやうな次第――』
『うふゝゝゝ、それで其方はいかゞいたした。』
『女沙汰は權力やなぞではどうにもなるものでなく、たゞ年輩によるものと思ひいたりましたので、きつぱりと諦めましてござります。こんなことなら、鳶の巣文珠山合戰の時の若さを、女合戰の初陣にも用ひればよかつたと、今になつて思ひまする。』
『あはゝゝゝ、彦左の弱音をはじめて聞いたぞ、お互ひに老人のこと、いくら甘い言葉で持ちかけたところで、若い女にもてる道理はないて。』
『お上にも、それを御承知でござりますか。』
『知つて居るとも。』
『占めたつ。』

『え、何が――』

『お上、これから本當の天下の一大事を言上いたしますぞ。』

『なに、本當の天下の一大事――』

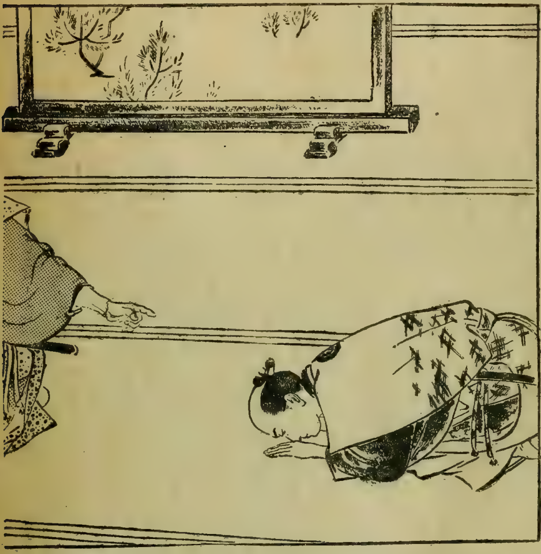
『はい、さつきのは、ほんの前觸れ、これからが本當の天下の一大事でござります。』

開き直つた彦左衛門は、天下三大音聲の一人と云はれた大聲を張りあげて、

『次に控へたる天下の女大盗棒、これへ參れつ。』

さあ、家康、何が何だか判らなくなつてしまつた。目玉をぱちくりやりながら呆つ氣にとられてゐると、彦左衛門の開けてやつた襖の外まで、中腰のすり足で來て、ぴたりと平伏した裃姿の年若い武士。

『はて、天下の女盗棒とは何者で、一體どうした仔細であらう。』



と思ひながら家康がぢつと見ると、半年前、直々に女狩りを命じた苫米上總でしたから、『おゝ、上總か。』

彦左衛門が側から、

『お上、彼奴はお旨をうけて、女狩りに行きながら、呉羽姫とは知らずして、二世を契りましたさうで、それを知つて、急ぎ歸府、一切を拙者に白狀いたしましてござる。』

『彦左――』

といふと、家康の顏色がさつと變つた。が、彦左衛門は平氣の平左、

『お上も拙者も年をとりましたで、權力では、その――』

『はつはゝゝ、判つた判つた、また一杯はめられたか、年とつて手に入れられるものは黃金と權力ばかりぢや。彦左、上總を勞うてとらせよ、女狩りはもう止めにいたすぞ。』

『結構なる御諚、つきましては、彼苦米上總、この度甲斐源氏武田の姫を妻にいたしました上からは、部屋住では何とやら、一家お取り立て下さる御尊意と拜しましたが――』
　拔目のない彦左衞門は變な話を持出して、家康に否應なしに上總の不始末を許させた上、行きがけの駄賃に一家取立てまで願つて居ります。家康も圖々しい奴だとは思ひましたが、上總の前でかうつけつけ云はれては、吝嗇と思はれるのも心外と仕方なくうなづくと、
『俸祿のところは――』
『三百石とらせい。』
『は――』
『三百石ぢや。』
『合はせて六百石、吳羽姬のお化粧料に下さる、上總、有難く拜受いたせ。』

　始末の惡い男もあつたものでとう〳〵三百石を二度家康に云はせて、都合六百石をせしめてしまつた。上總はたゞもう、矢たらに恐れ入るばかり。家康も、今更怒る譯にも行かず、
『六百石とらせる、以來忠勤を勵むことを忘れるな。』
『はゝつ。』
『上總、もうよい、御免蒙つて退出いたすがよいぞ、お墨附はこの彦左衞門が頂戴いたして、追つて渡す。』
『はつ。』
　といふと、上總は一禮して退出。その後姿を見送りながら彦左衞門は、
『旗本の若者どもは、お家にと

りましては何物にも代へ難い寶、お上には寛仁大度のお心をもちまして、よくぞ彼の罪をお許し下されました、これでこそ、お家は萬代不易、いやお芽出たいことでござる。』

彦左衛門は、ひとりでやたらに芽出たがりますが、家康の身になつて見ると、折角徳川家の家格を釣りあげようと思つて探させてゐた呉羽姫は横どりされるし、その上、六百石まで不意にさらはれたので、ちつとも芽出たくない。

『彦左――』

『は。』

『だが、呉羽姫をたつた一度でよい、見たいものぢやのう。』

『お上、姫を見て、また上總をお憎しみになるやうなことがあつては、折角の御寛恕が臺なしになりまする。天下を治められる方は、何事も盲目になられることが肝要でござりませうぞ。』

『判つた、また叱られたか、天下のためなら、盲目にも聾にもならう、――誰かある、茶を持て、彦左とともに語り明かすのぢや、――彦左、戰場並みに安坐を組め、安坐を――』

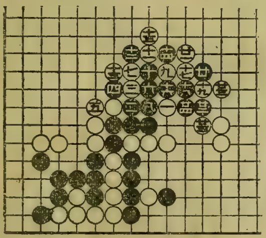
かくて、肝膽相照らす主從は、茶をすゝりながら、夜の更けるのも忘れて、懐舊談に花を咲かせるのでございました。

『甲州女狩り』と題しまする一席、これをもつて終りといたします。

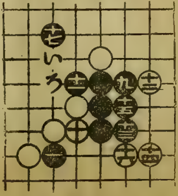
娯樂室解答

○詰碁解答　七段　瀬越憲作

白先勝、白は黒の四子を取つて逃げます。白一とカケて以下順序を追うて二五までにて黒は大きくなつて取られて了ひます。手數は二五手まで運んでなりますけれども一筋途ですから、さうむづかしい問題ではありません。これが實戰の場合は白に一とカケられた時に二五手迄で取られることを讀み切つて、圖の如く大きくなつて取られる愚を避けなければいけません。



○聯珠解答　珠叟　清水吾石

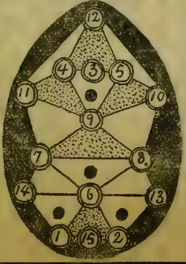


黒十七と引き白何れを止めても次から『いろ』四追勝變化は種々あるが何れも猶早く黒が勝つ。

○將棋解答　七段　溝呂木光治

△七一飛成▲同玉△八二金▲六一玉△五一金▲同銀△七二飛成迄。

○數字入れ（左圖の如し）



○間違ひ探し――着物が左前、炬燵にあたつてゐるのに、柳がもう葉を出してゐる。

特別

大懸賞當選者發表

本誌新年號に於て募集の考へ物大懸賞は、破天荒の大計畫とて非常な大評判を博し、其の應募總數實に數十萬に達しました。正解者中から抽籤により左の方々が當選されました。賞品はそれぞれ一ヶ月以内に發送致します。

問題の解答

(一) スモモ、モモ、モチ

(二) 九人

(三)

一—	50	49	45	50	47	45	50	47	43	41	50	46	42	37
二—	25	26	28	25	27	28	25	26	29	30	25	27	29	32
三—	13	12	14	13	13	14	11	13	14	15	10	12	14	16
四—	6	7	7	5	6	6	7	7	7	7	8	8	8	8
五—	3	3	3	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
六—	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
七—	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

(三)の解答はまだ此の他に百通りもありますが、こゝには略します。勿論、それ等の中一つだけ答へられても正解者としました。

一等 冨士自轉車一臺宛(十名)

札幌市南六條西十五丁目　柳内忠夫
大阪市港區市場通り一丁目七　古川重松
下關市伊崎町旭内　森文太郎
廣島縣安藝郡江田島村小用　佐宮道信
豐橋市花田町四七二　日比幾久英
佐世保市勝富町一三　筒井勝
神奈川縣小田原町新玉三丁目　岩田美津夫
靜岡市泉町五丁目一二　伊藤英雄
京城府漢江通十五第六益濟寮内　曙一磨
東京市神田區表神保町十番地　三谷一郎

二等 金側腕時計一箇宛(二十名)

福岡市片土居町四五　酒井彦一郎
松山市松前町一丁目　遠山岐美子
和歌山縣新宮町熊野地鍋倉町　松本賢一
京都市東山區山科御陵鴨戸町　吉田興
群馬縣高崎市丸萬製糸會社内　宮島花子
埼玉縣熊谷町本町三丁目　小森保
山形市小姓町一三九　須賀信一
鹿兒島市山之口町一一六　濱國春
宮城縣仙臺市二十人町一七八　大西十郎
長野縣松本市蟻ヶ崎二二二　板花竹子
島根縣出雲今市町塚根中町一四八二　福田武吉
福島縣郡山市燧田八五　野本勇
石川縣鳳至郡鵜川村字鵜川　龍池麗子
千葉縣印旛郡成田町上町五五九　小倉一三
三重縣宇治山田市一志久保町　淺沼正次
臺中市明治町六ノ二　西平賀毅
新潟市松波町八番地　種村嘉市
栃木縣宇都宮市曲師町十七　岩野忠夫
熊本市古城堀端町六七　高濱菊枝
神戸市湊區雪ノ御所町一三八　赤木功人

三等 アース双眼鏡一箇宛(五十名)

東京府　宮入重郎
東京府　長岡夏江
神奈川縣　小島安治
福岡縣　神田正美
茨城縣　藤田旗雄
茨城縣　永田利兵衞
岐阜縣　鵜飼周治
滋賀縣　小島四郎吉

香川縣　平澤ゆずる
大阪府　宮內半三郎
靜岡縣　望月信太郎
秋田縣　川井久治
岡山縣　小林伯美
樺太　畑山德之進
京都府　小泉松太郎
愛知縣　水野安國
宮城縣　菅野清兵衞
三重縣　荒木光枝
滿洲　小熊榮
京都府　羽田文一郎
新潟縣　山田タズ
岩手縣　福田貢
福井縣　三宅庄吉
朝鮮　堀江スヱ
北海道　八木宇た子
山梨縣　淺川定司
鳥取縣　村山好
青森縣　相馬隆一
宮城縣　前原福二

高知縣　田中玲子
佐賀縣　石川勇
東京府　小林婦美子
福岡縣　林田秀勇
福島縣　佐藤得三
奈良縣　佐々木榮
東京府　和田武雄
兵庫縣　柄谷清子
栃木縣　岡本勝二
富山縣　關大一
德島縣　杉岡小町
兵庫縣　西海廣三
群馬縣　木村義正
長野縣　小山志げ子
山口縣　高木文子
東京府　中井和子
埼玉縣　小谷野春五郎
大阪府　三浦義夫
千葉縣　大胡忠治
廣島縣　早野佐十郎
大分縣　脇ユキ子

四等　水晶認印一箇宛（三百名）

〔東京府〕
村山等　高瀨多衞　北田保之助　向永晃三　益田政子　石井重雄　市川久子

大道堅久　井上惣太　影山キク　河原守正　中瀨金太郎　岩佐賢三　今井英子　中島定次郎

坂倉克己　池田盛道　佐藤成俊　藤井健三郎　上竹正太郎　齋藤繁　深澤清吉　渡邊二三子

渡邊榮　高野みよ　齋藤勇次郎　船串好則　長山國雄　永田屯三　茂木福藏　永田正治　南部健一郎　雨宮松子　酒井忠良

〔大阪府〕
木田トミ　豐竹昇之助　河合秀雄　永野キヨノ　宇高三郎　中西清　前田武臣　植村弘子　成子年春　嶋田ヒサ　福島秋平　中村豐三　村野春子　名越紀文　村田進　曾田光十郎　宮下司朗　木原日出夫　下新原榮藏　岸本保夫　林稔

〔北海道〕
鈴木弘　河合國已　楠野義夫　細野正夫　仲野和學

屋代清　七條保　伊藤道次　清水重雄　柿崎正八　池田よしゑ　岡本武雄　西川正雄　伊藤祐次　河田榮市

〔兵庫縣〕
藤中健一　志村勝郎　伊藤孝三　木下信一郎　岡田照　木田二枝　村尾勝之助　小山慶治　新海盛三郎　岩田茂　宮崎清　窪田幸次郎　黑田靜江　稻見信雄　下里健次

〔愛知縣〕
鈴木清　長谷川渡　大村サダ子　高木一人　仲稔　水本敏弘　小島衞　窪田正道　加藤時治　加藤武雄　淺野博　片山利市

〔京都府〕
駒井稔　大森孝次　三浦直輝　野村敬治　橫田歲一　橋本寛一　田中龜太郎　小倉久枝　大森英三　眞鍋良之助

〔福岡縣〕
市原友壽　松尾正一　眞達登　大石勝已　淵上政美　岡崎登　上田良次郎　常岡健二　守田一二

〔神奈川縣〕
內藤榮三郎　新谷八郎　川部千代子　白井正次　石井とり子　宮崎ウタ　產形蕃　南部勝之　尾西榮二郎

〔新潟縣〕
永井久一　中里作次　小田勉　黑崎茂　石黑貞二　森田千代子　小野六助

天下泰平　老夫婦の對話

清水對岳坊

『ハテナこの繪は何をしとるところだらう、おい〳〵おまへには判るかい』
『さうね、何でせう？　あら倒まですよ』
『なに倒まだ、そんな筈はない、わしの眼のいゝ事は眼鏡をかけないのでも判つとる、おまへの眼がどうかしとるんだよ』

増子良平 藤井政吉

〔靜岡縣〕 瀧茂雄 岩川清 佐林作三 池田富雄 小林實子 田中富太郎 市川良一 田中鶴子

〔廣島縣〕 小川義晴 末廣穎任 本中淺久 荒川清 下倉利平 森井寛次郎 岩城忠雄 松本覺之

〔長野縣〕 箕輪貞雄 清水順吉 山口好忠 小林よしみ 横山茂雄 常盤進

〔岡山縣〕 北本和正 難波雅子 櫻田末太 沼野潔松 太田巖 相原勝二

〔宮城縣〕 八重樫正吉 佐藤佐 熊谷昌治 阿部豐吉

三浦俊雄

〔福島縣〕 米本恒久 阿部武 菊池正雄 菅野義衞 三木伊三治

〔茨城縣〕 荒井久一 下村末次郎 津田喜代 鎌田よし子 佐藤稔

〔栃木縣〕 市川とき子 龜田敏夫 林ツヤ子 松本金一郎 赤池春子

〔群馬縣〕 岡田正三 狩野徳樹 佐藤兵作 大幡松雄 加藤幸一

〔埼玉縣〕 大塚君子 柳雪江 大崎光彦 吉田利治 小池好雄

〔千葉縣〕 宮澤幸次郎 櫻井靜 藤代清吉 柏熊完二 宮澤武

〔山口縣〕 琴村豐吉

横貝スキコ 村田稔行 宮津久米次郎 土井義人

〔三重縣〕 川井國松 中川米吉 長谷川一雄 池田保 鈴木永一

〔岐阜縣〕 足立ふさ 小林薫 加藤傳一 高橋太郎

〔富山縣〕 岡本次三郎 小島一信 横山三代子 山崎要次郎

〔滋賀縣〕 漆崎隆一 駒田肇 西山治男 暇丘宗蓉

〔和歌山縣〕 林タツ枝 安田虎勝 高木幸太郎 藤井光雄

〔石川縣〕 渡邊孝次 松本八十八 泉谷ミドリ 八田信吉

〔岩手縣〕 三又九郎 荒木龜太郎 小野寺康之

千田一美

〔秋田縣〕 小田島吉彌 西村清 北村豐一 鈴木靜子

〔青森縣〕 小笠原清之亟 齋藤清一 高橋ふさゑ 吉田巖

〔山形縣〕 渡邊一滿 柏谷米治郎 大河原重賢 岩間晃

〔熊本縣〕 金森トシ子 小笠原茂 荒木鋭子 淵上イシ

〔愛媛縣〕 作道滿敎 遠賀妙子 漥田鶴太郎 山秋世志

〔島根縣〕 鐘撞盛 田澤忠夫 田中武吉 西奥由男

〔福井縣〕 吉田由雄 梅田彰子 稻澤靜子

〔長崎縣〕 赤松二郎 大中赳夫 伊藤三男

〔德島縣〕 庄野利夫 大久保市郎 早雲義夫

〔香川縣〕 久本更一 青柳威夫 毛利圭一

〔佐賀縣〕 樋口喜美子 宮原常男 北島登美子

〔奈良縣〕 中一 森本貞一 紀繁太郎

〔鹿兒島縣〕 幸田正弘 野間清 鳥丸義雄

〔鳥取縣〕 美田潔 伊田百合枝

〔山梨縣〕 竹内福平 雨宮正

〔大分縣〕 松尾千壽子 安部テツ子

〔高知縣〕 西田競 柏本譽美

〔宮崎縣〕 山川一二三 中原康隆

〔沖繩縣〕 西村修一

〔樺太〕 神尾邦彦 増田嘉一

〔朝鮮〕 吉田昭子 金川昌錫 香川芳都 宮本榮之進 大窪秀子 中川惣七

〔臺灣〕 安武のぶ子 佐川實

〔支那〕 中島菊次郎 渡會貞夫 阿部定夫

五等 ヘチマクリーム一箇宛（五千名）

五等當選者名は紙面の都合により略します故、賞品の到着をもつて當選と御承知願ひます。

○

『お隣で赤ちゃんが生れましたよ』

『さうか、そいつは久しぶりのご馳走だ』

『とても丈夫な赤ちゃんですよ』

『てり燒にした方がいゝな』

『いゝえ孃ちゃんぢゃないのよ坊ちゃんなんですよ』

滑稽詩

その内心は!!

サトウ・ハチロー

『あらまア奥さん　なんてまア
きれいにウエーヴ　うらやましい』
＝てなこと言つても　その内心は＝
『いやにちゞれた　くせツ毛ね
雀の巣にでも　すればよい』

『おや可愛らしい　お坊ツちやん
おいくつですの　お利巧さん』
＝てなこと言つても　その内心は＝
『なんてふくれた　子供だらう

ハナをたらして　まアきたない』
『閣下の長壽に　あやかるやう
ぜひ御一筆　ねがひます』
＝てなこと言つても　その内心は＝
『先づまアおだてゝ　置いてから
少し無心を　してやらう』

『いえいえあなた　とんでもない
それでは元が　切れますよ』
＝てなこと言つても　その内心は＝
『これですつかり　よろこんで
まかした積りで　買ふ奴さ』

川原くにを畫

八兵衛の種子蒔

千葉耕堂

八兵衛と云ふ大へんいゝかつぎやが居りました。或日のこと大根の種子蒔をしようと思つて、仕度をして出かけると、途中で隣家の娘に出逢ひました。

『オヤお花さん、どこへ御出でだえ?』

『ハイ此のぢうから歯を虫が喰うて痛んでなりませぬから、お醫者様へ行かうと思うて出かけてまゐりました。』

お花さんが頬を抑へながらさういひますと、かつぎやの八兵衛はプイと横を向いて、

『えゝ縁起の悪い、人が大根を蒔きにゆくのに、はを虫が食ふなんて……今日はもう止めぢや……。』

八兵衛爺ブツ〳〵云ひながらその日は家へ帰り、翌日は早朝に出かけて行くと、途中で又隣村の男に出逢つて、二つ三つ立話をしてゐるうちに、急に風が吹いて來て、その男の帽子を吹き飛ばしたので、八兵衛爺が拾つてやるとその男は、

『これはどうもはばかりさま……。』

とお禮を云ひました。八兵衛は顔をしかめて、

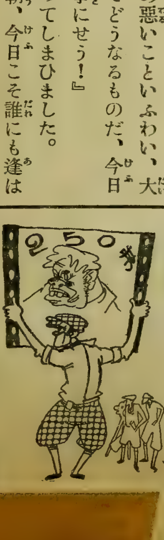
『チエツ、また縁起の悪いことといふわい、大根蒔くのに葉ばかりでどうなるものだ、今日もやめぢや、明日の事にせう!』

とぼやきながら帰つてしまひました。

そこで三日目の早朝、今日こそ誰にも逢はねばよいがとビク〳〵もので出かけると、よいあんばいに畑へ行く迄には誰にも逢はなかつた。『ヤレ〳〵今日こそは安心して種子が蒔

グロテスクな顔が幸福

流石はアメリカ、見ろから、グロテスクな顔が、週給二百五十弗の資本になつたといふ話がある。顔の持主はピイツツバーグの男ミルトン・ブラックといふ男、彼はアメリカ新聞紙でお馴染深い架空人物『ポップアイ』に生寫しであるといふ處からこの程多額の週給で映畫入りの段取りとなり、いよ〳〵銀幕に『ポップアイ』の姿を躍動させる事となつた、彼は生れつき、かくもグロな顔の持主ではなかつた。世界大戰に出征の折、砲彈の破片のため、負傷したのが原因で、つひに人並はづれた形相となつたものだつた。しかしこれが今度の出世の資本となるとはどこに幸福がころがつてゐるかわからない



けるわい。』と思つて、頻りに大根蒔の仕度をして居りますと、そこへヒヨツコリやつて來たのが村長さん、
『八兵衛さんエライ早朝から御精が出ますなア……。』
『ハイ有難うございます。しかし村長さん、私一生の頼みですから今日は何も云うて下さいますな。さうでないと大根蒔が大へん遲れますでなア……。』
と八兵衛爺は一昨日と昨日の話をして、
『さういふわけで今日こそは蒔かにやならないで、どうか何にも云うて下さるな。』
といふと、村長さんはカラ〳〵と笑つて、
『八兵衛さん、お前さんは大へんな御幣かつぎの名人だとかねぐ〳〵きいてゐたが、成る程驚いたね。しかし徳川時代の昔ならイザ知らず、二十世紀の今日、そんな齒を虫が食うたとか、はゞかりさまとか云つた事を氣にしてゐたら何も出來はせん、今日の農業家がそんな根も葉もない迷信に囚はれてゐては困ります。』
と戒めましたが、これをきいた八兵衛爺は、
『えゝまあとんでもないことを言はつしやる、根も葉もないなぞと、今日も止めぢや止めぢや……。』
と青くなつて家へ歸つてしまひました。

世の中にむづかしい事が三つある。
一、秘密を守る事、二、侮辱を忍ぶ事、三、時を無駄にせぬ事。

婦人倶樂部の
◆春の陣◆
天下一の大飛躍

雜誌界の女王婦人倶樂部！

殊に近來、跳躍又跳躍、その發展ぶりの目覺ましさ、本年一月號、二月號とも增刷又大增刷、賣切の大盛況。これといふも其內容に外觀に、充實せる點に於て、立派な點に於て、また實に廉い點に於て、天下無類と云はれる世評の賜物です。

更に春三月號は空前の大奉仕として、『**新流行春向毛絲編物**』『**額面用泰西傑作名畫集**』『**新型通學服型紙**』の**三大附錄**つきで、而も平月通り定價五十錢です。

詳細は本誌前付の內容廣告を御覽の上、スグ書店へお申込み下さい。

いのちがけ

新案の救助網を試驗中であつた。消防部長（屋上の消防手に向つて）『おーい、そこから網の上へ飛び下りろ。』

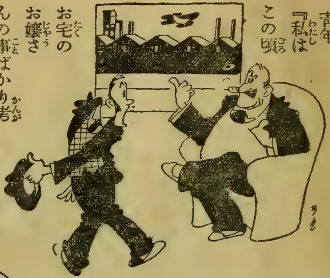
消防手『網は破れませんか？』

部長『それが分らんから試驗するのぢや。』

活用

青年『私はこの頃お宅のお嬢さんの事ばかり考へて、夜さつぱり眠れません。』

戀人の父親『そりや恰度よろしい、うちの工場で火の番が要るところだから、使つて上げよう。』



急ぐ筈

夜中、某火災保險會社の宿直室へ、ジャン/\電話が掛つた。

聲——モシ/\、そちらは保險會社かね。實は至急一萬圓の保險の契約がしたいんだが。

事務員——どうも有り難う御座います。では明朝早速掛の者を伺はせますから。

聲——君い、そんな愚圖々々してもらつちや困るよ。直ぐ來て吳れ。隣りまで燒けて來たんだから、早く……

聽き物

甲夫人——昨日は音樂會へ參りました。

乙夫人——まあそれは/\。……何をお聽きになりまして？

甲夫人——いろ/\な事を聽きましたわ。スミスさんが破產なさつたんですつて。それから愕くぢやムいませんか、勝山の奥さんは毛染をなさつていらつしやるんですつて。それから村口さんでは到頭奥さんと御離緣なすつたんですつて……。

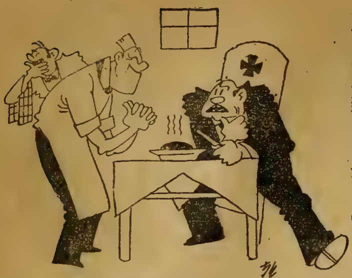
商賣は斯うせよ

客『オイ、此のビフテキは馬鹿に固いぞ！』

ボーイ『ではもつと切れるナイフ差上げませう。』

客『馬鹿にするなッ！』

そこへ現れた、主人『これ、失禮なこと申上げるな。』とボーイを叱つて『へ、、、、ではコロッケはいかゞさま、やはらかい事お請合致しますが……』



判斷

妻『あたし、一枚着物が欲しいわ。』

夫（皮肉に）『お前は人間の價値を着物で判斷するかい。』

妻（更に皮肉に）『しますとも。奥さんの着物を見れば、御主人がどの位働きのある方だか、すぐ解りますよ。』

やられた！

持參金つきの令孃と結婚を約束した青年に向つて、娘の父親が訊ねた。

――君はまさか金を目あてにうちの娘と結婚するんぢやあるまいの？

――勿論です。お孃さんを心から愛してゐます。

――よろしい。それで安心した。持參金は取消してもよからうな。

請合

下宿屋の主婦――あら、さうで御座いますか。富田さんの御紹介でおいで下さいましたのですか？

肥つた女學生――えゝ、さう、妾が痩せたいつて始終愚痴をこぼすので、こちらで一ケ月下宿させて頂くと、痩せる事確實だつて仰有つたわ。

本欄の解答は四六八頁にあります

こゝに於て今まで微笑しながら眺めてゐた紳士がてれ臭く退散……後でドッと爆笑。

○おやく

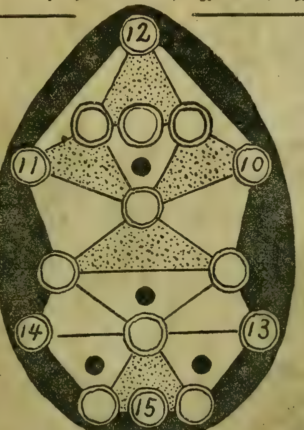
(イ)の扇形と(ロ)の扇形とをくらべてごらんなさい。一寸見ては、大きさが違つてゐるやうに思はれますが、紙にうつして合せて見ると全く同じなので誰しもおやと驚きます。

○陽春情景

エーンやコーリヤア
雪解けお庭に鶏や
ハダシよ
エー
ンやコーリヤア
お馬は振リチンドッコイコーリヤア
洋服野郎はア
エーンやコーリヤア
ぬく／＼ポカーンと
眺めてゐやがらア
エーンやコーリヤア

數字入れ

此の圖に於て、三様の三角形が澤山あります。で空いてゐる丸の中に、1から9迄の數字を入れ、白い場所の數の和が夫々27小さい點々のある場所の數の和が夫々24、一つ大きな點のある場所の數の和が夫々21になる樣にして下さい。



○否！ 否！！

○『死んで又來る人は？』『幽靈』『否、後妻。』

○『味噌をつけて食ふものは？』『田樂』『否、お目玉。』

○『脚の出るものは？』『宴會費。』『否、短い夜具。』

○『チャン／＼バラ／＼とは？』『戰爭。』『否、ほごした袖なし。』

○滑稽職業別癖言葉

○『そう／＼。』と云ふのは僧侶。

○『ようがすとも。』と云ふのは瓦斯の集金屋さん。

○『景氣はどうだね。』と顔さへ見れば云ふのは洋菓子屋さん。

○『うんそうだ。』と云ふのは運送屋の主人公。

○『どうもすみません。』と云ひながら仕事をするのが溝さらひ。

○『さうだ／＼。』と云ふのは洗濯

屋さん。

○『さらかも知れない。』と云ふのは鳥屋さん。

○『あさうか、O・K。』と云ふのは、桶屋さん。

○滑稽文字讀み

大 丰　酒屋の催促（酒代よこせ）

出出　バアの醜體（酒場で倒る）

七 八　極度の苦悶（七顛八倒）

月 三　吝嗇な吞助（盃よこさん）

好 借　橫着な債務者（金借り倒す）

○珍戻證文

貴殿妻ギン殿今般金六十圓の爲抵當に申受候處然る上は期限前は全く自由仕申間敷若延期の節は無論勝手に自由仕候　依戻證如件

明治十年七月

宮城縣栗原郡宮澤村豐岡

三塚與三郎㊞

千　正勝殿

間違ひ探し——此の繪の中に二つの間違ひがあります。はて何と何でせう？

○蜀山人と蚤

蜀山人がぐびり〳〵酒を飲んでゐると、蚤が一匹ぴよんと盃の中に飛び込んで來た。そこで、

『盃に飛び込む蚤ものみ仲間、酒のみなれば殺されもせず。』

さう詠むと、盃の中の蚤が、

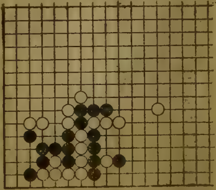
『飲みに來た俺をひねりて殺すなよ、のみ逃げはせぬ晩に來てさす。』

と返歌した。聞いた蜀山、不屆な蚤だと敷居の上でひねりつぶした。すると蚤はつぶされながら、

『口ゆゑに引き出だされてひねられて、敷居まくらにのみつぶれけり。』……は人を食つてゐる。

○詰碁新題

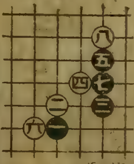
七段　瀨越　憲作出題



白先にて黑の圍中にある八子の白を救ふ手段がありませうか。

○聯珠檢勝問題

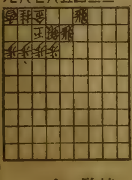
珠叟　淸水　吾行出題



黑❾から追手詰で簡單に勝つのはどう打つか

○詰將棋新題

七段　溝呂木光治出題



金　駒持

清水市梅蔭寺にある
次郎長の銅像

次郎長の腹を見る

海軍中將子爵　小笠原長生

次郎長に會ふ動機

それは、次郎長に會つた——といふよりも私を次郎長に會はせたといふ方が本當なので、その意味で、私は次郎長の事を思ひ出すとすぐあの軍神廣瀬中佐を想ひ起すのである。

明治二十三年、私が、海軍少尉の時代で、砲術學校の學生として、軍艦天城に乘組んでゐる頃のことだつた。

横須賀の水交社の食堂で、偶然廣瀬少尉(後の廣瀬武夫中佐)と落ち合つて、椅子を並べて夕食をとつたことがあつた。その時廣瀬が、

『おい小笠原、射撃實習で、矢張り清水へ行つてゐるのかね。』

と、訊くので、

『あゝ、毎月一回は願にかけての清水通ひだ。』

と、答へると、

『それぢや次郎長に會つたらう。』

と、質ねる。私が、

『いや、會つてゐない。忙しいからそんな暇はないよ。』と、云ふと、

『暇が無いつて？　こいつ役に立たん奴だな、折角清水通ひをしてゐながら、次郎長に會はぬといふ法はないぞ。』

驚いたことには、廣瀬が本氣になつて憤慨してゐるのである。

そこで氣がついたのは、廣瀬の次郎長熱であつた。廣瀬は、これまでにも度々次郎長を訪れてゐたし、殊に、彼が次郎長といふ男に惚れこんでゐたことは素晴しいものだつた。

然し、その頃は、講談や芝居などを通じて彼が紹介されてゐず、まだ次郎長の存在が今日程一般に知れ渡つてゐなかつた時代だつたので、私共にしても、廣瀬の次郎長熱が、いさゝか訝しい位だつたのであつた。

『だがなア廣瀬、貴様の云ふほど次郎長といふ男は傑物なのか、え？ 貴様少しかぶれすぎてやしないか。』

或は、それが皮肉であつたのかもしれない、果して熱血漢の廣瀬はむきになり出した。

『小笠原、貴様そんなことを云ふのなら、一度次郎長に會つて見ろ、貴様の思つてゐる程度の人間かどうか、すぐ判る。』

『ふーン。』

『かうなつたら、なんでもかんでも次郎長に會へ。俺が紹介してやる。』

小笠原子爵

『よし、そいつア面白い、一番會つて見よう。』

さうしたことから、廣瀬は早速名刺へ紹介文を認めてくれて、私が、次郎長と會ふ動機が出來上つたのだつた。

山岡鐵舟の度胸免状

間もなく、例に依つて射撃實習で、天城が淸水港に碇泊することになつた。

そこで私は、此機會に、次郎長を訪れようと思つて、同僚二人を誘つて、次郎長の家へやつて行つた。

次郎長は、その頃、末廣といふ料理屋兼旅館を經營してゐたので、無論彼の家に一泊して、ゆつくり彼に會はうといふ考へなのだつた。

『入らつしやいまし。』

と、飛び出して來た若い衆二三人に迎へられて、まづ私達は末廣の客になり澄ました。

そして、例の廣瀬から貰つてゐた名刺を示して、親分に會ひたいと申入れたところが、生憎その時は、日歸りで靜岡へ用足しに行つてゐるとかで留守なのだつた。

　それではといふので、一風呂浴びて、夕食後の雑談をやつてゐると、ミシ〳〵と階段の軋む音がして誰か昇つてくる氣配がした。

（次郎長だな）

といふ直感がして、云ひ合した樣に皆の言葉がとぎれると、果して、次郎長が襖をさらりと明けて這入つて來た。

『入らつしやいました。俺が清水次郎長でございます。』

と、鷹揚に挨拶をした時には、坐つてゐる彼の軀が、なんとなく大きく見えて、不思議な迫力が私共に感じられた。卽ち次郎長の貫祿とでも云ふのか、一口に云へば偉きい——といふ言葉で盡きると思ふ。

　地味な着物に茶の三尺帶をきりゝとしめ、丈の短い羽織に素足といふ扮裝で這入つてきた時には、それほどに感じなかつたのが、面と向つて坐つたところを見ると、なるほど、廣瀨の欣びさうな男だなと思つた。

清水次郎長

一體俠客と云へば、芝居などで、幡随院長兵衛や、花川戸助六の樣に、粋がかつた處のあるものと考へてゐた私には、その想像が餘りに外れてゐて、寛濶伊達といつた風は何處にも無く、むしろ、ガツチリとした偉丈夫といふ感じだつた。

　そして、仔細に彼の軀を檢べてゆくと、まづ顏全體が、いかにも大まかなのに眼が着く。キリリとした眉の下に細く長い眼が、眠つてゐるやうで、鼻はとても高く、一文字に結ばれる口と、顴骨の隆いところは、強い意志の男であることが象徴されてゐて、然も何處となく悠大——と云つた感じであつた。

　殊に肩幅の廣い厚味のある胸膈は、親分としての重味を想はせるもので、時に七十歲の老俠客とは思へないほど元氣なものだつた。

　だが、流石に天窓ははげてゐて、つや〳〵と光つてゐたが、裾野を飾る鬢髪は、なか〳〵どうして黑々としてゐた。

　話は、勿論紹介の廣瀨のことから始まつて、私が、

『廣瀨がよく來るさうだね。』

と、云ふと、次郎長は輕く頷いて、

『廣瀬さんは面白い人だね、老人の話は面白いと云つて、よく昔話しをせがまれ、時々は徹夜をさせられる様なこともある。』

『さうかね、道理で廣瀬は親分黨なのだ。』

次郎長は、こゝで一寸微笑した。

『君は、山岡先生から度胸免狀を貰つてゐると廣瀬から聞いてゐるが、それを見せてくれないかね。』

『見せて上げよう、劍術では山岡先生から、大勢免狀を貰つてゐるだらうが、度胸で免狀を貰つたのは俺一人だ。』

と、得意氣に云つて、此方へ――と云ふので、次郎長の部屋に案内されてゆくと、

『殿様これでさア。』と、見せられたのは、例の有名な『精神滿腹』と横額に筆太に認められた四文字だつた。

だが、殿様と呼ばれたのには、私も鳥渡驚いた。彼は私の華族であることを知つてゐたのだつた。話を戻すが、山岡先生が、彼に度胸免狀を與へたといふのは、よく〳〵彼の膽斗の如き人物を愛して、特にこの四文字を書き與へたのだといふことだ。

死生天に在り矣！

『君の若い自分には、隨分人も斬つたらうが、人を斬るにもコツが有るものかね。』

と、私が訊くと、

『それは雜作アない。拔き合つて一騎討ちになつた時には、こつちから仕掛けないことだね。相手がぢり〳〵して斬り込んで來た途端に引ツ外して、スパリと斬れば必ずうまくゆくものだよ。なにしろ落着いてその機會を摑まなくつちやいけない、お前さんなんかもよく心得ておくことだね。』

殿様の稱呼が、こゝではお前さんになつた。さうかと思ふと話してゐるうちに先生と呼んだり、あなたと云つて見たり種々

雜多な呼び方をしてくる。その無頓着さが、いかにも老俠の大まかさを表してゐて面白かつた。

『喧嘩をして、これは駄目だと思つたことはないかね?』と質くと、

『有るとも——』と頷いて『こんなことが有つたね、或る時俺が一人で料理屋の二階で休んでゐると、大勢の敵に圍まれてしまつてゐた。欄干から往來を瞰下した時には、これあ駄目だと思つたね。だが思ひ切つて群がる敵の中へ、飛び降りたら、膽を潰して敵がパッと退いた。そこで圍みを拔け逃げ出したが、どうも酷しく追ひかけてくるので助かる見込が無い。人手にかゝるよりもと思つて、今川義元の墓場へ逃げ込んで自決しようとしたが、眞近に敵がやつてくるので、又逃げ出した。走つては自決しようと思ひ、走つては自決しようと思ひながら、敵に追はれ〳〵て、到頭逃げのびてしまつたことがあつた。人間の命つて奴ア妙なもんで、死なうとしたつて死ねず、さうかと云つて助からうとしても助からない場合もある。全く運だね。』

廣瀬武夫中佐

死生天に在り——と觀じてゐるところ、流石に大親分なるものゝ心境だと感じた。

然し話が、斯ういふことになつてくると、眠つてゐる樣に見えた次郎長の眼は、漸次に大きく見開かれて、鋭く輝き、口調もいつか熱を帶びて來て、往年の殺陣を横行した若やかな血が燃えて來てゐるやうだつた。

それに、もう一つ意外なのは、次郎長が話に實が入ると、羽織を脱ぎ、帶を解き、夢中になつて胸を押し展げる癖のあることだ。

この時も、話に興が乘つたものと見えて、私達の前で、遂に腹まで出して來た。するとはだかつた腹の部分に、縱に横に斬傷の痕がある。

『それは、喧嘩の傷かね。』と訊くと、

『いやこれは違ふ。掛合事の傷だよ。』と云つて、『大體俺達の掛合事と云へば、一つ間違へば命仕事になるのがきまりだ。それ

だから、萬一の場合人手にかゝらない様に、ドスの切先を殘して布を卷きつけ、むき出しのまゝでそれを懷中して掛合つたもんだ。話に力こぶが入ると、思はず知らずそいつを握りしめるので、知らぬ間に腹の皮を切ることがあつた、それがこれだよ。』

と、すつぽりと着物を脱いで、傷痕をよく見せてくれた。そして、そのまゝ澄ましてゐるので、細君が入つて來て着せかけて帶まで結んでやつたが、話してゐる間に、又脫いでしまふ着せたり脫いだり――こんなことを二三回も繰り返したやうだつた。

大俠客の心境

次郎長はまた、こんなことも云つた。

『併し、俺は決して善人をいぢめ附けた事はないよ。斬らうとして刀を擲けてゐた時、それが善人だといふ事情が解つて、すぐ刀を納めて逃げた事がある。だから斯うして老齡になつても、氣にかゝるやうなことは一つも無い。夜なんか寢てゐても、迚も氣持がいゝね。』

彼が、晩年を朗らかな心境でゐられたことはこの話でも判る。その時私が偶と見ると、部屋の壁間に、榎本武揚や、西郷南洲や、それに特に眼立つのはナポレオンの肖像が懸けてあつた。

（どういふ意味だらう）と思つて訊いて見ると、

『あれあ俺が病氣なんかになつた時にね、負けるものかと思つて喧嘩相手に睨みつけてゐると、不思議に軀が癒くなるんでね、云はばまあ醫者のやうなものだよ。』

と云ふ、奇拔な話であつた。

話が面白くて、前後三時間位も彼の部屋に居たが、成程廣瀨ほどの男が打ち込む筈だといふ氣がした。

それから私も、暇ある毎に、彼を訪ねるやうになつた。

然し段々彼に交際つてゐるうちに、往年東海道を押へてゐた大俠客といふよりも、寧ろ信心深い老人と云つた方が當つてゐるやうに思へて來た。それで、彼は殺生が嫌ひ、料理屋をして居ながら、魚類や鳥類を殺すのが見たくないといふので、入口の料理場から一番遠い部屋を自分の居間にしてゐたものだ。

其の後、ある時、私が次郎長を軍艦に招いてやつた事があつた。時の艦長野村靖少佐も非常に悦んで、艦長室に彼を招じ入れて食事を共にされたが、その後で、艦内を案内して見せてやると、大砲や機關等を物珍らし氣に見てゐたが、不意に彼は嚴肅な顏をして、

『大變なものだね。これだけのものを天子様からお預りしてゐるのだから、義理にも死ななきアならんね。』

と、感慨深さうに呟いた。

次郎長としては、何氣なく云つた言葉だつたのだらうが、この、義理にも死ななきア――といふ一言が、深く私の腦裡に刻みつけられて、今以て忘れずにゐる。

序に云ふが、次郎長の菩提寺梅蔭寺の彼の銅像を建てる時、發起者や乾分の連中が、彼の寫眞の無いのに困つてゐると、何處から聞きこんだか、私の手元に在る事を知つて、借りに來た。

その使に立つた乾分が、最初私が末廣の玄關に立つた時飛び出して來た若い衆であつたので、お互に年齢をとつたことを云ひ合つて大笑ひをしたことがあつた。（をはり）

さしゑ――丸尾至陽

小説『晴曇』休載申譯。

幸ひに御愛讀を賜りつつある『晴曇』儀、とう／＼作者の病氣のため、今月は休載の止む無きに至りました。

寒くなると、必ず一年に一度はやられる風邪熱。それも扁桃腺炎を併發しましたので、四十度近い高熱に一二日浮かされ、讀者にも編輯の方にも、大變な御迷惑を掛けて了ひました。丁度その時期が、『富士』の執筆時期と相會しましたので、『晴曇』が、とう／＼其犧牲となつて了つたのです。編輯の方には、締切まで延ばして貰ひましたが、どうも熱後の疲れがひどく、それに丁度物語の筋が、大切なところへやつて來てゐるので、思ふやうに筆が運べず、とう／＼最後の締切日に至つて一枚も書けないで了ひました。讀者諸兄姉には、誠に申譯ございません。

久米正雄

（編者より） 右のやうな次第にて、誠に遺憾でありますが、『晴曇』は今月休載することになりました。悪しからず御諒恕願ひます。そのかはり、次號には、最高潮の場面をたつぷりと御執筆下さることになつて居りますから何卒御期待下さい。

敵本主義
清水對岳坊
友達仲間では引越狂とまで評判をとつたKさん、どうした風の吹きまはしか
こんど納まつた貸間はうす汚ない疊に膏薬のある、おまけに北向きで陰氣な部屋だつた。
友人H君が訪ねて來て、『どこが氣にいつてこんなうす汚い部屋に……』
と不思議に思つてゐたら……
『なあんだ、畜生!!』
Kの腹は讀めた。

讀者倶樂部（投稿歡迎）

二月號を讀みて

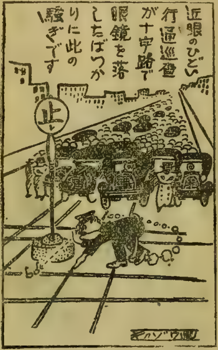
山形縣　小林　泉次

お〻、待ちたる二月號よ、昨日やつと手に入れ繙き見れば、どれもこれも皆素晴らしい傑作揃ひ、然かも『春を待つ唄』の事實物語りこそ我等の生きたる教訓だ。祖父の愛、師弟の愛、眞情流露、感嘆おく能はず、本誌愛讀者諸兄姉よ、どうして涙なくして讀破する事を得ようぞ、感慨無量、唯感激の二字あるのみ、今後もかうした讀物を掲載されんことを希望す。

冨士の友の歌

兵庫縣　藤中　靜夫

一、自由の天地に生ひ立ちて
希望に燃ゆる冨士の友
嶮しき山路を踏み分けて
學び勵まん文の道



横濱　大高喜久三

二、冨士に親しむ我が友よ
愛なき人生墮落なり
相身互ひに手を取りて
いざや學ばん冨士の友

三、汗なき人生光なし
我等が爲の冨士雜誌
日本男子よ君の爲
いざや盡さん諸共に

（以下略）

新年號の雜誌を手にして

大分縣　阿部　猛

十二月號を讀み終ると共に、待望久しかりし新年號を手にした時の嬉しさ、其の時の僕の胸中は、あれだけ優れた讀物を集めてくれた編輯者には充分お判りの事と思ひます。愈々最高潮に達した連載小説中の白眉『東京哀歌』流石は加藤先生だ。僕は書店から買つて歸る途中で讀んでしまつた。奈々子、襟子、瑞枝、此の三人が辿り行く茨の小路は何處まで續いてゆくか？　また此の三人の女性の道伴れとなる涙の若者、餘りにも純情なるが故に次から次へと襲ひ來る幾多の戀の悲歌に咽び泣く廉吉！　これらの人達の上に歡喜の光が注ぐ日は果して何時？

『晴曇』――つい先頃までキングに連載してゐた『白夜は明くる』あれ以上に僕は好きだ。樂しかる可き新婚の夜、黑田と幸子の前に計らずも漂ひ始めた暗い影、そこで僕は思はず喜びの叫びを洩らした。けれどもまだ〳〵辻村と房子の身の上には、暖かい春の日の惠みは屆かない。次號が待遠しい。

『薔薇色の道』――段々本筋に近づいて來た。マユミも可哀相だが、陽一郎を慕つてゐる純な早苗がいぢらしい。

『善は滅びず』と『すてうり勸兵衞』どちらも快活な文章で、今年

から新たにお目見得となつた胸のすく様な頼もしい小説だ。

『風流活人劍』――野村胡堂先生の長篇は初めてである。それだけに今後が期待される。何卒、讀者の期待の外れないことを祈つてゐます。

『蒼眸黒眸』――永らく願つてゐたことが、新年號から實現されたので嬉しくて堪らない。流石は菊池先生だ。ぐん〳〵引きつけられて讀んだ。『妖麗』や『未來花』などに劣らぬ様に馬力をかけて戴きたい。惜しむらくは文章が短かい。毎月もつと長く書いて頂けないでせうか。

其の他、長短篇、何れも大家だけあつて、勝り劣りのない傑作揃ひ。

他誌の遠く及ばない陣容である（中略）二月號を待ちつゝペンを擱きます。

冨士禮讃數へ唄

名古屋　佐藤鎧三

一つと出たわいな
　よさほいのほい
人の世明るく朗らかに、ほい
樂しくするのが、雑誌『冨士』

二つと出たわいな
　よさほいのほい
深い教へも訓言も
　ほい
やさしく讀ますが、雑誌『冨士』

三つと出たわいな
　よさほいのほい
みんな揃つて圓くなり、ほい
讀んで愉快な雑誌『冨士』

四つと出たわいな
　よさほいのほい
讀めば血となり肉となり、ほい
爲になるのが雑誌『冨士』

五つと出たわいな
　よさほいのほい
いつ開いても、面白く、ほい
隅まで讀めるが、雑誌『冨士』

六つと出たわいな
　よさほいのほい
無理がなければ易易と、ほい
女子供も
讀める『冨士』

七つと出たわいな
　よさほいのほい
何でもかでも載つてゐて、ほい
粋を拔いたが、雑誌『冨士』

八つと出たわいな
　よさほいのほい
山も雑誌も數あれど、ほい
日本一なは矢張り『冨士』

九つと出たわいな
　よさほいのほい
苦勞も疲れも忘れはて、ほい
讀めば愉快な雑誌『冨士』

十と出たわいな
　よさほいのほい
何處の家庭も樂しませ、ほい
榮えに導く雑誌『冨士』

横濱　小宮幸吉

冨士讃歌

京都市　朱雀歌彦

◇雑誌屋へお百度踏んだ甲斐あつて冨士を眺めた今日の嬉しさ

◇いつ見ても飽きない物は山の冨士雑誌の『冨士』に己が女房

◇冨士の雪朝陽にとけるヘズ君の笑顔は『冨士』を見ればすぐとけ

まだ〳〵讀者文藝として面白いものが澤山ありましたが、頁の都合上次號に廻しました。悪しからず。

冨士編輯局

第二維新の秋！今は正に傳記時代だ!!

日本は今、海の外も内も既に山雨將に來らんとして風樓に滿つるの有樣だ。思想、經濟、行政、外交、一切に亘つて明日の暴風は迫つてゐる。今こそ正に第二の維新だ!!此の秋！かゝる暴風を叱咤し、かゝる怒濤に駕して、新日本の新らしき生命を呼び起す英雄兒は一體今何處にゐるのだ。明治維新を成就したのは實に皆無名の青年ではないか！第二の南洲、第二の龍馬、第二の松陰は今何處にゐるのだ!!田園に學園に若き無名の英雄よ！奮起せよ!!而して傳記こそは青年に呼びかくる英傑達の生きた聲だ!!傳記は英傑を生む、何人も今傳記を熱讀すべきである。

今や日本の讀書界は傳記を以て風靡せられた。誰方も一刻も早く御熱讀下さい!!左に列擧の書は傳記界でも特に名傳記の定評あるもののみを嚴選したものであります。何れも大日本雄辯會講談社發行（振替東京三九三〇）全國書店にあります。

永井柳太郎著　大隈重信

定價五十錢　送料内地六錢　外國十八錢

國家非常時に直面して、筆者は、維新以來に一死以て幾度か國家の危急を救つた、識見の人、正義の人、氣魄情熱の人、大隈侯を慕ふ情やむにやまれず『予の義務である』と熱筆を揮ひし名著。而も著者と生前の老侯との關係は所謂親分子分、師弟以上のものがあり、この人にして始めて描き得る大名著。

武者小路實篤著　大石良雄

定價一圓二十錢　送料内地十錢　外國二十四錢

元龜、天正の世に生るれば德川家康となり、明治國難の時に出づれば伊藤博文ともなるべき英魂を元祿華美の日に生かしたのが大石である。死を前に見、而も悠々として落ちついた、拔け目のない奥床しい注意の行届いた復讐をなした彼には、吾々が仕事をなす上に學ぶべき事が實に多々ある。

武者小路實篤著　二宮尊德

定價一圓三十錢　送料内地十錢　外國二十四錢

著者は曰く『僕は幕末の人間のうち二宮尊德が一番大人物だと思つてゐる。彼の實行しようとした事が實行されてゐたら日本は世界中で一番立派な穩かな國になつてゐたであらう。尊德を知らない人が日本人にあつたら日本人の恥だと思ふ』と。見よ、偶像視された農聖の全生涯、赤裸々な人間尊德として躍る

鶴見祐輔著　ナポレオン

定價一圓二十錢　送料内地十二錢　外國二十六錢

著者が北米遊説中、日本にては到底求め得ざる材料を入手し、新史傳の形式を執つて、熱誠を傾けて執筆せる名著。見よ！コルシカの貧乏少年より身を起し、遂に世界地圖を塗りかへさせた驚天動地の大英雄の全生涯が、喜びも憤りも悲しみも戀も、描いて餘蘊なく人間ナポレオンの全半紙表に躍如。

鶴見祐輔著　英雄待望論

定價五十錢　送料内地八錢　外國十八錢

釋迦も基督も孔子も國民の中に英雄を待ち望む心ありて初めて生れたのである。日本は今や準備時代から實現の時代に入るべき莊嚴なる英雄時代である。英傑出でよ!!と著者が古今東西の偉人の生涯を語り、田園に海邊に又學園に無名英雄を待望し、新日本の將來はその手によつて築かるべきを豫言す。

澤田謙著　世界十傑傳

定價一圓三十錢　送料内地十二錢　外國二十四錢

現に世界を動かしてゐる偉傑、獨逸のヒンデンブルグ、英國のマクドナルド、印度のガンデイー、米國のフーヴアー、新聞王ハースト、鋼鐵王シュワップ、チエッコの建設者マサリック、新興トルコ大統領ケマル・パシヤ、支那の革命兒蔣介石、佛國の故ブリアン等の全風手觀る如く世界の情勢手にとる如し。

澤田謙著　ムッソリニ傳

定價一圓二十錢　送料内地十二錢　外國二十六錢

伊太利の一小村に鍛冶屋の子と生れ、或は小學校の教師となり、或は浮浪の旅をつゞけ、彼の抱く主義も、熱烈な祖國愛も未だ時を得ず、大戰起るに及んで勇敢なる一兵士として祖國のため鬪ひ、傷まだ癒えぬ吾がムッソリニ！嗚呼！彼の遂に起つ日が來た。彼が破滅に瀕せる伊國を救ふ迄の苦鬪物語。

澤田謙著　エヂソン傳

定價一圓三十錢　送料内地十二錢　外國二十六錢

小學校に入學後三ケ月、教師から低能兒と侮辱されて退學した小兒、夫こそ少年エヂソンの姿であつた。2＋2は何故4になるか？夫が解らなかつたエヂソン、果してそれは低能兒であつたらうか？見よ！奇蹟的發明王、世界文明の母、それにも優るものは彼の偉大なる人格であつた。興味盡せぬ彼の奮鬪物語

澤田謙著　プリユーターク英雄傳

定價一圓五十錢　送料内地十四錢　外國三十錢

ナポレオンの一生を支配して彼を大英雄ならしめたものが實に此傳記だつたのである。ギリシヤや、ローマの有名な英雄、シーザーとかアレキサンダーとかプラトン等いふ偉人英傑の、僅か三十三歳で世界の大半を征服した物語や亡びた故國を一振の劒で興した物語、實に讀む者の血沸き肉躍る十大英雄傳。

池田宣政著　リンカーン物語

定價一圓三十錢　送料内地十二錢　外國二十四錢

世界の偉人中の偉人、樵夫の子からアメリカの大統領となつたリンカーンの小說以上感激深い物語。貧乏を苦にせず、正義の心あつく、勇氣あり、孝行で勉強家であつたリンカーンが、血の滲むやうな苦勞をし、遂に奴隷解放のため人道のため正義のために鬪ひ活躍する涙なくして讀まれぬ人類愛の物語。

いつも若々しく

荒れ肌を防ぎ眞底から白く美しくする
お化粧なしの美肌秘訣公開

髪の美しいのも、眼や眉や手足や、肢體の美しいのも美人の要件ですが、それにもまして美人の根本條件は何といつても素肌や地肌の美しい事です。限りない魅力、衰へを知らぬ容色は、この地肌、素肌の美しさを措いてはないといつてもよろしいでせう。

如何に美しい模樣の衣裳で裝ふとも、亦如何程高價な化粧料でやつさうとも、美の根元である地肌が醜かつたら、それは幻の美であり、最初から破綻した美であつて、眞に自然の輝きをもつ美しさではないのであります。

薔薇の花、牡丹の花にも比べられる樣なお化粧の美しさよりも、見飽かぬ、氣高い、神々しい百合の花にたとふべき素肌の美は、衰へざる限りなき魅力を持つ美として仰ぐべきものであります。

肌を美しくするといふ事は一寸注意すれば容易に出來ることで、最も簡單で確實に眞の美容の目的に到達させる爲めに完成された『チ、ナソルト』は洗顔の時、その僅かを洗面器に入れますと、どんな水でも忽ち肌ざはりのよい水質に一變して、根本から皮膚のキメを細かに美しくする作用があらはれ、艶やかに色を白くする漂白性つよく、殊に脂性の方などは見違へる計りにスツキリと綺麗になります。

入江たか子嬢

『チ、ナソルト』はキメを細かに美しくするばかりでなく、ニキビ、ハタケ、ソバカス、シミ、殊に生れつき色の黒い方などに効果が著しく、その上白粉ののりをよくし、これを浴槽に用ひますと、水質を純化させると同時に全身が滑かに美しく、曾てない爽やかさを覺えます。

本當の意味の美顏術、根本から色白くする美顏法、お化粧に目覺めた方、地肌の美、素

肌の美を望まれる方、吹出物でお困りの方、シミに惱まれる方には、常用して御滿足の頂ける新發見の美肌料としてお奨め致します。『チ、ナソルト』は一名『素肌の美』とも言ひ價は小罎一圓二十錢、大罎二圓、送料內地二十一錢、領土四十九錢を添へて下記の本誌代理部へお申込になればお取次致します。

年よりメッキリ若返る 小皺、しみ、そばかす

をとる理想的新美肌クリーム

御婦人の美の大敵は小皺です。この小皺は人に何となく淋しい感じを與へると同時に御自分にも惱みの種となることは申すまでもありません。一般に皺やしみ、たるみは三十歳前後からそろ〳〵現れはじめます。これは皮膚の表面に美活榮養素をおくり出す腺の作用が衰へることに依つて發生するものであります。これは美を生命とする御婦人方にとつて致命傷と云つてもよい位で、三十臺、四十臺と年をとるに從つて段々皮膚の色艶の若々しさ、美しさが褪せてゆくのは本當に心細い限りであります。

これはとりもなほさず、一種の早老現象でありまして、顏面殊に眼の周圍、耳の下、あご、次に鼻の周圍、口にかけて美活素の腺が枯渇して來るのによるものであります。西洋、殊にフランスの婦人は小皺を防ぐ爲めに、又小皺を除くために、二十臺からシワトリ美活料をお化粧には缺かさず用ひて居りますがその爲めに四十、五十になつても二十臺の自然的の若さを保つて居ります。

美容のメーカーメチチーネ河合先生は多年歐洲に在り、種々研究の結果、國產小皺とり若返り美肌クリーム『シワトリム』を發見されました。これは舶來品に較べて非常に安價で、日本婦人の肌にピツタリ合ひ、使へばキツトホルモン美活素を表皮に送り、且つ榮養分を皮膚の間に蓄積させますから、小皺を除き、キメを細かに餅肌に若返らせ、化粧下として白粉やけ、そばかす、しみ、吹出物等を豫防し、自然々々に肌を若返らせます。

そこで、新發見の若返り美肌クリームとして、婦人俱樂部誌上に發表されて以來著しく御愛用者の皆樣から御好評を頂き素晴らしい大賣行を示して居りますが、この作用は殊に驚く程顯著で、三十臺の人も容易に十八九の頃の美しい肌に若返らせ、しかも、自然に皮膚下に蓄積せられた榮養分によつて自然の豊艶な羽二重の肌に致しますので大評判です。

『シワトリム』は一ケ月半使用量定價一圓送料內地十五錢、領土四十二錢、東京市本鄕區駒込坂下町大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九）にてお取次致します。

酷寒冷風と抗ふ

驚嘆すべき朝鮮同胞の體質

粗食でも何故體力が強いか?

（朝鮮）金基福

大蒜がくすりだと言へば朝鮮人に嗤はれる、それほどに支那や朝鮮では大蒜が一般化され日常の食餌として葱や大根並に手輕く用ひられてゐる近頃では内地でもこの大蒜が注意を引いていろ〳〵とやかましく評判されるやうであるが大蒜が健康と切つても切れぬ因縁にあるのは今に始まつたことではない。

内地からはじめて渡鮮した人が朝鮮のあの激烈な寒さに逢つて一度にまゐつてしまふのをよく見受けるが私なども六七年を内地で過して京城ではじめて冬を迎へたときなどやはり猛烈なわる風邪に見舞はれて死ぬ苦しみを嘗めさせられたものだ。

ところで

同じ寒さに對しながら土着の朝鮮の人が割合に平氣なのは一つには久しい間に鍛へられた自然の抵抗力にもよるが大蒜の常用が體質的に防壘を築いてゐるのは何と言つても否まれない。寒さに對しては唐辛子なども盛んに用ひられるが同じ刺戟でも唐辛子と大蒜ではまるで機能が異つてゐる。唐辛子が火のやうな烈しさで上皮を熱するに對し大蒜は底からじ

つとりと汗ばませる作用を持つてゐる。試みに一粒の大蒜を嚙つて見れば分ることで、ものの三分とは經たぬ間に身内がぬくぬくと熱つて來ること必定だ。まるでこれでは藥の能書口上だが大蒜の効能ばかりはあらたかなのだから仕方がない。

酷寒冷風に吹きさらされながら朝鮮の婦人が氷の張つた川で布を濯ぎ、砧の音も凍る冬の夜寒に薄着を纏うて夜業が出來るといふのも煎じつめれば細胞のすみずみまで

が行きわたつてゐるからに他ならない。

大蒜の靈驗

たゞ殘念なことにこれほどあらたかな効力がありながら、大蒜には惡臭といふ有難からぬプレミアムが附いてゐることで人前に出るとき等一々氣兼ねをせねばならず私なども遠慮のある人に接する時は前日くらゐから氣をつけて臭ひをさせぬやうに注意してゐる。つまりは大蒜から厄介な臭ひを拔去ることさへ出來れば文句はない譯だがこれは今日までに幾度も考へられてゐながら實際には可能を疑はれてゐたことで下手をすれば臭ひもろとも藥効まで持つて行かれる危惧がないとは言へない。私自身日頃、大蒜を信仰してゐるだけにこの點に就てはいろ〳〵と試みても見たことであるが結局は二つよいことないで諦めてゐたやうな始末である。

圖らずも

講談社發賣の『にんにく丸』の製劑過程を參觀して目のあたり大蒜の精が壓搾されてゆくのを眺めこれあるかなと感服した次第である。臭ひくらゐは我慢するといふ人なら生にんにくを買ふべし。『ふぐは食ひたし命は惜しし』で體は丈夫にしたいが何としてもあの臭ひでは叶はぬといふ人には『にんにく丸』の試用を奬めるほかにない。

生にんにく以上の効果ある
飲みよい大蒜劑の完成

『にんにく丸』は、所謂にんにく臭のない丸藥で非常に服みよいのが特長です。而も他の大蒜劑と違ひ、大蒜の複雜且つ貴重な諸成分をソツクリそのまゝ抽出し、それに日本藥局方中の高價藥數種を合理的に配合して出來たものでありますから『にんにく丸』は生のにんにく以上優れた効果があります。

冷え性の人、胃腸の弱い人、虚弱體質の人等は是非毎日御用ひ下さい。消化はよくなり食慾增進し、胃腸の働きを根本的に强健化して體力、精力を回復し、慢性痼疾も次第に忘れる樣になります。

殊に『にんにく丸』の主成分である硫化アルリールは、結核菌その他の病原菌に比類なき殺菌作用がありますので、肺病、肋膜炎等呼吸器病には何よりもよい治療劑であり榮養劑であります。

『にんにく丸』の藥價は十日分(三百粒入)一圓七十錢、三十日分(九百粒入)四圓五十錢、全國有名藥店にありますが、品切の節は東京市本郷區駒込坂下町大日本雄辯會講談社代理部(振替東京六六二九)へ送料内地十五錢領土四十二錢を添へ御注文下さい。

肺結核も斯うす

肺結核・肋膜炎・百日咳・喘息

等々……呼吸器病に驚く程よく効く

熱帶藥草『ダウンチリメン』

××　不思議な藥草　××

元來呼吸器に關する本當に良く効く治療法は殆んどないと云はれ毎年肺結核で尊い生命を奪はれる人々は十五萬を下らないのであります。

百日咳は抵抗力の少い子供に多い病で、これ又死亡率が高く、年々數萬の幼い人の命を取つて居るといふ狀態で、お母樣にとつては誠に油斷の出來ぬ病氣であります。

又喘息にも眞の根治藥なく、僅かに痲醉性の劇藥注射位で一時的にその激しい苦痛を凌いだり、或は痲醉性の内服藥を用ひて一時抑へをする位が關の山で、何れも根本的に全快させるといふ事が出來ないのであります。

從つて呼吸器の諸疾患に對しては、その治療法も種々研究され既に治療藥の數も隨分澤山ありますが、中でも南洋に產する『ダウンチリメン草』は既に多數專門家により臨床實驗の結果、素晴らしい効果のある事が認められ、各方面で盛んに喧傳されて參りました。

××　醫家も驚いたその効果　××

この『ダウンチリメン』の卓効は三期の肺病を僅か四ケ月位で治癒せしめた實例、肺尖カタルや肋膜炎、或は腹膜炎を短時日に癒した事實談又肺病より恐ろしくて治り難いといふ喉頭結核を完全に全治せしめた例さへあります。長い間手古摺つた百日咳や喘息等もこの藥草の服用で著しくその苦しみを輕減します。ですから決して机上の空論でなく、呼吸器患者の望み焦れてゐた理想藥が出現したと

れば治し得る！

言へませう。

××　肺結核に卓効　××

『ダウンチリメン』を服用された患者の等しく認め、且つ驚嘆するのは、肺患者を最も恐怖せしむる喀血と血痰を不思議に止める事頑固な咳が短時日に鎮り膿の様な痰をどし／＼出し切る事、胃腸が丈夫になり食慾が進み、熱をとるのに汗を出さぬから、身體の衰弱を防ぎ、短時日の服用で咳も出なくなる位ですから全く驚くの外ありません。現に某二大學病院でも實驗し、意想外の卓効に、その成分を研究中であります。

××　ダウンチリメンは　××

東印度に於て發見された熱帶奇草で、部落の土人達が萬病の秘藥として昔から非常に珍重してゐたものでありますが、岡部博士始め、九州醫科大學の諸博士の研究と實驗によつて、この『ダウンチリメン』が血を喀く様な病、特に肺病、肋膜、喘息、百日咳その他の呼吸器病に今迄のどの藥にもない優れた作用のある事が判明し、昨今では各大學病院、醫院で盛んに賞用されるやうになりました。

咳や痰が出て困る方、喀血、發熱等でお苦しみの方は是非ダウンチリメンをお試み下さい。その上、胃腸も丈夫になり、食慾も増進するとて、一度用ひられた方は非常に感謝されて居ります。他の藥と違ひ、煎じて飲むもので、副作用の心配もありません。

（寫眞はダウンチリメン栽培地）

××　然も藥價を　××
實費で頒布

この世界にも未だ嘗て類のない大發見藥が一日分たつた六錢五厘といふ嘘の様な實費でお頒け出來るのですから、どんな貧困者でも藥代に頭を痛めず全快まで服用し續けられます。

實に、その効力といひ、値段といひ、呼吸器病患者に取つてこれ以上の福音はないと確信し、この『ダウンチリメン』をお奬め致す次第であります。

因に『ダウンチリメン』は東京市本郷駒込坂下町大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九）でお取次致して居ります。御希望の方は御申込次第御送附申上げます。
定價は藥草十五日分一圓、一ケ月分二圓、錠劑十五日分二圓八十錢、一ケ月分五圓、送料内地十五錢、領土四十二錢。

9-1665

御注文の仕方

○本社發行の書籍雜誌は、お近くの書店でお求め下さい。若し品切で御手に入らぬ時、又は近くに書店のない方は、直接本社へ御注文下さい。

○本社への御注文は前金に限ります。

○御送金は振替貯金が一番安全で且送金代が安くすみます。振替貯金の用紙は郵便局にあります。その使ひ方も局でよく敎へてくれます。

○郵便爲替や郵便切手代用でも結構ですが、郵便切手代用の時は必ず一割増に願ひます。

○爲替や切手を封入した郵便物は、必ず書留郵便に願ひます。

○代金引替と集金郵便は一切扱ひません。

○御注文書には必ず書籍名なり雜誌なら雜誌名と何月號からといふ事をハツキリお書き下さい。

○御住所と御名前とはぜひ、楷書で願ひます。

○御注文は大日本雄辯會講談社營業部宛に願ひます。振替口座は東京三九三〇番です。

○代理部への御注文は大日本雄辯會講談社代理部宛に願ひます。代理部の振替口座は東京六六二九番です。

○本誌へ廣告揭載御希望の方は大日本雄辯會講談社廣告部宛御照會下されば、詳細御報知御相談に應じます。

定價表

（本號定價五十錢　送料三錢）

	國內及滿洲支那（送料共）	諸外國（送料共）
一冊	金五拾參錢	金七拾錢
三ケ月	金壹圓五拾錢	金貳圓壹錢
六ケ月	金貳圓九拾四錢	金參圓九拾六錢
一ケ年	金五圓七拾六錢	金七圓八拾錢

特大號で定價を上げた場合は、その增した分だけ右表の外に頂きます。

昭和八年二月三日印刷納本
昭和八年三月一日發行　第六卷第三號

毎月一回
一日發行

編輯人　林　公平
發行人　木村　喜市
印刷人　渡邊　一郎
東京市小石川區西古川町二十五番地

印刷所　中外印刷株式會社

東京市本鄕區駒込坂下町四十八番地
發行所　大日本雄辯會講談社
振替口座東京三九三〇番

電話小石川
（代表）8080
（宿直用）8081
8082
8083
8084
（代表）8085
8086
8087
8088
8089
（代表）8090
8091
8092
8093
8094

元取次店　東京堂・東海堂・北隆館・大東館

禁複製
本誌に揭載せるものは、一切これを無斷にて揭載し、又は單行本に上梓し、或は脚色・上演・映畫・撮影その他複製行爲を爲す事を禁ず。

梅毒の治療に

梅毒は內臟を侵し
ニキビ吹出物の原因にもなる

神經衰弱に侵された樣に氣分勝れず、記憶力や思考力が減退して、夜も安眠出來ず、時々顏や手足或は身體全體にニキビの樣な吹出物が出來口や咽喉はたゞれる、聲が嗄れたり毛髮が抜けたり、どこが惡いと云つて目立つた症狀はないが、常に虛弱で何仕事にも直ぐ疲れて永續きせぬと云ふ方々の多くは、一度梅毒に侵され治療はしたが全快せぬ方か或は遺傳梅毒の方々で恐ろしい梅毒菌スピロヘータが血液や淋巴液を初め全身に潜伏して居る爲めであります。

從つて前述の樣な症狀をそのまゝに放つて置くと病勢は次第に惡化し胃腸を初め心臟、腎臟、腦、脊髓、眼等凡ゆる方面を侵され、發狂したり、舌が廻らなくなつたり致しますが一番恐ろしいのは、何等罪もない子孫にまでこの害毒を及ぼし往々狂ひ死にする痲痺性痴呆となつて見るも悲慘な一生を終る事であります。

獨逸ベルツ博士日本政府登錄商標

梅毒の恐ろしい事は以上申上げただけでも實に身の毛もよだつ程で數へ擧げれば數限りなくありますが、醫學の進歩發達した今日では治療の方法さへ良ければ割合に治し易いのであります

こゝに於て筆者は、永年梅毒や體毒の爲めに惱んで居る方々の爲めに、安價で信用ある然も自宅に居ながら恐ろしい梅毒性疾患が治療出來る內服藥ベルツ丸を心から御すゝめ致します

內服藥ベルツ丸は驅梅に大變よく効くので評判な種々の藥の配劑でありますから、治療困難とされて居る遺傳梅毒、潜伏梅毒の方は勿論、永年惱む梅毒、體毒、冷え毒、梅毒性リウマチス、ニキビ吹出物等凡て梅毒性疾患に惱む方々は腦や脊髓又は內臟を侵されぬ內一日も早くベルツ丸を御服用下さい。

服用日を追うて、血液や淋巴液は淨化され、氣分は爽快になり、頭の重いのも痛んだのも、嫌な吹出物なども取り去られ、夜も安眠出來る樣になつて、知らず識らずの內に梅毒素は大小便と共に體外へ排泄されるのが通例であります。

藥價は二十日分三圓、三十五日分五圓、七十五日分十圓、百六十日分二十圓、二百六十日分三十圓、送料內地十五錢、領土四十七錢、代金引替の方は切手三十錢封入して東京市本鄉區駒込坂下町大日本雄辯會講談社代理部(振替東京六六二九番)へ御申込み下さい。

東京市日本橋區濱町三ノ四〇番地
發賣元 **鈴木日本製藥社**
電話浪花百五・百六番
振替東京百五番

安價で良く効く內服藥ベルツ丸

FUJI
Published monthly by the Dai Nippon Yubenkai Kodansha, Tokio, Japan.

大正五年九月十五日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）昭和八年二月三日印刷納本 昭和八年三月一日發行

9-1665
NOV 23